九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— 39 —

福岡県朝倉郡朝倉町所在 中道・石成久保・大還端遺跡の調査

上巻

1 9 9 6

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— 39 —

福岡県朝倉郡朝倉町所在 中道・石成久保・大還端遺跡の調査

上巻

序

福岡県教育委員会では、九州横断自動車道の大分自動車道建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度から実施してきました。本書はその第39集にあたります。

この報告書に掲載した朝倉町所在の大還端遺跡・石成久保遺跡・中道遺跡は昭和60年度に発掘調査を行ったもので、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代といった長期間にわたる人々の営みの跡が住居跡や墓地として検出されました。

考古学的な調査の進展によって歴史学の、とくに原始・古代の内容解明は長足の進歩を遂げてまいりましたが、それでもまだ不分明な点は多々あると考えられます。各地での調査の蓄積がそのような点を徐々に解明し、かつ通説に再考をせまってきたことは多言を要しないところでありますが、ここに報告する三遺跡の内容も、当然のことながら当地方における各時代の生活の実態を解明していくうえに少なからず寄与するものといえましょう。

本書に報告する調査成果が、今後の研究の一助ともなれば幸甚であります。

なお、発掘調査および報告書作成において多数の方々に御協力・御援助を賜りました。厚くお礼申し上げます。

平成８年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1．本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての39冊目の報告書である。

2．本書に収録したのは、1985（昭和60）年度に発掘調査を行った福岡県朝倉郡朝倉町所在の中道・石成久保・大還端遺跡である。

3．遺構については、実測は井上裕弘・高橋章・伊崎俊秋・小田和利・木村幾多郎・武田光正・柏原孝俊・渡辺輝子が行い、高田一弘・平嶋文博・目憲一・中村光恵・後藤かみ代・萩原瑞江の援助を受けた。

写真は高橋・伊崎・小田が撮影した。

4．出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに、九州歴史資料館および福岡県文化課甘木事務所とで行った。鉄器については九州歴史資料館の横田義章氏のもとで保存処理を実施した。

5．遺物については、実測は高橋・伊崎・小田・杉原敏之・渡辺・高瀬照美・岡泰子・大野愛里・辻啓子が行い、写真は北岡伸一が撮影した。

6．遺構・遺物の浄書は塩足里美・渡辺輝子・秋吉邦子・井上久美子・井上裕弘・木下修・高橋・伊崎が行った。

7．本書で使用した方位は、新平面直角座標系のⅡ系に基づく座標北である。

8．本書の挿図・付図において、住居跡はそのままの数字で示すが、掘立柱建物跡はＳＢ、土坑はＤ、甕棺墓はＫの略号を番号の前に冠する場合がある。

9．本報告書にかかる図面・写真の記録と遺物については、当分の間、九州歴史資料館および文化課太宰府事務所・甘木事務所において保管している。

10．本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ-Ａ・Ｂ・Ｄ-5-ｄ・Ｅ・Ｆ-1、Ⅳ、Ⅵを伊崎、Ⅲ-Ｃ・Ｄ・Ｆ-２を高橋、Ⅴを小田が行った。

11．本書の編集は高橋の支援を受けて伊崎が行った。

本 文 目 次

〈上巻〉

Ⅰ　序論

A. はじめに …… 1

B. 調査の組織と関係者 …… 2

C. 調査の経過 …… 4

Ⅱ　遺跡の位置と環境

A. 位置 …… 7

B. 歴史的環境 …… 7

Ⅲ　中道遺跡の調査

A. 旧石器・縄文時代の遺構と遺物 …… 12

1. トレンチの調査 …… 12

2. 落し穴状遺構 …… 17

3. その他 …… 25

B. 弥生時代の遺構と遺物 …… 29

1. 竪穴住居跡 …… 29

2. 掘立柱建物跡 …… 86

3. 土坑 …… 90

4. 周溝遺構 …… 121

5. 甕棺墓・土壙墓 …… 123

6. その他 …… 127

C. 古墳時代の遺構と遺物 …… 143

1. 竪穴住居跡 …… 143

2. 掘立柱建物跡 …… 155

D. 奈良時代以降の遺構と遺物 …… 160

1. 竪穴住居跡 …… 160

2. 掘立柱建物跡 …… 201

3. 土坑 …… 223

4．溝 ……239
5．その他の出土遺物 ……242
E．自然科学的調査 ……250
F．小結 ……251
1．弥生時代の中道集落 ……251
2．奈良時代の中道集落 ……257

〈下巻〉

Ⅳ　石成久保遺跡の調査

A．旧石器・縄文時代の遺構と遺物 ……265
1．落し穴状遺構 ……265
2．その他 ……265
B．古墳時代以降の遺構と遺物 ……269
1．竪穴住居跡 ……269
2．掘立柱建物跡 ……272
3．焼土坑 ……278
4．土坑 ……278
5．溝その他 ……278
C．小結 ……284

Ⅴ　大還端遺跡の調査

A．遺構と遺物 ……285
1．竪穴住居跡 ……285
2．掘立柱建物跡 ……289
3．竪穴遺構 ……292
4．土壙墓 ……294
B．小結 ……308
1．土壙墓について ……310

Ⅵ　総括 ……312

図 版 目 次

［中道遺跡］

図 版 1　1 中道遺跡航空写真（南から）　2 同 気球写真（西から）
図 版 2　1 中道遺跡中央部気球写真　2 同上（東から）
図 版 3　1 中道遺跡中央部気球写真　2 同 東半部発掘前（東から）
図 版 4　トレンチ（G4）；33・34・36号土坑
図 版 5　53～56号土坑
図 版 6　57・59～62号土坑
図 版 7　63～66号土坑
図 版 8　67～69・72号土坑
図 版 9　1 中道1・2号住居跡、ＳＢ103・ＳＷ1（気球写真）
2 1号住居跡（北西から）　3 同 下層
図 版 10　1 1号住居跡遺物出土状態　2 同東南隅土坑（北から）
3 同 炭化材
図 版 11　1 2号住居跡（真上から）　2 3号住居跡（北から）
3 同 西南隅付近
図 版 12　1 4号住居跡（北から）　2 同 下層
3 同 炭化材
図 版 13　1 5号住居跡（東から）　2 同 下層
3 同 木器出土状態
図 版 14　1 6号住居跡（東北から）　2 7号住居跡（北から）
3 8号住居跡（北から）
図 版 15　1 9・10号住居跡（南から）　2 同 下層
3 9号住居跡（北から）
図 版 16　1 10号住居跡（南から）　2 同 遺物出土状態
3 同上
図 版 17　1 11号住居跡（北から）　2 同 下層
3 同 遺物出土状態
図 版 18　1 12号住居跡（北から）　2 同 下層
3 11～13号住居跡（東上空から）
図 版 19　1 13号住居跡（北から）　2 同 下層
3 同 遺物出土状態

図　版　20　1　14号住居跡（北から）　2　同 下層
図　版　21　1　14号住居跡遺物出土状態　2　14A号住居跡屋内土坑
3　14A号住居跡投弾出土状態
図　版　22　1　15・16号住居跡（気球写真）　2　同（北から）
図　版　23　1　17・20・107号住居跡、30号土坑（気球写真）
2　17・107号住居跡下層（北から）
図　版　24　1　18号住居跡（北から）　2　同 下層
3　同カヤ？出土状態
図　版　25　1　18号住居跡遺物出土状態　2　同上
3　19・20号住居跡、30号土坑（気球写真）
図　版　26　1　20号住居跡（北から）　2　同 下層
3　同 遺物出土状態
図　版　27　1　21号住居跡（北から）　2　同上
3　同 下層
図　版　28　1　21号住居跡遺物出土状態　2　同上
3　同 炭化材
図　版　29　1　23号住居跡（北から）　2　24号住居跡（北から）
3　25号住居跡（南から）
図　版　30　1　ＳＢ１（北から）　2　ＳＢ２・14号土坑（東から）
3　ＳＢ３・29号土坑（北から）
図　版　31　1　1号土坑（東から）　2　7号土坑（北から）
図　版　32　1　11号土坑（東から）　2　12号土坑（南から）
図　版　33　1　13号土坑（北から）　2　16号土坑（北から）
図　版　34　4・5・9・10・14号土坑
図　版　35　18・21・22・24・25号土坑
図　版　36　26～28・31号土坑
図　版　37　37～40号土坑
図　版　38　41・42・45～47号土坑
図　版　39　1　48号土坑（北から）　2　１号円形周溝遺構（真上から）
3　15号土坑（南から）
図　版　40　1　1号甕棺墓（西南から）　2　2号甕棺墓（南から）
3　3号甕棺墓（東から）
図　版　41　中道遺跡出土押型文土器１

図　版　42　中道遺跡出土押型文土器２
図　版　43　中道遺跡出土旧石器；縄文土器・石器
図　版　44　中道遺跡出土弥生土器１
図　版　45　中道遺跡出土弥生土器２
図　版　46　中道遺跡出土弥生土器３
図　版　47　中道遺跡出土弥生土器４
図　版　48　中道遺跡出土弥生土器５
図　版　49　中道遺跡出土弥生土器６
図　版　50　中道遺跡出土弥生土器７
図　版　51　中道遺跡出土弥生土器８
図　版　52　中道遺跡出土弥生土器９
図　版　53　中道遺跡出土弥生土器10
図　版　54　中道遺跡出土弥生土器11
図　版　55　中道遺跡出土弥生土製品・石器
図　版　56　中道遺跡出土石器・鉄器・籾痕土器
図　版　57　1　101・102号住居跡（南から）　2　101号住居跡カマド（南から）
　　3　103号住居跡（南から）
図　版　58　1　104号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
　　3　同上 カマド
図　版　59　1　105号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
　　3　同上 カマド及び土器出土状態（南から）
図　版　60　1　106号住居跡（北から）　2　同上 下層（北から）
　　3　同上 カマド（南から）
図　版　61　1　101号建物跡（南から）　2　102号建物跡（南から）
　　3　103号建物跡（西から）
図　版　62　中道遺跡古墳時代住居跡出土土器１
図　版　63　中道遺跡古墳時代住居跡出土土器２
図　版　64　1　107号住居跡周辺（気球写真）　2　107号住居跡周辺（北から）
図　版　65　1　107号住居跡（北から）　2　同上 下層（北から）
図　版　66　1　108号住居跡下層（南から）　2　同上 カマド（南から）
　　3　109号住居跡下層（北から）
図　版　67　1　110号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
図　版　68　1　110号住居跡カマド（南から）　2　111～123号住居跡（北から）

図　版　69　111～123号住居跡（気球写真）
図　版　70　1　116～121号住居跡（気球写真）　2　111～122号住居跡（気球写真）
図　版　71　1　111～115号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
図　版　72　1　114号住居跡カマド（東から）　2　115号住居跡カマド（南から）
図　版　73　1　116～122号住居跡下層（南から）　2　117号住居跡カマド（南から）
3　118号住居跡カマド（南から）
図　版　74　1　117・118・120号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
図　版　75　1　122号住居跡（南から）　2　120号住居跡カマド（南から）
3　122号住居跡カマド（南から）
図　版　76　1　123号住居跡（東から）　2　同上 下層（東から）
3　同上 カマド（東から）
図　版　77　1　124号住居跡（南から）　2　同上 下層（南から）
図　版　78　1　125～127号住居跡遠景　2　125・126号住居跡（南から）
図　版　79　1　126号住居跡（南から）　2　127号住居跡（南から）
図　版　80　1　調査区東半遠景（西から）
2　128～134号住居跡遠景（北から）
図　版　81　1　128～132号住居跡（南から）　2　128～130号住居跡（南から）
3　131号住居跡カマド（南から）
図　版　82　1　132号住居跡（南から）　2　同上 カマド（南から）
3　同上 カマド（南から）
図　版　83　1　133・134号住居跡（南から）　2　134号住居跡カマド（南から）
図　版　84　1　104号建物跡（北から）　2　105号建物跡（北から）
3　106号建物跡（西から）
図　版　85　1　107・108号建物跡（気球写真）　2　109号建物跡（北から）
図　版　86　1　110～113号建物跡（気球写真）　2　110・111号建物跡（西から）
図　版　87　1　112号建物跡（西から）　2　113号建物跡（西から）
3　114号建物跡（西から）
図　版　88　1　115・116号建物跡（東から）　2　115号建物跡（北から）
図　版　89　1　116号建物跡（北から）　2　117号建物跡（北から）
3　118・119号建物跡（北から）
図　版　90　1　120号建物跡（西から）　2　121号建物跡（東から）
3　122号建物跡（南から）
図　版　91　1　30号土坑（西から）　2　32号土坑（東から）
3　35号土坑（東から）

図　版　92　1　43・44号土坑（東南から）　2　43・44号土坑土層（西南から）
図　版　93　1　49・50号土坑（東から）　2　51・52号土坑（北東から）
3　58号土坑（東から）
図　版　94　1　71号土坑（北から）　2　75号土坑（南から）
図　版　95　1　1号溝土層断面 2　2　1号溝瓦器出土状態
図　版　96　中道遺跡出土奈良時代土器 1
図　版　97　中道遺跡出土奈良時代土器 2
図　版　98　中道遺跡出土奈良時代土器 3
図　版　99　中道遺跡出土奈良時代・中世土器
図　版　100　中道遺跡出土製塩土器
図　版　101　中道遺跡出土製塩土器・奈良時代土製品
図　版　102　1　中道遺跡出土奈良時代石器　2　中道遺跡出土奈良時代鉄器
[石成久保遺跡]
図　版　103　1　石成久保遺跡Ⅰ区全景（東から）　2　同上（東から）
3　同 Ⅱ区全景（西から）
図　版　104　1　1号住居跡カマド（南から）　2　同上
3　2号住居跡（南から）
図　版　105　1　2号住居跡カマド（南から）　2　2号住居跡遺物出土状態
3　同上
図　版　106　1　ＳＢ１（東から）　2　ＳＢ２（南から）
3　ＳＢ３（北から）　4　ＳＢ４（南から）
図　版　107　1　ＳＸ１（南から）　2　ＳＸ２（北から）
3　ＳＸ３（東南から）
図　版　108　ＳＫ６（南から）・ＳＫ１（西から）と石成久保遺跡出土遺物
[大還端遺跡]
図　版　109　1　大還端遺跡西半部全景（北西から）　2　大還端遺跡東半部全景（南東から）
図　版　110　1　1号住居跡（南東から）　2　同 貼床掘下げ後（南東から）
図　版　111　1　2号住居跡（東から）　2　同 貼床掘下げ後（東から）
図　版　112　1　1号住居跡カマド（南東から）　2　2号住居跡カマド（東から）
図　版　113　1　1号建物跡（北東から）　2　2号建物跡（南東から）
図　版　114　1　3号建物跡（南西から）　2　1号竪穴遺構（北から）
図　版　115　1　南西端土壙墓群全景（東から）
2　14・15・18～24・27号土壙墓（東から）

図　版　116　1　1号土壙墓（東から）　2　2号土壙墓（東から）
3　3号土壙墓（北から）　4　4号土壙墓（北東から）
図　版　117　1　5号土壙墓（東から）　2　6号土壙墓（西から）
3　7号土壙墓（西から）　4　8号土壙墓（北東から）
図　版　118　1　9号土壙墓（西から）　2　10号土壙墓（西から）
3　11号土壙墓（北から）　4　12・13号土壙墓（西から）
図　版　119　1　14号土壙墓（北東から）　2　15号土壙墓（西から）
3　16号土壙墓（西から）　4　17号土壙墓（北から）
図　版　120　1　18号土壙墓（西から）　2　19号土壙墓（北東から）
3　20号土壙墓（北東から）　4　21号土壙墓（南から）
図　版　121　1　22号土壙墓（南西から）　2　23号土壙墓（南西から）
3　24号土壙墓（北東から）　4　25号土壙墓（北から）
図　版　122　1　26号土壙墓（西から）　2　27号土壙墓（西から）
3　28・29号土壙墓（南東から）　4　30号土壙墓（南東から）
図　版　123　1　31号土壙墓（北から）　2　32号土壙墓（東から）
3　33号土壙墓（北から）　4　34号土壙墓（北から）
図　版　124　大還端遺跡出土土器

挿　図　目　次

（頁）
第　1　図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）…… xviii
第　2　図　中道・石成久保・大還端遺跡と周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 6
第　3　図　大還端・石成久保遺跡南方採集土器等実測図（1/4）…… 8
第　4　図　19（塔ノ上・大還端・石成久保）・20（中道）地点位置図（1/6,000）…… 10
第　5　図　中道遺跡縄文時代遺構配置図（1/2,000）…… 12
第　6　図　中道遺跡トレンチ遺物出土箇所・土層実測図（1/120）…… 13
第　7　図　中道遺跡トレンチ出土石器実測図（1/3）…… 14
第　8　図　中道遺跡トレンチ出土土器実測図（1/3）…… 15
第　9　図　中道遺跡トレンチその他出土旧石器・縄文時代石器実測図（1/2）…… 16
第　10　図　中道落し穴実測図１〈33・34・36・53号土坑〉（1/30）…… 18
第　11　図　中道落し穴実測図２〈54～57号土坑〉（1/30）…… 19
第　12　図　中道落し穴実測図３〈60～63号土坑〉（1/30）…… 21

第 13 図　中道落し穴実測図４〈64～67号土坑〉(1/30) …… 23
第 14 図　中道落し穴実測図５〈68・69・72～74号土坑〉(1/30) …… 24
第 15 図　中道遺跡出土縄文土器実測図１（1/3）…… 26
第 16 図　中道遺跡出土縄文土器実測図２（1/3）…… 27
第 17 図　中道遺跡出土縄文土器実測図３（1/3）…… 28
第 18 図　中道縄文晩期土器・石器実測図（1/3）…… 29
第 19 図　中道遺跡弥生時代遺構配置図（1/1,600）…… 30
第 20 図　中道１号住居跡実測図（1/60）…… 31
第 21 図　中道１号住居跡東南隅土坑実測図（1/30）…… 32
第 22 図　中道１号住居跡出土土器実測図１（1/4）…… 33
第 23 図　中道１号住居跡出土土器実測図２（1/4）…… 34
第 24 図　中道１号住居跡出土土器実測図３（1/6）…… 35
第 25 図　中道２号住居跡実測図（1/60）…… 36
第 26 図　中道２号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 36
第 27 図　中道３号住居跡実測図（1/60）…… 38
第 28 図　中道３号住居跡出土土器実測図１（1/4）…… 39
第 29 図　中道３号住居跡出土土器実測図２（1/4）…… 40
第 30 図　中道４号住居跡実測図（1/60）…… 41
第 31 図　中道４号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 42
第 32 図　中道５号住居跡実測図（1/60）…… 43
第 33 図　中道５号住居跡内木製品出土状態実測図（1/10）…… 44
第 34 図　中道５号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 44
第 35 図　中道６号住居跡実測図（1/60）…… 45
第 36 図　中道６号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 46
第 37 図　中道７・８号住居跡実測図（1/60）…… 47
第 38 図　中道９・10号住居跡実測図（1/60）…… 折込（P 48-49）
第 39 図　中道８・９号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 49
第 40 図　中道10号住居跡出土土器実測図１（1/4）…… 50
第 41 図　中道10号住居跡出土土器実測図２（1/4）…… 51
第 42 図　中道11号住居跡実測図（1/60）…… 52
第 43 図　中道11号住居跡出土土器実測図１（1/4）…… 53
第 44 図　中道11号住居跡出土土器実測図２（1/4）…… 54
第 45 図　中道12号住居跡実測図（1/60）…… 55

第 46 図 中道12号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 56
第 47 図 中道13号住居跡、17号土坑実測図（1/60） …… 折込（P 56-57）
第 48 図 中道13号住居跡出土土器実測図１（1/4） …… 58
第 49 図 中道13号住居跡出土土器実測図２（1/4） …… 59
第 50 図 中道13号住居跡出土土器実測図３（1/4） …… 60
第 51 図 中道13号住居跡出土土器実測図４（1/4） …… 61
第 52 図 中道13号住居跡出土土器実測図５（1/4） …… 62
第 53 図 中道13号住居跡出土土器実測図６（1/6） …… 63
第 54 図 中道14号住居跡実測図（1/60） …… 64
第 55 図 中道14号住居跡投弾出土状態実測図（1/6） …… 65
第 56 図 中道14号住居跡出土土器実測図１（1/4） …… 66
第 57 図 中道14号住居跡出土土器実測図２（1/4） …… 67
第 58 図 中道15・16号住居跡、23号土坑実測図（1/60） …… 折込（P 68-69）
第 59 図 中道15・16号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 69
第 60 図 中道17号住居跡実測図（1/60） …… 70
第 61 図 中道16・17号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 71
第 62 図 中道18号住居跡実測図（1/60） …… 72
第 63 図 中道18号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 73
第 64 図 中道19号住居跡実測図（1/60） …… 74
第 65 図 中道19号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 75
第 66 図 中道20号住居跡実測図（1/60） …… 77
第 67 図 中道20号住居跡出土土器実測図１（1/4） …… 78
第 68 図 中道20号住居跡出土土器実測図２（1/4） …… 79
第 69 図 中道20号住居跡出土土器実測図３（1/4） …… 80
第 70 図 中道21号住居跡、71号土坑実測図（1/60） …… 81
第 71 図 中道21号住居跡屋内土坑付近土器出土状態実測図（1/30） …… 82
第 72 図 中道23号住居跡実測図（1/60） …… 82
第 73 図 中道21・23号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 83
第 74 図 中道24号住居跡実測図（1/60） …… 84
第 75 図 中道25号住居跡実測図（1/60） …… 85
第 76 図 中道25号住居跡出土土器実測図（1/4） …… 85
第 77 図 中道１号掘立柱建物跡実測図（1/60） …… 86
第 78 図 中道２号掘立柱建物跡、14号土坑実測図（1/60） …… 87

第 79 図　中道３号掘立柱建物跡、29号土坑実測図（1/60）…… 88
第 80 図　中道ＳＷ１実測図（1/60）…… 89
第 81 図　中道ＳＷ２実測図（1/60）…… 90
第 82 図　中道1号土坑実測図（1/30）…… 91
第 83 図　中道2・3・6・8～10・18・19号土坑実測図（1/40）…… 92
第 84 図　中道1～3号土坑出土土器実測図（1/4）…… 93
第 85 図　中道4・5・21・22・31・77号土坑実測図（1/60）…… 94
第 86 図　中道4号土坑出土土器実測図（1/4）…… 95
第 87 図　中道5・6号土坑出土土器実測図（1/4）…… 96
第 88 図　中道7・38・45号土坑実測図（1/40）…… 97
第 89 図　中道7号土坑出土土器実測図（1/4）…… 98
第 90 図　中道8～10号土坑出土土器実測図（1/4）…… 99
第 91 図　中道11～13・16号土坑実測図（1/30）…… 101
第 92 図　中道11号土坑出土土器実測図（1/4）…… 102
第 93 図　中道12号土坑出土土器実測図１（1/4）…… 103
第 94 図　中道12号土坑出土土器実測図２（1/6）…… 104
第 95 図　中道12号土坑出土土器実測図３（1/6）…… 105
第 96 図　中道12号土坑出土土器実測図４（1/4）…… 106
第 97 図　中道13号土坑出土土器実測図１（1/4）…… 107
第 98 図　中道13号土坑出土土器実測図２（1/4）…… 108
第 99 図　中道14・16号土坑出土土器実測図（1/4）…… 109
第 100 図　中道17・18・20・21号土坑出土土器実測図（1/4）…… 111
第 101 図　中道22号土坑出土土器実測図（1/4）…… 112
第 102 図　中道26～28・37・39・40～42号土坑実測図（1/40）…… 114
第 103 図　中道24～29・31号土坑出土土器実測図（1/4）…… 115
第 104 図　中道37～42号土坑出土土器実測図（1/4）…… 117
第 105 図　中道45・46号土坑出土土器実測図（1/4）…… 119
第 106 図　中道48号土坑実測図（1/40）…… 120
第 107 図　中道１号円形周溝遺構実測図（1/60）…… 121
第 108 図　中道47・48号土坑、１号円形周溝遺構出土土器実測図（1/4）…… 122
第 109 図　中道１～３号甕棺墓、15号土坑実測図（1/30）…… 124
第 110 図　中道１号甕棺墓墓壙内出土土器実測図（1/4）…… 125
第 111 図　中道１・２号甕棺実測図（1/6）…… 125

第 112 図　中道３号甕棺実測図（1/6）…… 126
第 113 図　中道ピット出土弥生土器実測図１（1/4）…… 128
第 114 図　中道ピット出土弥生土器実測図２（1/4）…… 129
第 115 図　中道ピット出土弥生土器実測図３（1/4）…… 130
第 116 図　中道遺跡出土弥生土器実測図（1/4）…… 131
第 117 図　中道遺跡出土弥生時代土製品実測図１（1/2）…… 132
第 118 図　中道遺跡出土弥生時代土製品実測図２（1/2）…… 133
第 119 図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図１〈石包丁他〉（1/3）…… 134
第 120 図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図２〈砥石〉（1/4）…… 135
第 121 図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図３〈砥石〉（1/4）…… 136
第 122 図　中道遺跡出土弥生時代鉄製品実測図（1/2）…… 136
第 123 図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図１（1/6）…… 137
第 124 図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図２（1/6）…… 138
第 125 図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図３（1/6）…… 139
第 126 図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図４（1/6）…… 140
第 127 図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図５（1/6）…… 141
第 128 図　中道遺跡古墳～奈良時代遺構配置図（1/1,600）…… 142
第 129 図　中道101・102号住居跡実測図（1/60）…… 144
第 130 図　中道101号住居跡カマド・Ｐ１土器出土状態実測図（1/30・1/15）…… 145
第 131 図　中道101・102号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 145
第 132 図　中道103号住居跡実測図（1/60）…… 146
第 133 図　中道104号住居跡実測図（1/60）…… 147
第 134 図　中道104号住居跡カマド実測図（1/30）…… 147
第 135 図　中道104号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 148
第 136 図　中道105号住居跡実測図（1/60）…… 149
第 137 図　中道105号住居跡カマド実測図（1/30）…… 150
第 138 図　中道105号住居跡出土土器実測図１（1/3）…… 151
第 139 図　中道105号住居跡出土土器実測図２（1/3）…… 152
第 140 図　中道105号住居跡出土土器実測図３（1/3）…… 153
第 141 図　中道106号住居跡、20号土坑実測図（1/60）…… 154
第 142 図　中道106号住居跡カマド実測図（1/30）…… 155
第 143 図　中道106号住居跡出土土器実測図１（1/3）…… 156
第 144 図　中道106号住居跡出土土器実測図２（1/3）…… 157

第 145 図　中道101号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 157
第 146 図　中道102号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 158
第 147 図　中道103号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 159
第 148 図　中道107号住居跡実測図（1/60）…… 161
第 149 図　中道107号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 162
第 150 図　中道108号住居跡実測図（1/60）…… 163
第 151 図　中道108号住居跡カマド実測図（1/30）…… 163
第 152 図　中道108号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 163
第 153 図　中道22・109号住居跡実測図（1/60）…… 164
第 154 図　中道109号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 165
第 155 図　中道110号住居跡実測図（1/60）…… 166
第 156 図　中道110号住居跡カマド実測図（1/30）…… 167
第 157 図　中道110号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 168
第 158 図　中道112・113号住居跡実測図（1/60）…… 折込（P 168-169）
第 159 図　中道111・112号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 169
第 160 図　中道114号住居跡カマド実測図（1/30）…… 170
第 161 図　中道111・114・115号住居跡実測図（1/60）…… 折込（P 170-171）
第 162 図　中道115号住居跡カマド実測図（1/30）…… 171
第 163 図　中道113～115号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 172
第 164 図　中道117・118号住居跡実測図（1/60）…… 折込（P 172-173）
第 165 図　中道117・118号住居跡カマド実測図（1/30）…… 174
第 166 図　中道116～118号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 175
第 167 図　中道119・121号住居跡実測図（1/60）…… 176
第 168 図　中道120号住居跡実測図（1/60）…… 178
第 169 図　中道120号住居跡カマド実測図（1/30）…… 179
第 170 図　中道119・120号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 180
第 171 図　中道121号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 181
第 172 図　中道122号住居跡カマド実測図（1/30）…… 182
第 173 図　中道116・122号住居跡実測図（1/60）…… 折込（P 182-183）
第 174 図　中道122号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 183
第 175 図　中道123号住居跡実測図（1/60）…… 184
第 176 図　中道123号住居跡カマド実測図（1/30）…… 185
第 177 図　中道123号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 186

第 178 図　中道124号住居跡実測図（1/60）…… 187
第 179 図　中道125・126号住居跡実測図（1/60）…… 188
第 180 図　中道127号住居跡実測図（1/60）…… 189
第 181 図　中道124～127号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 189
第 182 図　中道128・130・131号住居跡実測図（1/60）…… 190
第 183 図　中道129号住居跡カマド実測図（1/30）…… 191
第 184 図　中道129・132号住居跡実測図（1/60）…… 192
第 185 図　中道131号住居跡カマド実測図（1/30）…… 193
第 186 図　中道128～131号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 194
第 187 図　中道132号住居跡カマド実測図（1/30）…… 195
第 188 図　中道132号住居跡出土土器実測図１（1/3）…… 197
第 189 図　中道132号住居跡出土土器実測図２（1/3）…… 198
第 190 図　中道133号住居跡実測図（1/60）…… 199
第 191 図　中道134号住居跡カマド実測図（1/30）…… 199
第 192 図　中道134号住居跡実測図（1/60）…… 200
第 193 図　中道134号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 200
第 194 図　中道104号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 201
第 195 図　中道105号掘立柱建物跡、24・25号土坑実測図（1/60）…… 203
第 196 図　中道106号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 204
第 197 図　中道107・108号掘立柱建物跡、35号土坑実測図（1/60）…… 折込（P 204-205）
第 198 図　中道109号掘立柱建物跡、46・47号土坑実測図（1/60）…… 206
第 199 図　中道105～110号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）…… 208
第 200 図　中道110・111号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 折込（P 208-209）
第 201 図　中道112号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 209
第 202 図　中道113号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 210
第 203 図　中道114号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 212
第 204 図　中道115号掘立柱建物跡、52号土坑実測図（1/60）…… 折込（P 212-213）
第 205 図　中道116号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 214
第 206 図　中道117号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 215
第 207 図　中道118号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 216
第 20　図　中道119号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 217
第 209 図　中道120号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 218
第 210 図　中道111～114・118・119・121号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）…… 219

第 211 図　中道121号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 220
第 212 図　中道122号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 221
第 213 図　中道123号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 222
第 214 図　中道124号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 222
第 215 図　中道30・32号土坑実測図（1/60）…… 224
第 216 図　中道30号土坑出土土器実測図（1/3）…… 225
第 217 図　中道32号土坑出土土器実測図１（1/3）…… 226
第 218 図　中道32号土坑出土土器実測図２（1/3）…… 227
第 219 図　中道35号土坑出土土器実測図（1/3）…… 228
第 220 図　中道49号土坑出土土器実測図（1/3）…… 229
第 221 図　中道43・44・49・50・70号土坑実測図（1/40）…… 230
第 222 図　中道51・75号土坑実測図（1/60）…… 231
第 223 図　中道51号土坑出土土器実測図（1/3）…… 232
第 224 図　中道52号土坑出土土器実測図（1/3）…… 233
第 225 図　中道58・59・76号土坑実測図（1/60）…… 234
第 226 図　中道70号土坑出土土器実測図（1/3）…… 235
第 227 図　中道75号土坑出土土器実測図１（1/3）…… 237
第 228 図　中道75号土坑出土土器実測図２（1/3）…… 238
第 229 図　中道1・2号溝土層実測図（1/40）…… 240
第 230 図　中道遺跡1・2号溝出土土器等実測図（1/3）…… 241
第 231 図　中道遺跡ピット出土奈良時代その他土器等実測図（1/3）…… 243
第 232 図　中道遺跡出土奈良時代土器実測図（1/3）…… 245
第 233 図　中道遺跡採集土器実測図（1/3）…… 245
第 234 図　中道遺跡出土奈良時代土製品・石製品実測図（1/3）…… 246
第 235 図　中道遺跡出土奈良時代石製品実測図（1/3・1/6）…… 246
第 236 図　中道遺跡出土古銭・鉄器実測図（1/2）…… 247
第 237 図　中道遺跡出土製塩土器実測図１（1/3）…… 248
第 238 図　中道遺跡出土製塩土器実測図２（1/3）…… 249
第 239 図　中道遺跡弥生時代竪穴住居の面積・主軸方位 …… 252
第 240 図　中道遺跡奈良時代竪穴住居・掘立柱建物主軸方位 …… 260
第 241 図　石成久保遺跡遺構図（1/1,000）…… 266
第 242 図　石成久保Ⅰ区遺構配置図（1/400）…… 267
第 243 図　石成久保Ⅱ区遺構配置図（1/400）…… 268

第 244 図　石成久保Ⅰ区グリッド土層実測図（1/80）…… 269
第 245 図　石成久保出土石器実測図（1/2）…… 269
第 246 図　石成久保Ⅰ区１号住居跡カマド実測図（1/30）…… 270
第 247 図　石成久保Ⅰ区２号住居跡実測図（1/60）…… 271
第 248 図　石成久保Ⅰ区２号住居跡カマド実測図（1/30）…… 272
第 249 図　石成久保１・２号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 273
第 250 図　石成久保２号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 274
第 251 図　石成久保Ⅰ区ＳＢ１実測図（1/60）…… 275
第 252 図　石成久保Ⅰ・Ⅱ区ＳＢ２・３実測図（1/60）…… 276
第 253 図　石成久保Ⅱ区ＳＢ４実測図（1/60）…… 277
第 254 図　石成久保Ⅰ・Ⅱ区ＳＸ１～３実測図（1/30）…… 279
第 255 図　石成久保Ⅰ区ＳＫ1～4実測図（1/30）…… 280
第 256 図　石成久保Ⅰ区ＳＫ5～7実測図（1/30）…… 281
第 257 図　石成久保Ⅰ区ＳＫ8・9・11～13実測図（1/30）…… 282
第 258 図　石成久保Ⅰ区ＳＫ19・23実測図（1/30）…… 283
第 259 図　石成久保Ⅰ区土坑等出土遺物実測図（1/3）…… 283
第 260 図　大還端遺跡遺構図（1/600）……折込（Ｐ284-285）
第 261 図　大還端１号住居跡実測図（1/60）…… 286
第 262 図　大還端１号住居跡カマド実測図（1/30）…… 287
第 263 図　大還端１号住居跡出土土器実測図（1/4）…… 287
第 264 図　大還端２号住居跡実測図（1/60）…… 288
第 265 図　大還端２号住居跡カマド実測図（1/30）…… 289
第 266 図　大還端１・２号住居跡出土土器実測図（1/3）…… 290
第 267 図　大還端１～３号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 291
第 268 図　大還端１号竪穴遺構実測図（1/80）…… 293
第 269 図　大還端１号竪穴遺構出土土器実測図（1/4）…… 293
第 270 図　大還端1～4号土壙墓実測図（1/30）…… 295
第 271 図　大還端5～7・10号土壙墓実測図（1/30）…… 297
第 272 図　大還端8・9・12～14号土壙墓実測図（1/30）…… 299
第 273 図　大還端11・15・17・19・21号土壙墓実測図（1/30）…… 301
第 274 図　大還端16・18・20・23号土壙墓実測図（1/30）…… 302
第 275 図　大還端22・24～26号土壙墓実測図（1/30）…… 304
第 276 図　大還端27・28・30・32号土壙墓実測図（1/30）…… 305

第 277 図　大還端29・31・33・34号土壙墓実測図（1/30）…… 307
第 278 図　大還端土壙墓出土土器実測図（1/3）…… 308
第 279 図　大還端遺跡土壙墓群配置図（1/300）…… 折込（P 308-309）
第 280 図　大還端遺跡土壙墓法量分布図 …… 310
第 281 図　大還端遺跡土壙墓頭位グラフ …… 310

写真挿図目次

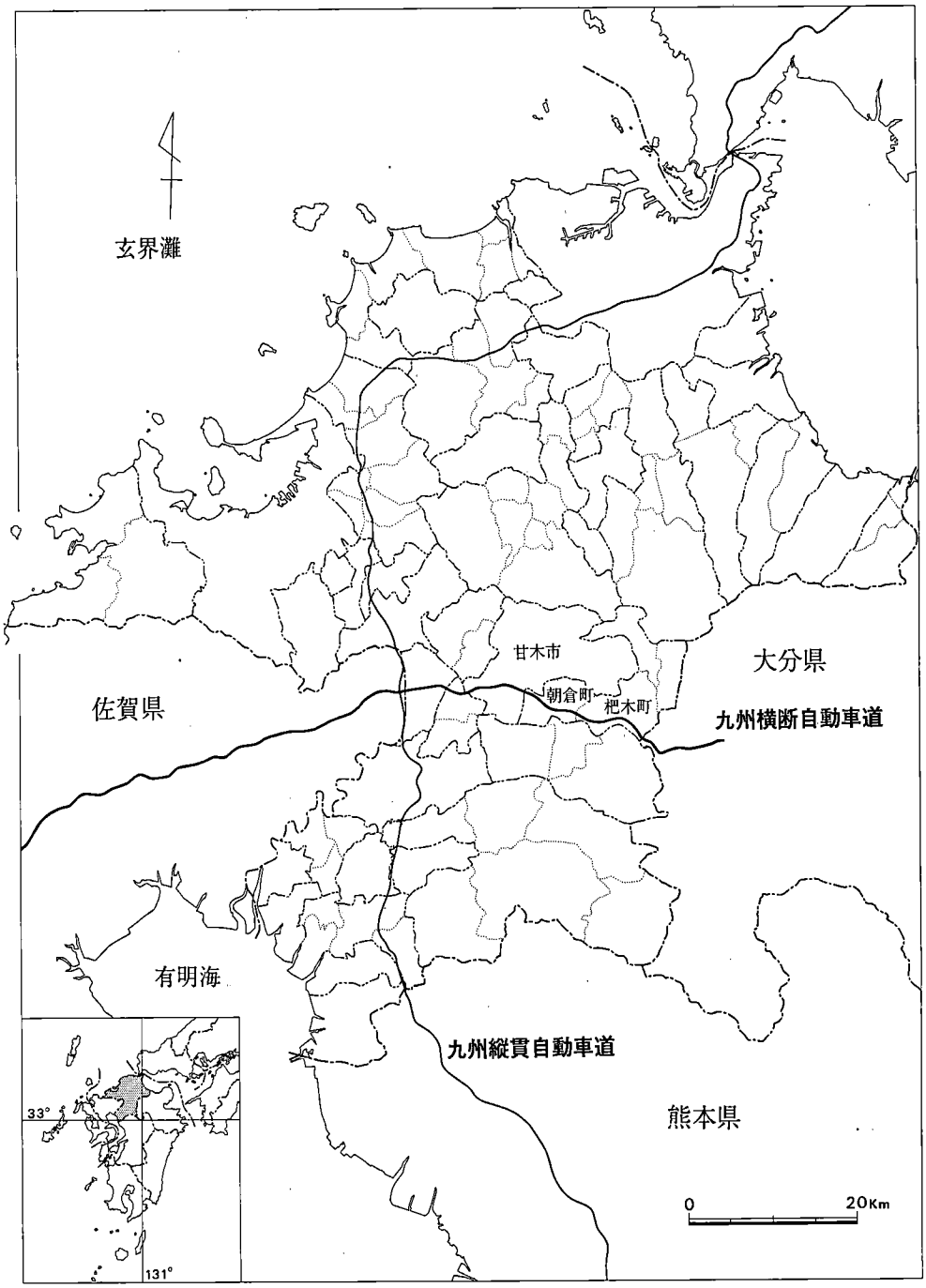
1．発掘拠点 …… 37
2．11・13号住居跡付近調査中 …… 52
3．20地点から19地点を望む …… 57
4．とうだん …… 65
5．20号住居跡屋内土坑 …… 76
6．パーソナルタワー …… 86
7．1号住居跡、SW1ほか …… 89
8．写真撮影中 ……126
9．中道小町？ ……130
10．実測をしています ……171
11．工事に追われて ……179
12．住居群俯瞰 ……202
13．30号土坑周辺 ……223
14．寸暇を惜しんで ……245
15．発掘中俯瞰 ……264
16．石成久保Ⅰ区 ……270
17．古塔塚のナンジャモンジャ ……284
18．大還端遺跡を望む ……286
19．2号建物跡発掘中 ……292
20．18号墓のわたし ……311

表目次

表1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表 ……折込（P 4-5）
表2　中道遺跡遺構番号新旧対照表 …… 264
表3　大還端遺跡土壙墓一覧表 …… 309

付図

付図1　中道遺跡全体図（1/400）



第 1 図　九州横断自動車道路線図（1/842,000）

Ⅰ　序論

A．はじめに

九州横断自動車道と総称されるうちの大分自動車道の福岡県内部分は、西端部の小郡市から東端部の朝倉郡杷木町まで約37kmの距離がある。その建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団からの委託を受けて、福岡県教育委員会によって1979（昭和54）年から始められ、1990（平成2）年までの12年間に、62箇所を対象として実施された。その発掘調査の総面積は約53万㎡に及んでいる。

自動車道の供用開始に向けて発掘調査を最大限に優先してきた中においても、調査担当者それぞれが順次調査報告書の作成を行ってきたところであるが、調査終了後の1991（平成3）年度からは年間５冊を目途として、1995（平成7）年3月現在、37集まで刊行した。平成７年度は、38集（5地点：井上薬師堂遺跡）、39集（19-B地点：大還端遺跡、19-C・D地点：石成久保遺跡、20地点：中道遺跡）、40集（38地点：外之隈遺跡）、41集（43地点：大谷遺跡、57地点：柿原遺跡Ｌ地区）、42集（46地点：天園遺跡、夕月遺跡、47地点：上池田遺跡）の５冊であり、今後さらに15冊が予定されている。

報告書の作成にかかる遺物・図面等の整理は、福岡県文化課甘木事務所および太宰府事務所、九州歴史資料館において行った。

本書に収録した大還端遺跡・石成久保遺跡・中道遺跡は、1987（昭和62）年に鳥栖ー朝倉間が開通するのを目標に発掘調査が集中した昭和60年度（1985～86年）に調査を行ったものである（鳥栖ー朝倉間の開通は昭和62年2月5日）。

この19・20地点は、甘木市から朝倉町に入ってすぐの所で、現状では標高33ｍ前後の比較的平坦な地勢をなしているが、実際には地形の微妙な変化が見られる。

各遺跡の調査期間と調査面積は以下のとおりであるが、本書では中道、石成久保、大還端の順で報告する。

・石成久保遺跡（19-C・D地点）……1985年６月17日～７月23日　約 5520㎡
・中道遺跡（20地点）　……1985年７月22日～11月27日　約13900㎡
・大還端遺跡（19-B地点）　……1986年１月７日～１月31日　約 9300㎡

B．調査の組織と関係者

発掘調査を行った昭和60年度と、報告書作成の平成7年度における関係者は次のとおりである。

日本道路公団

福岡建設局

	昭和60年度		平成7年度
局　　長	今村　浩三		倉沢　真也
次　　長	菱刈　庄二		飛田　　孝
総務部長	菱刈　庄二（前任）	安元　富治	佐野　博志
管理課長	森　　宏之		三根　敬正
管理課長代理	野口　利夫（前任）	佐伯　　豊	前田　正信

福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	乗松　紀三		
副 所 長	西田　　功	杉本　恭一	
副所長（技術担当）	中村　義治		
庶務課長	松下　幸男（前任）		徳永　　登
用地課長	岩下　　剛		
工務課長	山口　宗雄（前任）	後藤二郎彦	
小郡工事区工事長	友田　義則		
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄		
朝倉工事区工事長	平沢　　正（前任）	小手川良和	
杷木工事区工事長	前田　雄一（前任）	山中　　茂	

福岡県教育委員会

	昭和60年度	平成7年度
〔総括〕		
教 育 長	友野　　隆	光安　常喜
教育次長	安倍　　徹	松枝　　功
理　　事		田中　正行
管理部長	大鶴　英雄	
指導第二部長		丸林　茂夫
文化課長	前田　栄一	松尾　正俊
文化課参事		柳田　康雄

文化課課長補佐	平　聖峰	元永　浩士
〃　課長技術補佐	宮小路賀宏	
〃　参事補佐	栗原　和彦	井上　裕弘
〃　〃		橋口　達也
〃　〃		川述　昭人
〃　〃		木下　修
〃　〃		角　伸幸
〃　〃		児玉　真一
〃　〃		新原　正典
〃　〃		磯村　幸男
〃　〃		中間　研志
〃　〃		小池　史哲

〔庶務〕

文化課庶務係長	平　聖峰（兼）	
〃　管理係長		柴田　恭郎
〃　事務主査	長谷川伸弘	
〃　主任主事	東　健二	

〔調査〕

文化課調査第二係長	宮小路賀宏（兼）	
〃　技術主査	井上　裕弘	
〃　主任技師	高橋　章	（中道遺跡調査担当）
〃　〃	中間　研志	
〃　〃	佐々木隆彦	
〃　技　師	伊崎　俊秋	（石成久保・中道遺跡調査担当）
〃　〃	緒方　泉	
〃　〃	小田　和利	（大還端遺跡調査担当）
〃　文化財専門員	木村幾多郎	
〃　臨時職員	日高　正幸	
〃　調査補助員	高田　一弘	
〃　〃	武田　光正	
〃　〃	佐土原逸男	
〃　〃	向田　雅彦	

〔整理〕

北九州教育事務所　文化班　参事補佐　高橋　章
甘木歴史資料館　副館長　伊崎　俊秋
九州歴史資料館　調査課　主任技師　小田　和利
文化課　整理指導員　岩瀬　正信
〃　〃　北岡　伸一

【発掘調査従事者】
緒方　仁造・大熊　勝造・目　憲一・堀内　宏行・井上　敬太・安岡　克行・山口　純
仲山　英俊・市川　善治・井上　憲治・鶴田　隆士・大熊　浩二・牧草由紀夫・目　修二
尾野　晃・深江　義治・黒岩　保幸・高橋　徹・野田　徹・平嶋　文博・柏原　孝俊
渡辺　輝子・萩原　瑞江・緒方クニエ・半田　エツ・大熊　ツマ・大熊キクエ・大熊カズエ
大熊ナミエ・丸山　静子・藤田マスミ・佐藤　道子・柳原れい子・丸山フミ子・丸山ハル子
牟田ヒロミ・牟田シズ子・牟田ヨリエ・牟田テル子・釜堀タマキ・釜堀ヒサシ・釜堀エミ子
釜堀シズエ・釜堀ミサオ・池田カオル・大楠フサエ・梅田　カヨ・佐野チヅ子・金堀　ツマ
金堀セツ子・半田ユキ子・後藤テルカ・芹田エミ子・宮田チカ子・吉塚ミサ子・宮田　芳子
丸山　久子・浦　和子・浦　文子・浦　ナルミ・安岡よし子・荻野サカエ・鬼塚タカ子
石井キヨミ・中西ハル子・高瀬セツ子・高瀬シズエ・柴山ミネ子・柴山ハツエ・矢野トラエ
矢野シズ子・中村　光恵・原島ミチヨ・本石セツ子・永田トヨノ・永田エツ子・後藤かみ代
窪山ヨシエ・窪山ヨネ子

【整理作業従事者】
豊福　弥生・小島佐枝子・中塩屋リツ子・石井紀美子・藤井カオル・渡辺　輝子・塩足　里美
高瀬　照美・大野　愛里・西田　美代子・宮田　ゆみ・秋吉　邦子・岡　泰子・辻　啓子
井上久美子

調査中及び報告書作成の段階で多くの方々に御指導・御教示を得た。深甚の謝意を表します。

C．調査の経過

遺跡ごとに日誌から簡単に調査経過を振り返っておく。

[石成久保遺跡]〔昭和60（1985）年〕

6月17日　器材を搬入し、テント設営。遺構検出と発掘。
19日　ピット発掘。灰色土の入った土坑はいも穴か？
24日　1号住居跡はカマドのみとわかる。
25～29日　ずっと雨。

表1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査年度と面積												備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落、歴史溝	11,200					5,000		560						完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	6,000						完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000						小都市委託完了	15集
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000						小都市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700						完了	10・38集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地（首切塚）	32,000					500	7,300	10,100						完了	13・16集
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100						遺構なし完了	-
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	古代道路遺構	4,000					3,600								完了	26集
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・遺跡・近世墓	10,800					100	6,700							完了	26集
10	十三塚遺跡	〃　甲状本郷	古墳集落	34,400			700		300								完了	26集
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	古墳・奈良集落、墓地	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000								2・5・8 14・17集
12	小石原川西条理	〃　上浦	中世	48,000			8,100										遺構なし完了	-
13	〃　東条理	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600											完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200												完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	AB地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400									完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400							完了	31集
17	口ノ坪遺跡	〃　牛鶴	近世積石	100						100							完了	31集
18		〃　〃	散布地	2,550					300								遺構なし完了	-
19-A	塔ノ上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200							完了	9集
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落・奈良墓地	20,000							8,400						完了	39集
19-C D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100						完了	39集
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300	4,800	11,400						完了	39集
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落、中世	46,900							8,400							
21-B	経塚遺跡	〃　〃	散布地					800	600	2,600	2,300							
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地、奈良集落							1,050	9,650						完了	36集
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地・古墳集落							1,300	12,300						完了	18・27・33集
22-A B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300								完了	32集
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落、墓地	5,000							3,420						完了	28集
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落・古墳	2,600							6,650						完了	32集
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地、才田廃寺	5,400							4,400							
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000														
26		〃　須川	散布地	1,600													遺構なし完了	-
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500	16,000					34集
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458									
29-A	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600				5,240	2,100				
29-B	妙見古墳群	〃　〃	古墳方形周溝墓										4,660				完了	29集
30	鎌塚遺跡	〃　菱野・山田	縄文、弥生集落	4,000									6,550				完了	22集
31	山ノ神遺跡	〃　山田	縄文、古墳	2,000									1,980				完了	22集
32		〃　〃	散布地	2,400				300									遺構なし完了	-
33	長田遺跡	〃　〃	縄文、弥生・古墳集落	2,800									5,500	2,000			完了	30集
34	金場遺跡	〃　〃	縄文、古墳	3,600									680	15,400				
35-A	上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生、散布地	2,600									880	2,900			完了	20集
35-B	恵蘇山遺跡	〃　〃	古墳集落										2,400				完了	20集
36	稗畑遺跡	〃　〃	古墳散布地	2,000									3,980				完了	20集
37	大迫遺跡	〃　〃	奈良～平安火葬場・集落	2,400									5,410	9,900	700		完了	24集
38	外之隈遺跡	〃　〃	弥生～中世、箱式石棺	125									5,150	12,600		1,200	完了	35・40集
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生・古墳、中世散布地	22,000							320	3,400					完了	35集
39-B C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃								300	11,000					完了	21集
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世・散布地	2,500							300	7,700						21集
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400						
42	江栗遺跡	〃　〃	中世、鍛冶遺構	8,000								9,700	7,560					
43	大谷遺跡	〃　若市	古墳群	12,000								500	150				完了	41集
44		〃　久喜宮	散布地	1,800									3,710				遺構なし	-
45	笹隈遺跡	〃　〃	〃	2,400								400	2,210	225				
46	夕月・天園遺跡	〃　古賀	〃	1,800								300					完了	42集
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000								3,200					完了	42集
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文・弥生・中世集落、墓地	1,800								6,800						
49		〃　林田	散布地	3,200								150					遺構なし	-
50		〃　〃	〃	2,400								200						-
51	楠田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500						
52-A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1,000	1,250					
52-B	二十谷遺跡	〃　〃	〃										1,550					
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700						
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生、中世	1,800								2,700						
55		〃　〃	散布地	1,600								100					遺構なし完了	-
56		〃　〃	〃	2,400								800					遺構なし完了	-
57	柿原遺跡	甘木市大字柿原	古墳群、縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400						土取場完了	4・6・12 19・37・41集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	古墳群	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710						土取場完了	23集
杷木インターA	鞍掛遺跡	杷木町大字寒水	弥生・古墳集落									6,450					完了	25集
杷木インターB	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600					完了	25集
杷木インターC	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落	100,000								1,270	1,270				完了	25集
杷木インターD	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180					
杷木インターE	若宮遺跡	〃　〃	溝										2,400	4,000				
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	80,340	82,170	49,125	700	1,200		

7月10日　ＳＢ１・２の写真撮影。

17日　グリッドを設定して掘り下げる。

23日　終了。

［中道遺跡］〔昭和60（1985）年〕

7月22日　石成久保遺跡より移動して遺構検出とピットの発掘。

25日　きわめて暑い日だった。住居跡、土坑、ピットの発掘。

8月 1日　きょうもとても暑かった。乾燥しすぎているので水を撒く。

5日　作業員が増える。

6日　甕棺を検出。周辺には甕棺墓群は見あたらない。

23日　14号住居跡の床面から投弾がまとまって出土。

31日　台風13号襲来。テント・仮設トイレ等が吹き飛ぶ。

9月13日　遺跡の東半部を終了し、明け渡す。

27日　水路より東側部分の遺構検出。

10月 2日　パーソナルタワーによる個別の写真撮影。

7日　台風20号がかすめて通過。テント再設営。グリッド発掘。

19日　周辺にて稲刈り始まる。

28日　西端部の遺構検出（１・２・101・102号住居跡）。

11月 7日　116～122号住居跡の遺構確認。

19日　気球写真撮影。

27日　終了。

［大還端遺跡］〔昭和61（1986）年〕

1月7日　テント設営。午後から吹雪となる。

8日　遺構検出作業。住居跡１軒・土壙墓20基を検出する。

13日　遺構検出作業。住居跡１軒・建物跡１棟を検出する。

15日　西半部全景撮影。2号住居跡・3号建物跡写真撮影。

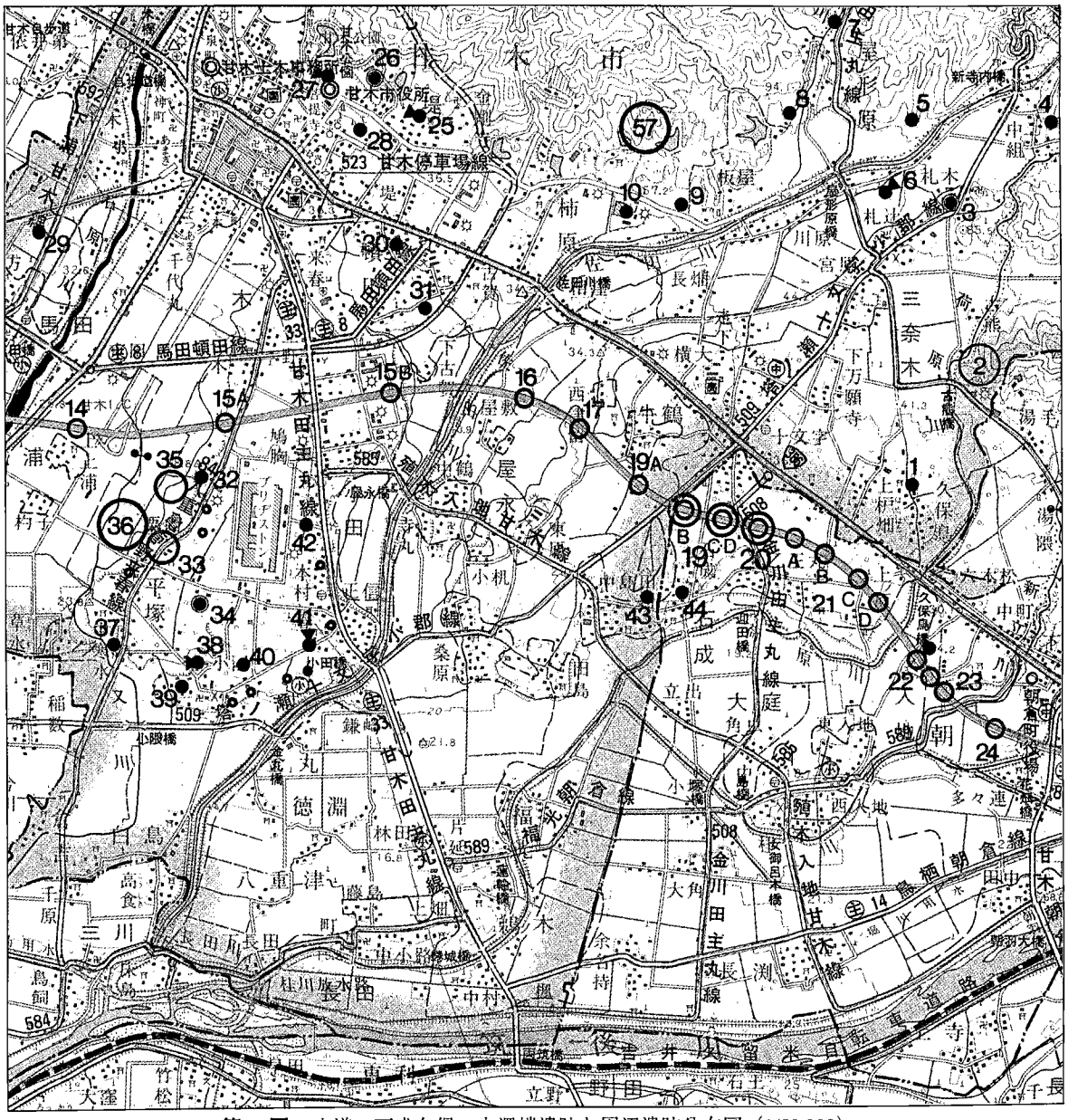
16日　1～6号墓掘り下げ。1・3号墓写真撮影。

21日　土壙墓群全景撮影。個別写真撮影及び実測。

24日　土壙墓群全景撮影。個別写真撮影及び実測。

30日　拡張区土壙墓群全体撮影。28～34号墓写真撮影。土壙墓実測。

31日　器材を撤収し、調査終了。



第２図　中道・石成久保・大還端遺跡と周辺遺跡分布図（1/50,000）

1．久保鳥遺跡
2．古熊古墳群
3．三奈木小学校遺跡
4．荷原池辺遺跡
5．大佛山遺跡
6．ヤツエ塚古墳
7．城原遺跡
8．板屋田中原遺跡
9．板屋遺跡
10．柿原野田遺跡
25．堤当正寺古墳
26．古寺・池の上墳墓群
27．鬼の枕古墳
28．宗原遺跡
29．上川原遺跡
30．頓田柿添遺跡
31．頓田高見遺跡
32．大願寺遺跡
33．栗山遺跡
34．小田道遺跡
35．平塚山の上遺跡
36．平塚川添遺跡
37．中寒水屋敷遺跡
38．神蔵古墳
39．小隈出口遺跡
40．小隈松山遺跡
41．小田茶臼塚古墳
42．小田集落遺跡
43．中島田遺跡
44．石成遺跡
14．上々浦遺跡
15Ａ．下原遺跡
　Ｂ．西原遺跡
16．高原遺跡
17．口ノ坪遺跡
19Ａ．塔ノ上遺跡
　Ｂ．大還端遺跡
　Ｃ・Ｄ　石成久保遺跡
20　中道遺跡
21Ａ　西法寺遺跡
　Ｂ　経塚遺跡
　Ｃ　大庭久保遺跡
　Ｄ　上の原遺跡
22Ｃ　狐塚南遺跡
　Ａ・Ｂ　治部ノ上遺跡
23　座禅寺遺跡
24　才田遺跡
57．柿原古墳群

Ⅱ　遺跡の位置と環境

A．位置

（図版1、第2図）

佐賀県鳥栖市と大分県大分市とを結ぶ九州横断自動車道（大分自動車道）は、福岡県内は小郡市・三井郡大刀洗町・甘木市・朝倉郡朝倉町・同杷木町を通過する。朝倉町で国道386号線と交差するまでの西側部分は平野・台地部を、それより東側は山間部を縫って走っている。

ここに報告する大還端・石成久保・中道遺跡が所在するのは、この横断道の福岡県内部分のちょうど中間あたり、横断道の路線STATIONナンバーでいえば№150＋60～№158＋10の間にある。県道509号・塔ノ瀬十文字小郡線の東、508号・金川田主丸線との間と、後者のさらに東側までを含む。筑後川に注ぐ佐田川と荷原川に挟まれた金川台地といわれる低台地上である。その地籍は下記のとおりである。

・大還端遺跡（19-B地点）　……朝倉郡朝倉町大字石成字大還端
・石成久保遺跡（19-C・D地点）……　〃　〃　〃　字久保
・中道遺跡（20地点）　……　〃　〃　大字大庭字中道

B．歴史的環境

（第2図）

大還端遺跡（19-B地点）・石成久保遺跡（19-C・D地点）・中道遺跡（20地点）を通して見ると、旧石器時代（細石刃）、縄文時代（早期・押型文、晩期）、弥生時代（前期、中期～後期）、古墳時代後期、奈良時代、中世、近代、と幾つもの時代にわたって遺跡が営まれていた。その中で最も中心をなすのが、弥生時代の中期末～後期初頭頃と奈良時代である。以下に簡略ながら主に甘木市・朝倉郡を中心とした周辺の関連する時期の遺跡を瞥見しておこう。

旧石器時代についてはまだ多くの遺跡は知られていないが、近年の成果としては横断道の関係で朝倉町原の東遺跡、三井郡大刀洗町春園遺跡がある。

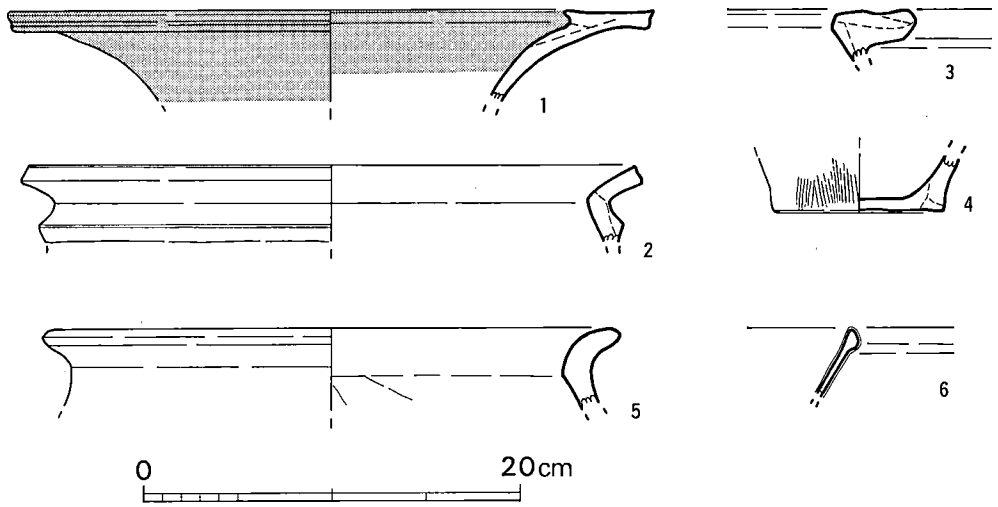
縄文時代ではまず甘木市柿原遺跡Ⅰ地区で草創期のこぶ文土器が出土している。次の早期には甘木市塔ノ上・三奈木小学校校庭・板屋田中原・柿原Ⅰ地区・馬田中原・上川原・神蔵、朝倉町上の原・狐塚南・治部ノ上・座禅寺などの各遺跡で押型文土器が、前期では柿原野田・真奈板・上川原・神蔵・頓田高見・堤大岩などの遺跡で轟・曽畑・塞ノ神式土器や打製石器が出

土している。柿原遺跡Ⅰ地区の集石と柿原野田遺跡の竪穴を除いてどの遺跡も遺構は明確でない。中期～後期はほとんど遺跡が知られていないが、晩期になると前記の上の原・治部ノ上・板屋田中原・柿原Ⅰ地区や高原等の遺跡があり、後二者では竪穴住居跡や土坑が確認されるとともに多量の土器が出土している。高原遺跡は金川台地上にあってその立地も注意される。

弥生時代になると前期後半代から爆発的に遺跡が増え、中期以降に隆盛をきわめるが、それは小石原川と佐田川に挟まれた福田台地とこの中道遺跡等ののる金川台地とに顕著に見られ、とくに前者に著しい。福田台地上では平塚に所在する大願寺・栗山・二塚・垣添・小田道、中寒水屋敷、小隈に所在の宝満・出口・松山・神蔵、小田集落、屋永西原、台地縁辺下の微高地で近年発見された平塚川添・山の上両遺跡などがあり、それらの中には弥生後期から古墳時代へと継続して展開するものがあって、結果として神蔵・大願寺・平塚では三角縁神獣鏡などの大型鏡を副葬する古墳・墳墓が営まれ、さらには小田茶臼塚古墳にまで発展していく。この台地の基部にあたる頓田では高見遺跡が最近調査されている。

一方、金川台地では従前までは朝倉町上の原遺跡・石成遺跡が知られている程度であったが、乙王丸遺跡のほか横断道関係で中道・大庭久保・高原といった遺跡が調査されている。福田台地に比べると後期以降の展開にそれほどみるべきものがない。

石成遺跡は本報告の大還端遺跡の南方600mほどの所に所在し、昭和36～37（1961～62）年に朝倉高校史学部が砂利取り作業の合い間に間断的に甕棺13基、石棺3基を調査している。本来はもっと多くの甕棺等が密集する墓地群であろう。中期末から後期前葉の時期である。なお、石成久保遺跡の南方100～150mで採集した遺物には弥生土器・土師器・白磁があり（第3図）、これらが中道遺跡で検出されたものと時期が合致していることは、遺跡の拡がりを考えるうえで参考になるものである。



第3図　大還端・石成久保遺跡南方採集土器等実測図（1/4）

弥生時代の中期～後期を中心に目を広げると、小石原川以西では上川原遺跡、三輪町栗田遺跡の甕棺墓地があり、さらには夜須町金山遺跡・東小田七板遺跡、そして前漢鏡やガラス璧・鉄剣・鉄鏃子・鉄戈を出土した夜須町東小田峯遺跡などがある。

青銅器には、最も近い所で佐田川中流の甘木市板屋田中原出土の中細銅戈2本、同荷原池辺の中広銅戈3本、同中寒水屋敷の中国式有節柄銅剣1本、朝倉町古毛の中広銅戈1本があり、平塚川添では連弧文鏡片・銅鏃・銅矛・小型仿製鏡・貨泉が出土している。朝倉郡全体の中では、特にここ10数年の夜須町での発掘調査の成果にはめざましいものがあり、上述の東小田峯遺跡もさることながらヒルハタ遺跡や宮の上遺跡などでの鋳型発見例や琴ノ宮遺跡での鐸形土製品はことさらに注意を引く。また三並ヒエデ遺跡では中細銅戈17本が出土しており、いま4本が甘木歴史資料館に収蔵されている。

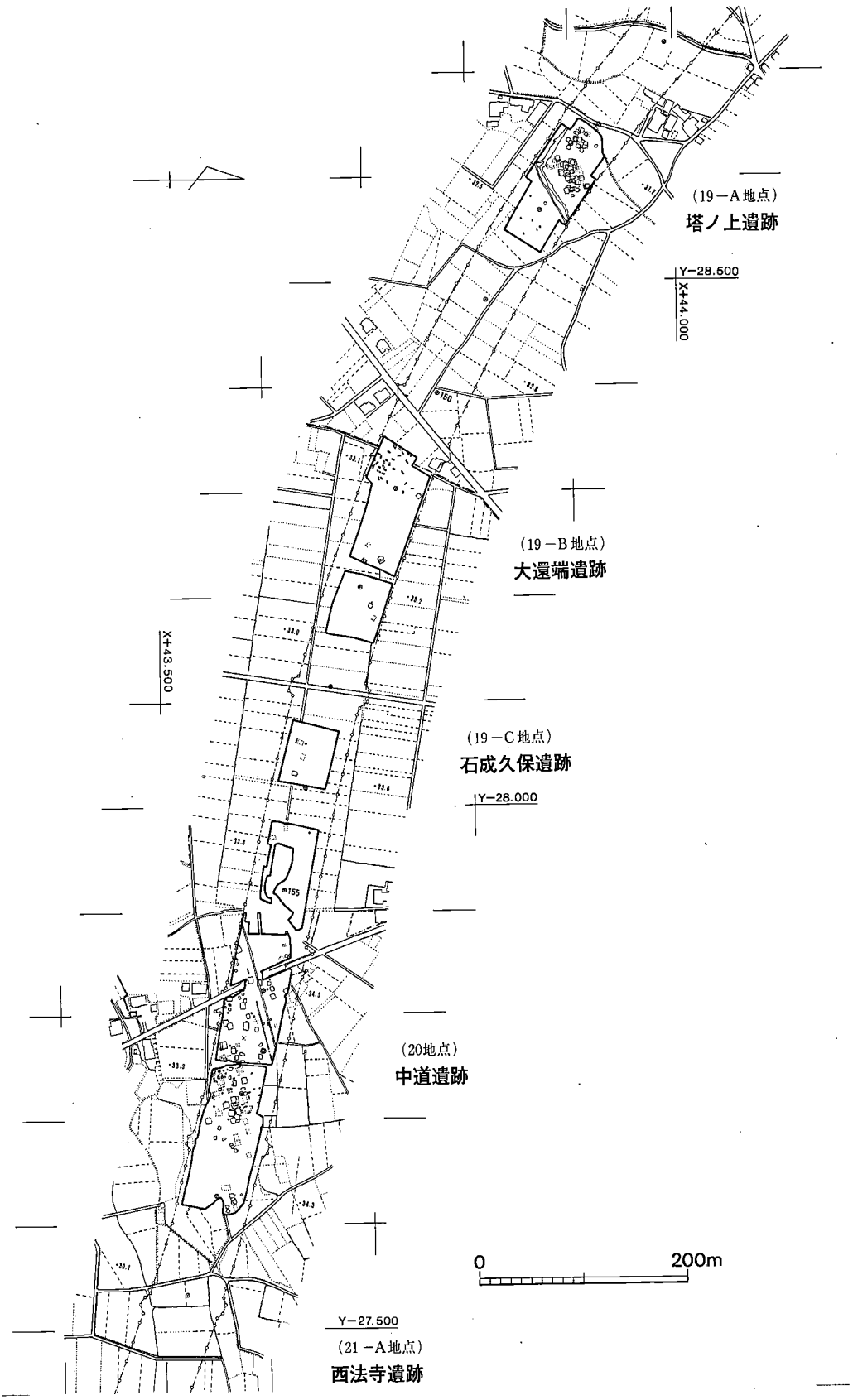
古墳時代についても集落・古墳ともにいくつかの成果があるが、ごく最近では甘木市堤当正寺古墳が全長70m近い前方後円墳とわかり、後円部の主体部外から甲冑などが出土している。

奈良時代の集落はとくに横断道関係の調査で多数検出されており、甘木市宮原・高原・塔ノ上、朝倉町西法寺・大庭久保・上の原・狐塚南・治部ノ上・才田などが列挙できる。それ以外でも甘木市金川中島田・小隈松山・頓田柿添遺跡などが調査されている。この時代の特に8世紀前半以降において集落内の竪穴住居跡や土坑などから製塩土器あるいは墨書土器・ヘラ描土器などが出土している例がまま見られることは瞠目してよいことであろう。ちなみに墨書土器は宮原・高原・塔ノ上・中道・上の原・狐塚南・才田でみられ、宮原では刻印土器も出土している。これらの律令期における集落遺跡の実態解明が今後の課題であろう。なお、この時期での集落間の距離は、立地にもよるが、短い例では中道ー西法寺間、大庭久保ー上の原間のように200mほどであり、高原ー塔ノ上、塔ノ上ー中道間のように1000mほどの例もある（第4図）。見方によってはかなり近接した占地といえるだろう。

註

以上の記述においては『甘木市史　上巻』・『甘木市史資料　考古編』・『夜須町史』、福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』のほか下記報告書等を参照した。

福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』
ー3・9・18・26・27・28・31・32・33・36・37ー
福岡県教育委員会『福岡県文化財調査報告書』　第70・105集
甘木市教育委員会『甘木市文化財調査報告』　第1～29集
柿原野田遺跡調査会『柿原野田遺跡』
三輪町教育委員会『三輪町文化財調査報告書』　第 5 集
夜須町教育委員会『夜須町文化財調査報告書』　第 4 ・ 7 集



第 4 図 19（塔ノ上・大還端・石成久保）・20（中道）地点位置図（1/6,000）

Ⅲ　中道遺跡の調査

[概要]

中道遺跡の調査は、石成久保遺跡の調査に従事していた班が引き続いて行うこととしてとりかかったが、検出された遺構がかなりの数にのぼることが予測されたために、別の班も投入しての大人数による調査となった。調査の手順として大人数を振り分けて東西両方向から遺構検出・発掘を行っていったことにより、遺構番号が統一できないところがあったため、整理の段階で竪穴住居跡と掘立柱建物跡、土坑の一部については遺構番号を変更したものがある。その対照は上巻末尾の第２表（p. 264）を参照されたい。

この遺跡で検出された遺構の主なものは弥生時代と古墳～奈良時代の集落であるが、幅60ｍで長さ280ｍにわたる調査範囲のなかで、西半部に弥生時代の遺構が多く、東半部に古墳～奈良時代の遺構が多く見られた。その他も含めて検出された遺構・遺物は次のとおりである。なお、掘立柱建物跡については現場で確認しえたものを基本としているが、あるいは見落としているものがあるかもしれない。なお、落し穴状遺構は時期を特定できないが、縄文時代に属する可能性が高いものとして報告する。また、中世の遺構は奈良時代以降のものとして一括する。

[旧石器・縄文時代]

・落し穴状遺構　21基

〈出土遺物‥‥マイクロブレイド・使用剝片・石鏃・異形石器・石斧・叩石・押型文土器〉

[弥生時代]

・竪穴住居跡	25軒	・周溝遺構	1基
・掘立柱建物跡	3棟	・甕棺墓	3基
・塀跡？	2基	・土壙墓？	1基
・土坑	39基	・柱穴群	

〈出土遺物‥‥弥生土器・片刃石斧・石包丁・紡錘車・砥石・台石・土玉・投弾・鉄斧〉

[古墳時代]

・竪穴住居跡	6軒	・掘立柱建物跡	3棟

[奈良時代以降]

・竪穴住居跡	28軒	・溝	2条
・掘立柱建物跡	21棟	・柱穴群	
・土坑	16基		

〈出土遺物‥‥土師器・須恵器・（焼塩・墨書）土器・瓦器・青磁・砥石・台石・鉄器〉

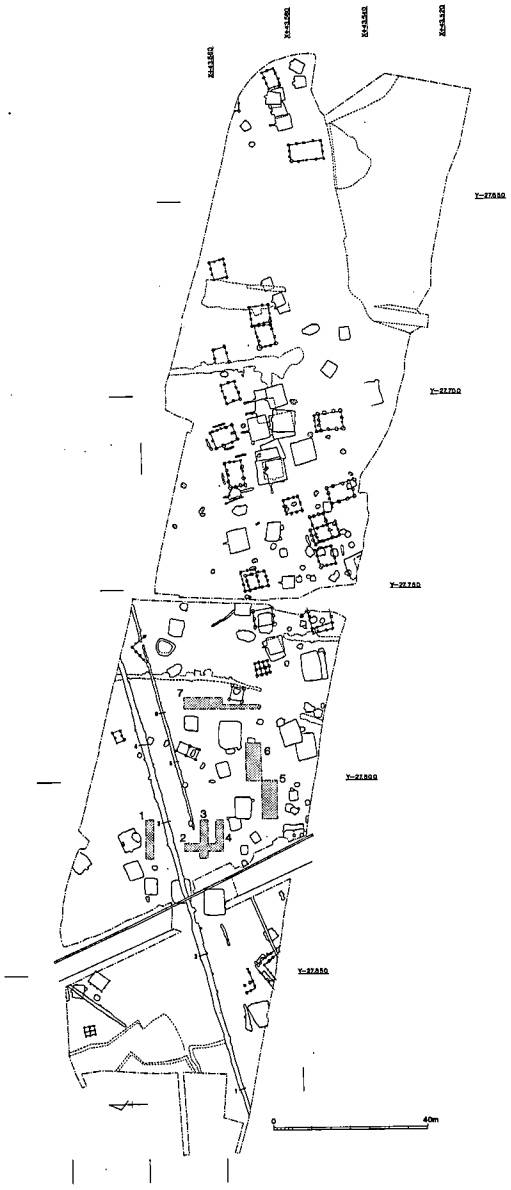
A．旧石器・縄文時代の遺構と遺物

調査に入った当初から遺構検出面で黒曜石片や押型文土器片が出土していたので、弥生時代の検出面である茶褐色粘質土あるいはその下位にある黄褐色土に古い時期の遺構の存する可能性を考え、調査区の西半部にトレンチ７本（Ｇ１～７）を設定した。が、結局のところ遺物は出土したものの遺構は見られなかった。調査区全体の中では、他の新しい時期の遺構の埋土中からも押型文土器片等が出土しているが、それらは調査区の西半部に多い。106号住居跡と48号土坑の埋土からはわりと多くの押型文土器片が出土している。

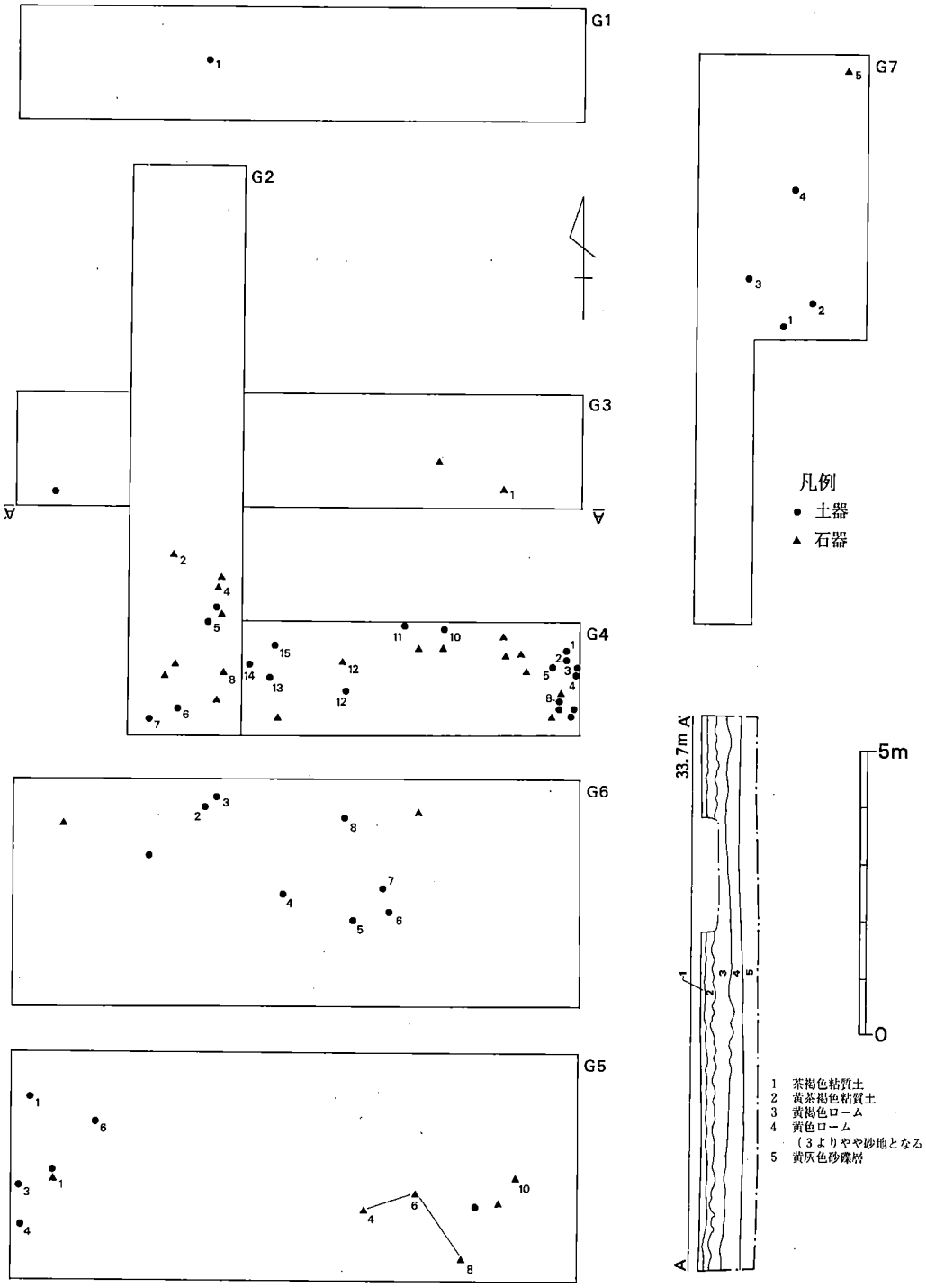
旧石器時代・縄文時代と断定できる遺構は確認できなかったが、調査区の中央部付近に多く見られた落し穴状遺構については縄文時代に属する可能性が高いのでこの項で説明する。

１．トレンチの調査（図版4、第5・6図）

押型文土器期もしくはそれより古い時期の遺構・遺物確認のためのトレンチは、105号住居跡の南にＧ１（幅2ｍ、長さ10ｍ）を東西に長く、9・10号住居跡の北西にＧ２～４（幅2ｍ、長さ最大10ｍ）を「七」の字形に直交して、10号住居跡の南にＧ5（幅4ｍ、長さ10ｍ）と13号住居跡の南西にＧ6（Ｇ5に同じ）をともに東西に長く、12・13号住居跡の東にＧ7（幅1～3ｍ、長さ10ｍ）を南北に長く設定した。各トレンチの遺物出土箇所とＧ3南壁の土層は第6図に示すとおりである。トレンチ内で遺構は確認されていない。全体ではＧ4に遺物が多かった。なお、Ｇ2・3・5・6からは弥生土器片も出土しているがそれについては省略した。



第５図　中道遺跡縄文時代遺構配置図（1/2,000）



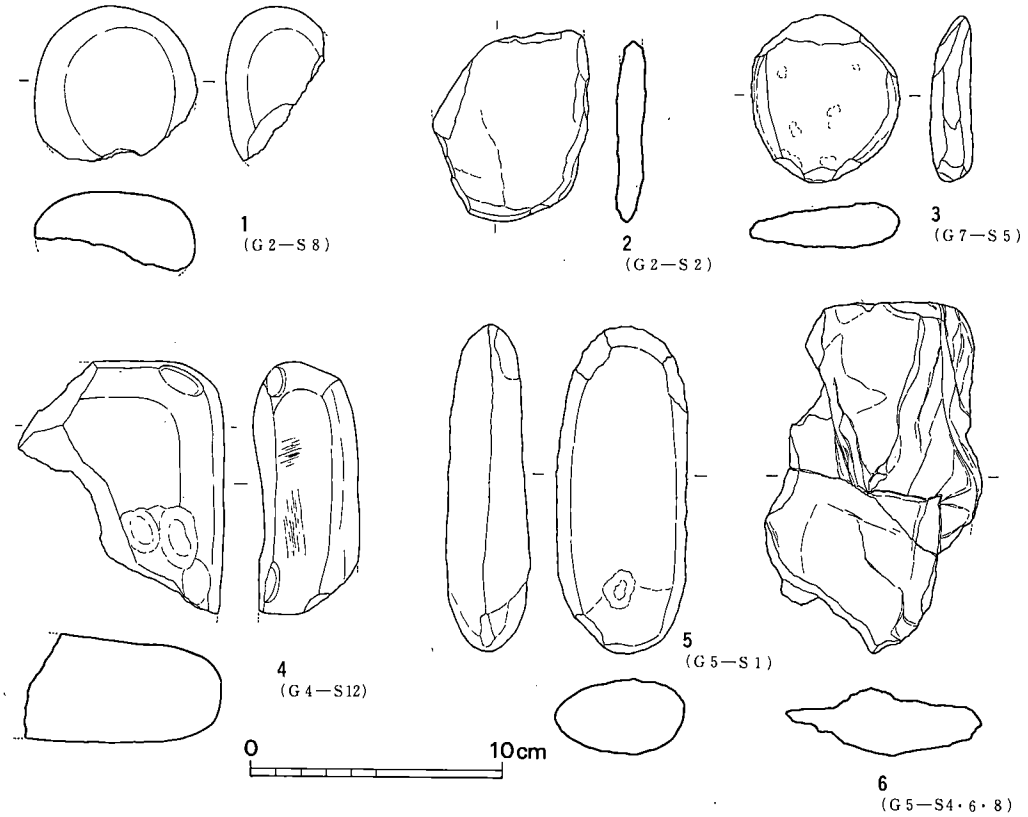
第 6 図　中道遺跡トレンチ遺物出土箇所・土層実測図（1/120）

出土遺物（図版41・43、第7～9図）

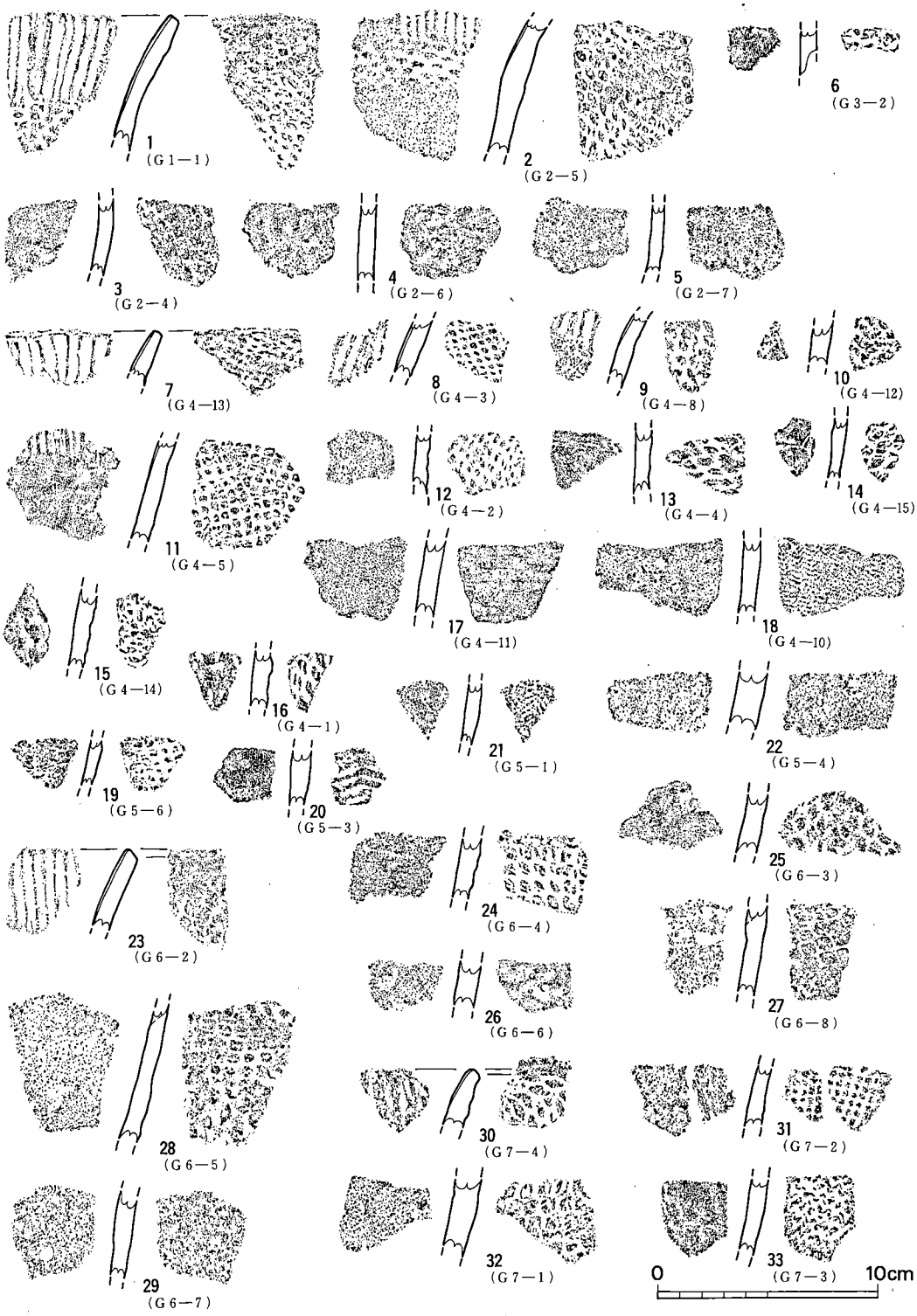
旧石器（図版43、第9図7・9・10）　7は黒曜石のマイクロブレイドで、長さ17㎜、幅7㎜、厚さ1.5㎜、重さ0.25g。9・10はサヌカイトのコアで、9は重さ54.35g。10は39.7g。これらは旧石器時代末期の所産であろう。

土器（図版41、第8図1～33）　G1～7出土の押型文土器である。口縁部のわかる破片でみると、器形はやや外傾した円筒形になるらしい。外面は楕円押型文が大半でその粒の大きさにも大小がある。18・20・21・33の外面は山形押型文である。内面は口縁直下の原体条痕の下位に押型文、その下はなでを施すのが通有らしい。17はあるいは晩期土器の混入かもしれない。

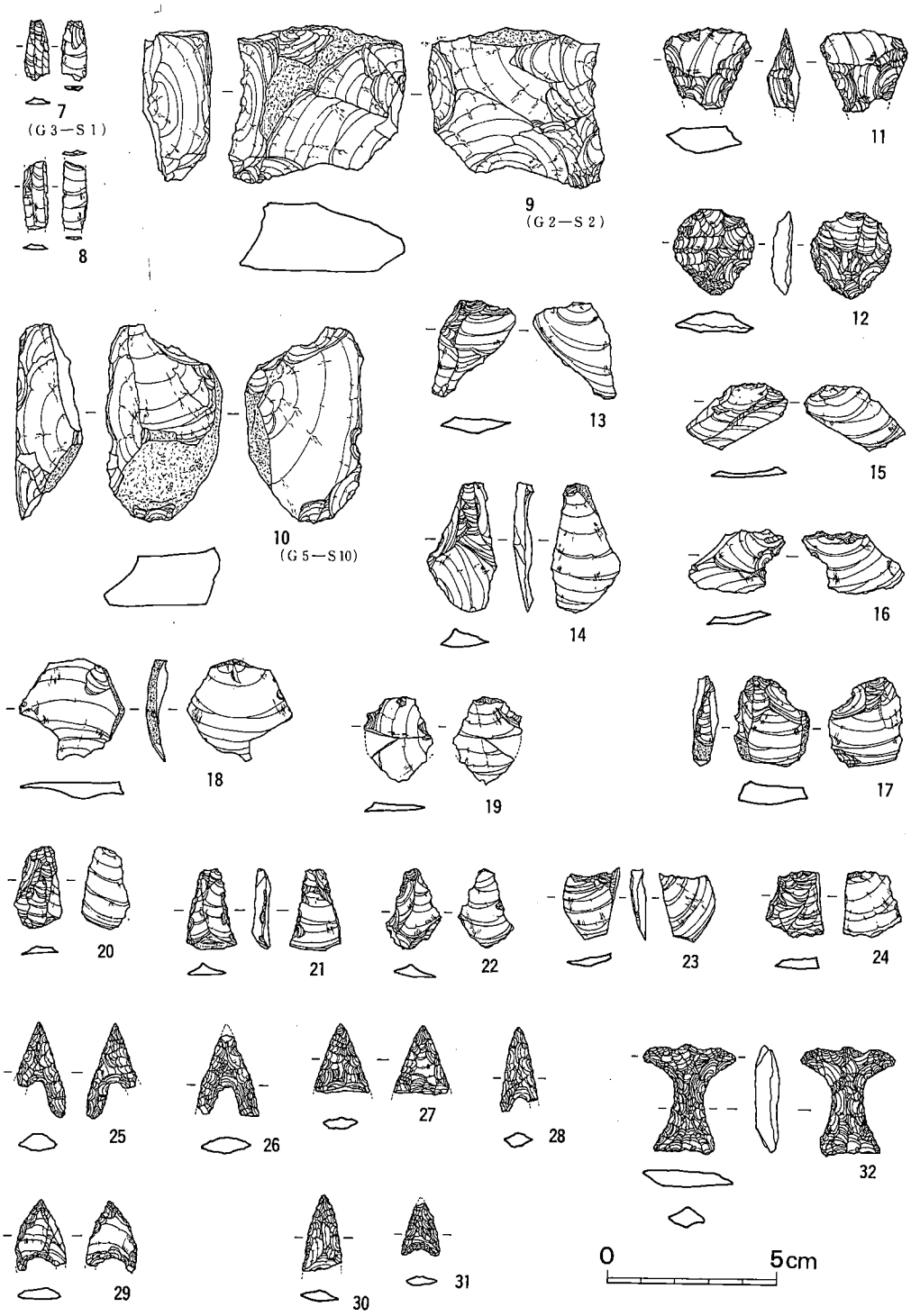
石器（図版43、第7図1～6）　1～6は石器と認定しうるかかどうか疑問のものもあるが、出土したことを重視して掲図しておく。1はすり石であろうか。2は下端に刃部があるようなので石斧になろう。3はすり石か。長さ67㎜。4は台石とすべきか。表裏とも擦れている。5はすり石か。長さ130.5㎜。6は石斧か。3点が同一個体破片である。



第7図　中道遺跡トレンチ出土石器実測図（1/3）



第 8 図　中道遺跡トレンチ出土土器実測図（1/3）



第9図　中道遺跡トレンチその他出土旧石器・縄文時代石器実測図（1/2）

2．落し穴状遺構（図版4～8、第5・9～14図）

33号土坑（図版4、第10図）

5号住居跡北辺の西にあり、他の落し穴状遺構13基が調査区のほぼ中央部付近に集中するのに対し、この1基のみ西側にはずれて存する。床面で47×96cm、上面で110×158cmを測る隅円長方形プランで、深さは75cm。主軸方位はN-79°-E。出土遺物はない。

34号土坑（図版4、第10図）

調査区のほぼ中央付近、110号住居跡の北西にある。床面で72×99cm、上面で94×120cmを測る楕円形に近いプランで、深さは61cm。主軸方位はN-55°-W。黒色土を埋土としていた。床面の東寄りに上面径19×26cm、深さ12cmのピットがある。出土遺物はない。

36号土坑（図版4、第10図）

34号土坑の南方、110号住居跡の西南にある。床面で65×100cm、上面で102×156cmを測る長方形プランで、深さは117cm。主軸方位はN-11°-W。黒色土を埋土とする。出土遺物はない。

53号土坑（図版5、第10図）

調査区中央部の北端付近、115号掘立柱建物跡の北方にある。床面で52×75cmの長方形プランをなし、上面掘り形は119×131cmの方形に近い。深さは96cm。主軸方位はN-35.5°-E。床面の中央に上面径20cm、深さ40cmのピットがある。出土遺物はない。

54号土坑（図版5、第11図）

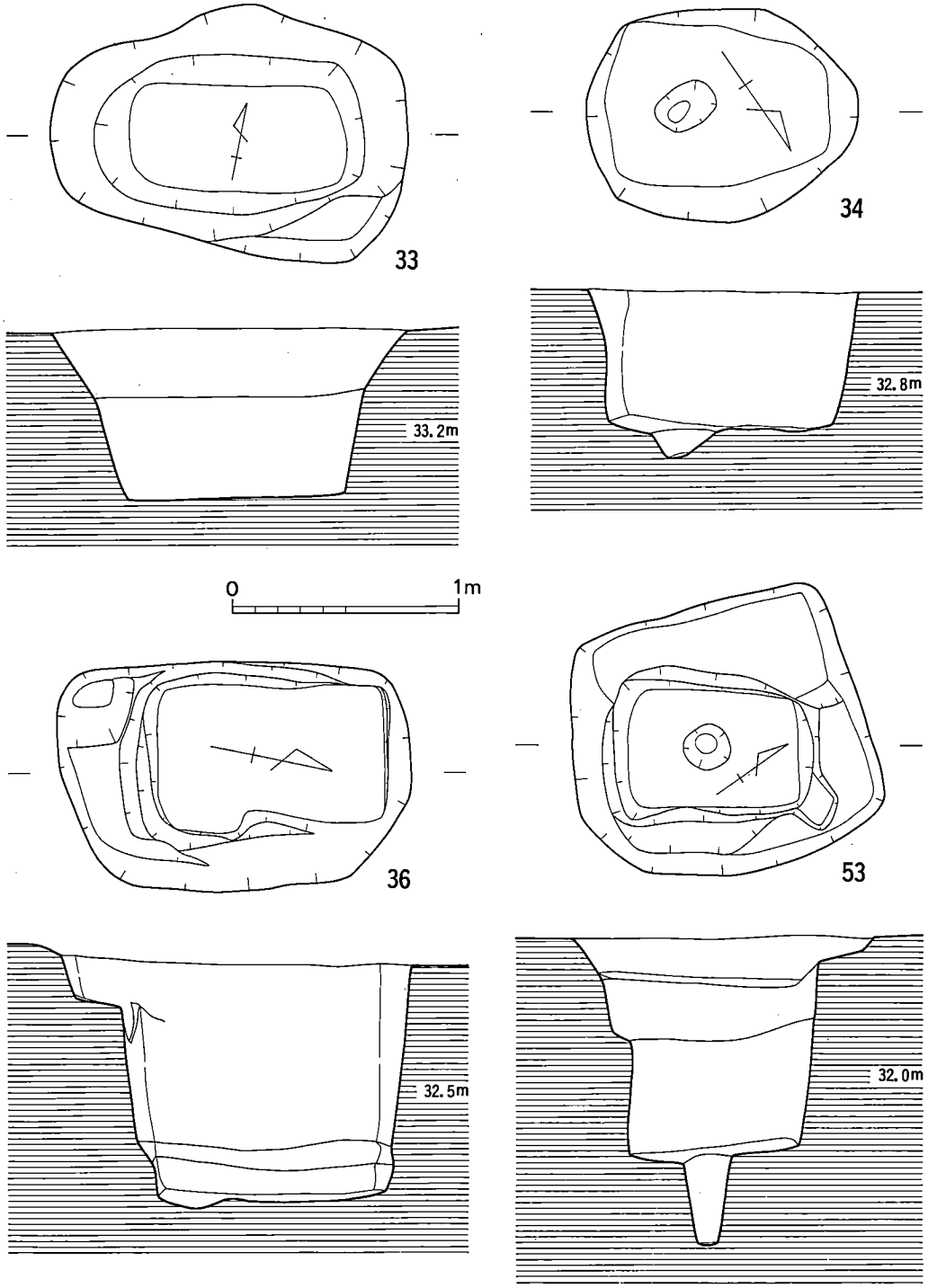
53号土坑の西南にある。床面で58×69cmの長方形プランをなし、上面掘り形は西側が他の柱穴と重複しているが85×95cmほどであろう。深さは82cm。主軸方位はN-89.5°-E。床面の中央東寄りに上面径16×19cm、深さ35cmのピットがある。出土遺物はない。

55号土坑（図版5、第11図）

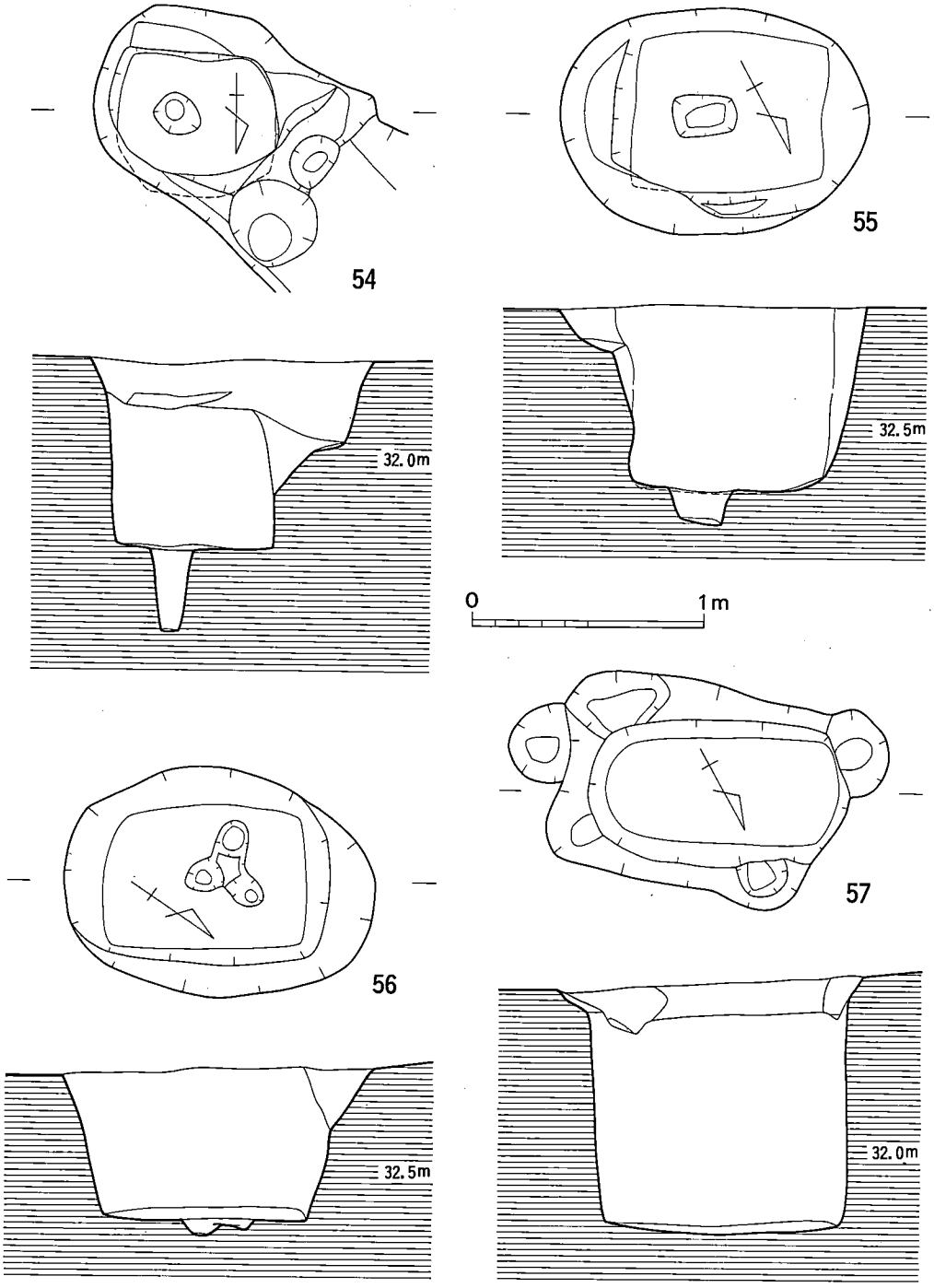
112号掘立柱建物跡の北辺と重複する位置にある。床面は70×83cmの長方形プランをなし、上面は97×133cmの楕円形プランである。深さは80cm。主軸方位はN-61°-W。黒色土を埋土としていた。床面の中央に18×28cm、深さ15cmのピットがある。出土遺物はない。

56号土坑（図版5、第11図）

55号土坑の南、112号掘立柱建物跡の中におさまった位置にある。床面は61×88cmの長方形プ



第10図　中道落し穴実測図１〈33・34・36・53号土坑〉(1/30)



第11図　中道落し穴実測図２〈54～57号土坑〉(1/30)

ランをなし、上面は99×135cmの楕円形プランをなす。深さは66cm。主軸方位はN-34.5°-W。床面の中央とその北、西に径13cm、深さ7cmほどの3個の小ピットがある。出土遺物はない。

57号土坑（図版6、第11図）

56号土坑の南、113号掘立柱建物跡の北にある。床面は46×101cm、上面は90×126cmの長方形プランをなす。深さは113cm。主軸方位はN-61°-W。上面のコーナー付近にあまり深くないピットがあるが関連するものかどうかわからなかった。出土遺物はない。

60号土坑（図版6、第12図）

113号掘立柱建物跡の東南にある。床面は53×84cmの長方形プランをなし、上面は77×112cmの楕円形プランをなす。深さは65cm。主軸方位はN-19°-E。床面の中央やや北寄りに径17×21cm、深さ7cmほどの浅いピットがある。床面は北に低くなっている。出土遺物はない。

61号土坑（図版6、第12図）

60号土坑の東方、114号掘立柱建物跡との間にある。床面は98×122cmの長方形プランをなすが、上面は径120～127cmの円形プランである。深さは93cm。主軸方位はN-1°-W。断面形が袋状をなすことから貯蔵穴の可能性も考えたが、出土遺物として石1個があったのみなので落し穴としておく。

62号土坑（図版6、第12図）

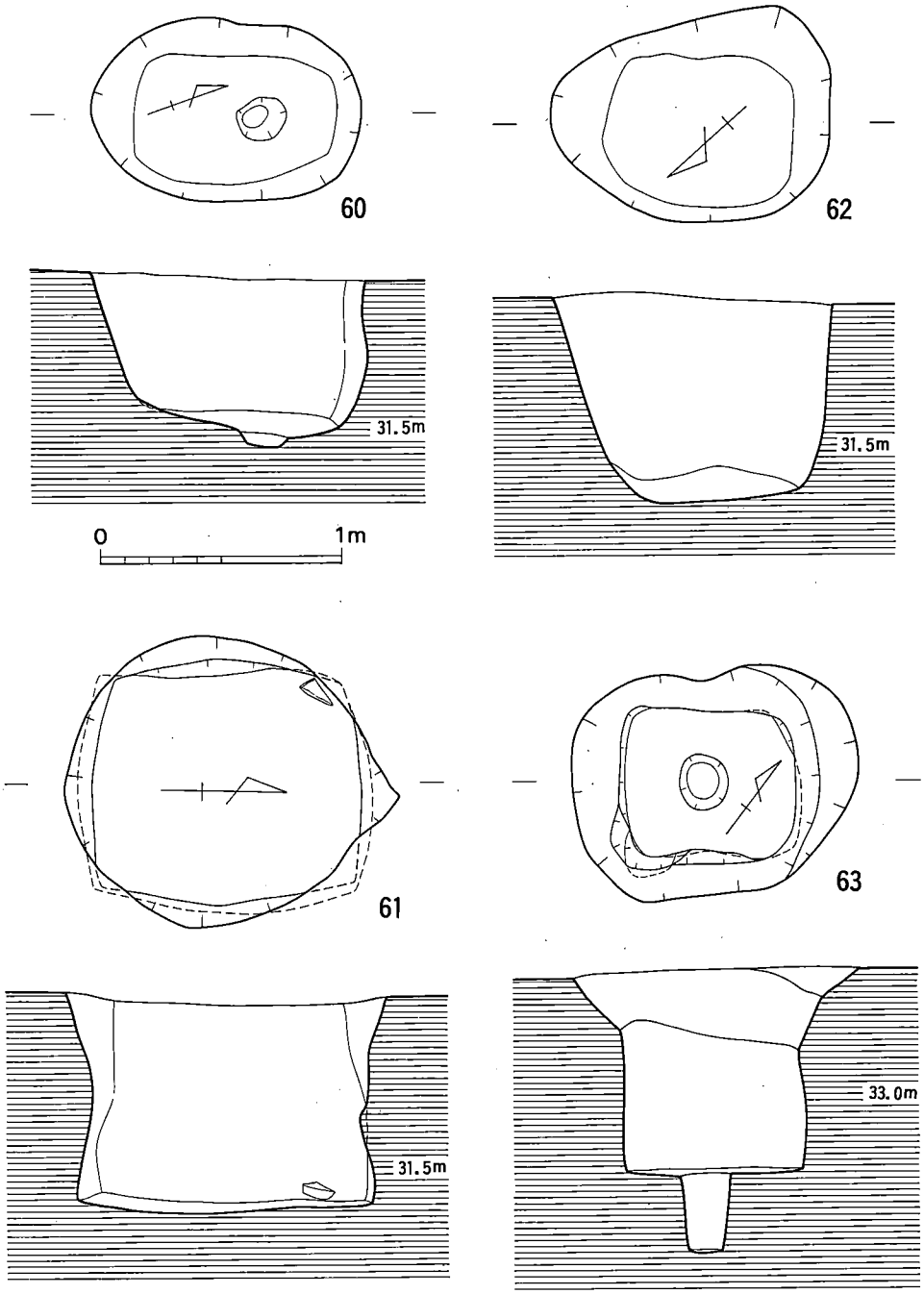
113号掘立柱建物跡の南にあって、59号土坑に切られている。床面は63×78cmの長方形プラン、上面は88×116cmの楕円形プランである。深さは88cm。主軸方位はN-42°-E。埋土中から押型文土器片2、弥生土器片、土師器片が出土しているが、形状より落し穴とした。

63号土坑（図版7、第12図）

54号土坑の北西方にある。床面は62×73cm、上面は93×118cmの丸みをもった長方形プランをなす。深さは87cm。主軸方位はN-52.5°-E。床面中央に径20～23cm、深さ32cmのピットがある。壁面の一部にオーバーハングするところがある。出土遺物はない。

64号土坑（図版7、第13図）

25号住居跡の北辺と重複してそれに切られている。床面は82×124cm、上面は125×157cmの長方形プランをなす。深さは64cm。主軸方位はN-81°-W。形状は他の落し穴状遺構とやや異なるが、出土遺物もないことからこれに含めておく。



第12図　中道落し穴実測図３〈60～63号土坑〉(1/30)

65号土坑（図版7、第13図）

123号住居跡の東南隅の外にある。床面は53×106cmの長方形プランをなすが、上面はその主軸を対角線とする120×125cmの隅円方形プランをなす。深さは114cm。主軸方位はN-36°-E。埋土中から押型文土器、弥生土器、土師器の破片が出土しているが、形状より落し穴とした。

66号土坑（図版7、第13図）

65号土坑の南方にある。床面は40×70cmの長方形、上面は81×118cmの楕円形プランをなす。深さは78cm。主軸方位はN-9.5°-W。床面に径9～20cm、深さ最大15cmの小ピット4個がある。出土遺物はない。

67号土坑（図版8、第13図）

121号住居跡の東南隅の外にある。床面は47×61cm、上面は56×100cmほどの長方形プランであるが、さらにその上が107×145cmほどの楕円形プランで一段深くなっている。深さは82cm。主軸方位はN-22.5°-W。床面に径23cm、深さ30cmのピットがある。埋土中から土師器、須恵器の破片が出土しているが、形状より落し穴とした。

68号土坑（図版8、第14図）

122号住居跡の西北隅にてそれに切られている。床面は64×82cm、上面は75×110cmの長方形プランをなす。深さは49cm。主軸方位はN-65.5°-W。床面中央の北寄りに径20～27cm、深さ8cmのピットがある。出土遺物はない。

69号土坑（図版8、第14図）

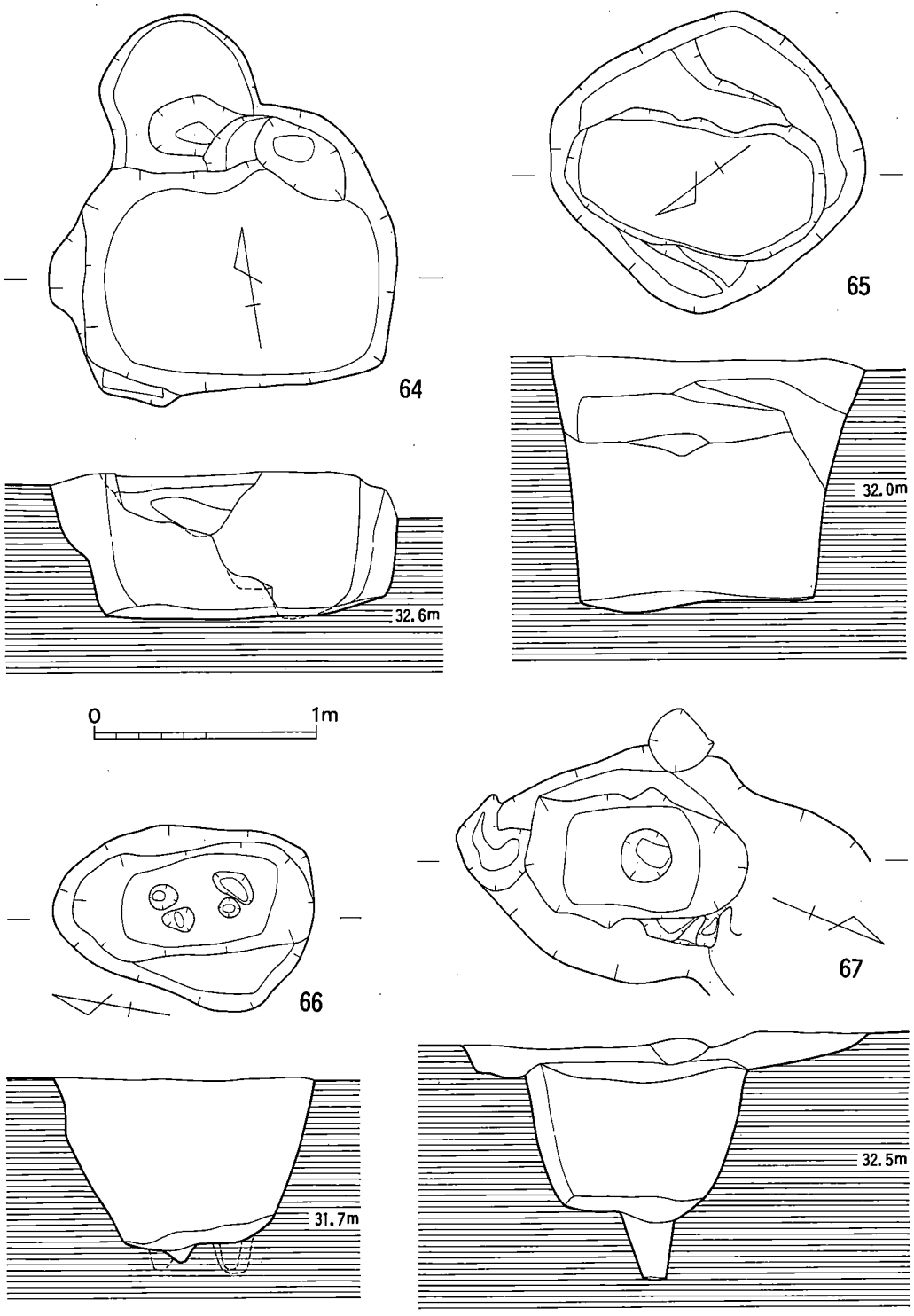
122号住居跡カマド先端部の東側にある。床面は65×100cm、上面は85×124cmの長方形プランをなす。深さは57cm。主軸方位はN-37.5°-W。埋土中から土師器片が出土しているが、形状より落し穴とした。

72号土坑（図版8、第14図）

110号住居跡の南、21号住居跡の北にある。床面は58×82cm、上面は56×98cmの長楕円形プランをなす。深さは86cm。主軸方位はN-38.5°-W。壁面の一部はオーバーハングしている。出土遺物はない。

73号土坑（図版71、第14図）

113号住居跡北東隅の床面下から検出した。床面は64×100cm、上面は77×108cmの丸みをもっ

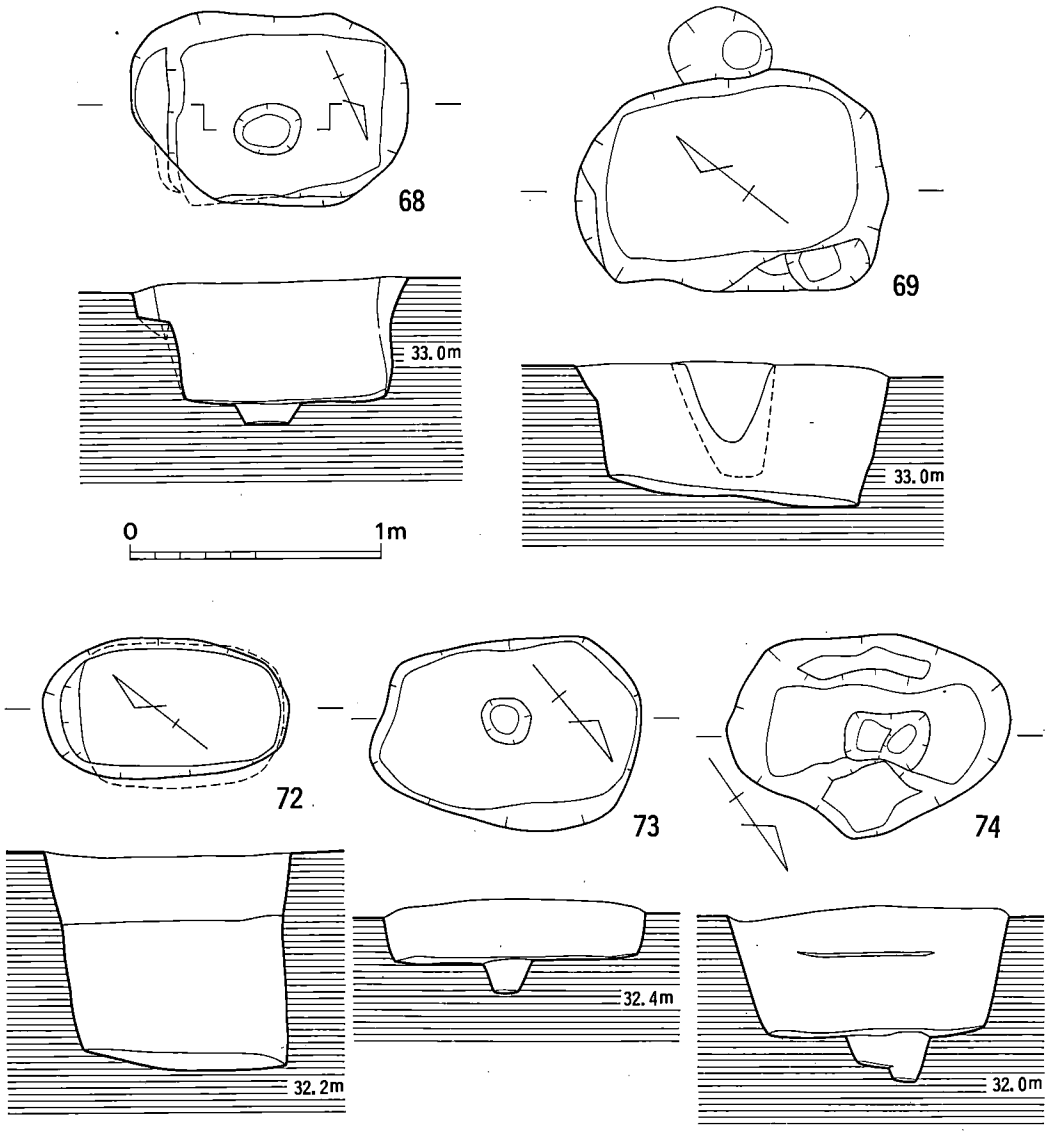


第13図　中道落し穴実測図４〈64～67号土坑〉(1/30)

た長方形プランをなす。深さは24cm。主軸方位はN-51°-W。床面中央に径18～20cm、深さ13cmのピットがある。出土遺物はない。

74号土坑（図版71、第14図）

111・114号住居跡の床面下、115号住居跡カマドの東側床面下にて検出した。床面は40×85cm、上面は80×113cmの丸みをもった長方形プランをなす。深さは52cm。主軸方位はN-55°-W。床面に23×34cm、深さ17cmのピットがある。出土遺物はない。



第14図　中道落し穴実測図5〈68・69・72～74号土坑〉(1/30)

3．その他

住居跡や土坑、柱穴、溝の埋土中から、そして遺構検出時に縄文土器・石器が出土している。調査区内全体から見れば西半部に多いが、106号住居跡、48号土坑の埋土中には押型文土器片が多かった。以下、時期別に簡述する。

出土遺物（図版41～43、第9・15～18図）

a．**旧石器**（図版43、第9図8・11）

8は黒曜石のマイクロブレイドで、長さ20㎜、幅7㎜、厚さ1.5㎜、重さ0.25g。検出面出土。11は黒曜石のスクレイパーで、現存長24㎜、幅25.5㎜、厚さ9.5㎜、重さ4.5g。11号土坑西方の検出面出土。

b．**早期土器**（図版41・42、第15～17図1～76）

押型文土器には楕円・山形があり圧倒的に前者が多い。口縁は外端部が下がって面を取る形状のものが多い。内面は口縁直下に原体条痕を施すものが大半であるが、無文のものもある。28は波状口縁になるらしい。復原口径20㎝。29は内外とも無文。66～68は楕円が連続したような文様となる。69は撚糸文であろうか。70～74は山形の押型文。75・76は外面が条痕である。3・8・9・15・20・59～64・72は106号住居跡、45～49は48号土坑の出土である。

c．**晩期土器**（図版43、第18図1・2）

1は浅鉢の底部であろう。これを土版として使用した可能性もある。底径5.9㎝。16号住居跡床面からの出土。2は口縁部片で鉢になろうか。1号溝からの出土。

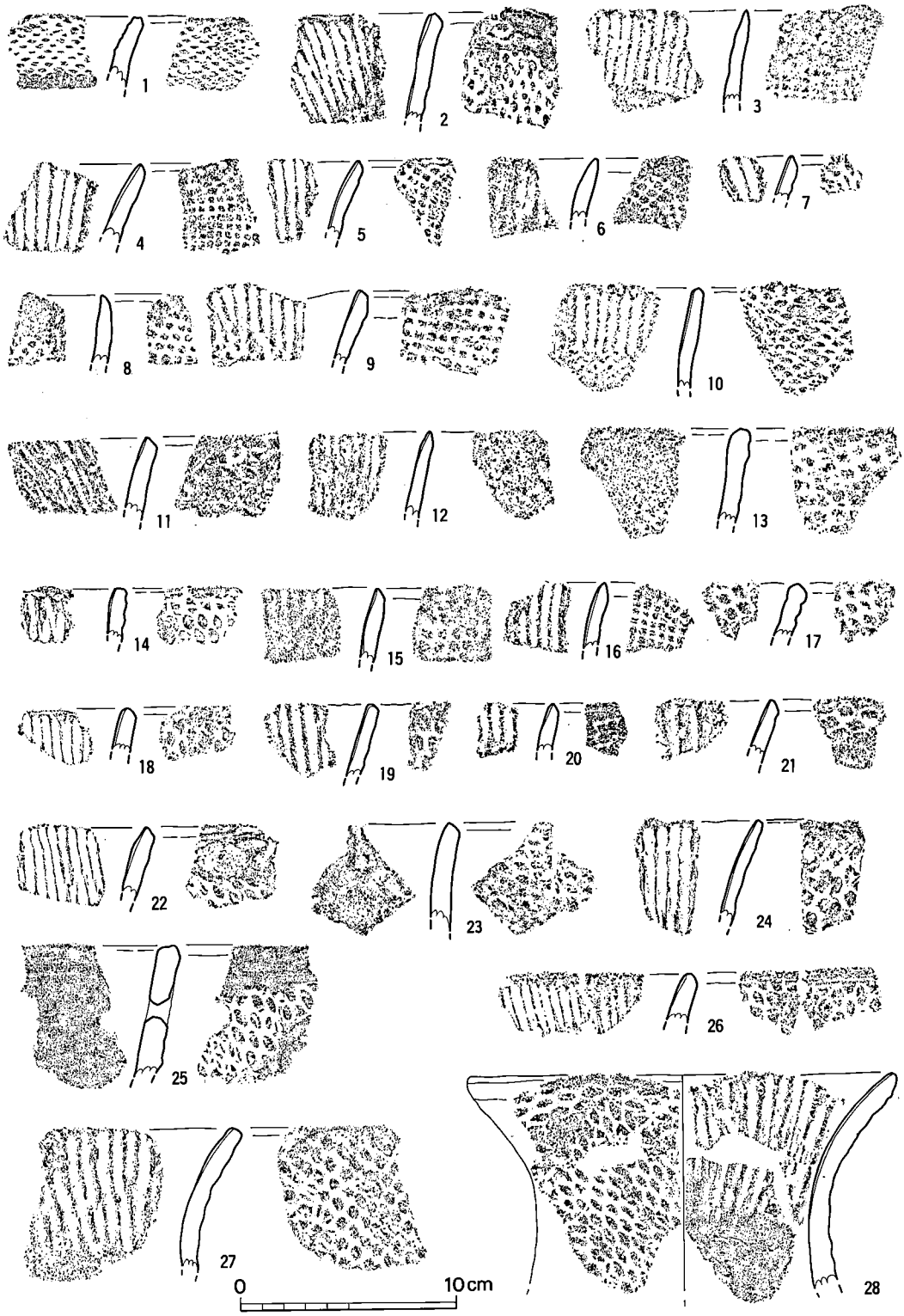
d．**縄文期の石器**（図版43、第9図12～32、18図3）

12は黒曜石のスクレイパーで、長さ25㎜、幅24㎜、厚さ6㎜、重さ3.3g。13～24は黒曜石の使用剝片。13は重さ2.15g。6号住居跡出土。14は長さ38㎜、重さ2.9gで115号住居跡床面の出土。15は110号住居跡カマド出土。16は16号住居跡出土。17は長さ26.5㎜で106号住居跡下層出土。18～20は16号住居跡上層の出土で20の長さ24.5㎜。21～24は13号住居跡床直上の出土で21の長さ24㎜。21と23には研磨が見られる。

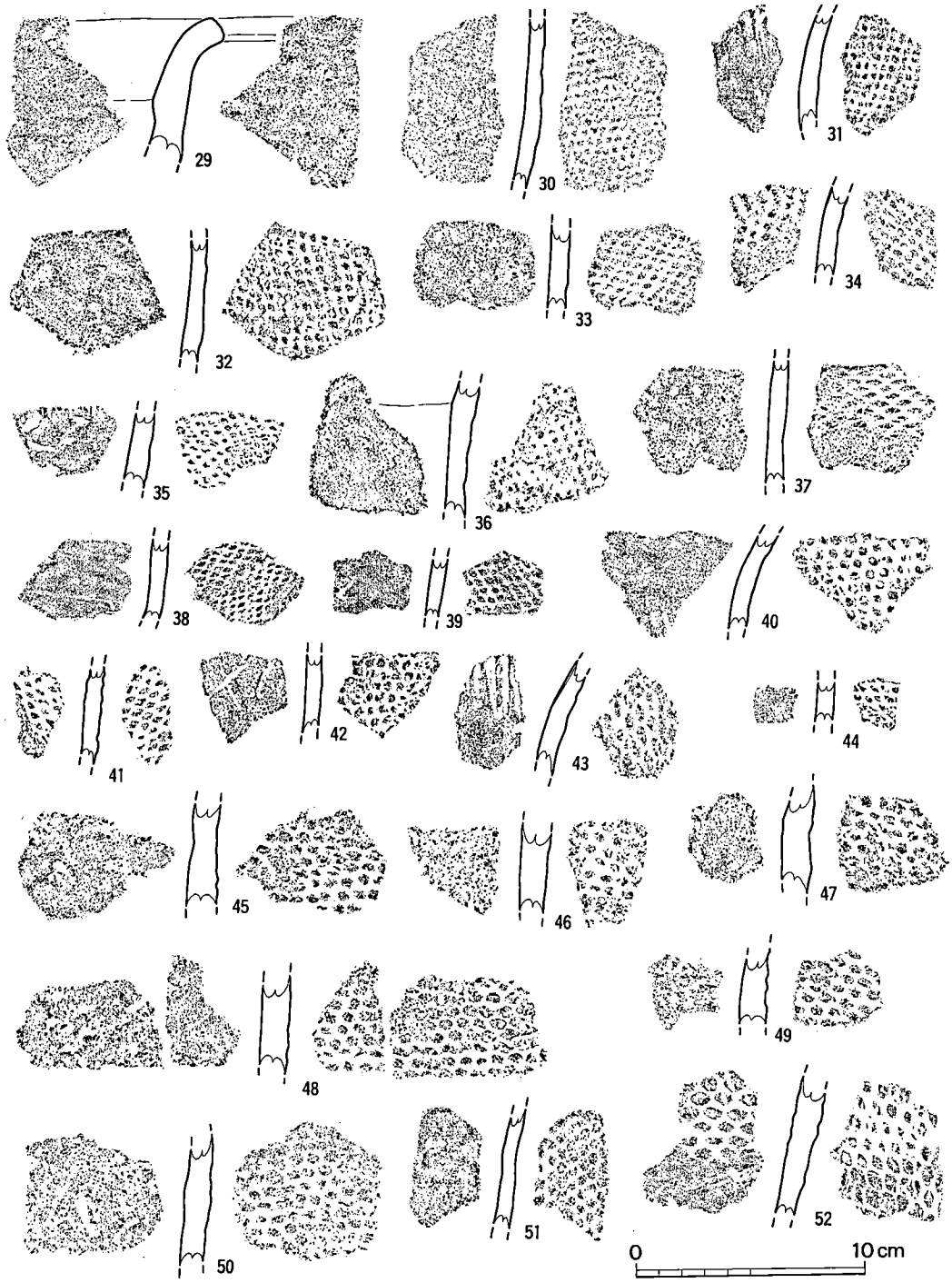
25～31は鏃である。30がサヌカイト、31がチャートでそれ以外は黒曜石製。25は採集品で長さ28㎜、重さ1g。26は幅14㎜、重さ1.15g。118号住居跡出土。27は現存長19.5㎜。1号土坑出土。28は姫島産で長さ25㎜、幅8㎜、重さ0.7g。115号住居跡床面出土。29は長さ20㎜、幅12.5㎜、厚さ3.5㎜、重さ0.75gの剝片鏃で、採集品。30は23号住居跡付近からの出土。31は現存長14.6㎜、幅11.4㎜、厚さ3.2㎜、重さ0.4gでＳＢ７の東南方出土。

32は人が手を広げたような形状の黒曜石製品で、異形石器としておく。長さ32㎜、幅27㎜、厚さ7㎜、重さ4g。11号土坑の北側から出土した。以上の石器は早期に属するものだろう。

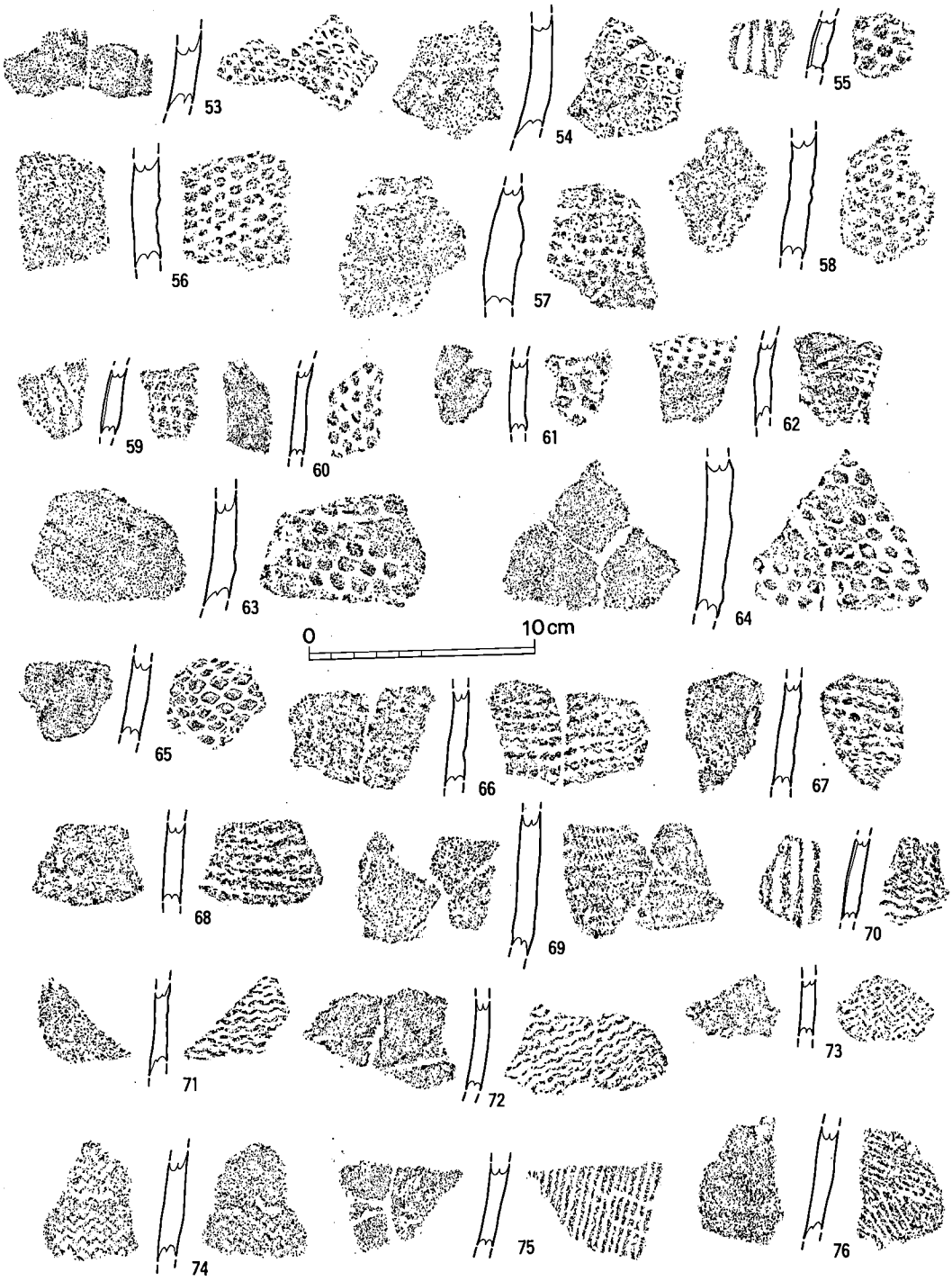
第18図3は蛤刃の石斧片で、現存長82㎜。108号住居跡からの出土で晩期の所産であろう。



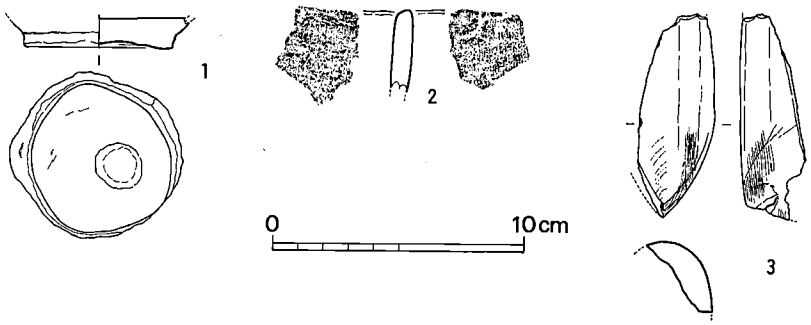
第15図　中道遺跡出土縄文土器実測図１（1/3）



第16図　中道遺跡出土縄文土器実測図２（1/3）



第17図　中道遺跡出土縄文土器実測図３（1/3）



第18図　中道縄文晩期土器・石器実測図（1/3）

B．弥生時代の遺構と遺物

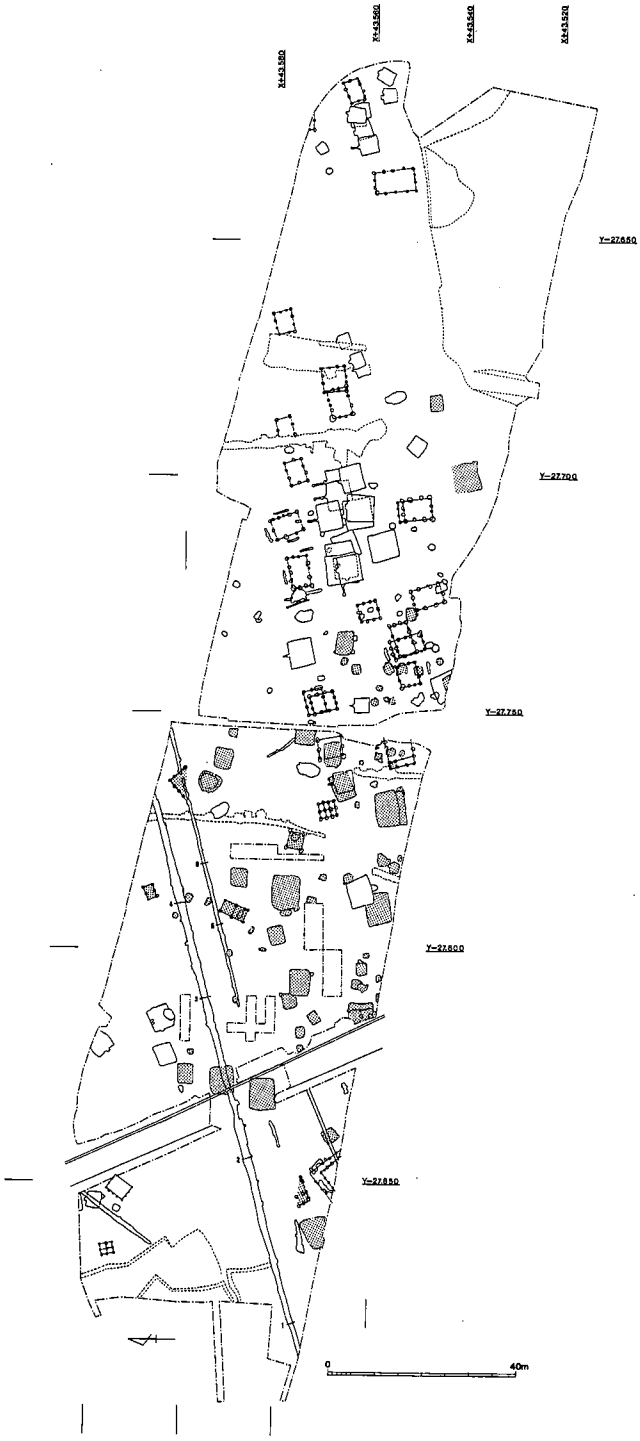
調査区全体から見ると、遺構の分布はその西半部に偏っている。竪穴住居跡25軒は西半部でもその南半に多く占地していることから、当該地の南方に遺構のさらなる拡がりがあるものと考えられる。掘立柱建物跡3棟は住居群の間にやや北寄りに占地する。ＳＷ1・2は弥生時代と考えてここで述べる。土坑42基はどちらかというと南半部に多いが、多量の土器を出土した11～13号は1・2号建物跡の間にあって、これらの西から北側には住居群が存在しないので、ここがこの弥生集落の北限としてよいかもしれない。甕棺墓3基は全くばらばらにそれぞれ独立して存する。

時期は全てが中期末を前後する頃に属するが、稀に前期と後期の土器が混入している遺構がある。

1．竪穴住居跡

1号住居跡（図版9・10、第20・21図）

県道508号金川田主丸線よりも西側、調査区の西端部にある。西南部が調査区外にかかるが全貌は推定できる。東西6.2ｍ、南北5ｍの平行四辺形気味のプランで、現況の床面積は23.73㎡。床面中央のやや南寄りに土坑（中央土坑）があり、それを挟んで大きめの２本の主柱穴（Ｐ１・Ｐ２）がある。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-67°-E。南辺中央にも土坑（屋内土坑）があるが大半は調査区外にかかっている。また、東南隅に幅70㎝、奥行き50㎝ほどの突出した部分があり（東南隅土坑）、壁面は焼けていた。その床面レベルは住居のそれと同じであり、そこから北側前面にかけて炭化材とともに土器・砥石・台石などが出土している。壁面が焼けていることか



第19図　中道遺跡弥生時代遺構配置図（1/1,600）

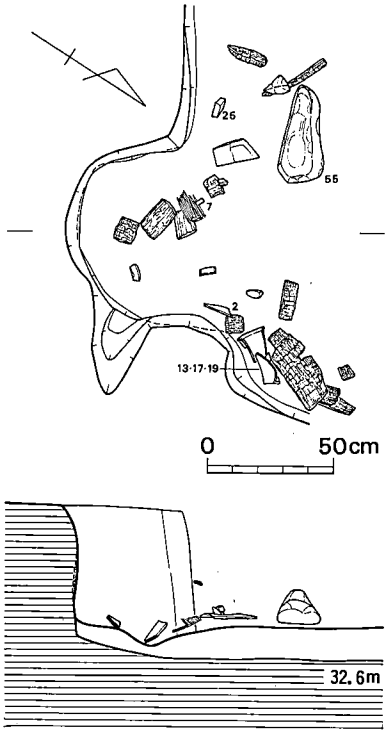
ら炉の機能を持った所とも考えられるが、場所からすると出入口部の可能性もある。北壁直下の中央部のみにやや幅の広い壁小溝がある。

この住居は焼失住居であって床面に多数の炭化材が検出された。特に東辺中央や北東隅・南東隅からP2に向かって丸太材が倒れ込んでいる様相はその上屋構造の推定に示唆を与えるものである。木材のみでなく屋根を葺いていたカヤ？もかなりの量が見られた。床面のP1・P2・屋内土坑付近から土器・砥石・台石等が、中央土坑からは土器・土玉・台石が出土している。

第20図　中道1号住居跡実測図（1/60）

埋土中の炭化材より上位の黒色土層からも多数の土器が出土しており、焼失後の窪みに投棄されたものだろう。そのほかに石包丁、不明土製品、木の実、軽石、押型文土器片等がある。

この住居から検出された炭化材の一部をＣ14年代測定にかけたところ、2210±75B.P.の年代が得られている。



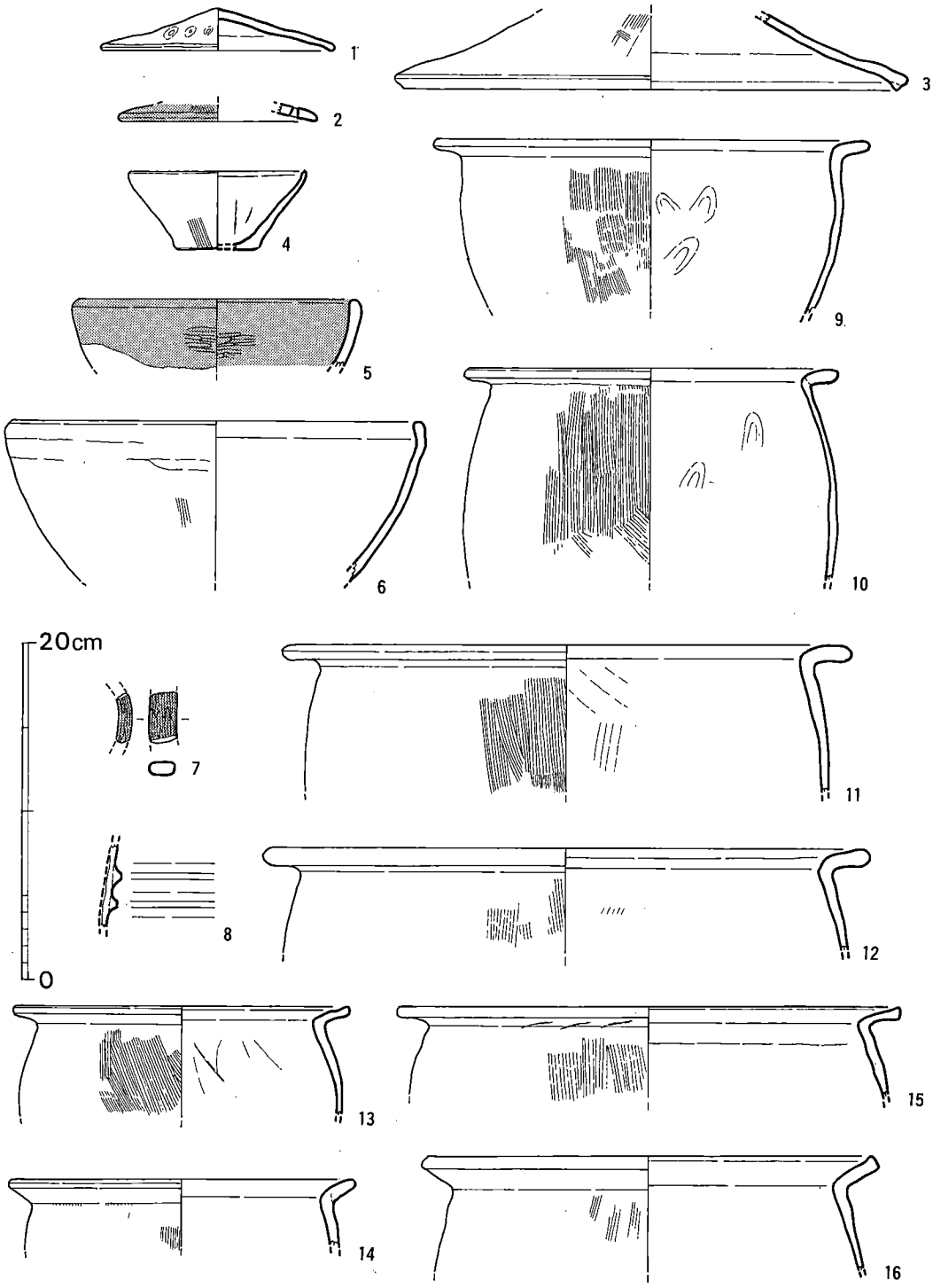
第21図　中道１号住居跡
東南隅土坑実測図（1/30）

出土遺物（図版44・55・56、第22～24・117・119・120・123図）

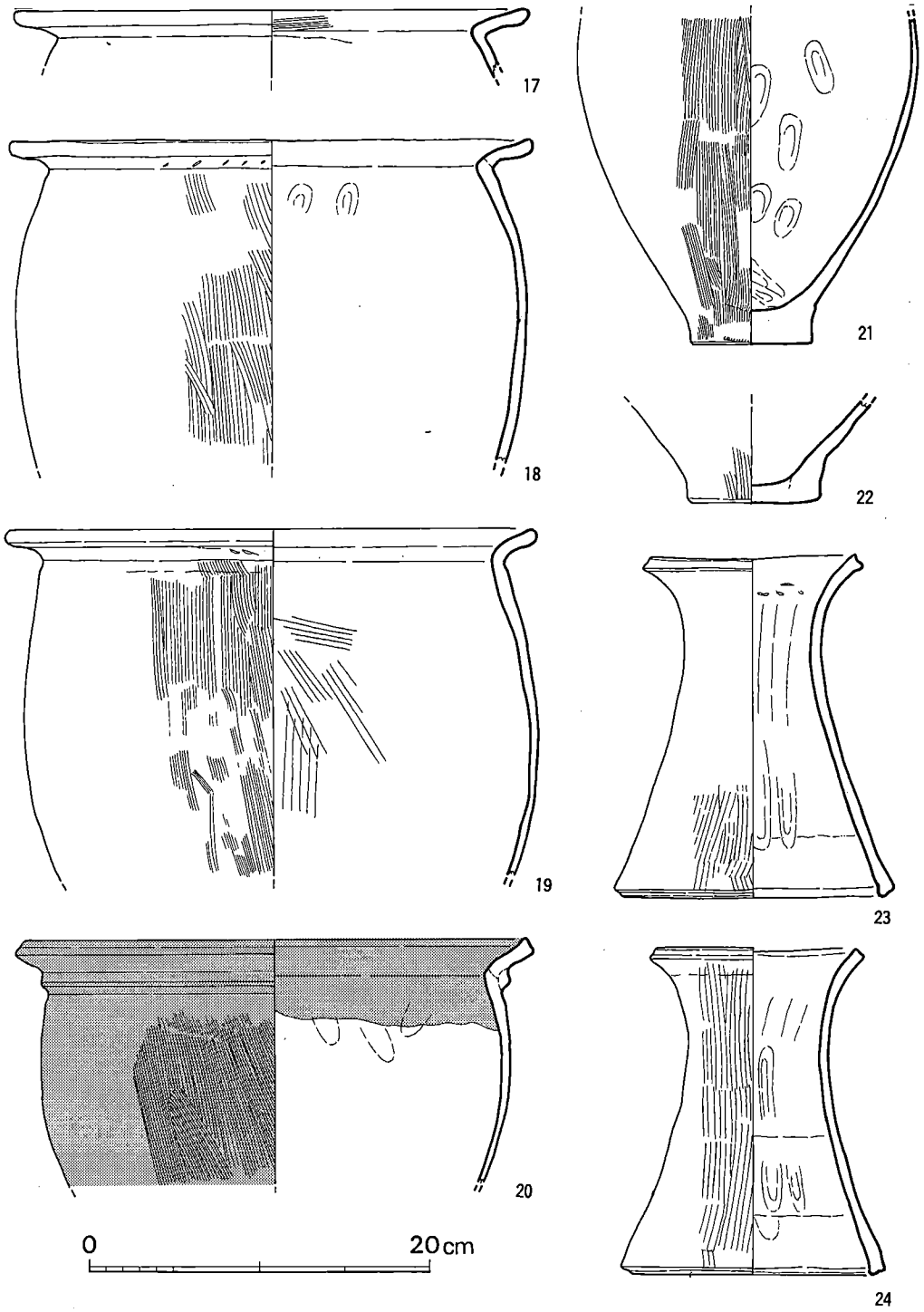
土器（第22～24図1～24）　1～3は蓋で、1・2が壺、3が甕のそれになろう。1は完形品で口径14cm、器高2.5cm。紐通しの孔4個が穿たれている。2は外面丹塗磨研で孔内にも丹が入っている。4～6は鉢で、5は内外とも丹塗磨研である。7はジョッキ形土器の把手であろうか。東南隅土坑内出土で丹塗磨研。8～31は甕で、口縁形態が9～12・27は逆Ｌ字形、残りはくの字形をなす。10・17は口縁に煤が付着する。20は丹塗り。27は大型で復原口径50.5cm。23・24は器台で23の裾内面には煤が付着する。24は完形で口径12.5cm、裾径15.4cm、器高19cm。

土製品（第117図1～6）　1～5は粘土をのばした板状品で、器表にイネ科植物の茎の圧痕が見られ、胎土中には小礫を含んでいる。1・2・4は東南隅土坑内、3・5はＰ２周辺からの出土。6は径18.2～22mm、重さ7.1gの土玉であるが孔はない。中央土坑出土。

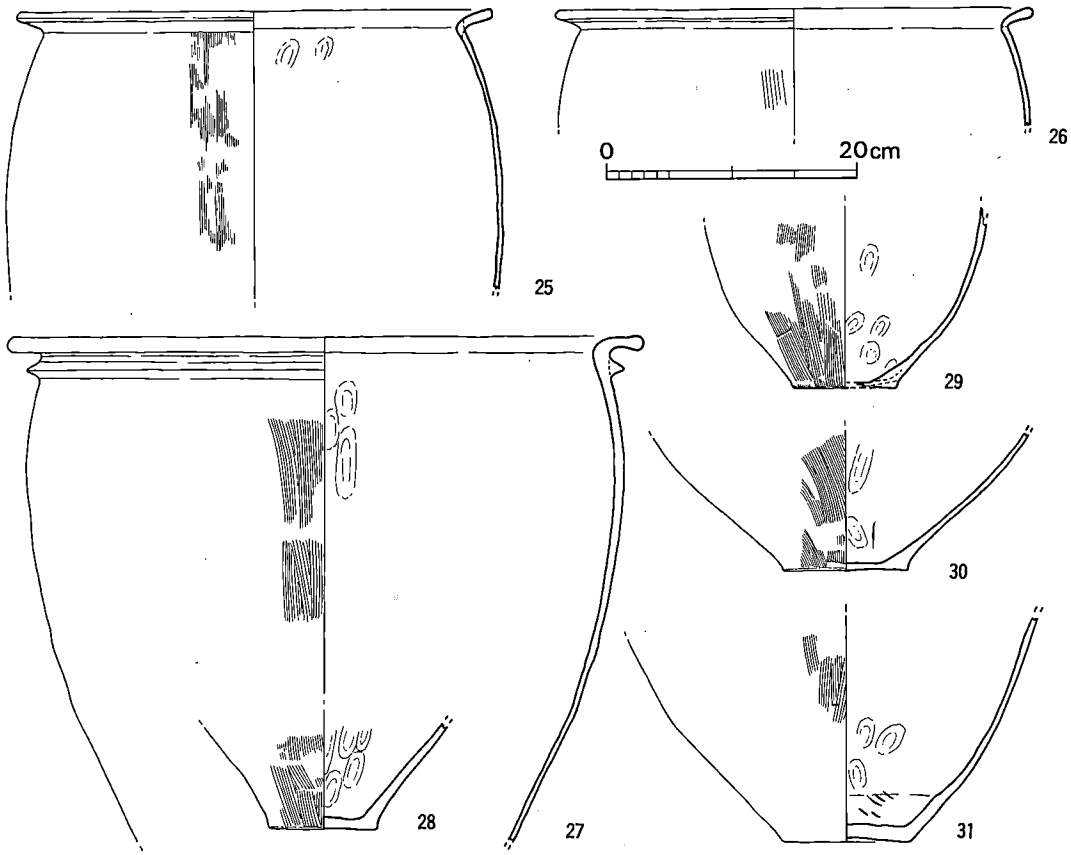
石製品（第119・120・123図1・18、23～27、46～55）　1は灰色の粘板岩製の石包丁で、西壁直下の床面から10cmほど浮いた所で２片に割れて重なるようにして出土した。研ぎ直しによる擦過痕が著しい。長さ139mm、幅52.3mm、厚さ7.3mm、孔間23mm、孔の外径6～7mm、内径3.8～4.6mm、背孔間9～10mm、重さ58.5g。18は片岩の自然石だが側面に穿孔と打欠きが見られ、人の手が加えられている。長さ65.2mm、幅48.3mm、厚さ6.9mm、重さ27.5g。用途は不明。23～27は砥石片で、23・24が粘板岩の仕上砥、25が硬砂岩の中砥、26は赤簾片岩、27は砂岩の粗砥である。25・27は屋内土坑からの出土。46～55は作業台石とすべきもので、48が片岩、52が凝灰岩であるほかは玄武岩系の石材である。50は中央土坑から出土した。55の全長41.5cm、厚さ11cm。



第22図　中道１号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第23図　中道１号住居跡出土土器実測図２（1/4）



第24図　中道１号住居跡出土土器実測図３（1/6）

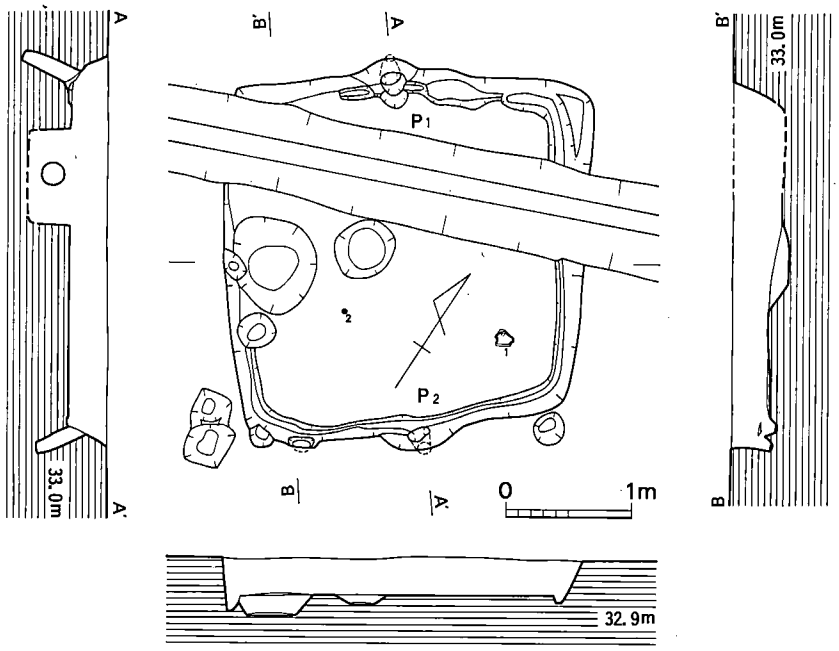
２号住居跡（図版11、第25図）

１号住居跡の東方にある小型の住居跡で、北半部を塩化ビニール管を埋設した幅70cmの溝に切られている。一辺が2.6～2.8ｍの方形プランをなし、面積は6.65㎡。埋土は黒色土であった。北西辺と南東辺の中央部の壁面直下に、外向きに25°前後の角度で柱穴（Ｐ１・Ｐ２）が穿たれている。主柱穴を結ぶ主軸方位はＮ-38°-Ｗ。柱間は2.8ｍ。南西辺中央に屋内土坑がある。北隅にある段は出入口部の可能性もある。全周はしないものの壁小溝が巡る。遺物量は少ないが、土器のほかに屋内土坑東側床面から石包丁が出土している。

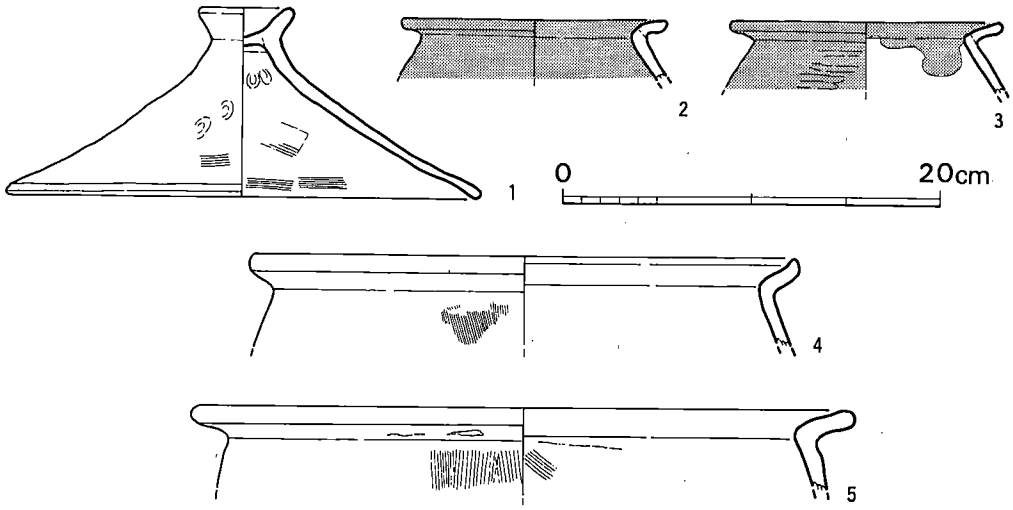
出土遺物（図版45・55、第26・119図）

土器（第26図1～5）　1は蓋で、摘み部分は中窪みとなる。復原裾径25.2cm、器高10cm。2・3は丹塗磨研の無頸壺で、2は復原口径14cm。4・5は甕で、4は外面に煤が付着する。

石製品（第119図2）　灰色がかった小豆色の凝灰岩製石包丁で、約1／3を欠失する。擦過痕はあまり目立たない。現存長98㎜、幅41.6㎜、厚さ7.7㎜、孔間25㎜、孔の外径11.5㎜、内径4㎜、背孔間17.5㎜、重さ45.6g。



第25図　中道２号住居跡実測図（1/60）



第26図　中道２号住居跡出土土器実測図（1/4）

3号住居跡（図版11、第27図）

2号住居跡の北東にあり、その大半が県道508号金川田主丸線の舗装の下から検出された。南北5～5.5m、東西6.3～6.8mの長方形プランで、現況の床面積は31.03㎡。床面中央のやや南寄りに径45cmで若干の焼土と炭化物の入った小さな中央土坑があり、これを挟んで2.8m間隔で主柱穴P1・P2がある。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-90°-E。P1と西壁、P2と東壁との距離は等しく1.8mである。中央土坑の南、南辺から距離をおいて屋内土坑がある。この上面から石包丁が出土した。床面は北辺から西辺にかけてL字状に、僅か5cmほどながら一段高くなっている。やや貧弱ながらもベッド状遺構としてよいだろう。北東隅を除いてコーナー部分にピットがあるが、これらも補助柱穴と捉えてよいかもしれない。また、南辺の中央と西隅寄りに外向きのピットがあり、これらも上屋に関連する柱穴かもしれない。西辺北側に幅75cm、長さ25cmの突出した部分があるのは出入口部であろうか。細い壁小溝がとぎれとぎれながらも巡らされている。この住居も焼失住居であって量は多くないが床面に炭化材が検出された。南辺西寄りの壁下に石包丁が出土し、弥生土器のほかに押型文土器片もあった。

出土遺物（図版45・55、第28・29・119図）

土器（第28・2図1～20）　1・2は壺で、1は完形に近い。口径9.4cm、胴径11.2cm、器高11.6cm。2は外面丹塗の広口壺。3は鉢としておくが高坏の坏部の可能性もある。丹塗磨研。4は高坏の坏部で口径24.8cm。丹塗磨研。5は器台であろうか。これも丹塗磨研。6～17は甕で、口縁形態は6を除いてくの字形をなす。ほとんどが口縁部まで煤が付着する。11の外底部には籾圧痕がある。13は甑とする。18は支脚、19・20は器台で19の口径14cm、裾径12.8cm、器高19.5cm。

石製品（第119図3・4）　ともに小豆色の凝灰岩製石包丁である。3は屋内土坑上面出土で、長さ102㎜、幅45.8㎜、厚さ8㎜、孔間18.5㎜、孔の外径12.5㎜、内径4.1㎜、背孔間14㎜、重さ45.6g。研ぎ直しが著しい。擦過痕は図に示すほどには目立たない。刃こぼれがある。4は床面出土で、現存長89㎜、幅48.6㎜、厚さ6.7㎜、孔間25㎜、孔の外径9.1㎜、内径3.3～4㎜、背孔間14㎜、重さ40.9g。擦過痕が著しい。

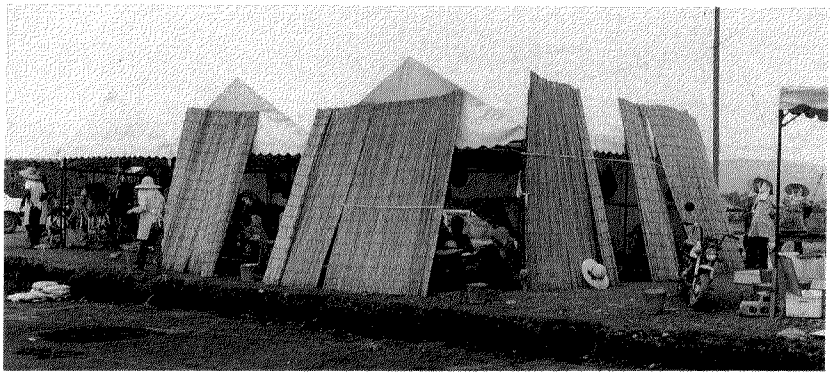
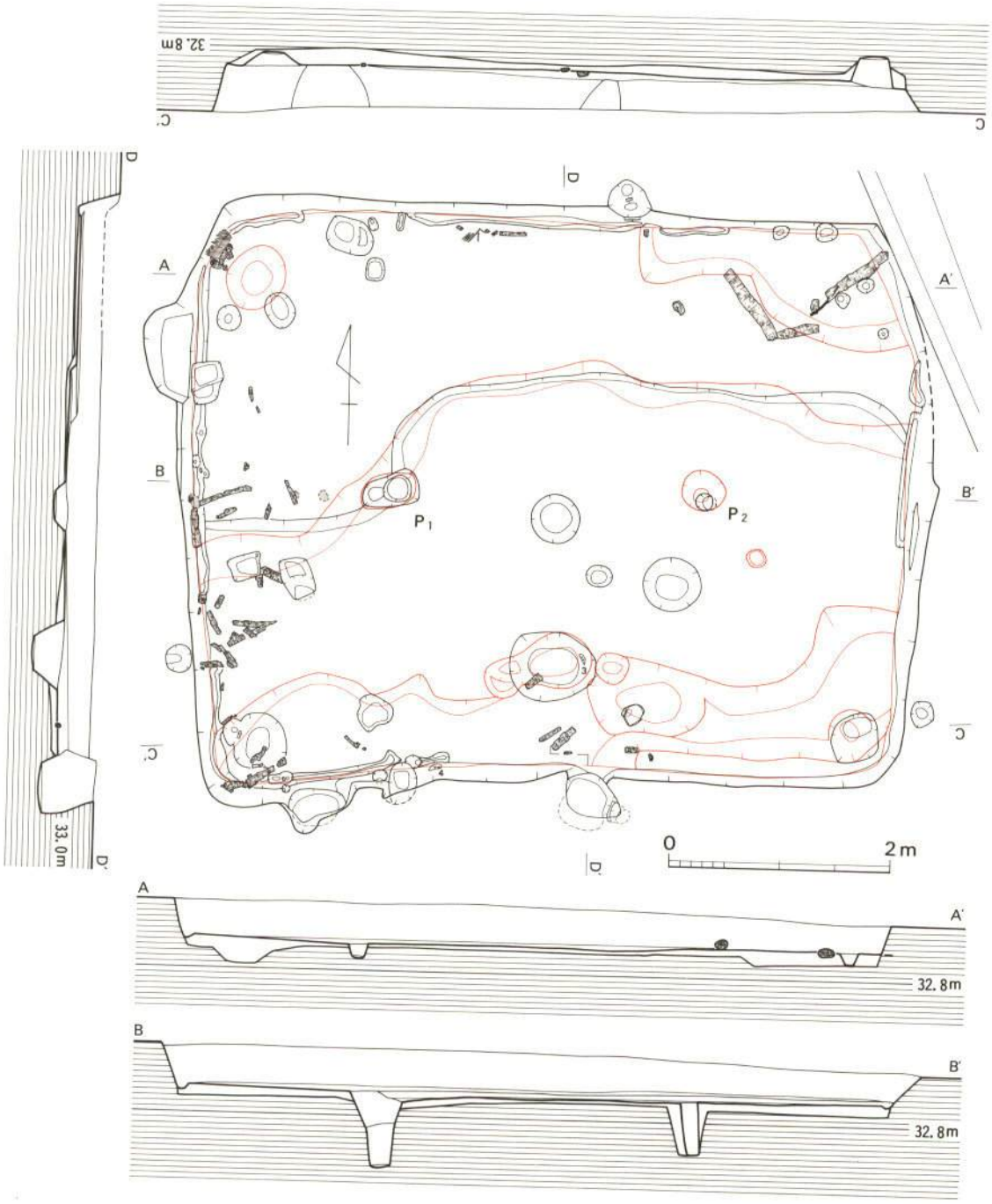
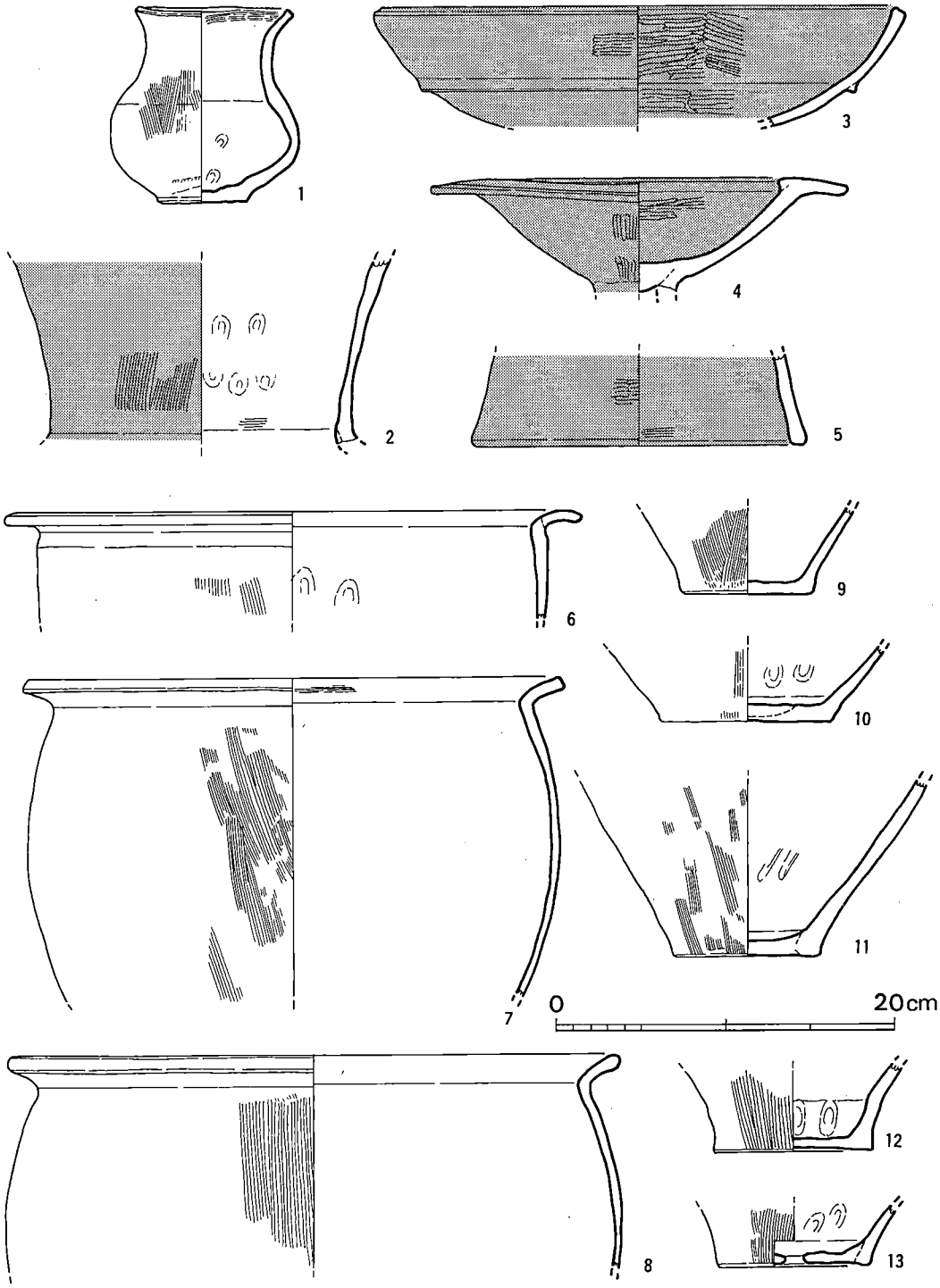


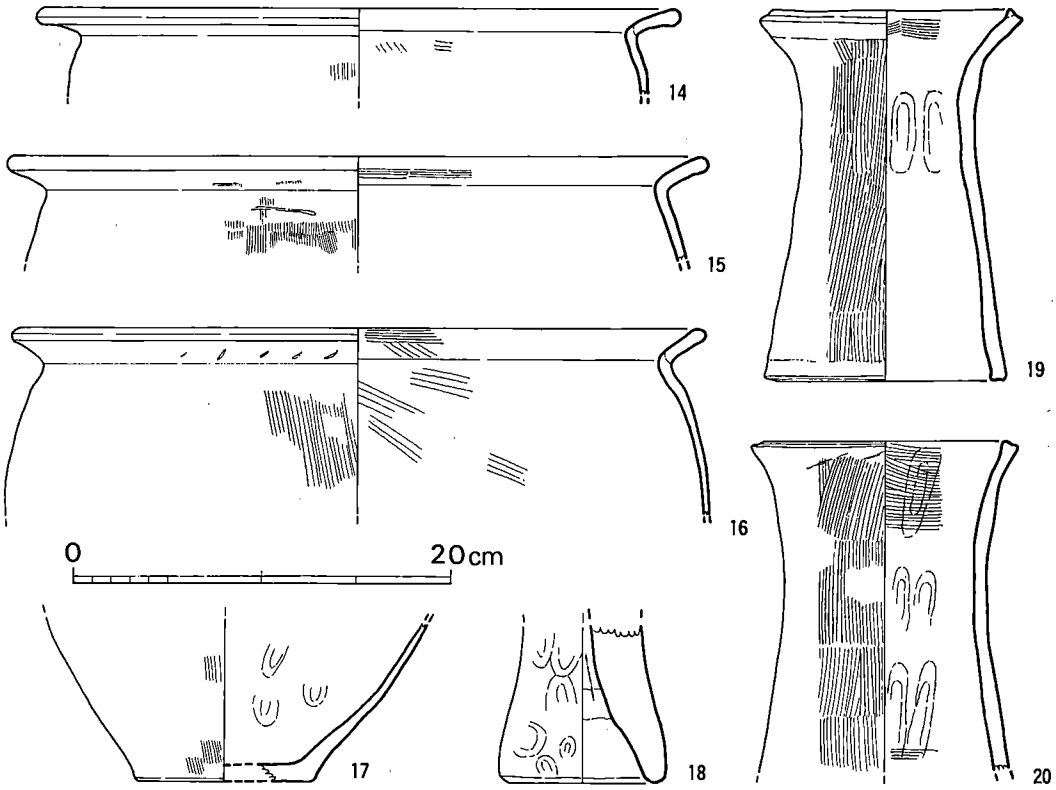
Photo. 1　発掘拠点



第27図　中道３号住居跡実測図（1/60）



第28図　中道３号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第29図　中道３号住居跡出土土器実測図２（1/4）

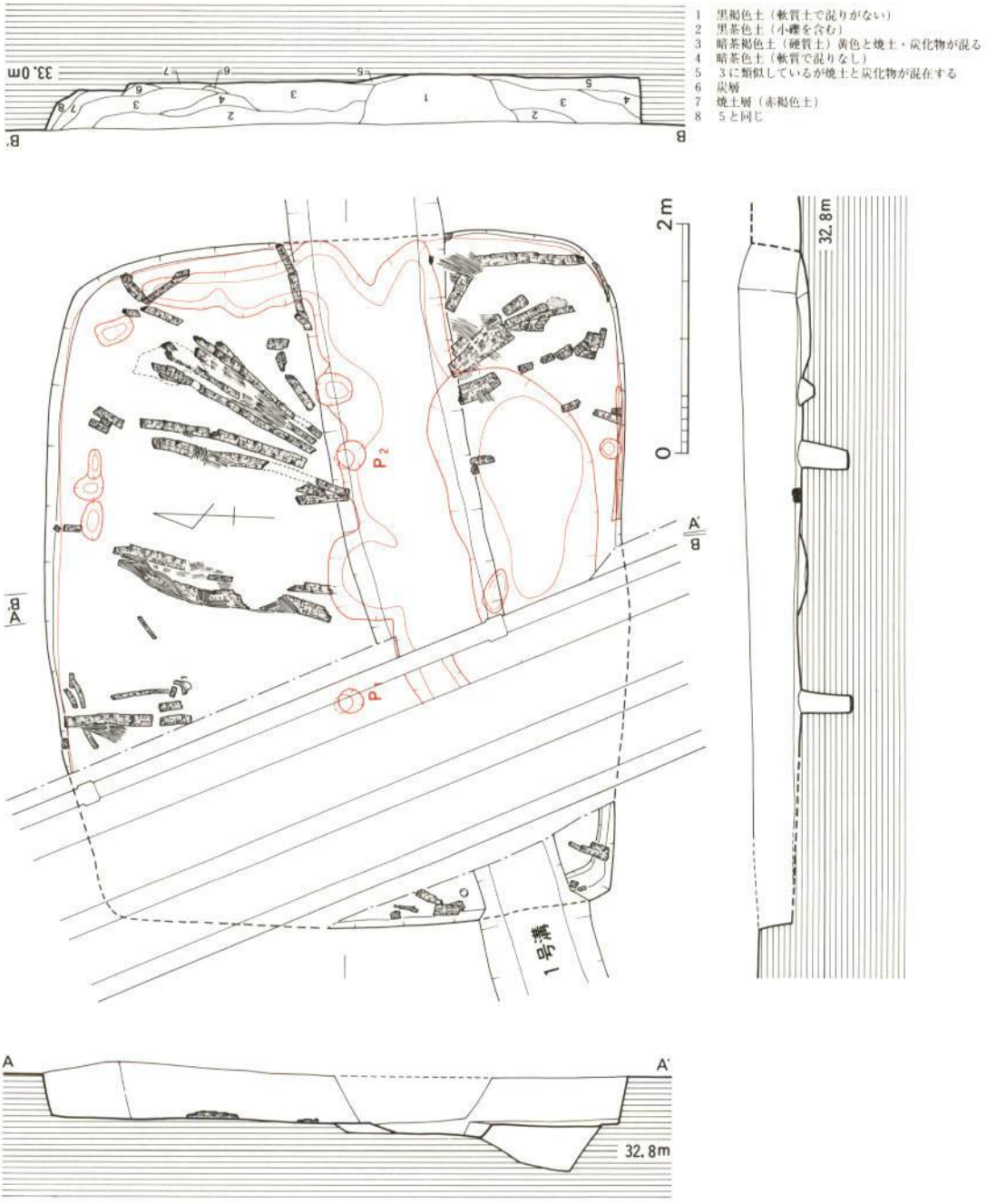
４号住居跡（図版12、第30図）

３号住居跡の北にあり、一部が県道の舗装の下に隠れてその側溝によって破壊され、また１号溝によっても切られているが、全形を窺うことはできる。埋土は茶褐色土であった。南北5ｍ、東西6ｍの長方形プランで、復原の床面積は28㎡。床面中央のやや南寄りに径80㎝ほどで若干の焼土・炭化物の入った中央土坑があり、これを挟んで2.1ｍ間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-88°-E。Ｐ１と西壁、Ｐ２と東壁の間は等しく1.9ｍを測る。中央土坑の南に大きめの屋内土坑があり、台石の下から投弾２個が出土した。南辺の一部に細い壁小溝が巡らされている。この住居も焼失住居であり、多量の炭化材がＰ１・Ｐ２を結ぶ棟の方向を向いて検出された。これら垂木材には萱らしき植物質のものが巻いてあった。床面にて投弾・軽石などが出土している。

この住居から検出された炭化材の一部をＣ14年代測定にかけたところ、2020±75B.P.の年代が得られている。

出土遺物（図版45・55・56、第31・117図）

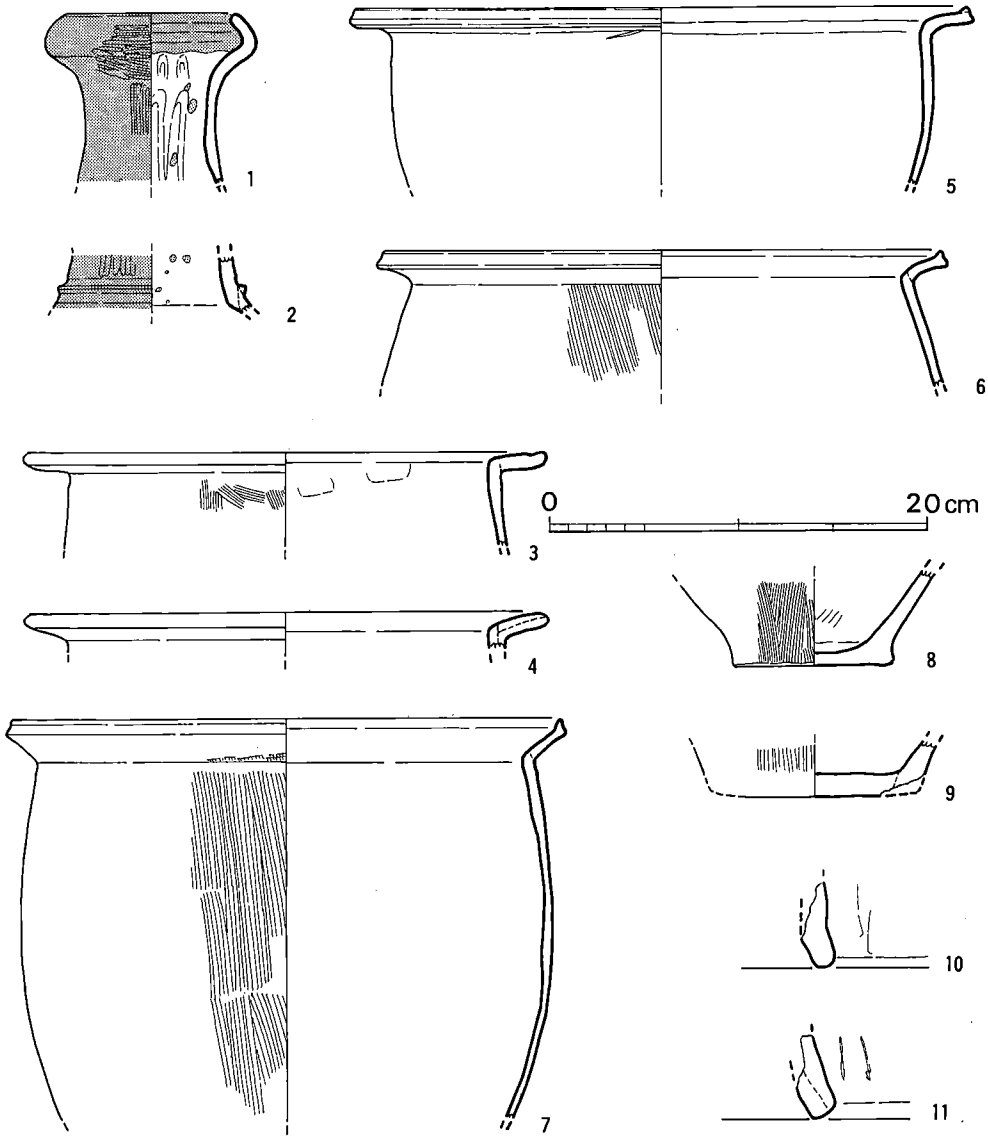
土器（第31図1～11）　1・2は長頸壺でともに丹塗磨研である。1は袋状口縁をなし、内外の一



第30図　中道４号住居跡実測図（1/60）

部に膠状の黒色物が付着している。復原口径9.4cm。2は頸部下端に突帯を貼り付ける。6～9は甕で、5～7は跳上げ口縁となる。7の復原口径29.8cm。10・11は支脚で同一個体かもしれない。器表にも胎土中にも籾痕がある。

土製品（第117図9～11）　投弾形土製品であり、9・10は屋内土坑、11は床面から出土した。9は約1／5を欠失し、現存長36.4mm、径22.4mm、重さ13.3g。10はごく一部を欠失し、長さ41.3mm、径27.8mm、重さ24.7g。11もごく一部を欠失し、長さ44.4mm、径25.3mm、重さ20.4g。



第31図　中道4号住居跡出土土器実測図（1/4）

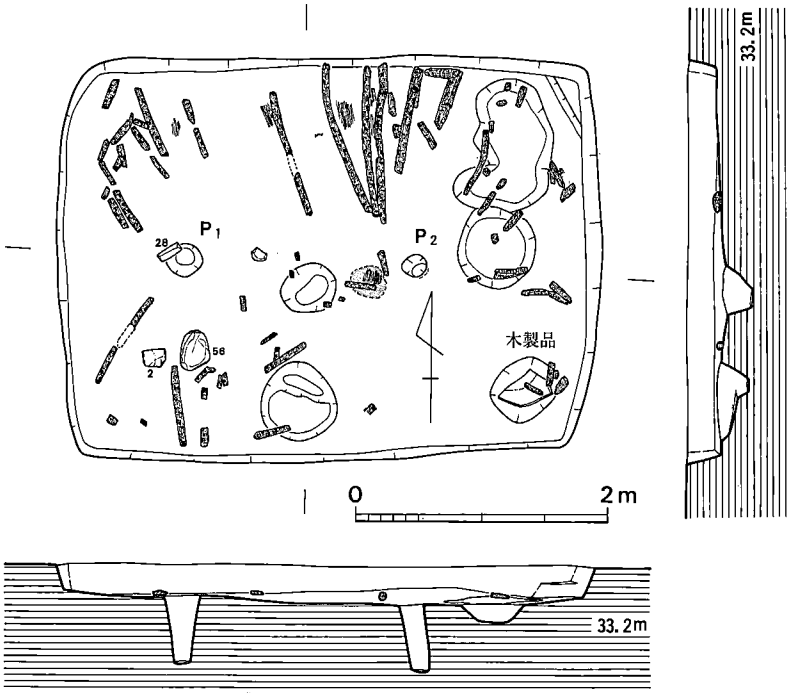
5号住居跡（図版13、第32・33図）

4号住居跡の北、県道より東側にあるあまり大きくない住居である。南北3.2m、東西4.3mの長方形プランで、床面積は11.88㎡。床面中央のやや南寄りに径40～45cmで若干の焼土・炭化物の入った中央土坑があり、これを挟んで1.9m間隔で主柱穴（P1・P2）がある。P1と西壁間は1.4m、P2と東壁間は1.3mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-87°-W。中央土坑の南に南辺と接することなく屋内土坑があり、石包丁が出土した。壁小溝は巡らされていない。北東隅に段が付くのはここが出入口であろうか。南東隅近くに径83～102cmで深さ35cmの小土坑があり、その中に鉢あるいは盤状になる木製品があったが、取り上げに失敗した。これも焼失住居であり、多量の炭化材がP1・P2を結ぶ棟の方向を向いて検出された。これら垂木材の間には萱らしき植物質のものもあった。中央土坑の東と北辺近くにて投弾が床面より5cmほど浮いて出土し、床面に砥石・台石などがあった。

この住居から検出された炭化材の一部をC14年代測定にかけたところ、2230±75B.P.の年代が得られている。

出土遺物（図版55・56、第34・117・119・120・123図）

土器（第34図1～4）　1・2は鉢で、2は甕に近いが鉢とする。丹塗磨研で復原口径26.6cm。3の甕

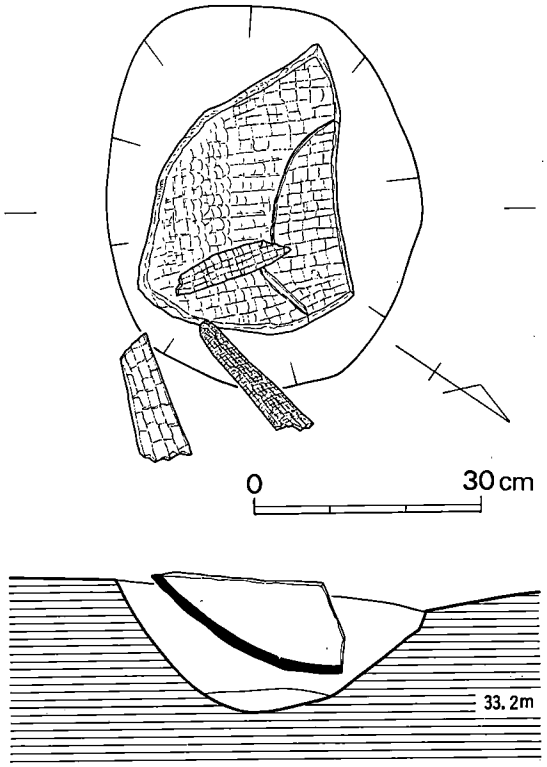


第32図　中道5号住居跡実測図（1/60）

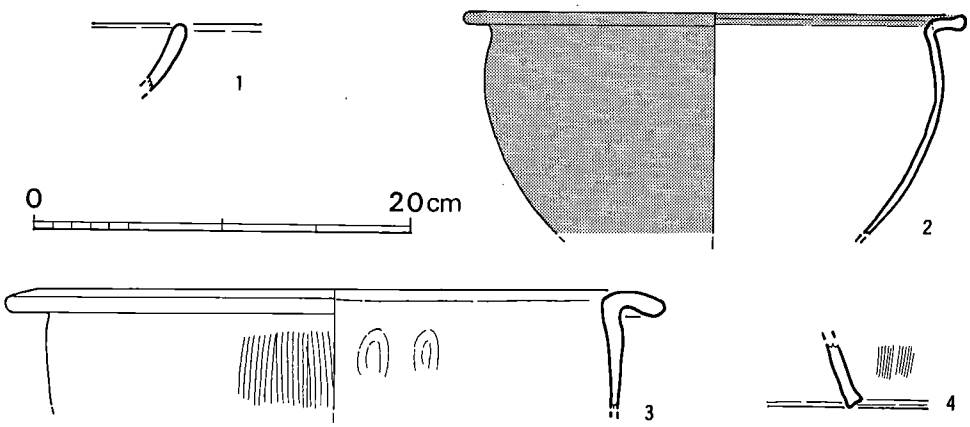
は口縁端が垂れ下がる。4は器台片。

土製品（第117図12・13）　投弾形土製品であり、12はごく一部を欠失するが、長さ39.5㎜、径26㎜、重さ19.2g。13は完形で、長さ41.7㎜、径26.2㎜、重さ19.1g。

石製品（第119・120・123図5・28・56）　5は小豆色の凝灰岩製石包丁で研ぎ直しによってかなり小さくなっている。長さ95㎜、幅42.7㎜、厚さ8㎜、孔間26㎜、孔の外径10.5㎜、内径4.2～4.6㎜、背孔間12.5～14㎜、重さ39g。所々に原材の白い脈が見える。28は片岩の粗砥で、全長19.6㎝。側面に穿孔に関わるような擦り切りがある。56は玄武岩質の全長29.7㎝の作業台石である。使用面に敲打痕がある。



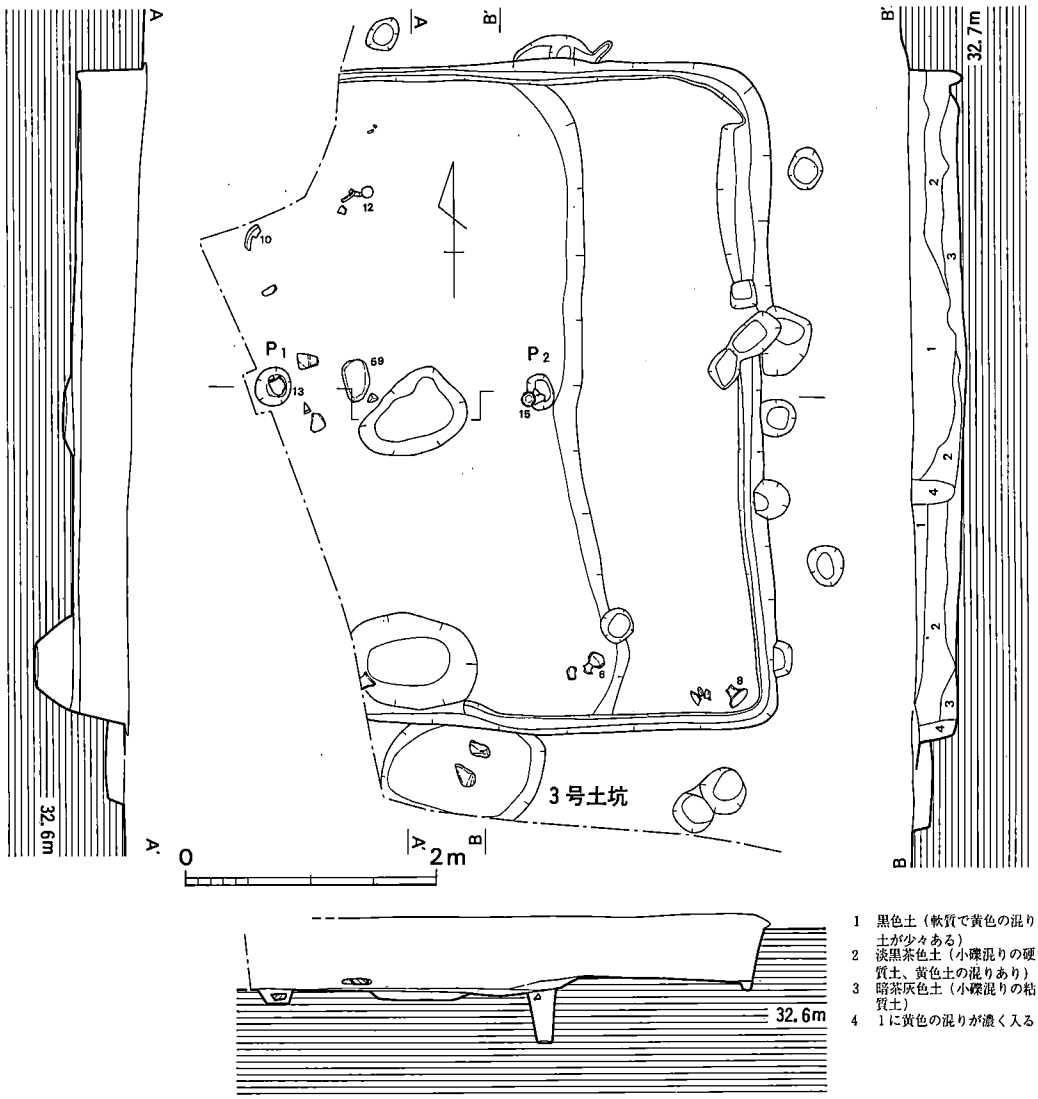
第33図　中道５号住居跡内木製品出土状態実測図（1/10）



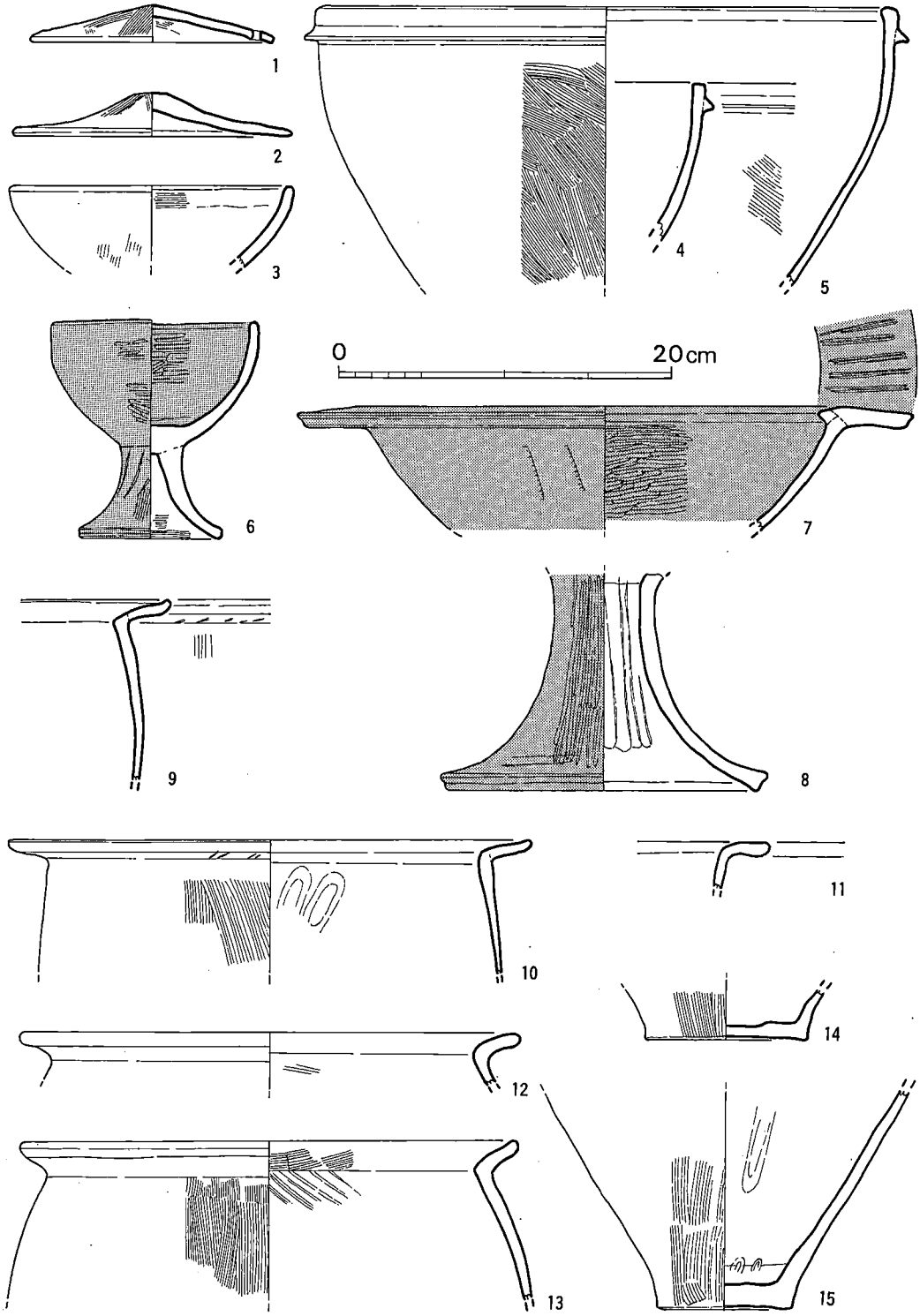
第34図　中道５号住居跡出土土器実測図（1/4）

6号住居跡（図版14、第35図）

2号住居跡の東方にあり、その西側半分が県道によって削平されていた。南北は5.2mで、東西は4.5mまでわかるが、おそらく東西6m前後の長方形プランであったろう。現況の床面積は18.64m²。床面中央のやや南寄りに焼けた痕跡のない中央土坑があり、これを挟んで2.1m間隔で主柱穴（P1・P2）がある。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-89°-W。中央土坑の南、南辺に接する如くに屋内土坑がある。東辺に平行に幅110～150cmで高さ10cmほどのベッド状遺構が削り出されている。細い壁小溝が残存部に全周し、屋内土坑に連結している。床面に散在して土器片



第35図　中道6号住居跡実測図（1/60）



第36図　中道６号住居跡出土土器実測図（1/4）

が出土し、中央土坑の側には台石があった。黒曜石剝片も出土している。埋土上層からは奈良時代の土師器・須恵器が出土している。なお、南辺は３号土坑を切っている。

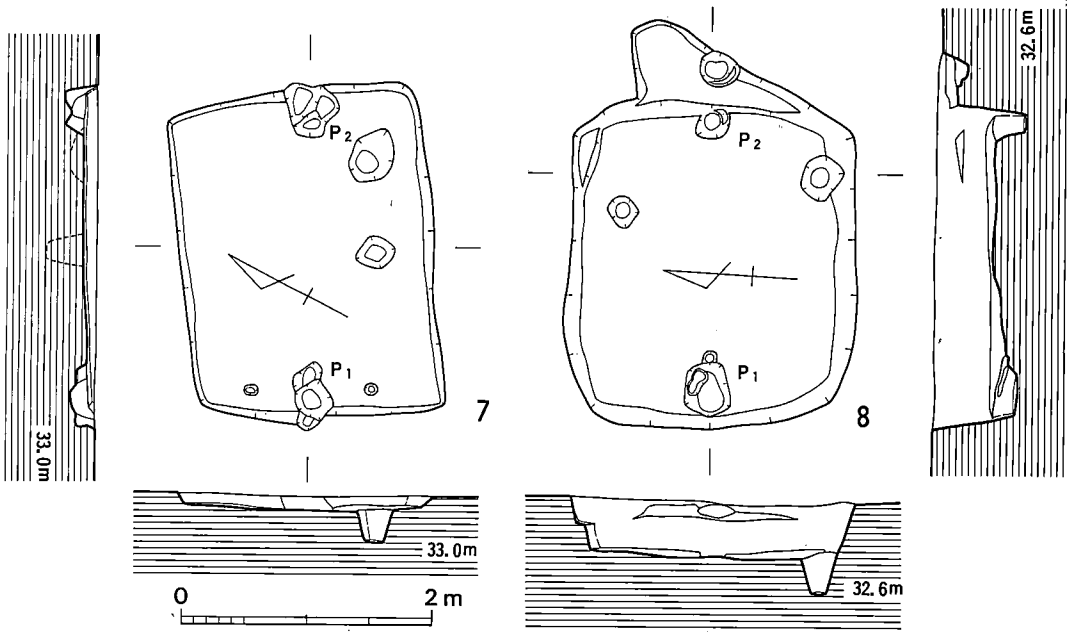
出土遺物（図版45、第36・123図）

土器（第36図1～15） 1・2は蓋で、2は強い二次熱を受けている。口径16.8cm、器高2.6cm。3～5の鉢のうち4と5はよく似るが別個体と思われる。5の復原口径35cm。6は完形に近い脚台付椀で、丹塗磨研である。口径12.5cm、裾径8.6cm、器高13cm。7・8は高坏でともに丹塗磨研。7は口縁上面に暗文を施す。8の裾径18.8cm。9～15は甕で、13の復原口径30cm。

石製品（第123図57～59） 57は片岩のすり石。58は凝灰岩質の台石で上面はよく擦れている。59は全長36cmの台石。

７号住居跡（図版14、第37図）

６号住居跡の北方にある小型の浅い住居である。埋土は黒色土であった。2×2.6mほどの長方形プランで、床面積は4.63㎡。短辺である東西両辺の中ほどに壁を切り込んであまり深くない柱穴があり、この心心間2.4mを測るＰ１・Ｐ２が主柱穴であろう。主軸方位はN-63°-E。Ｐ１の南北に径10cm前後で深さ7cmほどの小ピットがあるのは、その位置関係からみてＰ１に付随するものと捉えられよう。甕１個の破片5が出土したが図示に耐えない。なお住居中央の南側にあるピットは上層から掘り込まれた新しいものである。



第37図 中道７・８号住居跡実測図（1/60）

8号住居跡（図版14、第37図）

6号住居跡の東方にある小型の住居である。2.2×2.6mほどの隅円長方形プランで、床面積は4.45㎡。東西両短辺の中央壁下床面にあるＰ１・Ｐ２が主柱穴であろう。その心心間は2.2mを測る。主軸方位はN-87°-E。Ｐ２の周辺には焼土が多く検出されたので焼失住居としてよいだろうが、炭化材はほとんど出土していない。東辺の外側が張り出しているのはここが出入口であろうか。出土土器は少ない。

出土遺物（第39・123図）

土器（第39図1～6）　1は無頸壺で丹塗磨研。2は壺の底部。3～5は甕であるが、5はどうみても後期に属するものと捉えられる。6は器台片。

石製品（第123図60）使用痕はないが台石であろうか。凝灰岩質で全長11.6㎝。

9号住居跡（図版15、第38図）

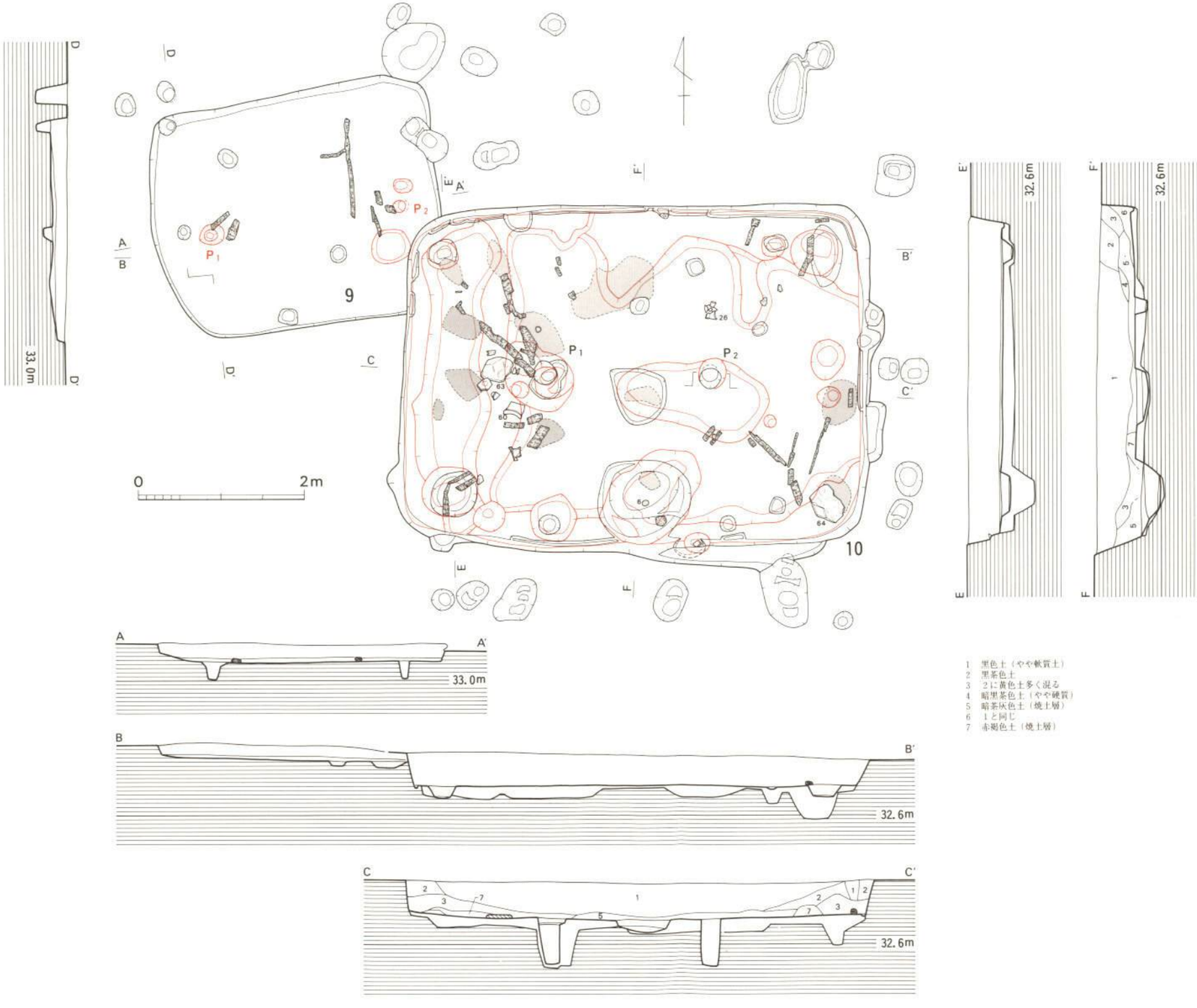
7号住居跡の北東方にあり、10号住居跡に切られた小型の住居である。黒褐色土を埋土としていた。2.8×3.4mほどの長方形プランで、床面積は復原で8.65㎡。心心間が2.35mで深みのあるＰ１・Ｐ２が主柱穴であろう。Ｐ１と西壁間は0.6m、Ｐ２と東壁間は0.4mを測る。主軸方位はN-81°-E。焼失住居で床面には炭化材があった。少量の土器の他に軽石が出土している。

出土遺物（第39図）

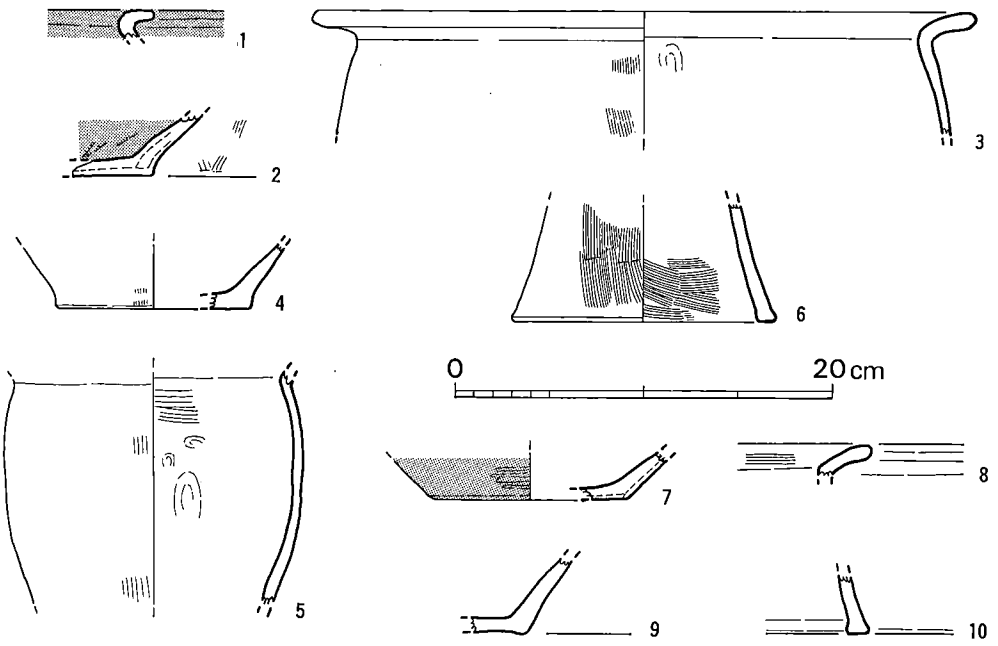
土器（7～10）　7は壺の底部で丹塗磨研。8・9は甕。10は器台片。

10号住居跡（図版15・16、第38図）

9号住居跡を切ってその東南にある。南北4～4.2m、東西5.6mの隅の円くなった長方形プランで、床面積は21.34㎡。床面中央のやや南寄りに若干の焼土と炭化物の入った中央土坑があり、これを挟んで2m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１と西壁間は1.7m、Ｐ２と東壁間は1.75mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-90°-Eであって真に東西方向をさす。中央土坑の南に、南辺に接して屋内土坑がある。南東隅には台石とした石材（第124図64）があるが、その他の3つのコーナー部にはピットがあり、これは3号住居跡と同じく補助柱穴と捉えてよいかもしれない。南辺東寄りに最大30㎝ほど突出した部分があるのは出入口部であろうか。各壁下にはとぎれとぎれながらも細い壁小溝が巡らされている。この住居も焼失住居であって、量は多くないが床面に炭化材が、Ｐ１・Ｐ２の方を向いて検出された。こうしてみると、この住居跡は3号住居跡と規模の差はあれ非常によく似ていることになる。わりと多くの土器のうち、Ｐ１の西南から出土した大型の甕は13号住居跡の破片と接合し（13-60）、12号住居跡出土の破片（12-4）とも同一個体と思われる。そのほかＰ１の横に台石があり、投弾2個、軽石等も出土した。なお、上層から須恵器・土師器片も出土している。



第38図　中道９・10号住居跡実測図（1/60）



第39図　中道８・９号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物（図版46・55・56、第40・41・117・119・124図）

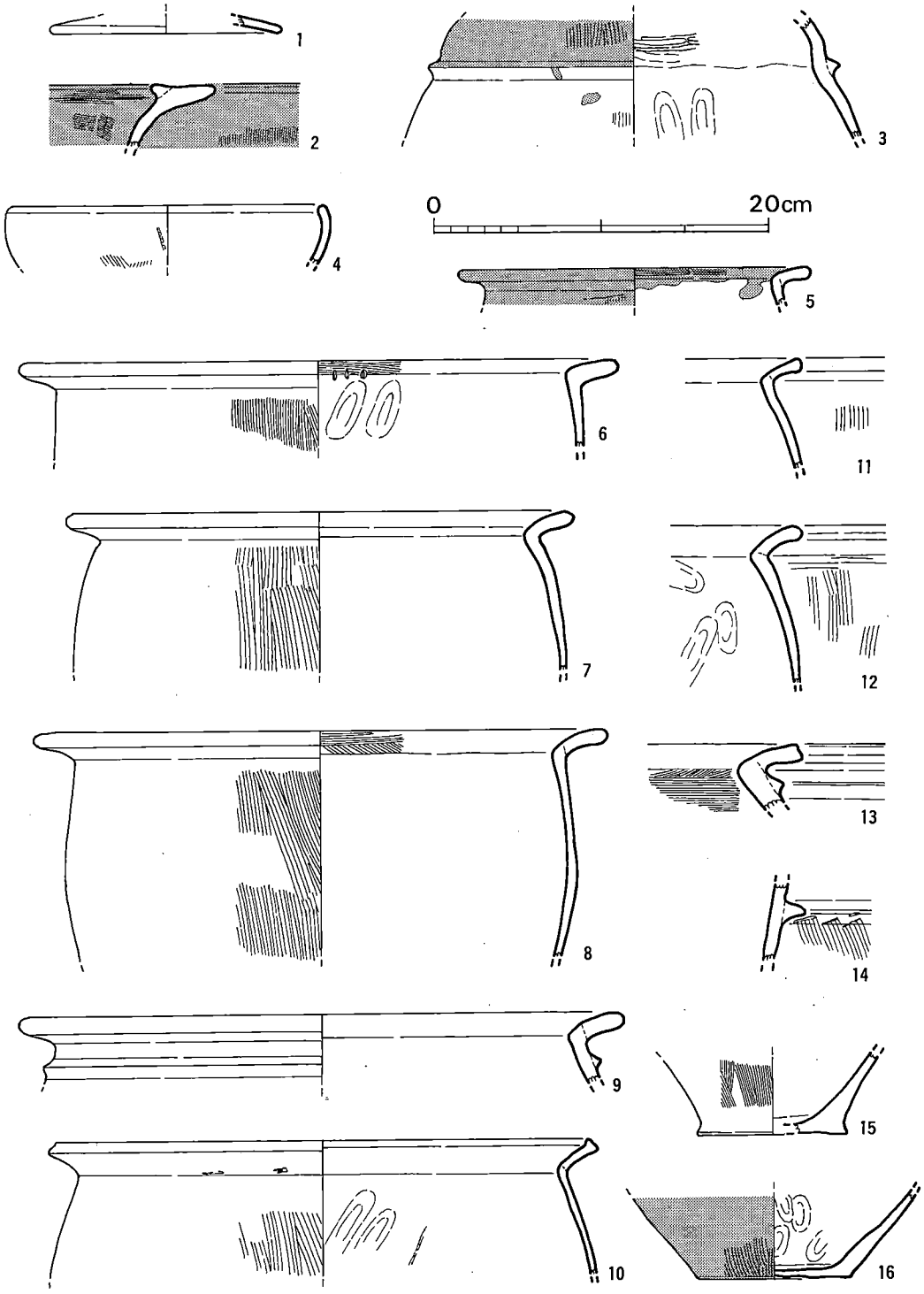
土器（第40・41図1～27）　1は蓋。2・3は壺でともに丹塗りだが、中央土坑から出土した3の瓢形は突帯より上のみ丹塗り。4の鉢は外面に煤が付着する。5～22の甕は5と16が丹塗り、10は跳上げ口縁となる。20の外底部はケズリと称してよい調整である。23～27の器台は25・26は裾が、27は全体が二次熱を受けている。26の口径13.2cm、裾径17cm、器高19.8cm。前述のように、13号住居跡出土の60の一部はこの住居からも出土している。

土製品（第117図14・15）　投弾形土製品であり、14は約半分を欠失し、現存長34mm、径28.1mm、重さ13.8g。破損した断面で見ると、幾つかの粘土の塊を寄せて成形しているようだ。15はごく一部を欠失するのみで、長さ45.1mm、径22mm、重さ14.9g。器表に多数のキズがある。

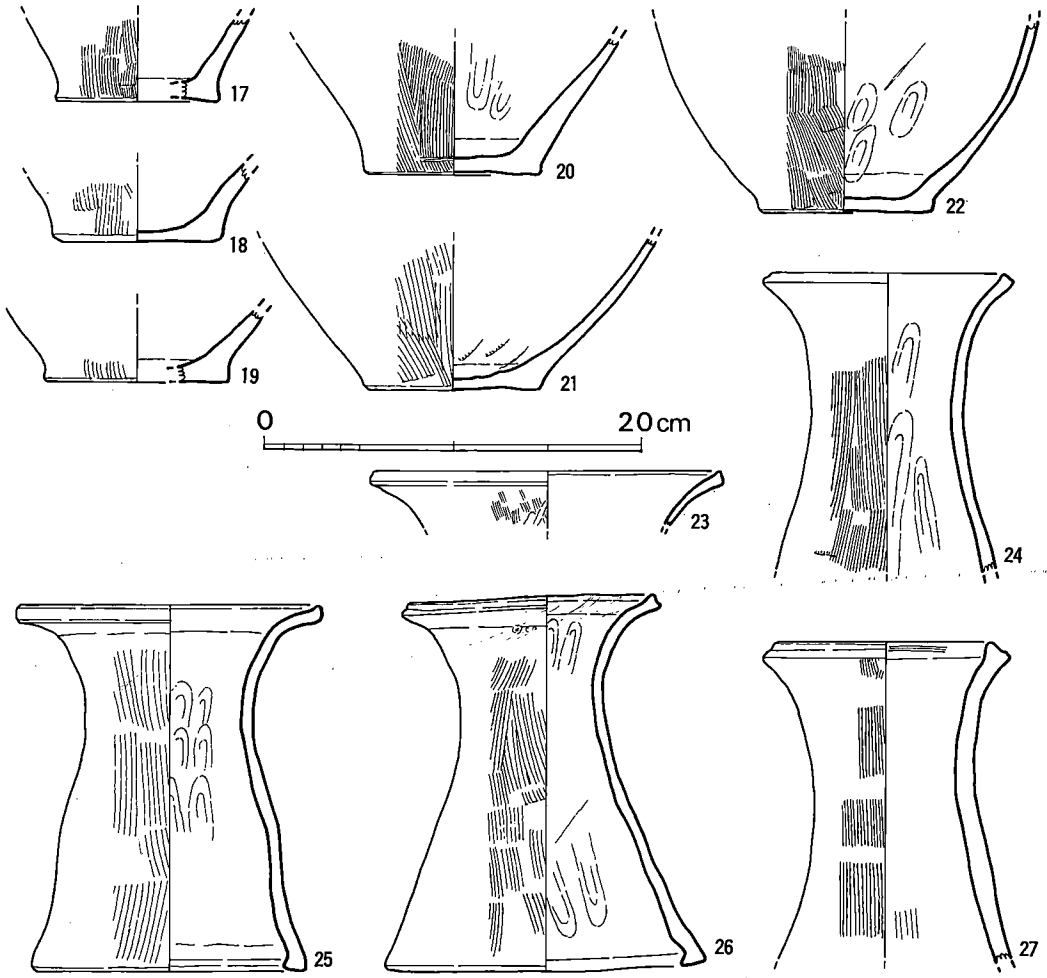
石製品（第119・124図22・61～64）　22は片岩のすり石で側面に敲打痕がある。また先端は刃部状に擦っている。現存長11.6cm。61は片岩、62～64は玄武岩質の台石である。63の表面は敲打痕が多い。全長35cm。

11号住居跡（図版17・18、第42図）

10号住居跡の北東にある。南北3.2m、東西3.8mの長方形プランで、床面積は10.97m²。床面中央のやや南寄りに台石等の入った中央土坑があり、これを挟んで2.15m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ



第40図　中道10号住居跡出土土器実測図１（1/4）

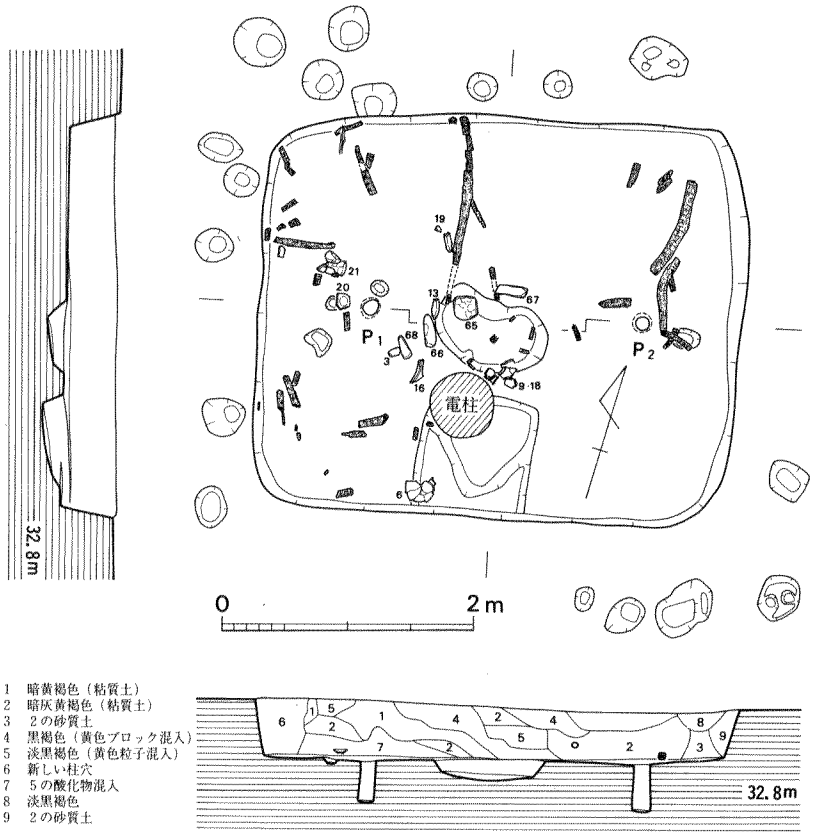


第41図　中道10号住居跡出土土器実測図２（1/4）

２があり、Ｐ１と西壁間は0.8ｍ、Ｐ２と東壁間は0.65ｍを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-76°-Eである。中央土坑の南に、南辺に接して方形の屋内土坑があり、この一部を電柱が切っていた。壁小溝はない。この住居も焼失住居であって床面に炭化材・竹材が検出された。なお、この住居跡の埋土は自然堆積ではなく人為的に埋められた様相を示していた。台石・軽石や押型文土器片もあった。

出土遺物（図版46、第43・44・124図）

土器（第43・44図1～21）　1～3は壺の底部でいずれも丹塗磨研。3の底径5.7cm。4は高坏も丹塗磨研。5の鉢はあまり精良でなないが丹塗磨研である。復原口径20.6cm。6～20は甕で、8の暗文を施した口縁は大きく垂れ下がる。6・7・9・10はＬ字口縁だがその他はくの字形口縁となる。

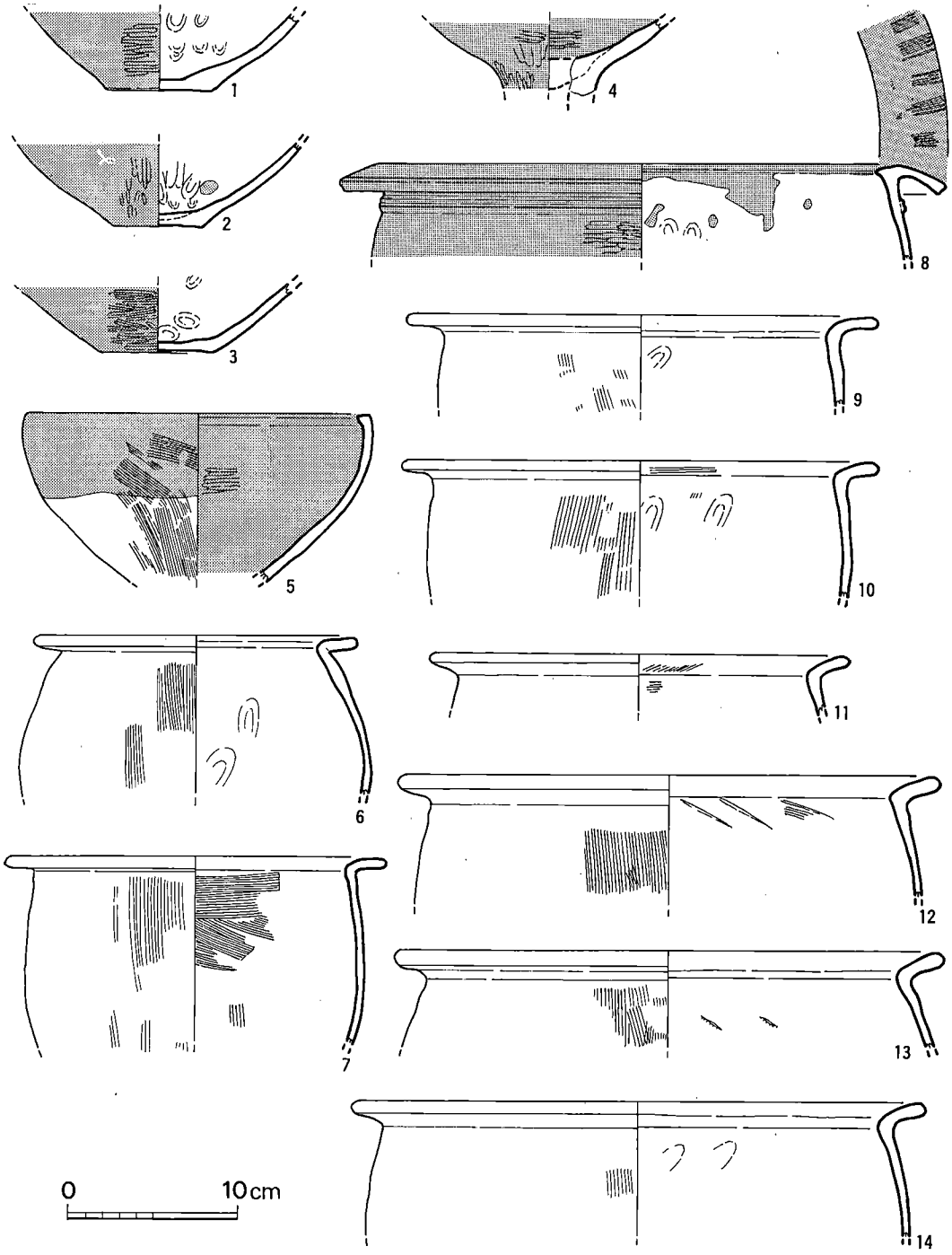


第42図　中道11号住居跡実測図（1/60）

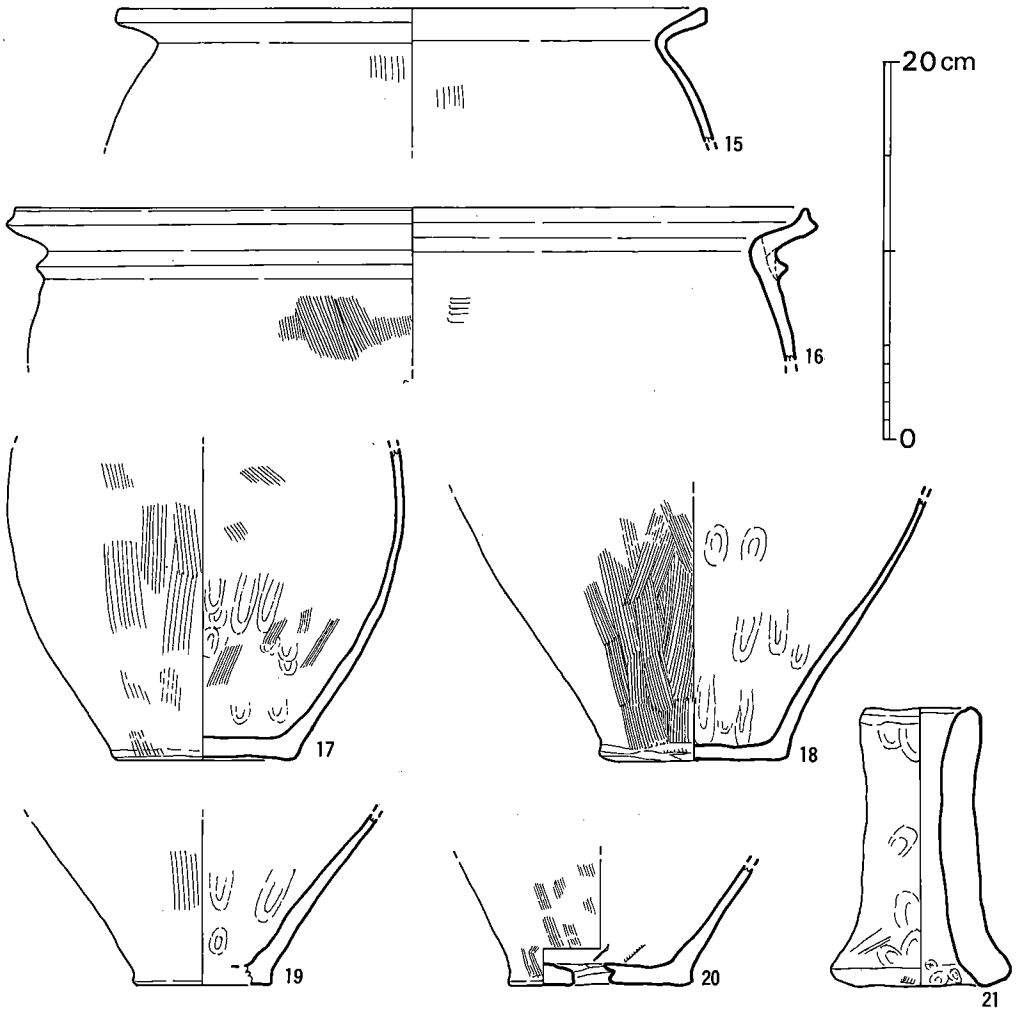
16は跳上げ口縁で復原口径42cm。18の内面には黒ウルシ状のものが付着する。20は甑につくる。21は支脚で器高14.8cm。二次熱を受けている。

石製品（第124図65～68）　65・66は玄武岩質、67は片岩、68は凝灰岩質の台石である。66の全長27.8cm。

Photo. 2　11・13号住居跡付近調査中



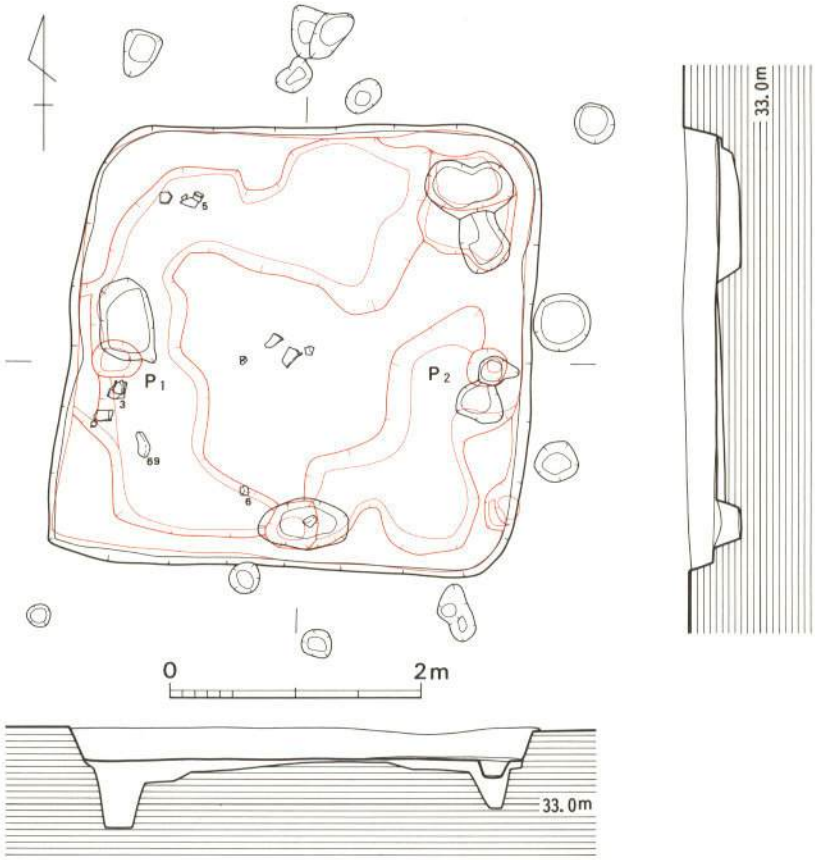
第43図　中道11号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第44図　中道11号住居跡出土土器実測図２（1/4）

12号住居跡（図版18、第45図）

11号住居跡の北東、13号住居跡の北方にある。南北3.5ｍ、東西3.7ｍの方形に近いプランで、床面積は11.80㎡。中央土坑としうるものはなく、東西両辺ともにその中央よりやや南寄りの壁直下にＰ１・Ｐ２の主柱穴があり、その間隔は3ｍを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-89.5°-Wである。南辺の中央やや東寄りの北側床面に楕円形のピットがあり、少し小さいが屋内土坑としてよいだろう。壁小溝はない。床面下層の掘り込みは周壁に沿うがごとくである。遺物の出土量は少ない。



第45図　中道12号住居跡実測図（1/60）

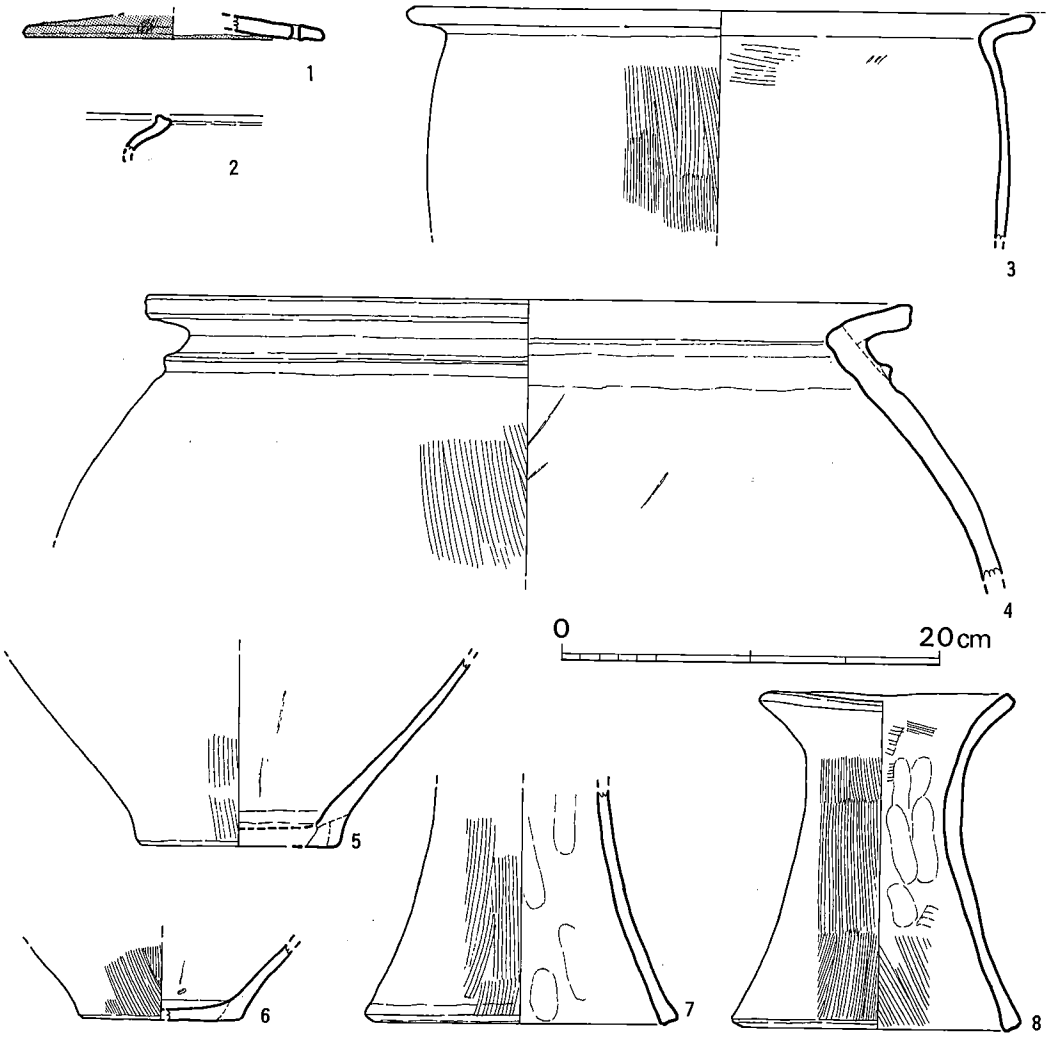
出土遺物（図版46、第46・124図）

土器（第46図1～8）　1は蓋で丹塗り。穿孔は外側からなされている。2～6は甕で、2は跳上げ口縁。4は内面に木の小口痕があることなど10・13号住居跡出土品と同一個体とみられる。復原口径40.5㎝。6は内面の器胎にめり込むように籾圧痕がある。7・8は器台で8の口径13.6㎝、裾径15.4㎝、器高17.8㎝。

石製品（第124図69）　玄武岩質の叩石で全長19.3㎝。側面に敲打痕らしき所がある。

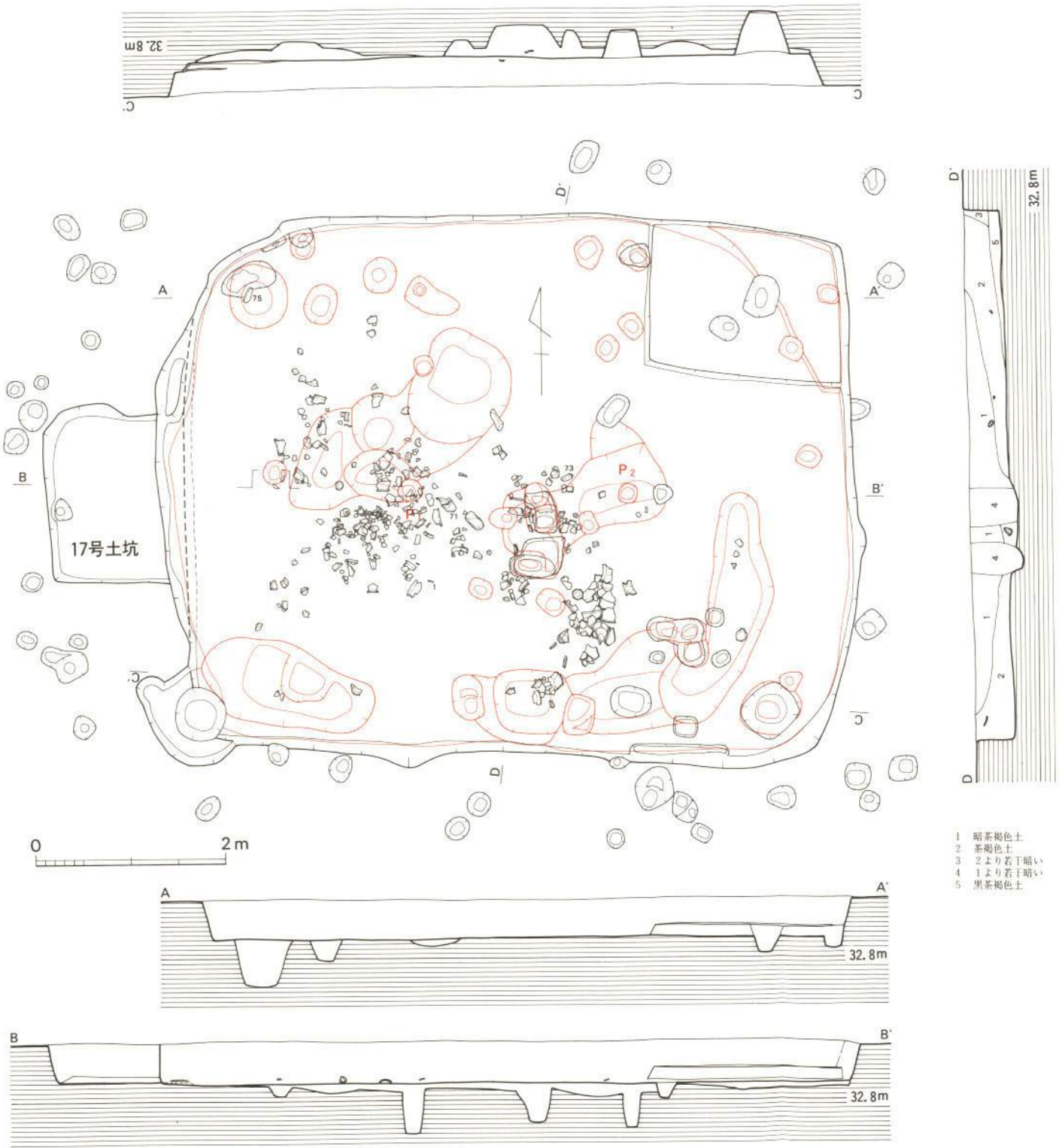
13号住居跡（図版18・19、第47図）

11号住居跡の東にある。西辺が17号土坑を切っている。南北5.7m、東西7.3mの長方形プランで、床面積は23.29㎡。床面中央の南寄りにあまり大きくない中央土坑があり、これを挟んで2.3m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１と西壁、Ｐ２と東壁との距離も同じく2.3mであるから、



第46図　中道12号住居跡出土土器実測図（1/4）

長軸を３等分した所に主柱穴を配置していることになる。主軸方位はN-89°-W。中央土坑の南に、南辺に接して屋内土坑がある。北東隅には幅1.5m、長さ2mで高さ15cmほどのベッド状遺構が貼り付けられている。この住居跡も四隅に大小のピットがあり、３・10号住居跡と同じ補助柱穴と捉えてよいかもしれない。南辺の一部に細い壁小溝がある。この住居は床面置き去りの遺物のほかに、廃絶されてのちにも大量の土器等が投棄されていた。石包丁、紡錘車、砥石、台石、軽石、鉄器などのほかに押型文土器片、黒曜石剝片もあった。



第47図 中道13号住居跡・17号土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版47・55・56、第48～53・119・120・122・124図）

土器（第48～53図1～61） 1・2は蓋とするが、1は高坏の脚裾かもしれない。3～8は壺。3の小壺は前期の所産かもしれない。外面に黒ウルシらしいものが塗られている。4の袋状口縁壺は丹塗磨研。5は復原口径20cm。6の突帯はシャープである。7の無頸壺と8は丹塗り。9～11は高坏で、9の坏部外面は丹塗りが横条線風になされている。12～15の鉢のうち13・14は丹塗磨研。15の小鉢は口径7.4cm。16は壺か甕か不明。17～44・60・61の甕は口縁がL字形、くの字形があり、後者には跳上げもある。22は薄手のつくりで丹塗磨研。胴部突帯の上に穿孔がある。口径30.4cm。27・32も薄手のつくりである。33は口径と胴部最大径が同じ32.3cmを測る。34は内外に小さな丹の雫が落ちている。口径16.1cm、底径6.5cm、胴部径18.5cm、器高12.7cm。35・42の口縁部はやや特異な形状とすべきか。41の口縁内面には一部に丹を塗ったあとがある。60は10号住居跡の出土品と接合し、12号住居跡出土品と同一個体と思われる。復原口径40.3cmで、内面に木の小口痕がある。61は60の胴部と思われるが刷毛目原体は異なっている。底部45～54のうち45は壺であろう。48の外底部には籾圧痕が2つある。52の外底部はケズリと称してよい擦過が施される。55は器台。56～59の支脚は底部に藁のような圧痕がある。

石製品（第119・120・124図6・7・13・14・16・29・70～77） 6は小豆色の凝灰岩製石包丁で表裏ともに石材のもともとの剝離面が多い。現存長106mm、幅40.6mm、厚さ6.7mm、孔間23mm、孔の外径9.1～9.5mm、内径4.8～5.2mm、背孔間13mm、重さ42.1g。床面出土。7も小豆色の凝灰岩で、石包丁の破片とみられる。13は灰緑色の片岩製円盤である。表裏ともに滑らかだが明瞭な

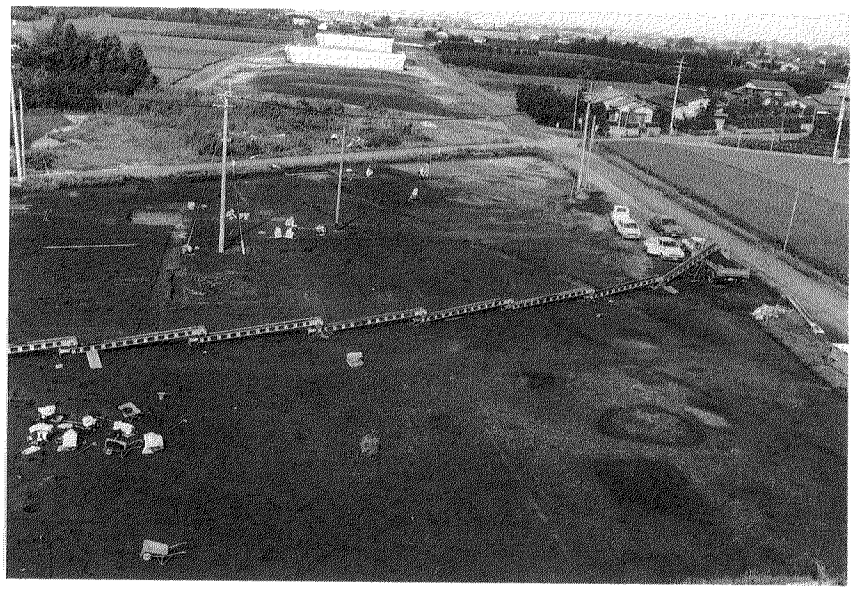
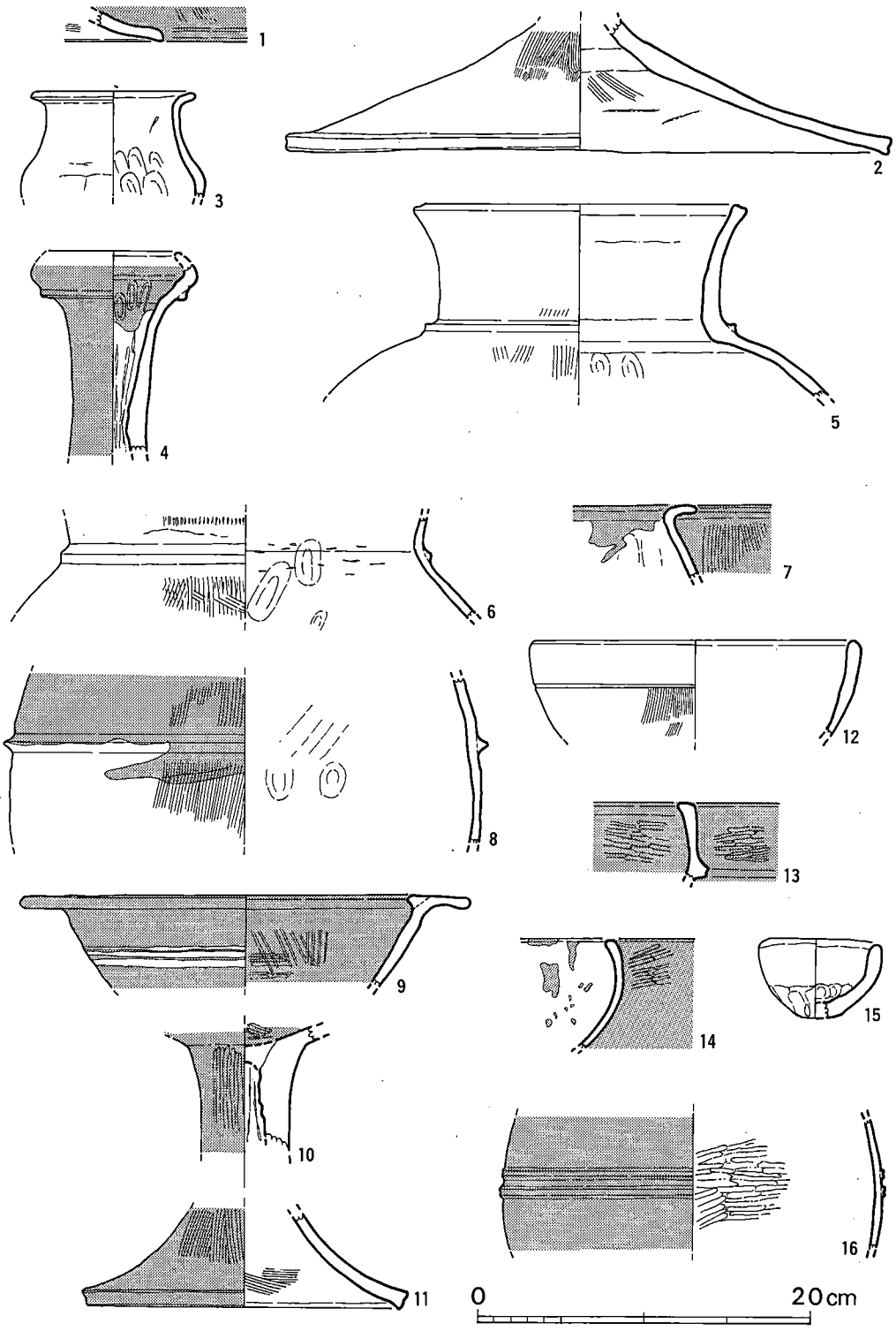
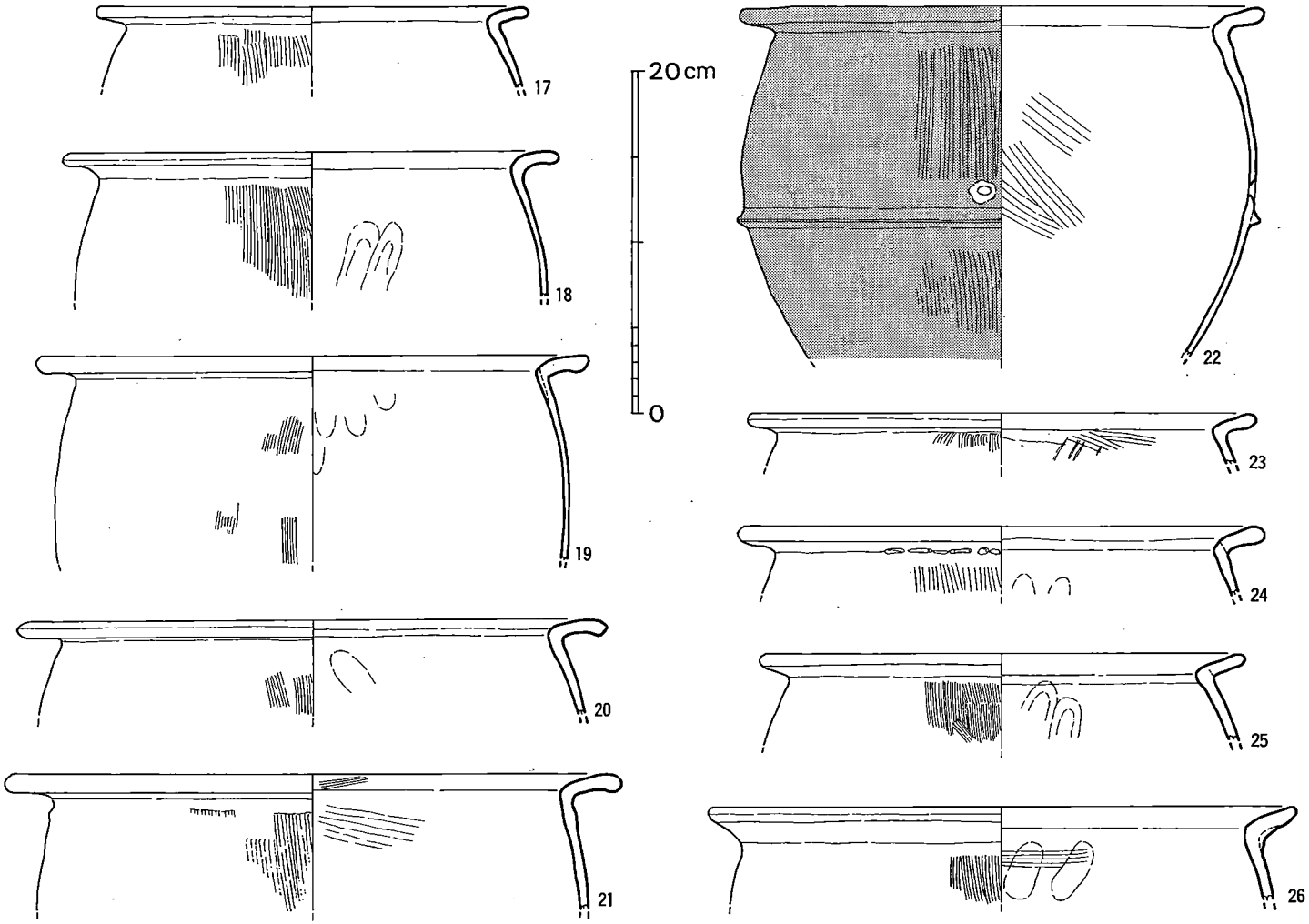


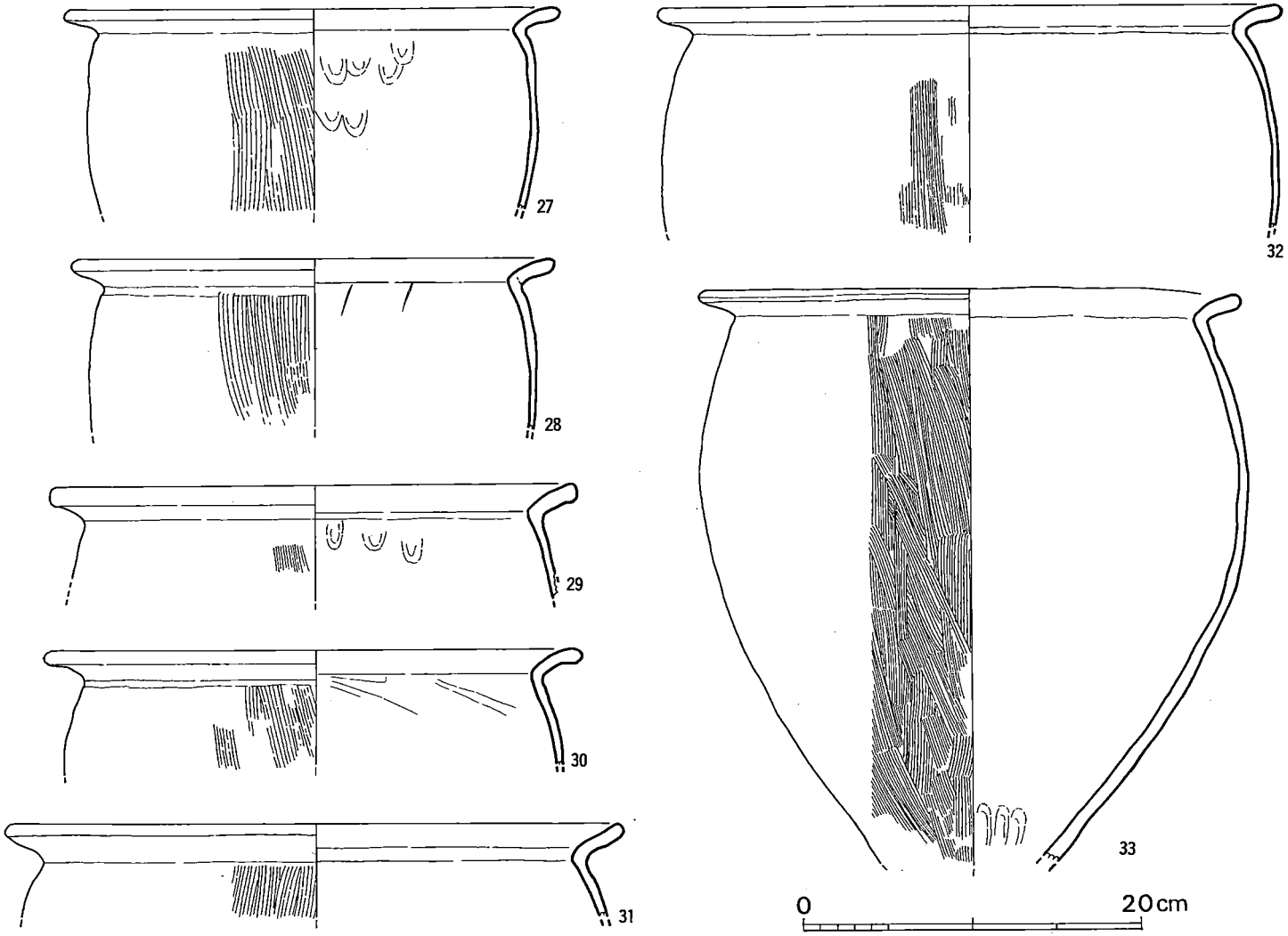
Photo. 3　20地点から19地点を望む



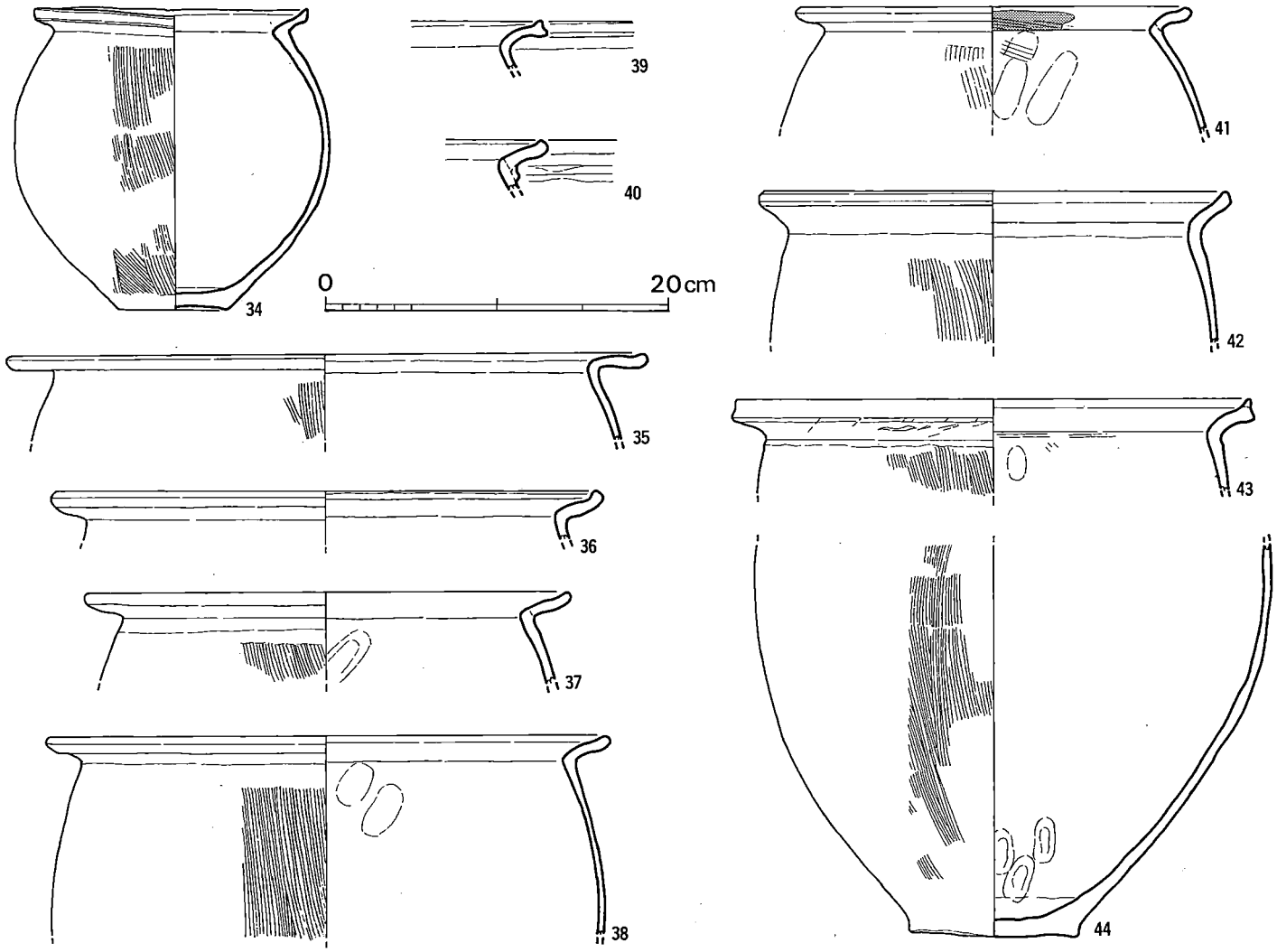
第48図　中道13号住居跡出土土器実測図１（1/4）



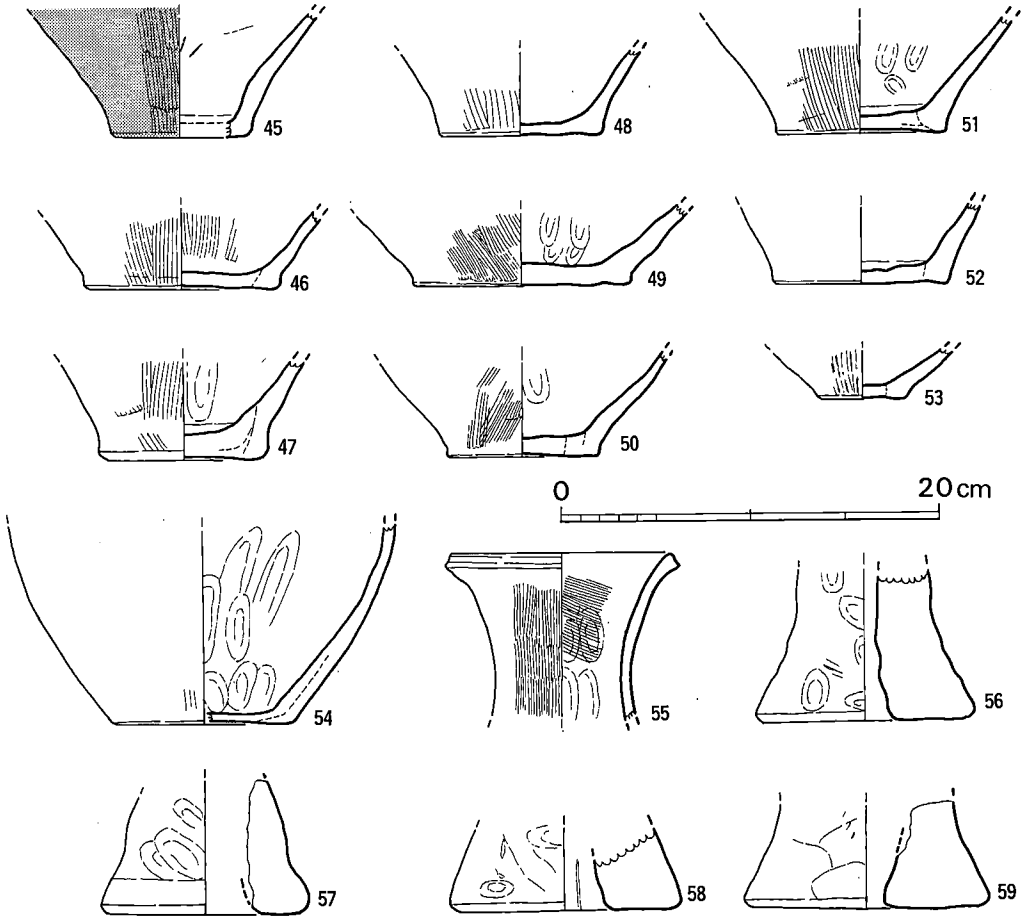
第49図　中道13号住居跡出土土器実測図２（1/4）



第50図　中道13号住居跡出土土器実測図３（1/4）



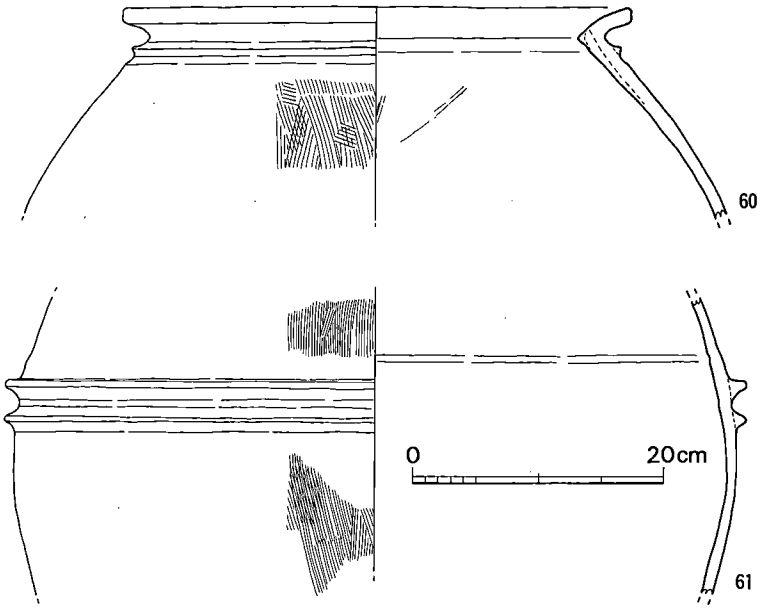
第51図　中道13号住居跡出土土器実測図４（1/4）



第52図　中道13号住居跡出土土器実測図５（1/4）

擦過痕は見えない。周縁は擦って面取りしている。中央に穿孔しかけの窪みがあるが貫通せず、縁に近く径4.3㎜の孔が穿たれ、この孔と縁との間には紐ずれの痕跡がある。これと中央の穿けかけの孔の穿孔具は同じものである。垂飾品ではあっても紡錘車にはならない。径47.1～50.5㎜、厚さ4.5㎜、重さ20.6g。上層出土。14は黄灰色蛇紋岩の紡錘車片で、径49㎜、厚さ4㎜、孔径6.7㎜、重さ12.6g。ベッド上出土。16は一見単なる扁平な石英片岩の自然石であるが、周縁が擦れて面取りされている。径32.9～35.6㎜、厚さ8.8㎜、重さ14g。29は片岩の粗砥である。現存長14.5㎝。70～77は75が凝灰岩質で、その他は玄武岩質である。76・77が叩石で他は作業台石であろう。76は器表に条線が刻まれる。

鉄器（第122図1）　床面出土の楔状の鉄製品である。長さ5.1㎝。



第53図　中道13号住居跡出土土器実測図６（1/6）

14号住居跡（図版20・21、第54・55図）

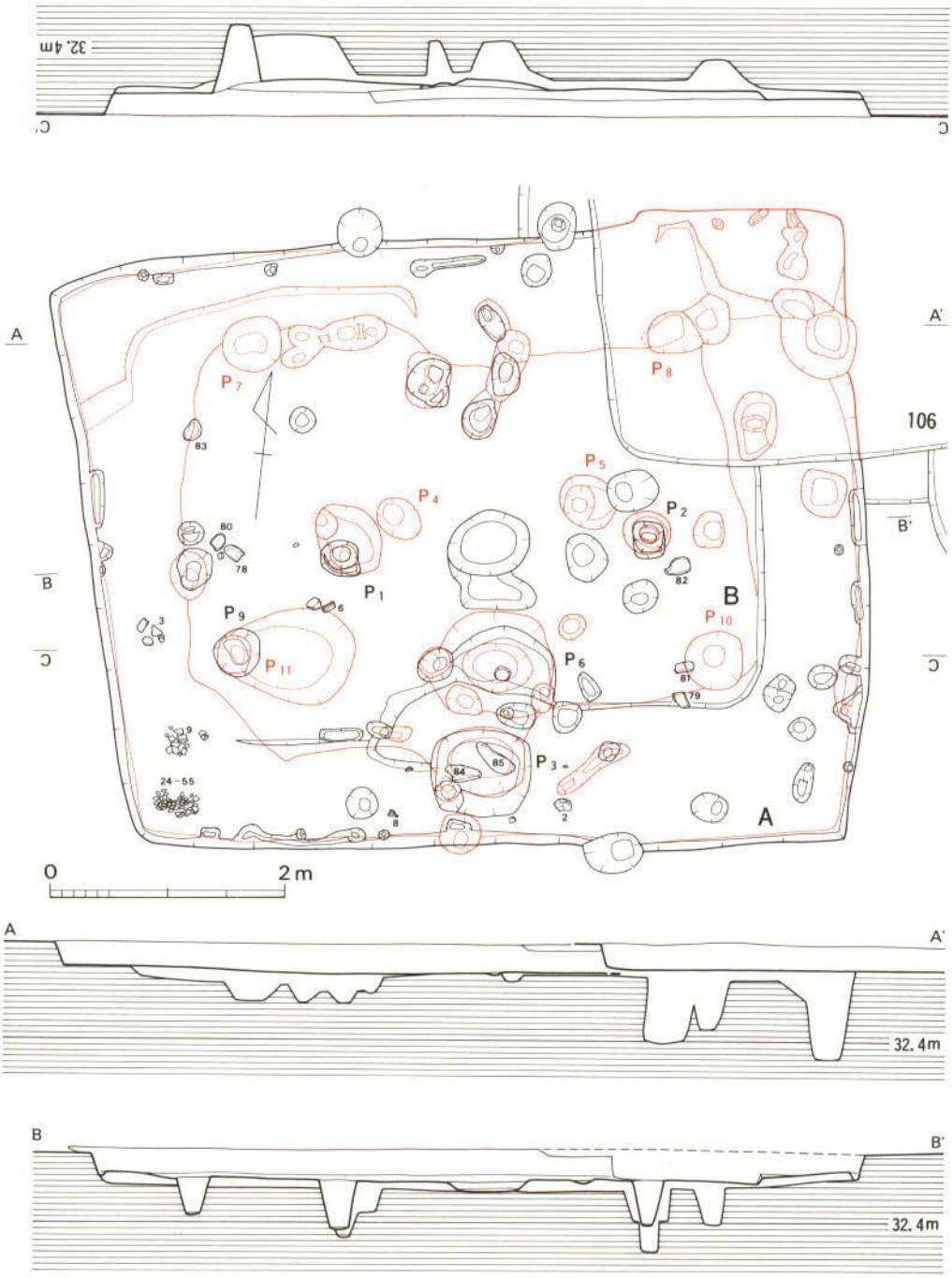
８号住居跡の東方、13号住居跡の南方にあり、東北部の一部を106号住居跡に切られていた。南北5.1ｍ、東西6.6ｍの長方形プランであるが、これは古い住居（14Ｂ）を拡張もしくは建直した結果としての規模になる。新しい方を14Ａとするが、調査段階では東辺と南辺に平行に80～115cmの幅で検出された若干の高まりをベッド状遺構の可能性もあるものとしていたため２軒に分けてはいなかった。

14Ａ号住居跡

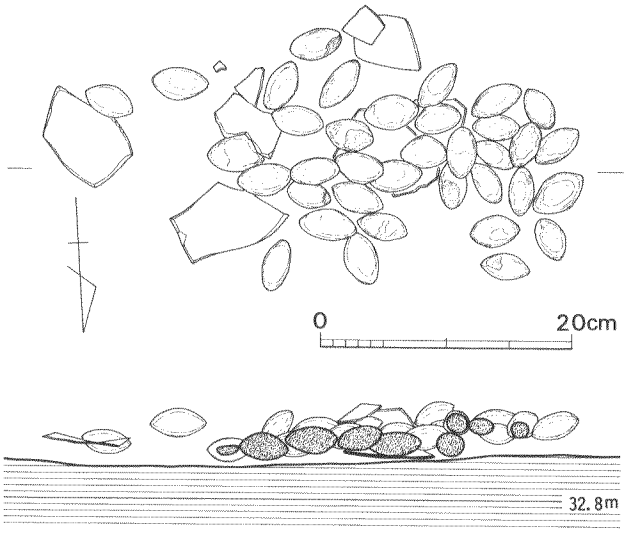
106号住居跡に切られた部分をも復原して床面積は32.1㎡となる。床面中央のやや南寄りに径55～70cmの楕円形プランをした中央土坑があり、これを挟んで2.6ｍ間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。主柱穴を結ぶ主軸方位はＮ-80°-Ｅ。Ｐ１と西壁、Ｐ２と東壁との距離は等しく1.8ｍである。中央土坑の南、南辺から少しの距離をおいて屋内土坑Ｐ３がある。この中には作業台石２個が入っていた。東辺と南辺に平行するＬ字形のラインは前述のように14Ｂの壁の名残りである。細い壁小溝と小ピットが壁下の所々に見られる。南西隅にて投弾36個がまとまって出土しているが規則的に置かれたような状態ではなかった（第55図）。そのほかに床面から投弾、砥石、台石、押型文土器片、黒曜石剝片が出土している。

14Ｂ号住居跡

14Ａ号住居跡にすっぽり取り込まれるようにして存する。南北3.8ｍ、東西4.9ｍほどの長方



第54図　中道14号住居跡実測図（1/60）



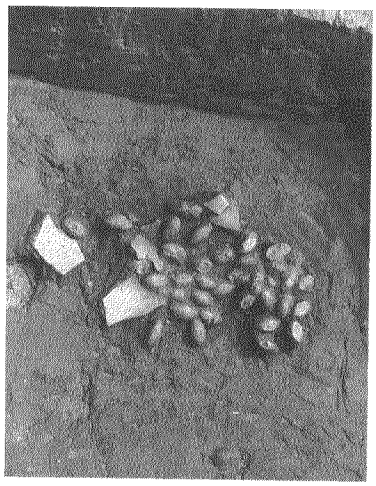


Photo. 4　とうだん

第55図　中道14号住居跡投弾出土状態実測図（1/6）

形プランに復原でき、主柱穴は1.6mの距離を測るＰ４・Ｐ５になろう。その時、各コーナー部分にあるＰ７～10のピットは３・10・13号住居跡におけると同様補助柱穴と捉えてよいだろう。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-81.5°-E。床面積は正確にはわからないが20㎡を越えることはないと思われる。14Ａ号の屋内土坑Ｐ３の北側に屋内土坑Ｐ６がある。また、これの西側にＰ９と一連の土坑Ｐ11があり、砥石が出土している。

出土遺物（図版48・55・56、第56・57・118・120・125図）

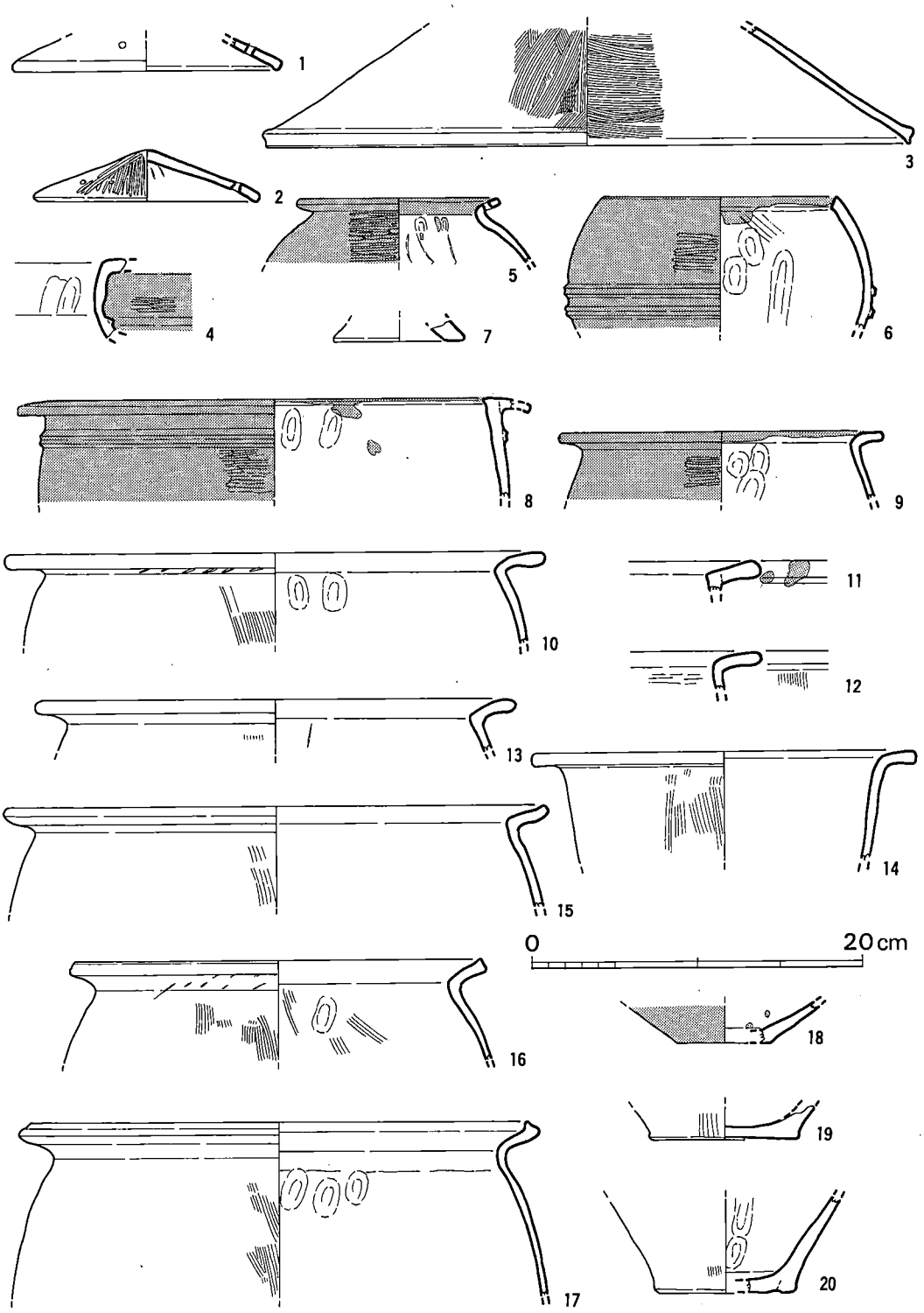
土器（第56・57図1～24）　1～3は蓋で、2は外面のヘラミガキが暗文風となる。口径13.7cm。3はかなり大きく復原口径39cm。4・5は丹塗磨研の壺で5は口縁に孔がある。6の鉢も丹塗磨研で復原口径14.3cm。7は脚台であろうか。8～17は甕で、8・9は丹塗磨研。17は跳上げ口縁となり胴径が口径31.6cmを上回る。18は壺の底部になろう。21は丹塗り磨研の薄手のつくりで甕か。

土製品（第118図24～55）　投弾形土製品であり、24～51は南西隅の一括出土である。52～54も床面出土。55のみ茶色を呈し、他の灰黄色ものと色調が異なる。総体にもろい。長さ34.3～45.7㎜、径21.7～25.5㎜、重さは完形のもので16.1～20.5gを測る。

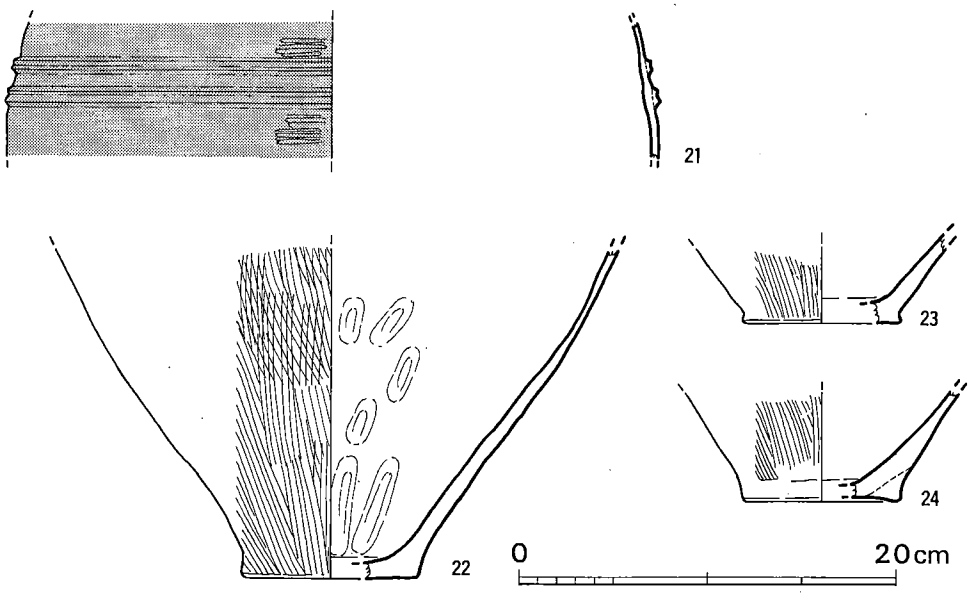
石製品（第120・125図30・31・78～85）　30は片岩の粗砥で側面の一部が熱を受けている。Ｐ11出土。31も片岩の粗砥で側面でも丸みのあるものを擦っている。78～85は台石で、79～81は片岩、78・82～85は玄武岩質の石材である。84は使用痕が見える。85は全長39.1cm。

15号住居跡（図版22、第58図）

4号住居跡の東方にあり、16号住居跡にその北側を切られ、東隅で23号土坑を切っている。埋



第56図　中道14号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第57図　中道14号住居跡出土土器実測図２（1/4）

土は黄色土と黒色土の混ざり合ったもので、埋め戻した様相を示していた。16号住居を造る際に埋めたのであろう。南辺の長さは6.6mで、屋内土坑Ｐ８の北側が16号住居跡に切られているものの、その下層から15号住居の柱穴が検出されている。心心距離2.4mのＰ５・Ｐ６が主柱穴であり、Ｐ７が中央土坑である。主軸方位はN-80°-E。Ｐ13～16はこの住居の四隅にある補助柱穴であろう。これから復原すると南北は5m前後を測るものとみてよい。とすれば床面積は30m²弱となろう。南辺に細い壁小溝が巡る。土器はあまり多くなく、軽石、押型文土器片と炭化材もあった。

出土遺物（図版48、第59図）

土器（第59図1～6）　1は屋内土坑出土の鉢で復原口径18cm。2は丹塗磨研の高坏。3～6は甕で、5の底部剝離面には刷毛目が見える。

16号住居跡（図版22、第58図）

15号住居跡を切ってその北にある。南北4.3～4.5m、東西7～7.4mのかなり横長の長方形プランで、床面積は32.31m²。床面中央の南寄りにあまり大きくない中央土坑Ｐ３があり、これを挟んで2m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１と西壁、Ｐ２と東壁との距離は等しく2.3mである。主軸方位は15号と同じN-80°-E。中央土坑の南に、南辺から少し離れて屋内土坑Ｐ４がある。確実ではないが、四隅のＰ９～12の大小のピットは補助柱穴と捉えてよいかもしれない。

東辺と西辺の一部に細い壁小溝がある。東南隅に近い所の床面に直径約10cmの範囲で赤色顔料が遺存し、そのすぐ近くには小さな砥石片２個があった。砥石は紛失してしまったが、このベンガラと思われる赤色顔料はあるいはここで精製していたものであろうか。しかし石杵のような石器はなかった。Ｐ１の周辺には台石を含む石が多数散乱していた。ほかに床面から石包丁、石斧、砥石、軽石、鉄器、縄文晩期土器などが出土し、埋土上層には須恵器、土師器、押型文土器片、黒曜石剝片もあった。

出土遺物（図版48・55・56、第59・61・119・120・125図）

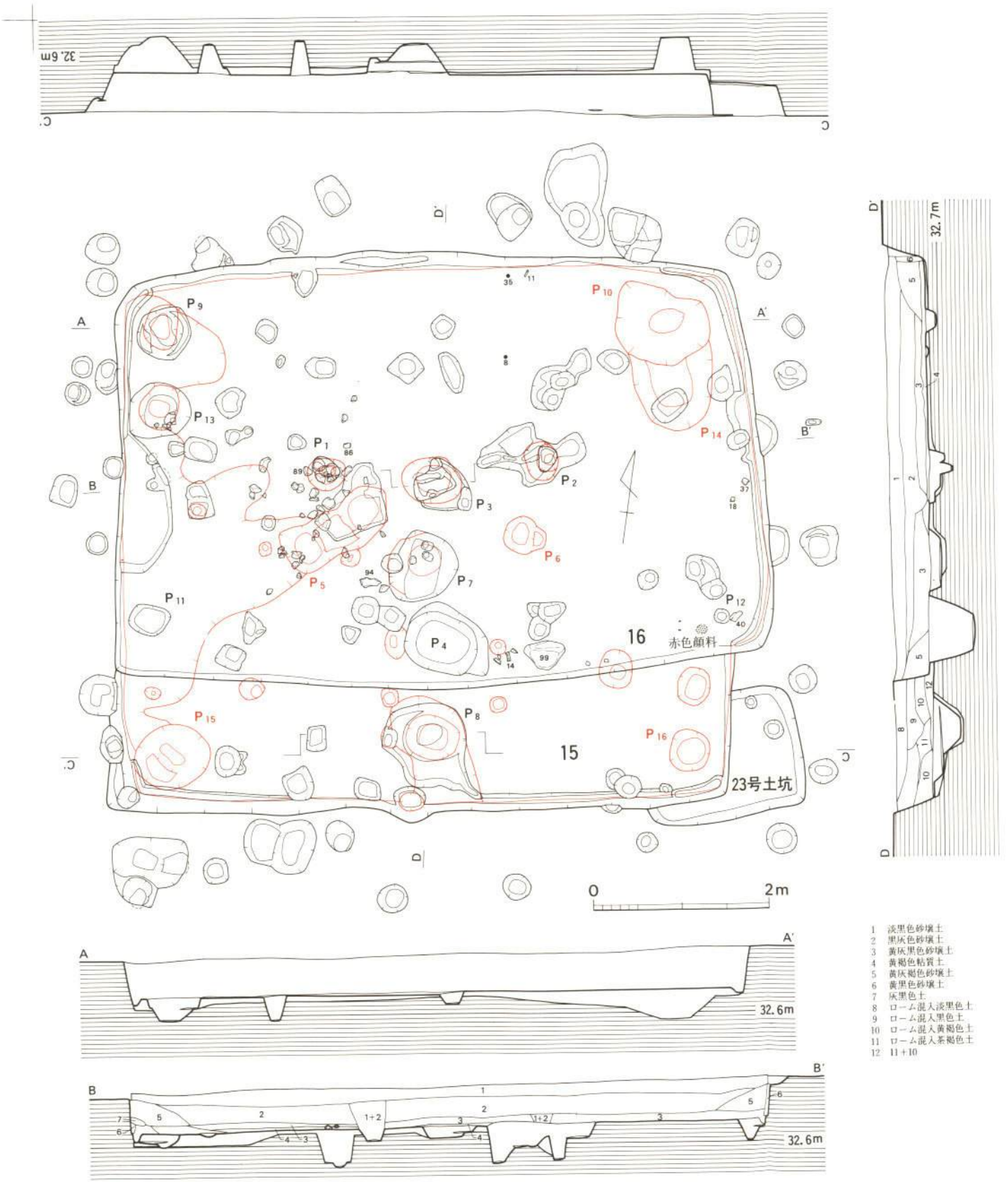
土器（第59・61図7～31） 7・8は前期末の壺と甕である。この時期の遺構が調査区外の南方に存するのだろう。9は蓋。口縁から内面に煤が付着している。10～12の壺は10が長頸直口、11が袋状、12が無頸である。13・14の高坏は丹塗磨研で坏部口縁には暗文を施す。14の裾径16.8cm。15は脚台か。16～18の鉢は16が丹塗磨研。17は口径18cm、器高9.5cm。18は小型品で口径8cm。19～31の甕は19・20・23の口縁がＬ字形、21・22・24・25はくの字形であり、24・25は跳上げとなる。26は甑。27・31は不安定な平底となる。

石製品（第119・120・125図8・11・20・32～40・86～99） 8は床面出土の小豆色の凝灰岩製石包丁であるが孔はなく、穿孔しかけた痕跡もない。縦のち横の擦過痕があるが未製品とすべきだろう。長さ115mm、幅57.8mm、厚さ8mm、重さ69.7g。11は鑿形の片刃石斧で粘板岩製。全長80mm、幅13.8mm、厚さ15mm、重さ31.1g。20は石器であるか否かも不明の礫で、使うとすれば錘であろうか。全長38mm、重さ10.5g。東壁際の小ピット出土32～40は砥石。32～37は粘板岩の仕上砥で小型ながらもよく使われている。38～40は片岩の粗砥。35・37～40は床面出土。86～99は作業台石である。86・87・91が片岩で他は玄武岩質。86は扁平、88は丸みがあり、ともにすり石とすべきか。99は屋内土坑の東側に据えられていたもので全長45.7cm。

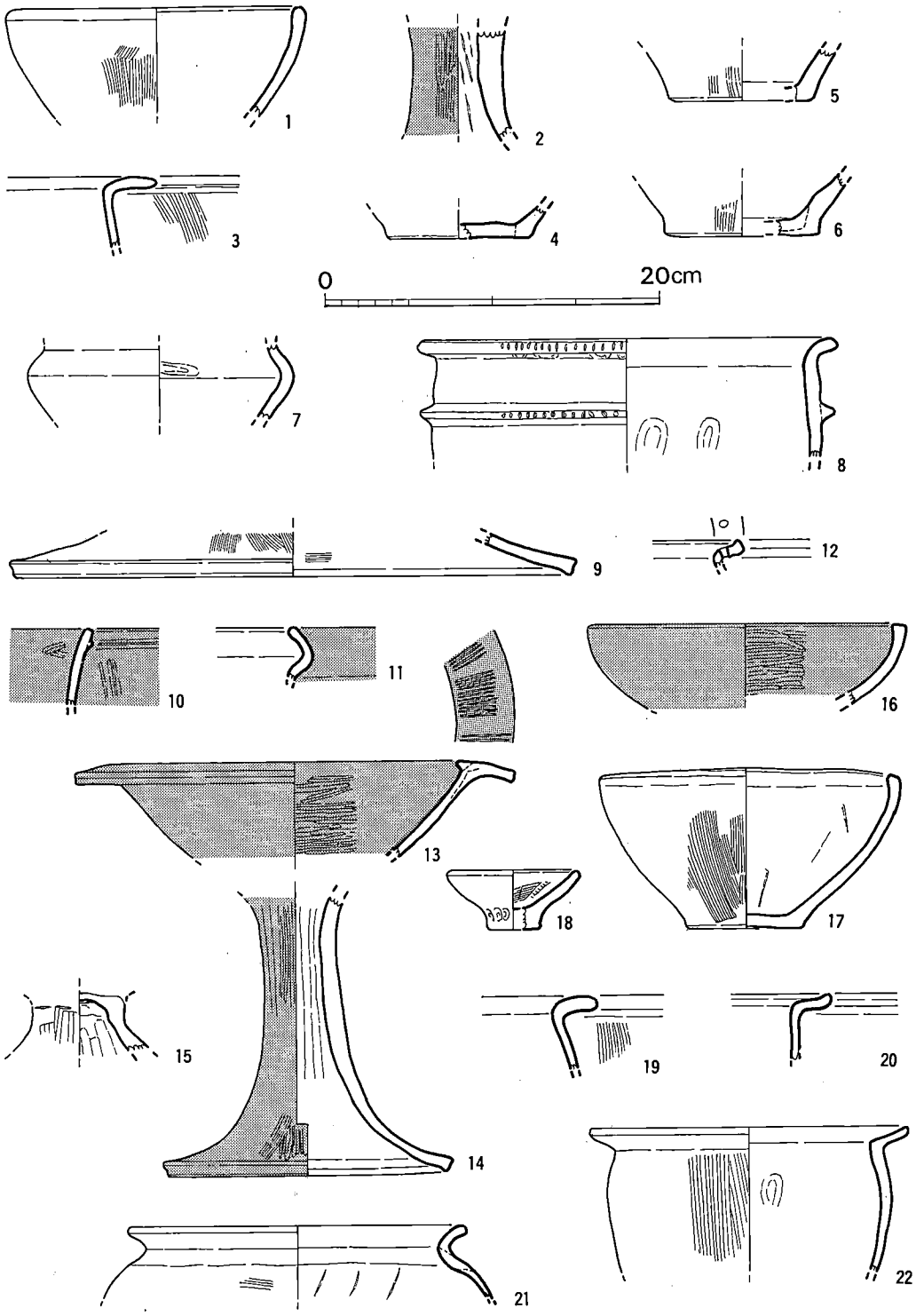
鉄器（第122図2・3） 2は板状鉄斧だろう。全長5.8cm。3は刃部もあるのかどうかよくわからない。ともに上層出土。

17号住居跡（図版23、第60図）

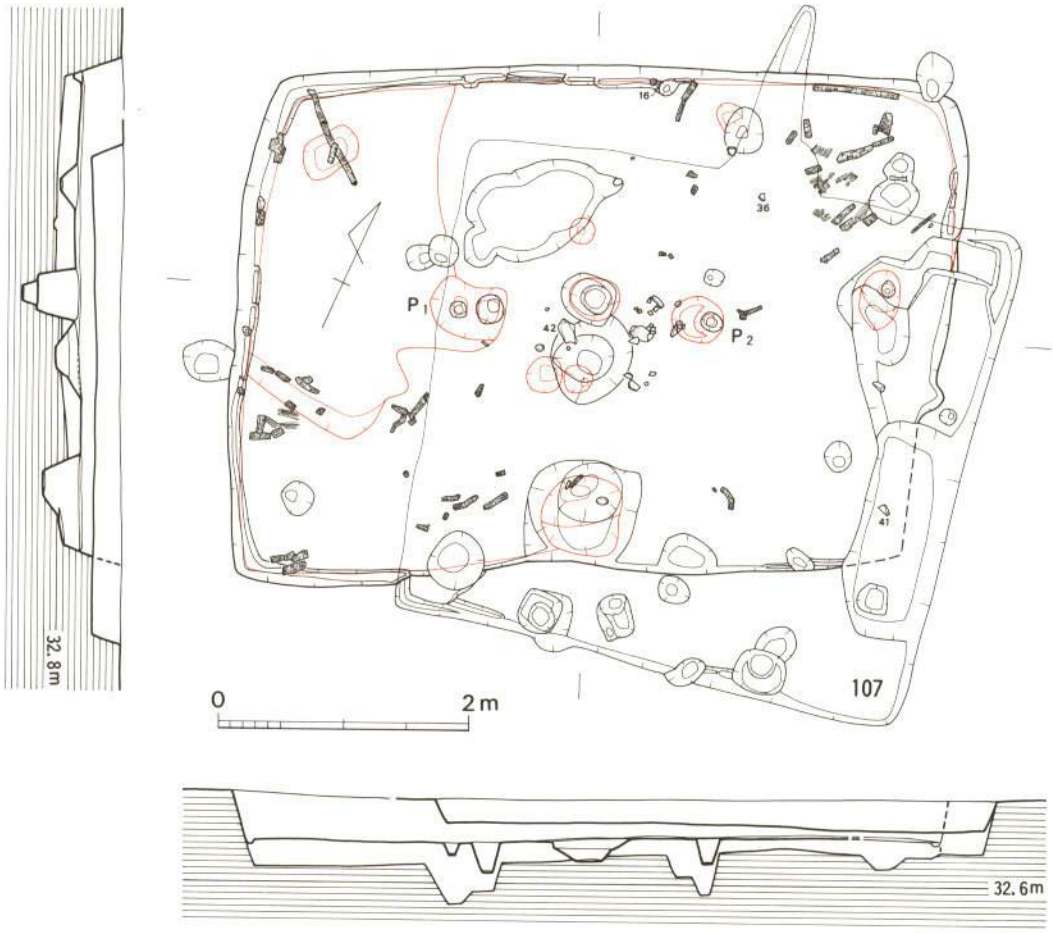
16号住居跡の北東にあって大半を107号住居跡に切られていたが、その下層に床面等が遺存していたため全貌はわかる。南北4m、東西5.7mの平行四辺形気味の長方形プランで、床面積は21.07㎡。床面中央のやや南寄りに楕円形の中央土坑があり、これを挟んで2m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１と西壁間は1.6m、Ｐ２と東壁間は1.9mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-69°-Eである。中央土坑の南に、南辺に接して上面が方形の屋内土坑がある。壁小溝は断続的に四壁下に巡っている。焼失住居であって床面に炭化材・ワラ？が検出された。四隅に近い所に小ピットがあるのは補助柱穴であろうか。土器はそれほど多くなく、投弾、砥石が出土している。



第58図　中道15・16号住居跡・23号土坑実測図（1/60）



第59図　中道15・16号住居跡出土土器実測図（1/4）



第60図　中道17号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版48・55・56、第61・117・120図）

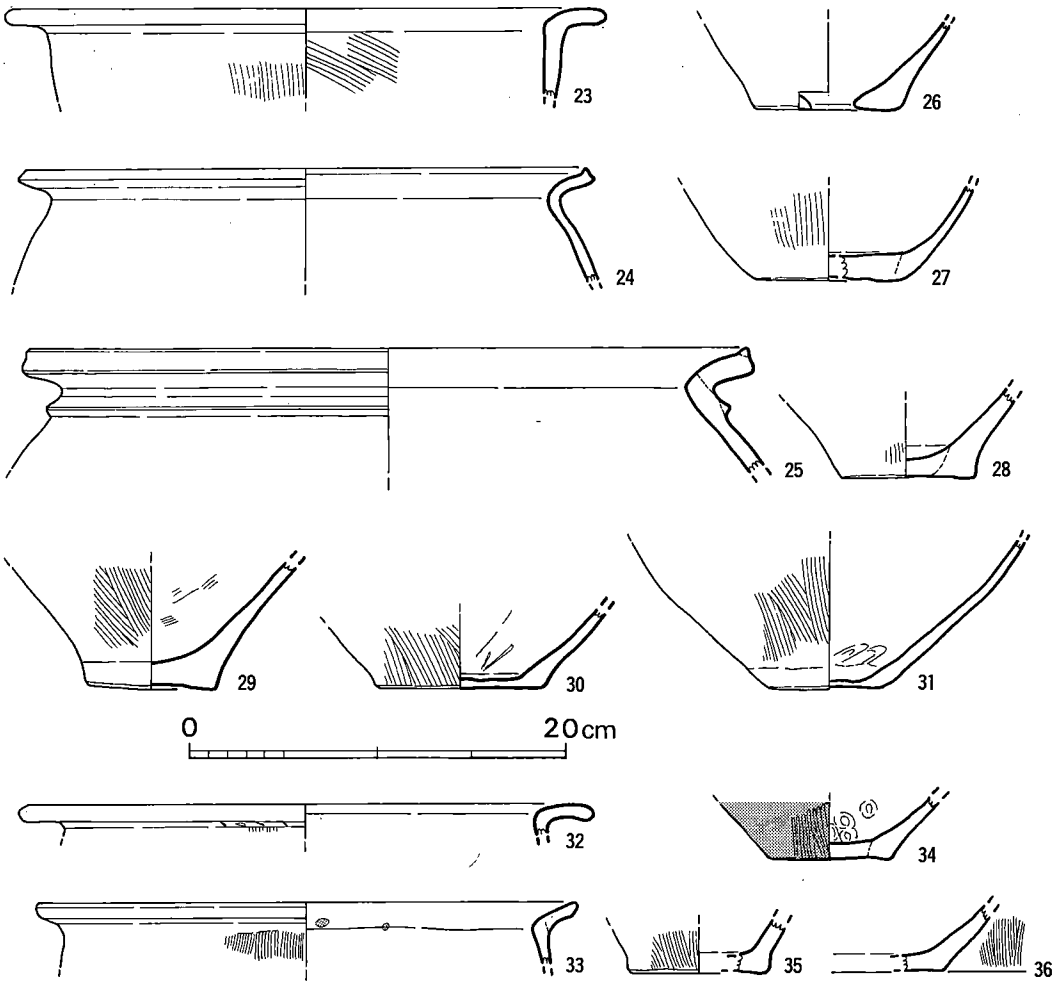
土器（第61図32～36）　34は壺の底部か。丹塗磨研である。外底部はケズリと称してよい。底径6.5㎝。32はL字、33はくの字口縁の甕。33には丹のしずく痕がある。

土製品（第117図8・16）　8は長さ24.1㎜、径10.8～11.7㎜、重さ2.55gの円筒状の土製品で、用途不明。屋内土坑出土。16は投弾形土製品の半欠品で径21.5㎜。北壁下の壁小溝内出土。

石製品（第120図41・42）　ともに床面出土の片岩の粗砥で、42はその砥面のあり方から鉄器を研ぐのに使用したものとみてよい。全長24.4㎝。

18号住居跡（図版24・25、第62図）

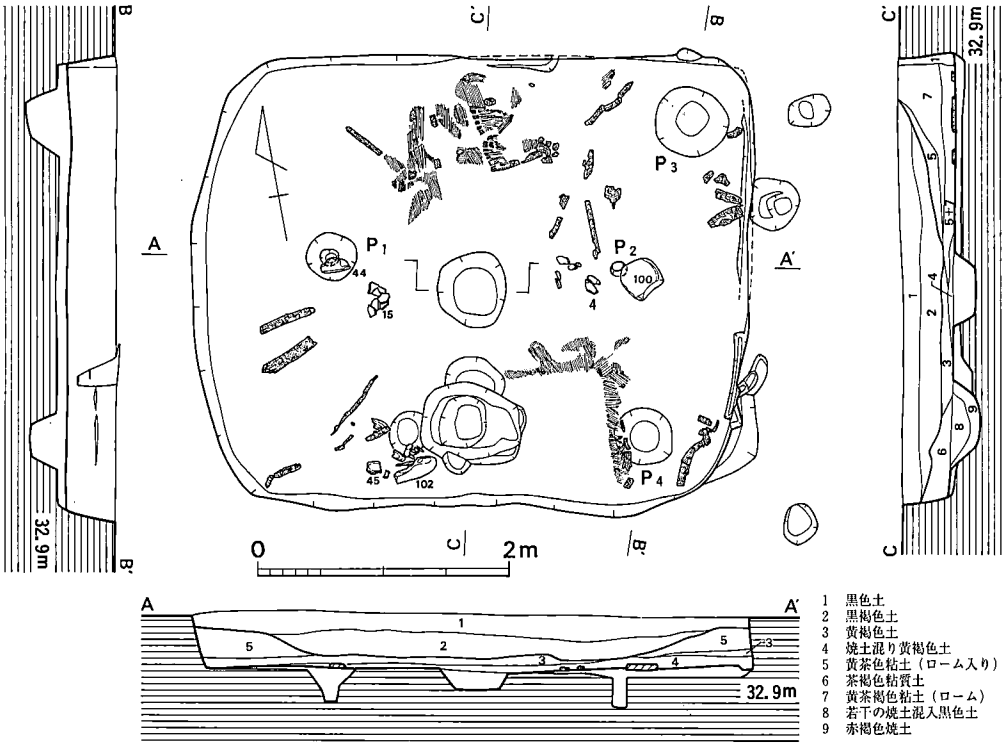
17・20号住居跡の北方、1号円形周溝遺構の東南にある。南北3.5m、東西4.4mの長方形プラ



第61図　中道16・17号住居跡出土土器実測図（1/4）

ンで、床面積は14.04㎡。床面中央のやや南寄りに径55～60㎝の円形の中央土坑があり、これを挟んで2.3m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ２の横には台石がある。Ｐ１と西壁、Ｐ２と東壁との距離は等しく1mである。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-78°-Wである。中央土坑の南に、南辺からやや距離をおいて屋内土坑があり、この中には焼土が入っていた。すぐ横に台石・砥石があった。東北隅、東南隅に近く検出されたＰ３とＰ４はやはり上屋に関連する柱穴であろうか。しかし西北隅と西南隅には見あたらない。壁小溝は北辺と東辺に部分的に巡っている。焼失住居であって床面に炭化材・ワラ？が検出された。土器はそれほど多くなく、砥石、台石、軽石が出土している。

出土遺物（図版48・56、第63・121・126図）



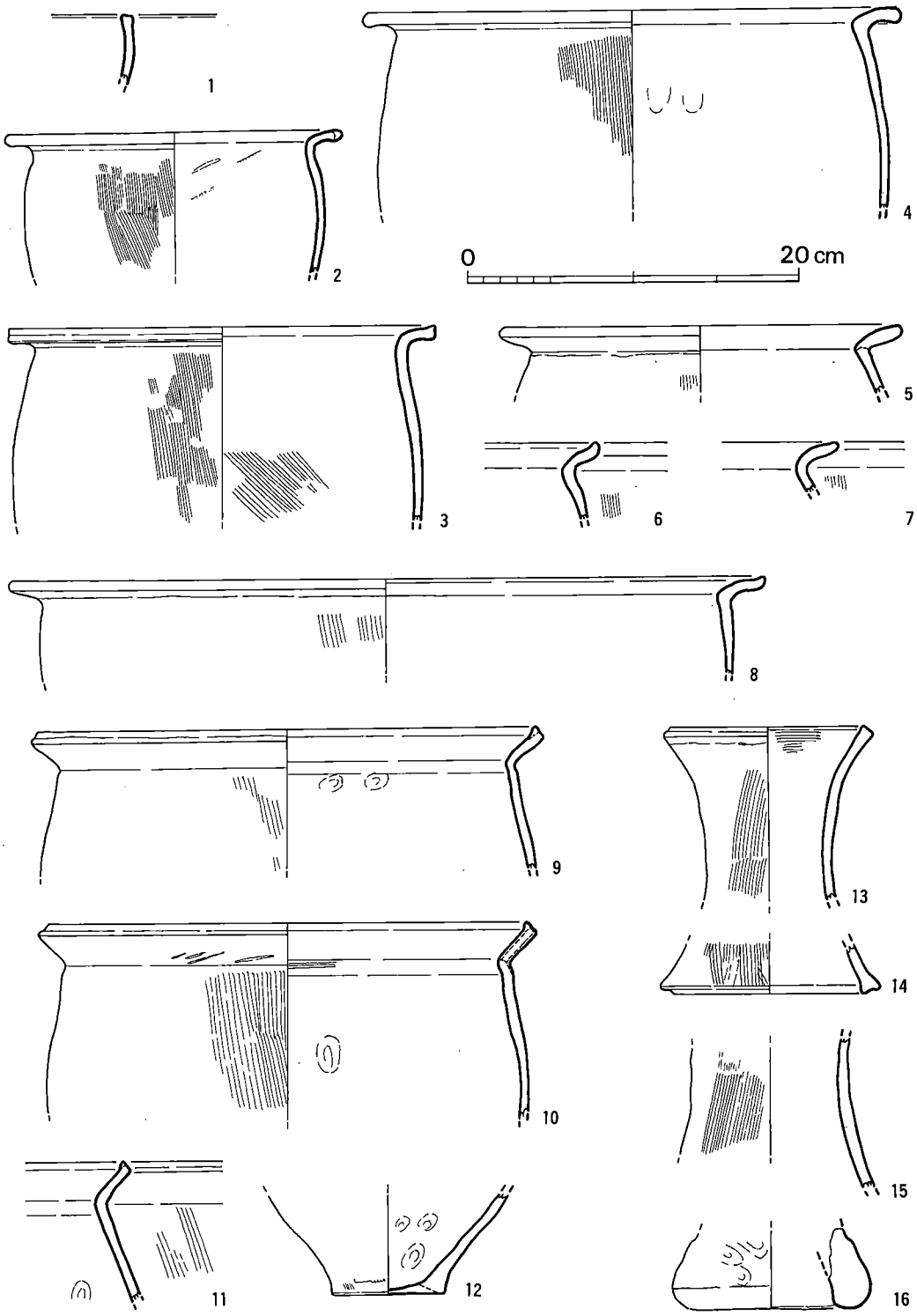
第62図　中道18号住居跡実測図（1/60）

土器（第63図1～16）　1は鉢。2～12の甕はＬ字とくの字の口縁があり、9～11は跳上げとなる。3の口径25.7cm。4は口縁上面に刻みが入る。12の外底面はケズリに近い擦過を施す。13～15は器台、16は支脚。

石製品（第121・126図43～45、100～102）　43は粘板岩の仕上砥で、割れた面にも条線が入っている。44・45は片岩の粗砥で、44の裏面には煤が付着する。全長22.5cm。45はかなり擦り減っていて２片に割れてのちも別々に使われている。残存する稜線を見ると鉄器のような鋭利な刃先を研いだことがうかがえる。100・102は玄武岩質の台石であり、100の表面は凹凸がありながらもよく擦れている。102は長さ36.2cmで、短側面に面を取る所がある。101は明確な使用痕は見えないが台石としておく。凝灰岩。

19号住居跡（図版25、第64図）

17・20号住居跡の北東にあり、約半分が水路によって切られていた。南北方向は西辺で3.8ｍだが、水路で切られた所は4.15ｍを測る。他の住居跡のあり方からして東西に長い長方形プランであることは間違いないとみられるが、いま検出されている主柱穴Ｐ１と中央土坑、屋内土

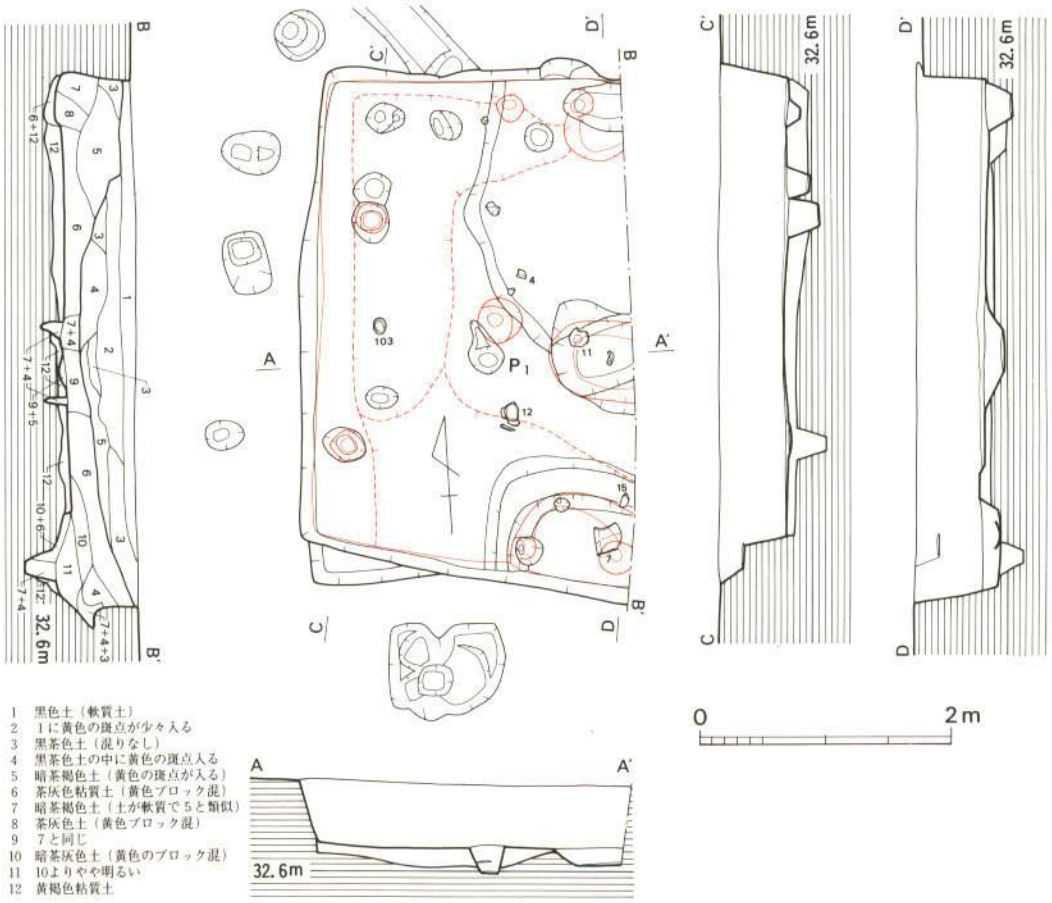


第63図　中道18号住居跡出土土器実測図（1/4）

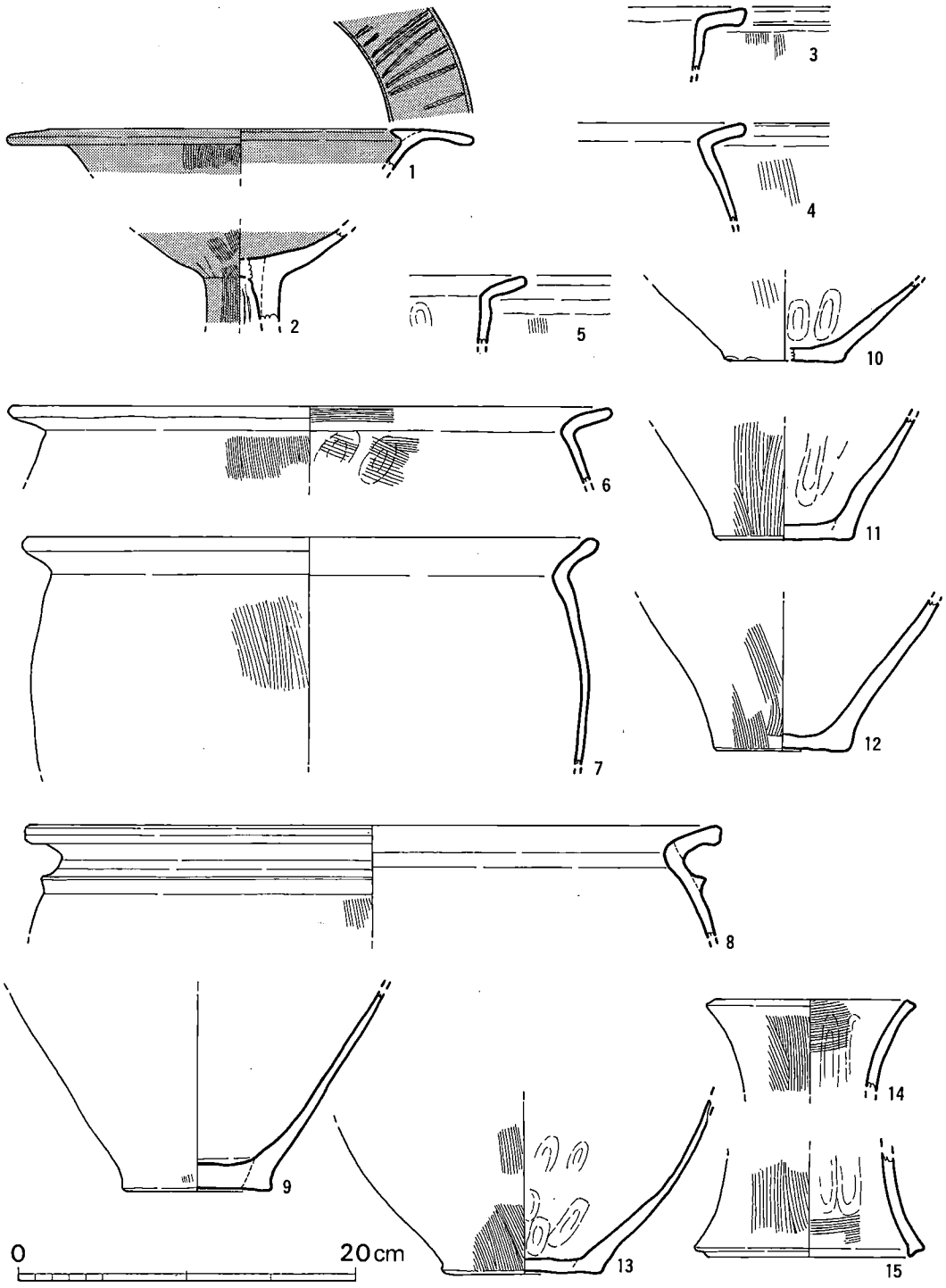
坑の位置関係からすると、図中の断面Cのラインの東西長が2.6mであるから単純にその倍とすれば5.2mになる。東西方向については少なくとも4.5～5mはあったものと捉えられる。しかしながら水路を挟んだ東側から住居跡の東辺は検出されなかった。何らかの理由で削平されていたものと考えたい。本来は南北4m、東西5mほどの規模であったとしておく。現状の床面積は9.2㎡である。主柱穴Ｐ１と西辺の距離は1.4mで、西辺を基準にみると主軸方位はN-86°-Wとなる。中央土坑の南に、南辺と接して屋内土坑があるが、その周囲は20～35㎝の幅で僅かながら一段高くなっていた。壁小溝は残存部には見られない。土器のほかに台石、軽石があり、埋土中からは須恵器・土師器の破片も出土している。

出土遺物（図版49、第65・126図）

土器（第65図1～15）　1・2は丹塗磨研の高坏で口縁上面には暗文がある。3～13の甕は3を除いてくの字口縁をなす。7の復原口径34.2㎝。14・15は器台。



第64図　中道19号住居跡実測図（1/60）



第65図　中道19号住居跡出土土器実測図（1/4）

石製品（第126図103～107） 103はすり石とすべきか。玄武岩質。他は台石で、105が硬砂岩であるほかは玄武岩質。107の上面はよく擦れている。

20号住居跡（図版23・25・26、第66図）

17号と19号住居跡の中間にあり、106号掘立柱建物跡に切られていた。埋土は黄色土を含む黒色土で固く、埋め戻したものと捉えられた。南北3.6m、東西4.8mの隅円長方形プランで、床面積は15.28㎡。床面中央に径50cmで焼土・炭化物の入った円形の中央土坑があり、これを挟んで2.1m間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１の所はちょうど建物跡のピットと重複する。Ｐ１と西壁間は1.6m、Ｐ２と東壁間は1.1mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-86°-E。中央土坑の南に、南辺に接して屋内土坑があるが、これの南側壁体を穿つようにしてテラスを造りだし、そこには器台形の土器（第69図30）が置かれていた。何らかのマツリに関連するものであろうか。壁小溝は西辺を除く３辺に断続的に見られるが、特に東辺は小ピットを連結した形状となる。また南辺は屋内土坑と連結している。Ｐ１・２の南側床面に多量の土器が出土した。石包丁、台石、軽石も出土している。

出土遺物（図版49・55、第67～69・119・126図）

土器（第67～69図1～31） 1は蓋。2～5・12の壺は4を除いて丹塗りである。4は薄手のつくりで肩部に突帯を持つ。6の鉢、7の高坏も丹塗り。8～11・13～29の甕はＬ字とくの字の口縁がある。21と22は僅かながら胴径が口径を凌駕している。21の口径43.2cm。24～26は跳上げ口縁。28は底部が突レンズ状となり、明らかに後期の所産である。口径18.2cm、器高23.3cm。29は外

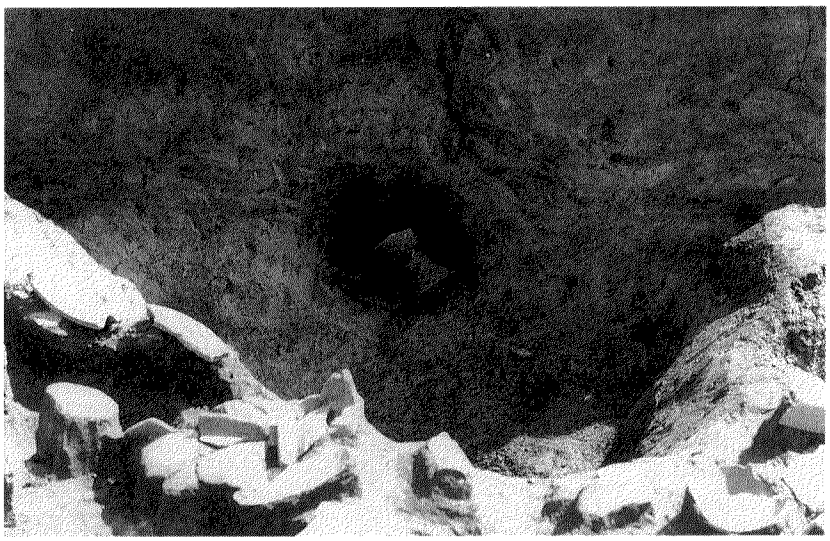
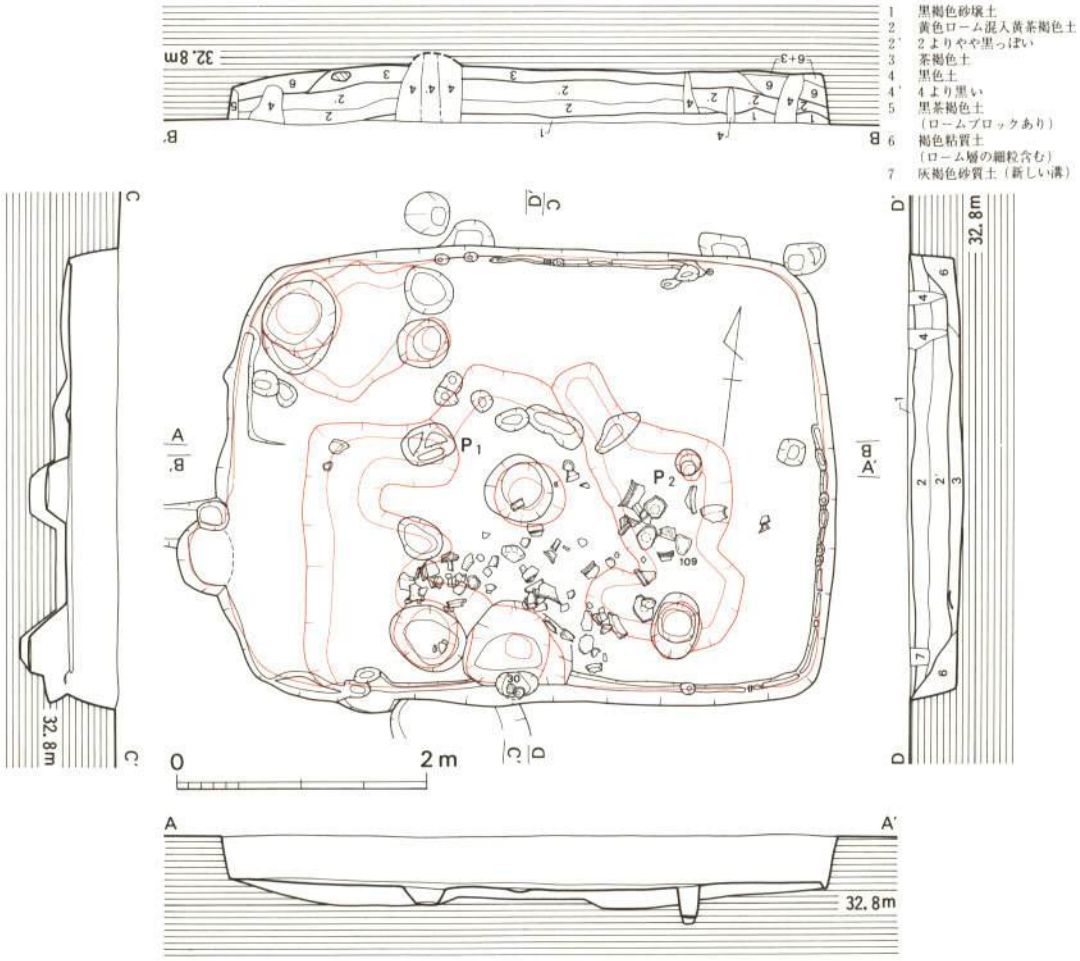


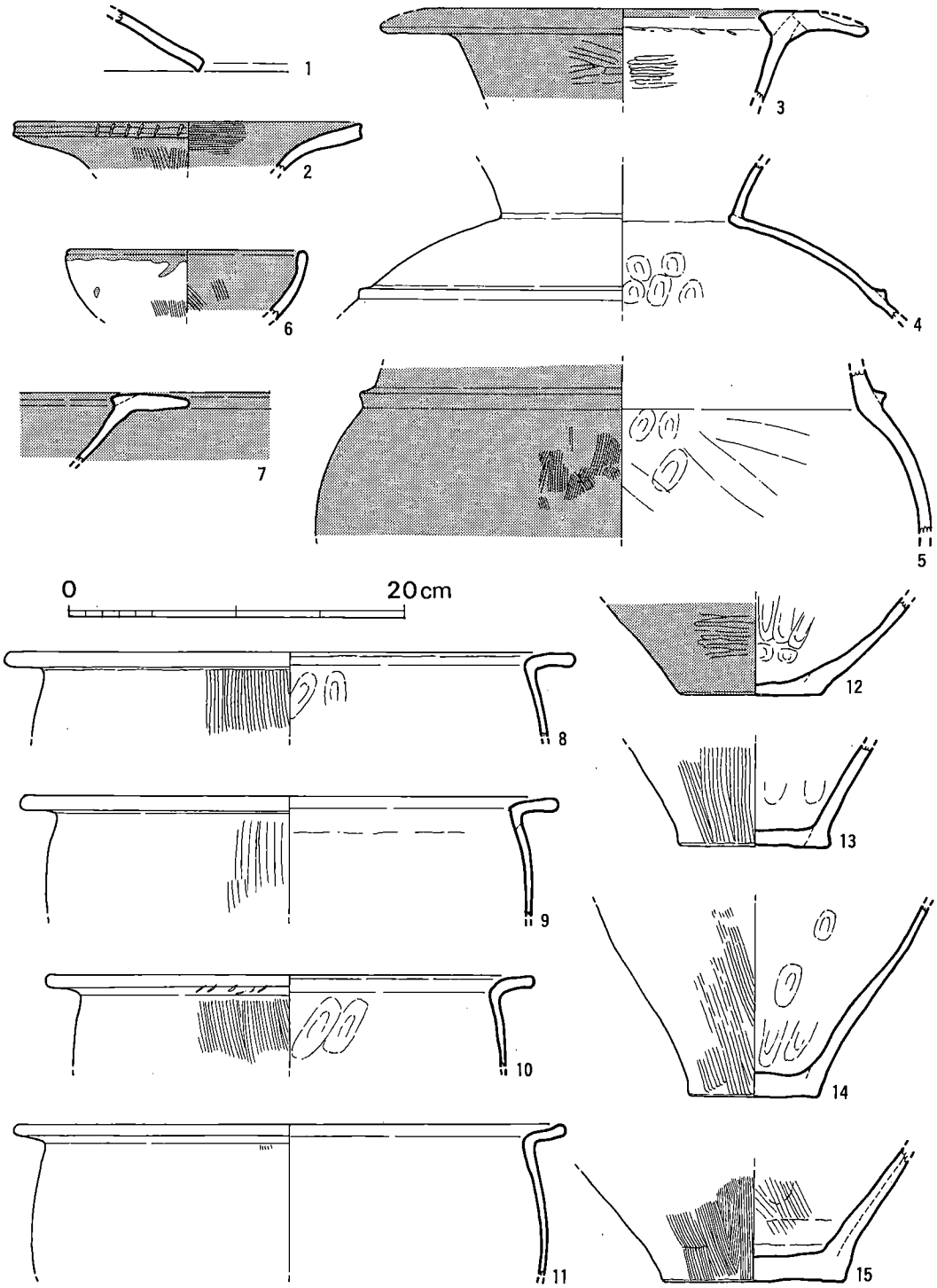
Photo. 5　20号住居跡屋内土坑



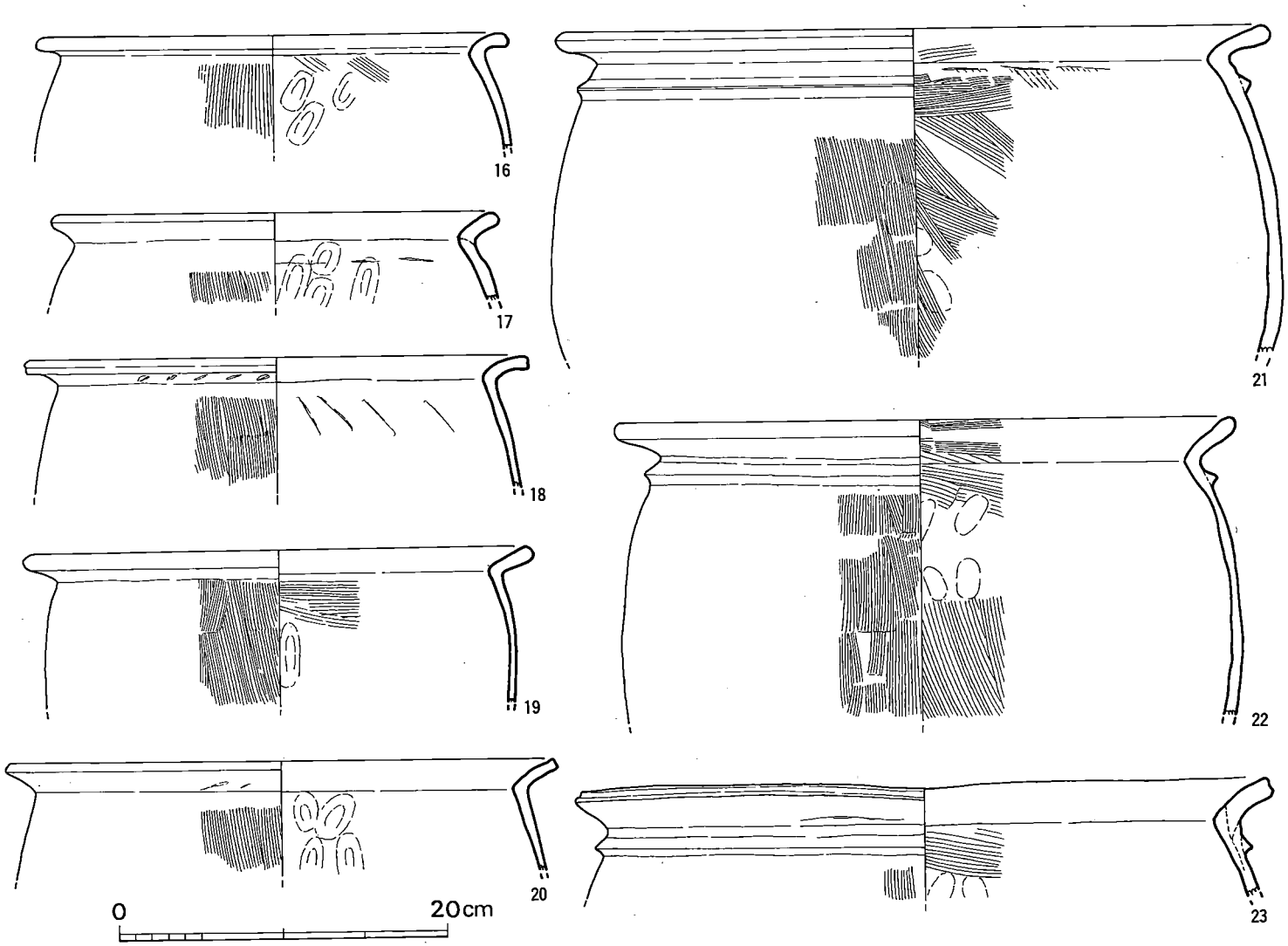
第66図　中道20号住居跡実測図（1/60）

底面に籾圧痕があり、また内面にはコゲが付着する。30は器台とすべきであろうか。ほぼ完形で口径9.6㎝、底径7.4㎝、器高9.4㎝。31は支脚。2・28・30は屋内土坑、1・4・5・7～9・11～16・20～22・24～27・31は床面からの出土である。

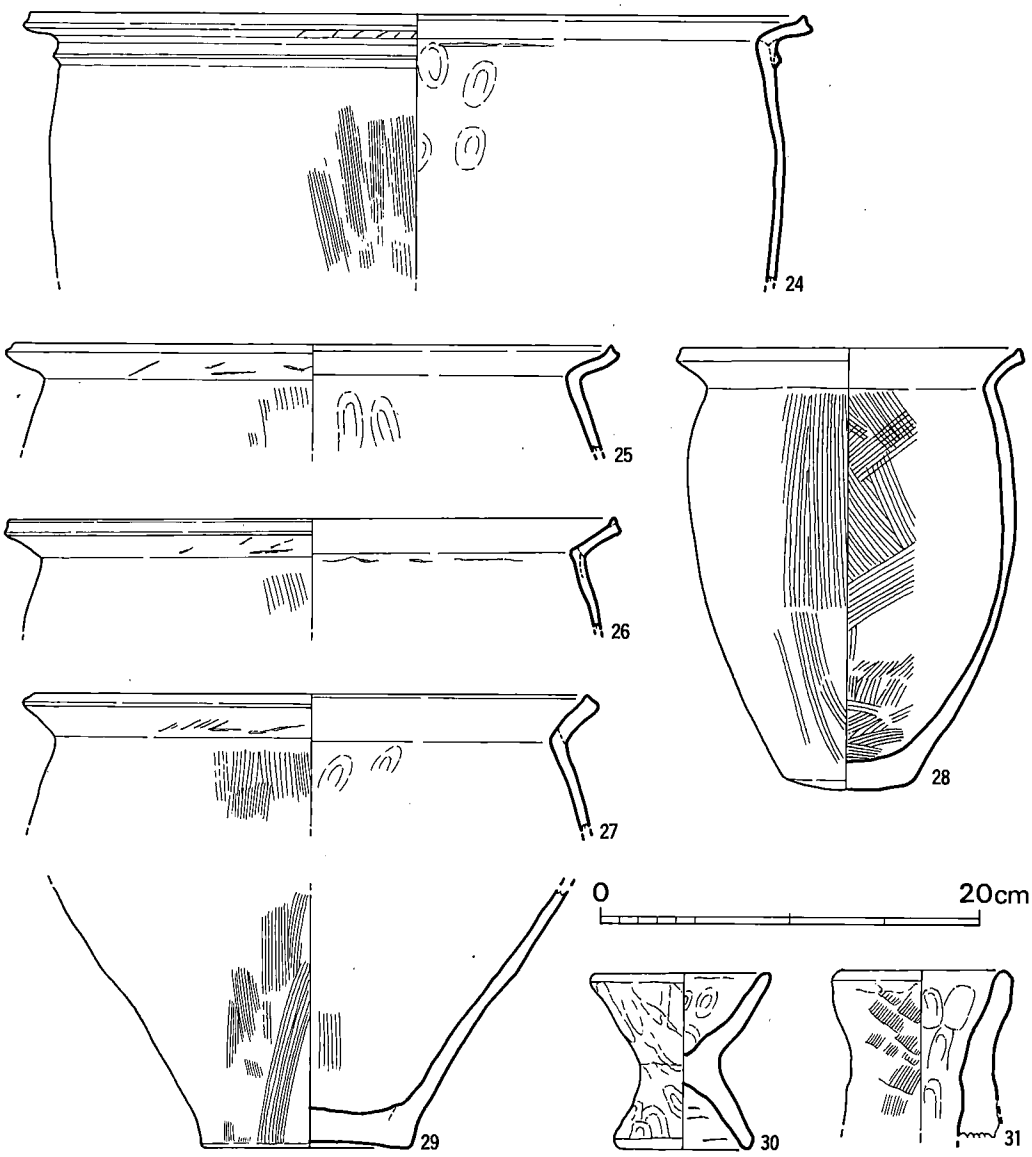
石製品（第119・126図9・108～112）　9は小豆色の凝灰岩製石包丁で、現存長79㎜、厚さ8㎜、孔の外径14㎜、背孔間19㎜。床面から14㎝ほど浮いた埋土中出土。108～112は全て玄武岩質の石材であるが、110は叩石とすべきか。他は台石であろう。109の全長16.8㎝。



第67図　中道20号住居跡出土土器実測図１（1/4）



第68図　中道20号住居跡出土土器実測図２（1/4）



第69図　中道20号住居跡出土土器実測図３（1/4）

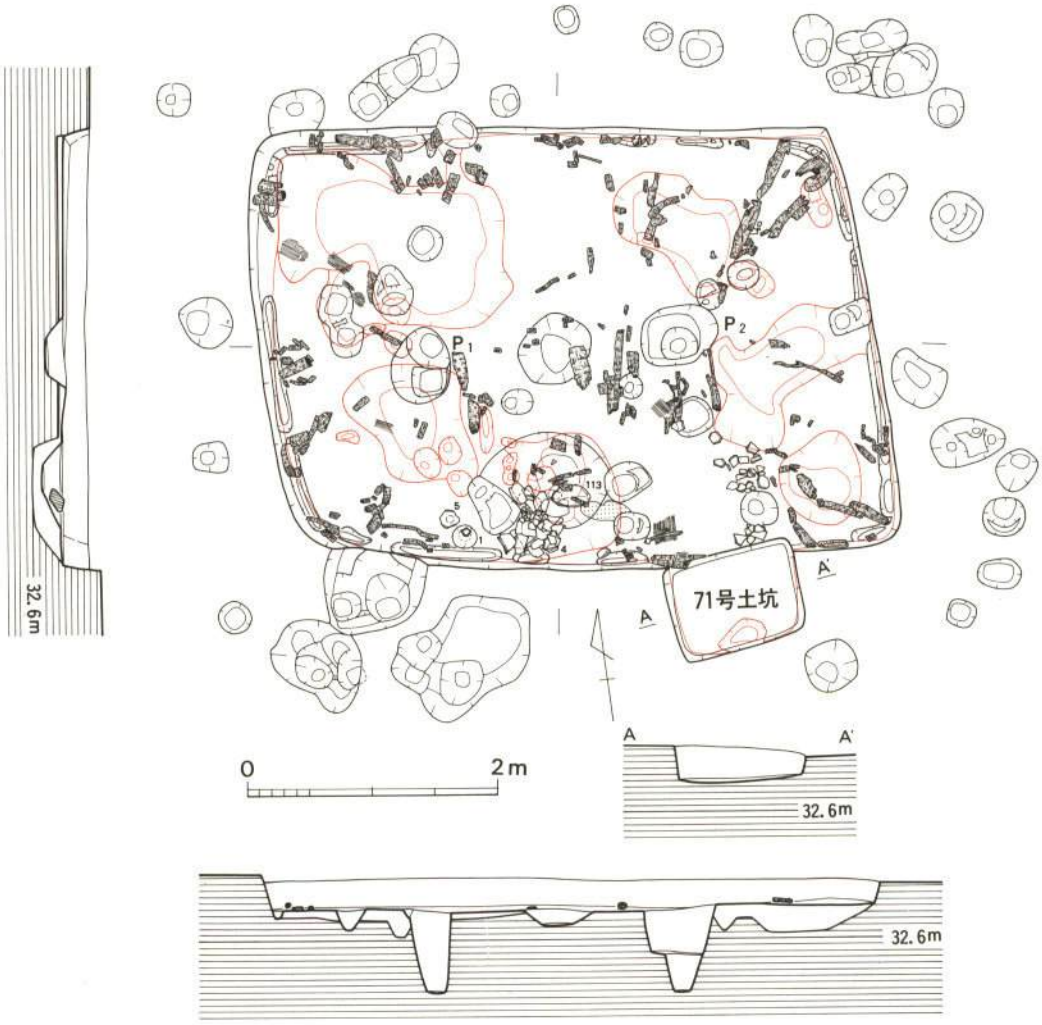
21号住居跡（図版27・28、第70・71図）

20号住居跡の東、水路よりさらに東方にある。南辺を71号土坑に切られていた。南北3.5ｍ、東西4.9ｍの平行四辺形プランで、床面積は15.56㎡。床面中央に径50～60㎝で焼土・炭化物の入った円形の中央土坑があり、これを挟んで2ｍ間隔で主柱穴Ｐ１・Ｐ２がある。Ｐ１と西壁間

は1.3m、P２と東壁間は1.5mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-82°-W。中央土坑の南に、南辺から少し離れて屋内土坑があり、中に台石が入っていた。壁小溝は断続的に巡っている。焼失住居であり、かなりの炭化材が検出された。屋内土坑の周辺に土器が散在していたが量は多くない。

出土遺物（図版49・50、第73・126図）

土器（第73図1～6） 1は高坏の脚部で丹塗磨研である。外面の一部に黒ウルシを塗ったあとに丹塗りを施しているようである。裾径18.5cm。2～6の甕のうち3は外面が一部丹塗りである。4は外面に黒塗りかと思われる所がある。口径32.1cm、底径8cm、器高37.4cm。4と5は底部のつく



第70図 中道21号住居跡、71号土坑実測図（1/60）

りが違う。

石製品（第126図113） 玄武岩質の台石で全長31.2㎝。

22号住居跡（図版66、第153図）

21号住居跡の西南方、調査区境界にある。109号住居跡の床面下から検出されたのであるが、住居跡としては疑わしいところもある。北辺と東辺の一部が知れるのみであって詳細はわからない。現存で北辺2.7ｍ、東辺2.2ｍを測る。出土遺物も弥生時代のものはない。

23号住居跡（図版29、第72図）

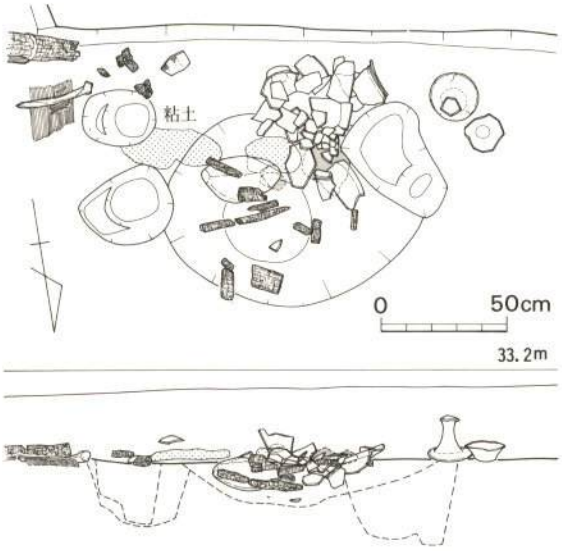
20号住居跡の東南方にあり、113号掘立柱建物跡の北西コーナー柱穴によって切られていた。南北1.9～2.1ｍ、東西2.1～2.3ｍの方形プランで、床面積は4.33㎡。主柱穴は不明。床面から炭化材と焼土、土器が出土した。

出土遺物（図版50、第73図）

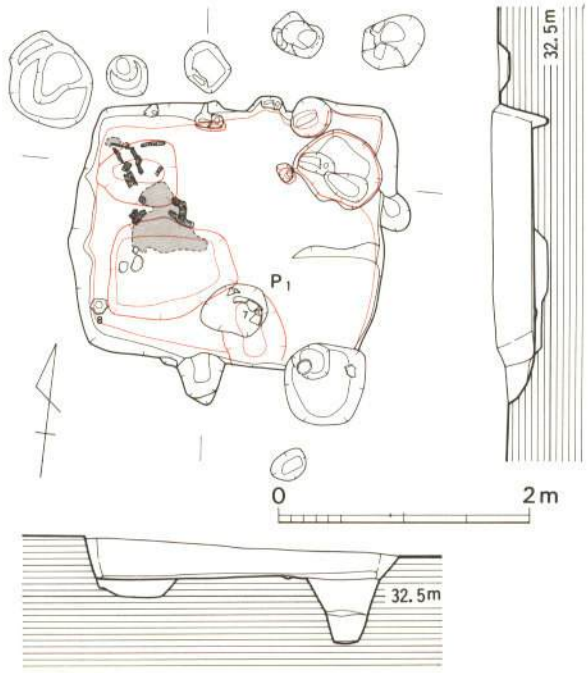
土器（7・8） 7は蓋で復原口径34.2㎝。P1の出土。8は甕の底部で上げ底になる。外面に煤が付着する。底径7.3㎝。

24号住居跡（図版29、第74図）

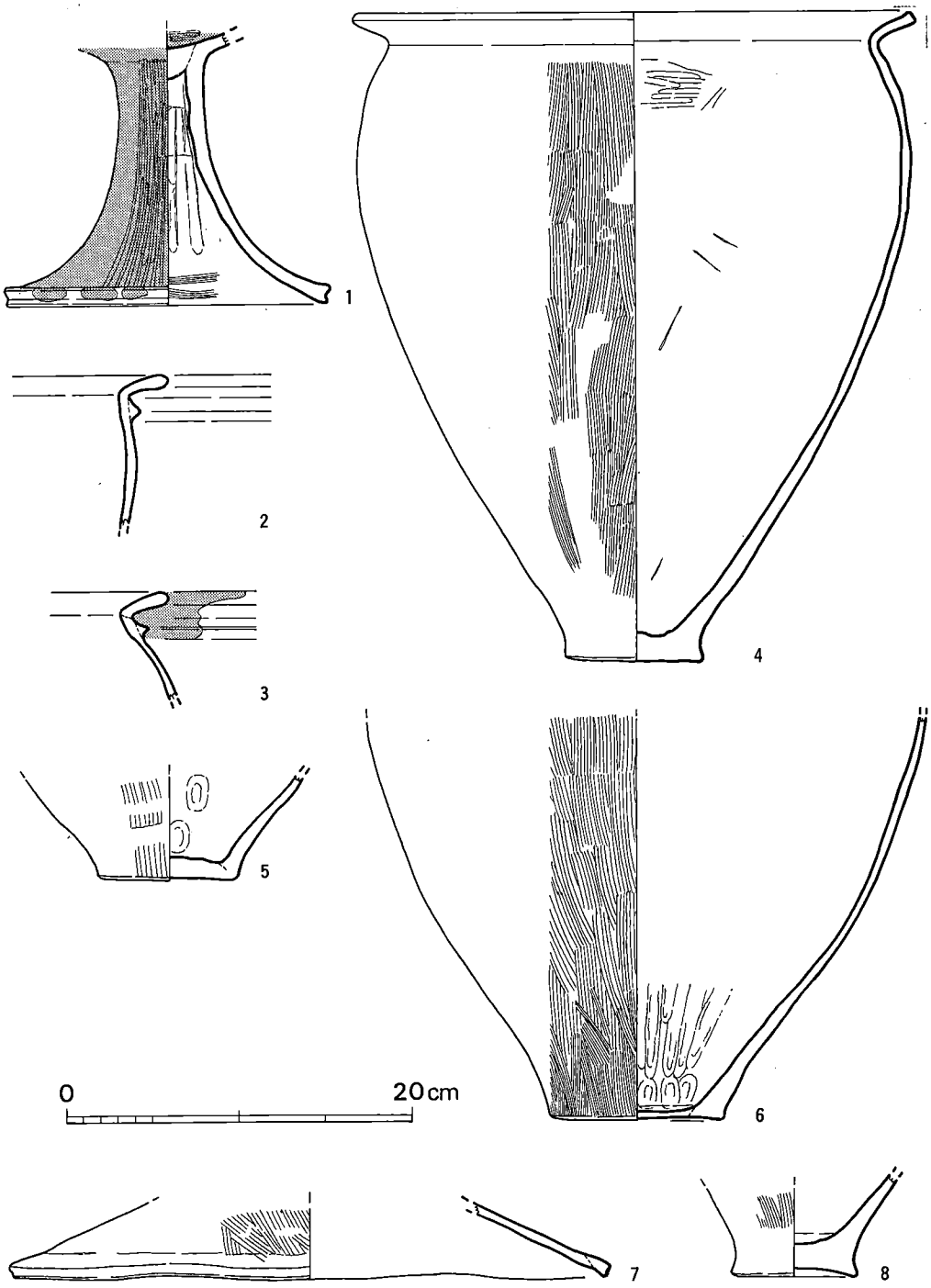
調査区の東半部、116～122号住居跡群の南方にある。南辺5.5ｍと東西両辺の一部を検出したのみで北半部は攪乱されていたが、それでも南北長は5ｍ前後であったものと思われる。復原で床面積29㎡。床面中央やや南寄りにあるあまり大きくない径45～50㎝のピットを中央土坑とし、これ



第71図 中道21号住居跡屋内土坑付近土器出土状態実測図（1/30）



第72図 中道23号住居跡実測図（1/60）

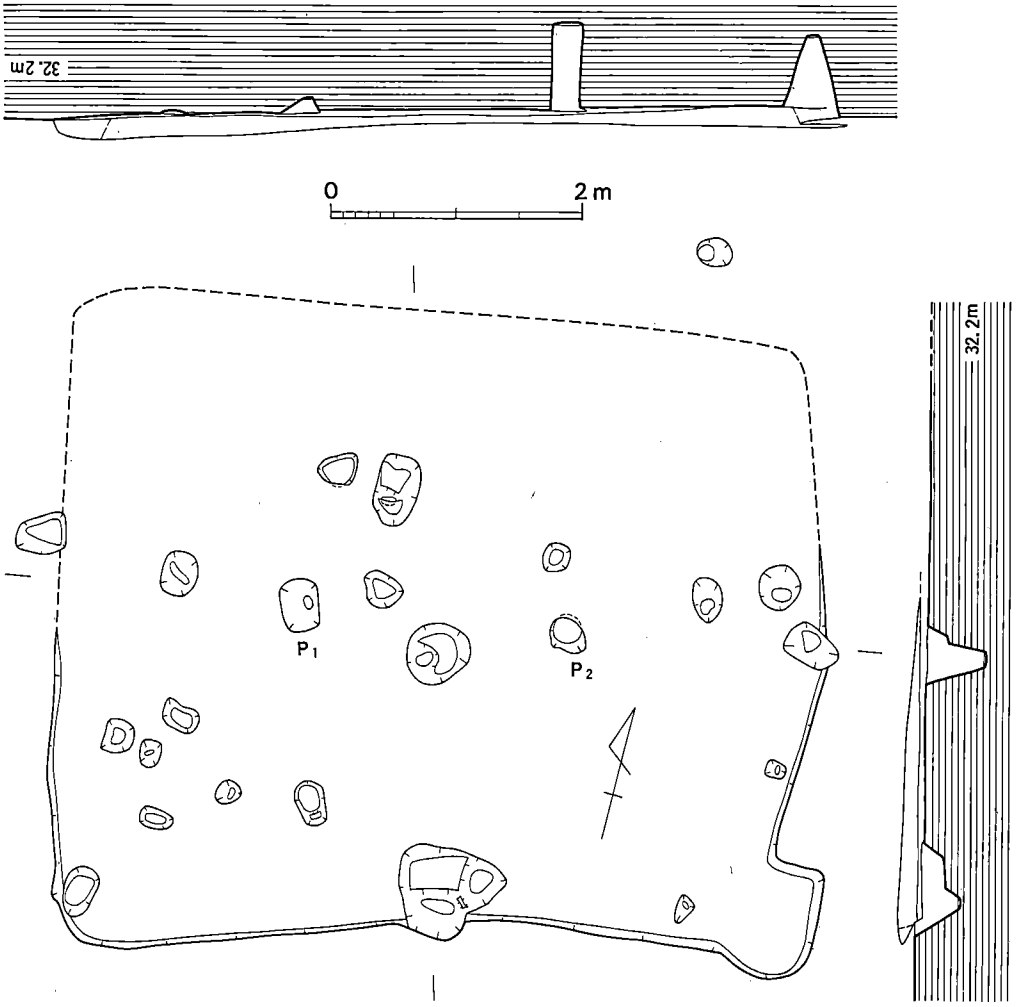


第73図　中道21・23号住居跡出土土器実測図（1/4）

を挟んで2.1m間隔でのＰ１・Ｐ２を主柱穴とするが、Ｐ１はきわめて浅い。Ｐ１と西壁間、Ｐ２と東壁間は等しく2mを測る。主柱穴を結ぶ主軸方位はN-81°-E。中央土坑の南に、南辺を切るように屋内土坑がある。壁小溝はない。東南隅に幅90cmで、奥行き50cmの突出部がある。この中に焼土と炭化材があった。出土遺物はない。

25号住居跡（図版29、第75図）

24号住居跡の東北にある。南北2.5m、東西3.2mの長方形プランで、床面積は8m²。床面に大小10個ほどのピットがあるが主柱穴はわからない。長軸の主軸方位はN-82°-Eになる。南辺



第74図　中道24号住居跡実測図（1/60）

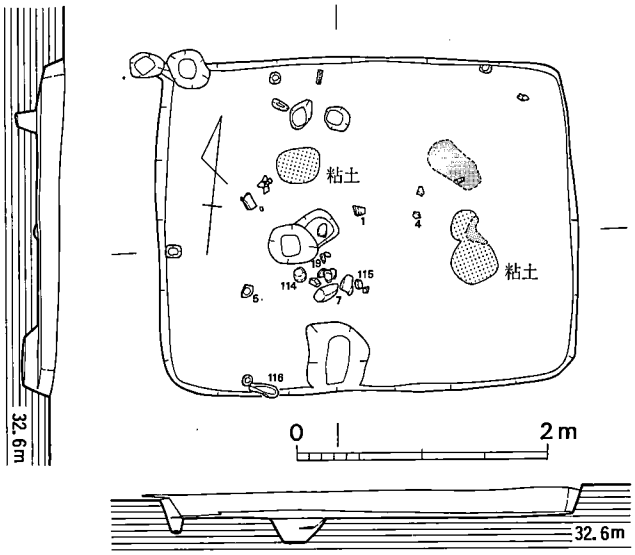
に接して西寄りにあるピットは屋内土坑であろうか。床面に黄色粘土、焼土があり、また礫が多数あった。壁小溝はない。

出土遺物（図版55・56、第76・117・119・126図）

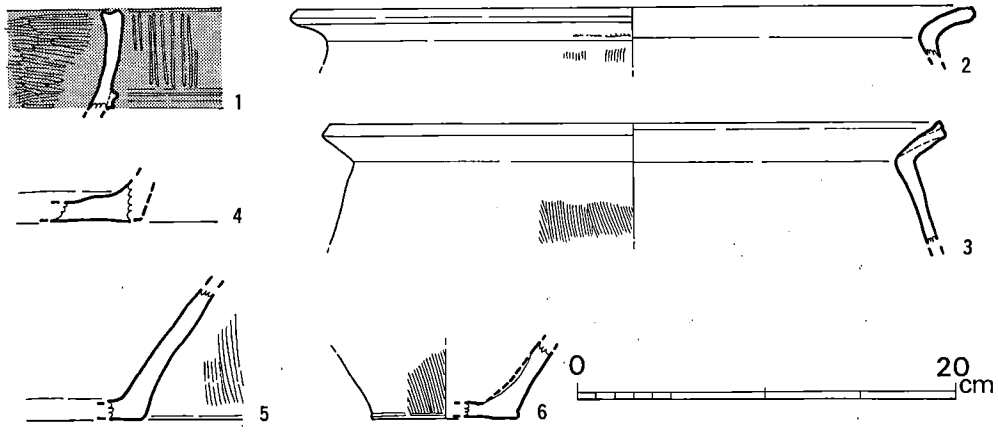
土器（第76図1～6） 1は丹塗磨研の鉢で、外面突帯より上は暗文が施される。似た器形は13号住居跡からも出土している。2～6の甕のうち3は外面に煤が付着する。復原口径32.5cm。

土製品（第117図7） 径20.8～22mm、重さ7.6gの土玉であるが孔はない。床面の出土。

石製品（第119・126図19・114～116） 19は凝灰岩質の丸い棒状品で、先端に敲打痕があり、それより1.5～2.5cm下方にごく浅い抉りが入っている。これは全周はしていない。叩石とすべきであるが、あるいは短いけれども男根状石製品としてよいかもしれない。全長7.5cm、径3.9cm、重さ138g。114は硬砂岩で台石か。115は玄武岩質ですり石としておく。116も玄武岩質で台石であろう。全長21.5cm。



第75図 中道25号住居跡実測図（1/60）



第76図 中道25号住居跡出土土器実測図（1/4）

2．掘立柱建物跡

弥生時代に属する建物跡は３棟を措定した。他にもまだ存する可能性があるものの現時点では不明である。11～13号住居跡の近辺とその北方に分布する。

また、建物にはならないが柱穴が幾つか並んでいると捉えられる所があり、塀の可能性もあるものとしてＳＷ１・２とする。ＳＷ２は遺物が全くなかったもののその所在した位置から弥生時代のものとしておく。

なお、103号掘立柱建物跡はその規模等から古墳時代のものとして後述するが、柱穴から弥生土器の出土しているものがあり、１・２号住居跡の中間に占地していることも考慮すればあるいは弥生時代に属する可能性もあることを付記しておく。

１号掘立柱建物跡［ＳＢ１］（図版30、第77図）

11号住居跡の北方、調査区境界付近にある。１×２間の東西棟で、主軸方位はN-70°-E。占有面積は5.4㎡。倉庫であろう。出土遺物はない。

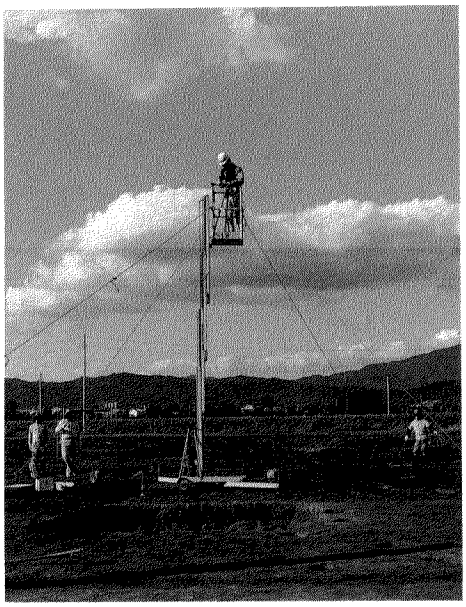
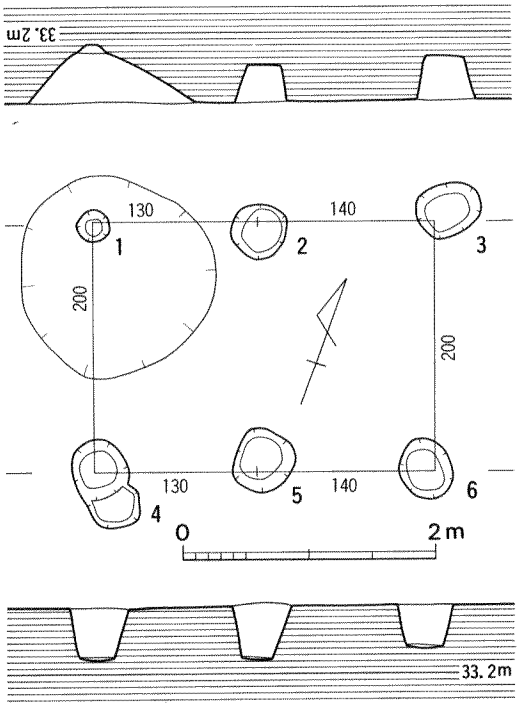
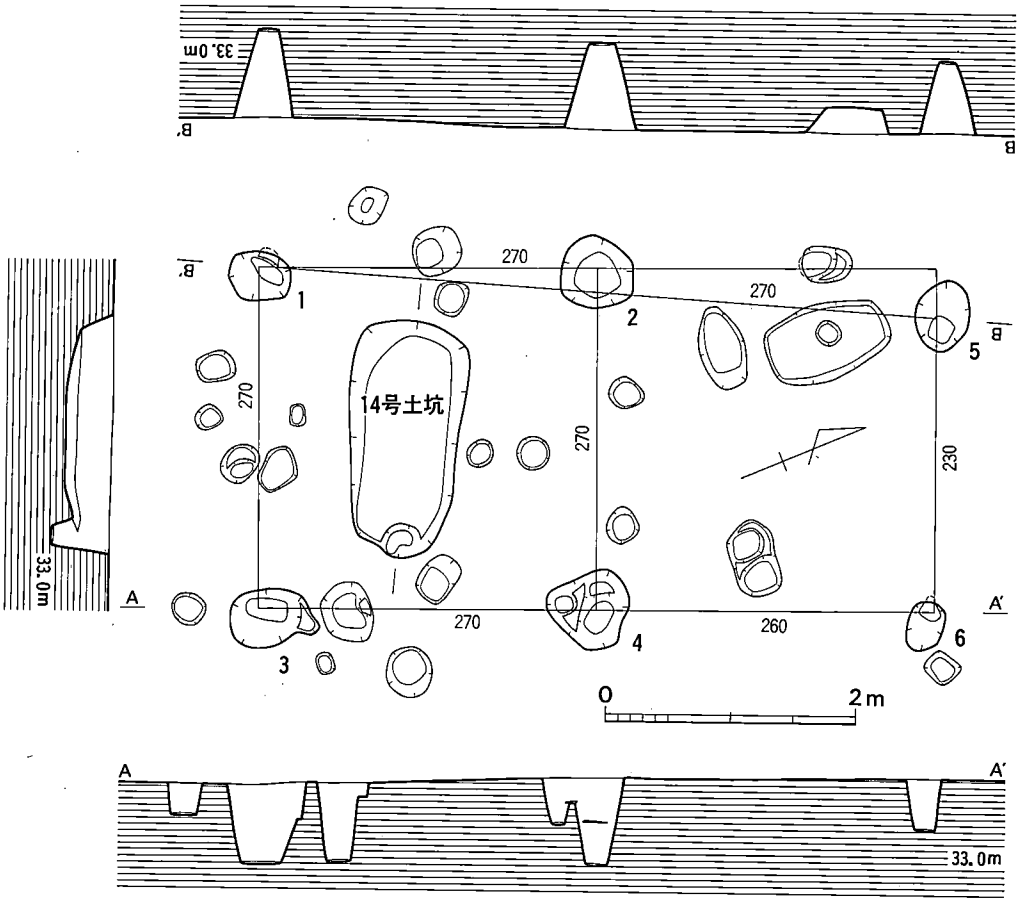


Photo. 6　パーソナルタワー



第77図　中道１号掘立柱建物跡実測図（1/60）



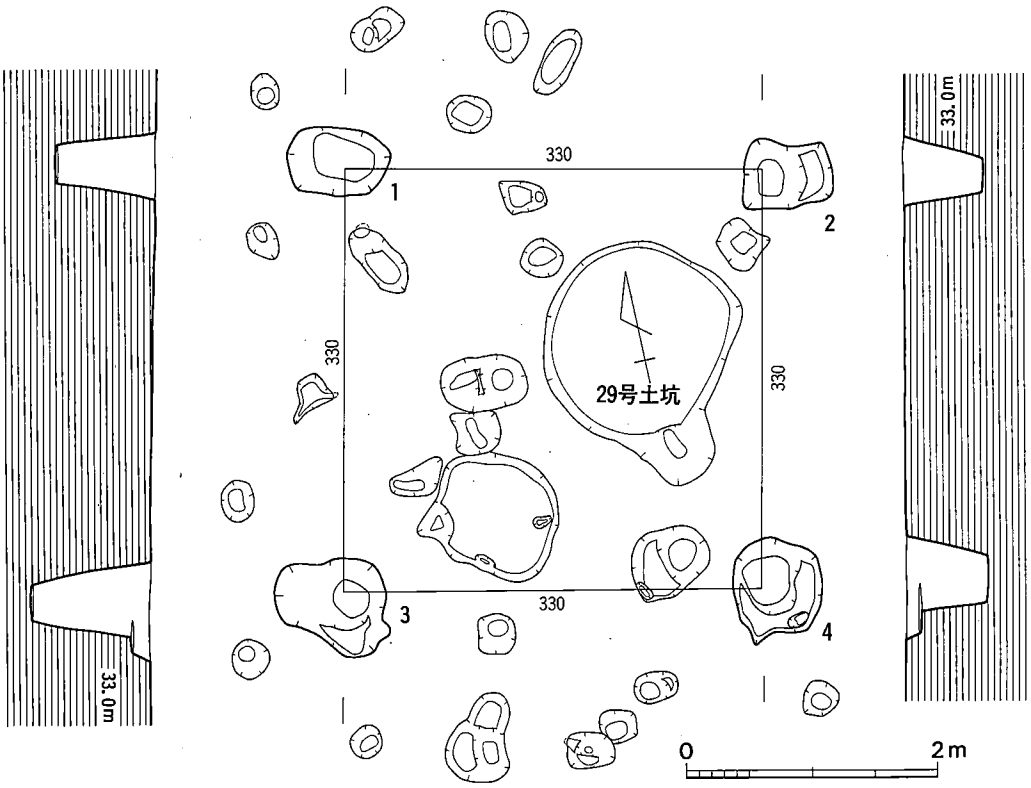
第78図　中道２号掘立柱建物跡、14号土坑実測図（1/60）

２号掘立柱建物跡［ＳＢ２］（図版30、第78図）

12号住居跡の西方にある。14号土坑を取り囲む１×１間の正方形建物であるが、その北側にあるＰ5とＰ６をも含めて1×2間の可能性もあるものとして図示した。主軸方位はN-22.5°-E。14号土坑と有機的関係があるとみるのが妥当だろう。各柱穴から弥生土器片が出土しているが図示しえない。

３号掘立柱建物跡［ＳＢ３］（図版30、第79図）

13号住居跡の東方にある。29号土坑を取り囲む１×１間の正方形建物で、柱間は3.3ｍと長い。主軸方位はN-12.5°-E。29号土坑との関係はわからない。Ｐ１・３・４から弥生土器片が出土しているが図示しえない。Ｐ４には投弾があった。



第79図　中道３号掘立柱建物跡、29号土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版55、第117図22）

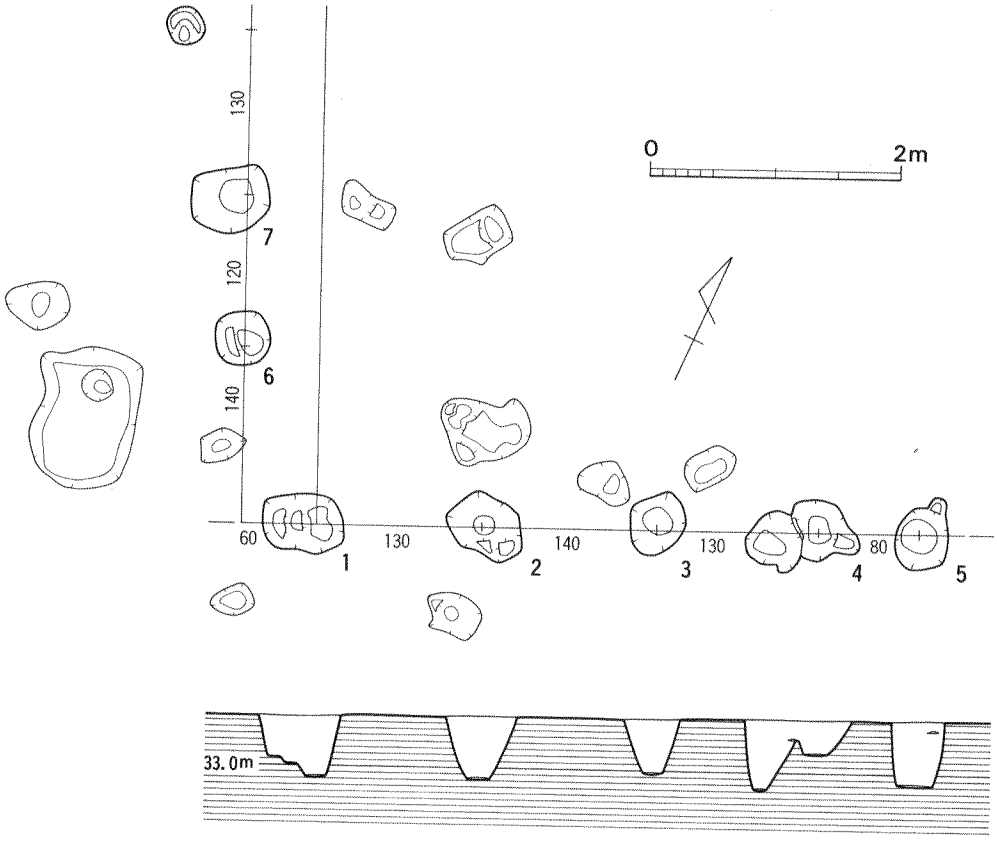
投弾形土製品である。ごく一部を欠失するがほぼ完形で長さ44.7㎜、径21.8㎜、重さ14.2ｇを測る。

ＳＷ１（図版9、第80図）

１号住居跡の東北にある。調査時にはＰ１～５とＰ６～８の柱筋が直角に近いかと思ったが、実際にはかなり開いている。Ｐ１～５はN-66.5°-Eの方位で柱が並ぶが、これは1号住居跡の主軸方位とほぼ同一である。但し柱間は均等とは言いがたい。しかし塀の可能性はあるものと考えたい。Ｐ４とＰ５から図示しえない弥生土器の小破片が出土しており、Ｐ５には丹塗りの壺片もあった。

ＳＷ２（図版3、第81図）

１号円形周溝遺構の北にあり、中世の２号溝に切られている。Ｐ１～４とＰ４～７の柱筋は直



第80図　中道ＳＷ１実測図（1/60）

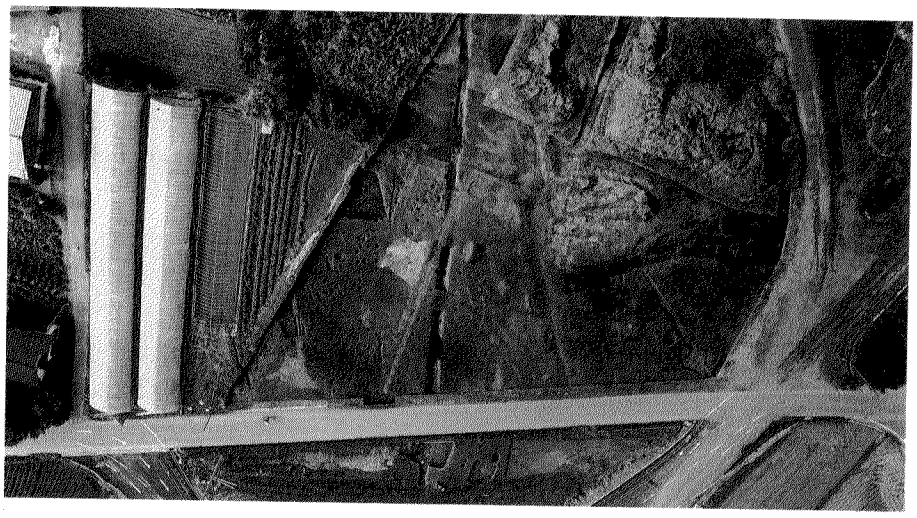
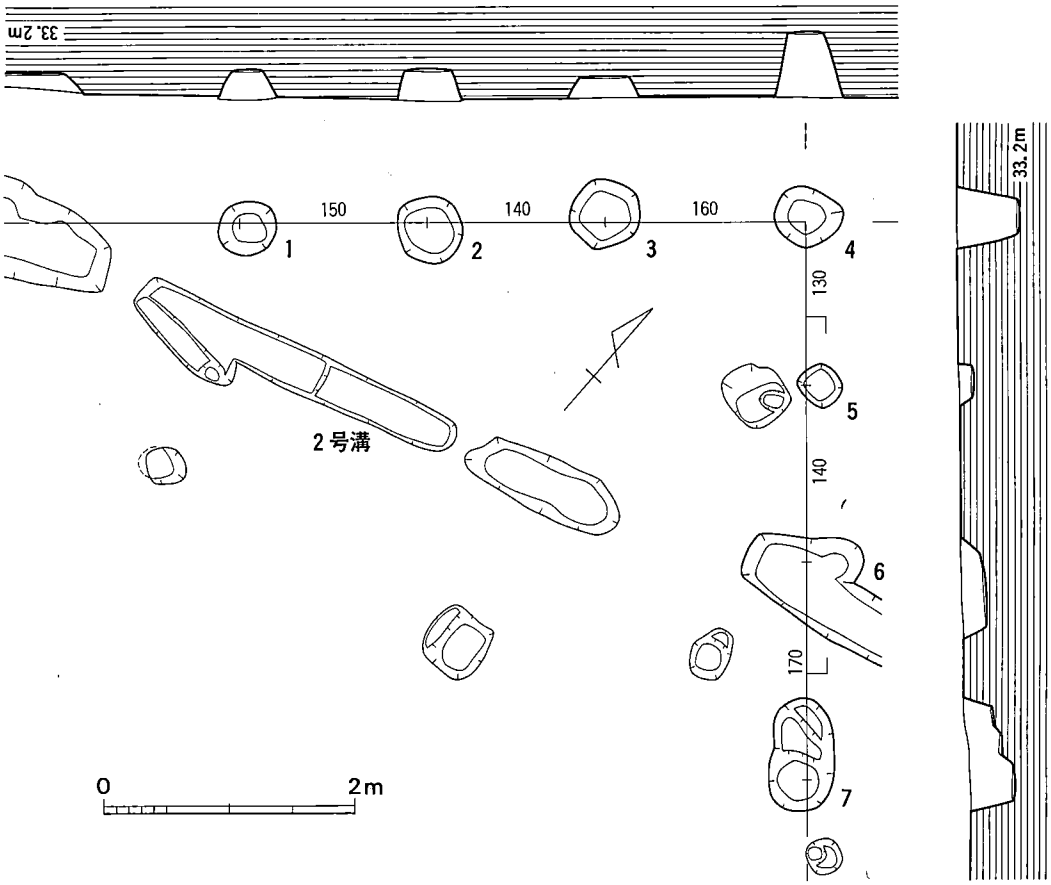


Photo. 7　１号住居跡、ＳＷ１ほか



第81図　中道ＳＷ２実測図（1/60）

角に折れるが、柱穴がしっかりと並ぶのはＰ１～4の筋であり、N-49°-Eの方位をとる。Ｐ１～Ｐ4の対面の柱は精査したものの見あたらなかった。その位置は１号円形周溝遺構の北方を区画する柱列のように受け取れるが如何か。出土遺物は全くない。

３．土坑

弥生時代の土坑は40基を報告する。これらの性格が一律でないことはもちろんであるが、中には丹塗土器多数が出土して明らかに祭祀用とみられるものもある。またいくつかは単なる塵芥捨て場としてのものもあろう。調査区内の西半部に多く分布するが、特に6号と14号住居跡の間、11・12号住居跡の北方、15・16号と23号住居跡の間、に多い。

1号土坑（図版31、第82図）

6号住居跡の東方にある。東西122cm、南北116cmの円形に近いプランで、深さ40cm。床面から15cmほど浮いて土器と黒曜石の打製石鏃が出土している。

出土遺物（図版50、第84図）

土器（第84図1～4） 1は丹塗磨研の袋状口縁壺である。袋部外面には稜線を図示しているが、これは明瞭なものではない。頸部との境は僅かに沈線状となる。口径9.6cm、底径7.8cm、胴部径23.5cm、器高26.3cm。4号土坑下層出土の破片と接合している。2の鉢は復原口径21.6cm。3は高坏で丹塗磨研。4も丹塗磨研。

2号土坑（図版31、第83図）

6号住居跡の東南にあり、大半は調査区外にあって北辺の160cmしかわからない。方形プランであろう。黒褐色土を埋土としていた。押型文土器片も出土している。

出土遺物（図版50、第84図）

土器（第84図5～8） 5は大甕の胴部片でコの字突帯2条を貼り付けている。7は二次熱を受けている。8の甕は内外の一部が黒塗りである。復原口径26.4cm。

3号土坑（図版14、第83図）

6号住居跡の南にあってそれに切られている。長軸130cmの楕円形プランであろう。

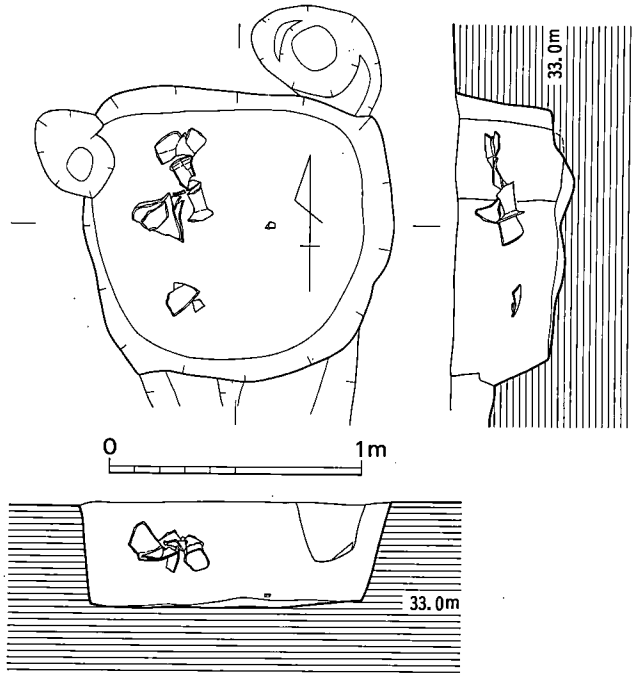
出土遺物（第84・127図）

土器（第84図9・10）ともに甕の口縁部片である。

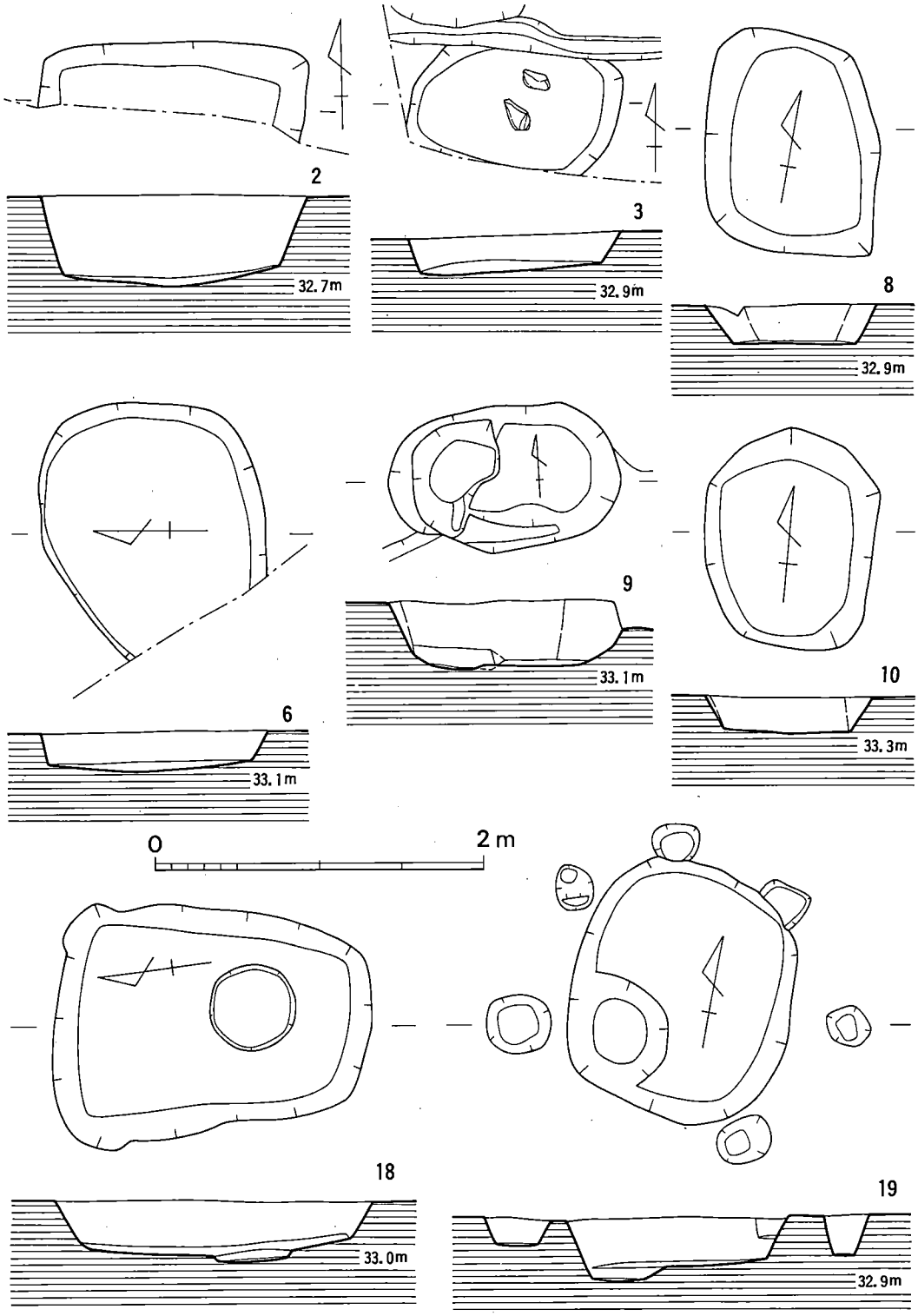
石製品（第127図122） 玄武岩質の台石で全長25cm。

4号土坑（図版34、第85図）

6号住居跡の東にある。床面は径170cmの円形プランで深さ155cmが遺存していた。断面が袋状になるところがある。調査時のメモによると、「本来は天井があったものか。検出面より50cmあたりで地山の黄



第82図 中道1号土坑実測図（1/30）

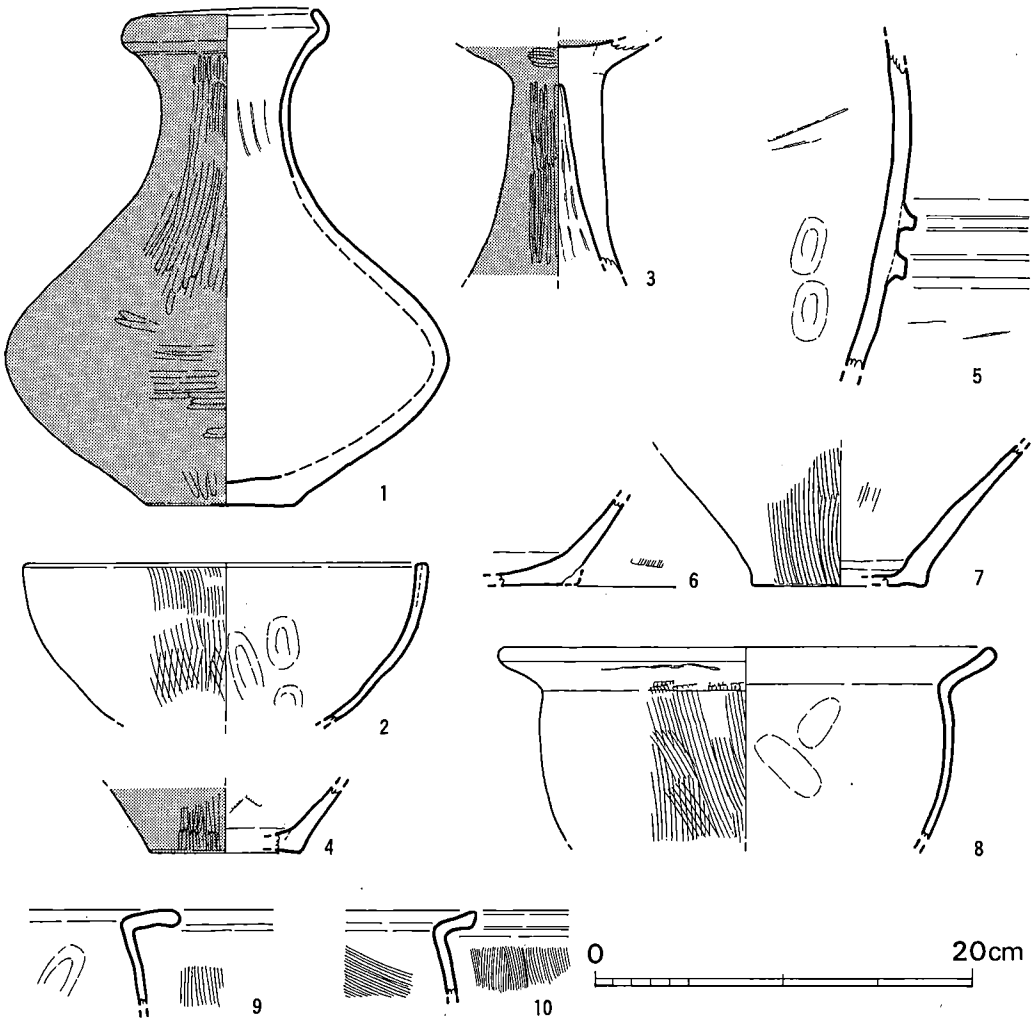


第83図　中道2・3・6・8～10・18・19号土坑実測図（1/40）

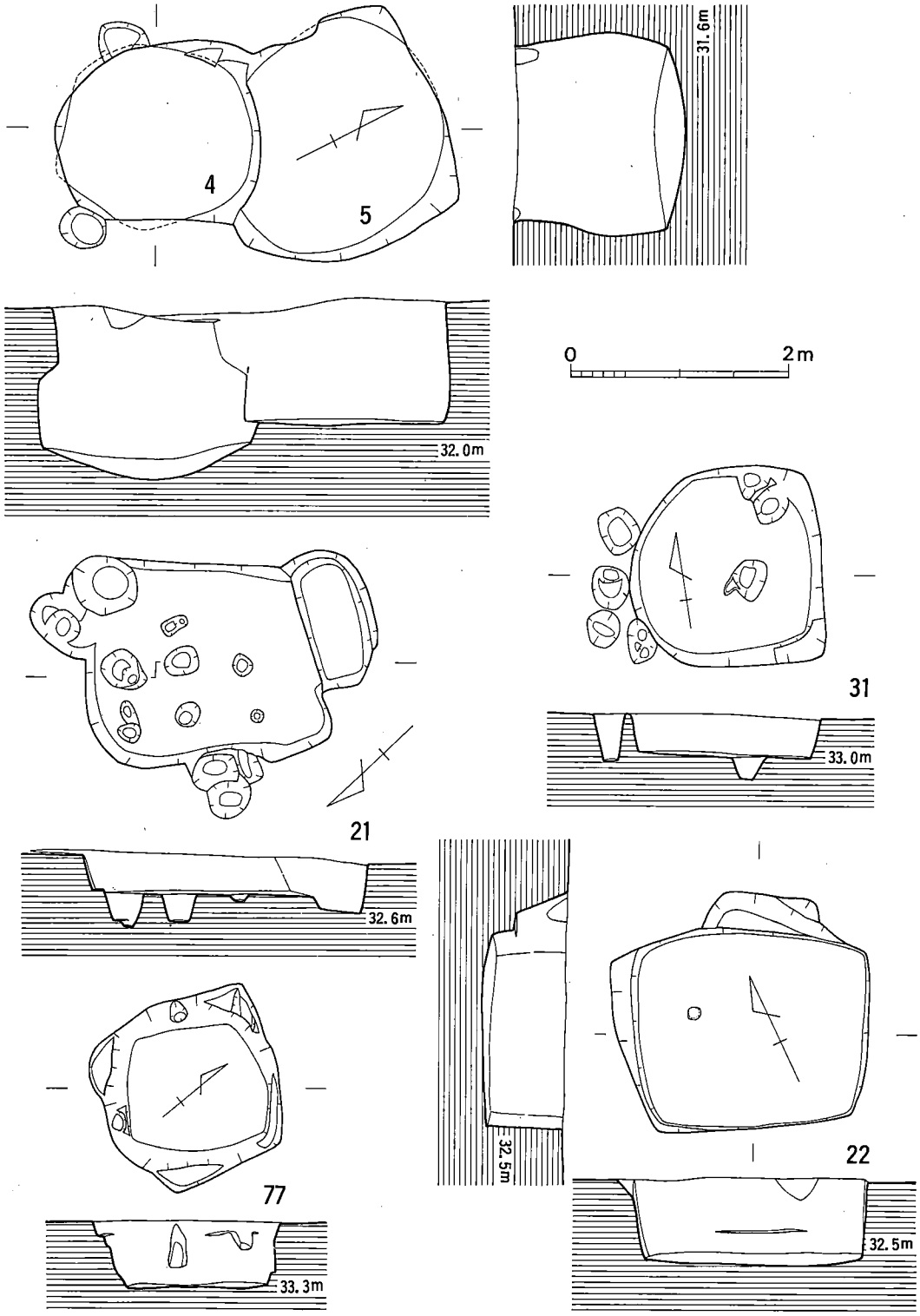
褐色砂礫土のブロックが見られ、この落下の様子を見ると5号土坑とは一連のものと考えられるが、先後関係があるとすれば4号土坑の方が新しい。床面近くになって炭化物が多かった」と記している。いま考えると切り合いは逆のような気がする。

出土遺物（図版50、第86図）

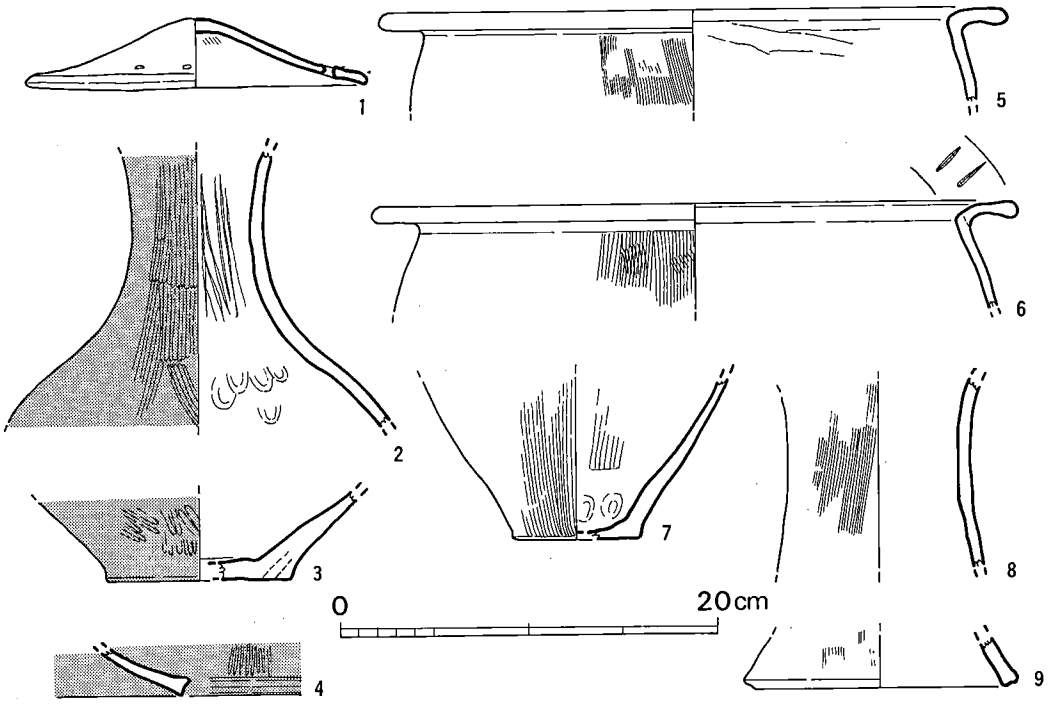
土器（第86図1～9） 1は蓋で口径18.2cm、器高3.7cm。2～4は丹塗磨研で、2は袋状口縁壺になろう。3の復原底径は9.9cm。4は高坏の裾部と見られる。5・6の甕はともに外面に煤が付着している。6の口縁部上面の刻みは5本が残る。8・9は器台。1・2・4・7は下層からの出土。



第84図 中道1～3号土坑出土土器実測図（1/4）



第85図　中道4・5・21・22・31・77号土坑実測図（1/60）



第86図　中道4号土坑出土土器実測図（1/4）

5号土坑（図版34、第85図）

4号土坑と重複する。床面は径190～215cmの楕円形プランで深さ115cmが遺存していた。断面は袋状になる。床面には焼土、炭化物があった。

出土遺物（図版50、第87・127図）

土器（第87図1～7）　1は無頸壺で丹塗磨研である。3の甕は口径34cm。5の跳上げ口縁は特徴的である。6の外底面には籾痕がある。底径8.4cm。

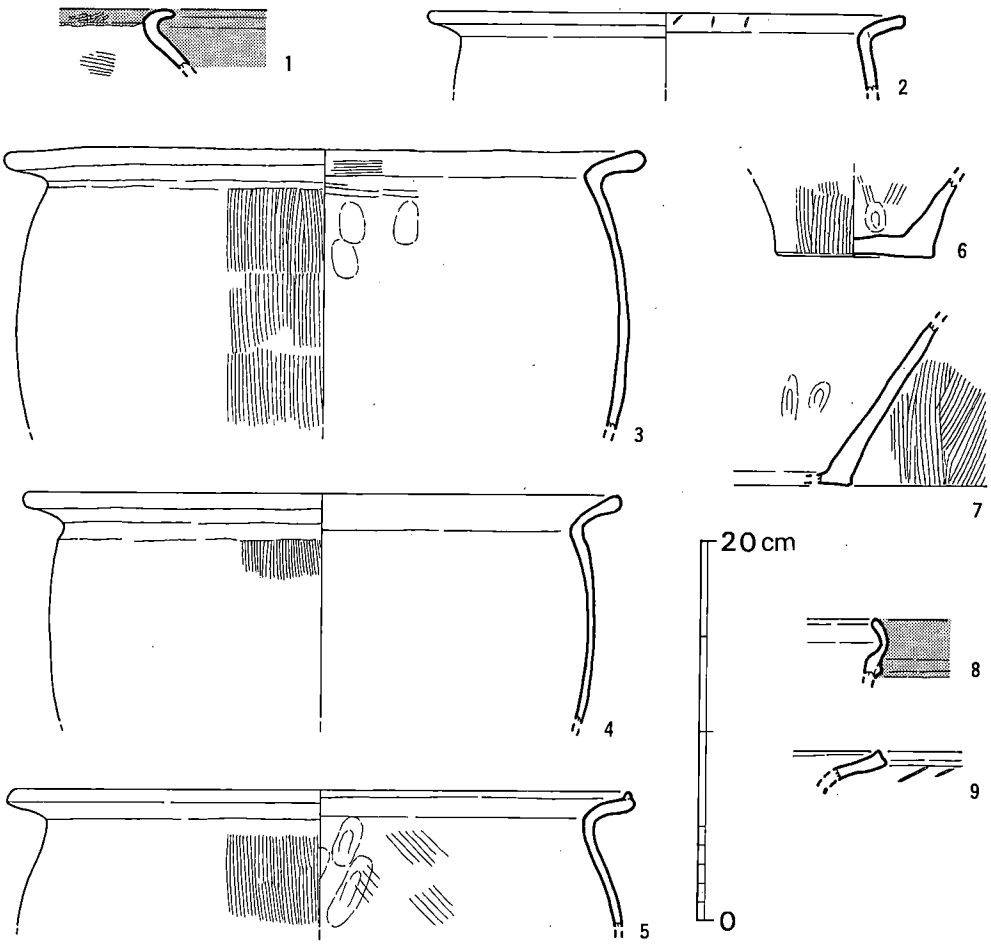
石製品（第127図123・124）　ともに玄武岩質の台石で、123の表面は剥離が多いが面はよく擦れている。全長30.2cm。124は表裏ともよく擦れている。

6号土坑（図版3、第83図）

7号住居跡の北西にあり、一部は調査区外にかかる。135×155＋cmの楕円形プランであろう。深さ24cmと浅い。土器と炭化材、炭化した種子が出土した。

出土遺物（第87図）

土器（第87図8・9）　8は袋状口縁壺で丹塗磨研である。9の甕は外面に煤が付着する。



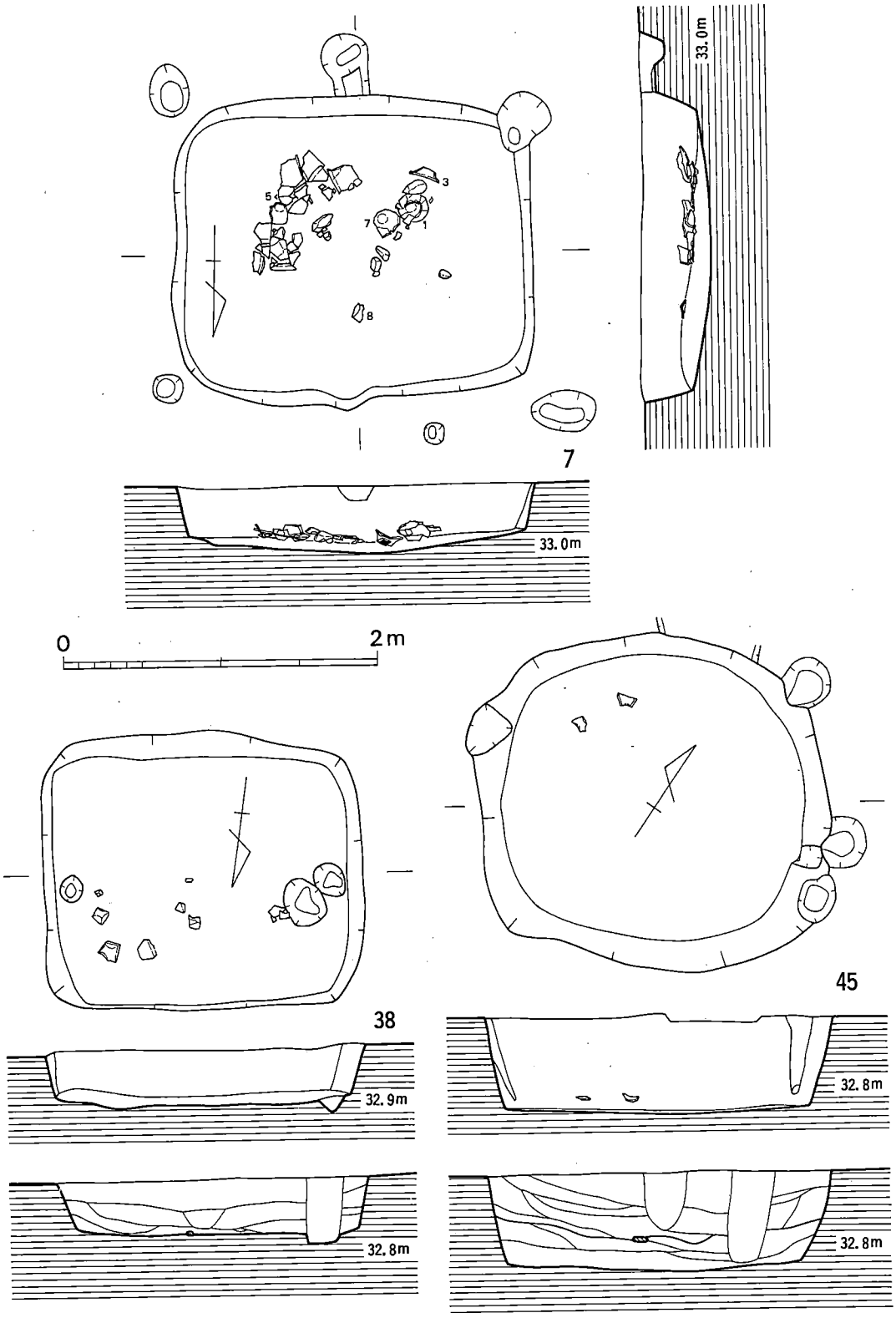
第87図　中道5・6号土坑出土土器実測図（1/4）

7号土坑（図版31、第88図）

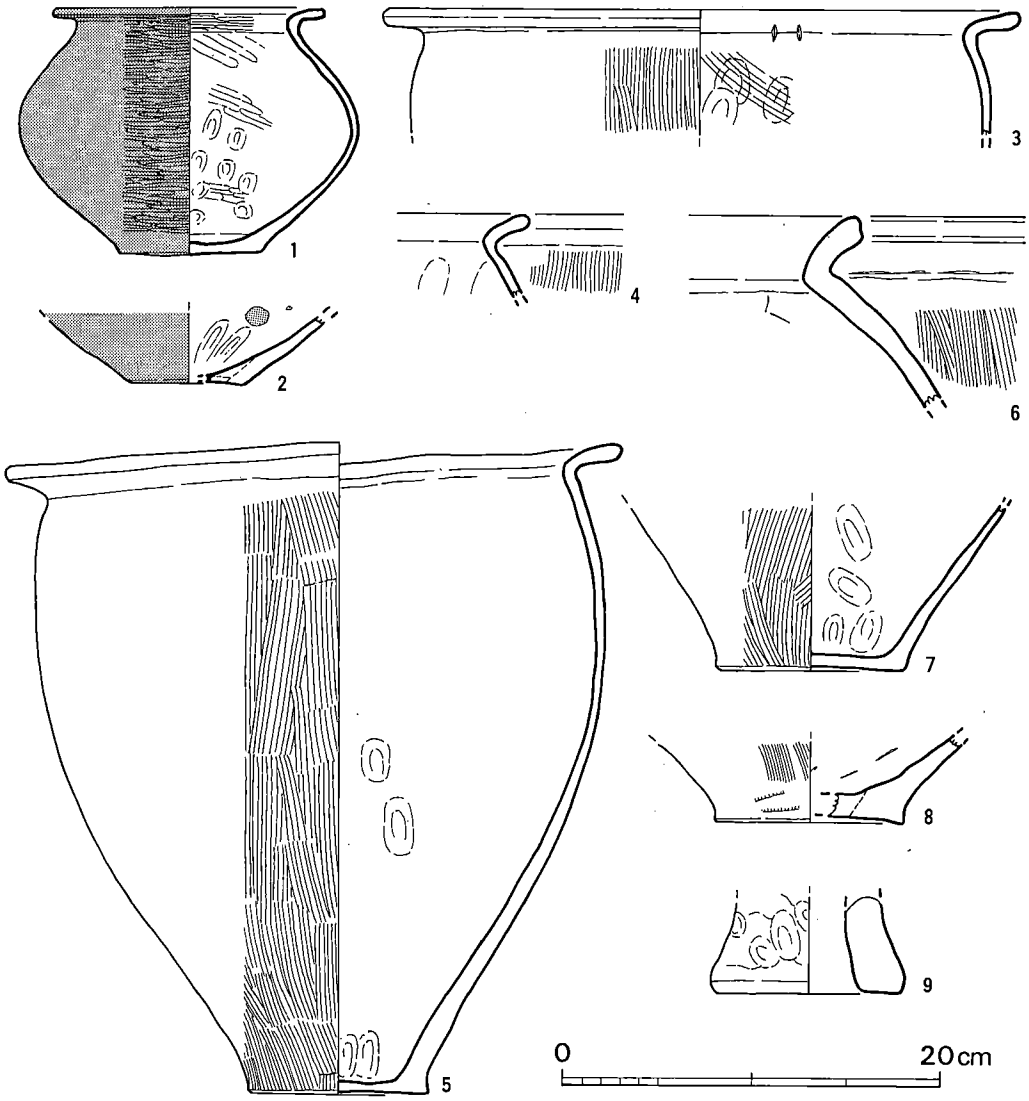
7号住居跡の北西にある。南北190cm、東西225cmほどの隅円長方形プランで、深さは43cmが残る。主軸方位はN-88°-E。床面積は3.49㎡を測る。南西隅には重複して、残りの3コーナーには坑外にピットがあり、これらは上屋に関連するものと考えられる。床面から7cmほど浮いて土器、軽石等が出土した。

出土遺物（図版50、第89図）

土器（第89図1～9）　1は丹塗磨研の無頸壺で口径14.3cm、底径7.8cm、胴径17.8cm、器高13cm。2も丹塗磨研で壺の底部になる。5の外面が黒いのは黒塗りらしい。口径32.7cm、底径9.5cm、器高34.5cm。6は大型の甕になる。9は支脚。



第88図　中道7・38・45号土坑実測図（1/40）



第89図　中道7号土坑出土土器実測図（1/4）

8号土坑（図版14、第83図）

3号住居跡の東にある。南北135cm、東西105cmほどの隅円長方形プランで、深さは25cmが残る。黒褐色土を埋土としていた。

出土遺物（第90図）

土器（第90図1・2）　ともに甕で1は復原口径30cm。2は跳上げ口縁。

9号土坑（図版34、第83図）

9号住居跡の北方にあり、2号溝に切られている。85×140cmの長楕円形プランで、西側が一段深くなる。深さは最大40cm。

出土遺物（第90図）

土器（第90図3・4） 3の甕の外面は黒塗りの可能性がある。復原口径34.5cm。4は壺の底部であろう。

10号土坑（図版34、第83図）

5号住居跡の東にある。105×135cmの楕円形プランで、深さ22cmが残る。

出土遺物（第90図）

土器（第90図5） くの字形をした甕の口縁部片である。

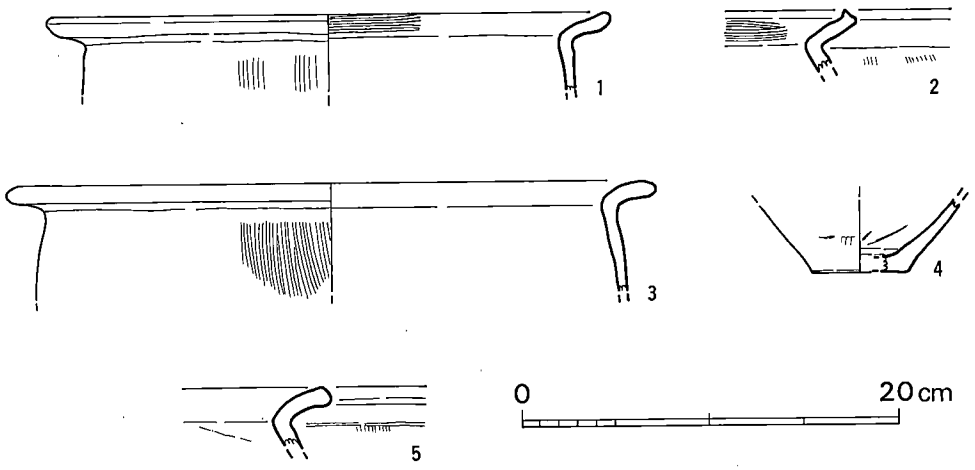
11号土坑（図版32、第91図）

1号掘立柱建物跡の南、1号溝の北にある。上面で109×132cmの楕円形プランをなし、深さ90cmが残る。黒色土を埋土としていた。埋土のほぼ中位、床面から35cm前後の所に土器と台石、炭化材、焼土が検出された。

この土坑から出土した炭化材をC14年代測定にかけたところ1810±75B.P.の年代が得られている。

出土遺物（図版50、第92・127図）

土器（第92図1～11） 1は丹塗りの壺で、頸・肩部の断面を見ると平たい粘土の貼り合わせで成



第90図 中道8～10号土坑出土土器実測図（1/4）

形しているらしい。2は鉢。3は丹塗磨研の甕で、口縁端は垂れ下がる。復原口径34cm。8の底部はかなり薄い。10・11は支脚。11の孔は貫通していない。

石製品（第127図125～128） ともに作業台石としてよく、125・128は玄武岩質。125は全長34.7cm。126は凝灰岩質で全長31.2cm。127は花崗閃緑岩らしく二次熱を受けている。

12号土坑（図版32、第91図）

11号土坑の東南、1・2号溝の間にある。上面で南北135cm、東西178cm、床面で116×150cmの楕円形プランをなし、西側は二段掘りになる。床面は東側が低くなり最深103cmを測る。黒色土を埋土としていた。埋土上位に多数の土器が投棄された状態で検出され、なかに炭化材、台石、を含んでいる。上層からは須恵器片も出土した。

出土遺物（図版51・52、第93～96図）

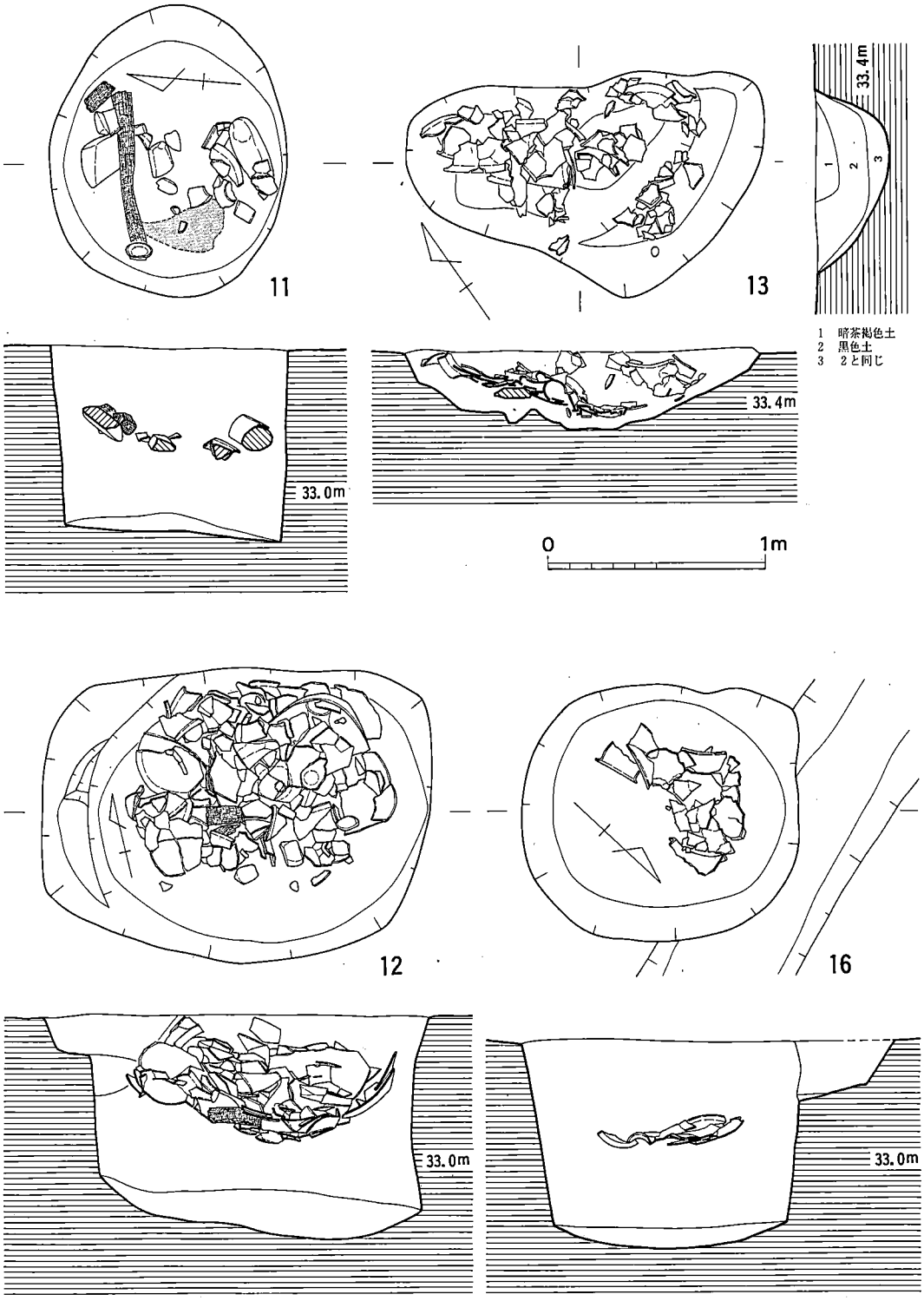
土器（第93～96図1～35） 1は丹塗磨研の頸のあまり長くない袋状口縁壺でほぼ完形である。口径5.8cm、底径6.1cm、胴径16.3cm、器高18.4cm。2の壺も丹塗りで口唇部が少し窪んでいる。口径23cm。4の鉢は口縁部が内傾気味となる。5～24の甕はL字とくの字口縁とがあるが、後者が多い。6の口縁上面には藁のような原体で刻みが施される。口径26.4cm。7は口径28cm。9は跳上げ口縁となり口径25.3cm。外面には煤が付着する。10～12は丹塗りであるが、10・11は磨研の鋤先口縁であって口縁下と胴部上位に断面M字突帯を貼り付けていて12とは口縁・突帯の形態が異なる。10は口径30cm、底径6.8cm、器高29.8cm。内面にコゲまたは煤が付着する。11は口縁上面に暗文が施され、また内面中位まで丹塗りである。口径34.9cm、底径6.7cm、器高31.8cm。12は粗い胎土で口径30.6cm、底径8.4cm、器高32.5cm。20～24は胴径が口径を凌駕する器形となる。23は球形胴をなし、口径32.8cm、胴径38.8cm。24は胴部上半と下半を図上で復元した。口径39.2cm、底径12.2cm、胴径64.2cm、器高73.8cm。16・17・19は外面に煤が付着している。25・29の内面にはコゲまたは煤が付着する。30～33は器台でいずれもくびれがやや上位にあり、32はそれが著しい。30の口径14cm、裾径16.3cm、器高19.3cm。34・35は支脚で、34は強い二次熱を受けている。35は器高10.3cmで、底面には籾痕、藁圧痕がある。

13号土坑（図版33、第91図）

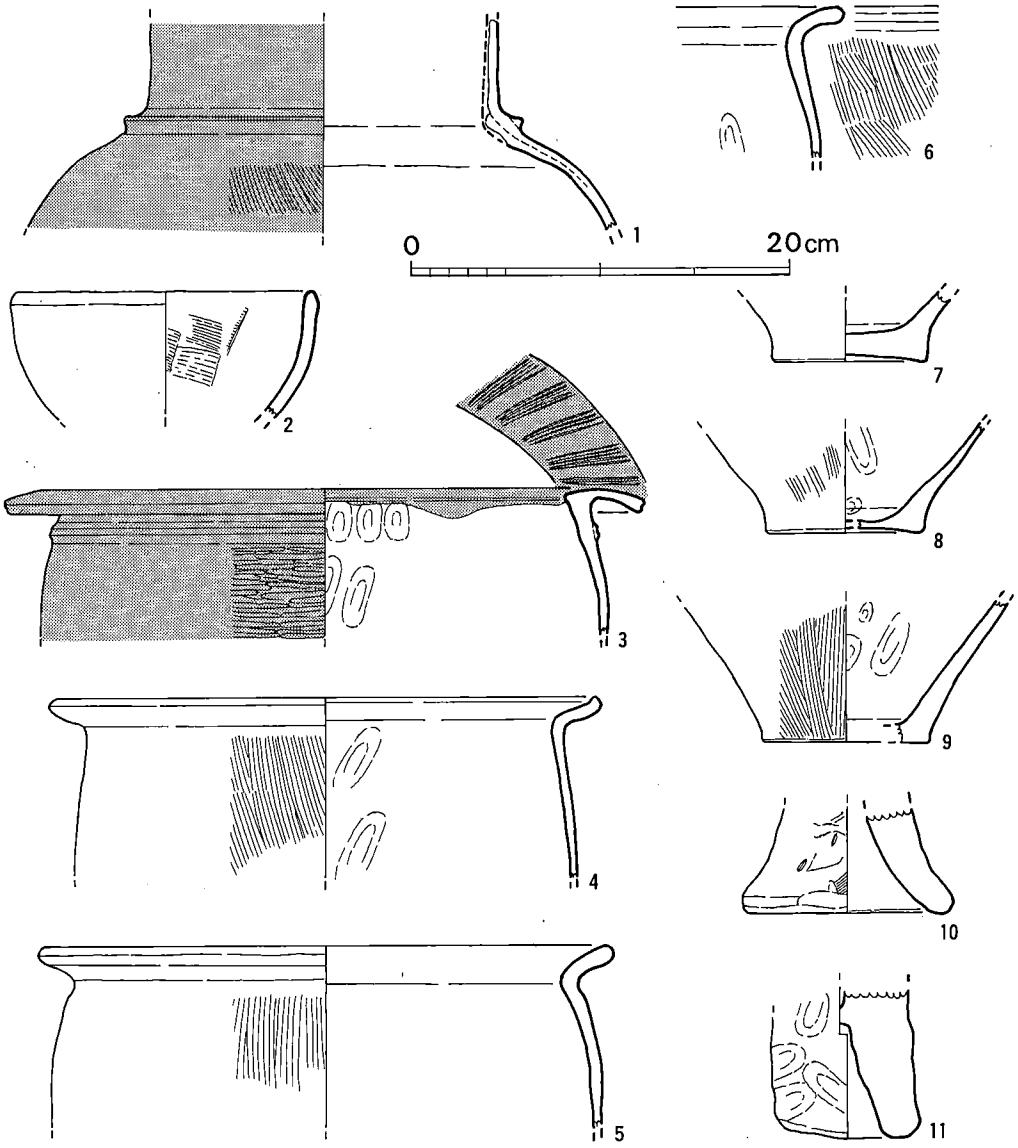
12号土坑の南、2号溝の北にある。上面で南北101cm、東西165cmを測る不整形プランで、底面は中央が最も深くなって最深35cmである。黒色土を埋土としていた。底面から若干浮いた埋土中に多数の土器が投棄された状態で出土し、なかに炭化材、投弾、台石もあった。

出土遺物（図版53・55、第97・98・117・127図）

土器（第97・98図1～11） 甕と器台しか出土していない。1～10の甕はL字とくの字口縁とがあるが、ともに胴径が口径を上回るものがある。2は 4と同一個体の可能性がある。3 は口径34



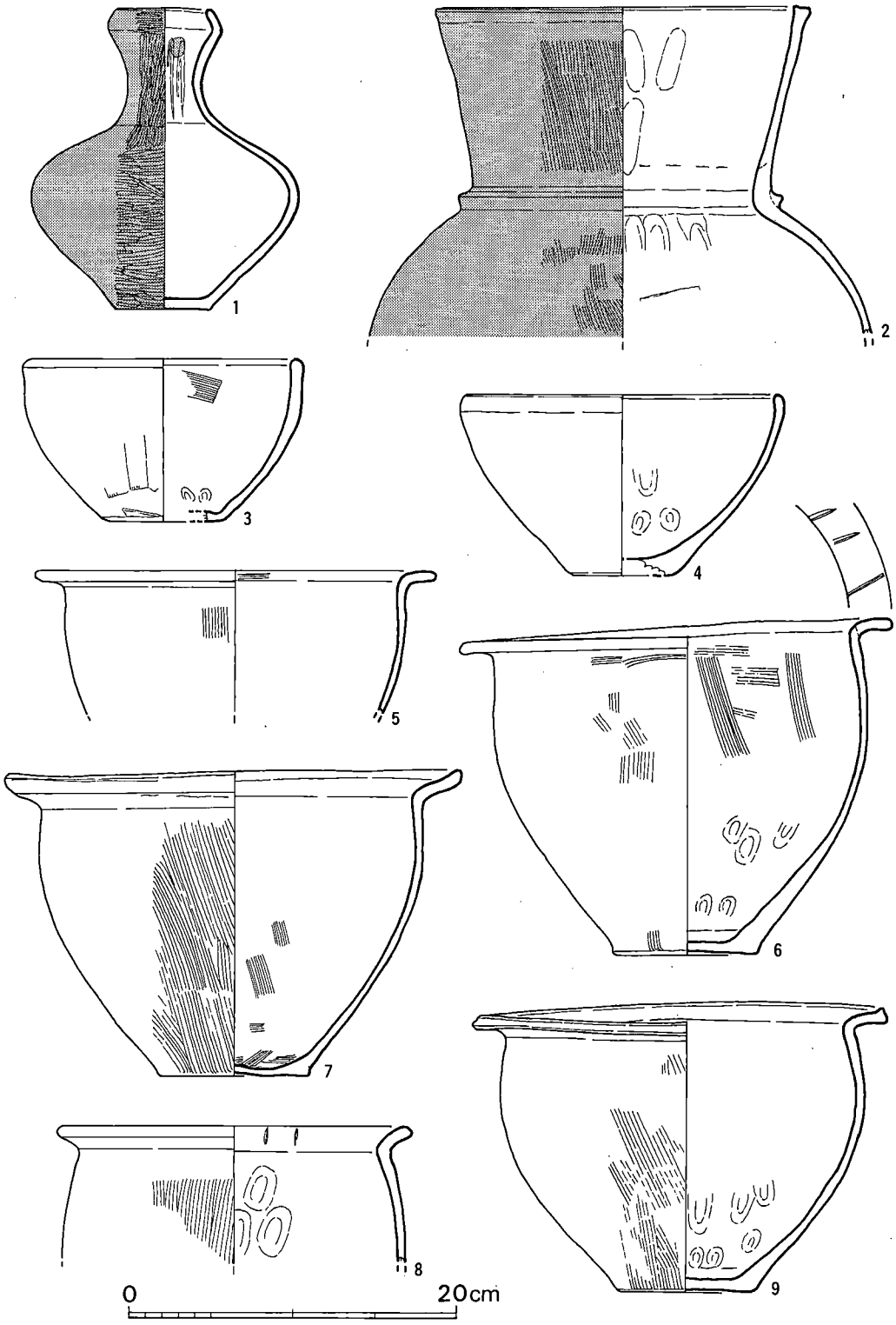
第91図　中道11～13・16号土坑実測図（1/30）



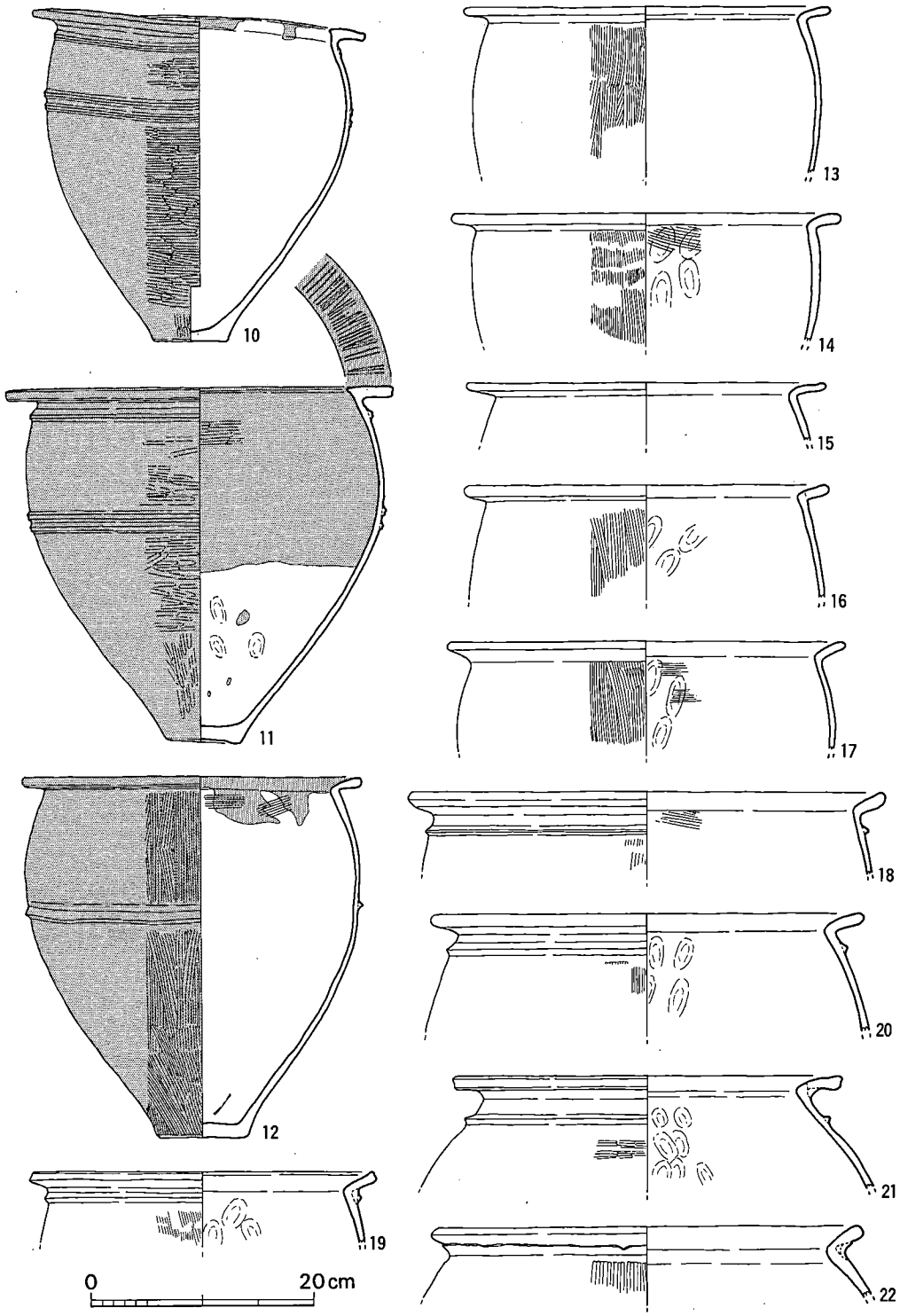
第92図　中道11号土坑出土土器実測図（1/4）

cmで10が底部か。7は口径33.3cmで9がその底部である。8は外面に煤が付着する。復元口径22.7cm。11の器台は外面に黒塗りの所がある。口径12.8cm、裾径16cm、器高20.2cm。

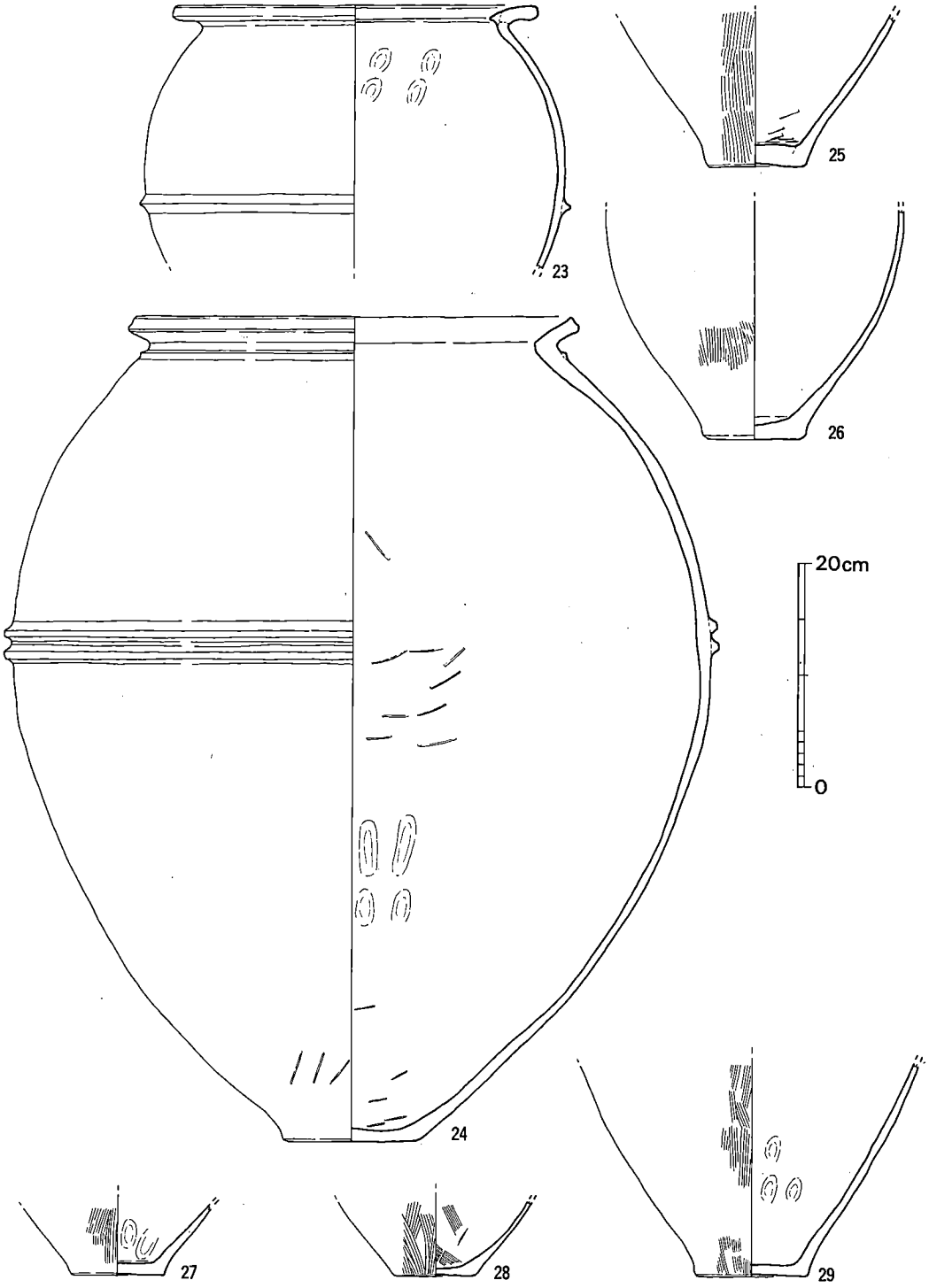
土製品（第117図17～19）　投弾形土製品であり、17は完形だがつくりは雑である。長さ36.5mm、径23mm、重さ12.5g。18も完形で長さ37.6mm、径23mm、重さ15.3g。19も完形で断面は四角に近



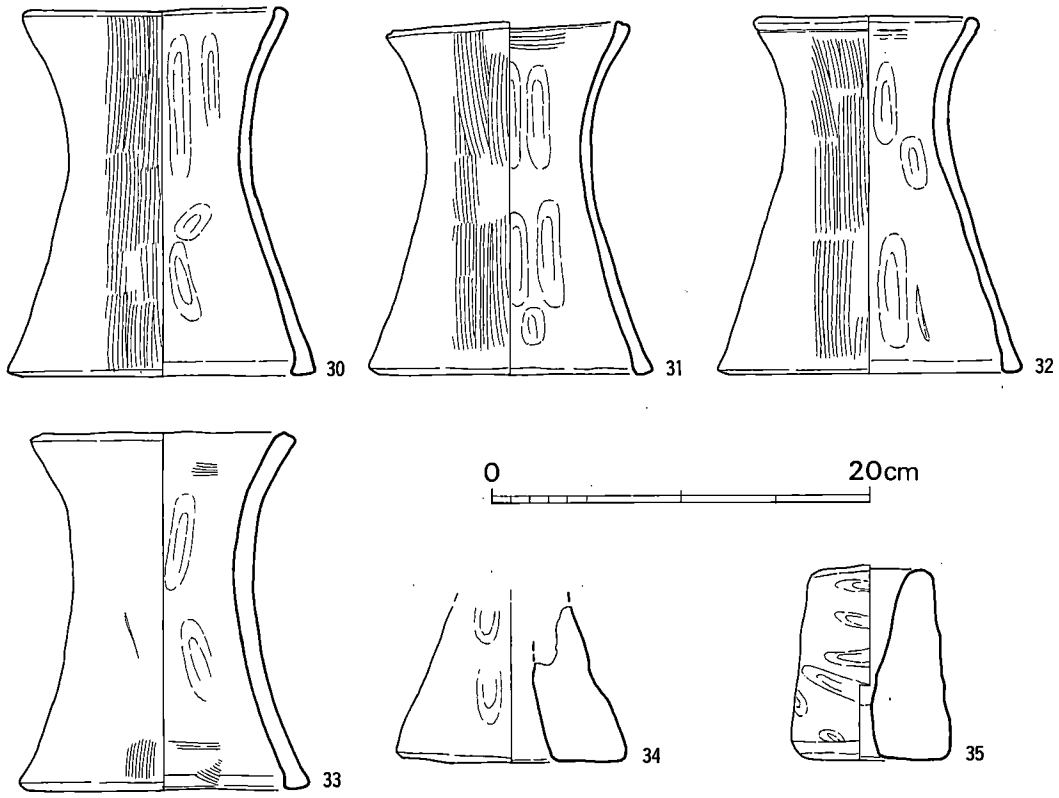
第93図　中道12号土坑出土土器実測図１（1/4）



第94図　中道12号土坑出土土器実測図２（1/6）



第95図　中道12号土坑出土土器実測図３（1/6）



第96図　中道12号土坑出土土器実測図４（1/4）

い。長さ41㎜、径21.9～23.1㎜、重さ16.7g。

石製品（第127図129）　硬砂岩の台石である。長さ19.3cm。

14号土坑（図版34、第78図）

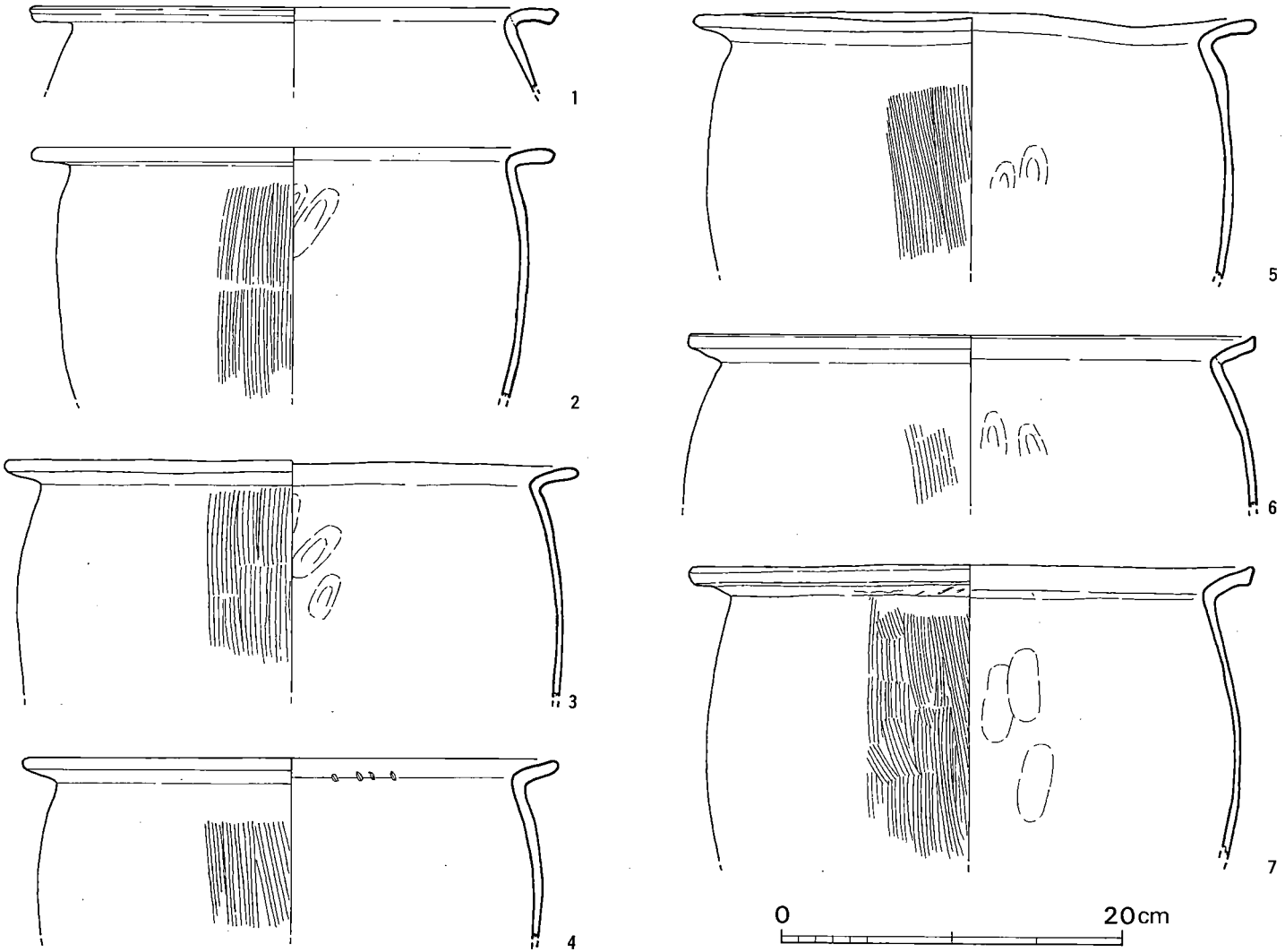
2号掘立柱建物跡のＰ１～４に囲まれた中にある。床面で幅65cm、長さ165cm、深さ37cmを測り、東端部にはピットがある。主軸方位はN-63°-W。黒色土を埋土としていた。

出土遺物（第99図）

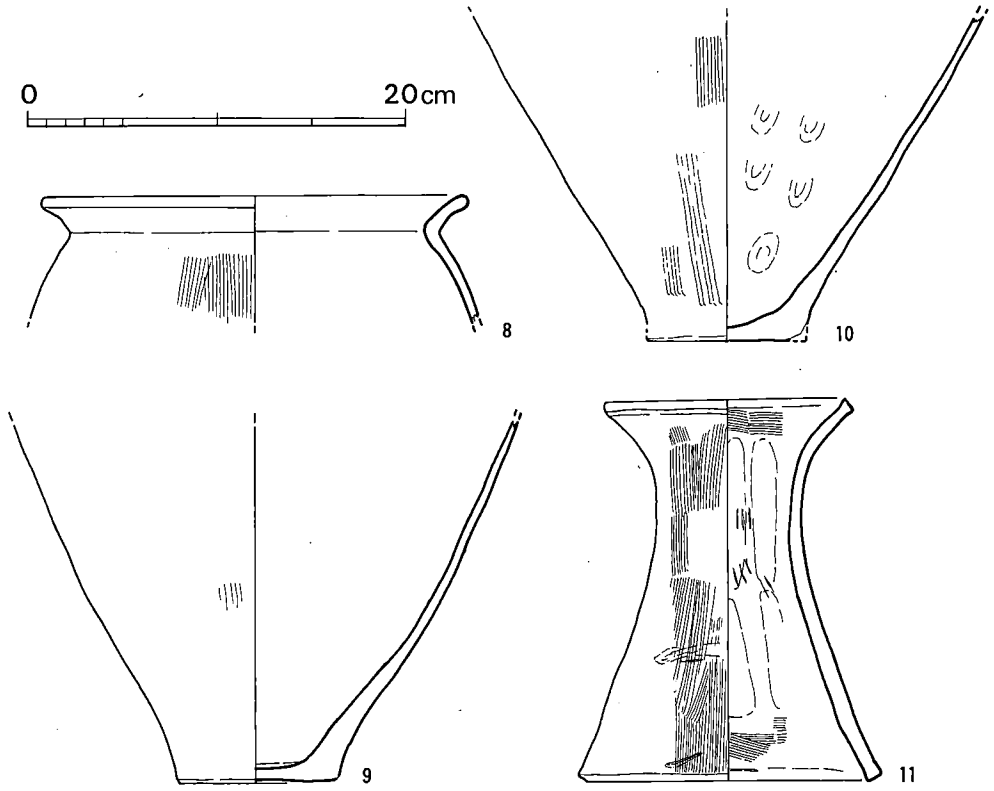
土器（第99図1～6）　1は丹塗りであるが甕とすべきか。2は脚台であろうか。3は器壁が薄い。4は外面に煤が付着する。復原口径30.4cm。5は大型品。

16号土坑（図版33、第91図）

2号掘立柱建物跡の西にあり、2号溝に切られている。上面で117～127cm、床面で94～106cmの楕円形プランをなし、深さ93 cm を測る。黒色土を埋土としていた。埋土中位にて土器群が出



第97図　中道13号土坑出土土器実測図１（1/4）



第98図　中道13号土坑出土土器実測図２（1/4）

土した。

出土遺物（図版53、第99図）

土器（第99図7～12）　7は蓋。8の甕は外面が丹塗りである。10は外面に煤が付着する。口径34.7cm、底径8.1cm、器高33.8cm。

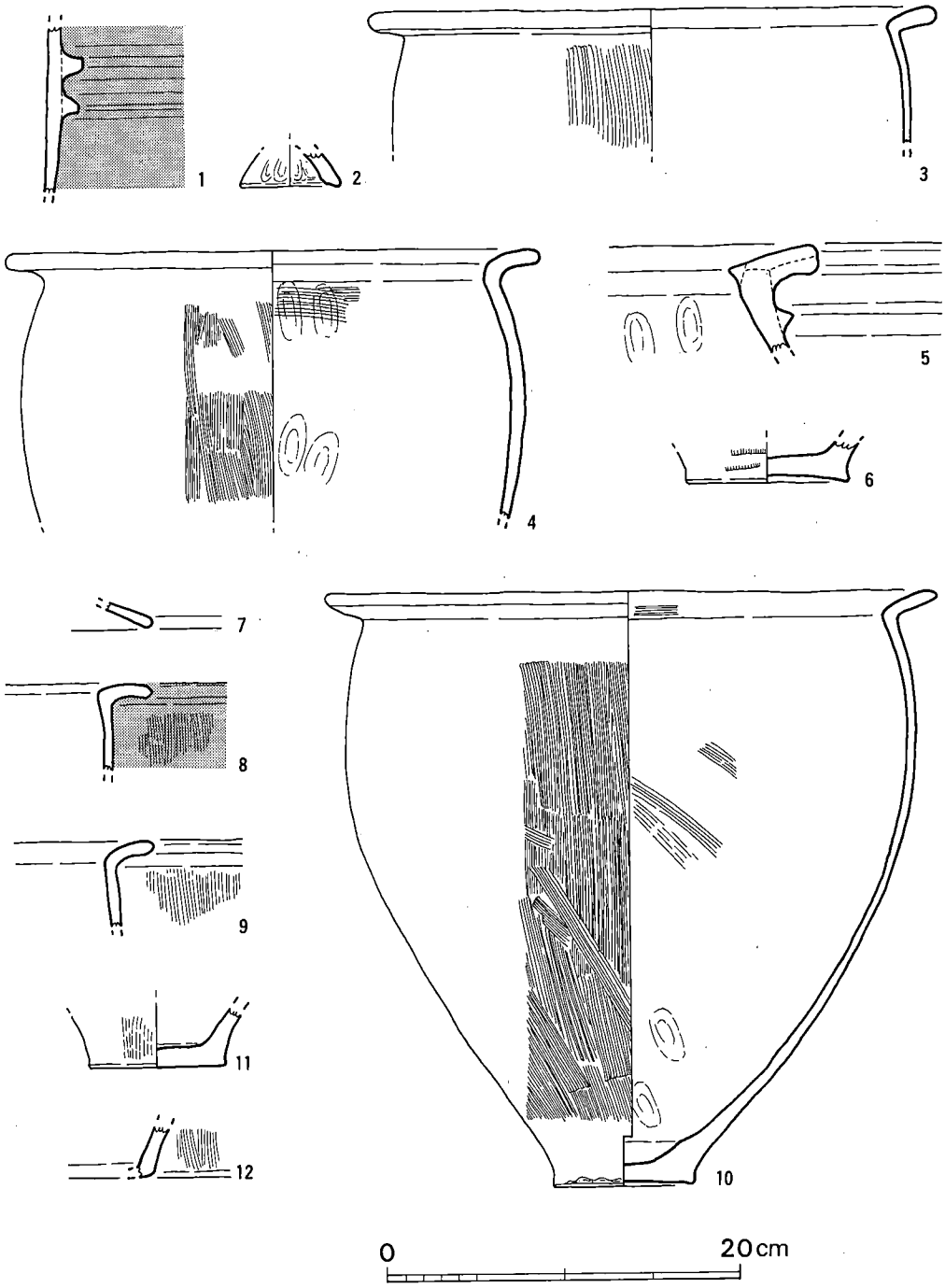
17号土坑（図版19、第47図）

13号住居跡に切られてその西にある。床面で南北170cm、東西は110cmを越す規模になる。深さは13号住居跡とほぼ同じ40cmである。黒色土を埋土としていた。土器と上層から投弾が出土している。

出土遺物（図版55、第100・117図）

土器（第100図1～4）　1は丹塗磨研の無頸壺で復原口径16cm。2も丹塗磨研で高坏の坏部であろう。3は甕。4は特異な器形で器台とすべきか。裾径15cm。

土製品（第117図20）　投弾形土製品であり、約1／4を欠失する。他の出土品と比較すれば焼成



第99図　中道14・16号土坑出土土器実測図（1/4）

はよいほうである。現存長39.2㎜、径26㎜、重さ18.5g。

18号土坑（図版35、第83図）

13号住居跡の南にある。床面で南北165cm、東西80～118cmを測る長台形プランである。深さ33cm。床面の南寄りに径51cmの浅いピットがある。主軸方位はN-8°-E。遺物は少ない。

出土遺物（第100図）

土器（第100図5～7） 5は丹塗磨研の無頸壺の破片。6も丹塗磨研で高坏の裾部であろう。7は甕の口縁部片である。

19号土坑（図版3、第83図）

18号土坑の東南にある。床面で南北135cm、東西112cmを測る隅円長方形プランで、深さ26cm。西南隅に深さ10cmほどのピットがある。床面には焼土があった。この坑の周囲にある4個と、北壁に接する2個のピットは全体でこれを取り囲んでいるように見える。無関係ではないのかもしれない。出土遺物はない。

20号土坑（図版60、第141図）

106号住居跡の北東部で切られている。床面で170～190cmの楕円形プランをなし、深さは30cmである。黒色土を埋土としていた。土器と台石のほか炭化材、押型文土器片も出土している。

出土遺物（第100・127図）

土器（第100図8～14） 8は丹塗磨研の蓋で復原口径14.1cm。9も丹塗磨研で高坏の坏部であろう。10も丹塗磨研で甕もしくは無頸壺になる。11は甕の底部。12の甕は復原口径23.2cm。13は器台で裾径14.6cm。14は支脚で内径はもっと大きくなるようだが外径の復原は8.9cmとなる。

石製品（第127図130・131） 130は砂岩質の台石で全長25.6cm。131は片岩の台石である。上面はよく擦れている。

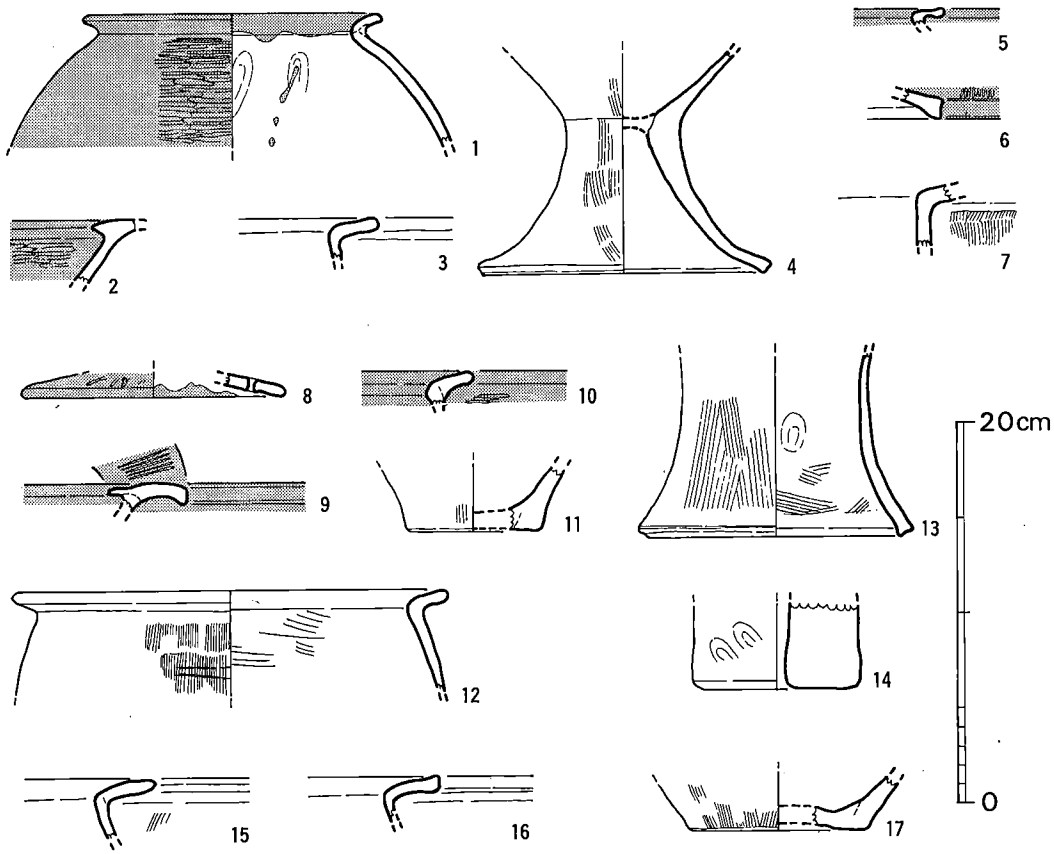
21号土坑（図版35、第85図）

14号住居跡の東にある。床面で南北200cm、東西150～170cmを測る長方形プランで、深さ35cm。主軸方位はN-38°-E。黒色土を埋土としていた。南端に幅45cm、長さ100cm、深さ45cmの東西に長い土坑が付随する。土器は少なく、台石と押型文土器片も出土している。

出土遺物（第100・127図）

土器（第100図15～17） 15・16はまだL字形に近い口縁部の甕である。16は外面に煤が付着する。17は外底部に籾痕がある。

石製品（第127図132） 玄武岩質の台石で全長37.7cm。



第100図　中道17・18・20・21号土坑出土土器実測図（1/4）

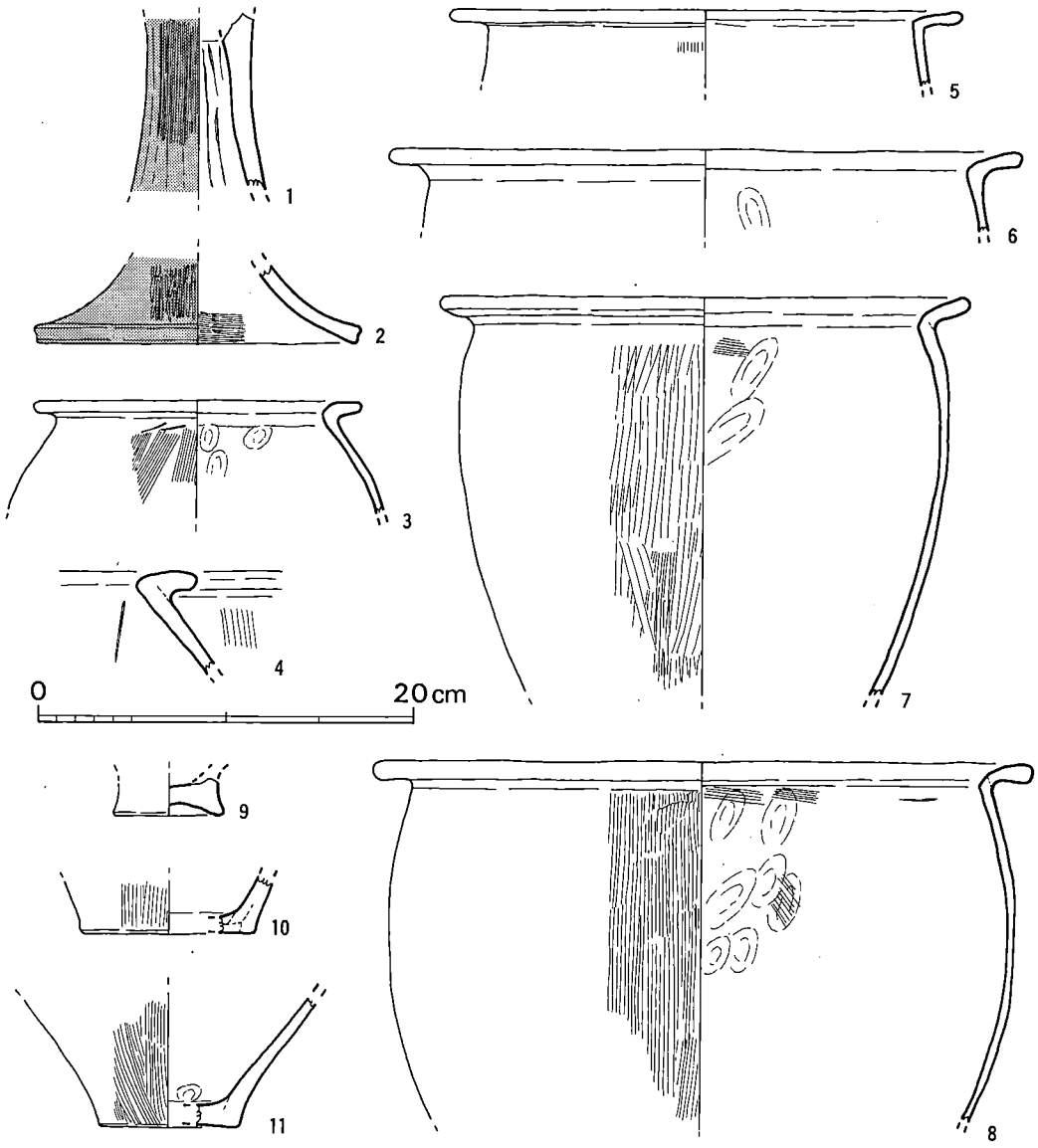
22号土坑（図版35、第85図）

14号住居跡の東、21号土坑の西南にある。床面で南北140～175cm、東西175～205cmを測る長方形プランで、深さは80cmと深い。主軸方位はN-64°-W。北辺の外側に突出部がある。黄色土と黒色土の混ざり合った埋土であり、埋め戻した様相を示していた。床面より50cmほど浮いて甕がつぶれて出土している。他に台石、軽石、押型文土器片と土師器、陶器片もあった。

出土遺物（図版53、第101・127図）

土器（第101図1～11）　1・2は高坏で、ともに丹塗磨研だが同一個体ではない。2の裾径17cm。3は肩部の張る器形で復元口径17.5cm。7は粗い刷毛目の甕で復元口径28.3cm。8は器壁が薄い。復原口径35.2cm。9は高台状になる底部、10・11は甕の底部で11の底径7.5cm。

石製品（第127図133）　玄武岩質の台石で全長13.3cm。



第101図　中道22号土坑出土土器実測図（1/4）

23号土坑（図版22、第58図）

15号住居跡の東にあってそれに切られている。床面で南北120cm、東西165cmを測る長方形プランで、深さは35cmとあまり深くない。。主軸方位はN-71°-E。丹塗りの高坏片が出土しているが図示しえない。

24号土坑（図版35、第195図）

105号掘立柱建物跡の内部に取り込まれて存する。床面で90×110cmの楕円形プランで、深さは35cm。甕１個の破片が出土したのみである。

出土遺物（第103図）

土器（第103図1） Ｌ字口縁の甕である。

25号土坑（図版35、第195図）

105号掘立柱建物跡の内部で24号土坑の北に存する。床面で南北160cm、東西120cmを測る長方形プランで、深さは45cm。主軸方位はN-28°-W。少量の土器と炭化物が出土している。

出土遺物（第103図）

土器（第103図2・3） 2は丹塗磨研の無頸壺で復原口径14.2cm。3は外面に暗文が入る。蓋であろうか。復原径27.3cm。

26号土坑（図版36、第102図）

25号土坑の北にある。床面で径100cm前後を測る円形プランで、深さは40cm。少量の土器と軽石、押型文土器片と土師器片もあった。

出土遺物（第103図）

土器（第103図4・5） 4はＬ字口縁の甕、5も甕の底部で底径8.3cm。

27号土坑（図版36、第102図）

26号土坑の北方にある。床面で径90cmを測る円形プランで、深さは35cm。甕１点が出土したのみである。

出土遺物（第103図）

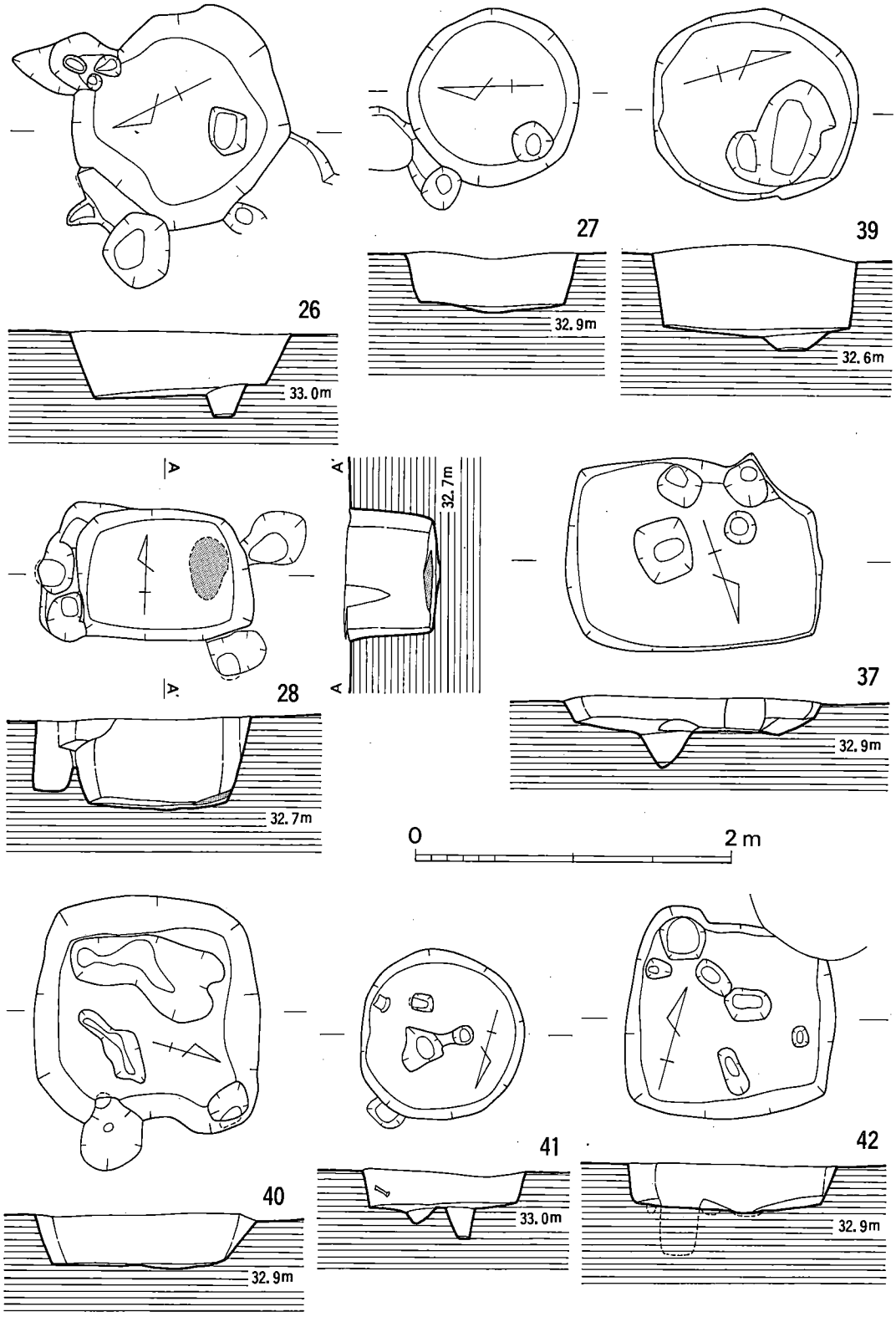
土器（第103図6） Ｌ字口縁の甕の口縁部片である。

28号土坑（図版36、第102図）

16号住居跡の北、17号住居跡の西南に存する。床面で南北55～67cm、東西92cmを測る長方形プランで、深さは59cmと深みがある。主軸方位はN-86°-Eを指す。東西両壁の外にピットがあって壁体と接続しているのは関連するものかもしれない。床面の東端部に焼土があった。少量の土器が出土している。

出土遺物（第103図）

土器（第103図7・8） ともに甕の底部片で、8は復原底径9.1cm。



第102図　中道26～28・37・39・40～42号土坑実測図（1/40）

29号土坑（図版30、第79図）

3号掘立柱建物跡の内部にある径145～155cmの円形プランの土坑である。僅かの土器が出土している。

出土遺物（第103図）

土器（第103図9～11） 9は壺の底部になろう。内面に丹のしずくがある。復原底径6.5cm。10・11は甕で10は二次熱を受けている。底径8.9cm。11の底部はかなり薄いらしい。

31号土坑（図版36、第85図）

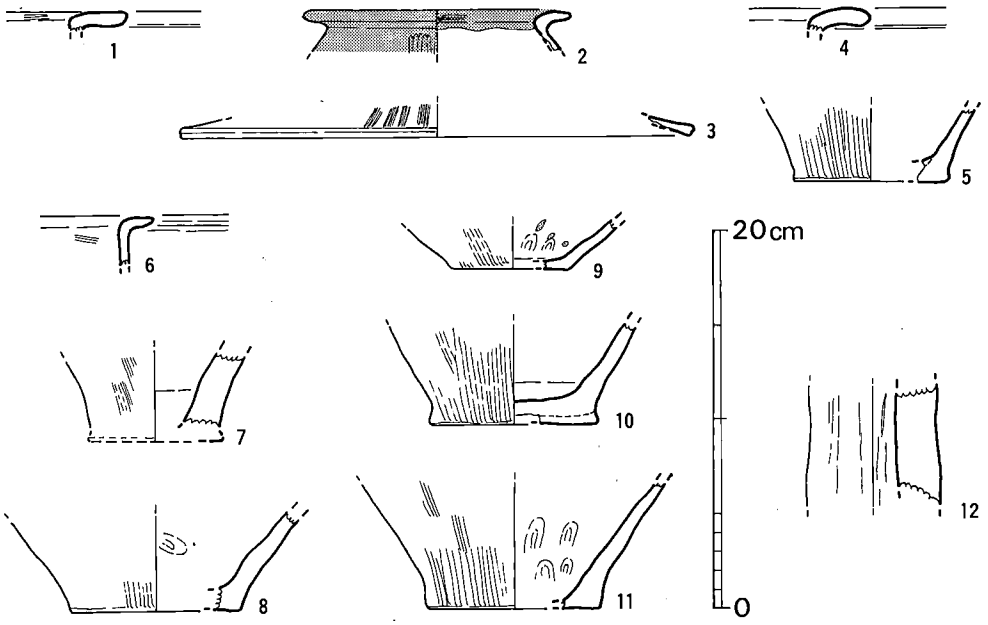
18号住居跡の東に存する。床面で径160cmの円形に近いプランである。深さは40cm。僅かの土器が出土したのみである。

出土遺物（第103図）

土器（第103図12） 支脚の破片であり、二次熱を受けている。内面には藁状のものの擦痕がある。外径7cm。

37号土坑（図版37、第102図）

21号住居跡の西にある。ややいびつながら床面で南北115cm、東西150cmを測る長方形プランをなし、深さは20 cm。主軸方位はN-71°-W。黒色土を埋土としていた。少量の土器と投弾が出



第103図 中道24～29・31号土坑出土土器実測図（1/4）

土している。

出土遺物（図版55、第104・117図）

土器（第104図1） 甕であろうか。あるいは図示が天地逆かもしれない。突帯上には浅い刻みがある。

土製品（第117図21） 投弾形土製品の半欠品である。現存長26.2㎜、径25.8㎜。

38号土坑（図版37、第88図）

21号住居跡の西南にある。床面で南北140～155㎝、東西186㎝を測る長方形プランをなし、深さは35㎝。主軸方位はN-82°-E。埋土上層は黒色土であった。床面積は2.75㎡。東西両壁の中央直下床面に心心間1.65ｍで深さ10㎝ほどのピットがあるのは上屋に関するものだろう。単なる小屋と見てもよいが、あるいは小型ながら住居跡として捉えてよかったのかもしれない。床面に焼土が若干あり、少量の土器と台石が出土している。

出土遺物（図版53、第104・127図）

土器（第104図2～8） 2は無頸壺とすべきか。3～6は甕で、6の底部は分厚く、底径は9.8㎝。7は器台、8は支脚。

石製品（第127図134～136） 全て玄武岩質の台石で、136は現存長12㎝。

39号土坑（図版37、第102図）

21号住居跡の西南方、108号住居跡の東南にある。床面で107～120㎝の円形プランをなし、深さは57㎝。床面の東北にあまり深くない二段掘りのピットがある。黒色土を埋土としていた。少量の土器が出土している。

出土遺物（第104図）

土器（第104図9・10） 9は丹塗磨研の甕で、口縁下にM字突帯を貼り付ける。10の底部はきわめて薄い。

40号土坑（図版37、第102図）

108号住居跡の南にある。床面で一辺105㎝ほどの隅円方形プランをなし、深さは30㎝を測る。床面に浅い不整形の掘り込みがある。壁面を切り込んでいるピットは新しいものである。黒色土を埋土としていた。少量の土器が出土している。

出土遺物（第104図）

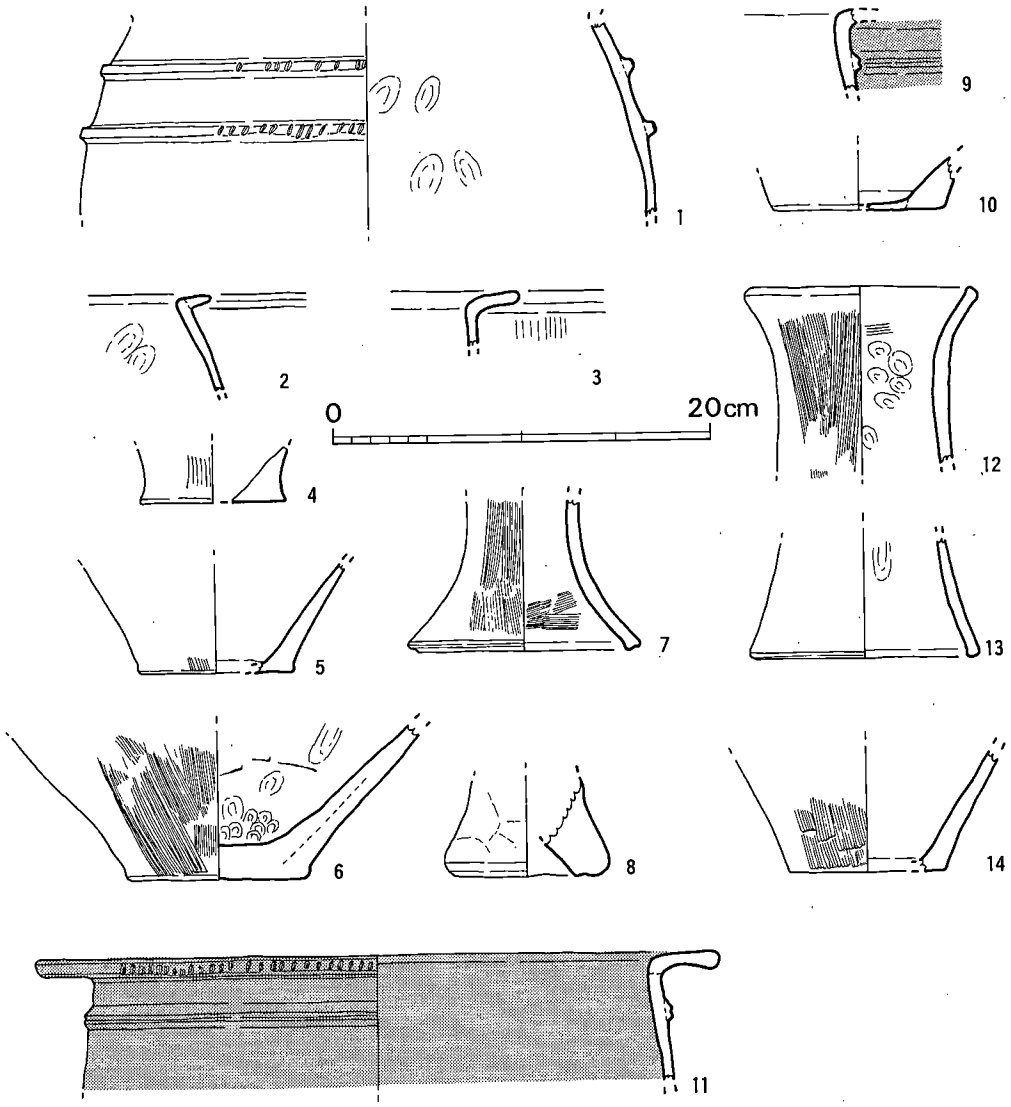
土器（第104図11） 丹塗磨研の甕で、口縁下にM字突帯を貼り付ける。口唇部には浅い刻目が入る。復原口径36.2㎝

41号土坑（図版38、第102図）

40号土坑の南にあって、南西端で42号土坑を切っている。床面で径95cmの円形プランをなし、深さは25cm。床面に3個の小ピットがある。少量の土器が出土している。

出土遺物（図版53、第104図）

土器（第104図12・13）ともに器台で、12は口径12.4cm、13は裾径12.2cm。



第104図　中道37～42号土坑出土土器実測図（1/4）

42号土坑（図版38、第102図）

41号土坑の南にあって、北東部が41号土坑に切られている。床面で南北105cm、東西114cmの方形プランをなし、深さは約30cm。北西コーナーにあるピットは奈良期のもので、それ以外に床面に５個の小ピットがある。黒色土が埋土であった。少量の土器が出土している。

出土遺物（第104図）

土器（第104図14） 甕の底部片で、内面には煤が付着する。復原底径8.4cm。

45号土坑（図版38、第88図）

41・42号土坑の東方にある。床面で南北180cm、東西192cmのやや方形がかった円形プランをなし、深さは65cm。東壁と重複して３個のピットがある。上層は黒色土が堆積していたが、下層の方は一部埋め戻した可能性がある。少量の土器と台石、押型文土器片も出土している。

出土遺物（第105・127図）

土器（第105図1・2） 1は甕の底部片で、復原底径8.4cm。2は器台で裾径13.6cm。

石製品（第127図137） 玄武岩質の台石で、上面はよく擦れていて、側面と下面には煤が付着している。現存の長さ12cm、幅21.4cm。

46号土坑（図版38、第198図）

45号土坑の南にあり、109号掘立柱建物跡の北辺・東辺の柱に切られていた。床面での規模が180～185cmの円形プランをなし、深さは33cm。土器の中に土師器が混入していたがそれは建物に関するものだろう。

出土遺物（図版54、第105図）

土器（第105図3～12） 3は丹塗磨研の高坏。4は丹塗磨研の甕で、39・40号土坑出土の9・11によく似ている。5～9の甕はくの字口縁で、8・9は外面に煤が付着する。9は口唇部が跳上げ気味となる。8の復原口径34.1cm。11の底部は二次熱を受けている。12は器台。これも二次熱を受けている。

47号土坑（図版38、第198図）

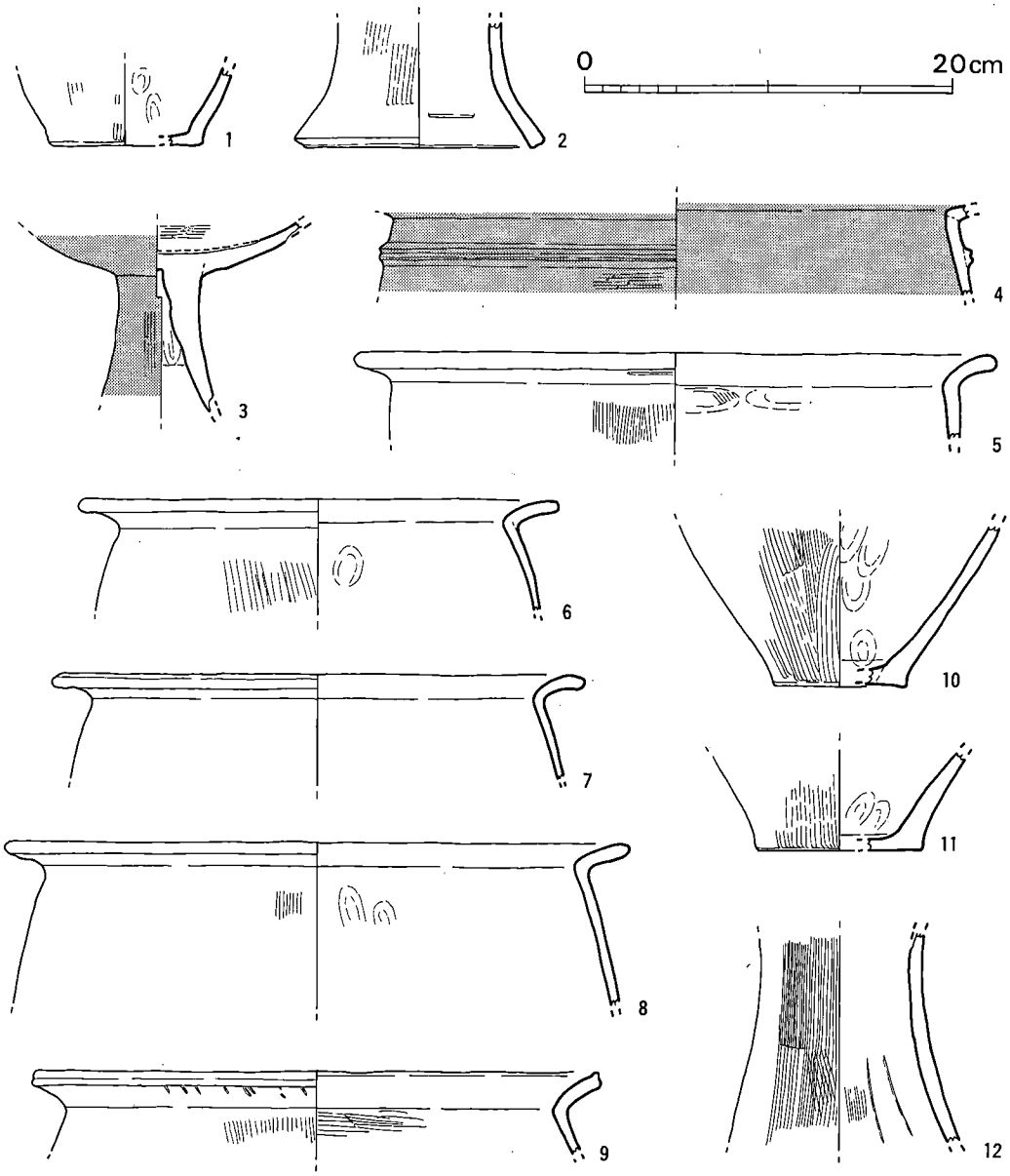
46号土坑の南にあり、109号掘立柱建物跡の南辺の柱に切られていた。床面で南北145～160cm、東西125～175cmの台形プランをなし、深さは35cm。床面に浅い掘り込みがあるが、そのひとつは109号建物跡の柱跡である。土器の中に土師器・鉄滓が混入し、ほかに台石、軽石、炭化材があった。

出土遺物（図版54、第108・127図）

土器（第108図1～10） 1は丹塗磨研の高坏裾部で復原径16.5cm。2は口縁上面に木の小口による

刻みがある。3は復原口径34.5cm。4は底径9.8cm。8の内底面の一部にはコゲが付着している。底径8.7cm。10の器台は口唇部に特徴がある。口径16.3cm。

石製品（第127図138～140） 138は硬砂岩らしい台石で、上面はとてもよく擦れている。139は玄武岩質の台石で全長17.5cm。140は安山岩らしく、すり石としたがよかろう。全長16.2cm。



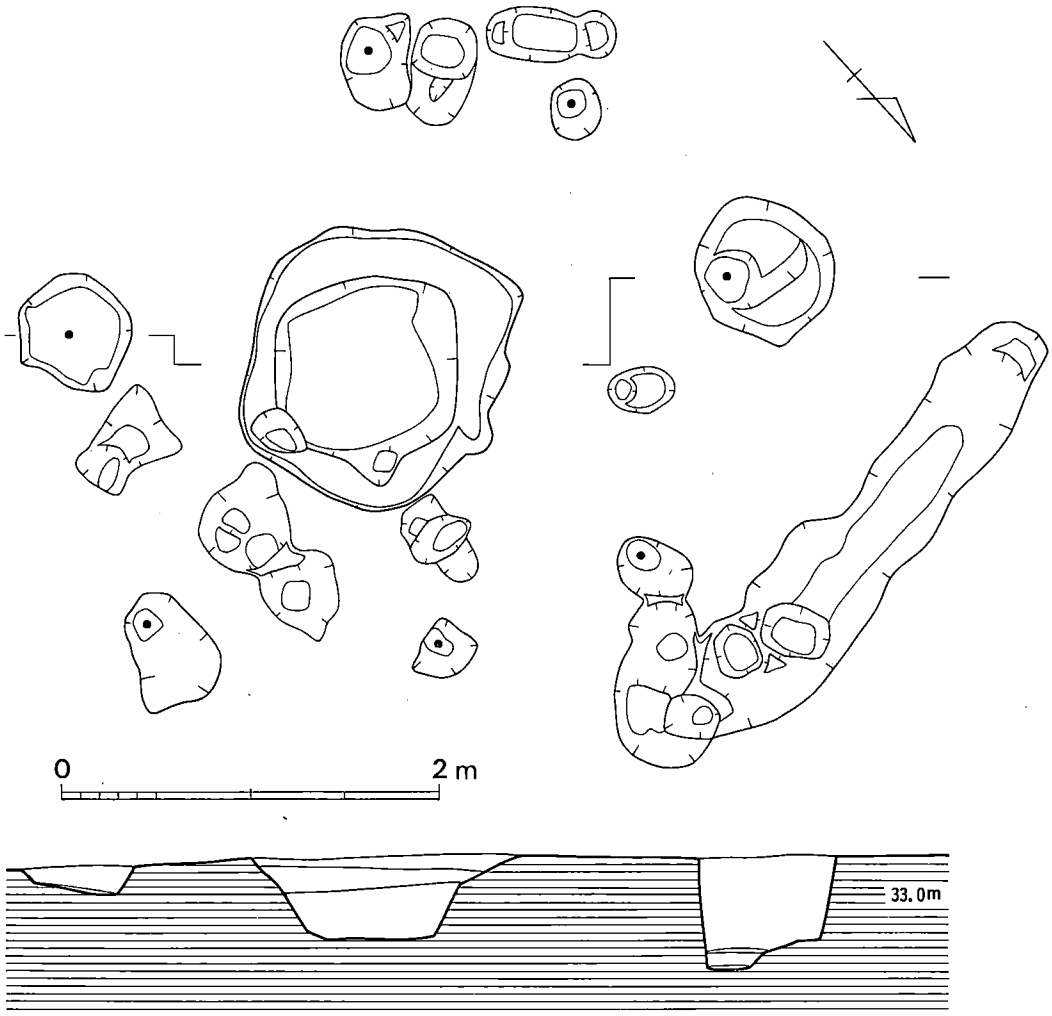
第105図 中道45・46号土坑出土土器実測図（1/4）

48号土坑（図版39、第106図）

109号住居跡の東にある。上面で130×150cmの隅円方形プランを呈するが、二段掘りとなって床面は75×80cmの方形に近いプランとなる。深さは45cm。これの北側にある溝状の掘り込みなどが関連するものかどうかわからない。埋土は黒色土であった。土器は少なく、ほかに叩石と押型文土器片が多く出土している。

出土遺物（図版56、第108・119図）

土器（第108図11） L字形口縁をなす甕である。



第106図 中道48号土坑実測図（1/40）

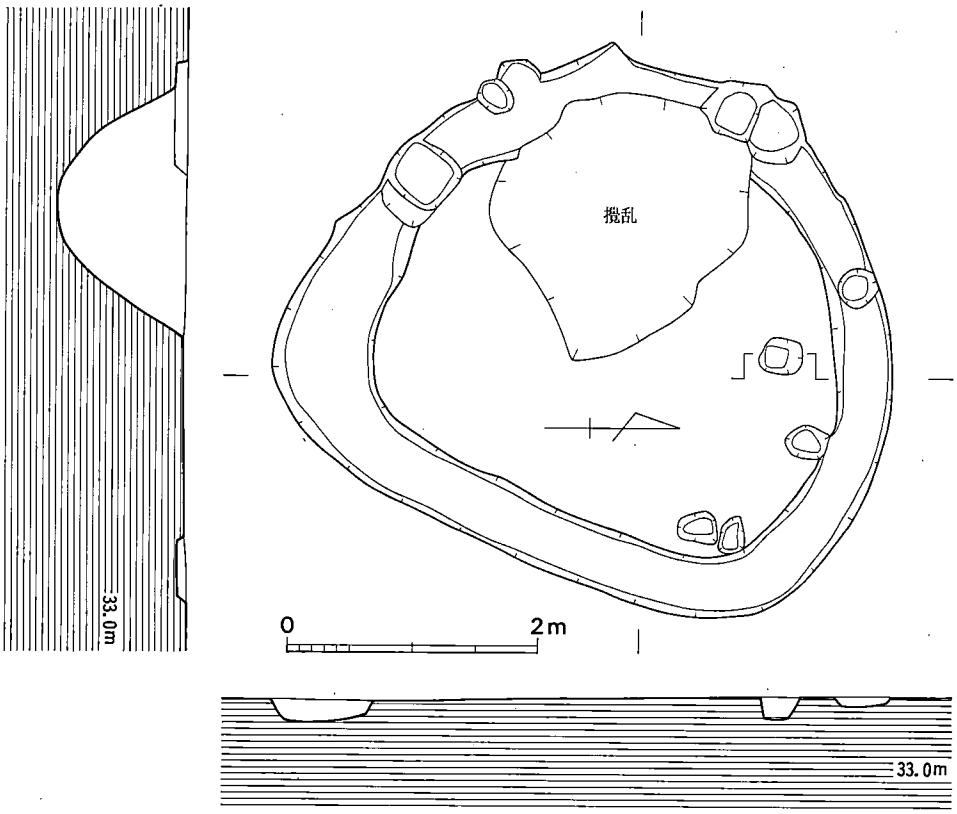
石製品（第119図21） 片岩の扁平な棒状自然石であるが、側面に敲打痕と抉りがある。現存長は65.5㎜、幅29.5㎜、厚さ10.4㎜。

4．周溝遺構（図版39、第107図）

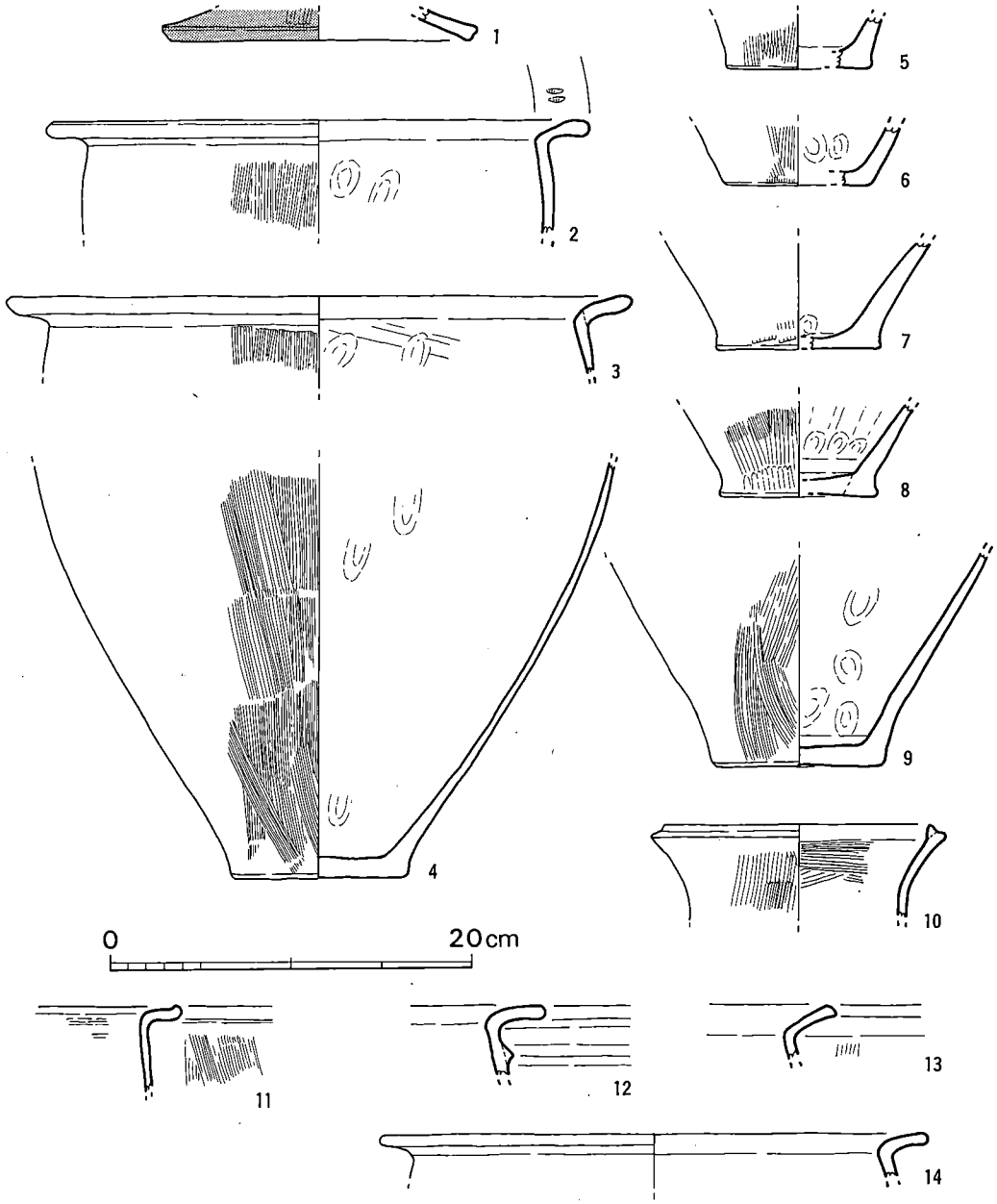
18号住居跡の西北に存する。円形というより偏円形とすべきでやや南北に長いが、１号円形周溝としておく。中央台状部の西側を大きく深く撹乱されていた。南北方向に外径4.94ｍ、内径3.71ｍ、東西方向に外径4.15ｍ、内径3.05ｍを測る。溝は深くても17㎝ほどであり、浅いものである。

出土遺物（第108図）

土器（第108図12～14） みな甕で、12は口縁下に突帯を貼り付ける。14は復原口径30.2㎝。



第107図 中道１号円形周溝遺構実測図（1/60）



第108図　中道47・48号土坑、1号円形周溝遺構出土土器実測図（1/4）

5．甕棺墓・土壙墓

甕棺墓は調査区内で３基を検出した。いずれも小児用としてよい。土壙墓は確証はないが15号土壙１基のみをそれとした。

１号甕棺墓［Ｋ１］（図版40・54、第109図）

11号住居跡の北、2号掘立柱建物跡の西南にある。掘り形平面形は幅75～80cm、長さ170cmの丸くなった長方形プランであるが、一段目テラスを切って深さ10cmの楕円形ピットがある。壙内は二段目のテラスの下を斜めに掘り、その下に甕が入るだけの竪壙を穿っていて、結果として三段掘りになる。下甕の底部のあたりは僅かながら横穴風となる。甕はN-43°-Wの方位に、41.5°の角度をもって、接口式に埋置されていた。接口部は青灰色粘土で丁寧に目張りされていた。墓壙内からも土器片が出土している。なお、掘り形の北側、つまり下甕の直上といってよい所に径30cmのピットがあるのは関連するものかどうかわからない。

上甕（第111図）　Ｌ字口縁の鉢形に近い形状をなす。内外とも刷毛目ののちナデを施す。口縁上面に木の小口による６本の刻みがある。胴下半部に成形後の補修痕がある。口径29.3cm、底径9.7cm、器高21.8cm。

下甕（第111図）くの字口縁で胴張りの強い器形をなす。外面の胴部最大径の所に断面コの字形の突帯が巡らされ、それより下半部は刷毛目が残り、上半は丹塗磨研である。口縁下の屈折部には断面三角形の突帯が貼り付けられる。内面は口縁部にのみ丹塗りがなされ、全体にナデ仕上げである。内外ともに丹塗りの仕方は丁寧ではない。口径23.5cm、底径10.3cm、胴部最大径37cm、器高39.7cm。

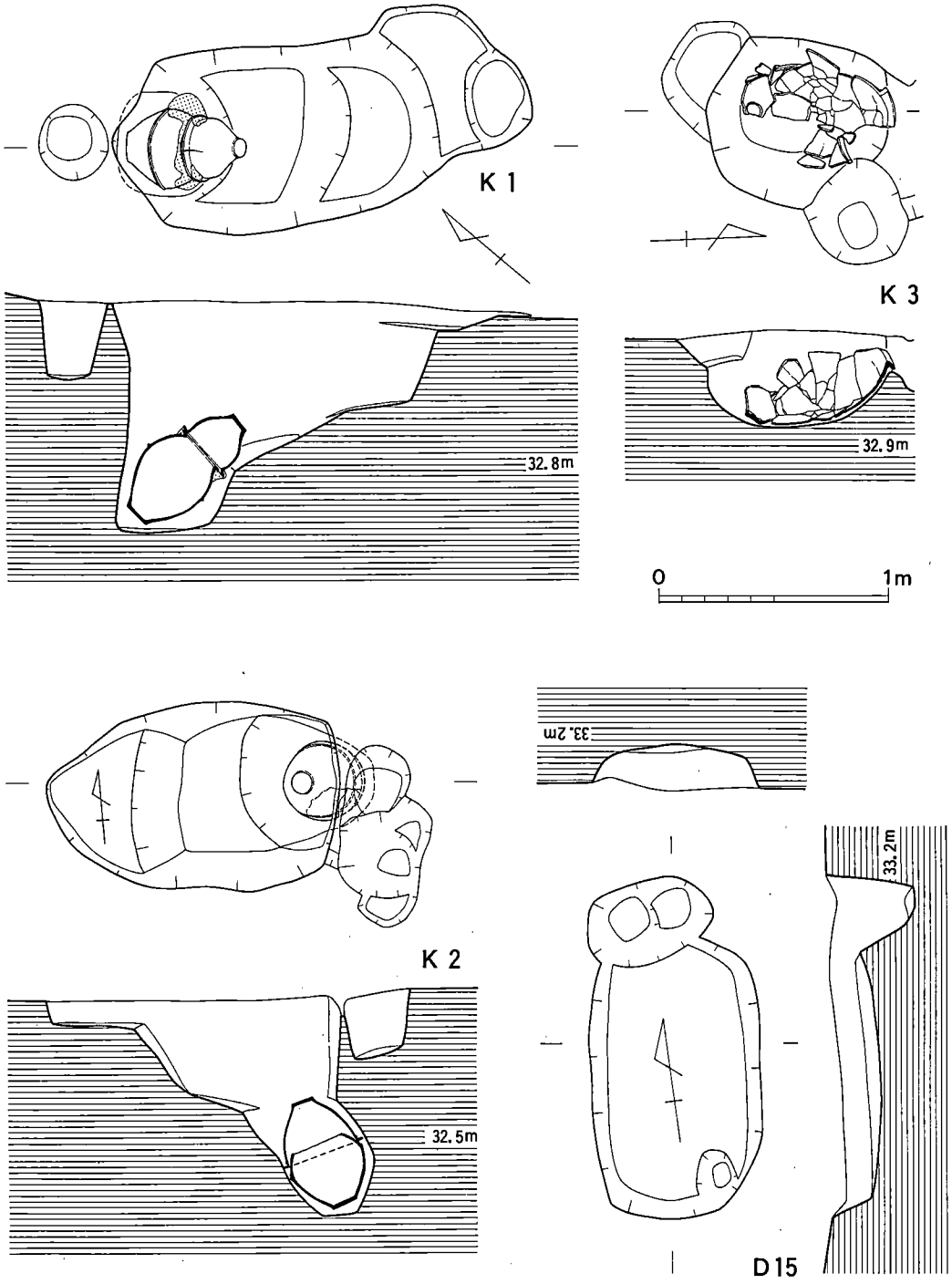
墓壙内出土土器（第110図1～5）　1は鉢で復原口径16cm。2～4は甕。2は外面に煤が付着する。4は口縁直下に突帯を貼付している。5は器台片であるが天地逆か。

２号甕棺墓［Ｋ２］（図版40・54、第109図）

14号住居跡と15号住居跡の中間、調査区境界に近い所で検出された。掘り形平面形は幅80cm、長さ127cmの砲弾形プランであるが、壙内の段の付け方など１号と同様である。甕を埋置する部分は横穴となる。甕はN-95°-Eの方位に、68°の角度をもって、覆口式に埋置されていた。粘土による目張りはなされていない。この甕棺墓も１号と同様に下甕の直上にピットがある。墓壙内からの出土遺物はない。

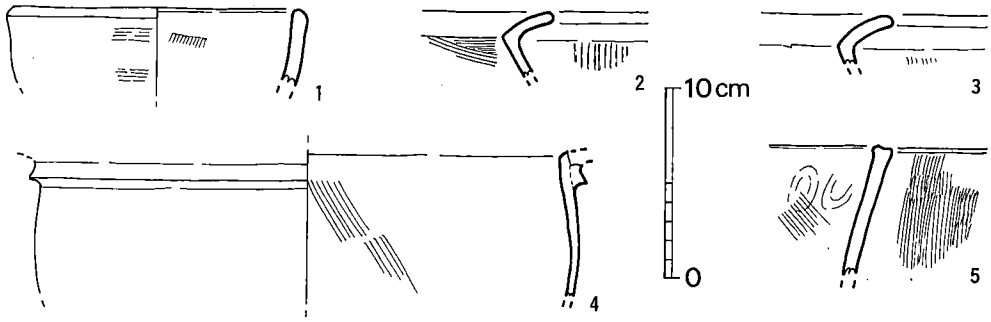
上甕（第111図）くの字口縁の鉢形に近い形状をなす。内外とも刷毛目ののちナデを施す。口縁下には断面三角形の突帯を貼付している。口径35.4cm、底径9cm、器高21.5cm。

下甕（第111図）　口頸部を打欠いた精良な土器で、甕というより壺とすべきであろう。外面

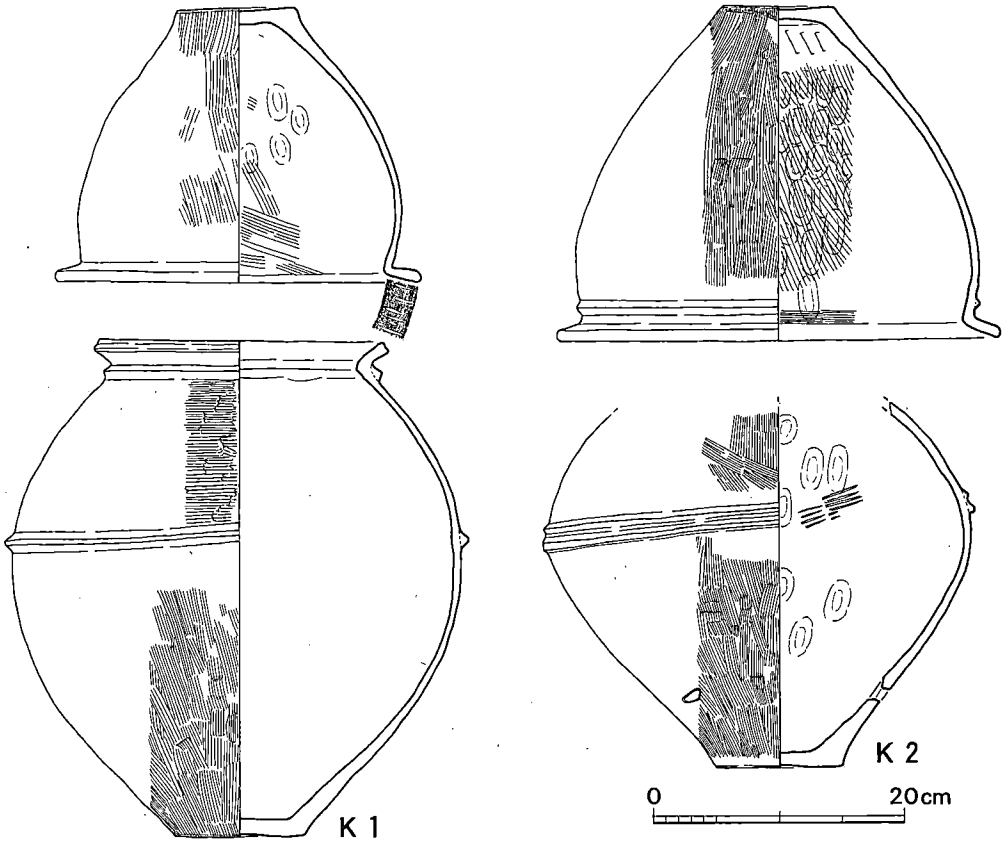


第109図　中道１～３号甕棺墓、15号土壙実測図（1/30）

胴部に断面コの字形と三角形が一緒になった、つくり一条の突帯が巡らされ、その下半部は刷毛目が残り、上半は丹塗りである。内面は全体にナデ仕上げである。胴下半部に焼成後の外側からの穿孔がある。底径10.2cm、胴部最大径34.5cm、現存高29cm。



第110図　中道１号甕棺墓墓壙内出土土器実測図（1/4）



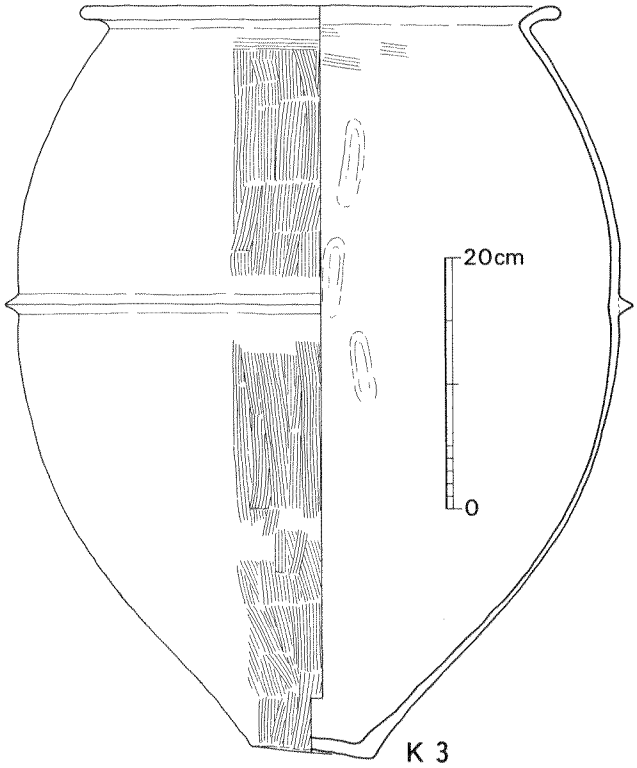
第111図　中道１・２号甕棺実測図（1/6）

3号甕棺墓［K３］

（図版40、第109図）

16号住居跡の東方、26号土坑の東にある。72×80cmの楕円形で、深さ40cmの壙内に約1／3ほどの甕が横位置に割れて検出された。上甕がないこともあって甕棺墓とするに躊躇もあったが、甕棺墓とすると下甕のみが残っていることになる。甕はN-2°-Eの方位に、あまり大きく傾斜することなく埋置されている。目張り粘土は検出されていない。

下甕（第112図）　胴部の張った、くの字口縁の甕である。外面は胴部に断面三角形のシャープな突帯が巡らされ、その上下ともに刷毛目が残る。内面はナデ仕上げである。胴下半部の器壁はかなり薄くつくられている。また、胴上半部で観察しえたところでは、成形の際の粘土帯の幅は9.5cmほどと捉えられた。復原で口径38.5cm、底径10cm、胴部最大径50.3cm、器高59.8cm。



第112図　中道３号甕棺実測図（1/6）

Photo. 8　写真撮影中

土壙墓（図版39、第109図）

15号土壙

11号住居跡の北西にあった15号土坑をその形状から土壙墓とした。幅74cm、長さ123cmで、深さは20cm。埋土は黒色土であった。北端部をピットに切られている。主軸方位はN-8°-E。出土遺物はない。

6．その他

調査区内に多数検出されたピットと、弥生時代以外の遺構その他から出土した遺物について略述する。ピットは弥生土器が出土しても建物などとしてまとまらなかったし、出土状態に特別の意味があるようなものもなかったが、ただ104号掘立柱建物跡のＰ6の西に隣接してあったＰ333は３個の土器がまとまって出土している。

a．ピット出土遺物（図版54～56、第113～115・117・119・126図）

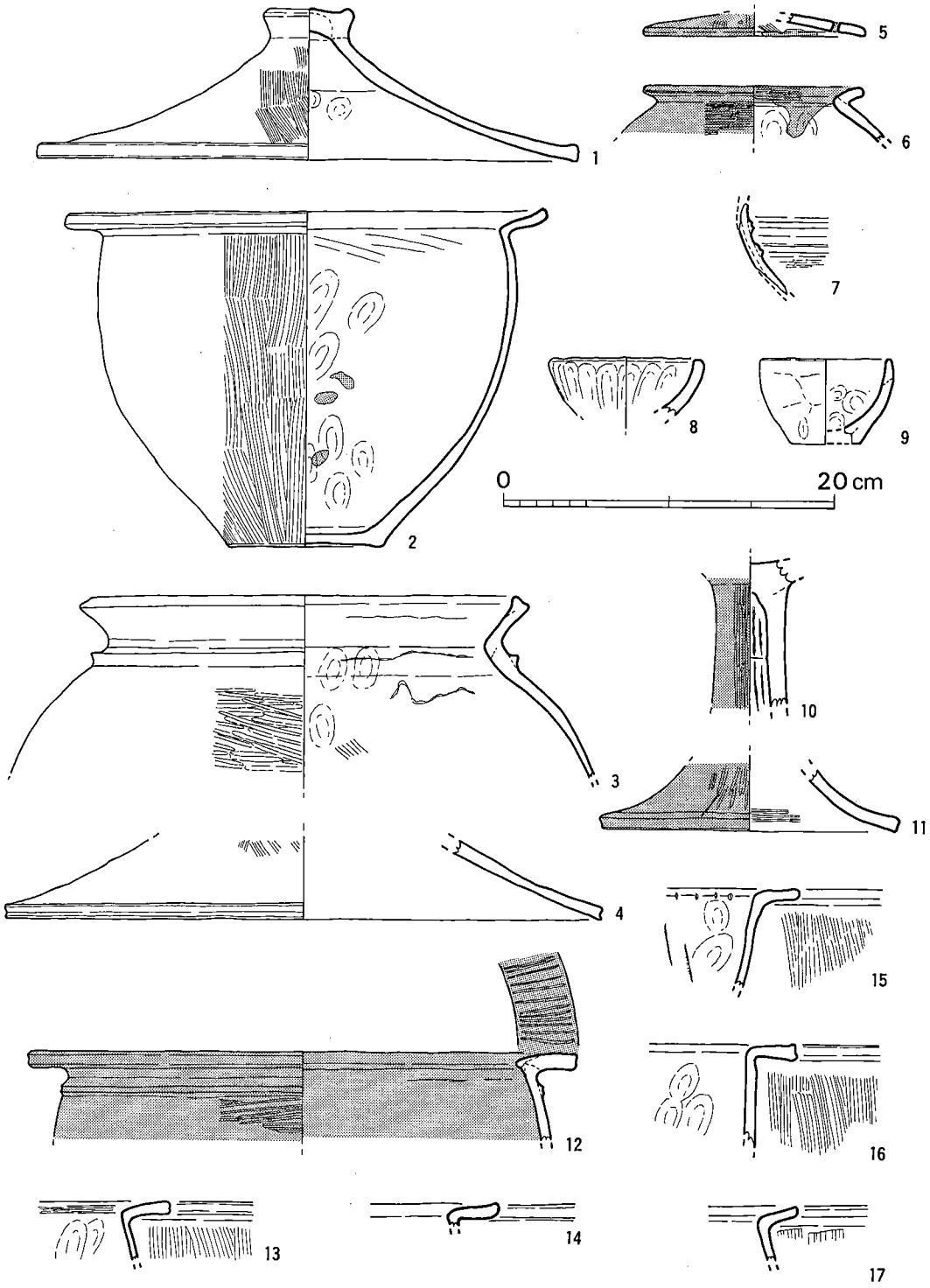
各遺物番号の後ろの括弧内は出土ピットを示すこととする。

土器（第113～115図1～42）　1～3はＰ333の出土。1は蓋で2とセットになる。内面には煤が付着している。摘み径5.5cm、裾径33.4cm。2の鉢に近い甕はＬ字とくの字の中間くらいの口縁をなし、内面には丹のしずくが幾つか付着する。底部は薄い。口径29.2cm、器高20.2cm。3の甕は肩部の張りが強く、最上部に断面三角形の突帯を貼り付けている。口唇部は跳上げる。外面はミガキ調整を施す。口径27cm。

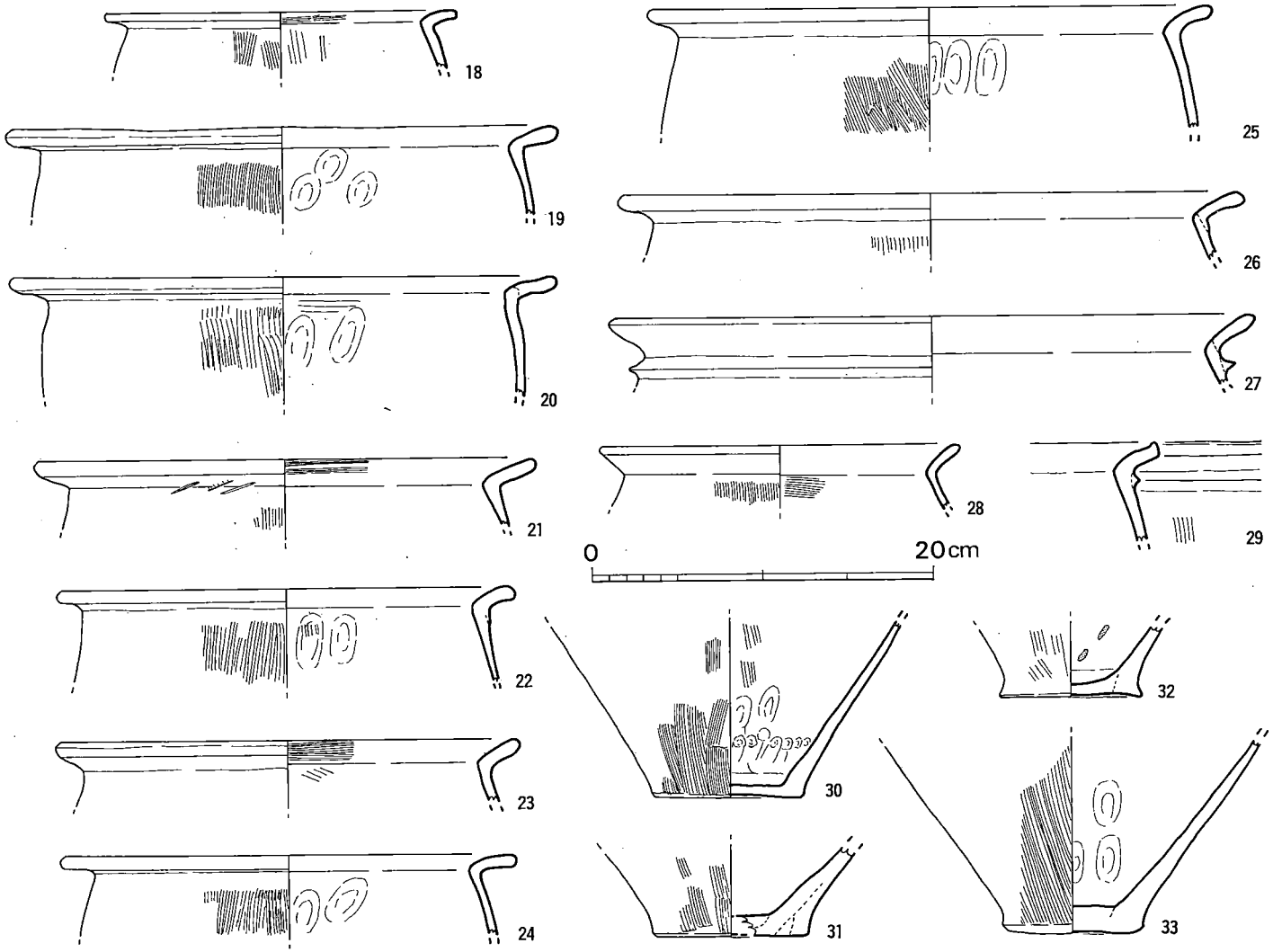
4は出土ピット不明の蓋である。5（Ｐ166）は丹塗りの蓋。孔内にも丹が付着している。6（165）は丹塗磨研の無頸壺で内外ともミガキが著しい。復原口径13.3cm。7（Ｐ232）は壺の頸部であろう。断面M字状の突帯を貼り付け、化粧土が掛かっている。8（Ｐ342）の鉢は内外に指頭によるナデの痕跡が著しい。9（Ｐ523）の小鉢は口径7.8cm。手づくねではない。10（Ｐ172）は丹塗磨研の高坏筒状部である。11（Ｐ392）も丹塗磨研の高坏裾部で二次熱を受けている。裾径17.8cm。

12（Ｐ334）は丹塗磨研の甕で口縁上面に暗文がある。復原口径33.3cm。13（Ｐ234）・14（Ｐ223）・15（Ｐ371）・16（Ｐ10）・17（Ｐ180）は甕の口縁部片で、いずれもＬ字に近い口縁部である。18（Ｐ392）・19（Ｐ369）・20（Ｐ208）・21（Ｐ380）・22（Ｐ353）・23（Ｐ357）・24（Ｐ575）・25（Ｐ186）・26（Ｐ200）・27（Ｐ30）・28（Ｐ27）・29（Ｐ8）も甕で、18～20・24の口縁はＬ字ともくの字ともつかないが、21～23、25～29はくの字口縁である。25は外面に煤が強烈に付着する。29は口縁と頸部の境に三角突帯を貼り付ける。

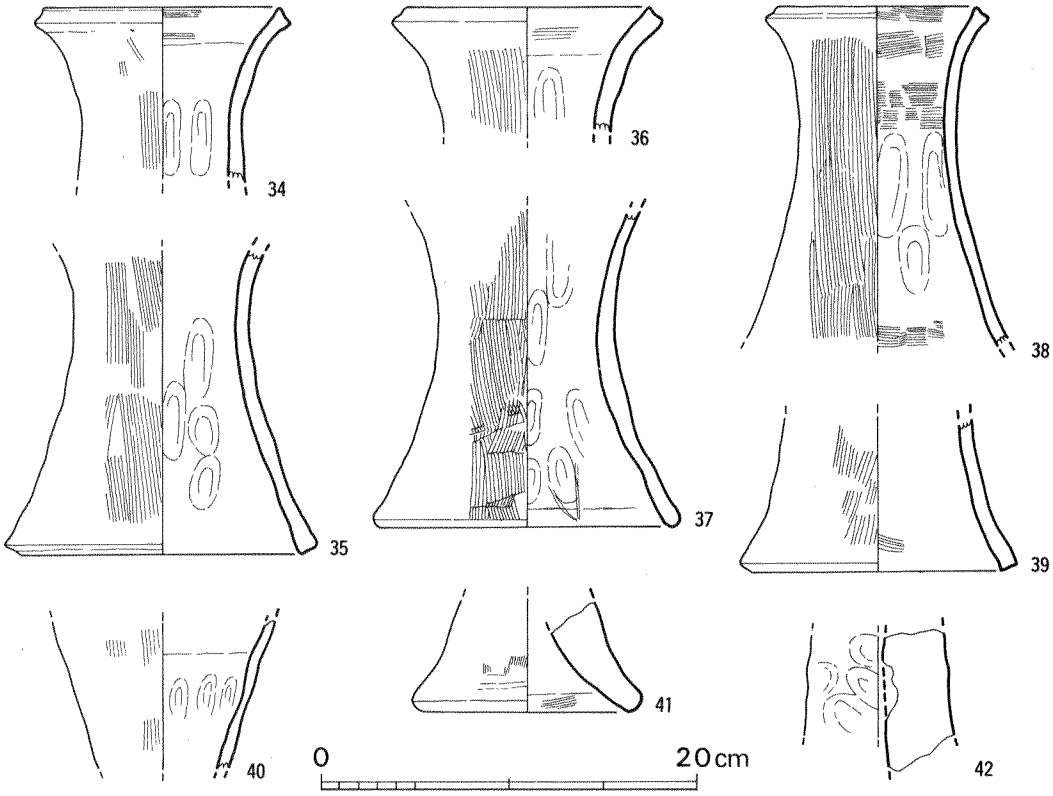
30（Ｐ174）・31（Ｐ176）・32（Ｐ353）・33（Ｐ528）は底部で、32は壺の底部か。内面に丹の痕跡がある。33はやや不安定な平底をなす。



第113図　中道ピット出土弥生土器実測図１（1/4）

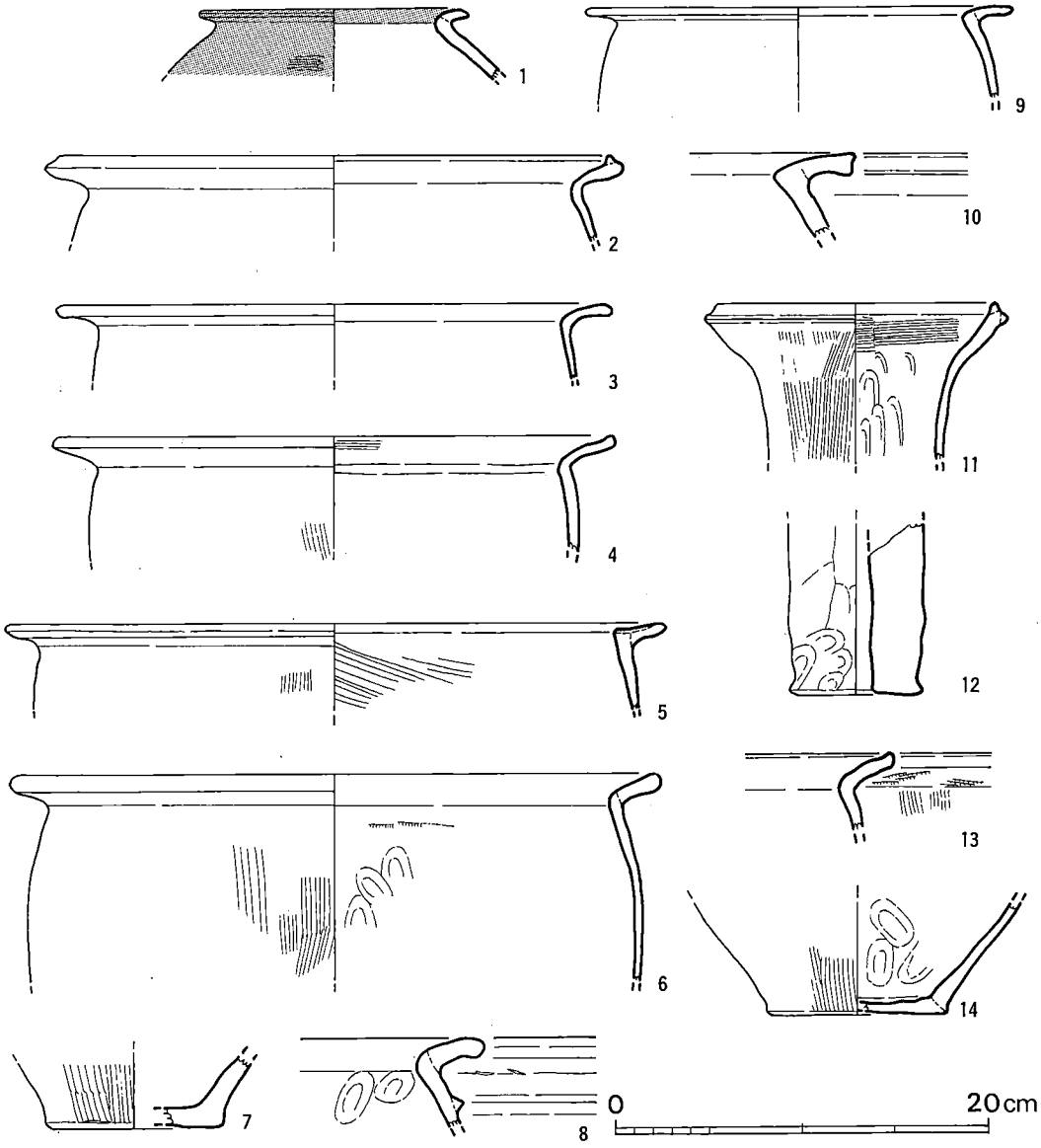


第114図　中道ピット出土弥生土器実測図２（1/4）



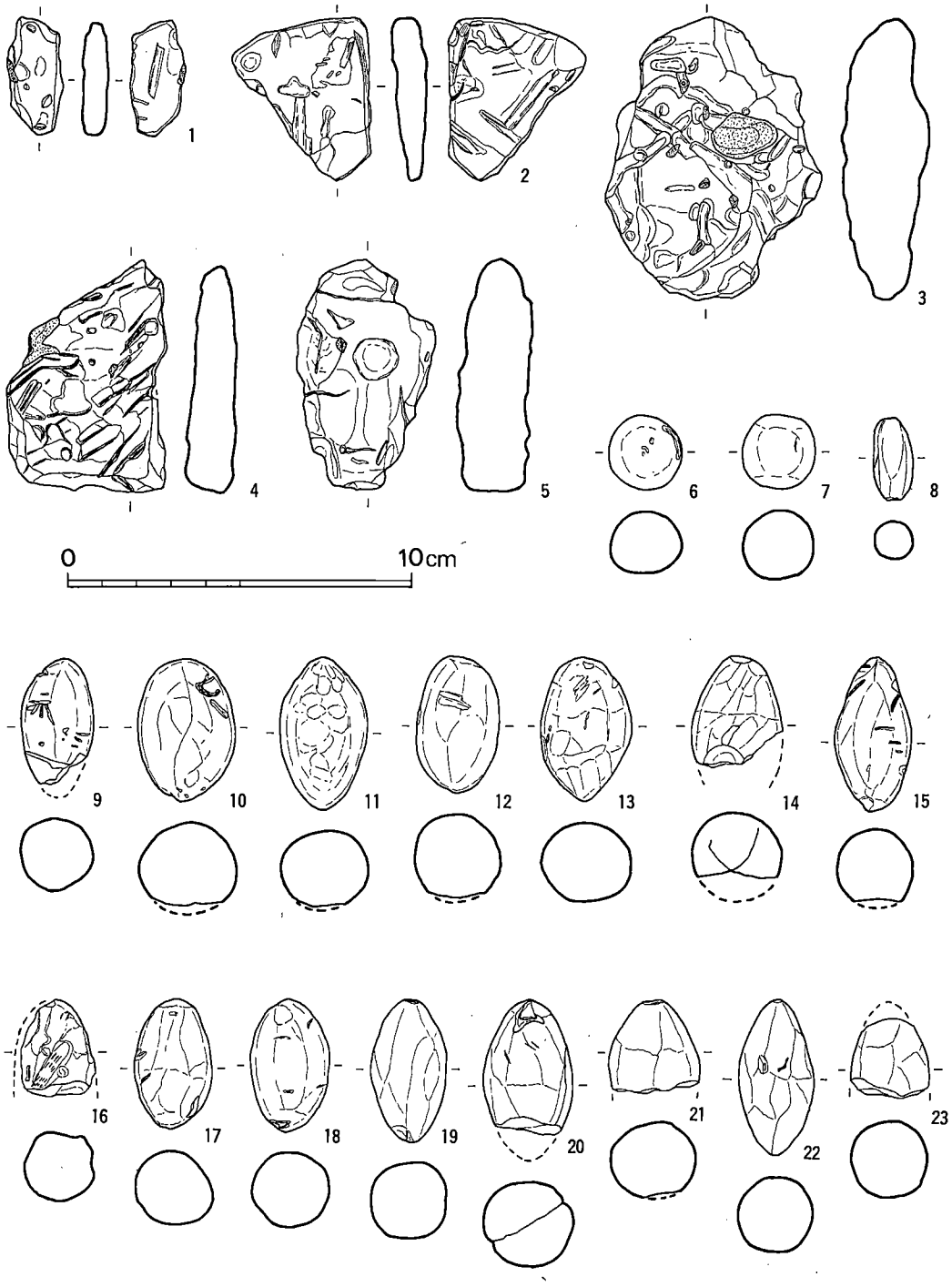
第115図　中道ピット出土弥生土器実測図３（1/4）

Photo. 9　中道小町？

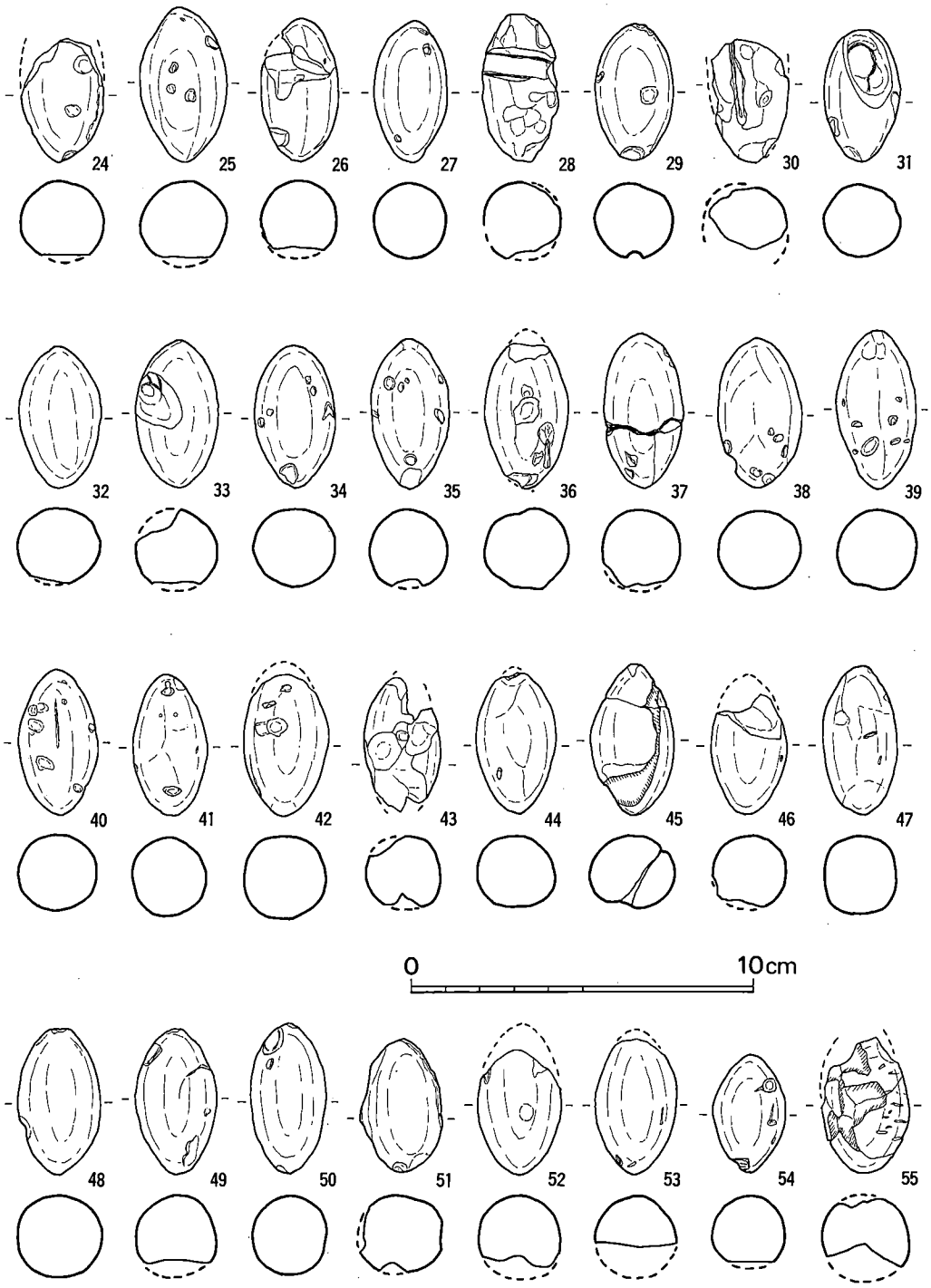


第116図　中道遺跡出土弥生土器実測図（1/4）

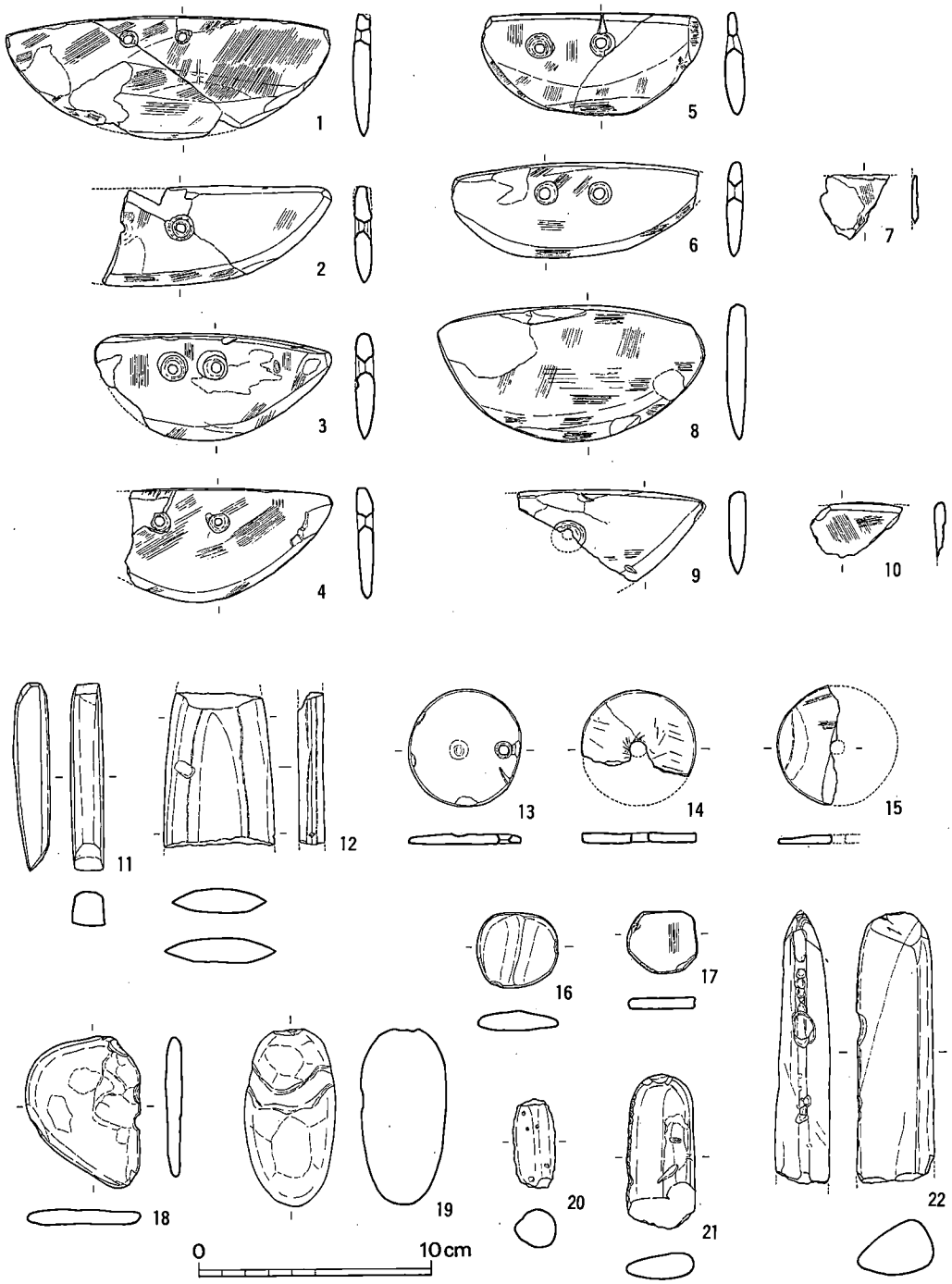
34（P 355）・35（P 359）・36（P 356）・37（P 372）・38（P 200）・39（P 359）・40（不明）は器台で、34・36・38は胴部最小径が上位にあるが、35・37は中位にあるとみてよい。37はつくりが粗い。38の口径10.6cm、35の裾径16.6cm。41（P 232）・42（P 96）は支脚で、41は分厚いつくりをなす。42は粘土をこねただけで筒状に成形したものらしい。



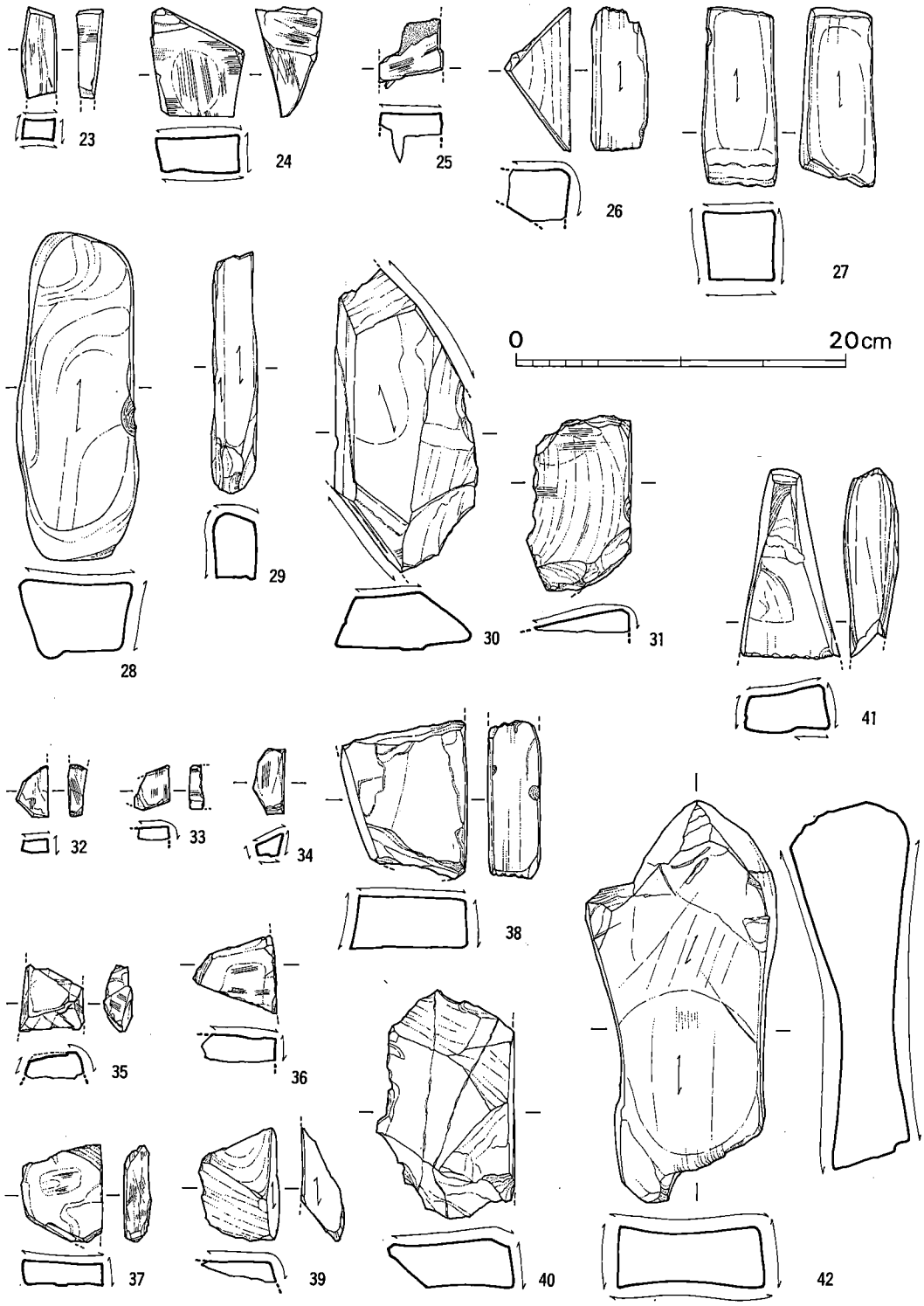
第117図　中道遺跡出土弥生時代土製品実測図１（1/2）



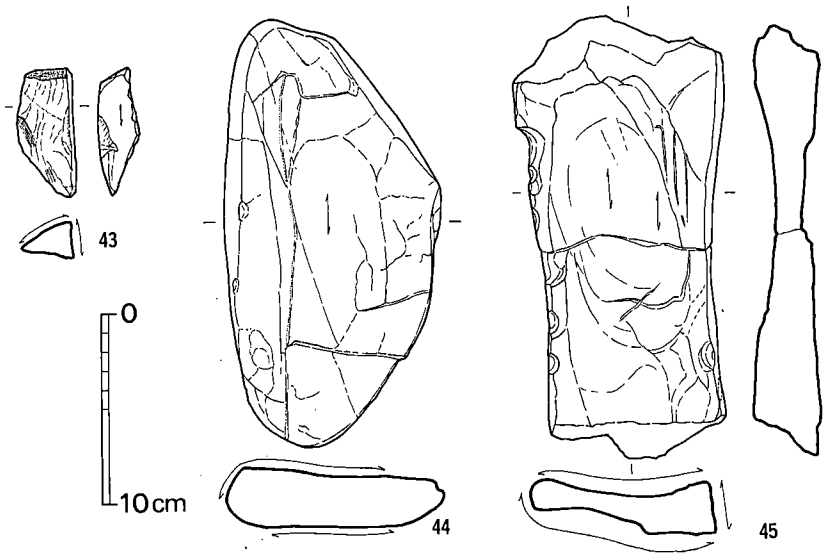
第118図　中道遺跡出土弥生時代土製品実測図２（1/2）



第119図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図１〈石包丁他〉(1/3)



第120図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図２〈砥石〉(1/4)



第121図　中道遺跡出土弥生時代石製品実測図３〈砥石〉(1/4)

土製品（第117図23）投弾形土製品の約半分弱の欠損品で、径22.8㎜。出土ピット不明。

石製品（第119・126図10・12・15・17・117～121）10は石包丁の破片であろう。片岩で2号溝付近で採集した。

12は磨製石剣の破片で、側縁のカーブは鋒にほど遠くない部分の破片であることを示す。粘板岩製で原材の縞模様がシンメトリーに表出する。明確な鎬はなく、基部に近い方は断面がやや扁平となる。現存長66㎜、幅37.5～46.4㎜、厚さ10.9㎜、重さ57.9g。8号土坑の西南にあるＰ1の出土。

15は濃緑灰色を呈する片岩の紡錘車の約1／2の破片で薄いつくりである。復原径52㎜、孔径6㎜、厚さ3.5㎜、重さ6.5g。Ｐ373出土。

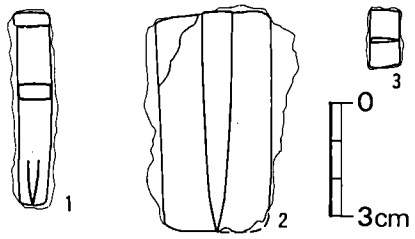
17は片岩の側縁を擦って面をとった板状品で平面形は五角形状を呈する。片面がよく擦れている。用途は不明。全長30.5㎜、幅26.8㎜、厚さ4.8㎜、重さ7.4g。Ｐ30出土。

117は砂岩質の台石。擦過痕がある。Ｐ335出土。

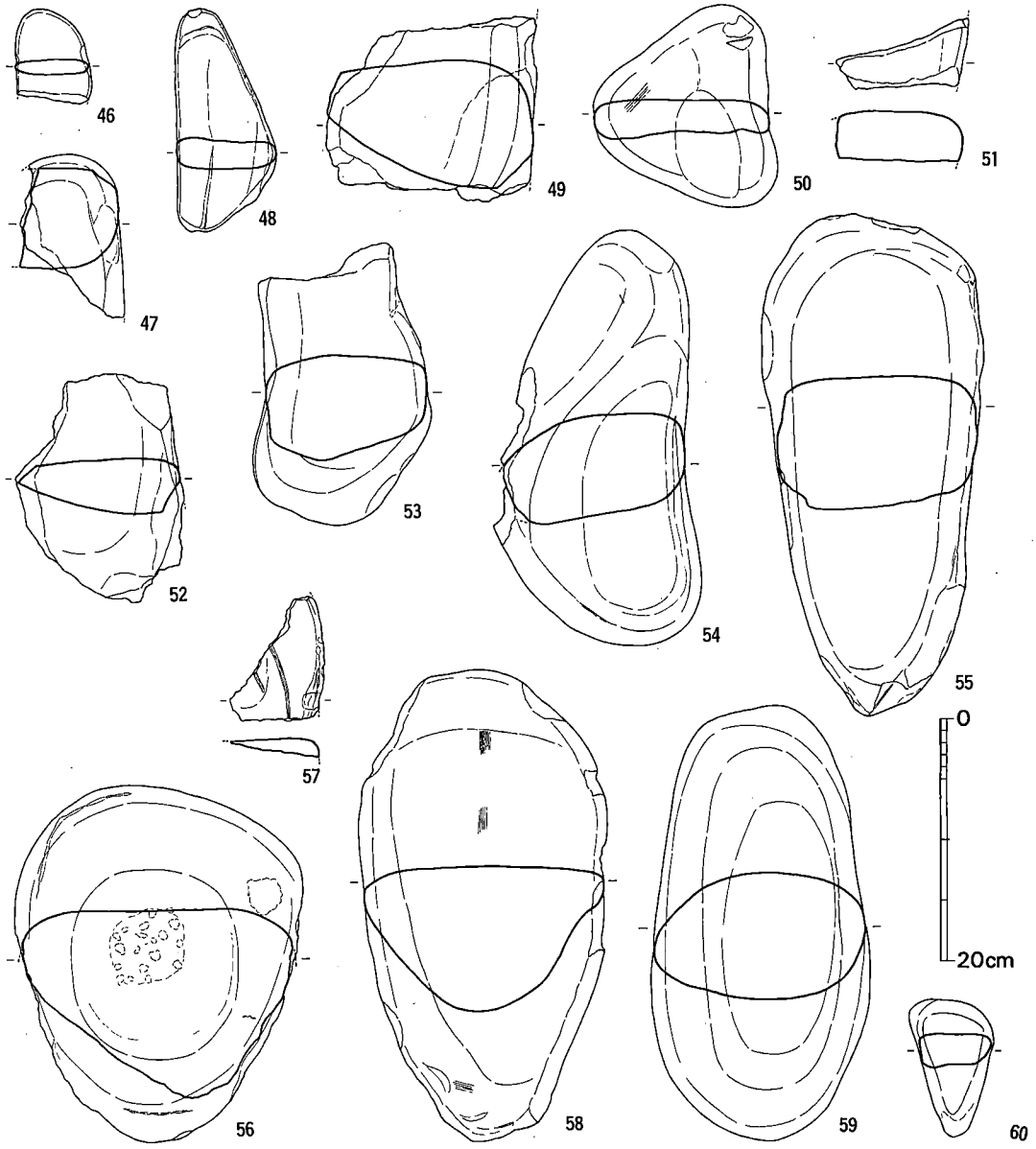
118は玄武岩質の台石で、表面はよく擦れている。側面は少し窪む。二次熱を受けた痕跡がある。全長17.8cm。Ｐ357出土。

119も玄武岩質の台石で、現存長15.2cm。Ｐ371出土。

120は玄武岩質の円礫の叩石で、短側の両端部に敲打による浅い窪みがある。全長14.5cm。Ｐ557出土。

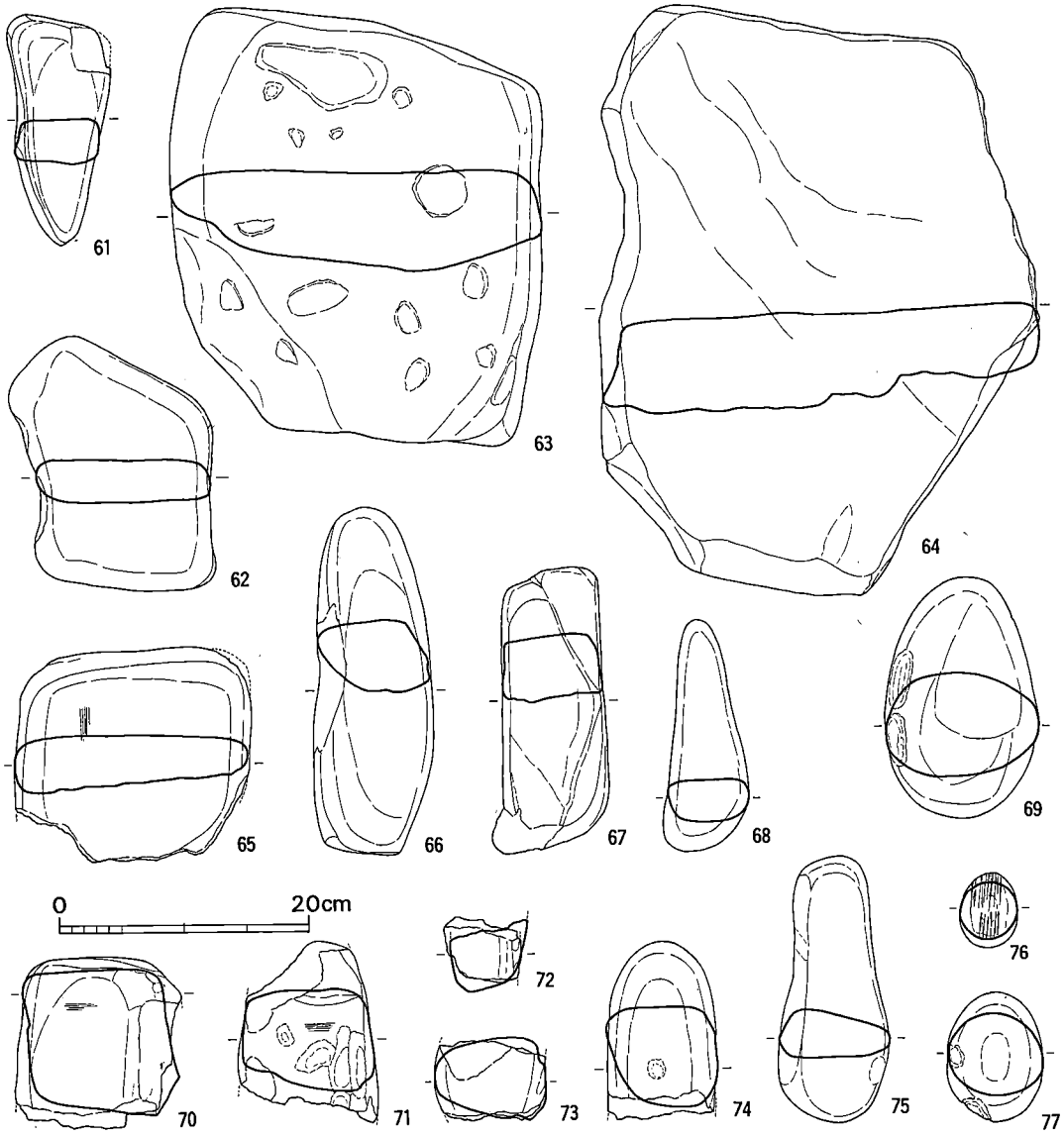


第122図　中道遺跡出土弥生時代鉄製品実測図（1/2）



第123図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図１（1/6）

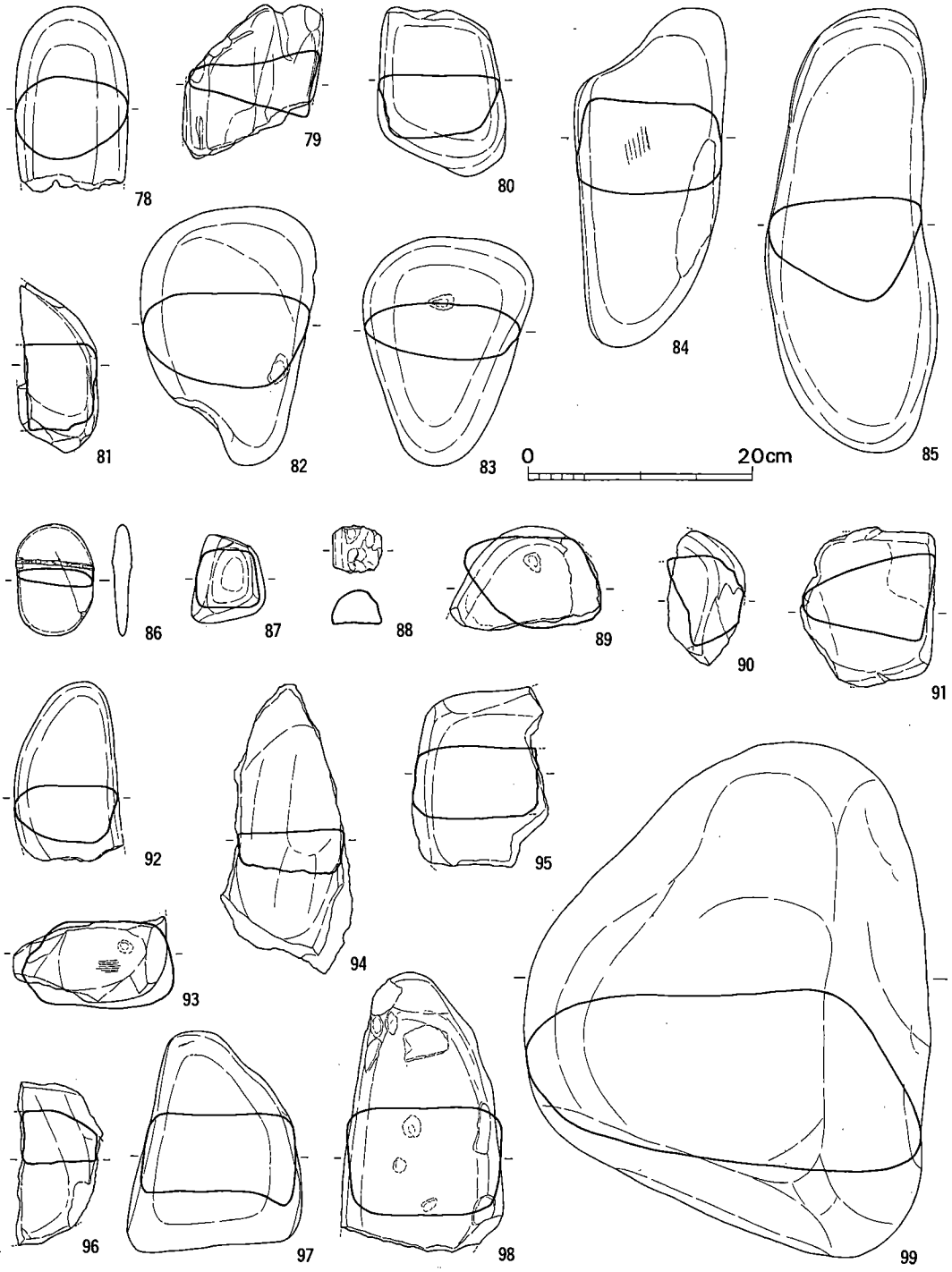
121は安山岩質の扁平な石材で、表面の使用痕からすると砥石とすべきか。よく擦れている。全長11cm。15号住居跡の西辺を切るＰ900の出土であるが、弥生時代の所産とする確証はないもののここで説明した。



第124図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図２（1/6）

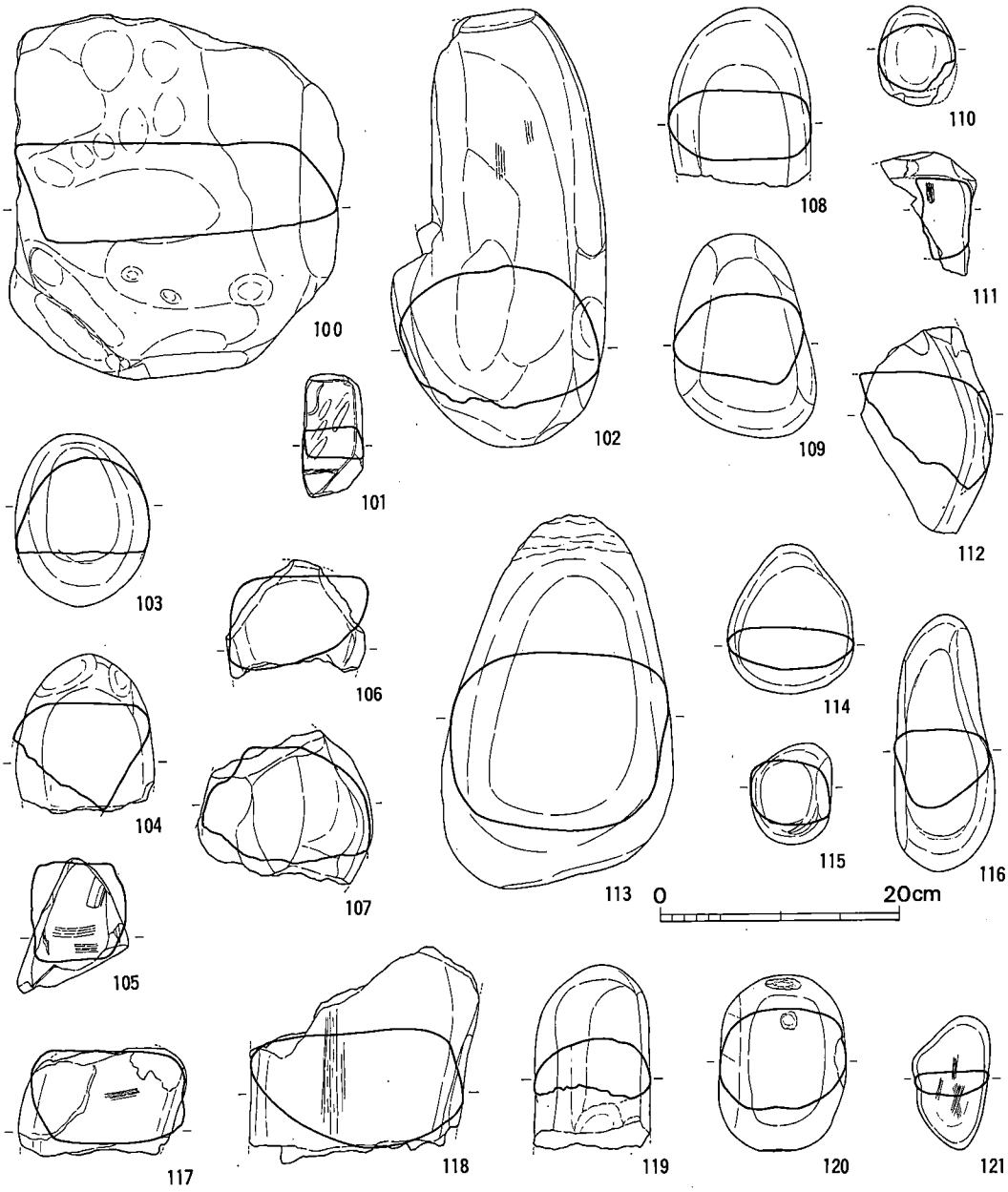
b．その他出土遺物（第116図）

土器（1～14）　1は丹塗磨研の無頸壺で、なで肩気味の器形となる。復原口径14.6cm。1号溝出土。2は跳上げ口縁の甕で、跳上げた部分は粘土貼り付けである。106号住居跡下層出土だから14号住居跡に伴う可能性がある。復原口径31.2cm。3の甕は35号土坑の出土。4は71号土坑出土。5はしっかりしたＬ字口縁の甕で復原口径35.5cm。62号土坑出土。6・7は44号土坑出土。6は口縁端

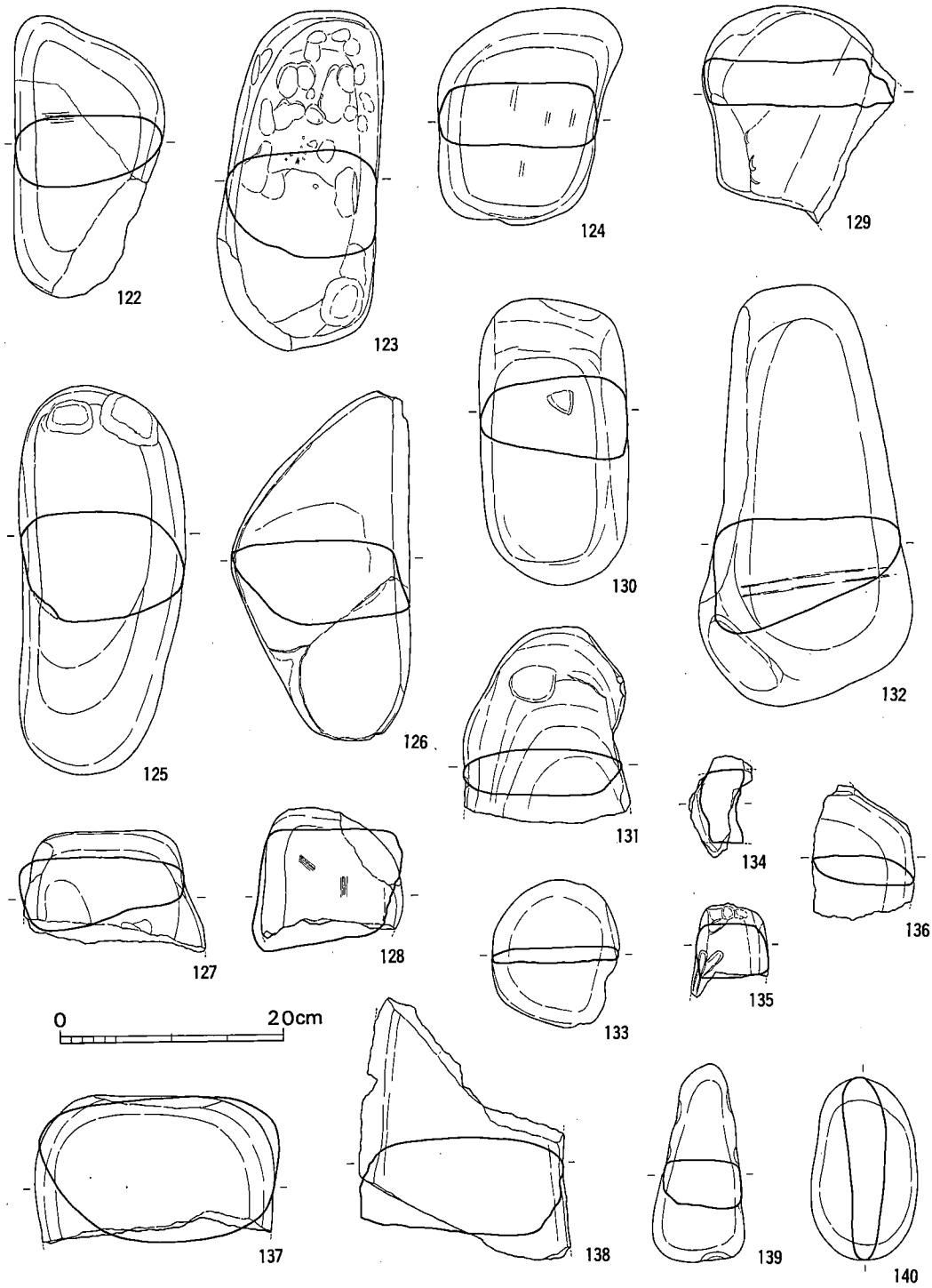


第125図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図３（1/6）

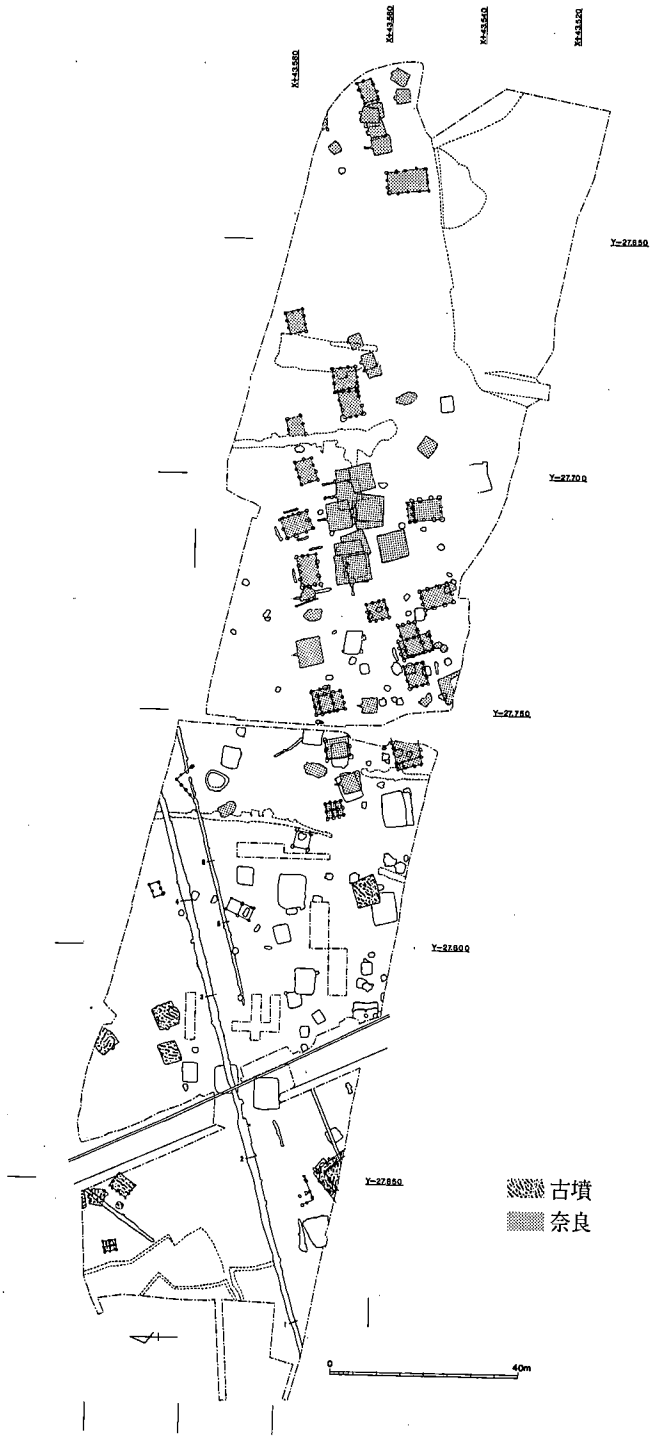
部が肥厚し、外面に煤が付着する。7は外底面にジャポニカ種の籾痕がある。8は2号溝出土。9～12は43号土坑出土。9はL字口縁の甕で復原口径22.8cm。10は大型の甕。11の器台は口唇部が貼り付けで跳ね上がる。12は円筒土管状の支脚で径7.2cm。孔径はあまり大きくない。13・14は32号土坑出土。14の底径は9.7cm。



第126図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図4（1/6）



第127図　中道遺跡出土弥生時代台石等実測図５（1/6）



第128図　中道遺跡古墳～奈良時代遺構配置図（1/1,600）

C．古墳時代の遺構と遺物

広範囲の発掘区域の中で縄文時代から鎌倉時代に至る遺構を検出した複合遺跡である。このうち古墳時代の主な遺構は、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡３棟があり、住居跡は発掘調査区の西半部に集中している。住居跡から出土した遺物、特に出土土器に古墳時代と考えられるものが奈良時代の住居跡から出土しているが、遺構の最終廃絶時期を主体として遺構を区分したため、奈良時代の遺構の中に古墳時代の物が混入してる遺構もある。また103号竪穴住居跡は出土遺物がなく、時期的に判断しがたい住居であったが、建物の方位等から古墳時代の中に掲載した。方位の計測は竪穴住居跡はカマドを正面にした軸をとり、掘立柱建物跡は桁行き方向を軸とした。

１．竪穴住居跡

101号住居跡（図版57、第129・130図）

発掘調査区の西端域に検出した。住居跡の北東から南西にかけて幅40cmの中世の溝が切っている。規模はほぼ方形で東西3.2ｍ×南北3.2ｍを測り、住居の埋土は黒色土である。北壁の中央部に突出型のカマドが付設されている。検出面から床面までの深さ約25cmあり、貼り床の厚さ約5～10cmで、床面下層は住居中央部から南壁にかけて厚く貼っていた。主柱穴は確認されなかった。カマド前面東寄りにＰ１とする土坑を検出した（第130図）。径50.5cm、深さ約8cmで第131図-1・5が一辺10cmの自然石2個と共に検出された。1と5はセットとして考えられ、祭祀的な意味合いが濃い。床面積8.6㎡。方位はN-5.5°-W。埋土中に染付皿片もあった。

カマド（第130図）　北壁中央に検出した突出型のカマドである。右壁が中世の溝から一部切られている。焚口幅50cm、奥行45cmで壁面は赤褐色に堅く焼けていた。カマドのほぼ中央を少し掘り窪め幅8cm、長さ20cmの自然石を立て支脚とし、その廻りは粘土で補強していた。火床は厚く、カマド内及び付近から土師器が出土した。

出土遺物（図版62、第131図）

須恵器（1）　Ｐ１から伏せた状態で出土したため、本来ならば蓋とすべきであろう。口径8.6cm、器高2.4cmで受け部を持つ小振りな須恵器である。

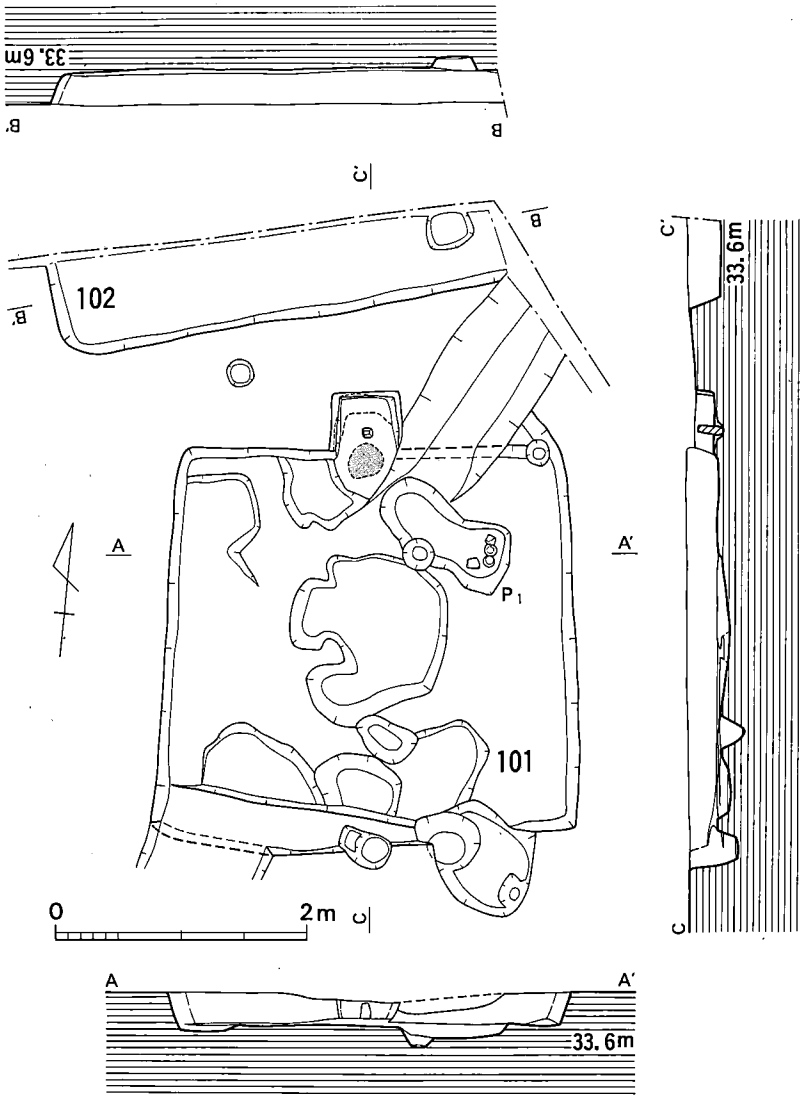
土師器（2～6）　2・3は坏身で、底部と体部ははっきりと屈曲し、口縁端部を僅かに内弯気味につまんでいる。2の復原口径13.6cm、3は15.0cmを測る。4は復原口径15.0cmの椀で、外体部は丁寧なケズリ調整、内面は黒色でナデている。5はＰ１出土で口径7.5cm、器高6.6cmの完形品。器肉の薄い小型壺で、外体部は丁寧なケズリ調整が観察できる。胎土には砂粒が無く、器面良好で焼成も良い。6は小型甕片で復原口径12.2cmを測る。

102号住居跡（図版57、第129図）

101号住居跡の北側に検出した。大部分は発掘区域外にあり、南壁と西壁一部を検出したのみである。南壁長3.6m、深さ30cmである。検出した部分の床面積9.3㎡。

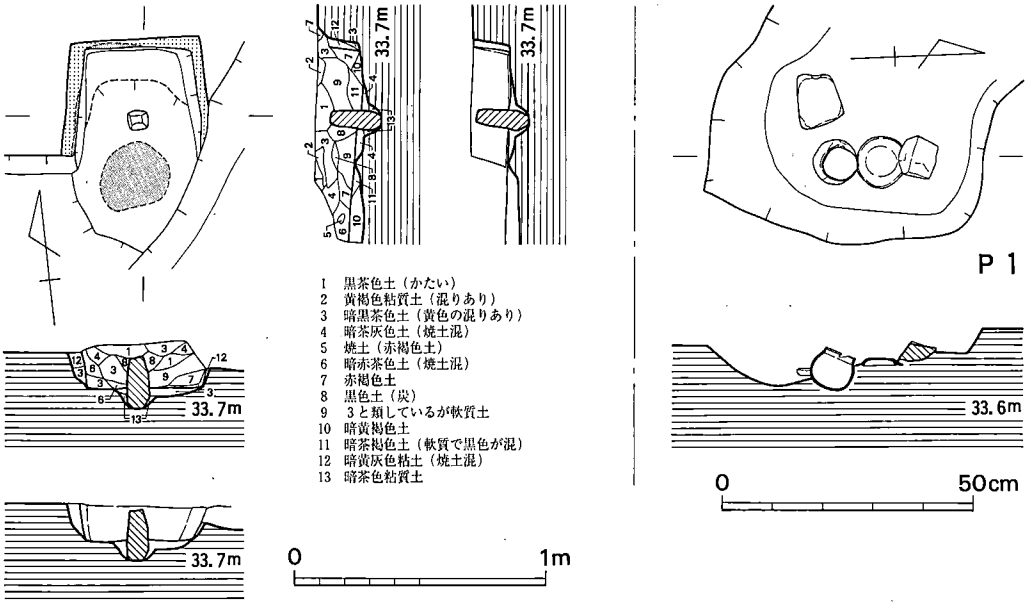
出土遺物（図版62、第131図）

須恵器（7）復原口径20.7cmの蓋片で、かえり端部は短くく字状に屈曲する。胎土に砂粒が少なく灰色である。

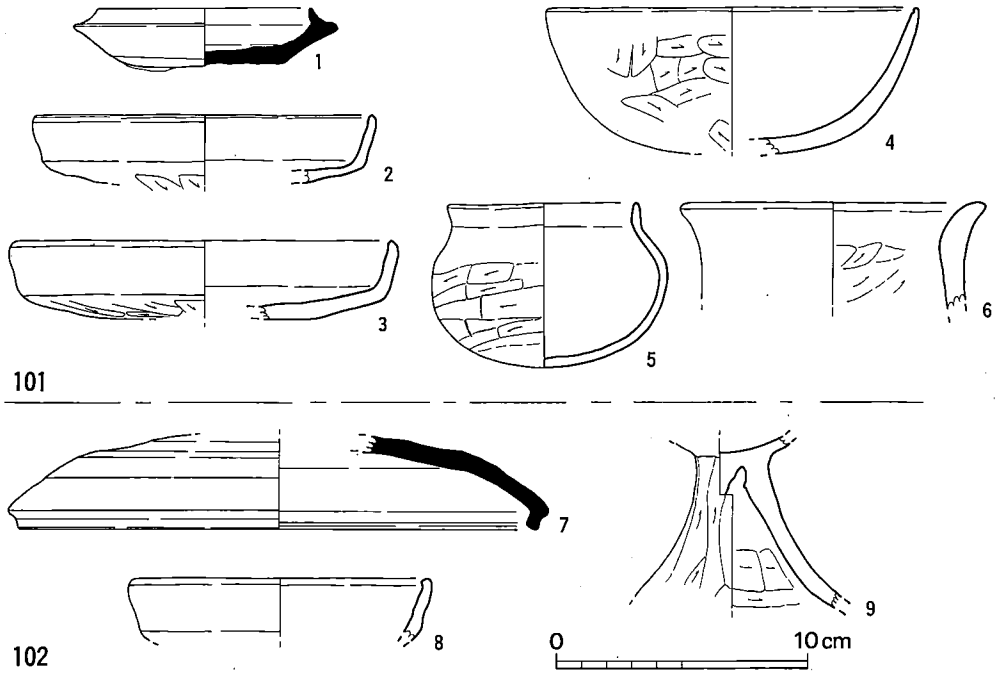


第129図　中道101・102号住居跡実測図（1/60）

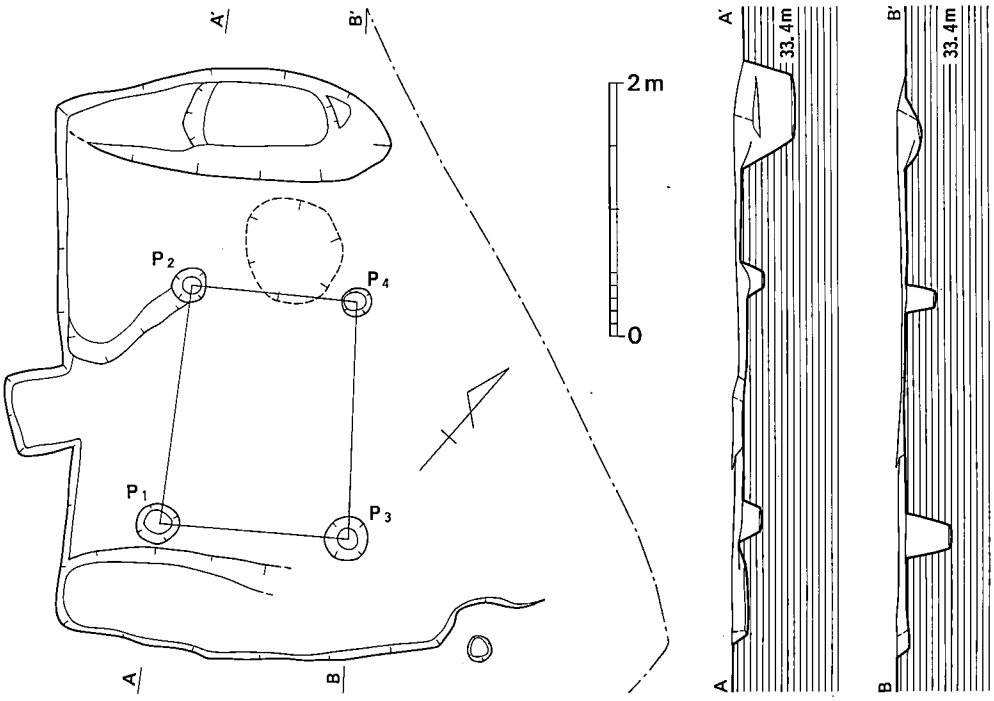
土師器（8・9）　8は坏身片で復原口径12.0cm。9は高坏脚部片で、胎土、焼成共に良好である。



第130図　中道101号住居跡カマド・Ｐ１土器出土状態実測図（1/30・1/15）



第131図　中道101・102号住居跡出土土器実測図（1/3）



第132図　中道103号住居跡実測図（1/60）

103号住居跡（図版57、第132図）

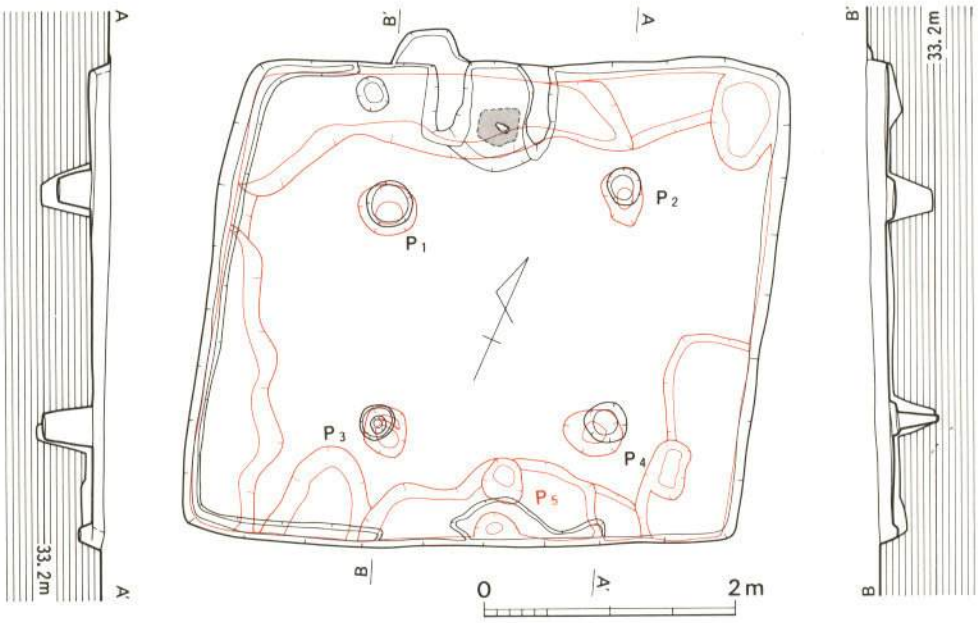
発掘区の西端部北側調査区域に接して検出した。住居の東壁は調査区域外であるが、遺構面が削平されており検出されなかったこともある。規模は南北4.6m×東西4.0m以上で、検出床面の深さ約7cmである。西壁中央部に101号住居と同じ突出型のカマドを付設する。主柱穴は4本確認しP1－P2間1.9m、P1－P3間1.5mを測り、柱の深さは略15cmから30cmである。また、下層床面の北壁と南壁に幅約80cm、深さ10cmで東西方向に検出した浅い堀込みは貼床部と確認した。住居からの出土遺物は図面復原不可能な土師器片数点である。方位はN-130°-W。

カマド　西壁中央に検出した突出型のカマドである。焚口幅56cm、奥行き約50cmで、火床は広く赤褐色に焼けていた。遺物の出土はない。

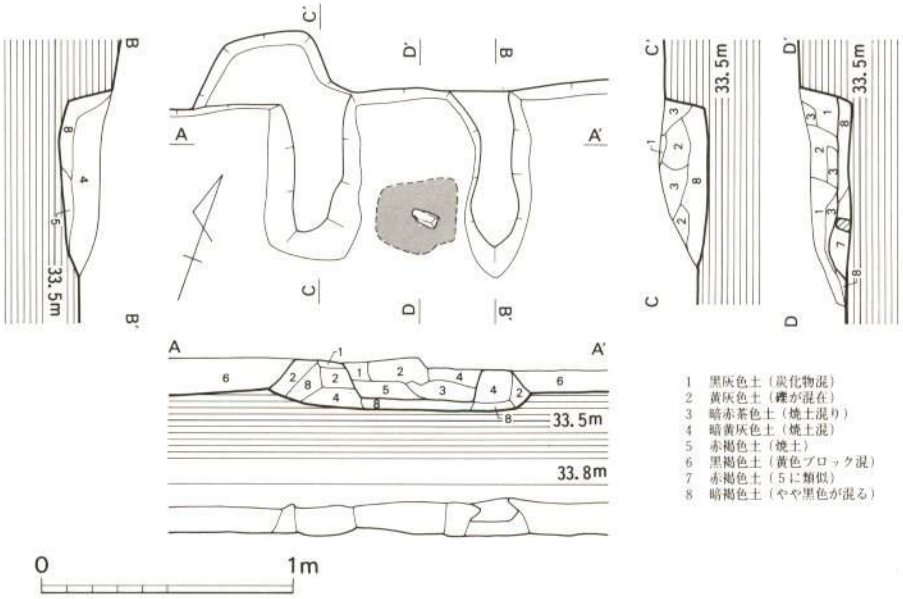
104号住居跡（図版58、第133・134図）

発掘区の西端部にあり103号住居跡の南側に位置する。規模は南北3.8m×東西4.4mで、長方形の平面をなし、検出床面の深さ約10～15cmで平坦である。北壁中央部に比較的残りの良い造り付けのカマドを付設する。主柱穴は4本確認し略方形でP1－P2間1.9m、P1－P3間1.8mを測り、柱の深さは約40cmである。また、P4において幅約15cmの柱抜き跡を確認した。北西

隅から南壁中央に小溝が巡り、カマド対面部に柱跡Ｐ５を検出した。床面は堅く、下層床面は壁周のみ約10cmほど掘られていた。住居からの出土遺物は土師器片数点である。床面積15㎡。方位はN-20°-W。須恵器は出土していない。



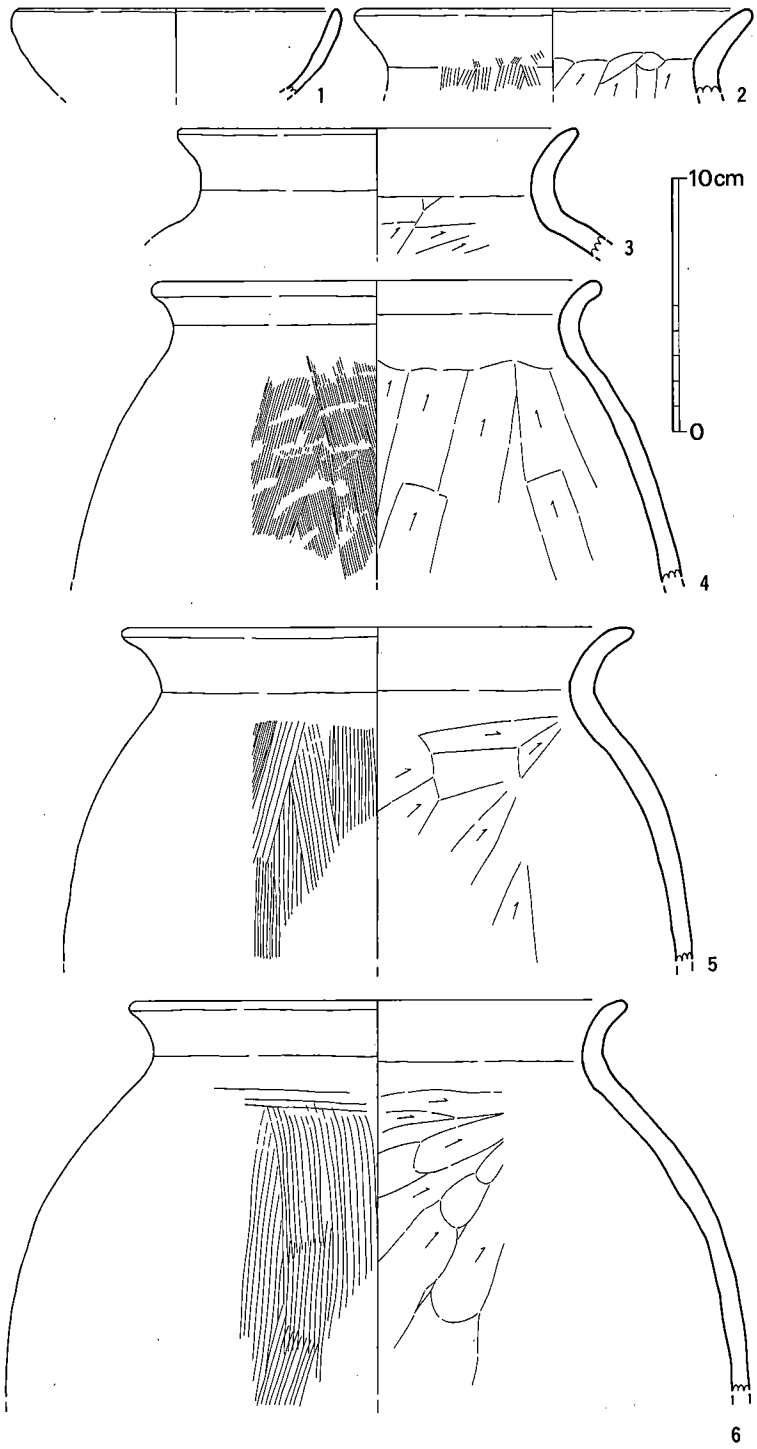
第133図　中道104号住居跡実測図（1/60）



第134図　中道104号住居跡カマド実測図（1/30）

カマド（第134図）
北壁中央に検出した造り付けのカマドで焚口幅約50cm、奥行き約65cmを測る。両袖幅は区々で20～40cmを測り、礫・焼土混じりの黄灰色粘質土である。左袖北側に幅60cm、奥行き30cmの突出部を検出したが、当初のカマド構築計画は造り付けでなかったのかもしれない。火床中央に支脚の小石が認められ、床はやや掘り窪んで赤褐色に焼けていた。

出土遺物（第135図）
土師器（1～6）1は坏身片で復原口径13.0cm。2～6は甕片で、復原口径は2から順に15.8cm、16.0cm、19.0cm、20.4cm、19.8cmを測る。共に胎土は石英・角内石を含み茶褐色で、外体部は刷毛目、内面はナデ調整を施す。



第135図　中道104号住居跡出土土器実測図（1/3）

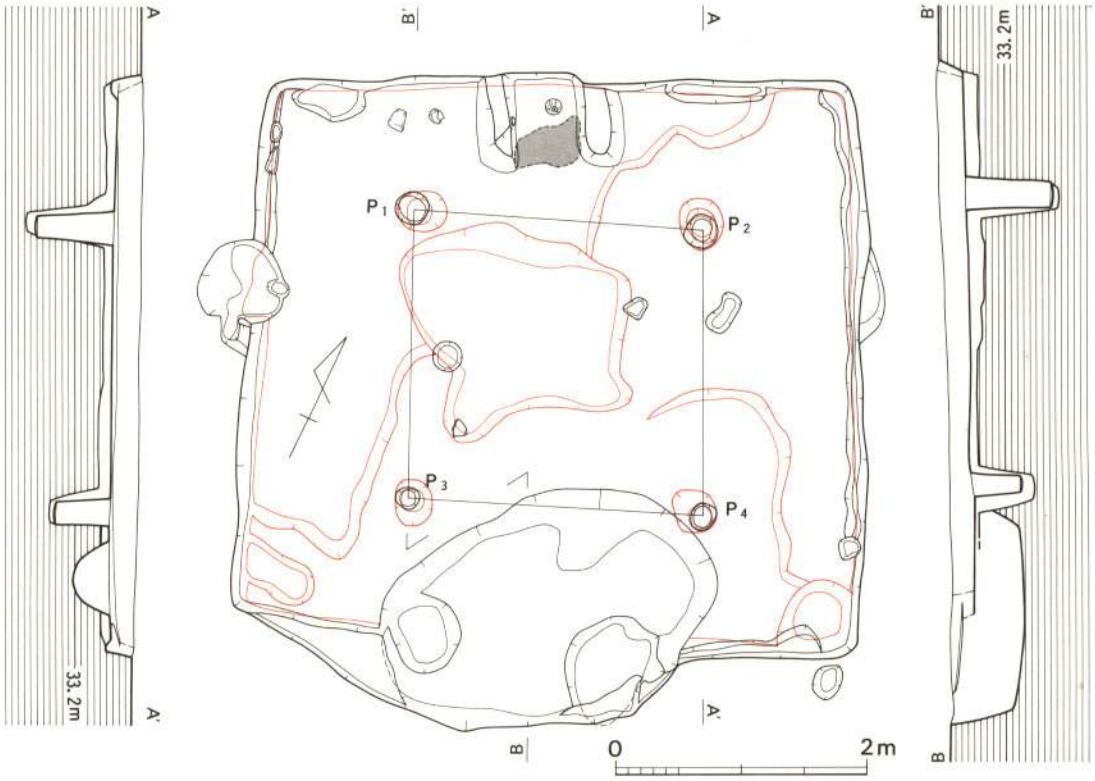
105号住居跡（図版59、第136・137図）

104号の東側に隣接した位置にある。住居のプランは方形で東西4.9m×南北4.6mを測り、主柱穴も住居プランに図ったようにP1－P2、P1－P3間は2.3mの等間である。主柱穴は深く約50cmある。北壁中央に造り付けのカマドを設け、対面に2.6m×1.8mの楕円形をした屋内土壙を設け、深さ55cmを測る。床面は住居中央部が堅くしまっており、下層は約10cmの貼り床で全面域に及んでいた。出土遺物も多く、屋内土壙から2・11等が出土している。床面積20m²、方位はN-24°-W。埋土中に鉄滓もあった。

カマド（第137図）　造り付けのカマドで両袖共に残りが良い。袖は礫・焼土混じりの黄灰色粘質土で、比較的火床の広いカマドである。床中央部に17の高坏が伏せた状態で検出され、支脚としていた。床には灰が多く、土器9・21・22等が出土した。

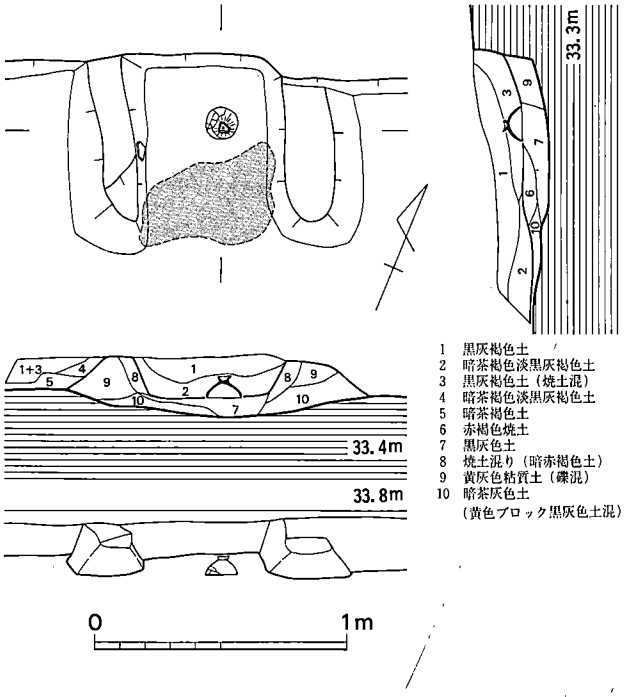
出土遺物（図版62、第138～140図）

須恵器（1～6）　1･2は蓋で、1は復原口径10.8cmで外天井部に二本のヘラ記号がある。2は器高が高く、口径10.2cmである。3～5は低い受部をもつ坏身で4は口径8.3cm、5は11.0cmである。共に焼成は良い。6は壺胴体片か。



第136図　中道105号住居跡実測図（1/60）

土師器（7～32）7～11は坏身で、11を除くほかは底部を丸底にし、ケズリ調整である。11は体部中位で屈曲し口縁部が外向する。12は椀で復原口径13.0cmで、体部中位からケズリ調整で丸底に作っている。13～18は高坏・脚部片で、15が脚部の長い他は脚高約4～5cmで大きく開脚する。17はカマドの支脚に転用された高坏で、器高8.5cmで二次的に加熱されており赤褐色をしている。19・20は壺片で、19は器肉が薄く胎土精良の小壺。23は甑で口縁部を欠く。復原底径10.2cmで外・内体部は粗いケズリ調整を施し、特に把手接合内面は強くナデており指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含む。21・22・24～32は甕である。21・22は小型の甕口縁部で前者がカマド下層、後者はカマド内出土。他の甕は口径が15～20cmの一般的のもので、完形に近い30例から器高32.5cmが復原できる。胎土中に砂粒・雲母を含み、外体部は刷毛目、内面はケズリ調整である。2・11・24・25・29・31は屋内土壙出土。8は床面下層出土である。

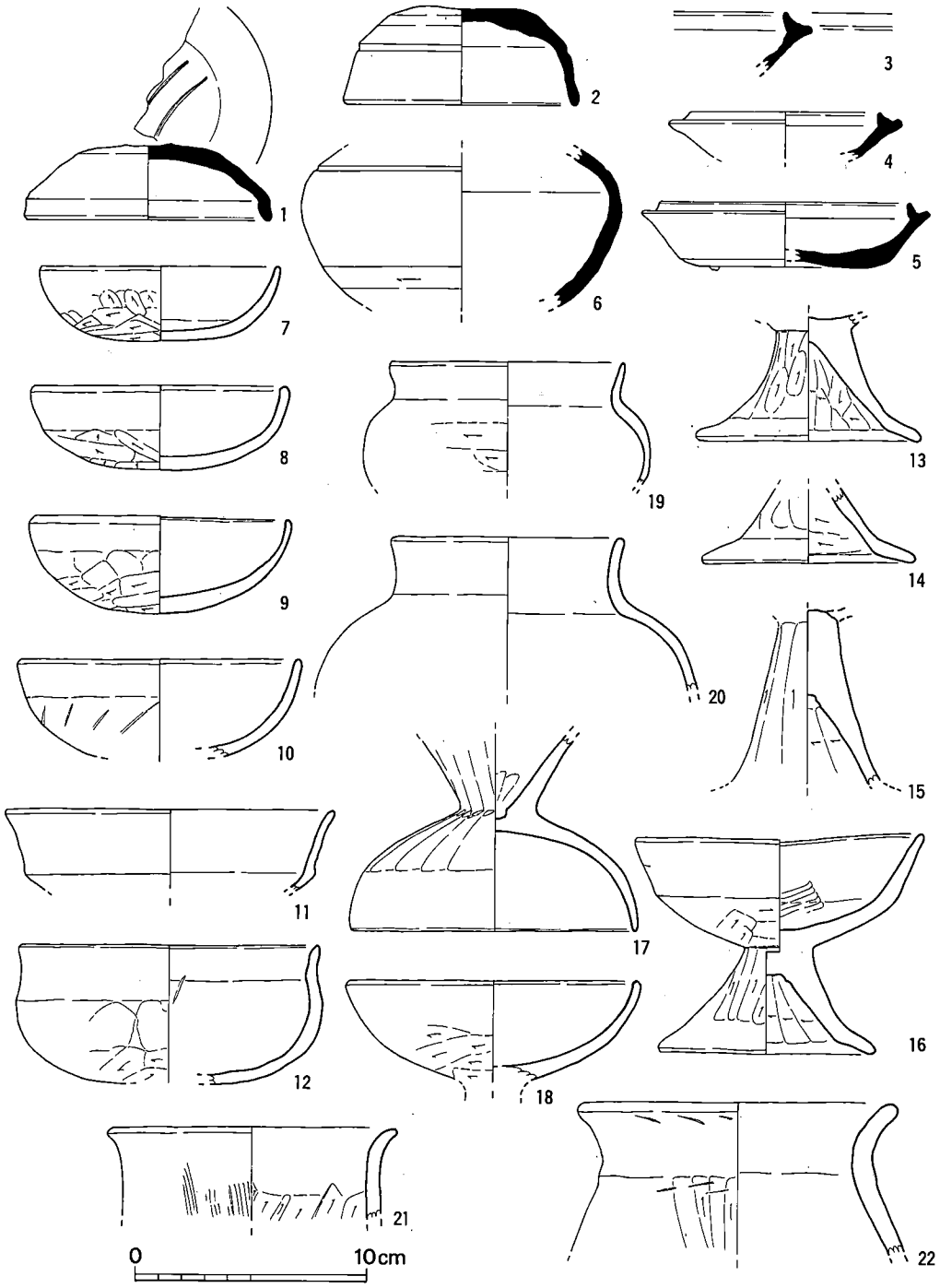


第137図　中道105号住居跡カマド実測図（1/30）

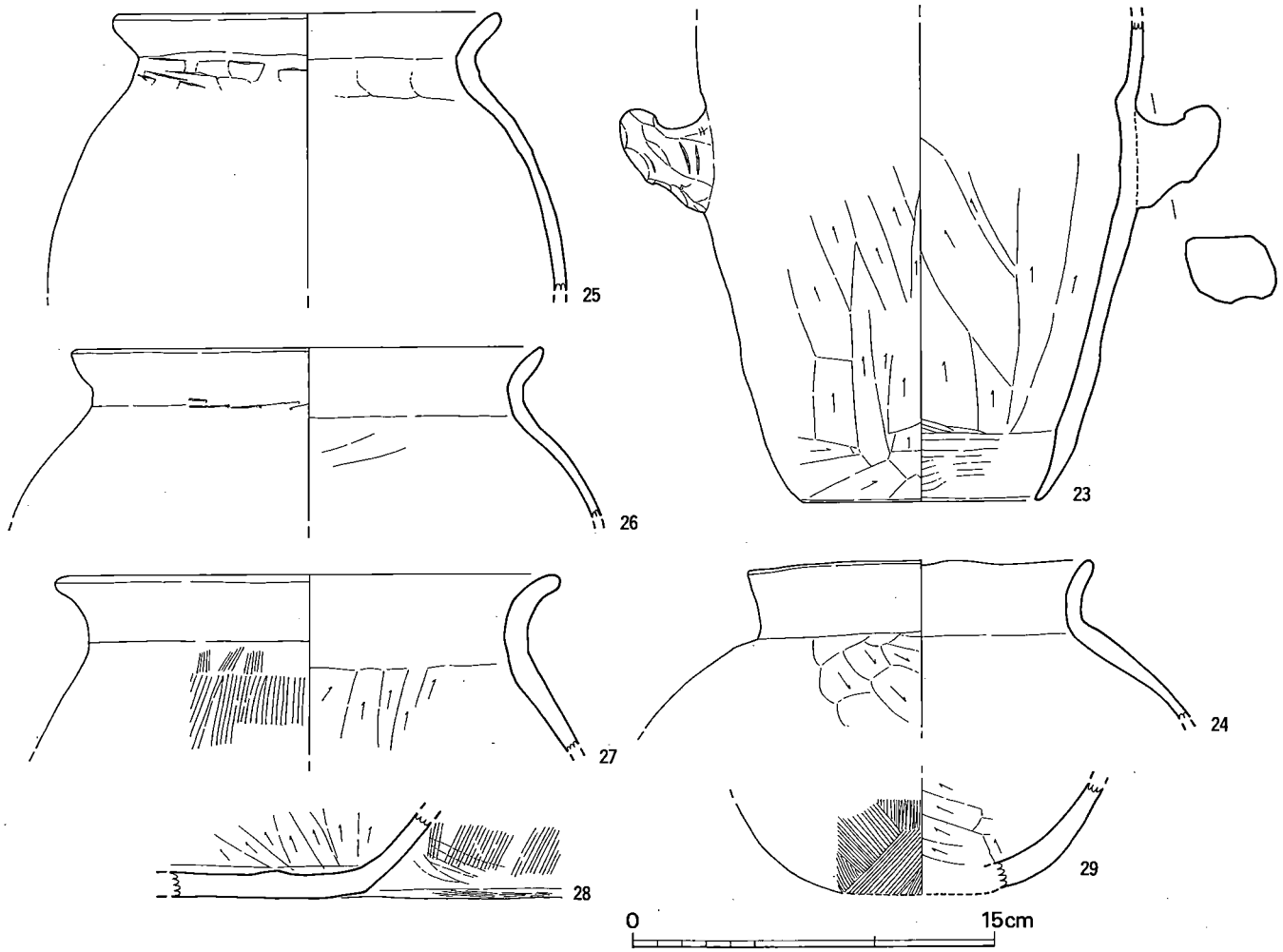
106号住居跡（図版60、第141・142図）

調査区の南壁寄りに検出した。出土遺物にやや巾があり奈良時代の新しいものも含まれているが、総称して古墳時代末頃の住居として報告する。

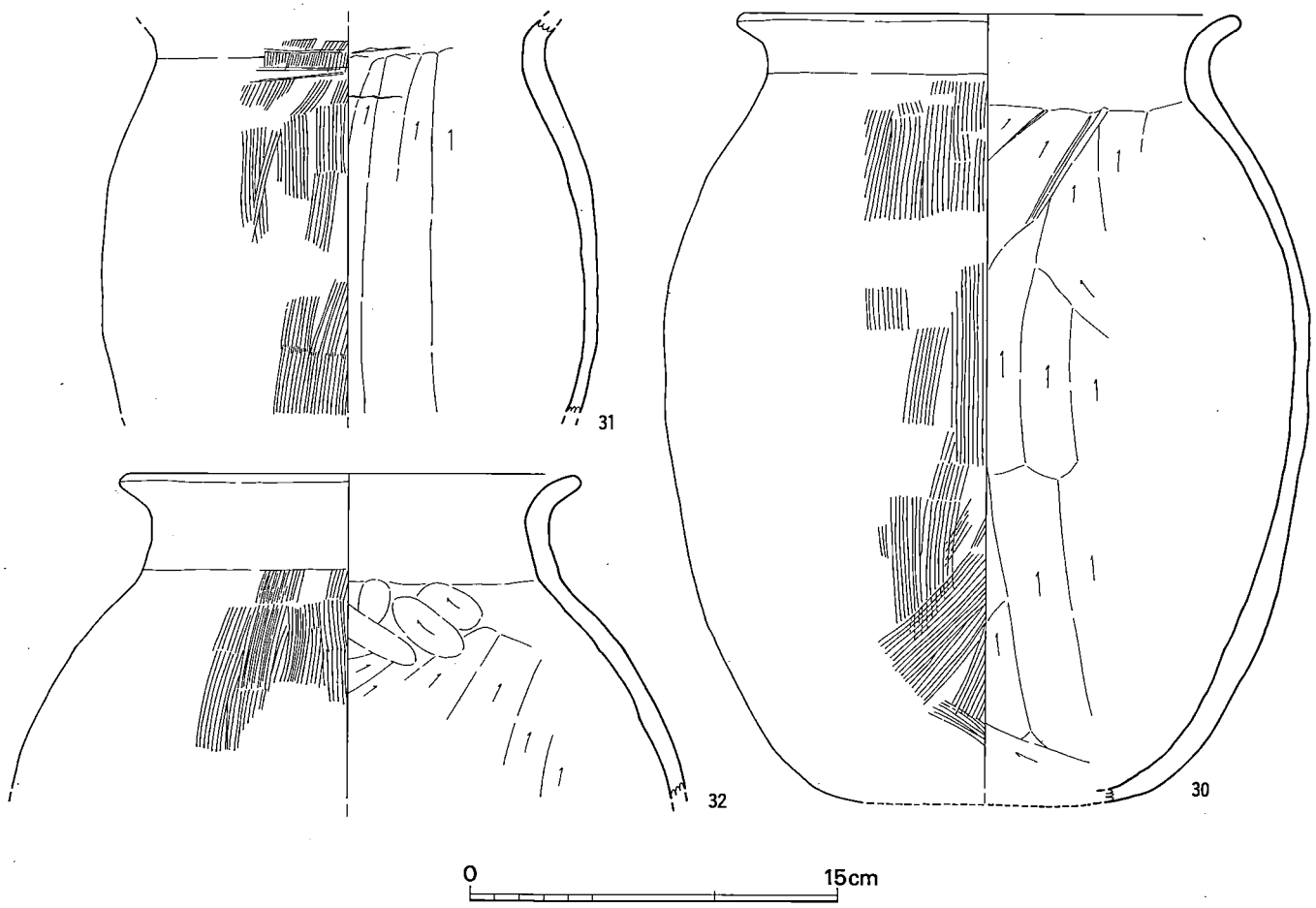
弥生時代の14号住居跡、20号土坑を切っている。規模は略方形であるが南壁長が他三辺より長く、緩やかに張り出す。東西5.6m×南北5.0mで、北壁中央部に造り出しのカマドが付設される。主柱穴はP1～P4を検出し、P1－P2間2.6m×P1－P3間2.5mを測り、ほぼ方形の柱間間隔である。掘り形は円形で大きく深いもので70cmを測る。因みに柱の太さは13cm前後である。床面は平坦で堅く締まり、下層床面はカマド全面部がやや深く窪められているほかは5cm程の貼り床である。床面積27m²。方位はN-19°-W。埋土中に押型文土器片が多く存し、また弥生土



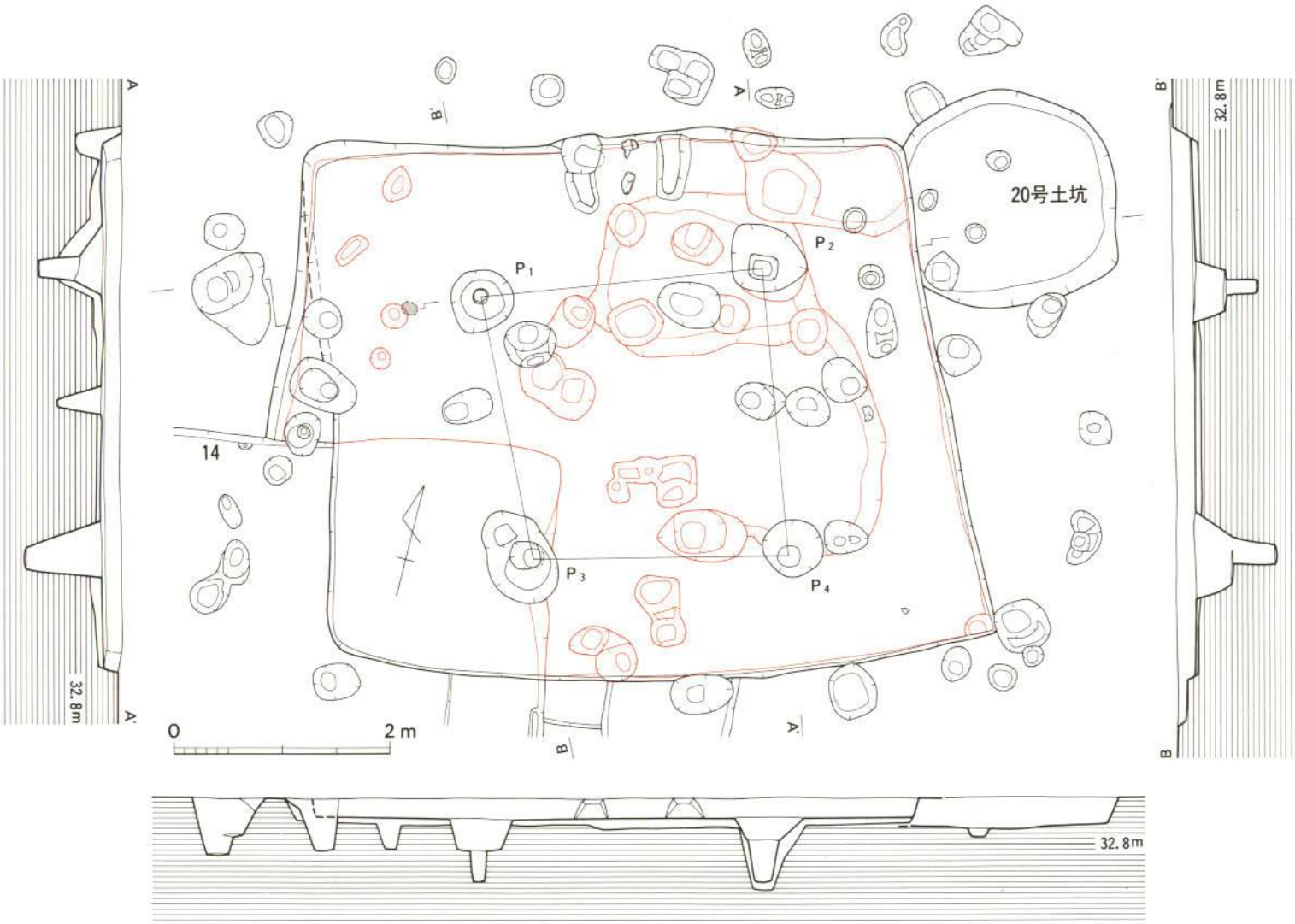
第138図　中道105号住居跡出土土器実測図１（1/3）



第139図　中道105号住居跡出土土器実測図２（1/3）



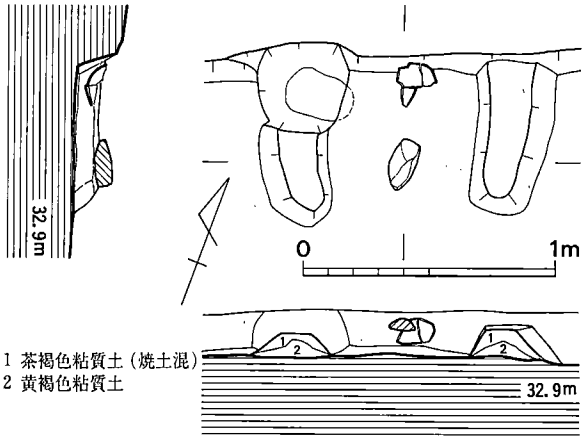
第140図　中道105号住居跡出土土器実測図３（1/3）



第141図　中道106号住居跡、20号土坑実測図（1/60）

器片もあった。

カマド（第142図）　左袖は北壁寄りに径80cmの穴が穿たれており袖は先端部のみ残存。焚口幅約53cm、奥行き55cmで、奥壁に土師器甕片が残っていた。また火床中央部、床面から約10cmの高さに20cm級の加熱した石を検出した。おそらく支脚としていたものが抜かれたのであろう。火床は赤褐色に焼け、両袖は黄灰色粘質土である。



第142図　中道106号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版63、第143・144図）

須恵器（1～10）1～5は蓋、6～10は坏身である。1は浅い返りがあり、復原口径11.1cm。2･3は径11.4cmほどで平坦な蓋。4は返りが無く、内体部にヘラ記号がある。5は口径18.2cmで全体に磨滅が著しい。6は復原口径11.6cmで外底にヘラ記号が認められ、胎土は精良である。7は無高台坏。8･9は低い高台を有す。10は壺の底部か。

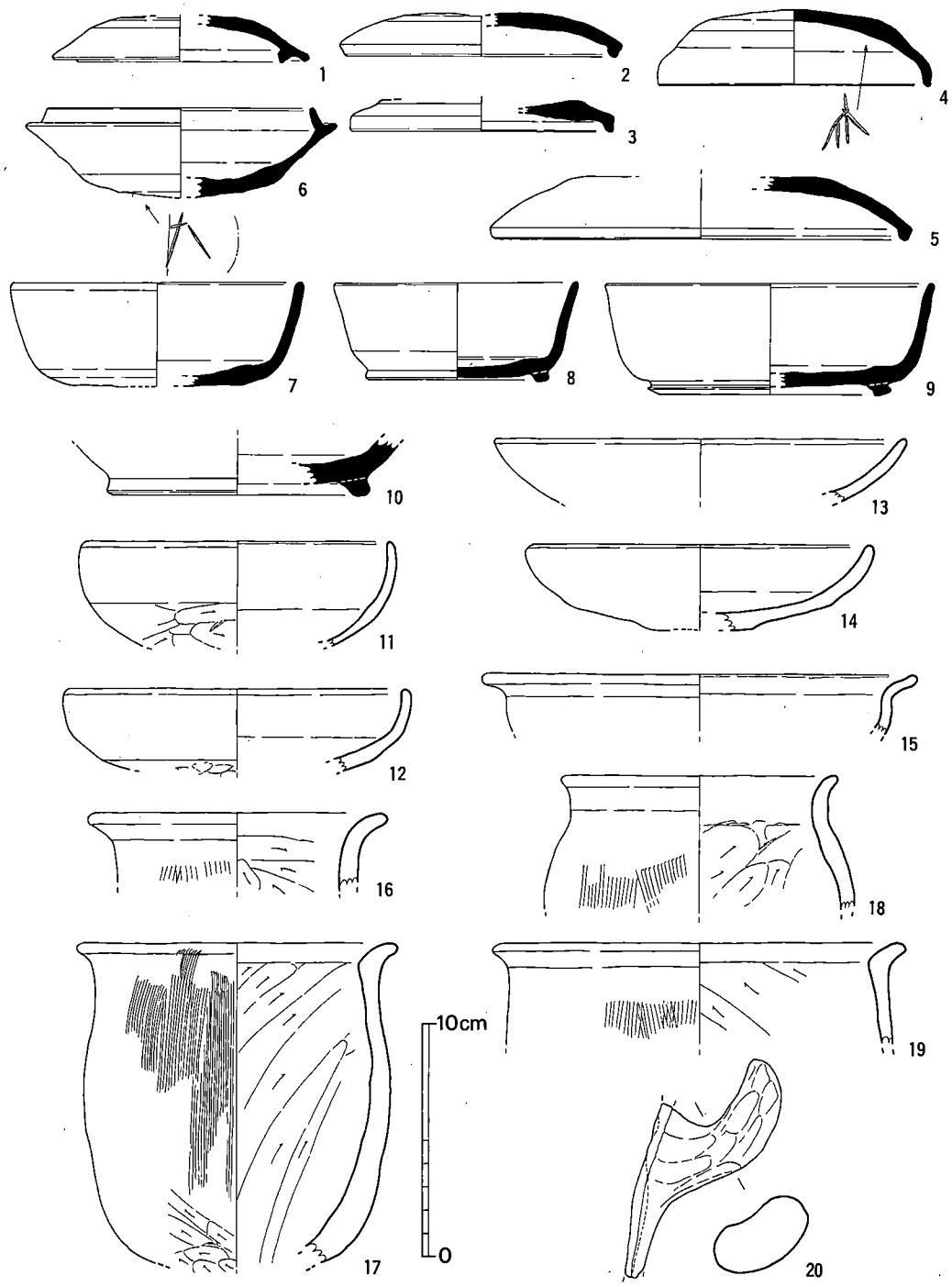
土師器（11～22）11･12は坏身、13･14は高坏、15は椀、16～22は甕である。11は器肉が薄く内弯する器種で外体部中位から底部はケズリ調整で赤変している。12は11に比較して胎土に砂の入りが多い。高坏は共に乳茶色で磨滅が著しい。15は口縁端部が強く外反し、胎土精良である。16～18は小型甕、19は中型の甕であろうか。20は把手。このうち17は二次的火熱を受けており支脚の可能性がある。21･22は大甕で外体部は粗い刷毛目、内面は底部から口縁部にかけて強いケズリ調整である。

2．掘立柱建物跡

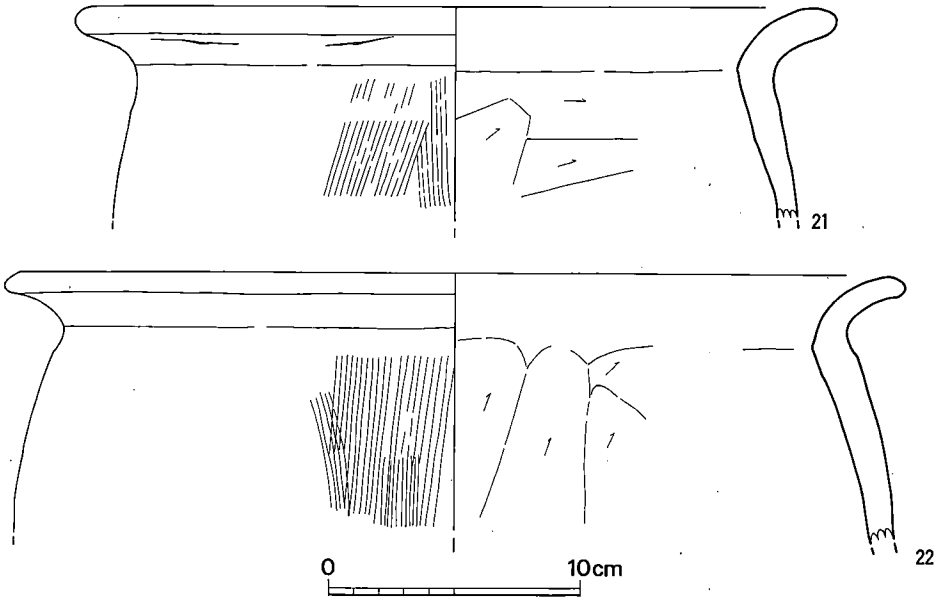
101号掘立柱建物跡［ＳＢ101］（図版61、第145図）

発掘調査区の最西端に検出した。規模は東西２間×南北２間の総柱建物で南北に長い棟である。柱間寸法は桁行き1.3ｍ、梁行き1.1ｍの等間である。柱掘り形は円形で径約40cm、深さ35～50cmを測り、柱を立てるときに掘り込まれたと考えられる片面二段の掘り形が3･4･6～9の穴に見られる。方位はN-10°-W。

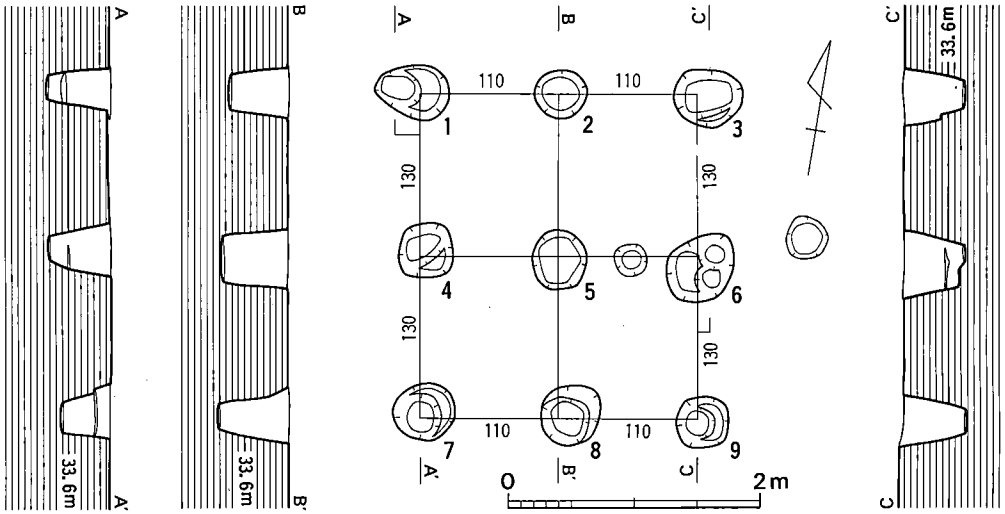
102号掘立柱建物跡［ＳＢ102］（図版61、第146図）



第143図　中道106号住居跡出土土器実測図１（1/3）



第144図　中道106号住居跡出土土器実測図２（1/3）



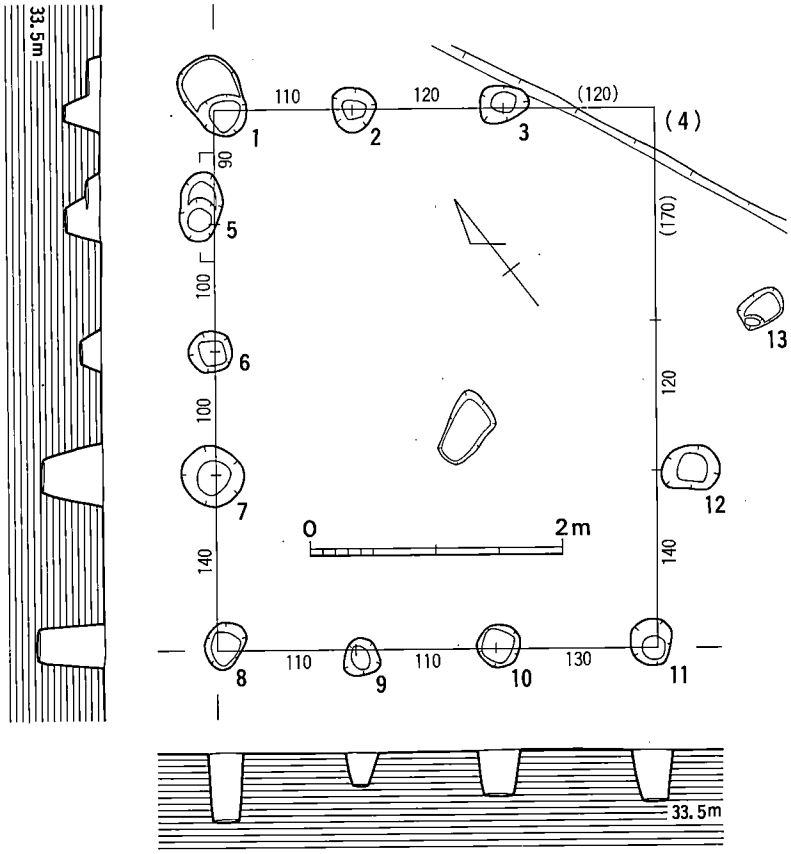
第145図　中道101号掘立柱建物跡実測図（1/60）

調査区の西域に検出した。規模は東西３間×南北４間の南北棟であろう。北東隅部が近世道路面下にあって明らかでない。柱間寸法は西桁行き列で南から1.4、1.0、1.0、0.9ｍを測り、柱間に統一性を欠く。梁行きは両列共に1.1ｍ×1.3ｍを測る。他の建物に比較して掘り形は一回り小さ

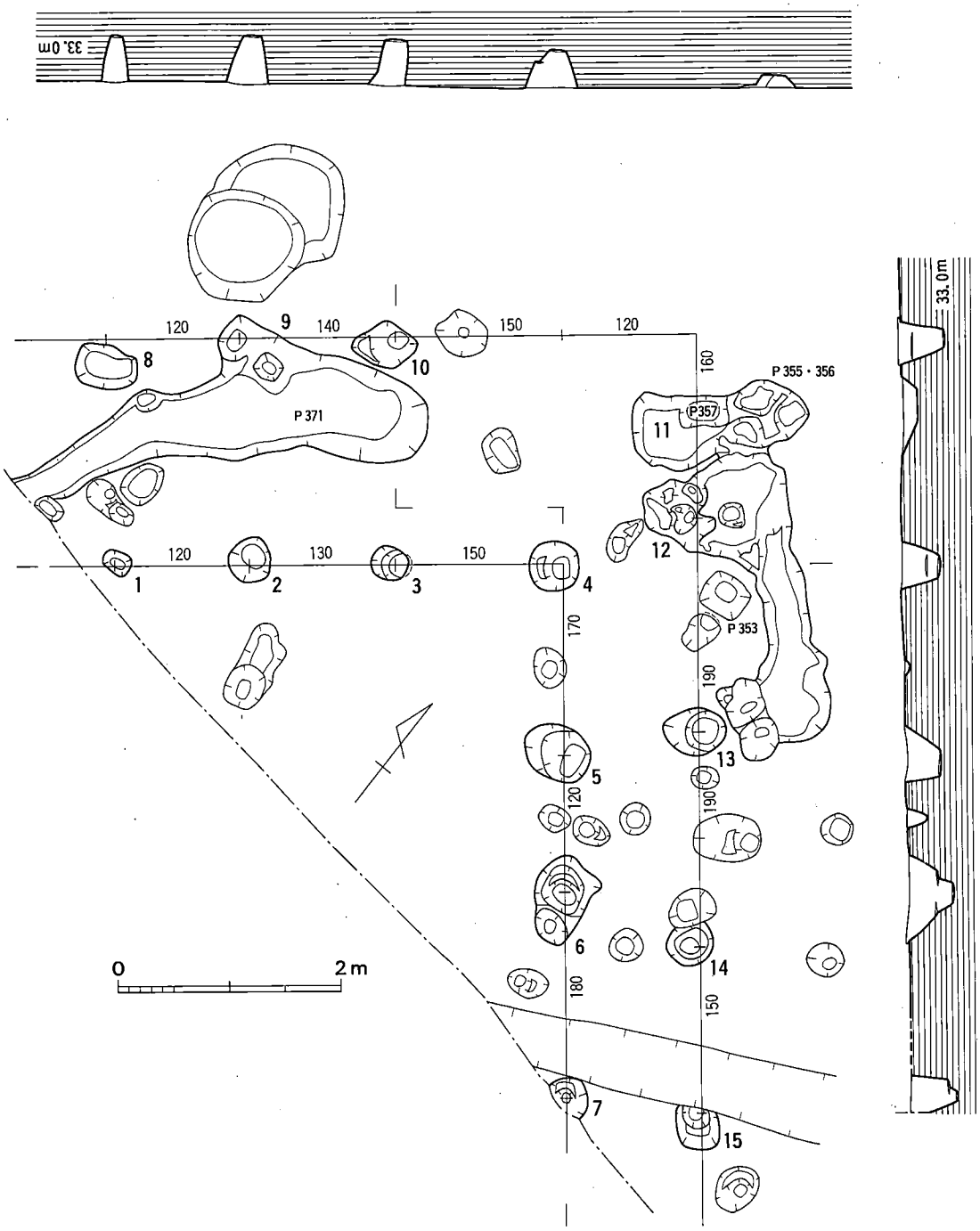
く、径30～40cmで深さ52cmが最も深い。方位はN-37°-E。

103号掘立柱建物跡［ＳＢ103］（図版61、第147図）

調査区西端に検出した。建物は北東隅部が検出され柱は二重に巡っており、南西半部は発掘区域外にある。規模はＰ1～Ｐ4が３間以上×Ｐ4～Ｐ7が３間以上で、Ｐ1～Ｐ7の柱寸法は1.2～1.5ｍでＰ4が隅柱となる。Ｐ4～Ｐ7の柱間はＰ5～Ｐ6間が1.2ｍの他は1.7ｍ前後である。Ｐ9～Ｐ15（外側柱列）の柱間も３間以上が検出され、柱間寸法も同じく統一性がない。北東隅柱は定かでない。柱間及び柱検出列からＰ4～Ｐ7を桁行きと考えると、内側柱列を母屋と外側柱列を廂と考えるのが妥当と思われる。母屋と廂の桁行き幅1.2ｍ、梁行き幅2.0ｍで、大きな四面廂建物を想定できる。柱掘り形は円形で径20～40cmを測り、深さ約40cmである。出土遺物はない。桁行きと考えた方位はN-38°-W。



第146図　中道102号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第147図　中道103号掘立柱建物跡実測図（1/60）

D. 奈良時代以降の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、発掘調査区の中央から東寄りに集中して検出された。その主な遺構は竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡21棟、土坑16基等である。特に中央部において竪穴住居と掘立柱建物の配置関係及び掘立柱建物115号、116号から北側は建物等がないのも興味を引く。さらに竪穴住居125号より東側の建物群は中央部の竪穴住居に比べ一回り小さくなり、一群を作って配置されているのも住居の変遷を考える上で興味がそそられた。竪穴住居の重複関係が著しく、調査段階で慎重に遺物の取り上げを行ったが、それでも若干混在している可能性があることを付記しておく。方位の計測は竪穴住居はカマドを正面にした軸を、掘立柱建物跡は桁行き方向を軸とした。なお住居の寸法については住居の中央部で計測した。

出土遺物のうち、製塩土器については最後にまとめて説明することとする。

なお、中世に属する溝が２条あったが、それもこの項の最後の方で報告する。

１．竪穴住居跡

107号住居跡（図版64・65、第148図）

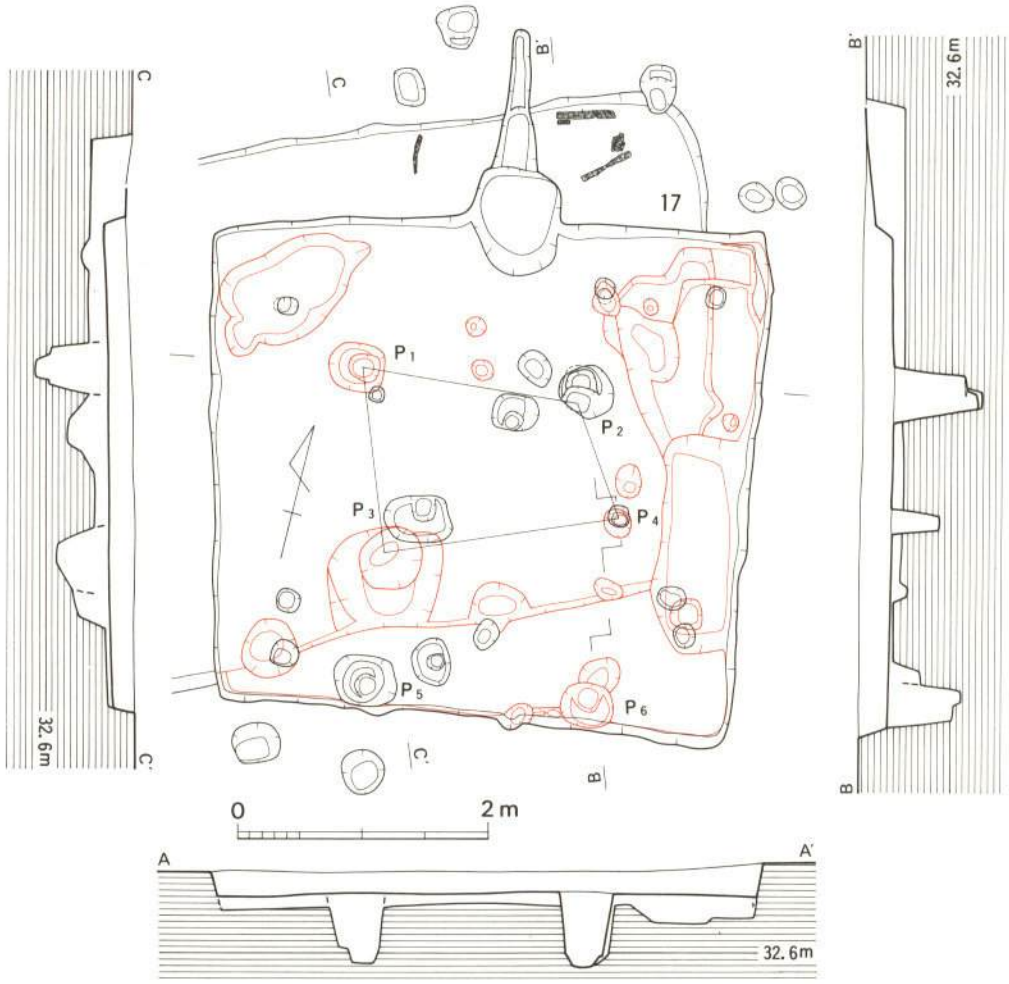
調査区のほぼ中央部に検出した。17号弥生住居を切っている。規模は略方形で東西4.3ｍ×南北3.9ｍで北壁に突出型のカマドを配す。カマドは黄色粘土を使用して構築しており、両袖はほとんど崩壊して明らかでなかったが粘土の残存状態から僅かに袖が突出するものであろう。住居は残りが良く主柱穴６本を確認し、柱間Ｐ１－Ｐ２寸法1.8ｍ、Ｐ１－Ｐ３間1.5ｍを測る。Ｐ４とした柱は他に比較して小さく、屋家構造上Ｐ５･Ｐ６を設けたのではなかろうか。因みにＰ１－Ｐ５、Ｐ２－Ｐ６間の寸法2.5ｍ等間である。検出面から床面の深さ20cmで平坦であり、床面下層は東南壁寄りに若干深く掘られ、床全体に10cmの貼り床が認められた。床面積15.6㎡。方位はN-11°-W。土器以外に土製品があり、床面とカマド内に焼塩土器片があった。また、埋土中その他に押型文土器片、弥生土器片もあった。

出土遺物（図版100・101、第149・234・237図）

須恵器（1･2）　1は蓋片で復原不可能。2は鉢で復原口径19.5cmを測り胎土は精良である。

土師器（3～11）3は蓋。4～7は坏身で共に胎土精良であるが、4の復原口径14.3cm、7は17.7cmと口径に開きがある。8は把手片、9は甑片である。10､11は甕の口縁部片で、外体部は刷毛目調整で、胎土には大粒の砂粒を含む。

紡錘車（第234図1）　土製の紡錘車で微細な雲母片を含み黄茶色を呈する。径4.18～4.46cm、厚さ1.4cm、孔径0.61cmを測り、重さ23.5gである。全体にナデ調整で、片面に植物性の圧痕がある。孔は焼成前に穿っていたことが判る。

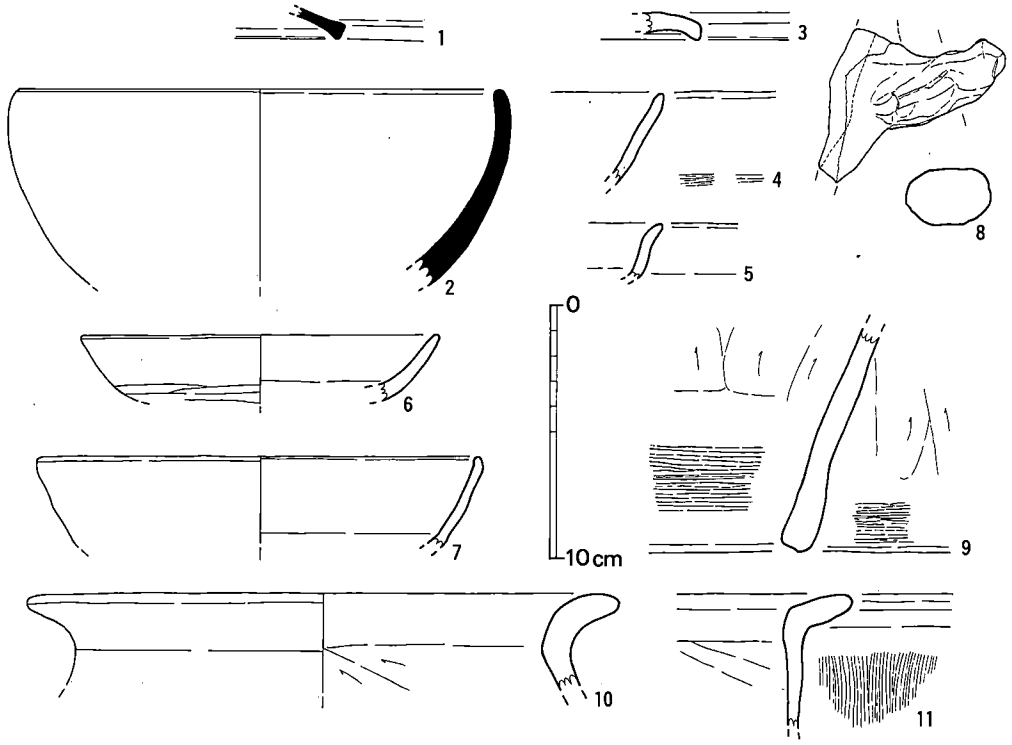


第148図　中道107号住居跡実測図（1/60）

不明土製品（第234図４）　残存長3.43㎝、幅2.06㎝、厚さ1.62㎝、重さ10.4gを測る。暗灰色を呈し、胎土は精良である。端部に切り込みがあり、一部黒斑が認められる。

108号住居跡（図版66、第150・151図）

調査区のほぼ中央部に検出した。住居の西半部は水路により削除されていて明らかでない。検出規模は略方形で東西2.8ｍ以上×南北3.1ｍで、主柱穴Ｐ1、Ｐ2は壁寄りに検出した。柱間寸法はＰ1－Ｐ2間約1.8ｍ、Ｐ1－Ｐ3間1.9ｍを測る。北壁中央に突出型のカマドを配し、煙道が長く延びている。カマド対面に僅かな張り出しと小穴が確認されたが、出入口とするには無



第149図　中道107号住居跡出土土器実測図（1/3）

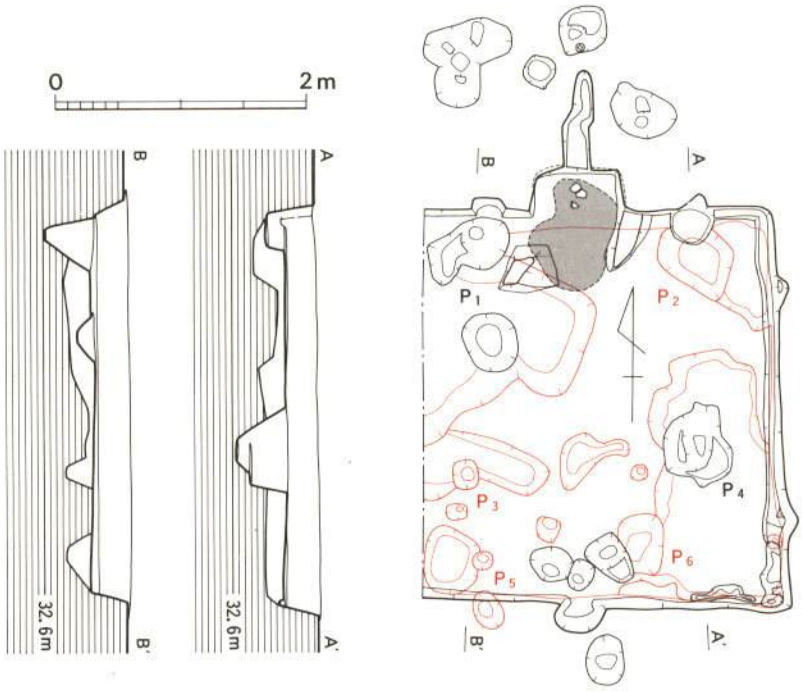
理があろうか。東壁沿いに小溝が巡る。床面は平担で堅く、下層は10～25cm幅で床全体に貼り床を行っている。南壁寄りに下層からＰ5、Ｐ6を検出したが、上部構造の柱として考えられないであろうか。床面積8.7㎡。方位はN-2°-W。埋土中に焼塩土器片があった。

カマド（第151図）　突出型のカマドで、タイプとしてはＣに属する。右袖が残り、左袖は焚口左側に黄色粘質土が残っていた。それから焚口幅約40cm、奥行き80cm前後を想定する。右袖は40cm程で、張り出し幅70cm、奥行き35cmを測る。火床は広く、燃焼部から焼成部に約10cmの段が生ずる。また火床は二面確認した。壁及び床は赤褐色に焼け、奥壁より80cmの煙道が延びている。

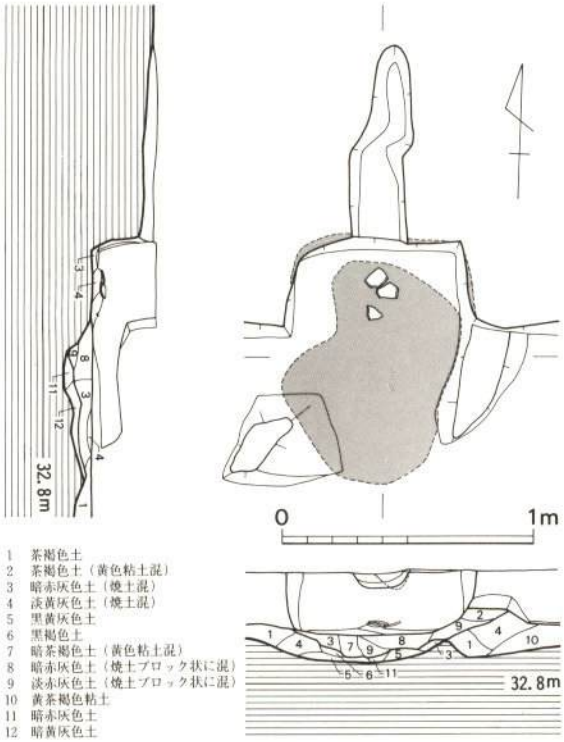
出土遺物（図版100、第152・237図）

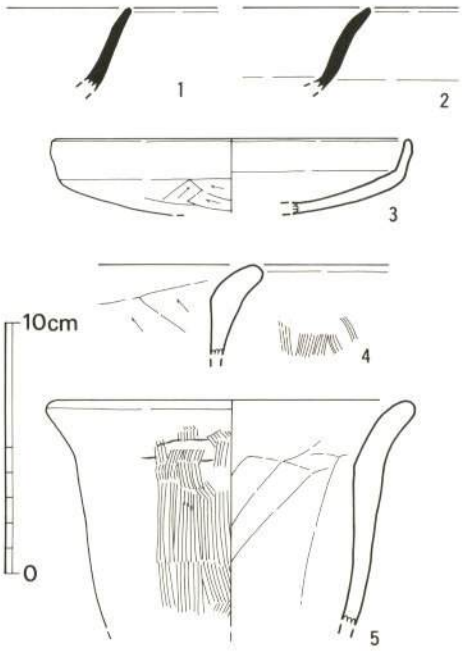
須恵器（1･2）　1･2は坏身片で復原不可能である。胎土･焼成は良好。

土師器（3～5）3は坏身で復原口径14.4cm。体部下位はケズリ調整し、砂粒が少ない。4･5は小型甕で、5は復原口径14.6cmを測り、外体部は刷毛目、内面はナデ上げである。



第150図　中道108号住居跡実測図（1/60）

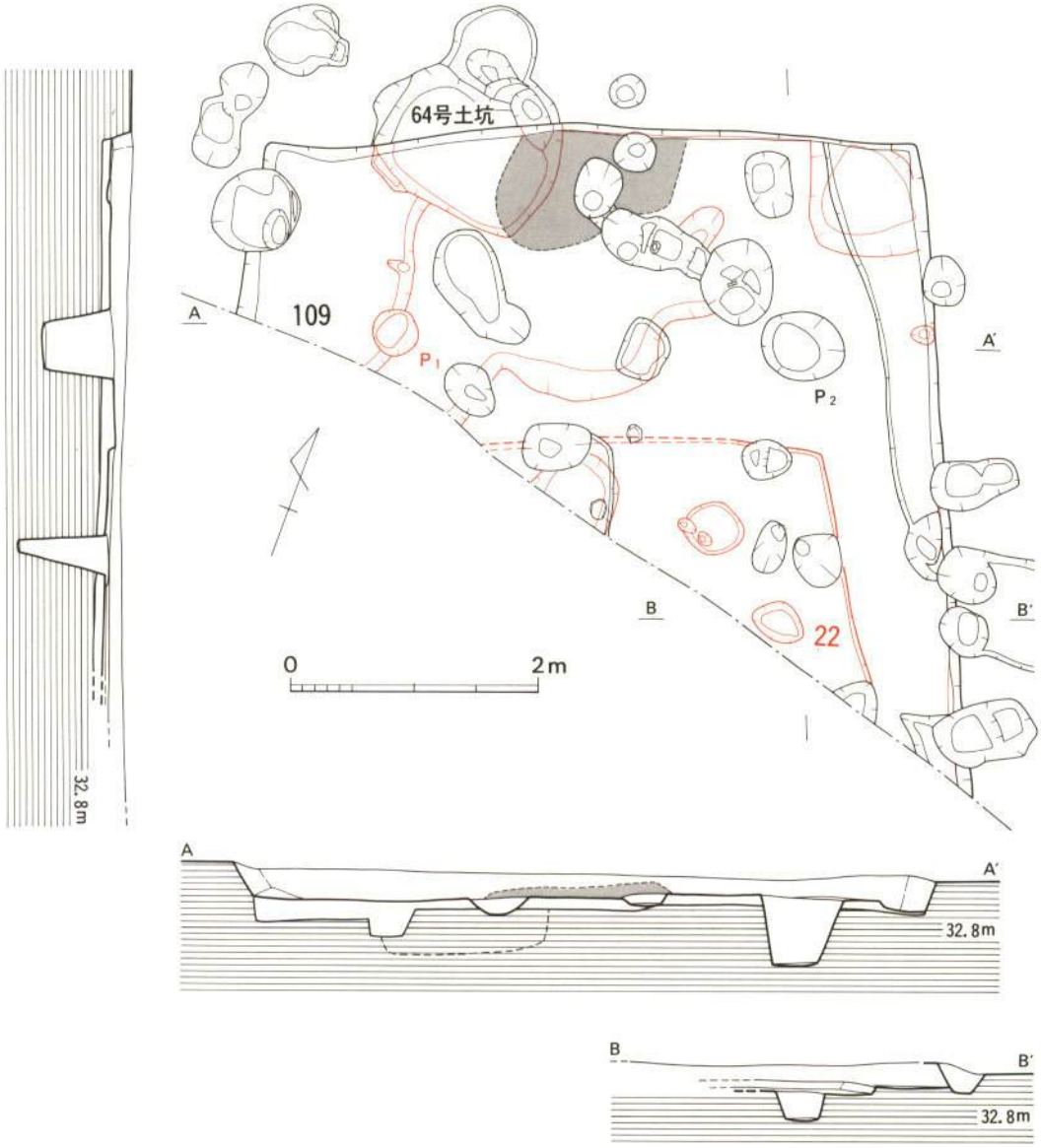




第151図　中道108号住居跡カマド実測図（1/30）　　**第152図**　中道108号住居跡出土土器実測図（1/3）

109号住居跡（図版66、第153図）

調査区の中央にあって、南区域沿いに検出した。弥生時代の22号住居跡及び落し穴の64号土坑を切っている。住居の南西半分は調査区域外にある。規模は東西5.5m×南北（東壁長）5.3m以上を測る。北壁中央に64号土坑があり、調査段階ではその周辺がやや撹乱状態にあったが、その東側に黄灰色粘質土が若干認められたことより、カマドの存在が想定される。主柱穴P1、

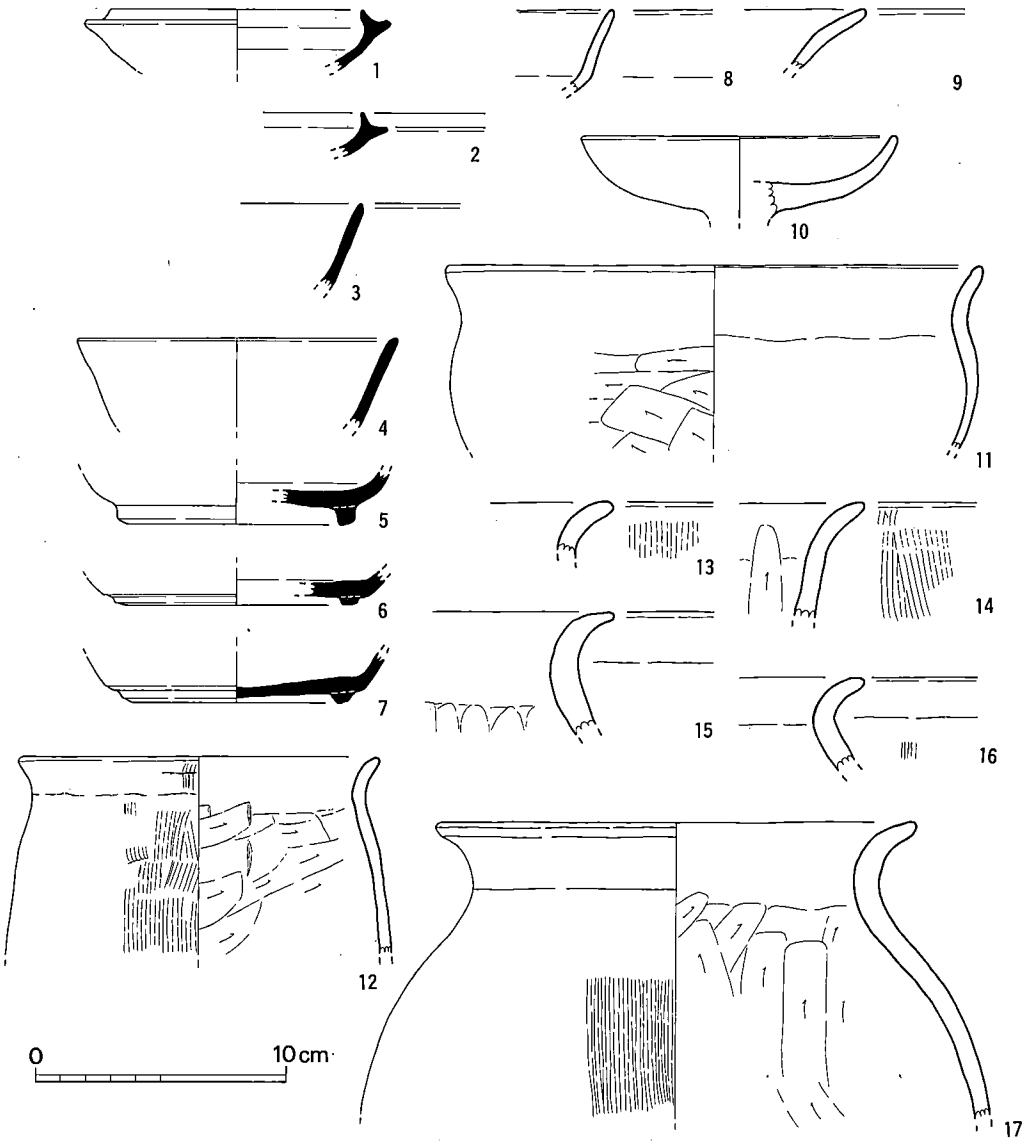


第153図　中道22・109号住居跡実測図（1/60）

P2、P4を確認し、P1－P2間3.3m、P2－P4間2.2mを測り、掘り形は円形で深さ約60cmである。床面下層は約8cmの貼り床である。床面積17m²。方位はN-20°-W。土錘、円盤状製品、台石も出土している。

出土遺物（図版101・109、第154・234・235図）

須恵器（1～7）1·2は受け部のある坏身片で、1は復原口径10.2cm。2は復原不可能である。他の



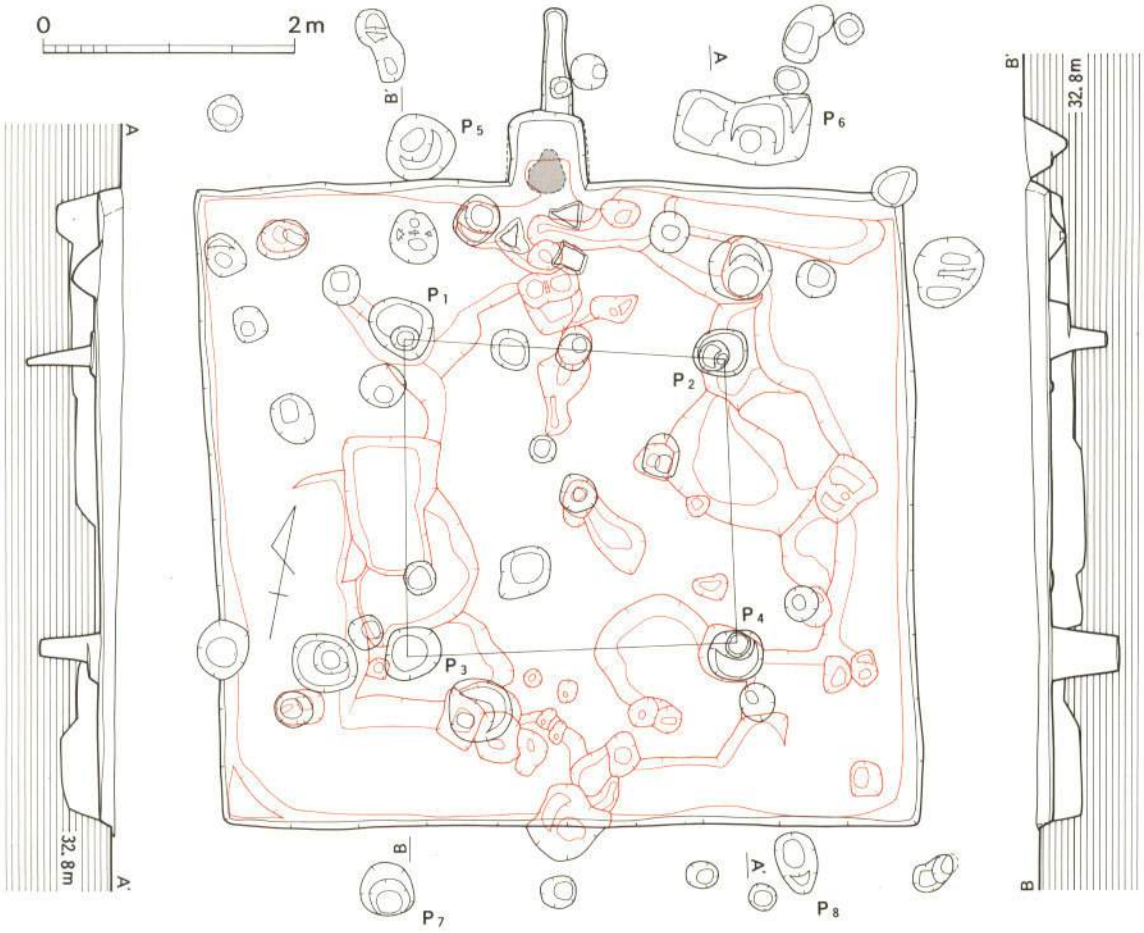
第154図　中道109号住居跡出土土器実測図（1/3）

土器よりやや古い。胎土・焼成は良好。3～7は坏身であり5～7は高台付である。焼成・胎土共に一般的な須恵器である。

土師器（8～17）8は坏身片。9は鉢の口縁か。10は高坏で焼成不良、復原口径12.6cmである。11は鉢で復原口径21.5cmを測り、胎土は砂粒が少なく器面は滑らかである。外体部中位からケズリ調整。12～17は甕片、12は器肉が薄く二次火熱を受けている。17は復原口径19.2cmで、体部から口縁部は強く外反する。外体部の調整は刷毛目。

土錘（第234図2） 床面近くに出土した。残存長1.75cm、径0.83～0.91cm、口径0.3cm、重さ1.2gを測る。淡茶灰色で胎土は精良である。

石製品（第234図12、第235図21） 12は径5.98cm、厚さ0.62cmの円盤状石製品である。片岩で側縁は面取りを行っており、一部打ち欠いている。重さ18.8 g。21は床面出土で、花崗岩質の台石か。残存長11.0cm、厚さ3.5cmである。



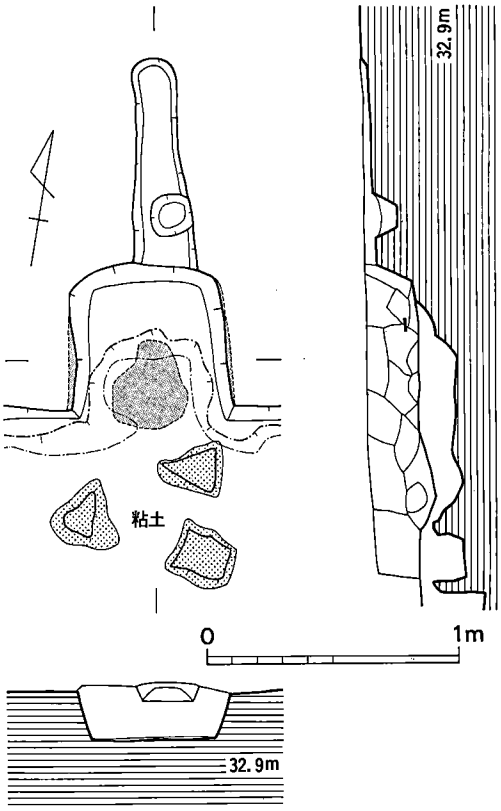
第155図 中道110号住居跡実測図（1/60）

110号住居跡

（図版67・68、第155・156図）

調査区の中央部に検出した。ととのった住居跡で規模は東西5.6m×南北5.1mを測る。北壁中央部に突出型のカマドを付設している。主柱穴は住居のプランに合いP1－P2間2.5m、P1－P3間2.5mの等間である。その南北主柱穴列上にあって、住居外にP5～P8を検出した。住居の柱構造上定かではないが、P1～P4を支える柱かもしれない。床面は平坦で下層は全域に貼り床であるが、特に住居の中央部は堅く踏み固められており住居周辺部を厚く貼っている。床面積27.6m²。方位はN-9°-W。

カマド（第156図）　北壁中央部に検出した突出型のカマドで幅55cm、奥行き56cmを測る。壁・床共に赤褐色で堅く焼けしまっており、奥壁から煙道が真っ直ぐ1.65m延びている。火床下層は約20cm掘られていた。



第156図　中道110号住居跡カマド実測図（1/30）

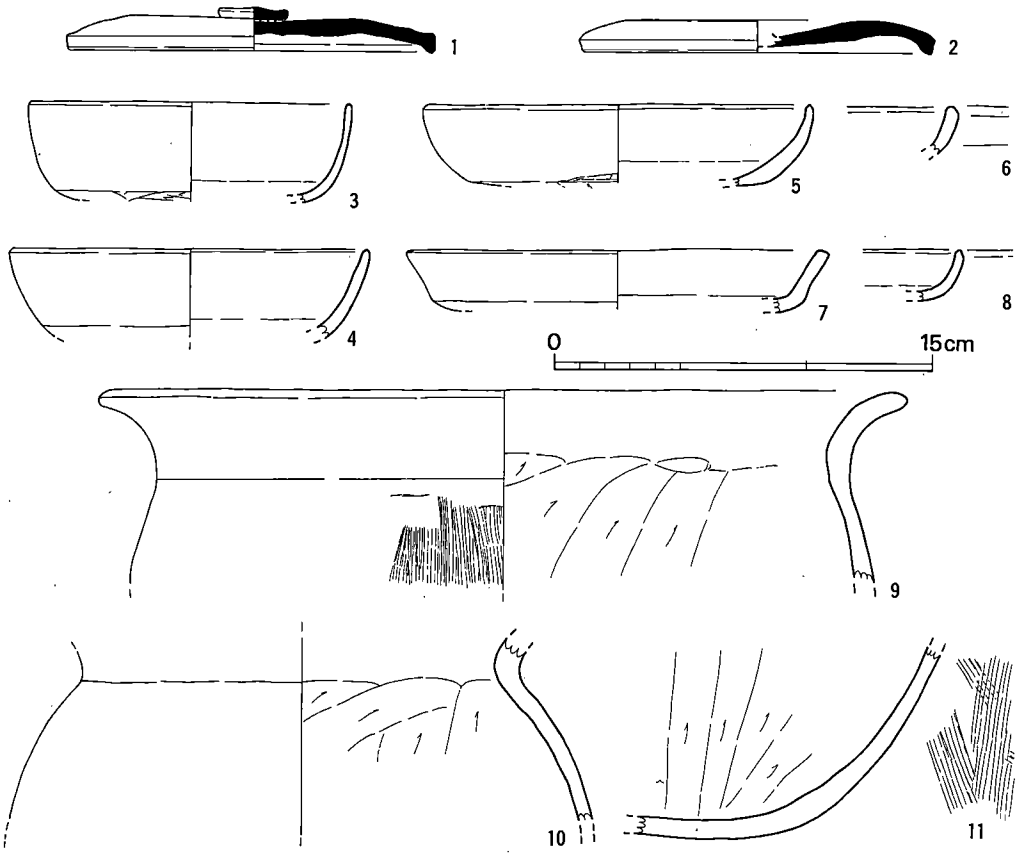
出土遺物（図版96、第157図）

須恵器（1・2）　1・2は蓋で、1は口径14.6cm、器高1.75cmで胎土に石英等を含む通常の須恵器である。2は復原口径14.0cmで、カマド内から出土した。

土師器（3～11）　3～6は坏身片で、3は器肉が薄く外底部はケズリ調整。共に胎土は精良で砂粒の混入が少ない。7・8は皿であろう。7は復原口径16.9cmを測り、二次火熱を受けている。9～11は甕片で胎土中に5mm程の砂粒を含む。外体部は刷毛目、内面はケズリである。9の復原口径は32.2cmである。3・4・8・10はカマド内出土。5・7は床面下層出土。

111号住居跡（図版68～71、第161図）

調査区の中央部に検出した。5軒の住居跡が重複しており、発掘当初は一面が黒色土で、カマドが付設している箇所のみ赤褐色に見えるだけであった。本住居跡は113・114・115号の下層から検出し、住居の切り合い関係では最も古くなる。規模は推定で東西4.5m×南北4.8mを測る。西壁に突出型のカマドが付設していたことを確認した。主柱穴は四本確認しP1－P2間2.8m、P



第157図　中道110号住居跡出土土器実測図（1/3）

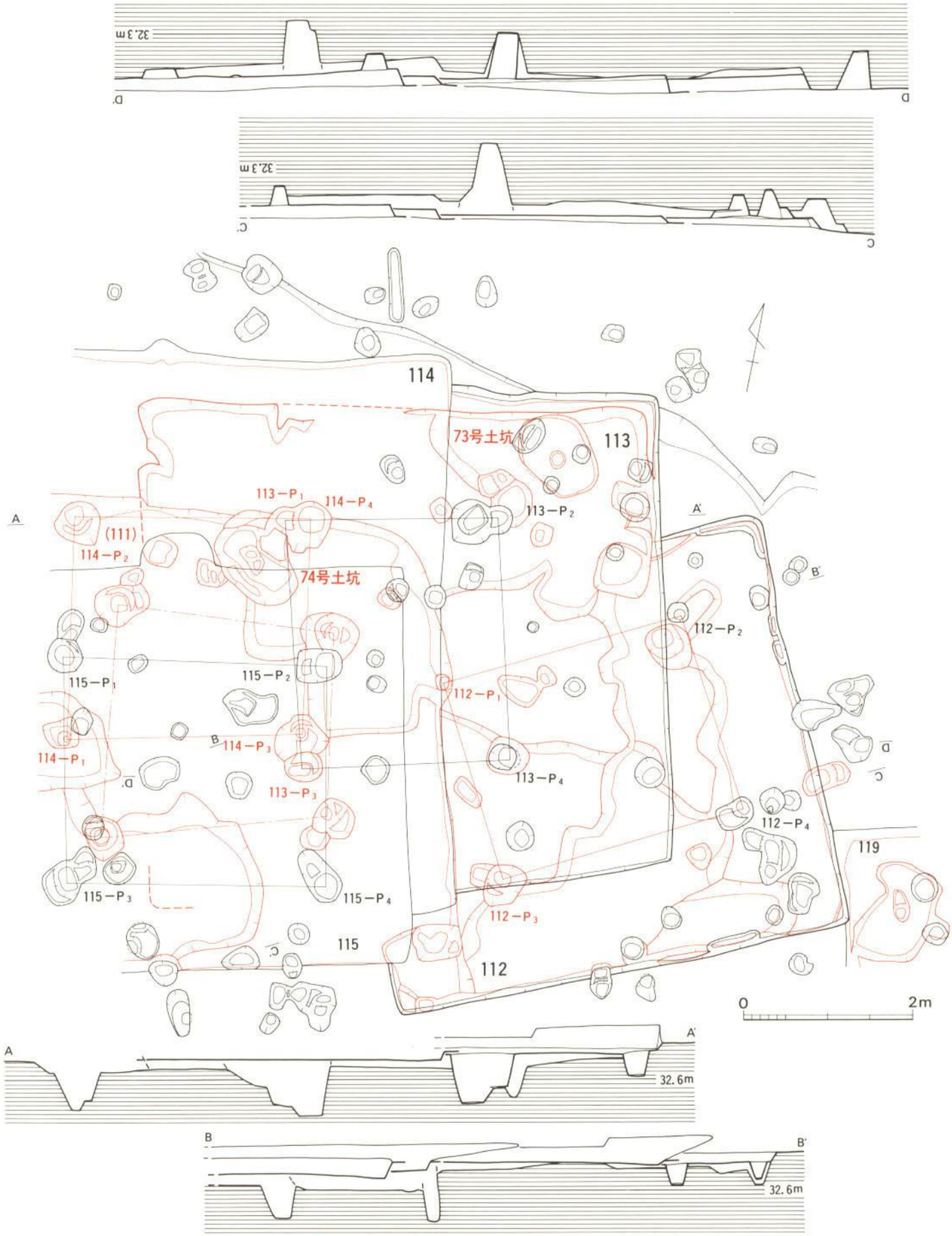
1－P3間2.7mを測り、柱掘り形は円形で二段に掘っているのもあり、深いもので60cmを測る。貼り床か否かは定かでない。床面積21㎡。方位はN-97°-W。須恵器は出土していない。

出土遺物（第159図）

土師器（1）1点のみ床から出土した。土師器の皿であろう。

112号住居跡（図版68～71、第158図）

111号を除いた他の住居から切られている。東壁、南壁を検出しその長さ東西長5.5m×南北長5.0mの略方形住居である。主柱穴は四本確認した。柱間寸法はP1－P2間2.94m、P1－P3間2.44mの長方形で長軸、短軸共に等間である。検出面から床面までは約10cmで平坦で、下層床面は約15cmの貼り床を呈す。カマドは確認できなかった。床面積25.6㎡。方位はN-26°-Wほどであろうか。埋土中から焼塩土器、押型文土器片が出土している。



第158図　中道112・113号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版96・100・101、第159・234・237図）

須恵器（2）　坏身で口径10.1cm、器高4.1cmを測り、外体部に灰が被っている。

土師器（3～6）　3･4は坏身で、3は口径13･0cmを測り外底部はケズリ調整。4は復原口径14.6cmで、口縁は丸く横ナデ調整し二次的火熱を受けている。5は高坏の脚部で、脚体部は縦方向の強いケズリを施し、胎土に砂粒は少ない。6は甕の口縁部片である。

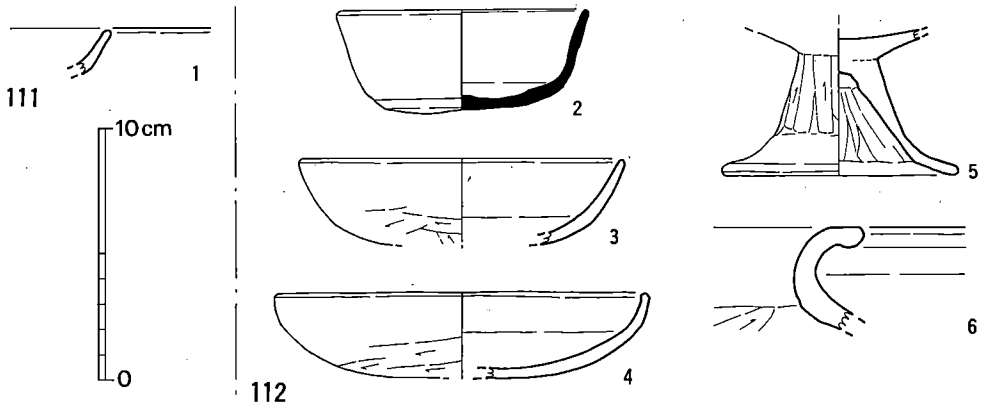
不明土製品（第234図 8）　粘土を丸くまるめたもので、多く発見されているものに比べると厚みがある。胎土に植物繊維等が含まれており、橙黄色で焼成は良い。長さ5.36cm、厚さ3.84cm、重さ60.0gを測る。

113号住居跡（図版68～71、第158図）

111号、112号を切り114号、115号から切られている。住居の西半分は114号に隠れて明らかでないが、下層検出時に北西隅部と南西隅の壁一部を僅かに確認した。このことから東西約6.2m×南北6.0mで略方形の規模に復原される。主柱穴はP1、P3が114号住居P3、P4と重複関係にあって、114号から切られていた。P1－P2間2.58m、P1－P3間2.94mを測り、各柱間行は等間である。掘り形は径40～50cmの円形を呈し、深さは50～60cmを測る。床面は112号住居と同じ状態だった。北壁において114号住居に切られた所で焼土と僅かな黄色粘土を確認したことからカマドの可能性が考えられる。床面積35m²。方位は、その焼土の確認によってN-12°-Wとする。少量の土器が出土している。

出土遺物（第163図）

土師器（1･2）　1は皿で復原口17.0cmを測る。胎土は精良。2は復原口径26.5cmで、口縁部は強く外反する甕の破片である。外体部は刷毛目調整、内面は縦方向の強いケズリである。



第159図　中道111・112号住居跡出土土器実測図（1/3）

114号住居跡（図版68～72、第160・161図）

111号、115号をつつむ大きさがあり、115号住居により南壁が削除されて明らかでない。住居の規模は東西6.1m×南北6.7mを測り、今回検出した住居の中で最も大きい。カマドは西壁中央部に付設され、長い煙道を設けている。遺構検出面から床面までの深さ約20cmと平坦で、床面下層は約10～15cmの貼り床が認められた。主柱穴は四本ありP1－P2間2.64m、P1－P3間2.8mを測り、ほぼ正方形の柱間隔である。柱掘り形は径50cm前後の円形で、深さ70cmあるが柱を抜いたときの痕跡のためか、掘り形周辺がやや撹乱されていた。検出面での住居面積39.1m²。方位はN-99°-W。埋土中に縄文土器片があった。

カマド（第160図）　西壁中央部に検出した突出型のカマドで張り出し袖はすでにない。幅65cm、奥行き30cmを測る。壁･床共に赤褐色で堅く焼けしまっており、奥壁から煙道が真っ直ぐ2.15m延びている。煙道は先端にかけて幅が広くなり、その先端部は煙出し口で径50cmの穴が穿たれていた。火床上面に土師器甕の破片が出土した。

出土遺物（図版96、第163図）

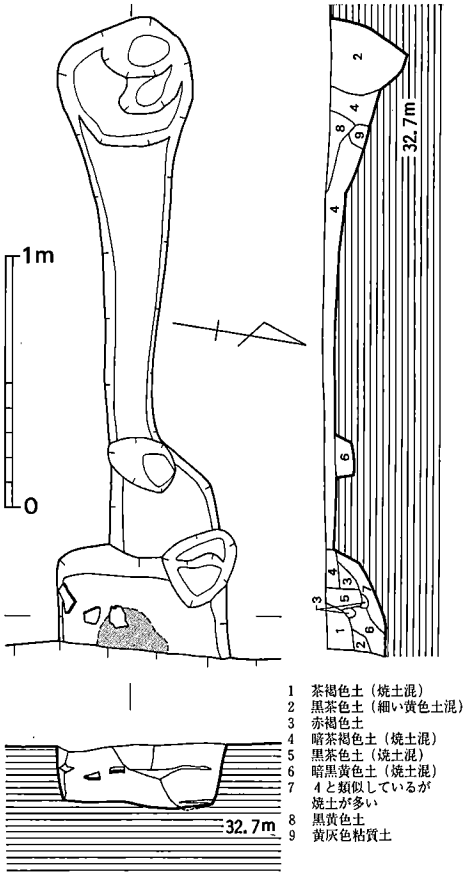
須恵器（3）　蓋で復原口径15.6cmを測る。暗灰色を呈し焼成は硬質。

土師器（4･5）　共に坏身で、4は器肉が薄く外体底部はケズリ調整を行い、胎土に砂粒が少ないことから全体に磨滅が著しい。5は復原不可能。

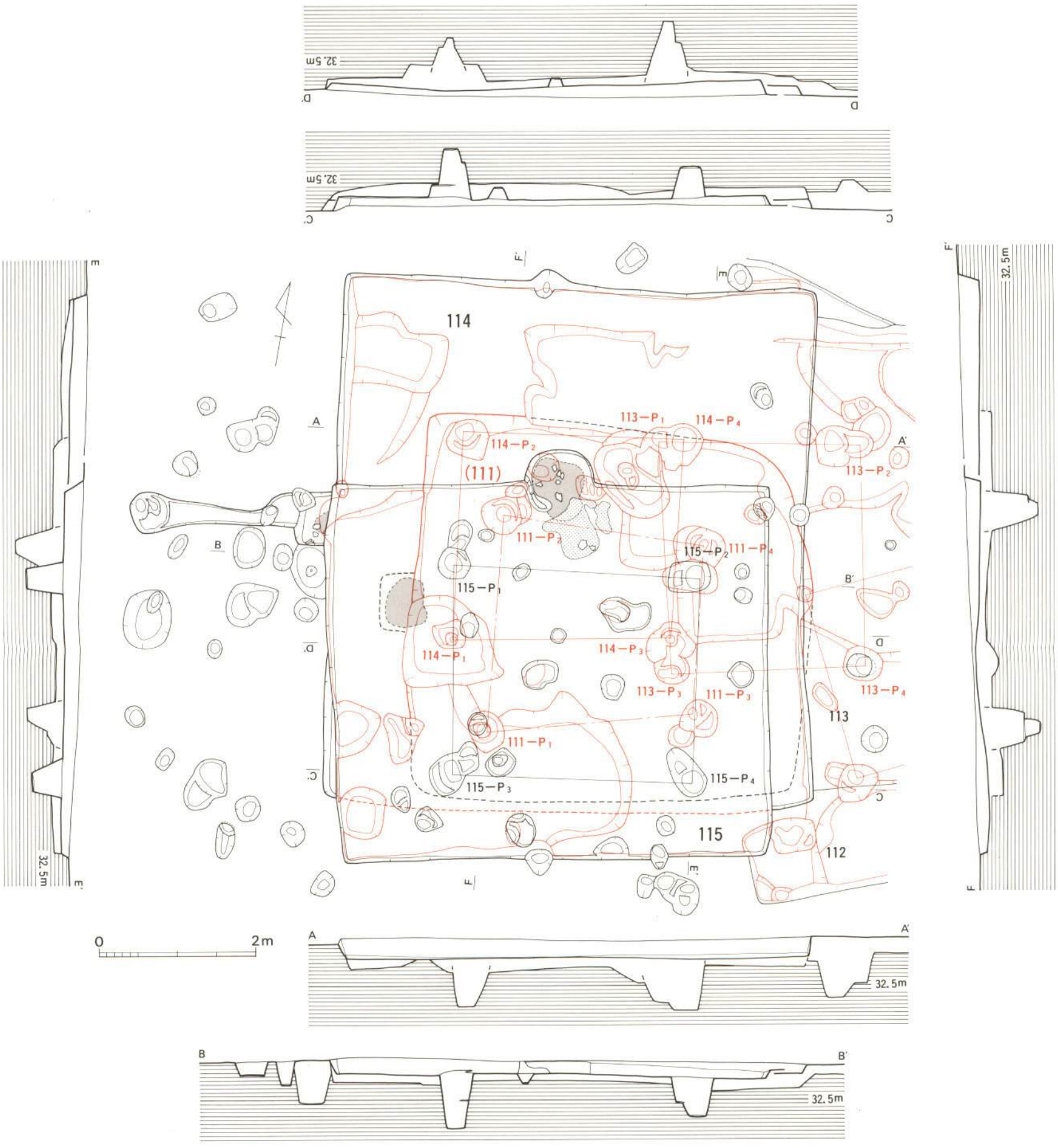
115号住居跡（図版68～72、第161・162図）

111号～115号の重複関係にある住居跡の中で最も新しい。検出位置は丁度114号住居に重なるように、南側に発見された。規模は東西5.6m×東西4.8mで東西方向に長い長方形のプランを呈している。北壁中央部にカマドを付設する。柱間寸法はP1－P2間3.16m、P1－P3間2.7mを測る。柱掘り形は径40cm前後、深さ60cmを測り、柱抜き取り穴も確認した。床面は約10cm程で検出され、平坦で堅く踏み固められていた。床面積25.2m²。方位はN-12°-W。土製品、焼塩土器片のほかに黒曜石石鏃も出土している。

カマド（第162図）　北壁中央部に検出した突出型のカマドで、左張り出し袖のみ残っている。

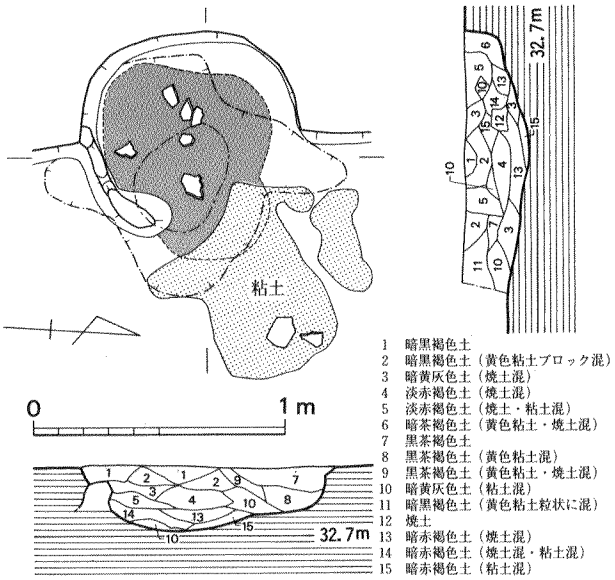


第160図　中道114号住居跡カマド実測図（1/30）



第161図　中道111・114・115号住居跡実測図（1/60）

突出部は丸く作り幅約80cm、奥行き40cmであるが、焚口付近から奥壁まで約70cmを測る。左袖は全体に暗茶褐色を呈していたが黄色粘土の混在が多い。壁･床共に赤褐色で堅く焼けしまっており、火床は若干窪められて、その上面に土師器甕の破片が出土した。焚口前面には黄灰色の粘土が散在していた。



第162図　中道115号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版96・101、第163・234図）

須恵器（6～9）　6は蓋で復原口径18.0cmを測る。淡灰色を呈し焼成は硬質。7･8は高台付坏身で、8は復原口径17.0cm、器高5.5cmである。高台は低く外反する。胎土に砂粒をやや含み焼成は硬質。9は鉢の器形になるか、淡灰色で復原口径23.8cmである。カマド内出土。

土師器（10～13）　10は坏身、11は皿であろう。共に外底部はケズリ調整で、胎土に砂粒が少なく淡褐色を呈す。12･13は甕片である。13は15.4cmに復原され口縁部の器肉が厚い。外体部はナデ、内体部はケズリ調整である。

不明土製品（第234図6･7）　粘土を丸めたもので、共にイネ科等の植物繊維が胎土中に見られる。また大粒の砂粒も含む。焼成はややあまく、橙黄色を呈している。6は長さ3.74cm、幅3.0cm、厚さ1.55cm、重さ13.2g。7は長さ4.53cm、幅3.9cm、厚さ1.46cm、重さ20.9gを測る。

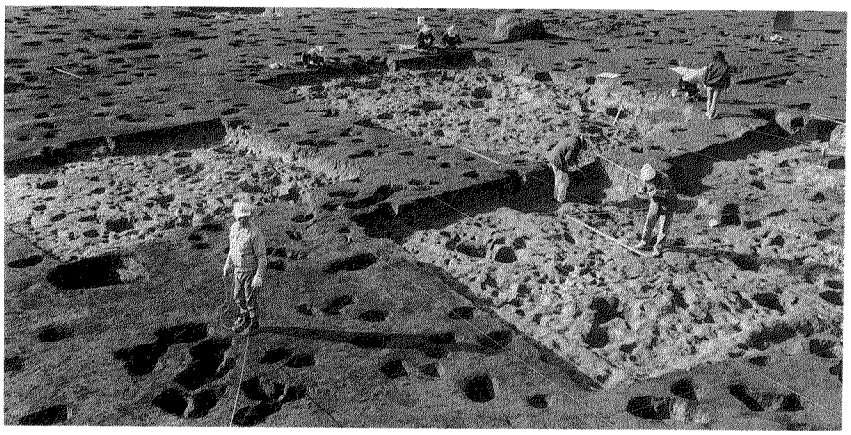
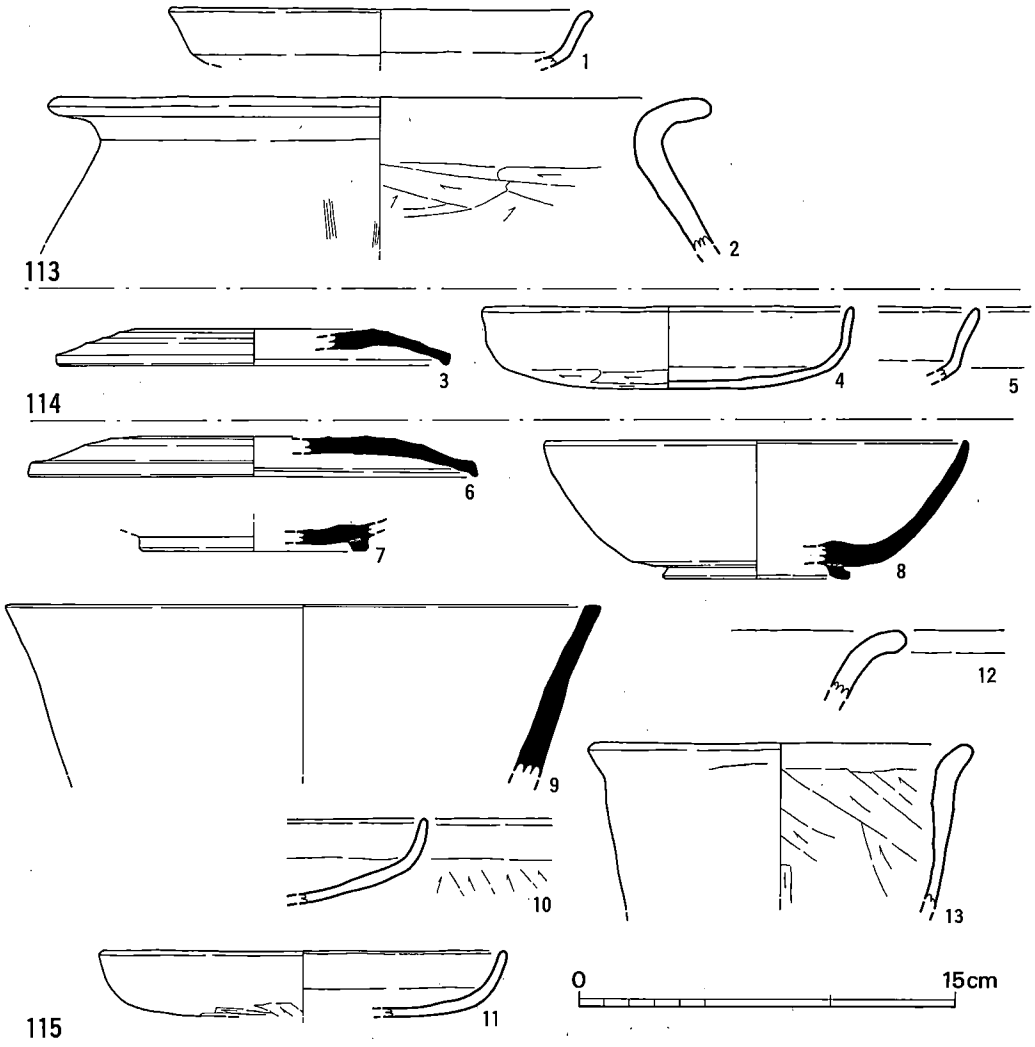


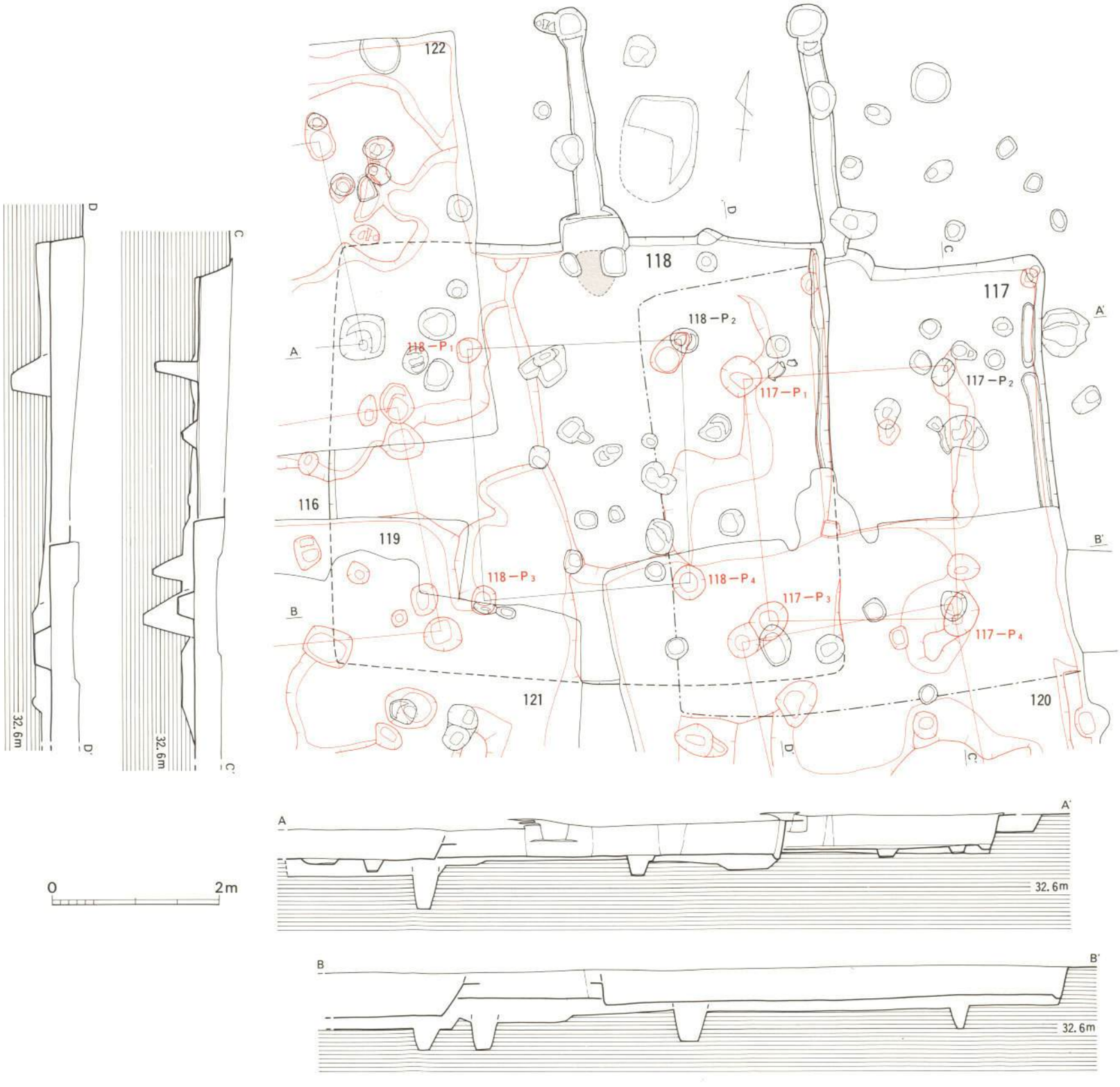
Photo. 10　実測をしています



第163図　中道113～115号住居跡出土土器実測図（1/3）

116号住居跡（図版68～70・73、第173図）

切り合い関係にある住居跡群のＢ群（116号～122号）にあり、その中で最も古いと考えられる。僅かに西壁80cmを検出したのみであり、他の壁は他の住居によって削除されていた。それでも下層床面から推定して東西5.9ｍ×南北5.4ｍ程の住居が存在したことが確認された。主柱穴は四本認められ、柱間Ｐ1－Ｐ2間2.6ｍ、Ｐ1－Ｐ3間2.6ｍのほぼ方形の柱間間隔である。掘り形は円形で、深さ約40～50cmを測る。床面積30.3㎡。方位はN-18°-W。



第164図　中道117・118号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第166図）

須恵器（1･2）1は器肉の薄い蓋で復原口径11.4cm。胎土に砂粒は少ない。2は大きい鉢の底部か。混入の可能性がある。

土師器（3）甕口縁部の僅かな破片である。

117号住居跡（図版69・70・73・74、第164・165図）

118号と120号と切り合い関係にあり、双方より先行する。検出部分は住居の東北隅1／4カットである。住居の規模は前者検出部分と下層南壁から推定して東西4.7m×南北約5.1mであろう。検出面から床面まで約40cmあり、下層は約7cmの貼り床である。主柱穴はP1～P4を検出しP1－P2間2.46m、P1－P3間2.96mの略長方形の柱間間隔である。柱掘り形は円形で深いもので60cmを測る。東壁沿いに幅13cm、深さ7cmほどの溝を検出した。また北壁には突出型のカマドが付設され、長い煙道が北に延びていた。床面積24.1㎡。方位はN-15°-W。

カマド（第165図）北壁中央部に検出した突出型のカマドで、突出部の左側は118号住居から切られている。奥壁は約30cmで、火床は赤褐色に焼けしまっていた。煙道は突出部中央から幅25cmで北に3.1m延びており、先端部は50cmの煙出し口の穴が穿たれていた。

出土遺物（第166図）

須恵器（4）復原不可能な蓋片である。

土師器（5～8）5は坏身で復原口径14.6cm、器高3.2cmを測る。器肉が薄く体部中位から口縁は直立する。外底はケズリ調整。6は復原不可能な椀片で、口縁部はやや外反する。7･8は甕の口縁部片で、胎土に砂粒を含み軟質である。8はカマド出土。

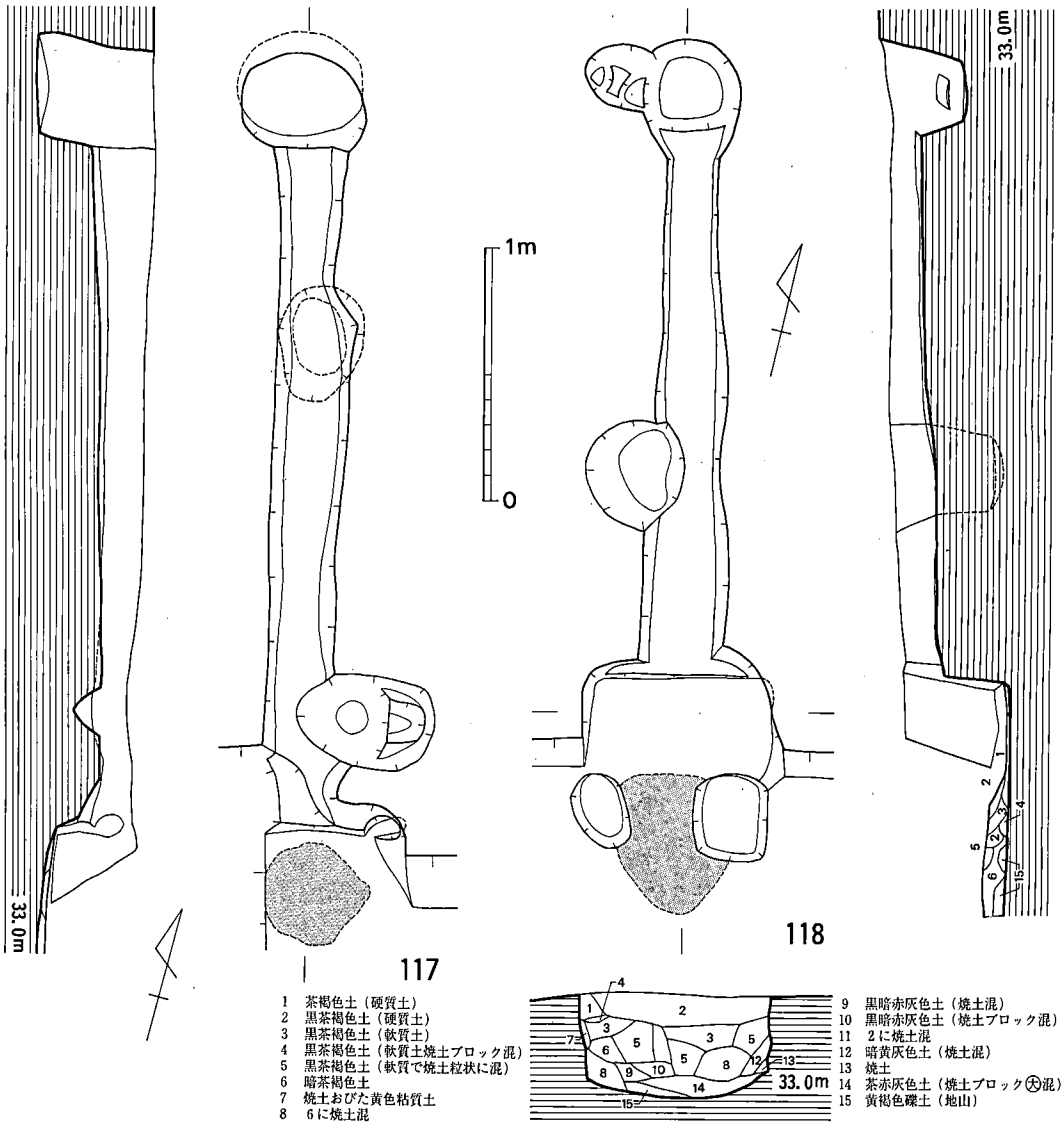
118号住居跡（図版68～70・73・74、第164・165図）

119号から122号の住居に各コーナーを切られている。それでも南壁一部、下層から西壁一部が検出されたことから規模は東西6.0m×南北5.4mを測ることができた。北壁には117号カマドに類する煙道の長いカマドが付設されている。主柱穴はP1－P2間2.56m、P1－P3間3.0mを測り、南北にやや長い柱間である。柱掘り形は径40cm前後で床面からの深さ約40cmを測る。本住居跡の床面は深く60cmで、堅く踏み固められていた。床面積31.2㎡。方位はN-13.5°-W。埋土中から石鏃が出土している。

カマド（第165図）北壁中央部に検出した突出型のカマドで117号に類似する。突出部前面に浅い穴が左右に穿たれてあり、その穴に挟まれた間は赤褐色の火床で、両袖が付設されていたことが判る。突出の奥壁は約30cm、幅80cmである。奥壁から北へ幅30cmの煙道が長く延びている。先端部は煙道幅も狭くなり、径約40cmの煙出しの穴が穿たれていた。

出土遺物（第166図）

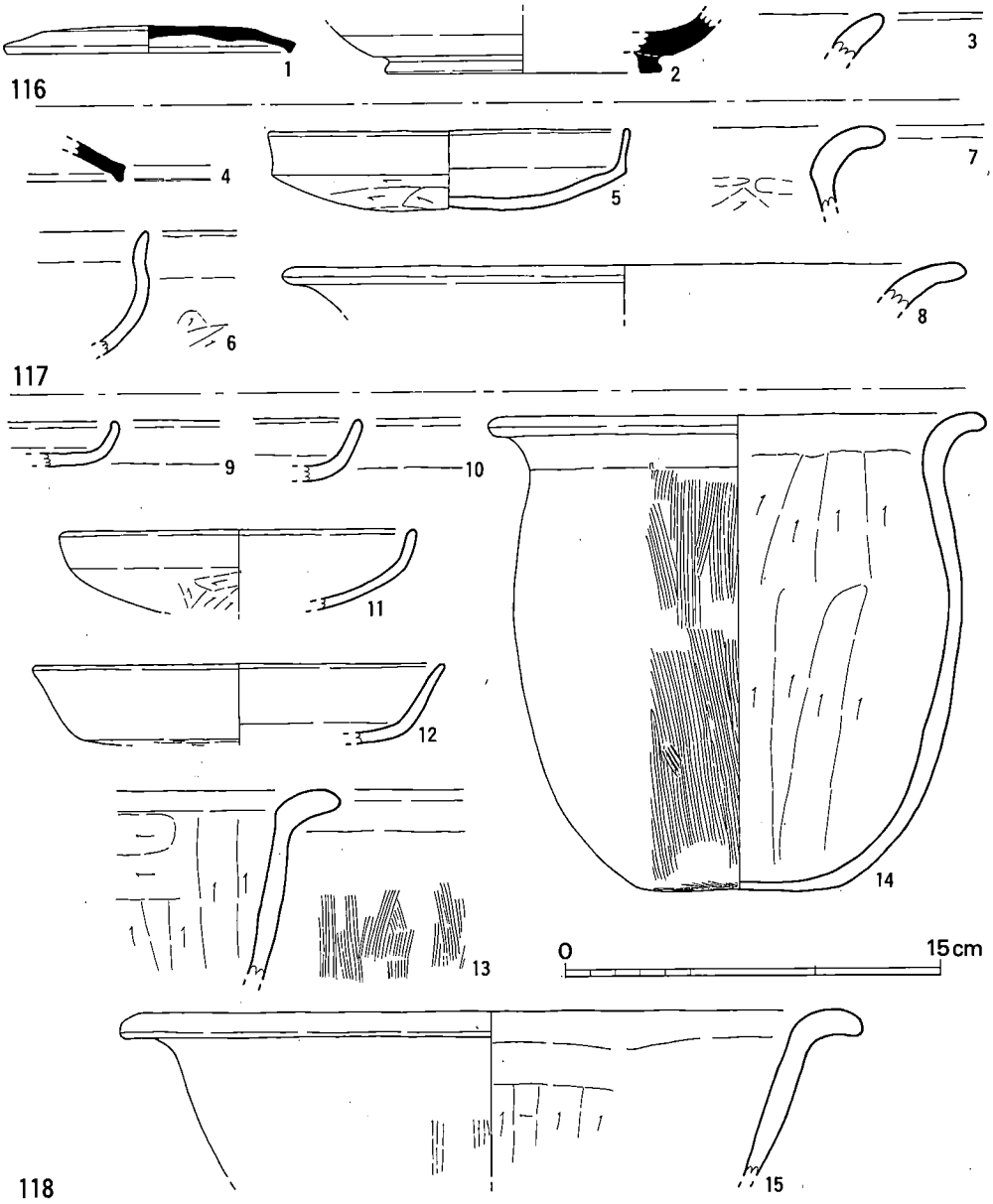
土師器（9～15）　9･10は復原不可能な皿の破片で、共に胎土は精良。11･12は坏身で、11は器肉が薄く底部を丸く作り、ケズリ調整である。12は復原口径16.6cmで焼成は硬質。13･14は甕である。14は復原口径20.0cm、器高19.1cmに復原でき外体部は粗い刷毛目、内体部は底部からのケズリ調整である。二次火熱を受けており、胎土中に大粒の砂粒を含む。15は鍋の口縁部であろう。口縁部を強く屈曲し、口唇部は肥厚する。復原口径30.0cmで、外体部は刷毛目、内面はケズリ調整である。



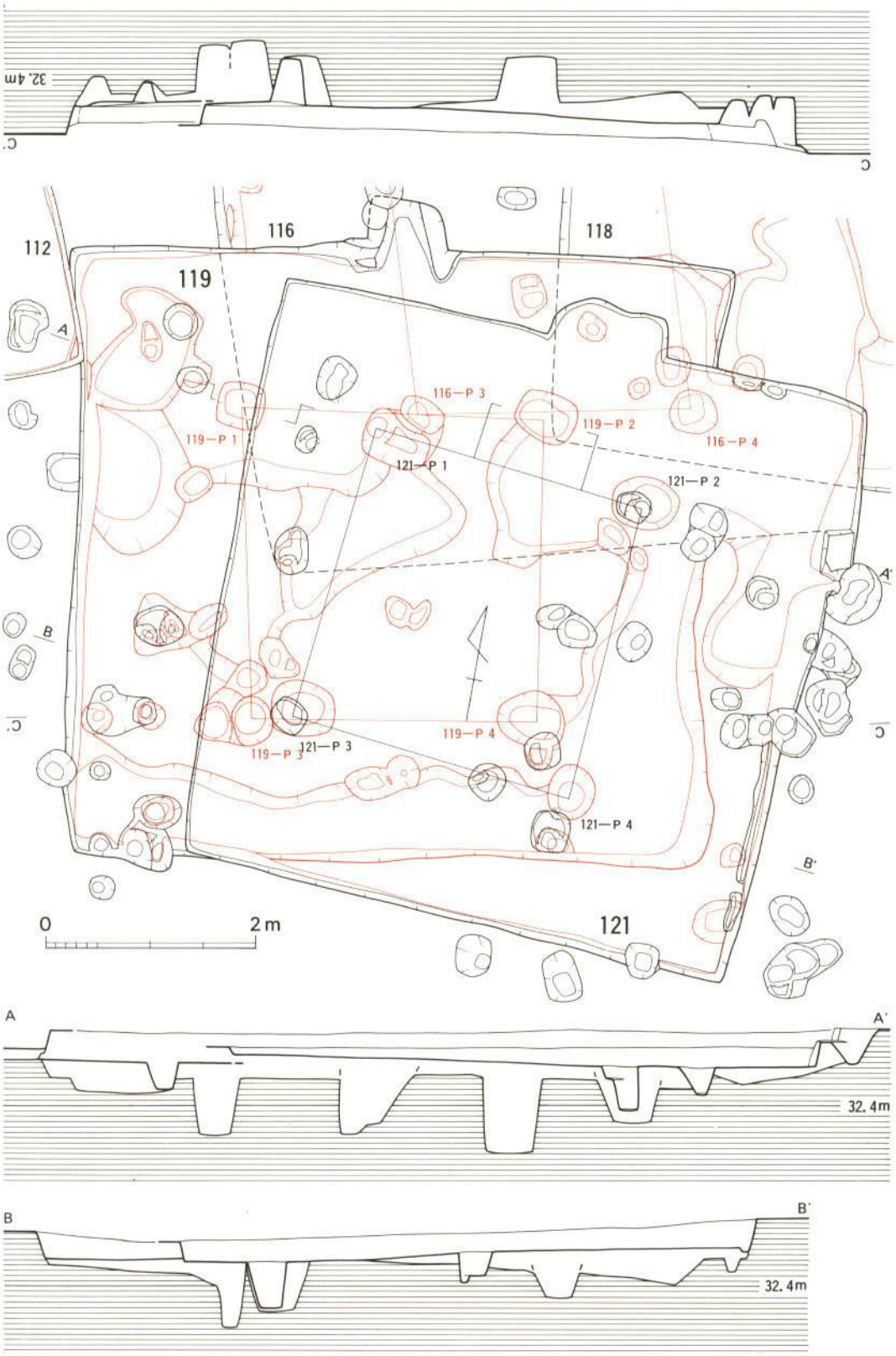
第165図　中道117・118号住居跡カマド実測図（1/30）

119号住居跡（図版68～70、第167図）

切り合い関係は121号から切られ、116・118号を切っている。住居床面積の2／3以上が121号住居跡に切られていたが、下層から南壁、東壁が検出された。規模は東西約6.0m×南北5.9mのほぼ方形プランを呈している。主柱穴はＰ1－Ｐ2間2.88m、Ｐ1－Ｐ3間2.94mの略方形主柱で



第166図　中道116～118号住居跡出土土器実測図（1/3）



第167図　中道119・121号住居跡実測図（1/60）

ある。掘り形は25～30cm、深さ40～50cmを測る。床面は平坦で、下層は約10cmの貼り床で、主に南壁寄りを深く下げていた。北壁中央部に突出型のカマドを配す。カマドの規模は幅70cm、奥行き約40cmを測るが、突出部の奥行き両側から粘土貼りが認められ、それがカマド前面に若干張り出し両袖の形となっている。床面積は33㎡。方位はN-10°-W。下層から焼塩土器片が出土している。

出土遺物（図版100、第170・237図）

須恵器（1）　復原不可能であるが体部の形状から壺等の破片であろう。外体部はカキ目、内面はナデである。

土師器（2～4）　2は器肉が薄く、底はを丸味を持つ坏身である。胎土に砂粒が少なく精良であるが、全体に磨滅が著しい。復原口径15.0cmを測る。3･4は甕片である。3は復原口径13.2cmで口唇部が肥厚する。外体部は磨滅、内面はケズリ調整。4は復原不可能。

120号住居跡（図版69・70・74・75、第168・169図）

切り合い関係住居の中で東端に検出した。117号、118号住居を切っている。住居の規模は東西5.4m×南北4.6mを測り、東西にやや長い住居である。柱間はP1－P2間が2.6m、P1－P3間2.48mで東西に長い柱間隔である。掘り形は径40～50cmの円形で、深さは床面から約30～60cmを測る。床面は中央部が堅く平坦で、床面下層は南壁寄りに若干の高まりを有している他は10～20cmの貼り床である。北壁中央部に突出型のカマドを配す。また壁沿いに部分的に小溝を配する。床面積24.1㎡。方位はN-17°-W。下層に鉄滓があった。

カマド（第169図）　北壁中央部に検出した突出型のカマドである。突出の幅70cm、奥行き約60cmで壁は堅く焼け、奥壁から幅25cm、長さ25cmの煙出しが付されている。火床は広く床の中央部は若干窪められ灰の残存を確認した。突出部の両端には黄色粘土の袖が僅かに残っていた。

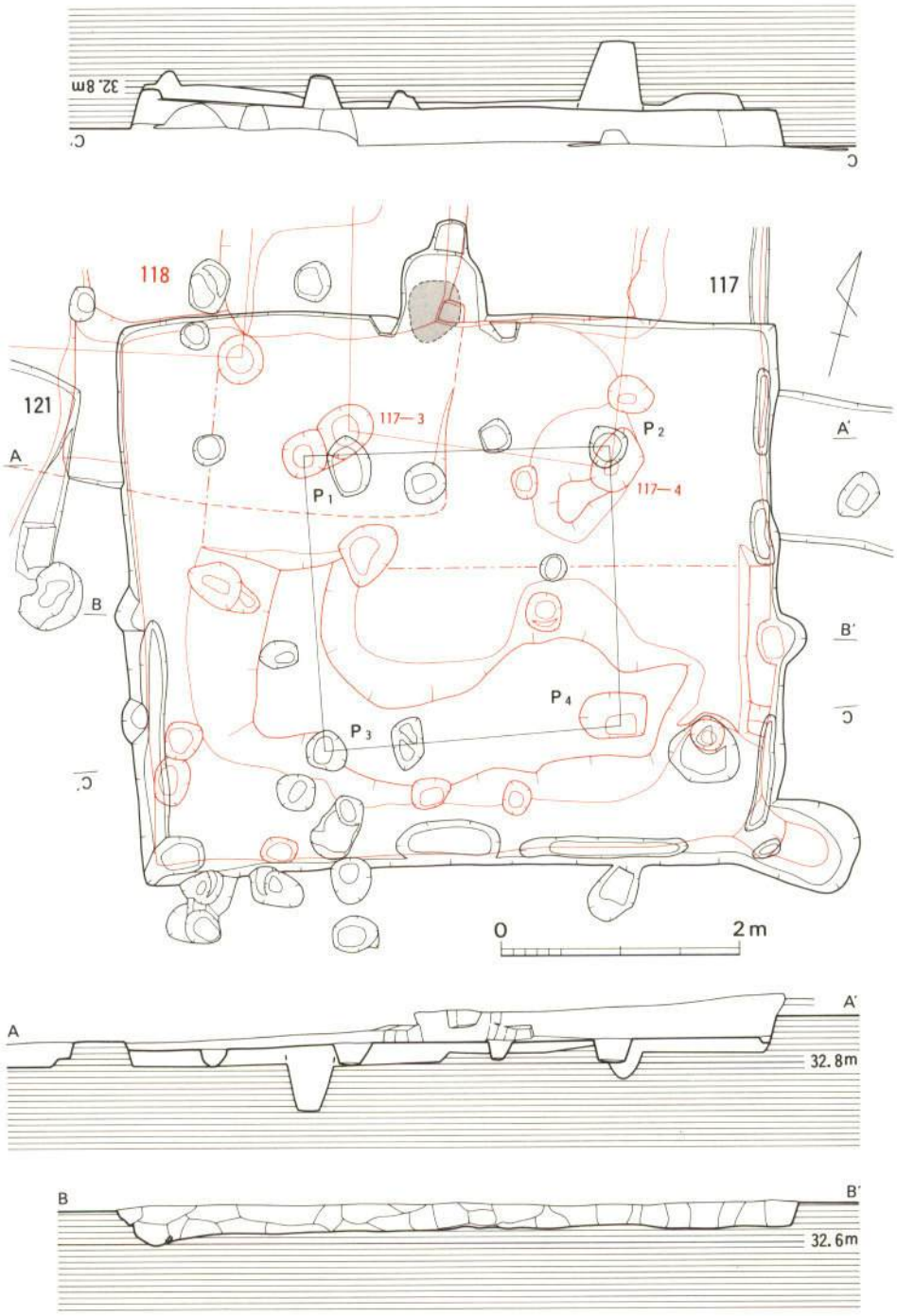
出土遺物（図版96、第170図）

須恵器（5～7）　5･6は須恵器の蓋である。特に5は平坦な蓋で小さな撮みが付く。天井部に「渚」銘の墨書がある。墨書は達筆で筆の運びが良く判る。口径15.5cm、器高1.6cmを測り、胎土は精良である。6は復原口径14.2cmを測り、胎土中に細砂粒を若干含む。7は復原口径12.0cm、器高4.5cmに復原できる高台付坏身である。内面に墨痕らしきものが認められる。

土師器（8･9）　8は復原不可能な坏身で、外体部中位から底部はケズリ調整。胎土に砂粒が少なく精良である。9は口縁端部を外反させる復原口径13.0cmの甕である。外体部は丁寧なケズリ及びナデ調整で、胎土に小粒の砂粒を含む。

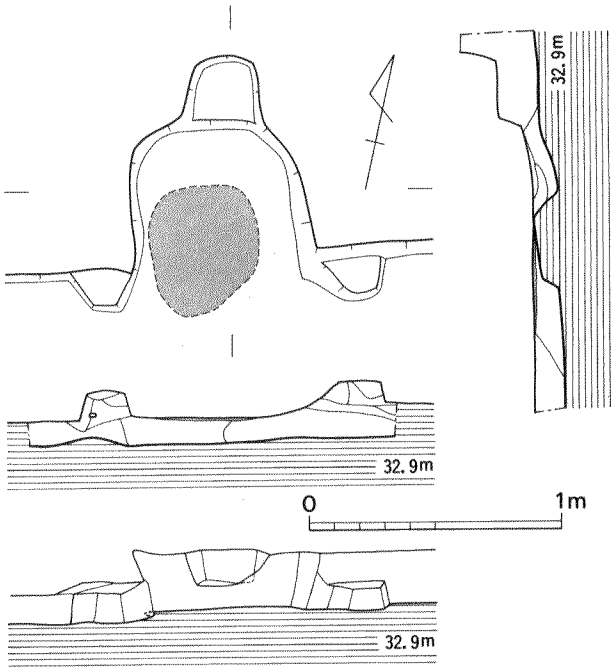
121号住居跡（図版68～70・73、第167図）

118号、119号住居を切っている。カマド以外は比較的残りの良い住居である。住居の規模は東



第168図　中道120号住居跡実測図（1/60）

西5.5m×南北5.6mを測る方形プランの住居である。柱間はP1－P2間が2.62m、P1－P3間2.84mで柱間はやや南北に長い間隔をとる。P2、P3の他は下層で発見された。掘り形は径40～60cmの円形で、深さは床面から約30～60cmを測る。床面は主柱穴に囲まれた中央部が堅く踏み固められ平坦で、床面下層は主柱穴周辺から壁にかけて10～30cmの貼り床である。北壁中央部に突出型のカマドを配す。幅1.1m、奥行き約40cmで壁は堅く焼け、カマド前面に焼土と黄灰色粘土が1.0m四方に広がっていた。また壁沿いに部分的に小溝を巡らす。床面積30.0m²。方位はN-3°-E。埋土中に台石と製塩土器、押型文土器の破片があった。



第169図　中道120号住居跡カマド実測図（1/30）

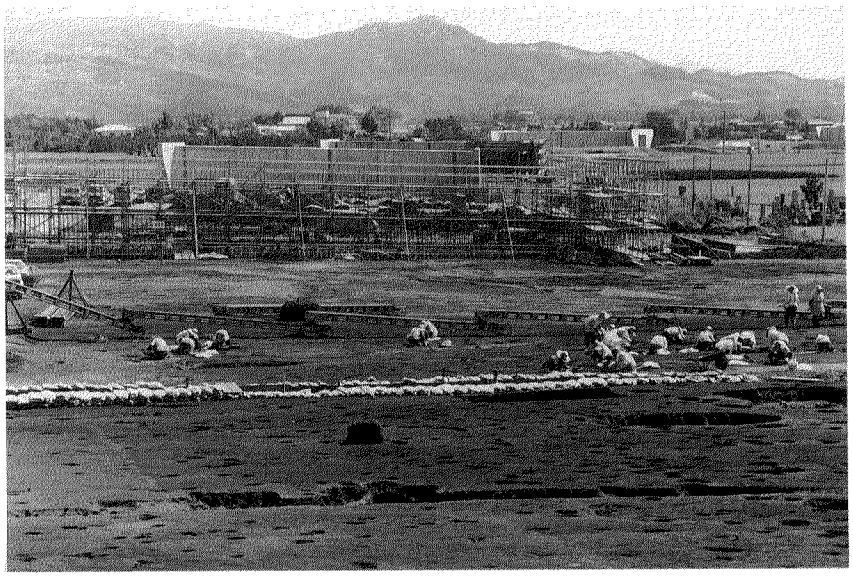
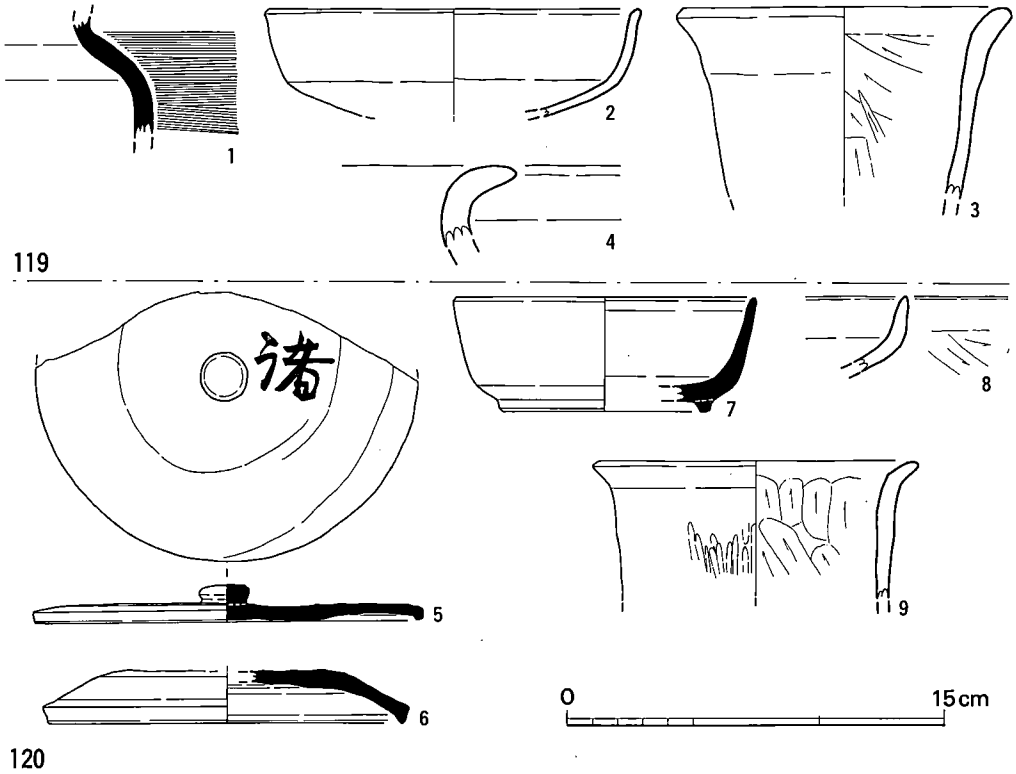


Photo. 11　工事に追われて



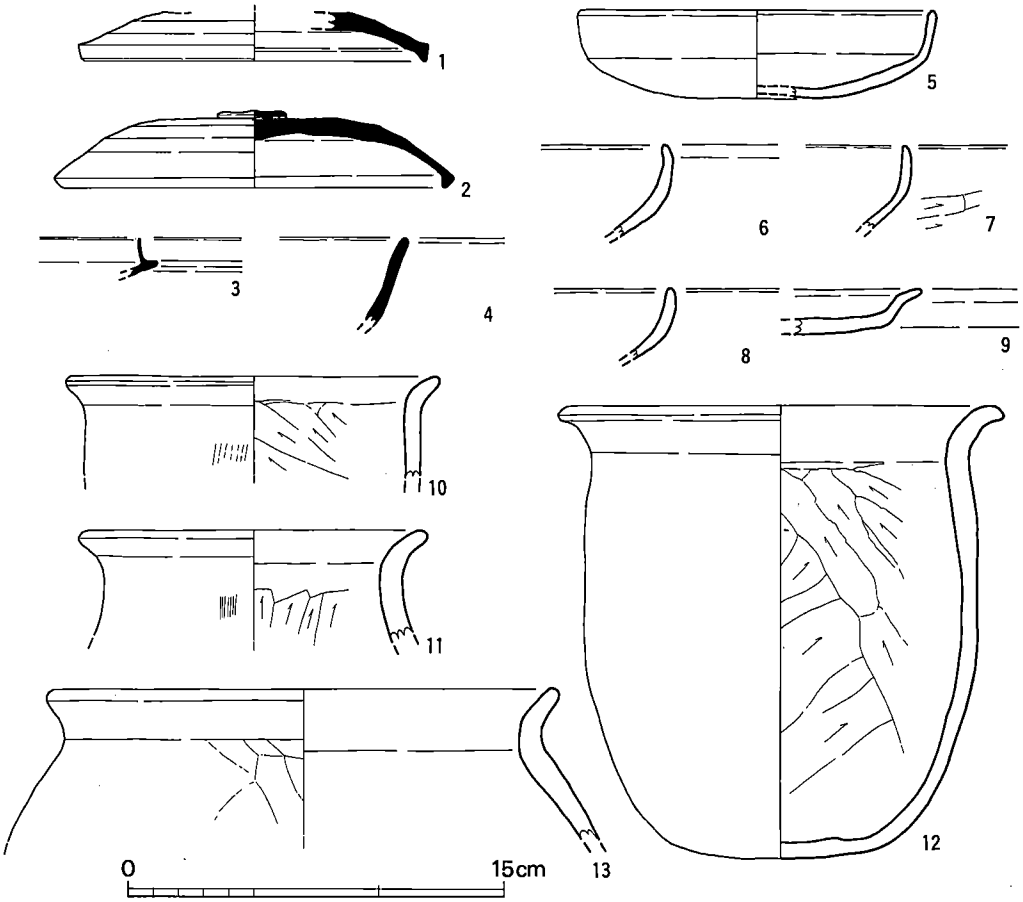
第170図　中道119・120号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版96・100、第171・235・237図）

須恵器（1～4）　1･2は須恵器の蓋である。1は復原口径13.8cmの通常のもので、胎土は砂粒が少ない。2は口径16.0cmを測り、端部は断面三角形にして器肉が薄く、天井部に平坦な撮みが付く。焼成は軟質。3は受け部を有する坏身片である。4は坏身片と思われ全体に灰白色で胎土に砂粒が多い。3･4共に復原は不可能。

土師器（5～13）　5～8は坏身で、そのうち5は復原口径14.3cm、器高3.5cmを測り、外底はケズリ調整、内体部はナデ･横ナデ調整である。他に6は全体に黒色であるが、6～8共に一般的な坏身である。9は口唇部を強く外反させた皿で、二次火熱を受けている。10～12は小型の甕である。特に12は残存が良く口径17.8cm、器高17,9cmに復原され口縁端部を強く外反するものである。外体部はナデ、内面はケズリかき上げ調整である。破片がカマドから出土していることと体部･底部が二次的火熱を受けていることから支脚の可能性が考えられる。10・11は12よりやや口径が小さい。13は復原口径14.5cmの甕である。外体部に工具による調整が観察される。

石製品（第235図20）　住居床面から出土した玄武岩質の台石である。片面のみ原面が残っており擦り磨かれている。残存長6.0cm、厚さ9.0cmである。



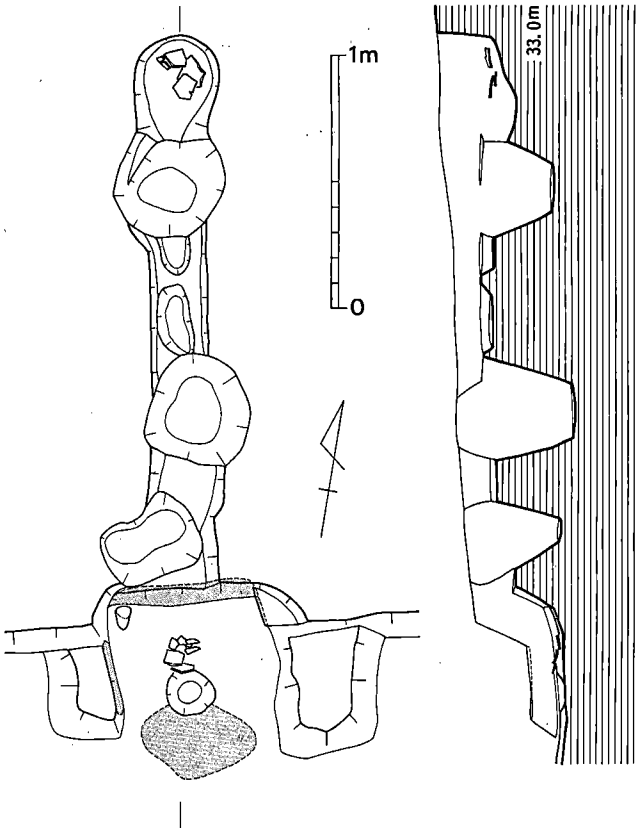
第171図　中道121号住居跡出土土器実測図（1/3）

122号住居跡（図版68～70・73・75、第172・173図）

116号、118号住居を切っている。規模は東西5.9m×南北4.8mの東西に僅かに長い長方形のプランを呈す。北壁中央部に半突出型のカマドを付設し、長い煙道が配されている。遺構検出面から床面までは約30cmあり、四本の主柱穴を検出した。各柱間寸法はP1－P2間2.58m、P1－P3間2.26m、P2－P4間2.5m、P3－P4間2.82mをそれぞれ計測する。掘り形は円形で30～60cmあり、深さ50～60cmと深い。床面は平坦で、カマド全面域の東西方向は貼り床が薄く、他は10～20cmの貼り床であった。壁周に部分的に小溝を巡らす。床面積26.6m²。方位はN-9°-W。埋土中に砥石、台石、鉄滓と縄文土器片があった。

カマド（第172図）　北壁中央部に検出した半突出型のカマドである。突出部の幅約60cm、奥行き約15cmで壁は堅く焼け、奥壁から幅30cm、長さ2.2mの煙出しが配されている。煙道の先端は

径30cmの煙出しで、10cmほど掘り窪めており土師器甕の破片が出土した。両袖は黄灰色粘土を主体に作り、右袖残存長45cm、左袖残存長35cmである。火床は広く中央部に径20cmの穴が穿たれており、カマド支脚の位置と考えられる。その北側に土師器甕の破片が出土した。



第172図　中道122号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物

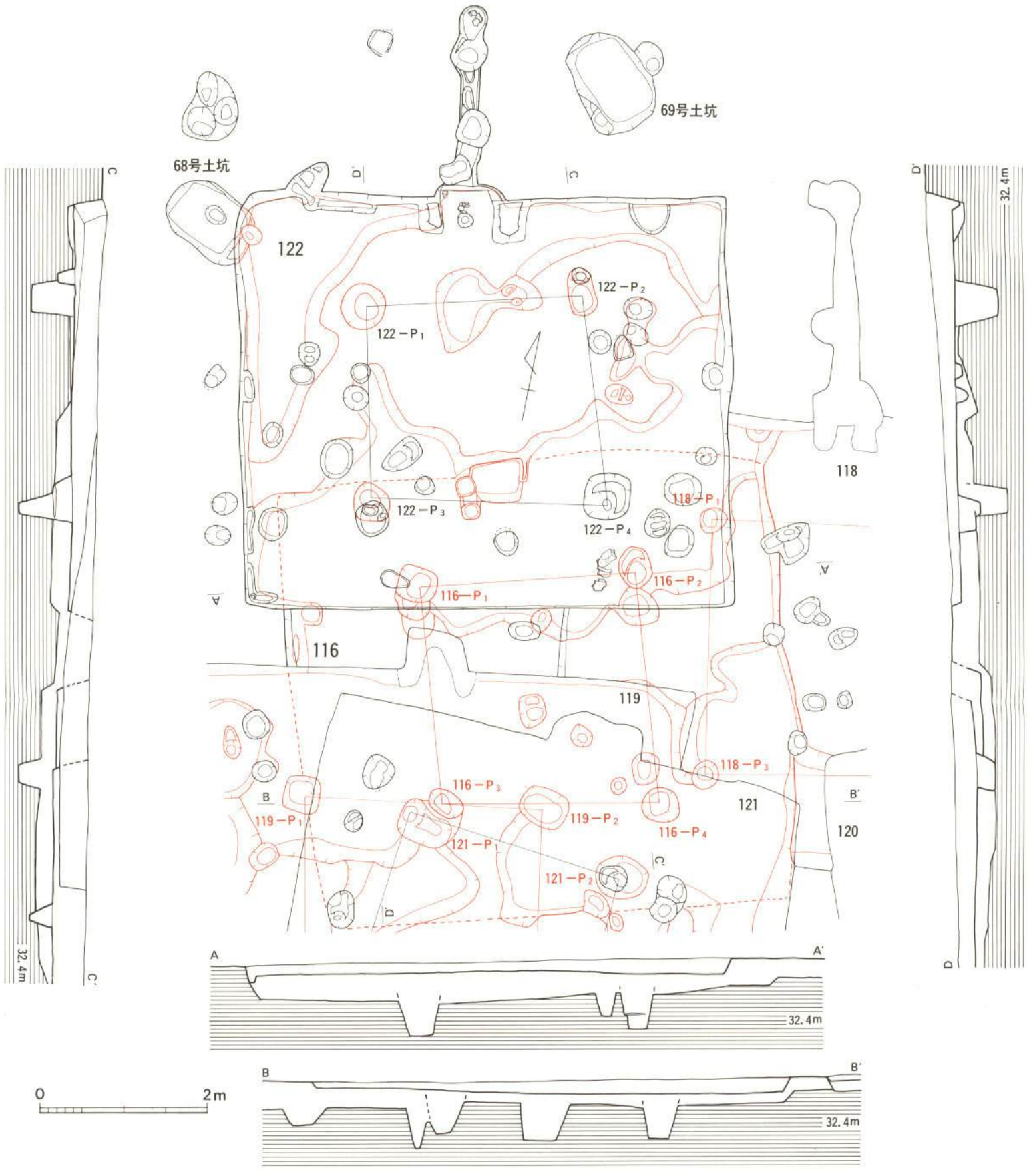
（図版102、第174・234・235図）

土師器（1～7）1は大皿で復原口径19.2cmを測り、胎土は精良。二次火熱を受けていて煤が全体に付着している。出土は煙出しである。2は坏身の破片か。3は口縁部が外反し、胎土精良の鉢である。外体部ケズリ調整、内部はナデによる。4～7は甕の口縁部片と底部片である。特徴としては口縁部の器肉が若干肥厚し、強く外反する。外体部は刷毛目調整、内部は下から上に削りカキ上げている。胎土に大粒の砂粒を含む。5は外体部に煤が付着している。

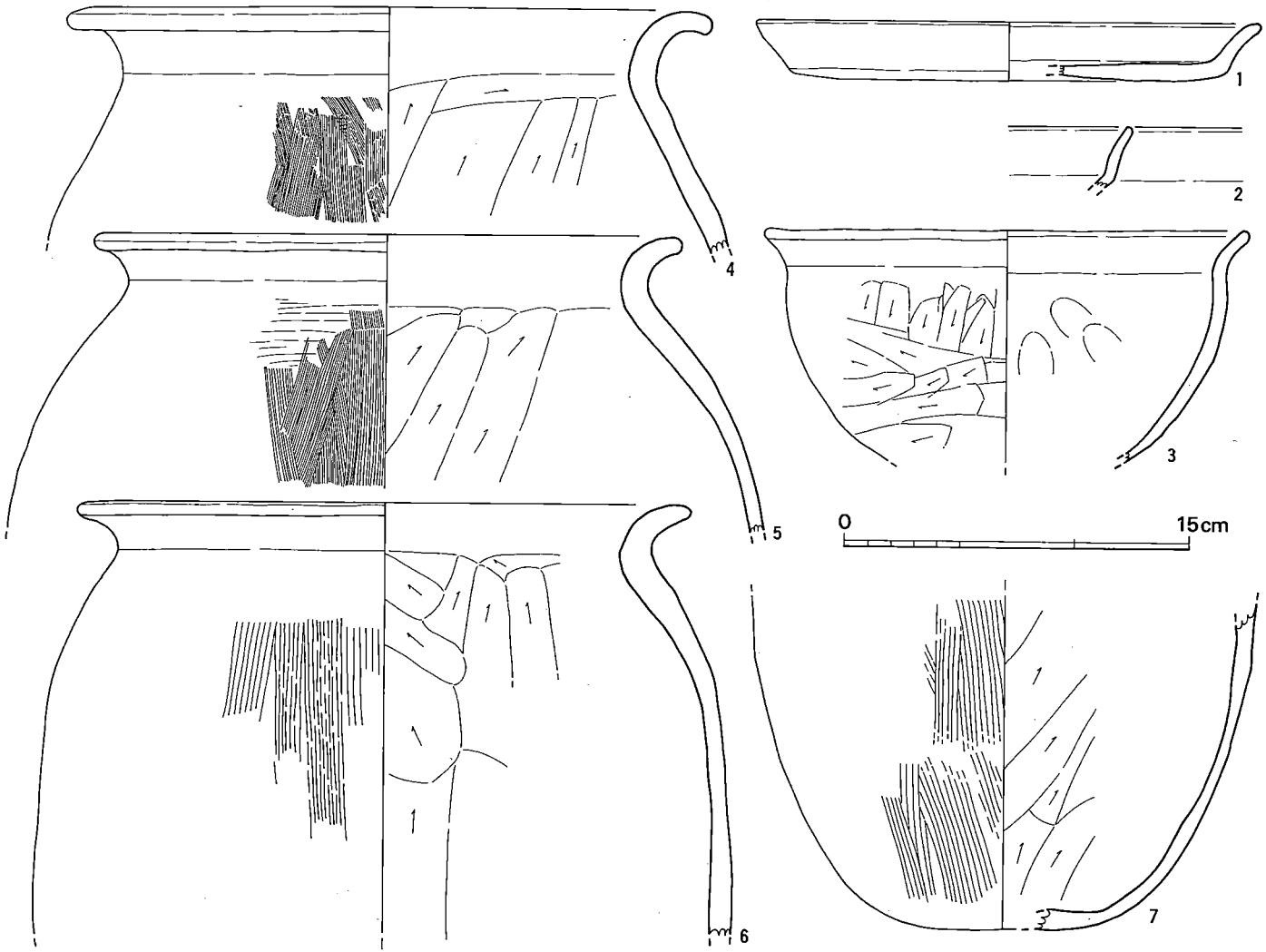
石製品（第234図10、第235図23）　10は凝灰岩質粘板岩の砥石で欠損部分が多く、四面を使用している。残存長4.73cm、幅2.97cm、厚さ1.84cmを測る。23は自然石を利用した台石で、材質は玄武岩であろう。上面は叩かれた痕（剝離している）が認められる。長さ34.4cm、最大幅16.8cm、厚さ6.5cmを測る。

123号住居跡（図版68・69・71・76、第175・176図）

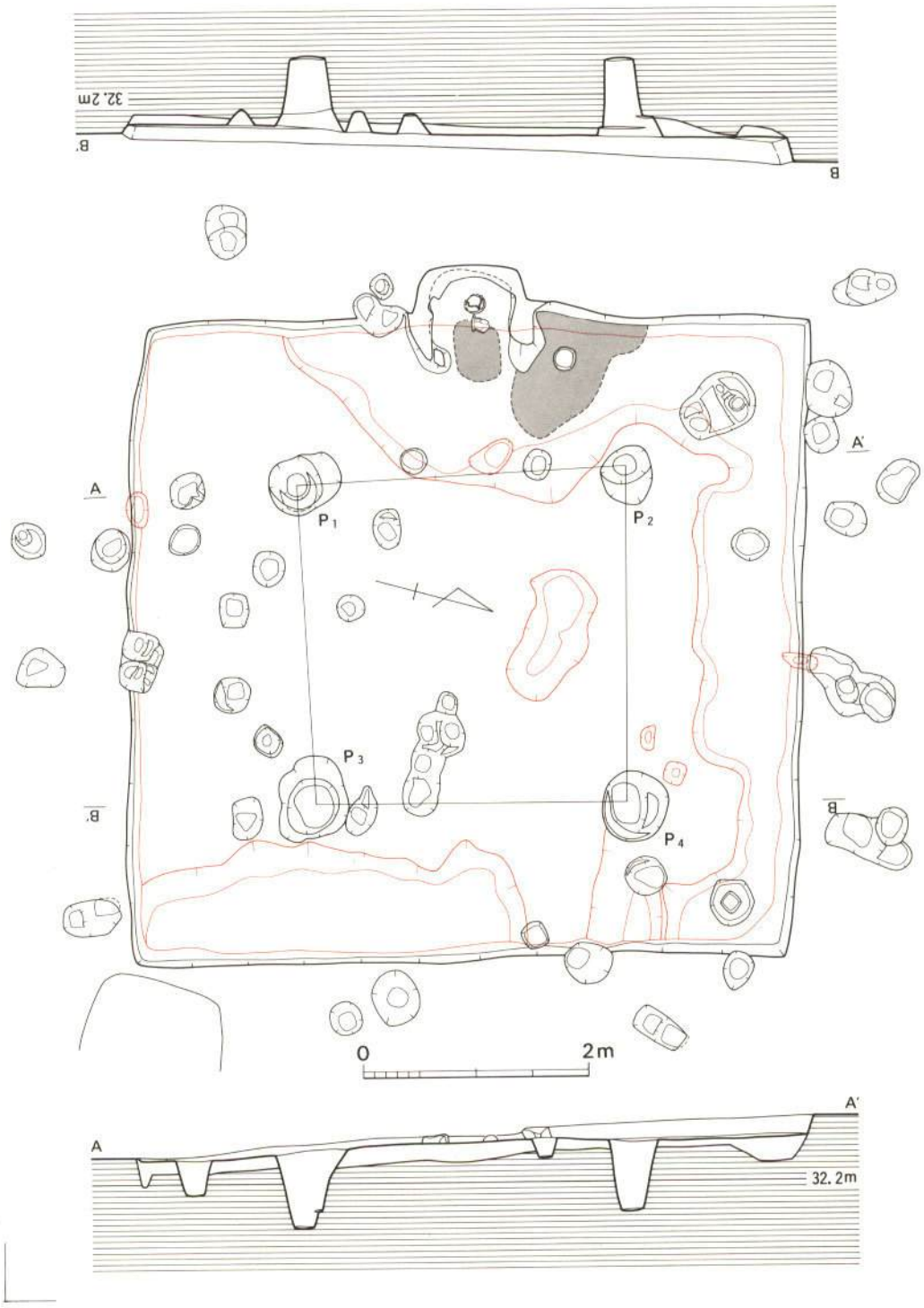
多く切り合っている住居の南側に検出した比較的大きな住居である。規模は東西5.8m、南北6.0mの略方形住居である。カマドは西壁中央に付設され比較的残りがよいが、右袖北側に広い範囲で焼土が散在してあった。主柱穴は四本でP1－P2間2.9m、P1－P3間2.82m、P2－P4間2.96m、P3－P4間2.76mをそれぞれ計測する。掘り形は円形で径50～70cm、深さ60～70



第173図　中道116・122号住居跡実測図（1/60）



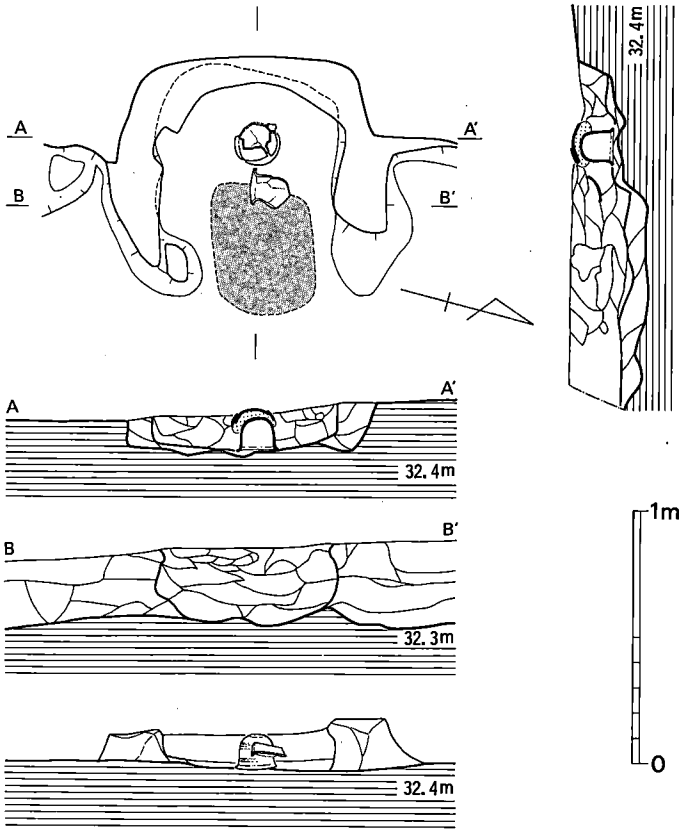
第174図　中道122号住居跡出土土器実測図（1/3）



第175図　中道123号住居跡実測図（1/60）

cmと深い。床は平坦で中央は堅く踏み固められており、西・北・東壁沿いを深めとし、全体に約10cmの貼り床であった。床面積32㎡。方位はN-104°-W。埋土中からふいご羽口片が出土している。

カマド（第176図） 西壁中央部に検出した突出型のカマドである。今回の検出住居で西壁にカマドを付設しているのは114号と本住居跡の二軒である。両袖が幅約20～30cm、残存長約50cmであり、突出部の幅1.0m、奥行き40cmを略測する。奥壁から黄色粘土を貼っており、検出された焚口幅約50cm前後で、火床は赤褐色に焼け、右袖北側に多くの灰・焼土を掻き出している。カマド中央部には甕を伏せた支脚が検出された。支脚は上部がやや低かったためか、スサ入り粘土の上に甕の破片を貼って煮沸用の土器と高さを合わせている。

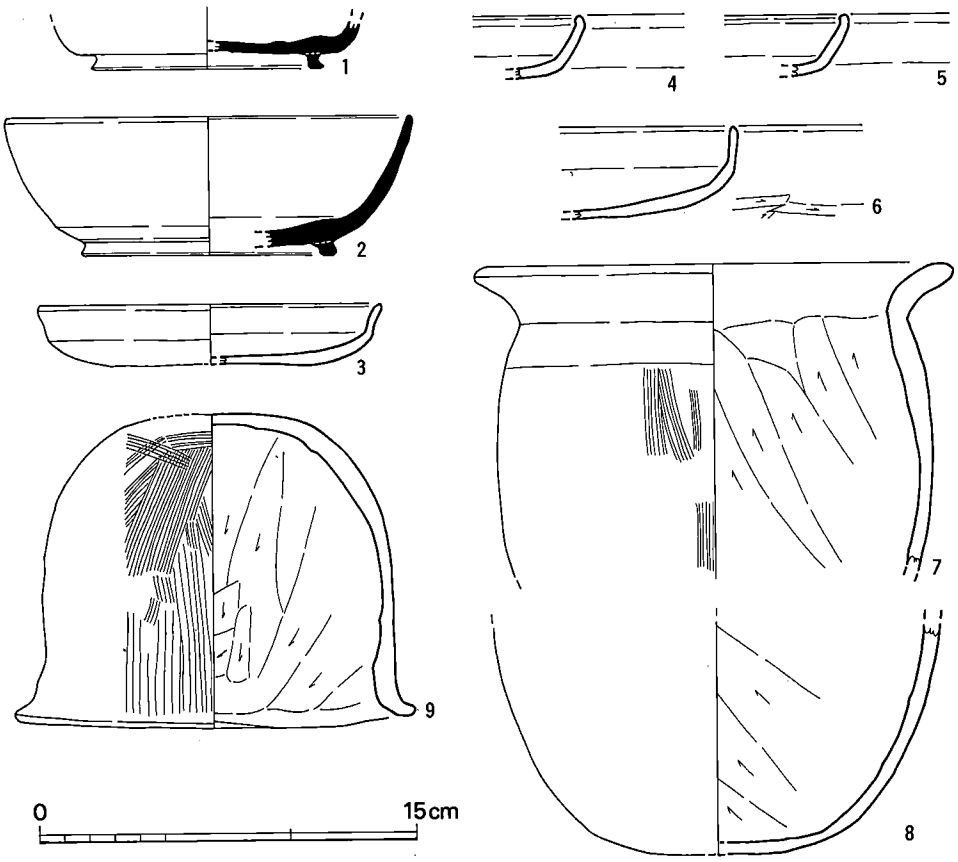


第176図 中道123号住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版96・97、第177図）

須恵器（1・2） 共に高台付の坏身で、1は底径9.2cmを測り焼成は堅緻。2は復原口径16.2cm、底径10.2cmを測る。胎土に大粒の砂粒を含む。

土師器（3～9） 3～6は坏身片である。3は口径からすると皿とすべきかもしれない。復原口径は13.6cm、器高2.4cmで、胎土は精良。4はカマド内出土。6は器肉の薄い坏身で外底は丁寧なケズリ調整。7・8は甕片で、7は大粒の砂粒を含み内外体部に煤が付着している。二次火熱を受けていてもろい。支脚の前面出土。8は支脚の上部にスサ入り粘土で装着していた甕片であり、7と同様火熱を受け赤変している。9はカマド支脚である。底径16.0cm、器高12.5cmで外体部は粗い刷毛目、内部は強いケズリ調整である。口縁部は厚く胴部各所に煤が付着する。胎土に砂粒を含み淡赤褐色で、焼成は硬質。



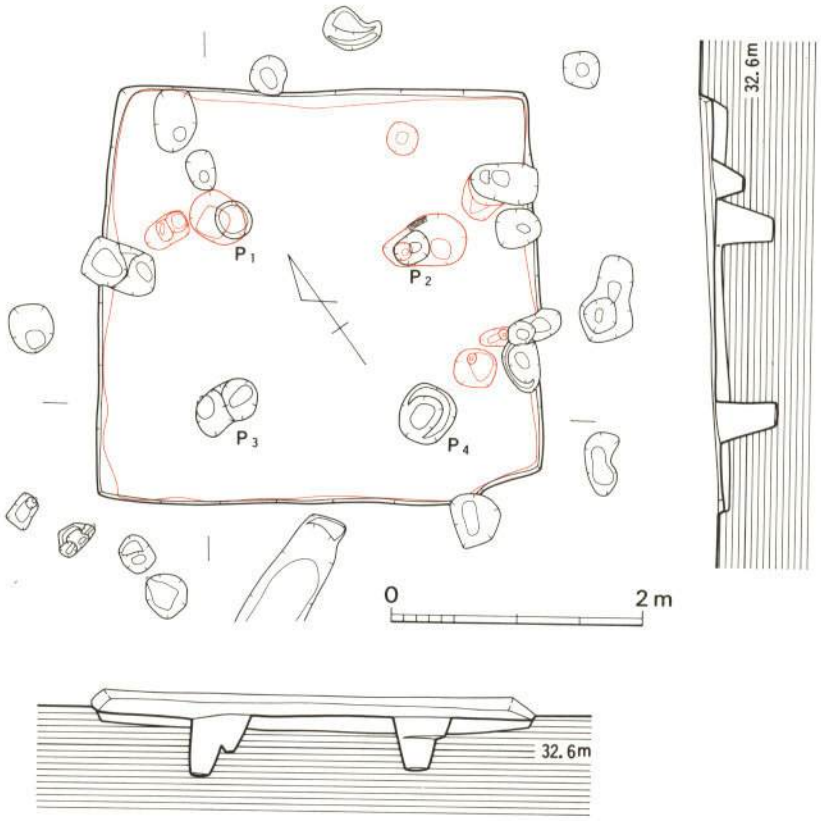
第177図　中道123号住居跡出土土器実測図（1/3）

124号住居跡（図版77、第178図）

調査区東半部域に検出し、切り合い住居の南側に位置する。規模は東西3.5m×南北3.26mのほぼ方形プランを呈する。検出面から床面の深さは10cmもなくほとんど削平された状態であった。それでも主柱穴は四本検出し、P1－P2間1.6m、P1－P3間1.5m、P2－P4間1.34m、P3－P4間1.7mをそれぞれ計測する。掘り形は円形で径30～40cm、最も深いもので50cmを測る。床は平坦であるが、下層との間約10～15cmの貼り床である。床面積は10.7㎡。方位はN-35.5°-E。出土遺物は少ない。

出土遺物（第181図）

須恵器（1）　復原不可能な蓋である。胎土に砂粒を含み焼成は硬質。



第178図　中道124号住居跡実測図（1/60）

125号住居跡（図版78、第179図）

調査区東半部域に検出し、126号から住居の東半分が切られている。また南壁はほとんど削平されて明らかでない。規模は検出長東西2.0m以上×南北約3.0mのほぼ方形プランの住居であろう。検出面から床面の深さは10cmほどで、主柱穴は検出されなかった。北壁中央部に突出型のカマドが付設され、その前面左側に焼土混じりの粘土塊を検出した。おそらくはカマドを作るためのものではなかったか。カマドの幅約60cm、奥行き40cmで奥壁から36cmの煙道が延びている。方位はN-23°-W。出土遺物は少ない。

出土遺物（第181図）

土師器（2·3）　共にカマド内から出土した。復原不可能な鉢（2）と甕（3）の口縁部片である。胎土には砂粒が多い。

126号住居跡（図版78・79、第179図）

125号住居を切る。規模は東西約3.3m×南北約2.7mの東西に長い長方形プランの住居である。検出面から床面の深さは20cmほどで、主柱穴は検出されなかった。また床面下層は中央部が僅かに高く西半分が低く掘られていた。北壁中央部やや東よりに突出型のカマドが付設され、その前面左側には125号住居と同じ焼土混じりの粘土塊を検出した。カマドを作るためのものか、作った後に壊し放棄したのか定かでない。突出部は壁面よりやや西寄りに奥壁を振っている。カマドの幅約60cm、奥行き50cmである。方位はN-24°-W。

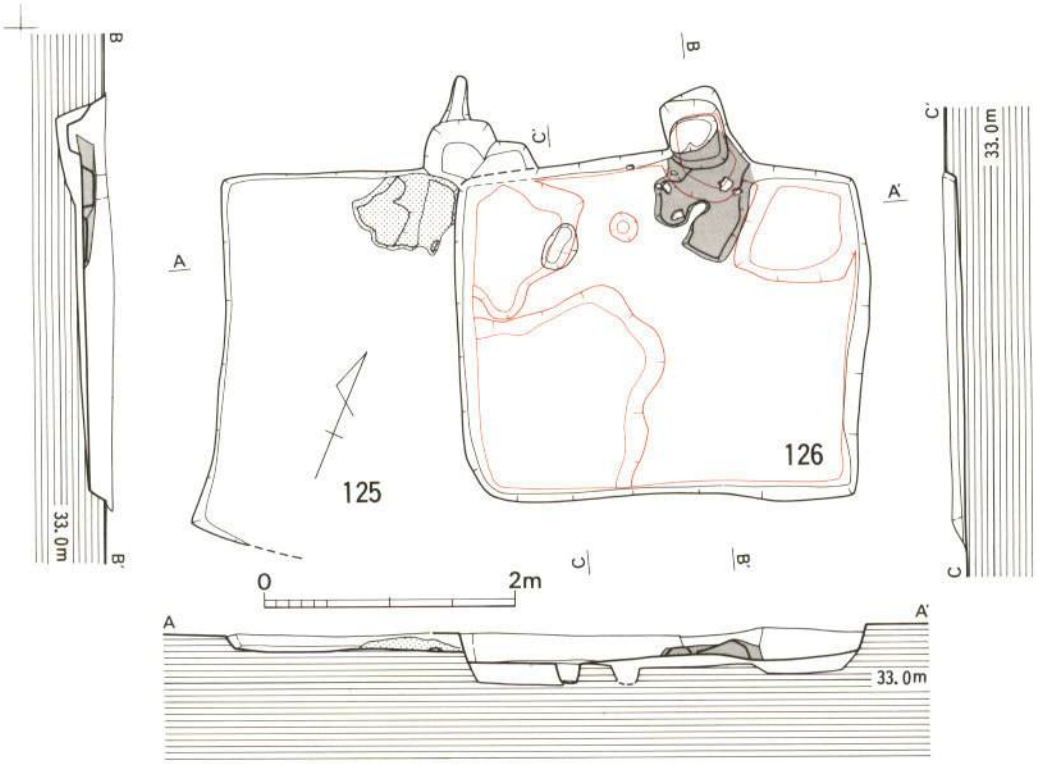
出土遺物（第181図）

須恵器（4·5）　4は蓋の破片で復原不可能。灰色で焼成は硬質。5は高台付坏片で胎土は4と類似。

土師器（6～8）　6は口唇部を屈曲する鉢片か。淡褐色で砂粒を含み焼成は硬質。7·8は甕の口縁部片で、7は口縁が肥厚し、8は大型の甕か。いずれも復原不可能である。

127号住居跡（図版78・79、第180図）

126号の東側に検出した。住居の西半分が撹乱されていたが、北西隅部を検出したことからお

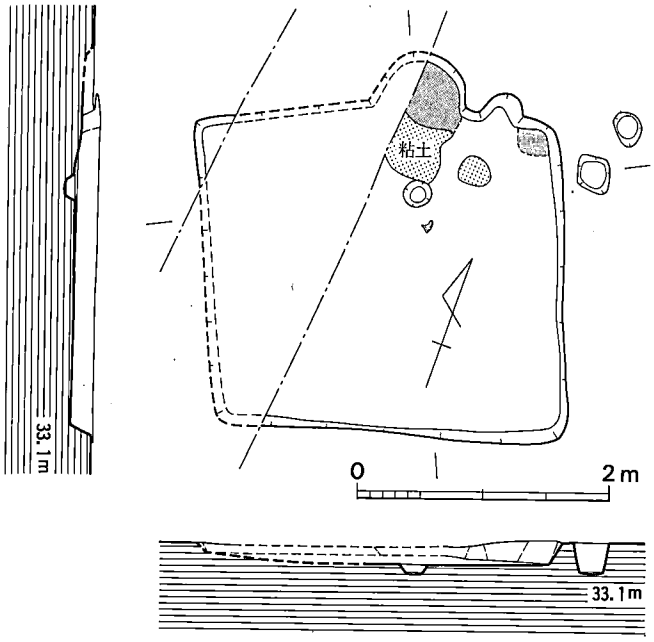


第179図　中道125・126号住居跡実測図（1/60）

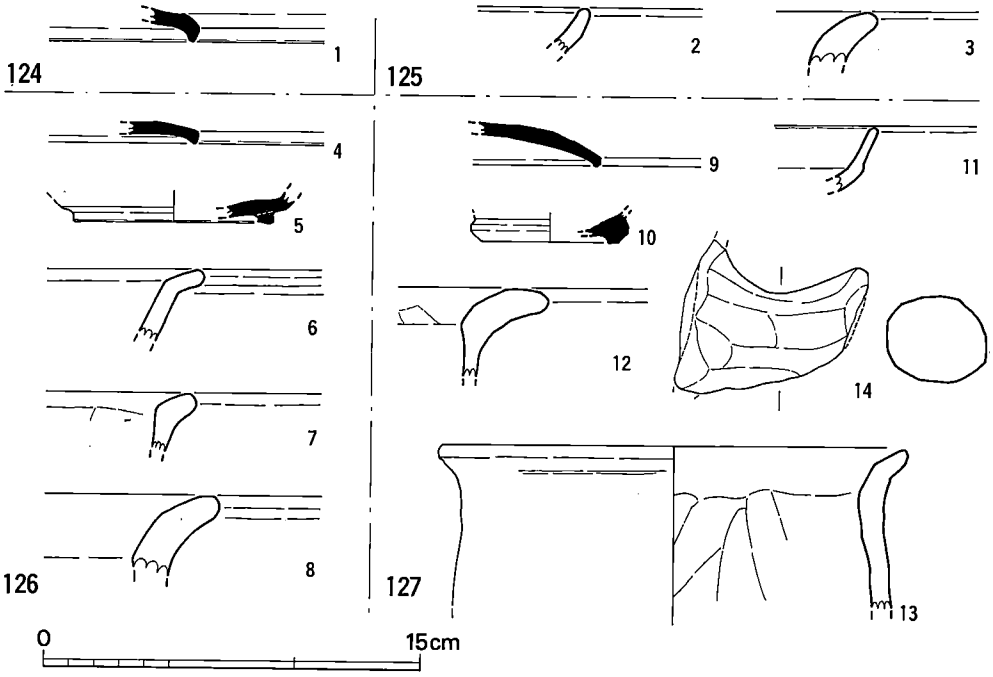
およそ規模を推定できた。東西2.9m×南北2.6mの方形プランを呈しており、主柱穴は検出されなかった。北壁に突出型のカマドを配し、前面部には焼土及び黄灰色粘土が散在していた。カマドが崩壊したものであろうか。カマドの奥行き約45cmである。床面は平坦であり、下層の貼り床は認められない。またカマド前面に小ピット1個を確認した。床面積は6.8m²。方位はN-29°-W。出土土器は少ない。

出土遺物（図版97、第181図）

須恵器（9） 蓋の破片で復原不可能。淡灰色で胎土中に細砂を含み焼成は硬質。



第180図 中道127号住居跡実測図（1/60）



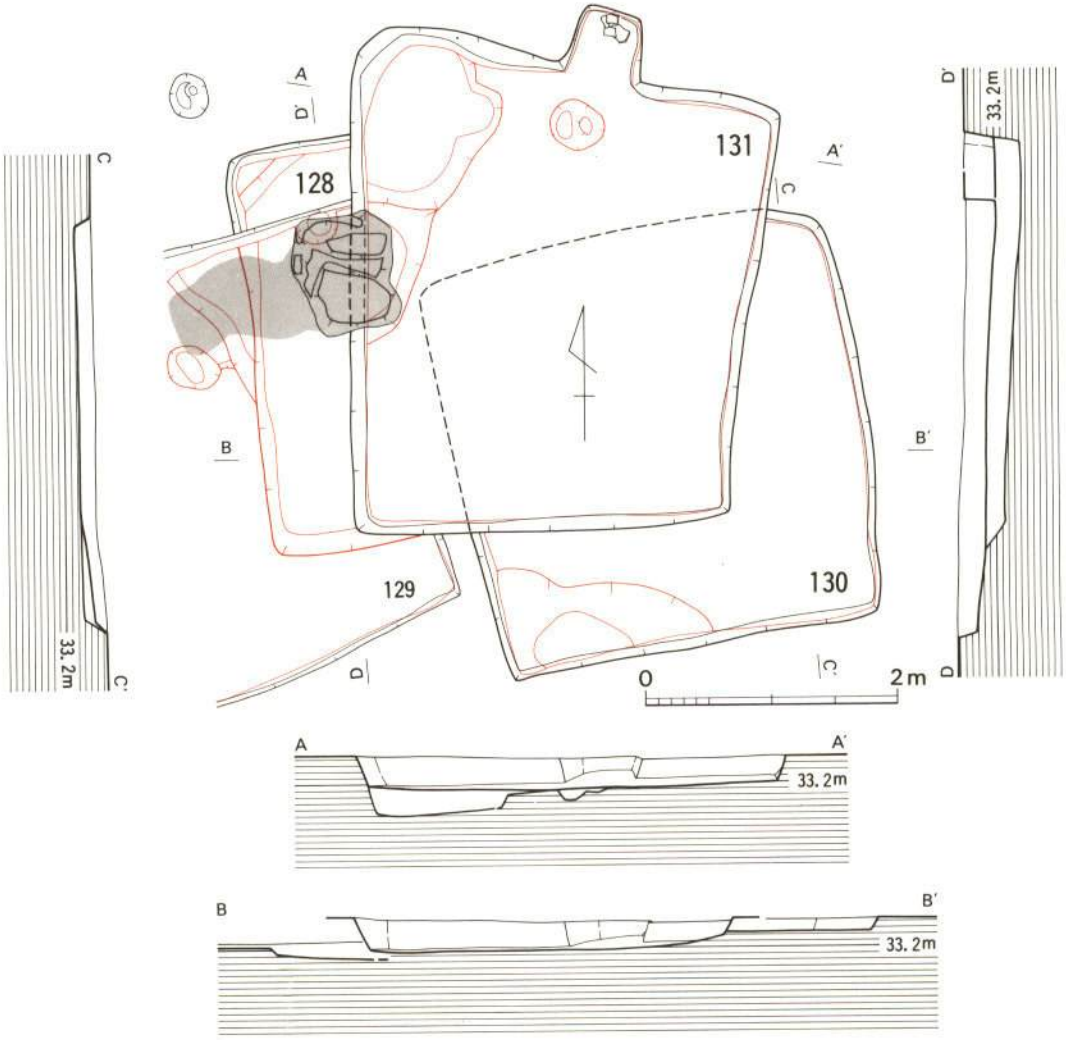
第181図 中道124～127号住居跡出土土器実測図（1/3）

土師器（11～14） 11は坏身片で体部中位に僅かな段が付く。胎土は精良。12･13は甕片。12は口唇部が肥厚した甕で、胎土に砂粒が多い。13は復原口径18.6cmで全体に二次火熱を受けており、内外体部はケズリ及びナデ調整である。大粒の砂粒を含む。14は甕ないし甑の把手であろう。

陶器（10） 胎土が淡橙色で、焼成は極めて堅緻。何等かの器形の高台と思われ、住居跡に後に混入したのであろう。

128号住居跡（図版80・81、第182図）

発掘調査区の東端部に検出した住居跡群の一軒である。その中でも129号～131号住居に切られ



第182図 中道128・130・131号住居跡実測図（1/60）

ており、北西隅部をのぞかせているにすぎない。しかし129号住居床面は128号住居を黒褐色（黄色土混）土で埋めて床面としており、これを除去する事で128号の西壁を検出した。南北長3.2m×東西0.8m以上を検出。北西隅に段が認められた。方位はN-5°-W。

出土遺物（第186図）

土師器（1） 復原不可能であるため器形は判らない。椀及び鉢の口縁か。

129号住居跡（図版80・81、第183・184図）

切り合い関係は131号住居に西壁を、132号住居に東壁を切られている。住居規模の把握は南東隅と北西隅が確認されたことによって、南北3.4m×東西約3.7mを測る。東西に少し長い住居である。北壁に突出型のカマドを配している。検出面からおおよそ15cmで床面となり、中央部は堅く踏み固められていた。主柱穴は検出されなかった。床面下層は薄い貼り床で、各住居との重複部は黒褐色土（黄色土混）が認められ、新しい住居の床埋土となる。床面積12.5㎡。方位はN-16°-W。

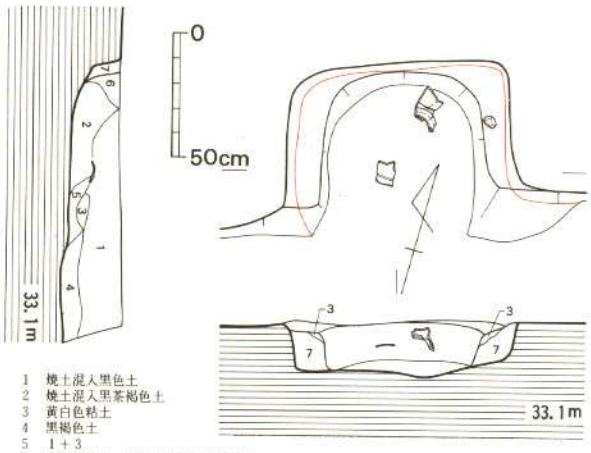
カマド（第183図） 北壁中央に検出した突出型のカマドである。両袖は現存せず、突出幅60cm、奥行き約60cmを測る。突出内面は黄灰色粘土で壁を作っており赤褐色に焼けていた。火床は広く、カマド内面から鉢・甕・甑等が出土した。

出土遺物（図版97・102、第186・234図）

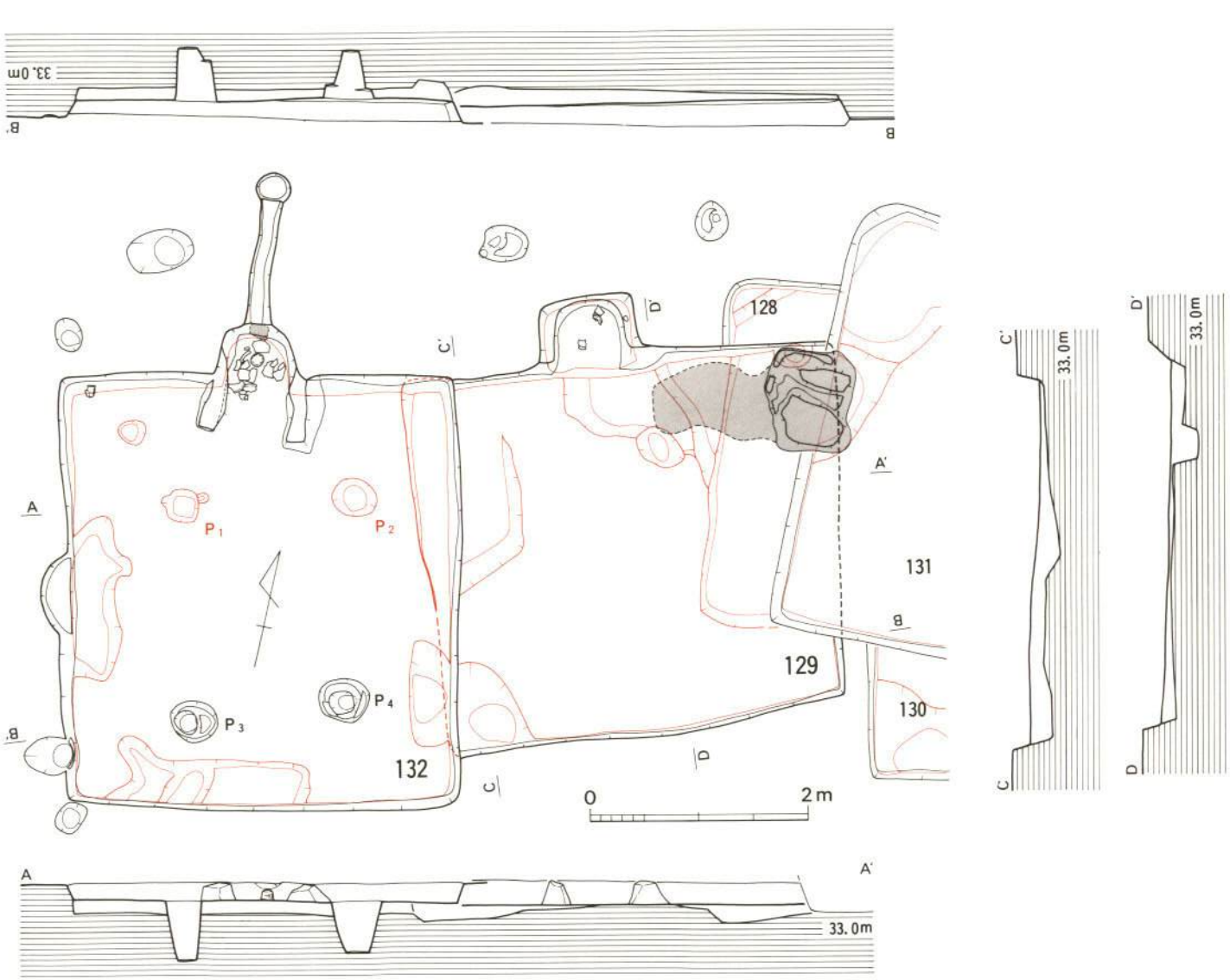
須恵器（2） 復原口径12.3cmの小さな蓋で、胎土に砂粒を含み天井部は器肉が厚くなる。

土師器（3～8）3は復原口径15.4cmの皿である。胎土に砂粒は少なく、外体底部は強いケズリ調整。4は復原不可能である坏身で、胎土は精良。5は鉢で口縁部が強く外反し、胎土は精良にて内・外面ナデ調整を施す。復原口径19.6cmを測る。6は甑底部で胎土は精良。砂粒は含まず外体部はケズリ、内体部は丁寧に横方向の刷毛目調整である。外底復原径16.6cmを測る。7・8は甕口縁部で、8は口唇部の器肉が肥厚し、外体部は刷毛目、内体部は強いナデ調整である。復原口径18.0cm。2・4は焼土内から、5・6・8はカマド内から出土。

石製品（第234図13） 焼土中から出土した。石英片岩の偏平な自然石で、表面は擦り減っている。磨石であろうか。全長5.78cm、幅4.72cm、厚さ0.5cm、重さ23.5gを測る。



第183図 中道129号住居跡カマド実測図（1/30）



第184図　中道129・132号住居跡実測図（1/60）

130号住居跡（図版80・81、第182図）

131号住居に面積の約1/2を切られている。規模は最も残りの良いところで東西3.26m×南北3.34mを測る。プランは略方形であろう。検出面から床面の高さ約13cmで貼り床は薄い。主柱穴及びカマド等は検出されなかった。床面積10.3m²。方位はN-9°-W。

出土遺物（第186図）

土師器（9）　復原口径16.6cmの坏身である。口唇部内面を僅かにカキ取っており、胎土は精良である。内体部はナデ、外体部は横ナデである。

131号住居跡（図版80・81、第182・185図）

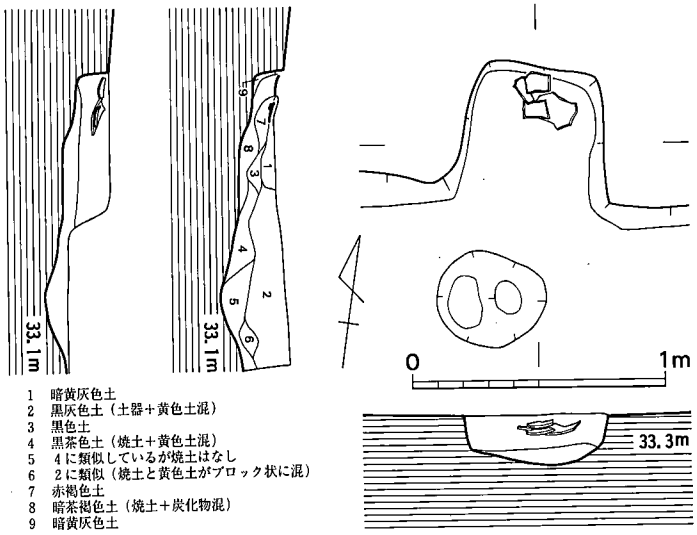
128号～130号住居を切る。規模は中央部で東西3.2m×南北3.72mを測るが、東壁・南壁長がそれぞれ差が著しいため全体に歪んだ方形プランを呈する。床面の深さは約20cmで、下層床面との間は10cm前後の貼り床である。北壁中央部に突出型のカマドを配し、その前面に径40cmの浅いピットを検出した。また西壁寄りに径1.2m、深さ30cm程の落ち込みを検出したが、遺物等は含まれていない。床面積10.6m²。方位はN-8.5°-E。

カマド（第185図）　北壁中央に検出した突出型のカマドである。両袖は現存せず、突出幅55cm、奥行き約50cmを測る。突出部壁の内面は赤褐色に焼け締まっており、火床は広く奥壁寄りに甕破片等が出土した。

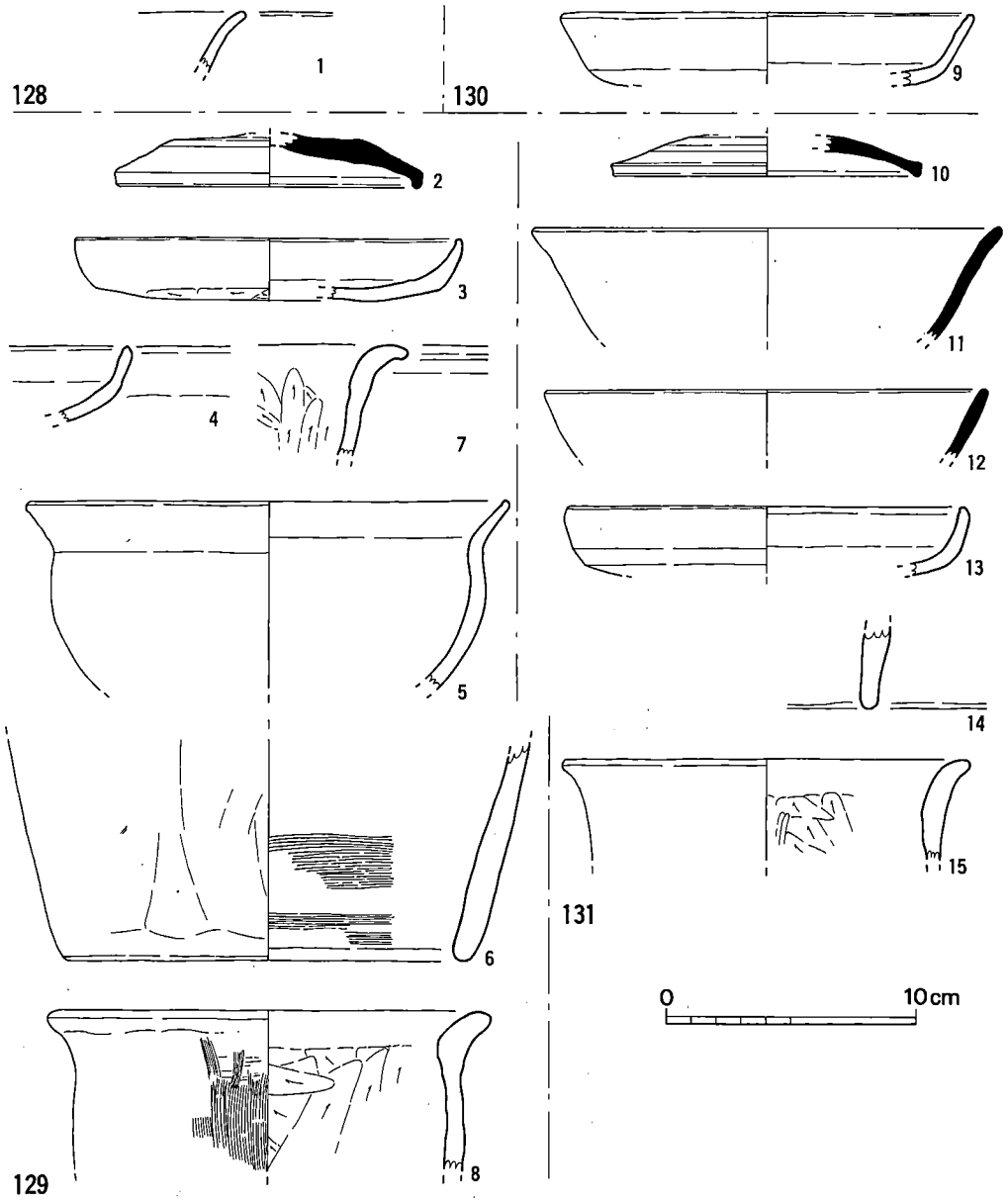
出土遺物（第186図）

須恵器（10～12）復原口径12.4cmの蓋で、灰白色を呈し胎土は精良。11・12は椀であろうか。11は口径19.0cm、12は17.8cmに復原可能である。共に焼成は堅緻で胎土に砂粒を若干含む。

土師器（13～15）　13は復原口径16.2cmの坏身である。口唇部内面を僅かにカキ取っており、胎土は精良である。内体部はナデ、外底部はケズリ調整である。14は甑の破片で、淡橙色を呈し胎土に白色粒を含む。15は16.5cmに復原できる甕片である。



第185図　中道131号住居跡カマド実測図（1/30）



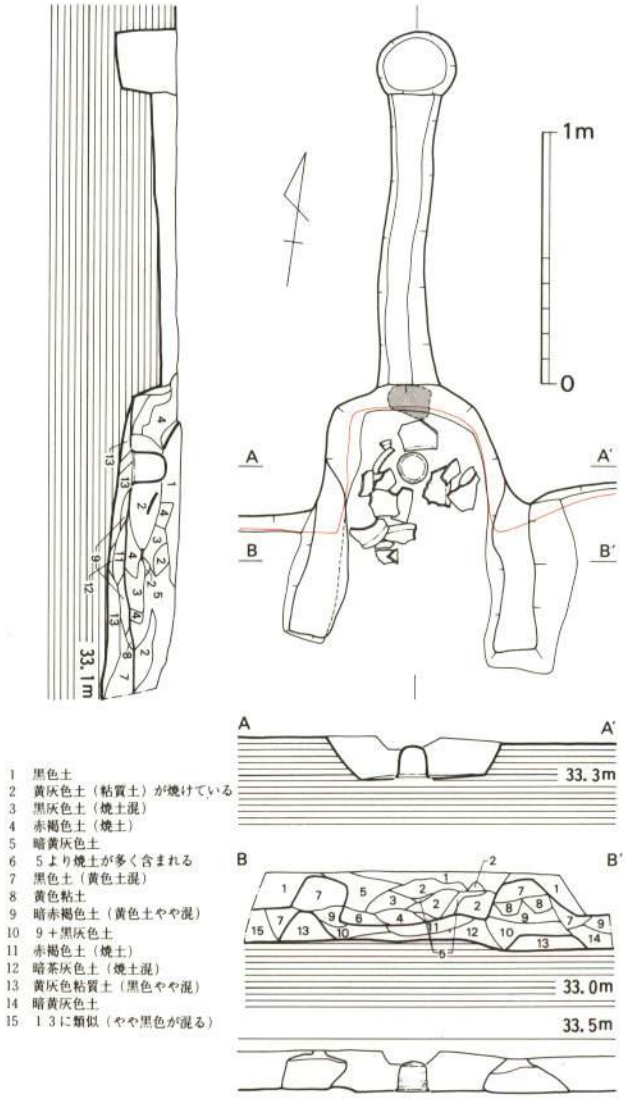
第186図　中道128～131号住居跡出土土器実測図（1/3）

内体部はケズリ、外体部はナデ調整を観る。

132号住居跡（図版80～82、第184・187図）

切り合い住居の中で最も西に検出した住居で、129号住居の西壁を切っている。規模は東西3.66m×南北4.0mの方形住居である。主柱穴は四本検出し、各柱間はP1－P2間1.58m、P1－P3間1.96m、P2－P4間1.86m、P3－P4間1.5mをそれぞれ計測する。掘り形は円形で径30～50cm、最も深いもので58cmを測る。奥壁には突出型のカマドを付設し、長い煙道が延びている。床面は主柱穴内が特に堅く踏み固められており、下層床面まで約12cmの貼り床である。また西壁中央部が半円形に張り出しており、下層床では15cm程掘り窪められていた。このことから出入り口の可能性があり、踏面部分を堅い貼り床で覆ったのかもしれない。床面積13.3㎡。方位はN-12.5°-W。石錘らしき石器と押型文土器片も出土している。

カマド（第187図）　北壁中央に検出した突出型のカマドである。袖は突出部コーナーから開き気味に残存し、左袖長40cm、右袖長約50cmを測る。突出部幅60cm、奥行き約50cmで壁周は焼けて赤変していた。特に奥壁は煙道への火の通りのためか極めて堅かった。煙道は幅20cm深さ15～20cmで、2.8m延びている。煙出し方に下降傾斜し、先端は径30cm、深さ23cmの煙出口である。煙出口の埋土は黒褐色・茶褐色であった。カマド中央には小型甕を伏せて支脚としており、その周辺には甕・甑等が検出された。また両袖の断面を観察したところ、先ず右袖は床面から黄色粘



第187図　中道132号住居跡カマド実測図（1/30）

土·赤褐色土で構築している線を断面観察できるが、左袖にその線はなく基底部の黄色粘土と最終袖の線が接続しない。このことから左袖のみ補·改修した可能性がある。

出土遺物（図版97・102、第188・189・234図）

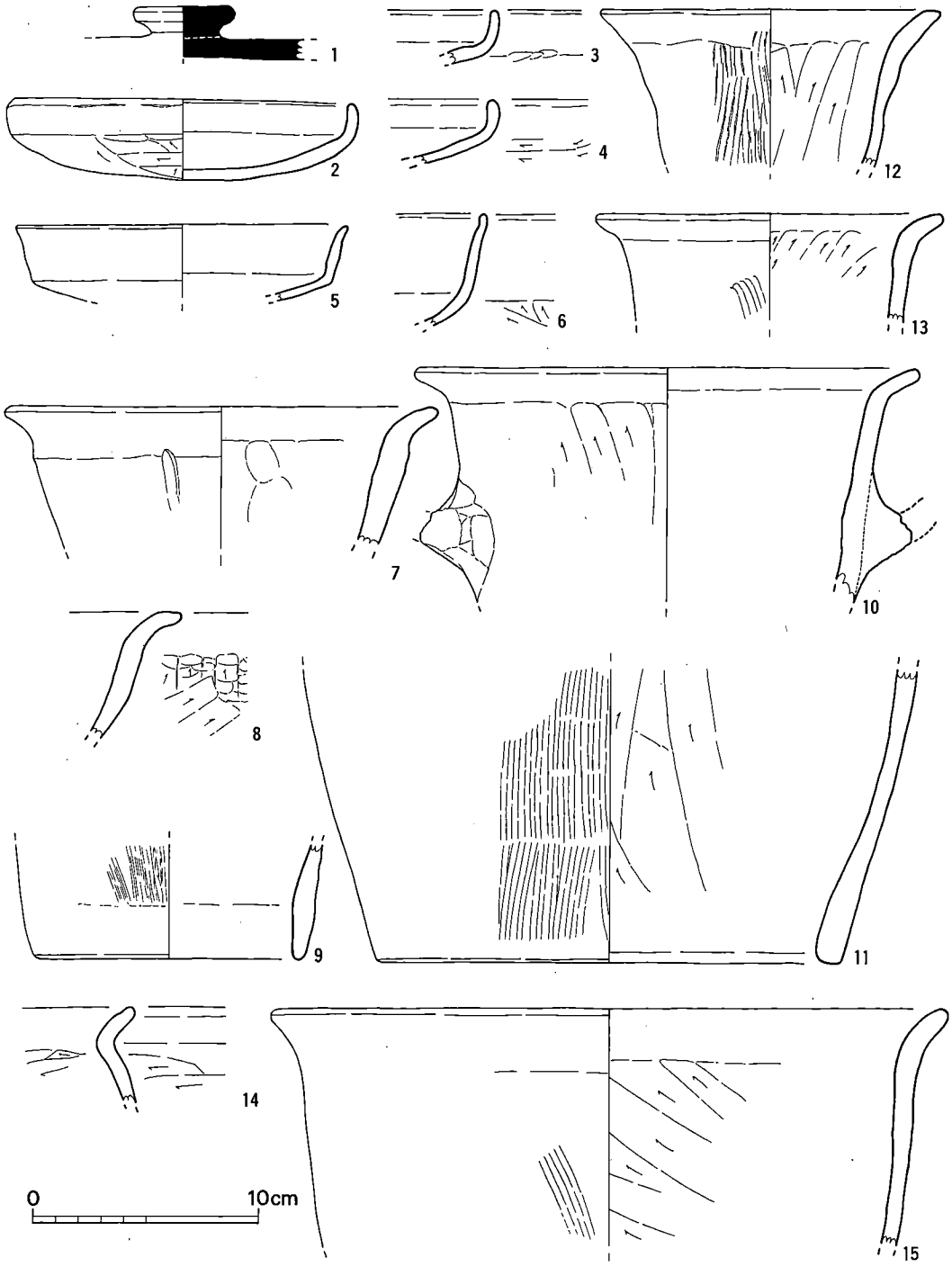
須恵器（1）　大きな蓋の撮みである。灰色を呈し胎土は精良。撮み径4.55cmを測る。

土師器（2～22）　2～5は坏身である。2は復原口径15.2cm、器高3.65cmを測り、外底部は丸くケズリ調整である。胎土に砂粒·雲母片を含み精良である。3·も2に類似している。5は底部と体部が明瞭に屈曲し、口径14.8cmを復原する。外底部はナデ調整で、胎土に砂粒が少なく精良である。6は椀であろうか。口唇内部をほんの僅かにカキ取り、体部と底部を屈曲し底部はケズリ調整である。7·8は器肉の厚い鉢で、7は口唇部を薄く摘み、内·外体部はナデ調整。胎土に砂粒を含み淡茶橙色で精良である。7は外体部ケズリ調整である。9～10は甑片である。9は底径12.0cmを測り、外体部は刷毛目、内体部はナデている。甕との重なりは2.5cmであろう。胎土は精良。10は口縁部の形状から甑とした。体部中位に小さな把手を配し、外体部はケズリ調整で、把手部分のみナデている。11は復原底径20.6cmで、外体部は粗い刷毛目で煤が付着し、内面胎土に３mm程の砂粒を含む。12～21は甕片である。12·13は小型の甕で、12は口縁部が大きく開き復原口径15.0cmで器肉が厚い。外体部は粗い刷毛目、内体部は縦方向のケズリ調整である。13は口縁部が屈曲し全体に二次火熱を受けて、調整は12と類似。14は口縁部をく字状に屈曲するもので、15は口縁端部が肥厚する。復原口径30.0cmを測り二次火熱を受けている。16～21は口縁部を強く外反させ器肉を厚くするもので、中型から大型の甕である。口径は21.3～27.4cmを測り、外体部は刷毛目調整を施し内体部は底部から口縁部にかけて強いケズリカキ上げである。胎土には大粒の砂粒を含み淡褐色で、焼成は硬質である。ただし16の外体部はケズリ調整。21の外体部には力強い把手を観る。二次火熱を受けているものが多い。22はカマド支脚で口径13.6cm、器高12.9cmを測る。胎土に砂粒·石英·雲母を含み、外体部は刷毛目、内体部はケズリ調整である。二次火熱を受け焼成は堅緻。2·4·11·12·15·21はカマド内出土。

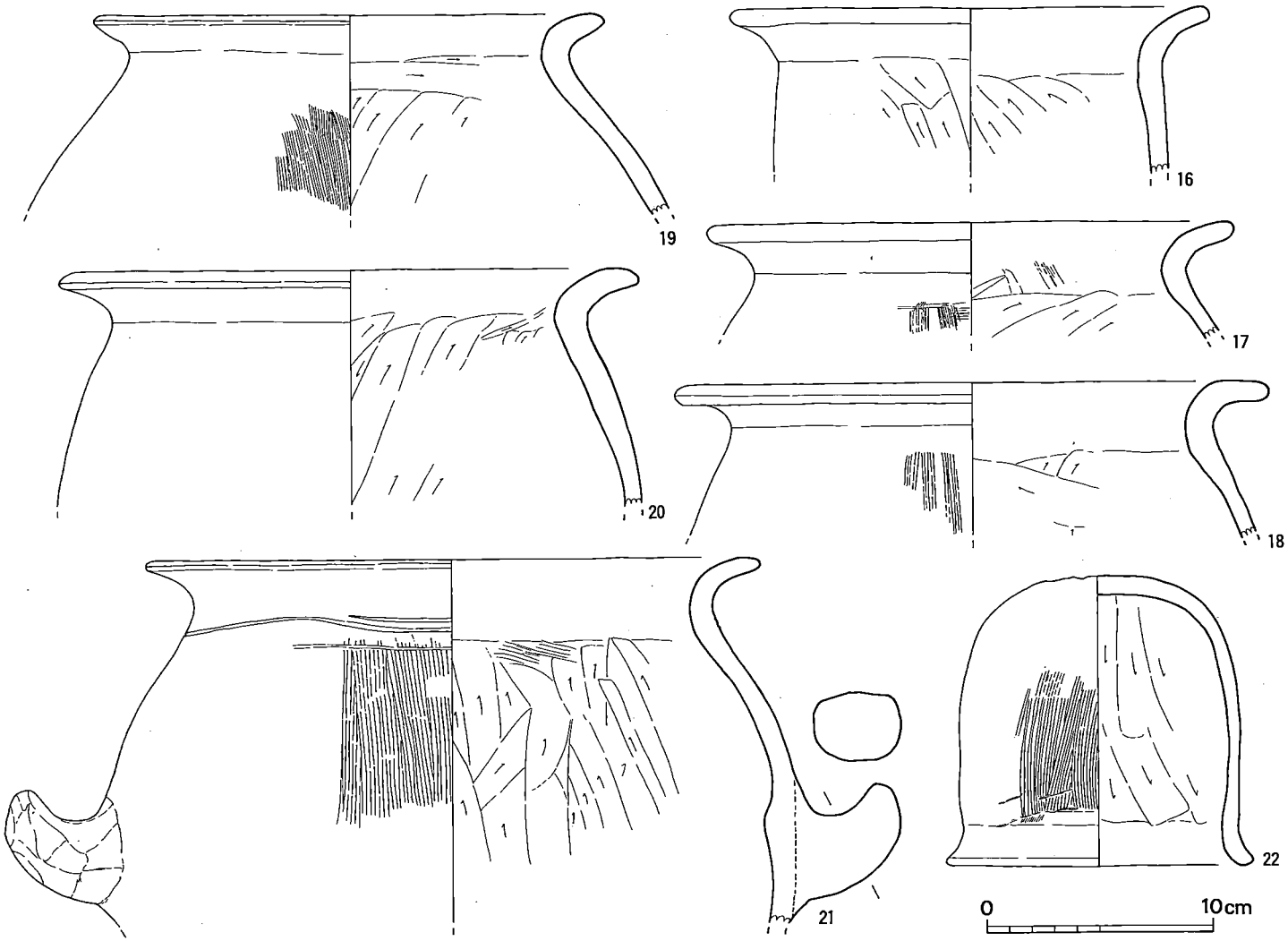
石製品（第234図14）　材質は片岩で、所々に石英の脈が走る。自然石を利用し中央部に打ち欠きの抉りが見られ、紐等で縛っていたと考えられる。石錘であろうか。長さ5.81cm、幅4.5cm、厚さ1.06cm、重さ31.6gを測る。

133号住居跡（図版83、第190図）

調査区の東端部に検出した。全体に削平されており、南壁は明らかでないが南西コーナーから推察して東西2.96m×南北約2.8mの歪んだ方形住居である。北壁中央西寄りに突出型のカマドを配している。床面は平坦で下層貼り床は認められなかった。主柱穴は四本検出し、各柱間はＰ1－Ｐ2間1.46m、Ｐ1－Ｐ3間1.04m、Ｐ2－Ｐ4間1.02m、Ｐ3－Ｐ4間1.6mをそれぞれ計測する。掘り形は略円形で径30～50cm、最も深いもので36cmを測る。方位はN-8.5°-W。



第188図　中道132号住居跡出土土器実測図１（1/3）



第189図　中道132号住居跡出土土器実測図２（1/3）

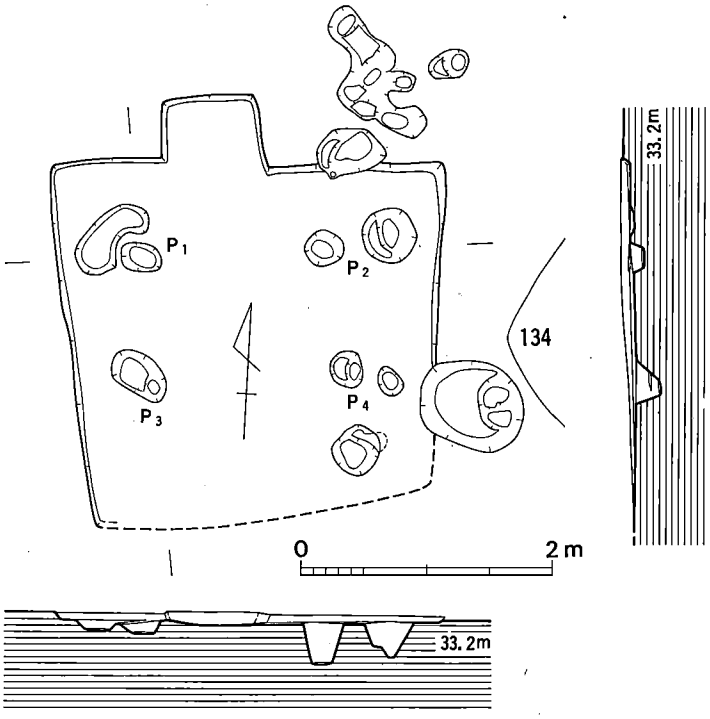
カマド　北壁に検出した突出型のカマドである。幅80cm、奥行き約60cmで、壁周及び火床は赤褐色に焼けていた。出土遺物はない。

134号住居跡

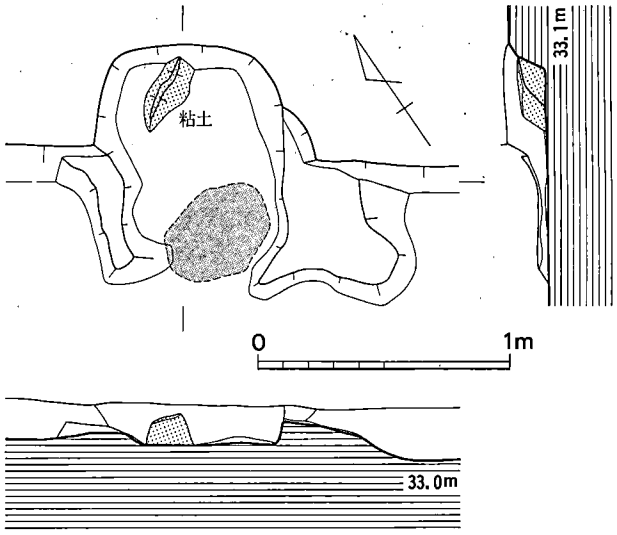
（図版83、第191・192図）

調査区の東端部に検出した。規模は東西2.9m×南北約3.2mの方形を呈する小型の住居である。北壁中央に突出型のカマドを配し、カマド対面南壁に入り口と考えられる緩やかな張り出しを検出した。遺構検出面から床面の深さ約15cmで、床面下層間は12～15cmを測る貼り床である。主柱穴はカマド前面に二本検出し、その柱間間隔は1.6mである。掘り形は径20～30cmで、深さ30～40cmを測る。床面積11.8㎡。方位はN-31.5°-E。須恵器はなく、埋土中に焼塩土器片があった。

カマド（第191図）　北壁中央に検出した突出型のカマドで幅65cm、奥行き35cmを測る。両袖は突出部から約50cmで、左袖は黄色粘土の固まりが多く観られた。この両袖から焚口幅約30cmを測ると、焚口



第190図　中道133号住居跡実測図（1/60）

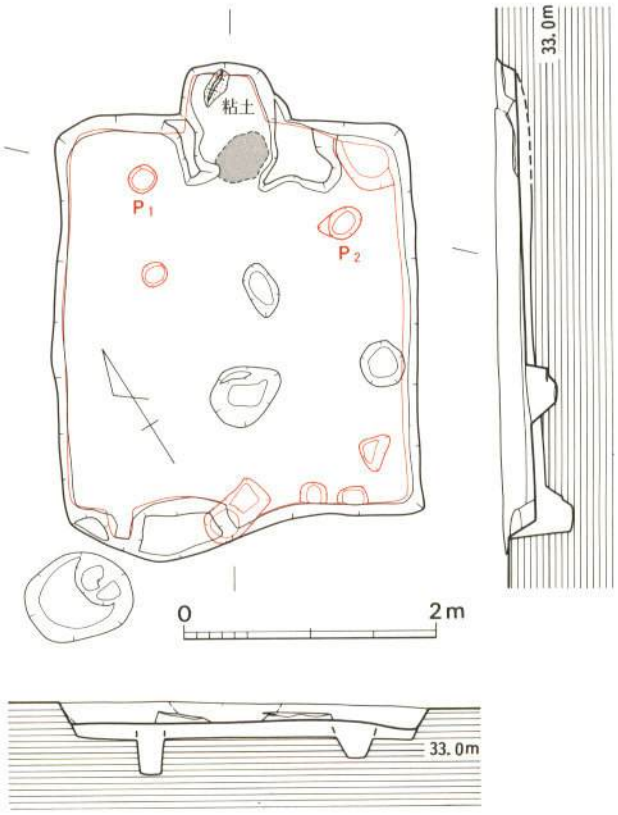


第191図　中道134号住居跡カマド実測図（1/30）

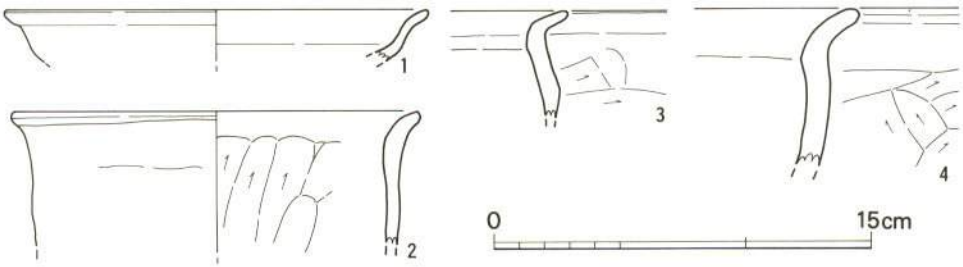
から奥壁までは80cmになる。また奥壁に黄灰色粘土の固まりが残存していた。火床は赤褐色に焼けていた。

出土遺物（図版100、第193・237図）

土師器（1～4）　1は坏身で復原口径17.0cmを測る。胎土に砂粒は少なく茶褐色を呈する。2～4は甕片である。2は復原口径16.4cmで、淡茶橙色を呈し胎土中に砂粒・石英・雲母を含む。3・4も2に類似した胎土・焼成で、外体部は刷毛目・内体部はケズリ及びナデ調整である。



第192図　中道134号住居跡実測図（1/60）



第193図　中道134号住居跡出土土器実測図（1/3）

2．掘立柱建物跡

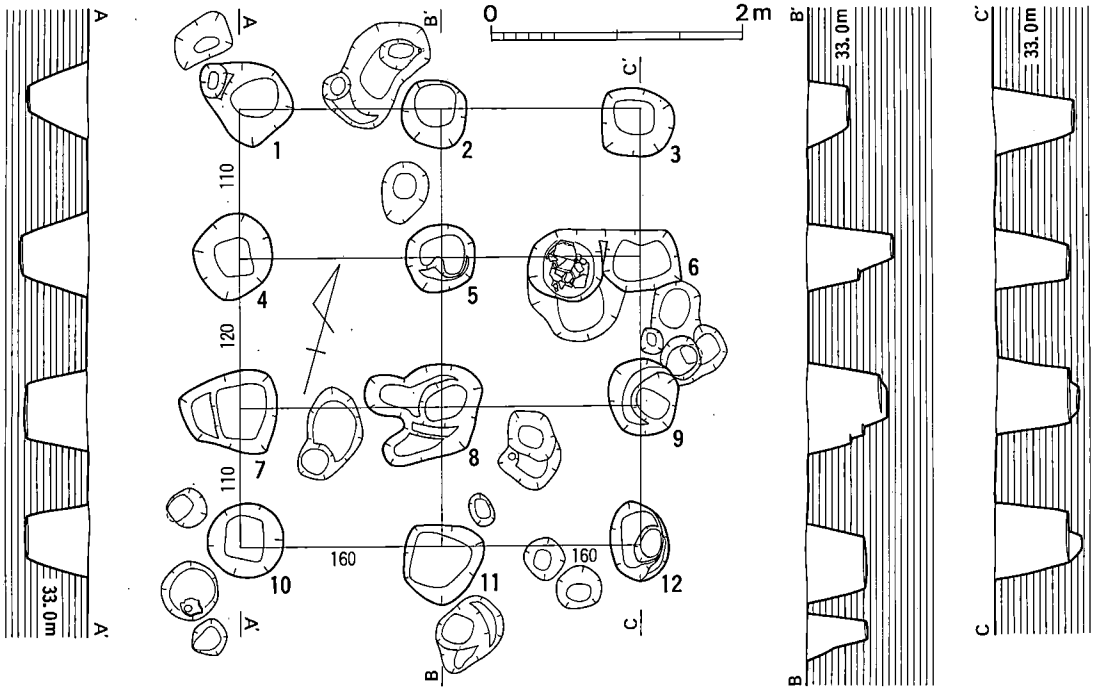
総数21棟の掘立柱建物を検出した。東西･南北棟が大部分であるが、竪穴住居跡の居住数を勘案しながら建物数を見ると総柱建物の数が少ないのに気づく。掘立柱建物からの出土遺物は少なく、掲載した遺物の大部分は器形を想定できるものについてである。なお記述において、東西に長い建物であれば「東西棟」とし、南北も同様にした。柱間は（例）南北棟であれば南･北桁行、東･西梁行と表示した。

104号掘立柱建物跡［ＳＢ104］（図版84、第194図）

調査区のほぼ中央に検出した総柱建物である。規模は東西梁行２間×南北桁行３間の南北棟である。柱間間隔は梁行２間1.6ｍ等間で、桁行は中央間（Ｐ4－Ｐ7）が1.2ｍ、他は1.1ｍの等間である。柱掘り形は略円形であるが、中にはＰ8のように３段に掘られているのもある。径約50～60㎝、深さ50～70㎝を測る。柱穴からの出土遺物はない。桁行方位はN-16°-W。

105号掘立柱建物跡［ＳＢ105］（図版84、第195図）

調査区中央の南側に検出した。建物東半分は近世の水路によって削除されていた。規模は南



第194図　中道104号掘立柱建物跡実測図（1/60）

北３間×東西北桁行３間以上、南桁行１間以上の東西棟で、西側に廂を持つ。柱間寸法は区々で、北桁行のＰ２－Ｐ３間の掘り形は25号土坑と重複しており、発掘時に確認したにとどまった。Ｐ１－Ｐ２間1.3ｍ、Ｐ６－Ｐ７間1.6ｍである。梁行は中央間Ｐ４－Ｐ５間が2.2ｍと広く、これは幅1.4ｍで西側に廂をもつ柱間寸法と略同数値を示している。ちなみに梁行はＰ３－Ｐ６の間が順に1.4ｍ、2.2ｍ、1.7ｍを測る。柱掘り形は径約60㎝の円形で、深さ40～50㎝である。桁行方位はＮ-75°-Ｅ。

出土遺物（第199図）

土師器（1）　復原不可能な坏身の破片である。口縁内部を僅かにカキ取り、胎土は精良である。Ｐ３から出土した。

106号掘立柱建物跡［ＳＢ106］（図版84、第196図）

調査区の中央部に弥生時代の20号住居跡と重複して検出した。規模は東西２間×南北１間の南北棟である。柱間間隔は北梁行Ｐ１－Ｐ３間を西から1.8ｍ、2.2ｍ、南梁行Ｐ４－Ｐ６間を2.3ｍ、1.7ｍを計測する。注目したいのは桁行きで、まず西桁行き列は隅柱間に掘り形がやや小さい径30～40㎝の柱穴６個を検出した。深さは隅柱より浅く、50㎝前後である。基礎柱にするには柱穴が深く、隅柱（Ｐ１、Ｐ４）を結ぶ柱通りが良いため「壁」とするための補強柱と考えてはどうだろうか。なおこのことはＰ１－Ｐ３間に検出した小柱穴も同じである。東桁行は西桁行列と反対にＰ３－Ｐ６間に柱穴が少ない。Ｐ３から0.8ｍで径30㎝の柱穴と、Ｐ６から柱通りがずれた

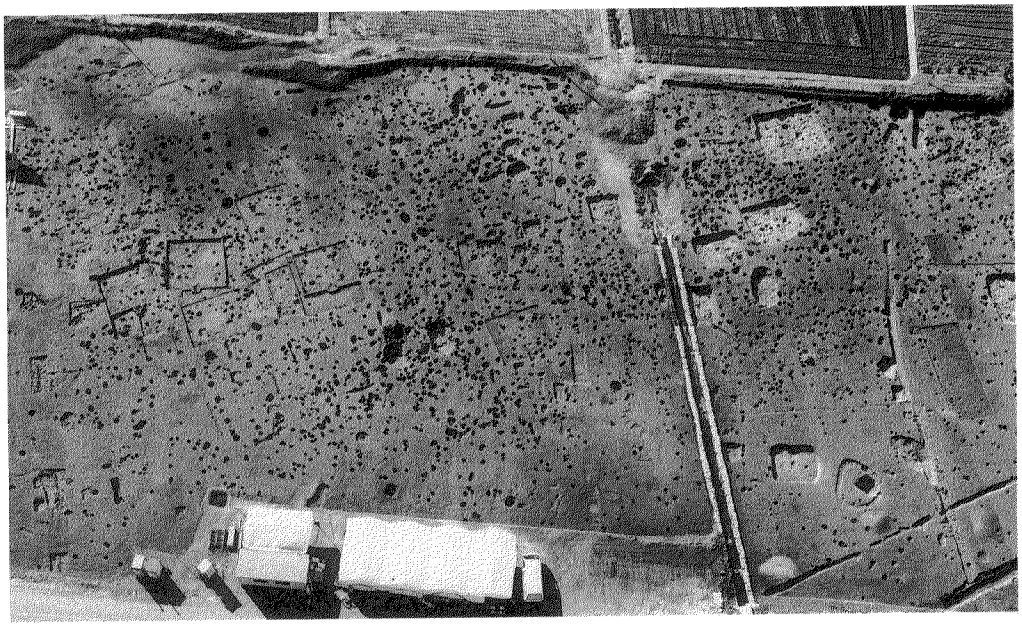
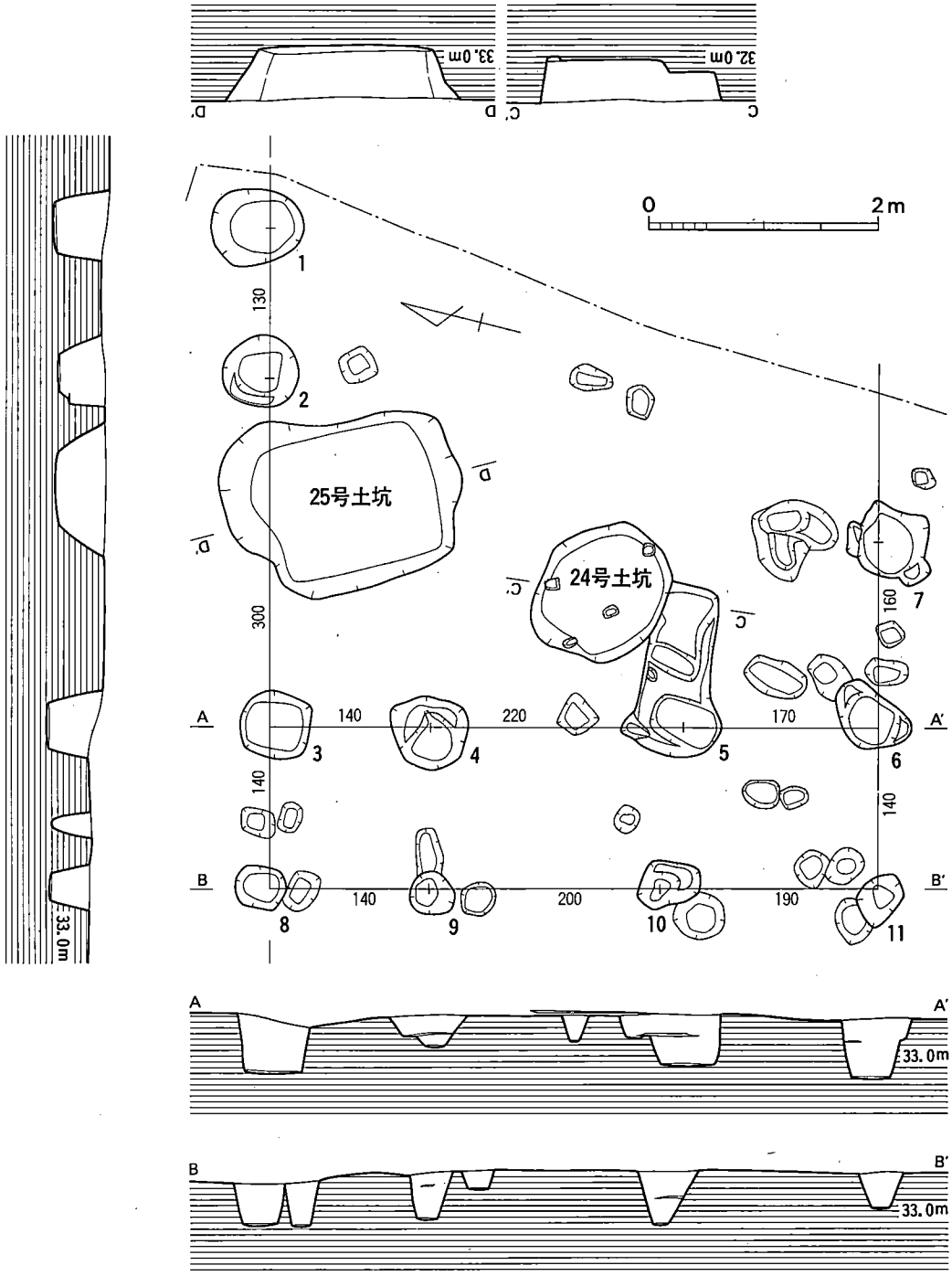
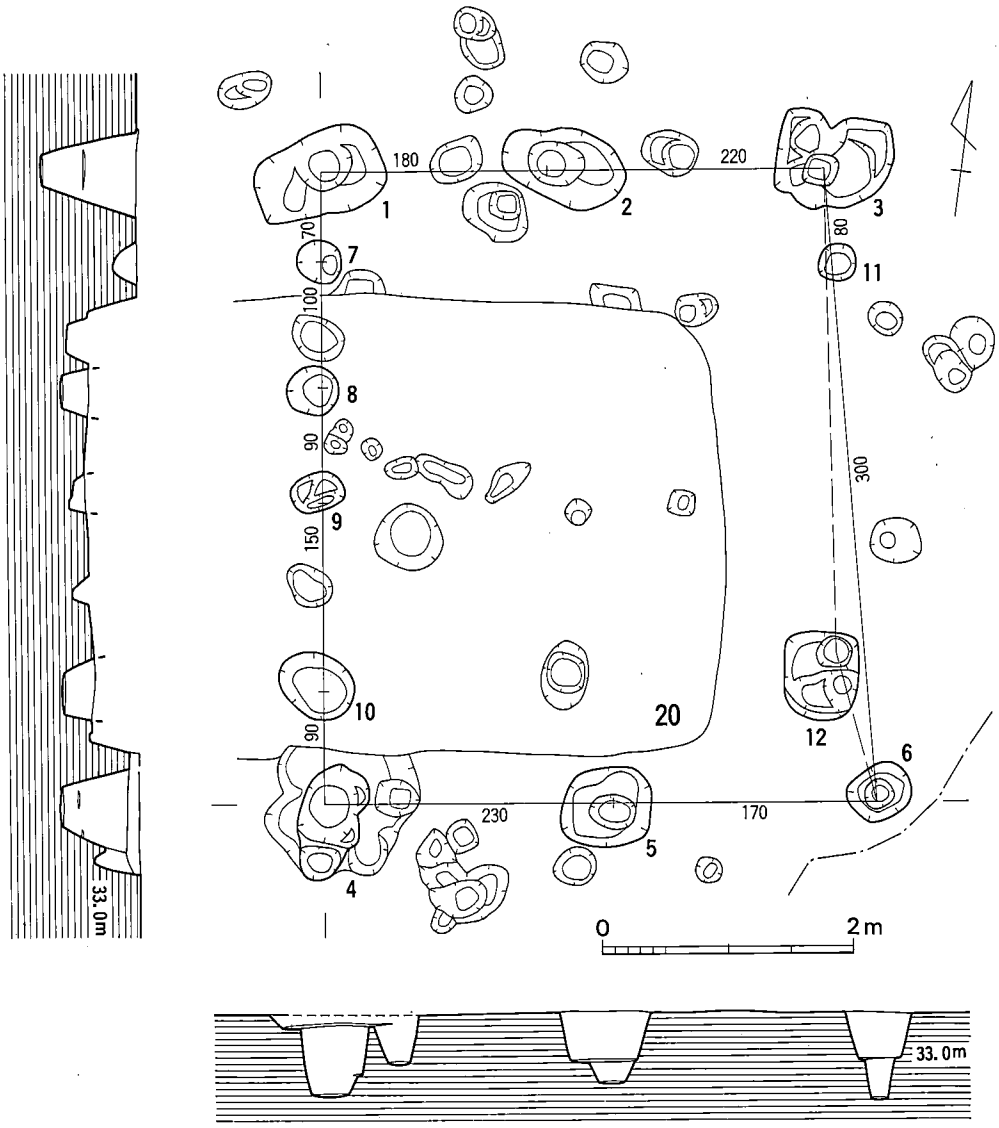


Photo. 12　住居群俯瞰



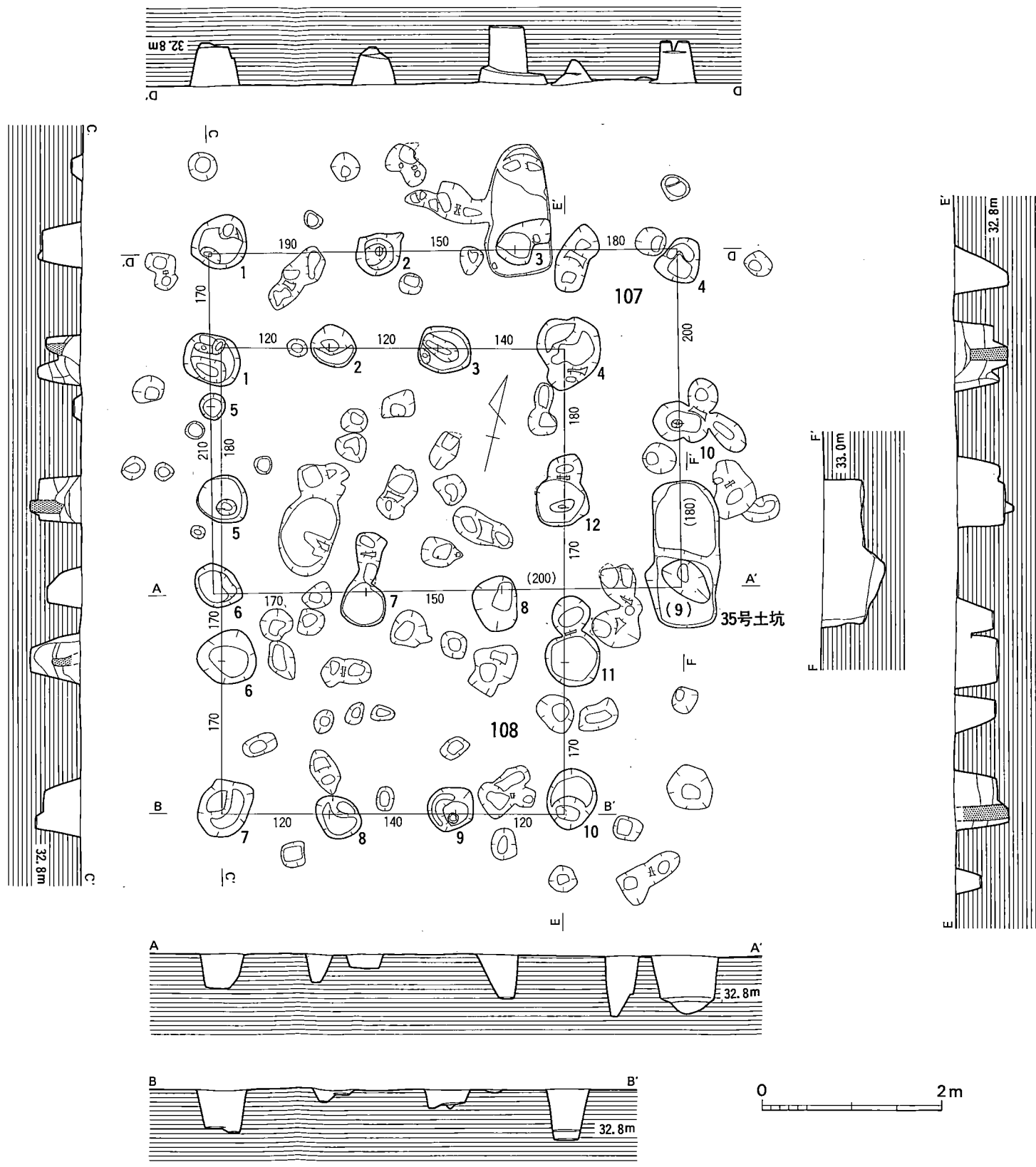
第195図　中道105号掘立柱建物跡、24・25号土坑実測図（1/60）



第196図　中道106号掘立柱建物跡実測図（1/60）

位置にあるＰ12が検出された。このことから西桁行列を壁と考えた時、Ｐ3－Ｐ6間は出入口と考えてはどうであろうか。隅柱の掘り形は大きく80～100cm、深さ60～70cmを測る。なお本建物の西側において須恵器（坏等）が出土した。弥生住居への混入とは考えにくく、本建物に関与する土器として掲載した。方位はN-8°-W。

出土遺物（第199図）



第197図　中道107・108号掘立柱建物跡、35号土坑実測図（1/60）

須恵器（2･3）　2は口径13.9cm、器高2.4cmで、胎土に砂粒･石英を含む灰色をした蓋である。天井に撮みを有する。3は壺の胴体部で、外体部は横方向のカキ目、内面はナデの調整である。胎土は精良にて堅緻。

土師器（4･5）　4は復原口径21.0cmを測り、器肉が薄く胎土の精製された蓋である。外体部はケズリ、端部から内面は横ナデ調整である。5は皿で復原口径19.3cm、器高2.5cmを測る。精製された胎土で淡褐色である。

107号掘立柱建物跡［ＳＢ107］（図版85、第197図）

調査区ほぼ中央に検出し、108号掘立柱建物及び35号土坑と重複関係にある。108号建物とは柱穴の切り合いがないため新旧関係は定かでない。また35号土坑と建物Ｐ（9）の切り合いから建物を土坑が切っていると判断した。規模は南北２間×東西３間の東西棟である。柱間寸法は、先ず南･北桁行の中央間が1.5ｍと等しく、両間は1.7～2.0ｍと若干の出入りが見られる寸法であり、中央間が狭くなる。梁行きはＰ１－Ｐ6間1.7ｍ、2.1ｍ、Ｐ4－Ｐ9間2.0ｍ、1.8ｍを測る。柱掘り形は径30～60cmの円形で、深さ50～70cmである。ただしＰ5の深さは12cmと浅く対面するＰ10と趣を異にする。桁行方位はN-75°-E。

出土遺物（第199図）

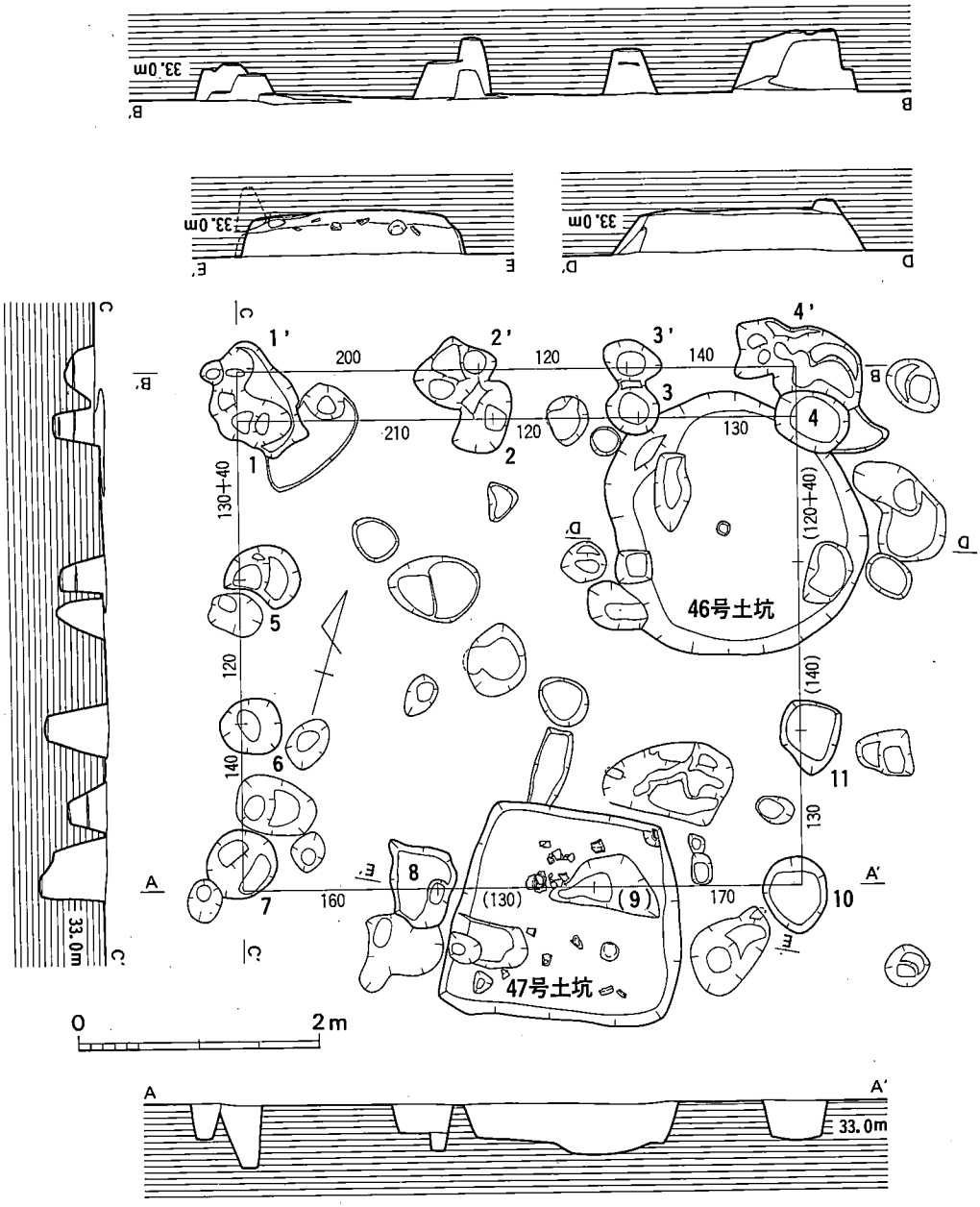
土師器（6～8）　6は坏身の破片で胎土は精良である。内面黒色にてナデ調整が内･外面に観られる。Ｐ9の西側出土。7は器肉の厚い鉢であろうか。調整は横ナデで、外面は黒色を呈し、胎土に砂粒を含む。Ｐ10出土。8は口縁部から想定すると甑等の器形になる。復原口径29.6cmで外体部は刷毛目調整である。Ｐ1から出土。

108号掘立柱建物跡［ＳＢ108］（図版85、第197図）

調査区ほぼ中央に検出し、107号掘立柱建物と重複関係にあって、ほぼ直交している。規模は南北３間×東西２間の南北棟である。柱間寸法は東･西桁行の最も北間（Ｐ1－Ｐ5、Ｐ4－Ｐ12）が1.8ｍと等しく、その他は1.7ｍの等間である。梁行きはＰ3－Ｐ4、Ｐ8－Ｐ9間が1.4ｍと等しく、他は1.2ｍを計測する。柱掘り形は径50～60cmの略円形で、深さ50～60cmである。整った建物であり、掘り形断面の一部に柱抜き取りの痕跡が確認され、その柱の径は13～16cmを測る。桁行方位はN-14°-W。

出土遺物（第199図）

土師器（9･10）　9は坏身の破片で胎土に砂粒が少なく精良である。復原口径14.2cmを測り、黄橙色である。Ｐ4から出土した。10は器肉の厚い鉢であろうか。外体部は刷毛目内面はケズリ調整である。胎土中に白色粒･雲母を含む。Ｐ10から出土。



第198図　中道109号掘立柱建物跡、46・47号土坑実測図（1/60）

109号掘立柱建物跡［ＳＢ109］（図版85、第198図）

109号竪穴住居跡の北側に検出した。弥生時代の46・47号土坑を切っている。規模は南北３間×東西３間の建物であるが、柱間寸法がやや東西が長いため東西棟とする。北桁行列Ｐ１－Ｐ4、Ｐ1′－Ｐ4′との柱間隔は40cmであり、それらの切り合い関係の判断に若干苦しむが、柱の深さはＰ1′－Ｐ4′の方が浅いことから観て、Ｐ1－Ｐ4の掘り形が先行するものと判断した。このことから当初Ｐ1－Ｐ5間が1.3mであった柱間隔を建て替えしたか、もしくは主柱の補強を行ったかが考えられる。柱間寸法は土坑等と重複しているため若干の出入りはあるが梁行列Ｐ1－Ｐ7、Ｐ4－Ｐ10間がおおむね1.2～1.4mを測る。桁行は1.2～2.1mとかなり開きが観られる。また46・47号土坑の底部にＰ9・Ｐ12が僅かに確認されたことから柱掘り形の痕跡と観た。柱掘り形は径50～60cmの略円形で、深さ30～60cmである。出土遺物はきわめて少ない。桁行方位はN-73°-E。

出土遺物（第199図）

土師器（11）　復原口径12.5cmを測る皿である。胎土は精良で、淡橙色を呈する。外底部はケズリ調整。Ｐ７から出土。

110号掘立柱建物跡［ＳＢ110］（図版86、第200図）

109号の東側に検出し、111号掘立柱建物と重複している。建物の規模は東西３間×南北４間の南北棟である。111号と切り合っている柱穴はＰ5、Ｐ6、Ｐ7であるが、その切り合い関係については、双方の建物は同じ柱穴を使用し、掘り形埋土は黒褐色で判断しにくく明らかにし得なかった。柱間寸法は区々であり、梁行は1～1.6mを測る。桁行寸法はＰ6－Ｐ7、Ｐ12－Ｐ13間が1.2mと等間で幅が狭く、その南側Ｐ7－Ｐ8、Ｐ11－Ｐ12間が2.0m前後と広くなる。その他は1.7～1.9mを測る。掘り形は50～60cmで、深さ約30cmから深いもので80cmを測る。またＰ8～Ｐ11の主柱穴間に小穴を確認した。それらの深さは浅く約40cm前後で、主柱穴を補佐するものであろうか。さらにＰ1～Ｐ4の北側約1.4m離れて幅約60cm、長さ2.8m、深さ1.0mの掘り形を検出した。これがいかなる性格のものかは明らかでないが、梁行と平行に存在することは興味深いものである。ただ111号建物の梁行柱筋にあることも注意したい。出土遺物は少ない。方位はN-22°-W。

出土遺物（第199図）

土師器（12･13）　共に復原不可能である。12は坏身であろうか。胎土は精良で淡褐色を呈する。Ｐ2から出土。13は甕口縁部片で、器肉が薄く淡褐色を呈し胎土精良。Ｐ11から出土。

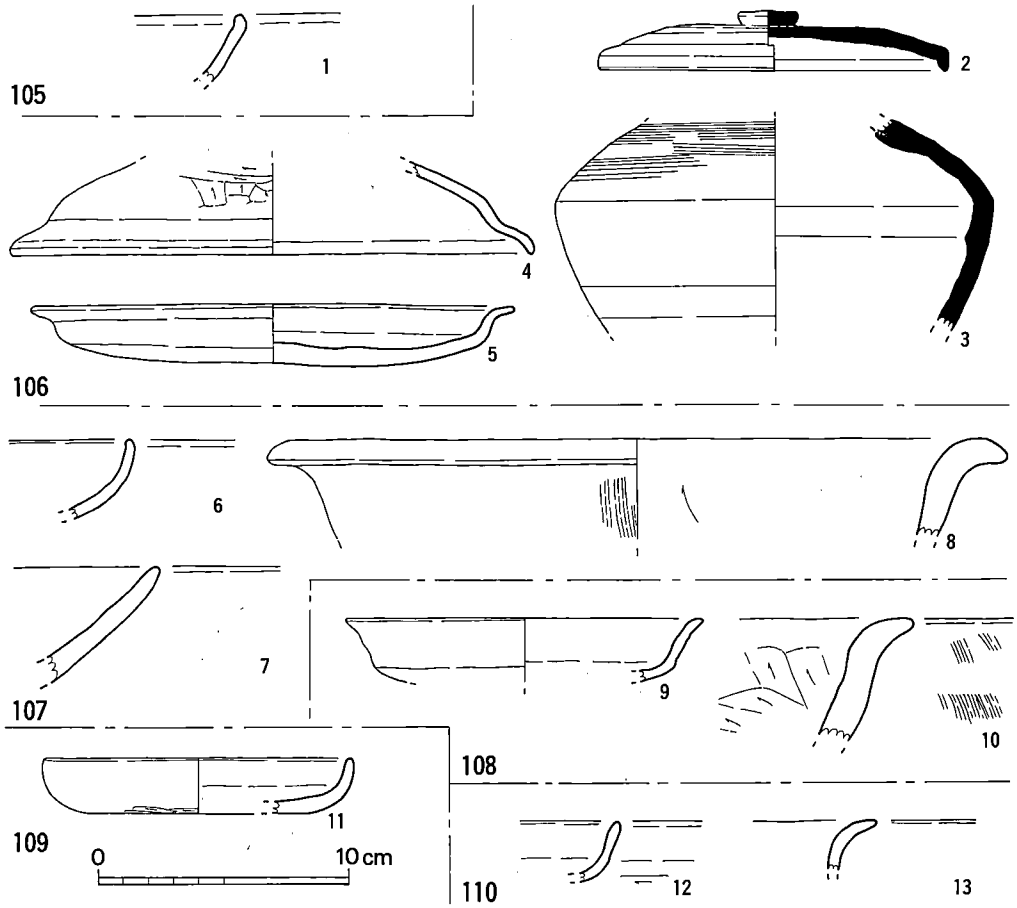
111号掘立柱建物跡［ＳＢ111］（図版86、第200図）

110号と切り合う。110号の項で触れたとおりＰ5～Ｐ7が同じ掘り形使用である。規模は南北

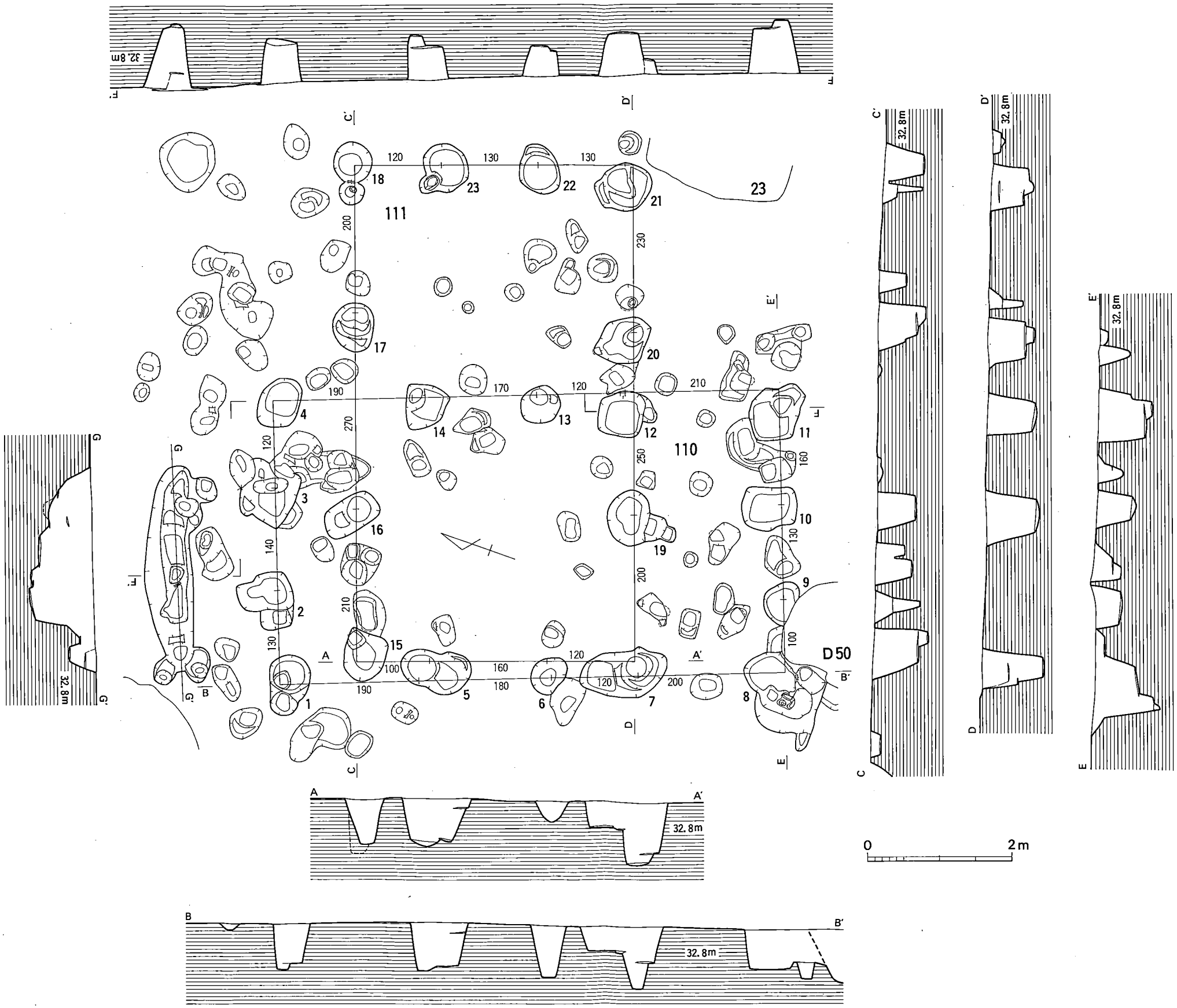
3間×東西3間の東西棟である。柱間は不揃いであり、梁行きと桁行きでは約0.7～1.7mの開きを見る。梁行は西側中央間が1.6mと広いほかは1.0m、1.2mを測り、東側は1.2～1.3mである。桁行はP16－P17、P19－P20の中央間が2.7m、2.5mと広く出入り口とするには十分である。他は2～2.3mである。掘り形は略円形で径60cm前後で、深さ50～90cmと深い。また110号の項で記したようにP15－P7の柱筋に細長い掘り形を検出した。P15－P18桁行との幅は2.5mである。方位はN-70°-E。

出土遺物（第210図）

土師器（14･15）　共に復原不可能である。14は坏身で胎土は精良。淡褐色を呈する。P15から出土。15は甕口縁部片で、外体部及び口縁内部は刷毛目調整。胎土に砂粒を多く含み焼成は硬質。P21から出土。



第199図　中道105～110号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）



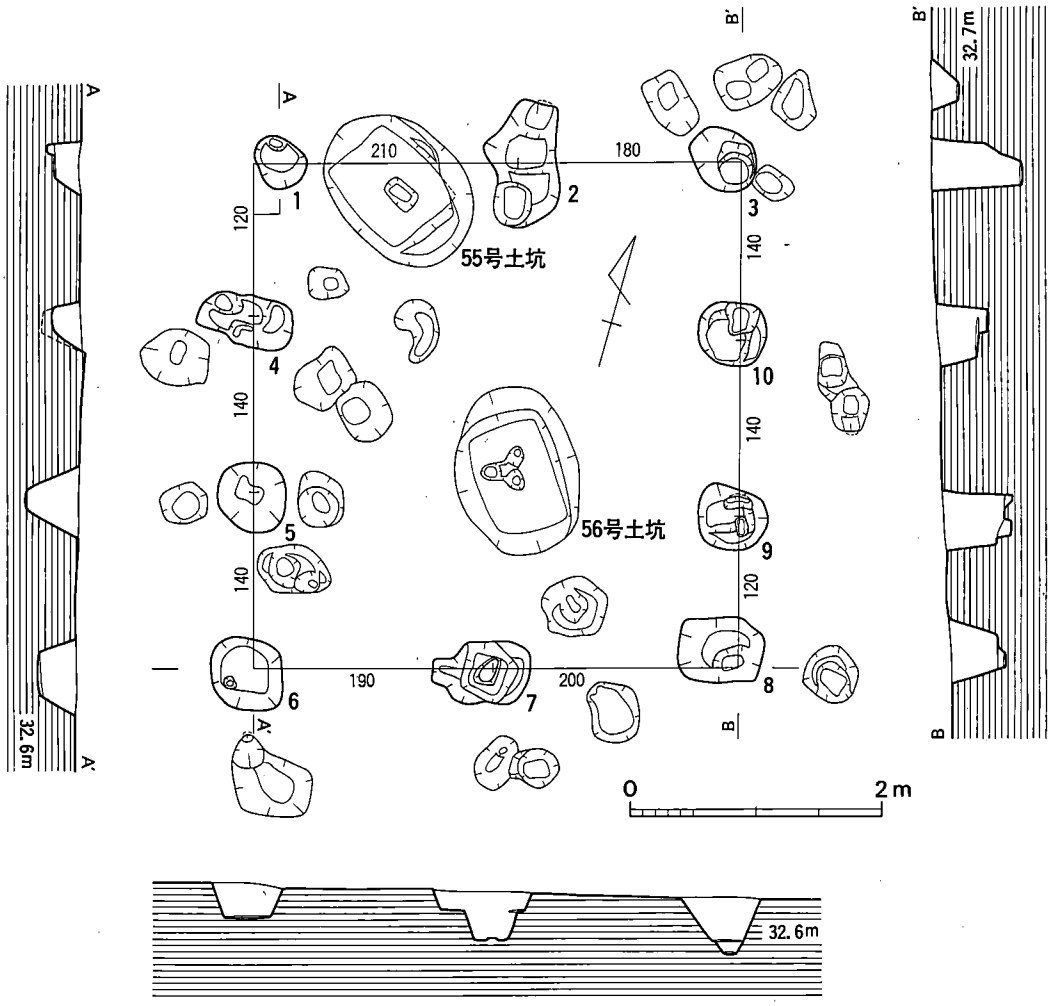
第200図　中道110・111号掘立柱建物跡実測図（1/60）

112号掘立柱建物跡［ＳＢ112］（図版87、第201図）

重複した住居群の西、111号建物跡の北東に検出した。規模は東西２間×南北３間の建物で南北柱間がやや長いため、南北棟と判断した。Ｐ１－Ｐ３、Ｐ６－Ｐ８間の梁行柱間は若干の出入りはあるが1.8～2.1ｍで柱筋が通る。桁行はＰ１－Ｐ４、Ｐ８－Ｐ９が1.2ｍ、その他は1.4ｍの等間である。各隅柱間の寸法は同数値であるが、両桁行に幅広ないし幅狭の寸法が共通するという傾向は注視したい。柱掘り形は略円形で径50～60㎝、深さ20～70㎝を測る。方位はN-16°-W。

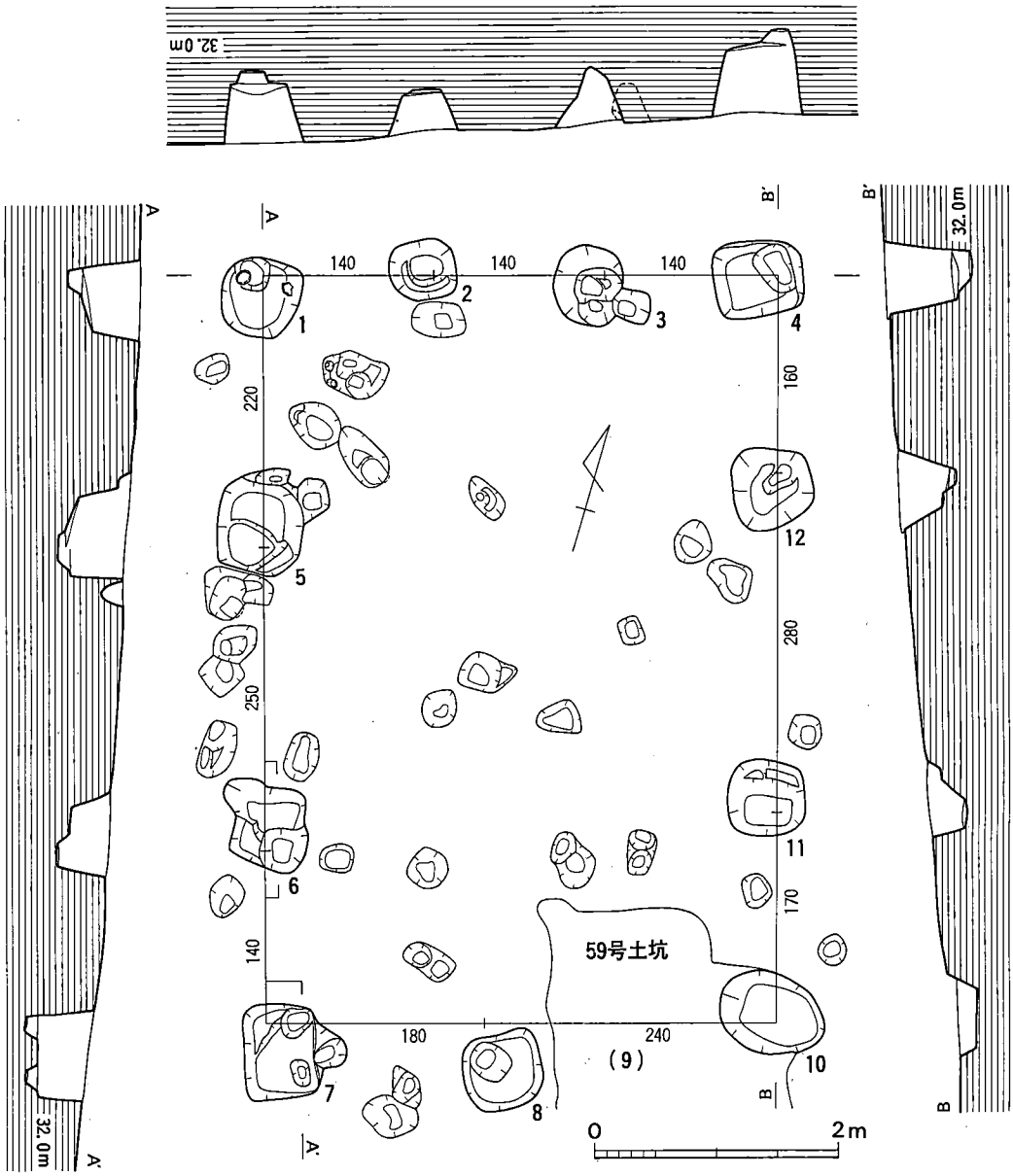
出土遺物（第210図）

須恵器（16）　復原口径16.6㎝の蓋で、胎土には砂粒を含み淡青灰色を呈する。Ｐ８出土。



第201図　中道112号掘立柱建物跡実測図（1/60）

土師器（17～19）　17･18は坏身片で、17は外体部ケズリ調整し、淡褐色を呈する。Ｐ4から出土。18は淡橙色を呈し、胎土に赤褐色粒を含む。Ｐ1出土。19は口縁部が大きく開く鉢で内外体部はナデ調整し、胎土に細砂を含み淡褐色である。Ｐ9 出土。



第202図　中道113号掘立柱建物跡実測図（1/60）

113号掘立柱建物跡［ＳＢ113］（図版86・87、第202図）

調査区中央部の南区域寄りに検出した。59号土坑と切り合い関係にあり、113号建物が後出する。また弥生時代の23号住居跡を切っている。規模は南北３間×東西北側３間、南側２間の南北棟である。柱間寸法は桁行Ｐ1－Ｐ7、Ｐ4－Ｐ10間は区々で、1.4～2.8ｍと差が著しい。ただし中央間が西側2.5ｍ、東側2.8ｍと間隔が広く、９尺前後の両開き扉を復原できるかも。北梁行は1.4ｍ等間であるが、南側Ｐ7－Ｐ10は1.8ｍ、2.4ｍを計測する。Ｐ（9）は59号土坑と切り合っているものの北梁行とは合致しない。掘り形は略円形で径40～80㎝、深さ40～60㎝である。方位はN-16°-W。

出土遺物（第210図）

須恵器（20）　口径14.5㎝、器高2.0㎝で、全体に歪んだ蓋である。天井に平坦な撮みを有する。胎土中に石英を含み淡褐色を呈す。Ｐ8出土。

114号掘立柱建物跡［ＳＢ114］（図版87、第203図）

調査区の中央部で、奈良期の竪穴住居跡が集中する南側に検出した。規模は東西３間×南北３間の南北棟で、北梁行に平行して柱列を検出した。柱間寸法はＰ1－Ｐ4、Ｐ7－Ｐ10間は中央間が1.2ｍと幅狭である他は1.6ｍの等間である。桁行列は互いに1.7～2.3ｍを測るが、東中央間のみ2.3ｍと幅広である。北梁行に平行する柱列Ｐ13～Ｐ18は、母屋から1.1ｍ幅で柱筋を通し、Ｐ17･Ｐ18はさらに東側に１間分張り出している。廂と考えられるがＰ17･Ｐ18のおさまりにやや疑問が残る。掘り形は大きく略円形を呈し径0.6～1ｍである。特に四隅柱掘り形の大きいのが目立つ。廂とした掘り形は母屋のそれに比べて小さく、径40～60㎝、深さ40～80㎝を測る。掘り形断面観察から柱は20㎝程であろう。方位はN-6.5°-W。

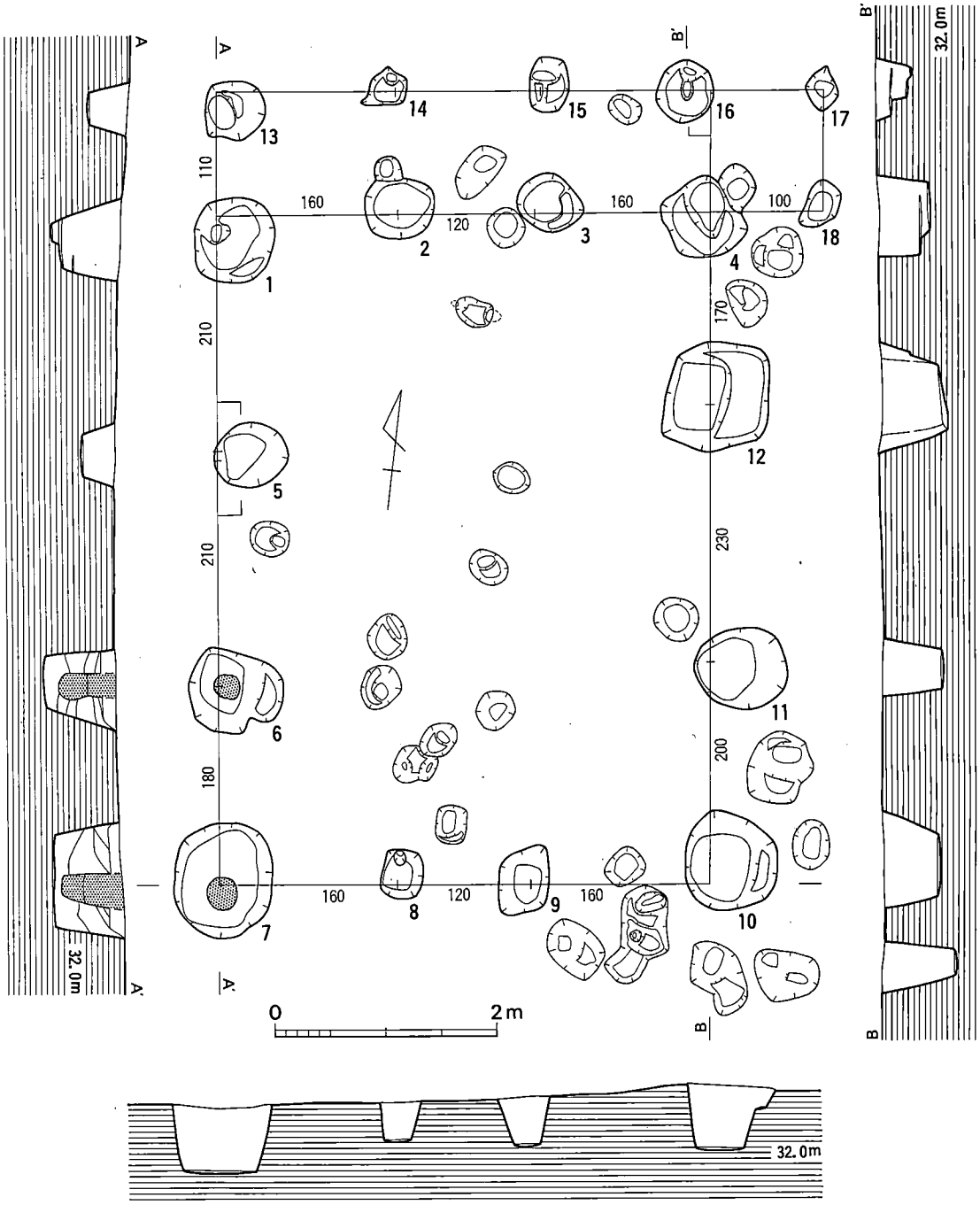
出土遺物（第210図）

土師器（21）復原不可能な鉢である。全体に磨滅が著しく、胎土中には砂粒は少ない。Ｐ13から出土した。

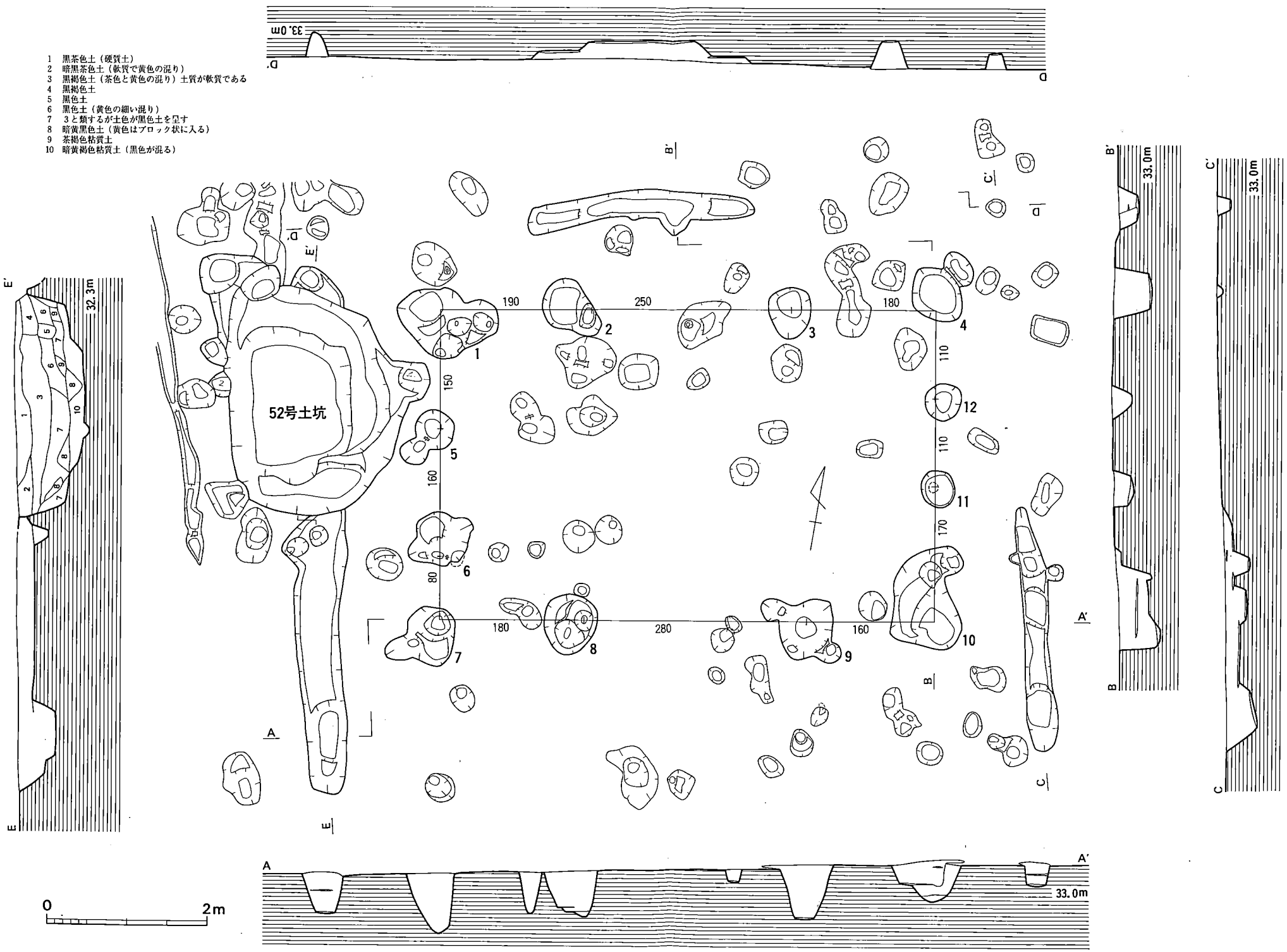
115号掘立柱建物跡［ＳＢ115］（図版88、第204図）

重複する竪穴住居群の北側に検出した建物である。規模は東西３間×南北３間の東西棟である。柱間寸法は桁行Ｐ1－Ｐ4、Ｐ7－Ｐ10の中央間が前者2.5ｍ、後者2.8ｍと幅広である他は1.6～1.9ｍを計測する。梁行列は区々で東列はＰ10－Ｐ11が1.7ｍ、他は1.1ｍである。西側は0.8～1.6ｍと柱間の差が著しい。掘り形は大きく略円形を呈し径60～80㎝、深さ30～70㎝を測るが、特に四隅柱掘り形の大きいのが目立ち、柱抜き穴と考えられる補助穴が見られる。

建物の西･北･東の一部に溝状遺構を検出した。これは各梁行列、桁行列に約1.3ｍ離れ、それに平行して存在するもので、溝幅30～50㎝、深さ20㎝程であるが、溝の先端部は深く50㎝前後



第203図　中道114号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第204図　中道115号掘立柱建物跡、52号土坑実測図（1/60）

を測る。建物の雨落ち溝と考えるには深さに問題があり、また建物全体に巡っていないことも勘案すると、目隠し塀（特に板塀）と考えてはどうであろうか。出土遺物は検出されなかった。方位はN-80°-E。

116号掘立柱建物跡［ＳＢ116］（図版88・89、第205図）

重複する竪穴住居群の北側にあり、115号建物の東側に位置する。規模は東西２間×南北３間の南北棟である。柱間寸法は梁行Ｐ１－Ｐ３、Ｐ６－Ｐ８間を1.9～2.2ｍを測り若干の出入りがある。桁行列は区々であるが、柱間に大きな出入りはなく、西列のＰ５－Ｐ６が1.7ｍである分、Ｐ４－Ｐ５が2.3ｍと広い。他は1.9～2.1ｍである。掘り形は略円形を呈し径50～80㎝、深さ25㎝から深いので68㎝を測る。特に四隅柱掘り形の大きいのと深いのが目立つ。

建物の西･北･東の一部に115号建物と同じ溝状遺構を検出した。各梁行列、桁行列に約1.3～1.5ｍ離れ、それに平行して存在するもので、溝幅30～50㎝、深さ10㎝程であるが、溝の先端部は僅かに深くなっている。やはり目隠し塀（特に板塀）と考えてはどうであろうか。またＰ６－Ｐ８柱列の南側、Ｐ２･Ｐ３の北側、Ｐ５の西側に小穴が検出された。それほど深くなく、母屋柱に接していることから建築時における工事柱と考えてはどうであろうか。出土遺物は検出されなかった。方位はN-21°-W。

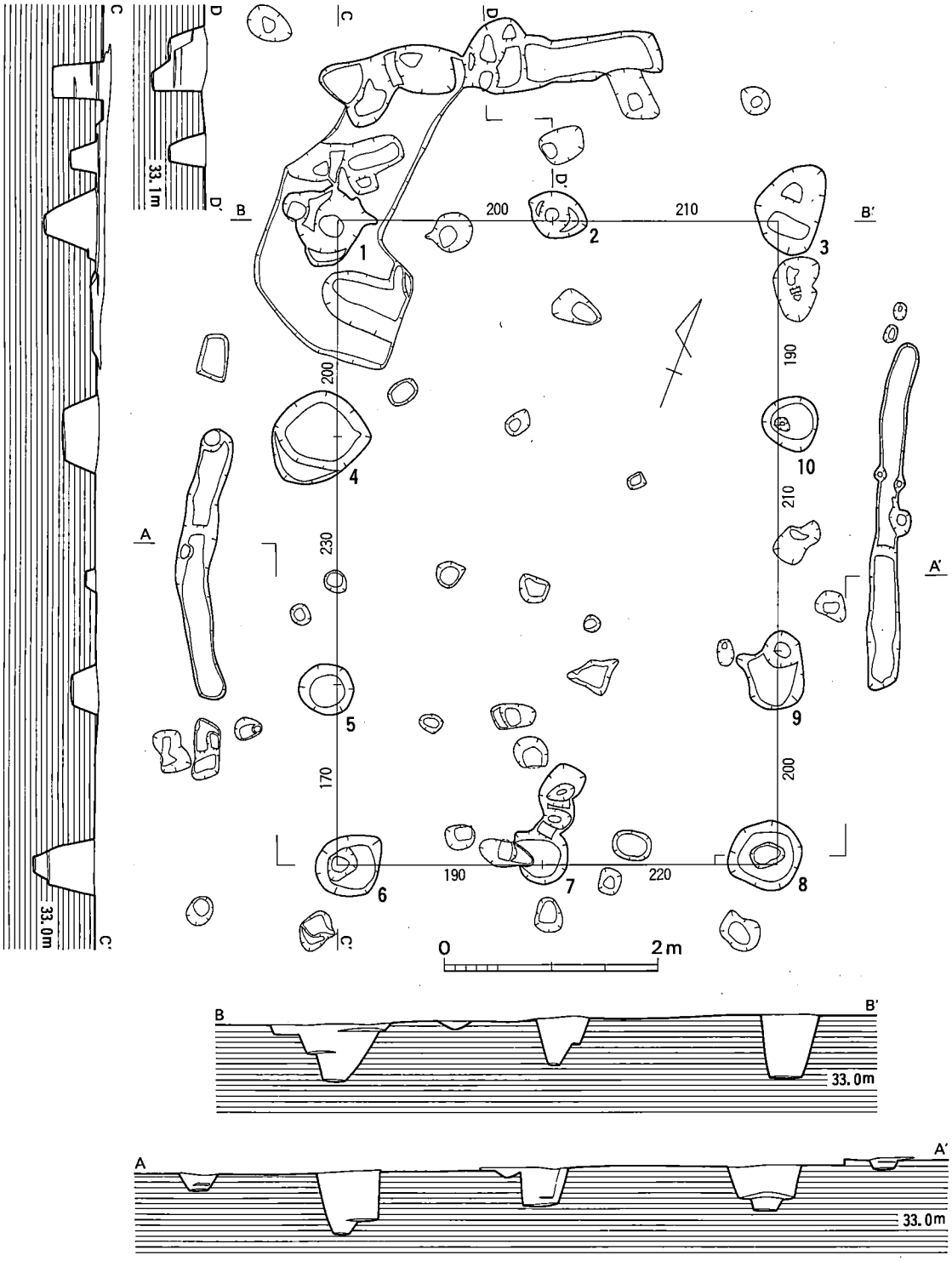
117号掘立柱建物跡［ＳＢ117］（図版89、第206図）

奈良期の竪穴住居跡が集中する北側に検出した。規模は東西３間×南北２間の東西棟である。柱間寸法は東･西梁行Ｐ１－Ｐ６、Ｐ４－Ｐ９間は僅かな出入りはあるものの1.9ｍ等間である。桁行は掘り形断面を観察する中で、柱根が確認されず、従って掘り形中央部付近でその値を求めると、略1.5～1.8ｍ内に治まる。掘り形は円形を呈したものが多く、径40～60㎝で、深さ40～70㎝を測る。方位はN-74°-E。

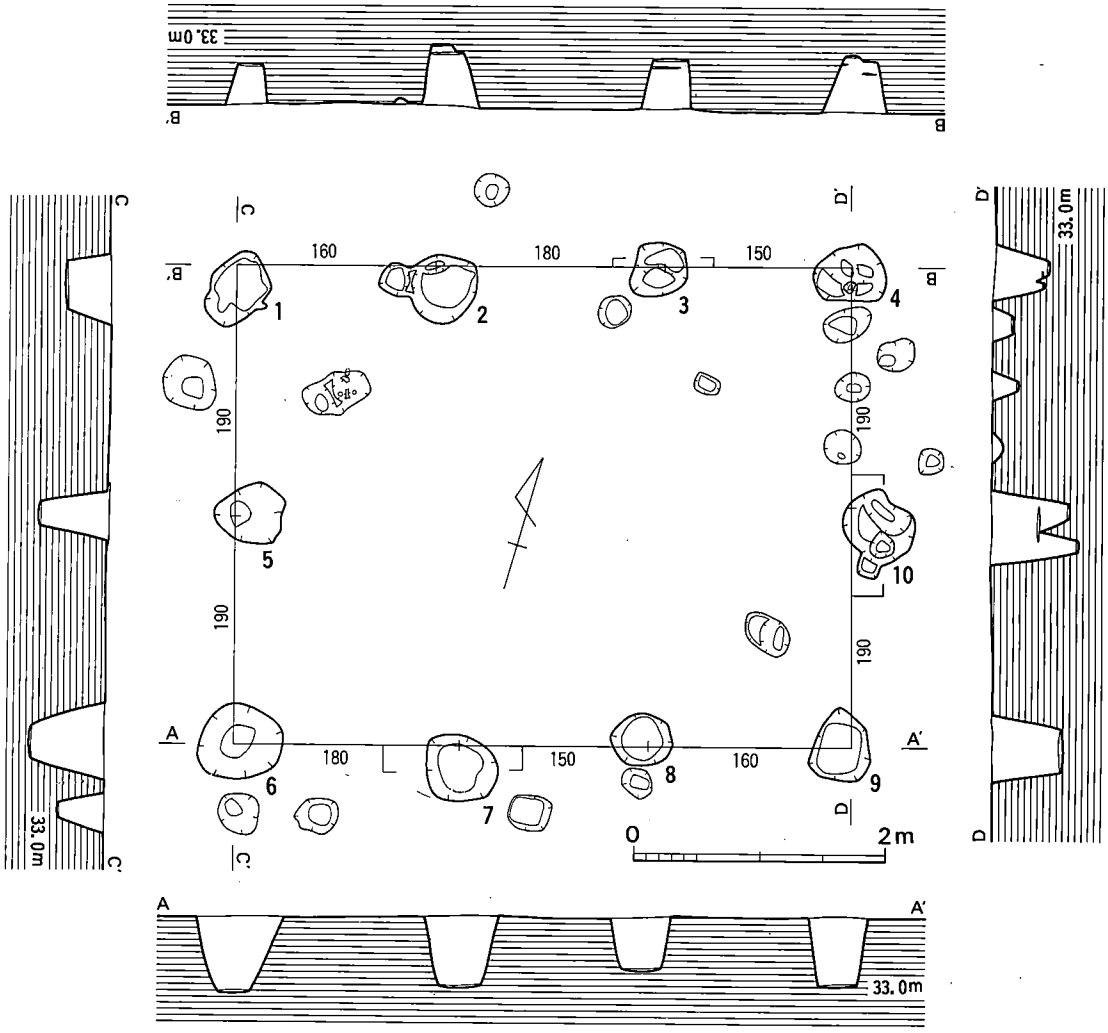
118号掘立柱建物跡［ＳＢ118］（図版89、第207図）

119号掘立柱建物と切り合い関係にあり、118号の方が新しい。規模は東西３間×南北３間の東西棟である。柱間寸法は北桁行列のＰ２－Ｐ３が2.3ｍ、南桁行列Ｐ８－Ｐ９間が2.1ｍと広く、それらの柱に挟まれた中央部に浅い小穴を検出した。柱間間隔から推察して出入り口に関与するものか。また南桁行Ｐ７－Ｐ８が1.8ｍのほかは2.1ｍである。梁行きは東西ともに等間であるが、南側のＰ６－Ｐ７・Ｐ10－Ｐ11間が1.7ｍと幅が広く他は1.3ｍである。掘り形は不整な円形を呈し、径0.4～1ｍで、深さ20～60㎝を測る。この建物も四隅の掘り形は大きく深い。方位はN-74.5°-E。

出土遺物（第210図）



第205図　中道116号掘立柱建物跡実測図（1/60）



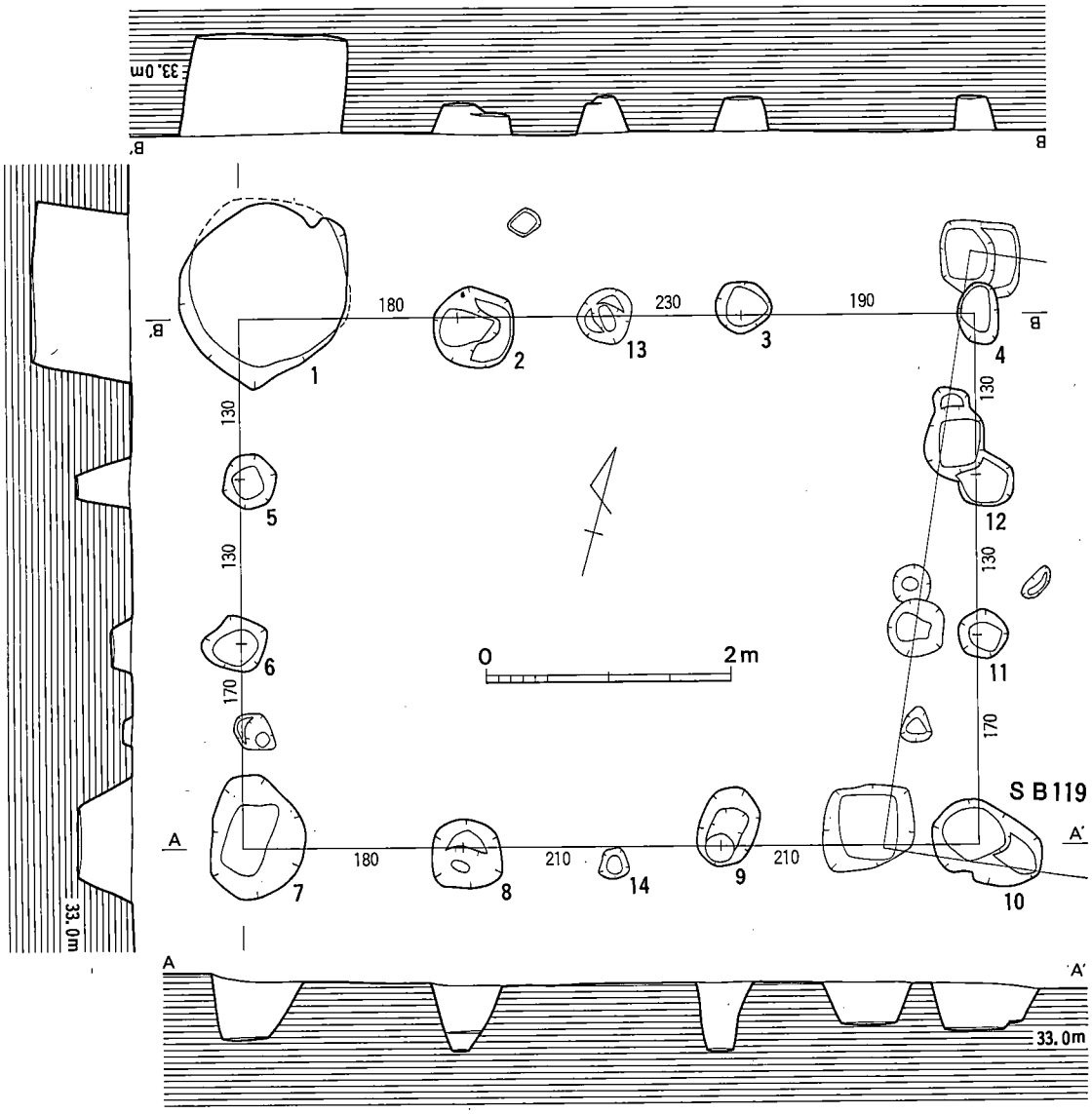
第206図　中道117号掘立柱建物跡実測図（1/60）

須恵器（22）短頸壺の口縁部片で、器肉は薄い。胎土に白色粒を含み暗灰色を呈する。Ｐ8から出土。

土師器（23）器肉から推察して小型の甕片か。外体部は刷毛目、内面ケズリ調整である。暗褐色を呈し焼成は良い。Ｐ8から出土した。

119号掘立柱建物跡［ＳＢ119］（図版89、第208図）

118号掘立柱建物より後出する。規模は東西３間（5.0m）×南北３間（4.9m）のほぼ方形棟



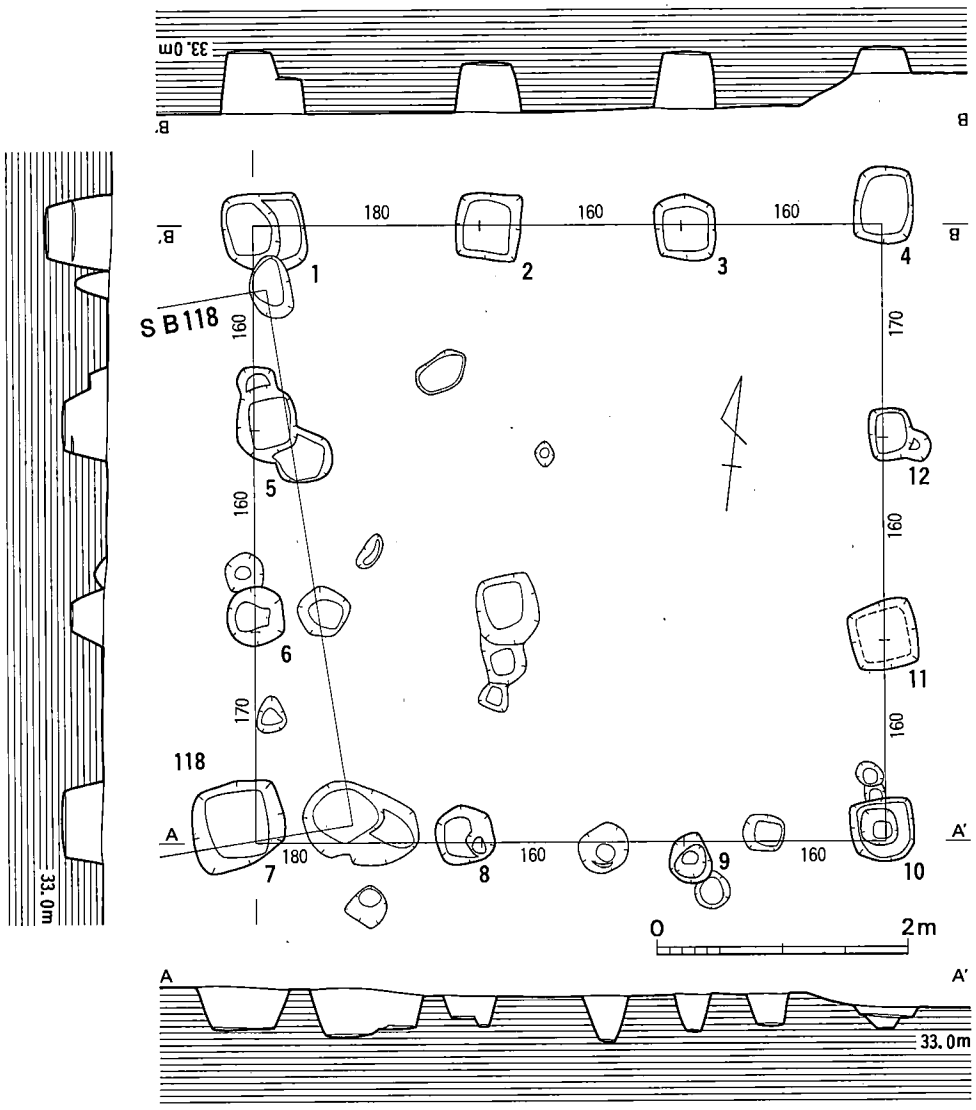
第207図　中道118号掘立柱建物跡実測図（1/60）

であるが、数値は僅かに東西が長い。柱間寸法は東西Ｐ1－Ｐ2、Ｐ7－Ｐ8が1.8ｍと幅広く、他は1.6ｍである。また南北Ｐ6－Ｐ7、Ｐ4－Ｐ12間が1.7ｍである他は1.6ｍ等間である。掘り形は四隅柱が他の柱より一回り大きく、意識して掘られたことが判る。隅丸方形をした掘り形が半数で、略円形は径40～50cmである。深さは50cm前後である。方位はN-7°-W。

出土遺物（第210図）

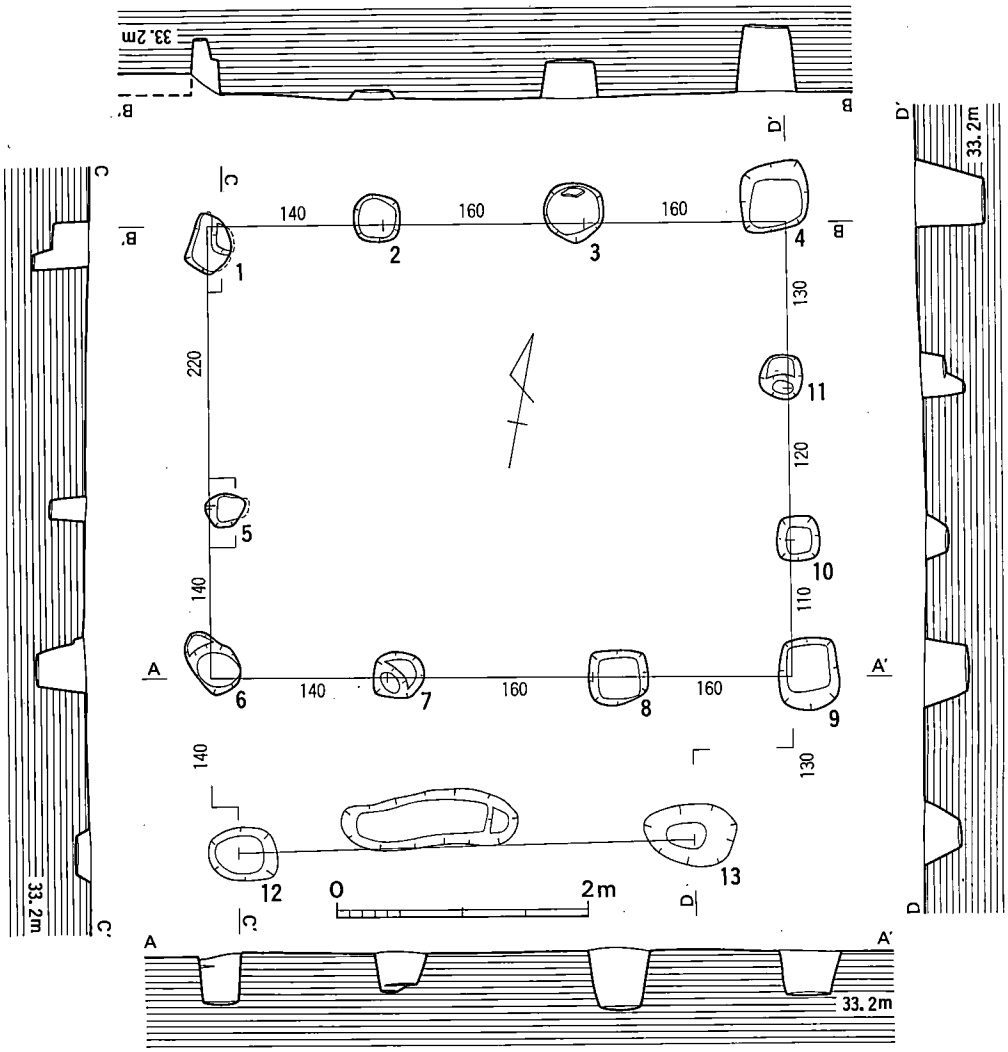
土師器（24･25）　共に坏身で、24は淡橙色を呈し胎土に砂粒を若干含む。Ｐ3から出土。25は復原口径16.2cmで、口縁端部を内側に摘んでいる。体部中位から底部はケズリ調整で、胎土は精製され黄橙色を呈する。Ｐ8出土。

120号掘立柱建物跡［ＳＢ120］（図版90、第209図）



第208図　中道119号掘立柱建物跡実測図（1/60）

119号掘立柱建物の北側に位置する。規模は東西３間×南北東梁行３間、西梁行２間の東西棟である。柱間寸法は桁行Ｐ１－Ｐ２、Ｐ６－Ｐ７が1.4ｍと幅狭く、他は1.6ｍの等間である。また梁行は区々で東列は1.1～1.3ｍを測り、西列はＰ５－Ｐ６が1.4ｍ、Ｐ１－Ｐ５間が2.2ｍで他の柱間間隔の２倍である。この間の掘り形は調査中に何度も精査したが柱掘り形は確認されなかった。このことから出入り口の可能性を考えた。また、桁行Ｐ６－Ｐ９柱列と平行にＰ12からＰ13を検出したが柱筋は通らないため目隠塀の可能性が考えられる。掘り形は略円形で径40cm前後、深さは30～50cmを測る。ただしＰ４・Ｐ９の掘り形は隅丸方形を呈し、他に比べやや深い。方位はN-80°-E。



第209図　中道120号掘立柱建物跡実測図（1/60）

121号掘立柱建物跡［ＳＢ121］（図版90、第211図）

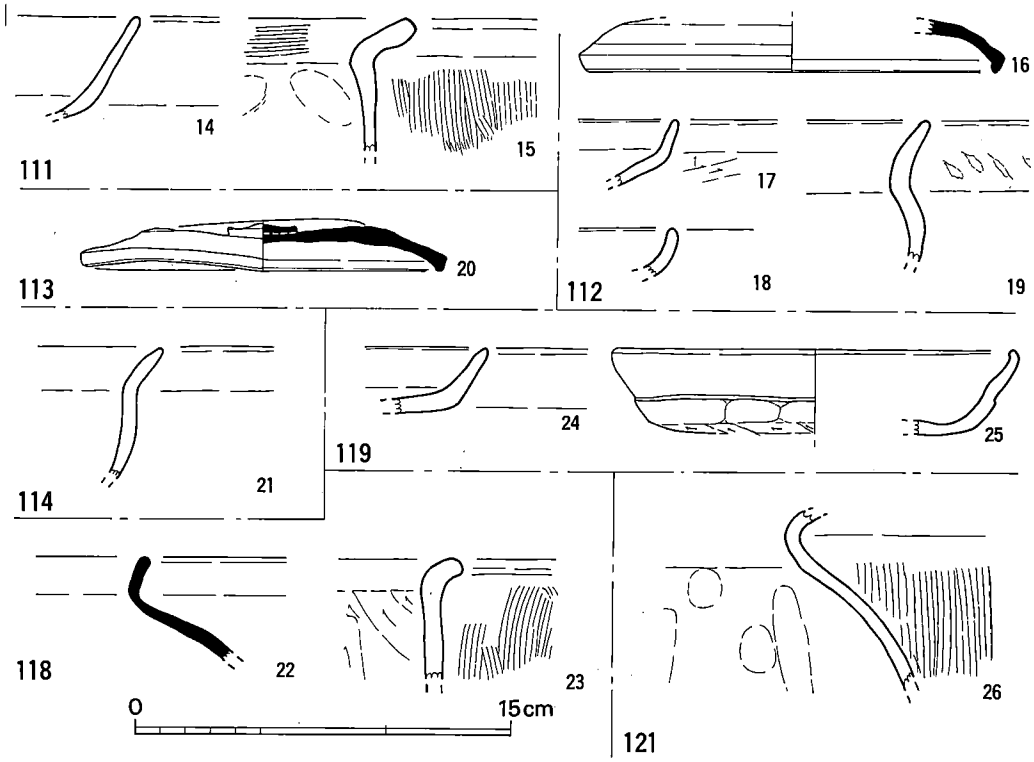
調査区の東端域に検出した。規模は東西３間×南北４間の比較的大きい南北棟である。柱間寸法は桁行、梁行共に不揃いでＰ6･Ｐ13の中央柱を中心に南側は1.9～2.5ｍとかなりの差を見る。また梁行は北側においてはＰ3－Ｐ4間が1.6ｍ、他は1.5ｍと出入りの少ない数値であるが、南側はＰ10－Ｐ11のみ1.3ｍと幅が狭い。他は1.6ｍ、1.7ｍを測る。掘り形は略円形で径40～90㎝、深さは30～70㎝を測る。特にＰ1・Ｐ4・Ｐ11の掘り形は隅丸方形を呈し、他に比べひと回り大きく深い。方位はN-6°-W。

出土遺物（第210図）

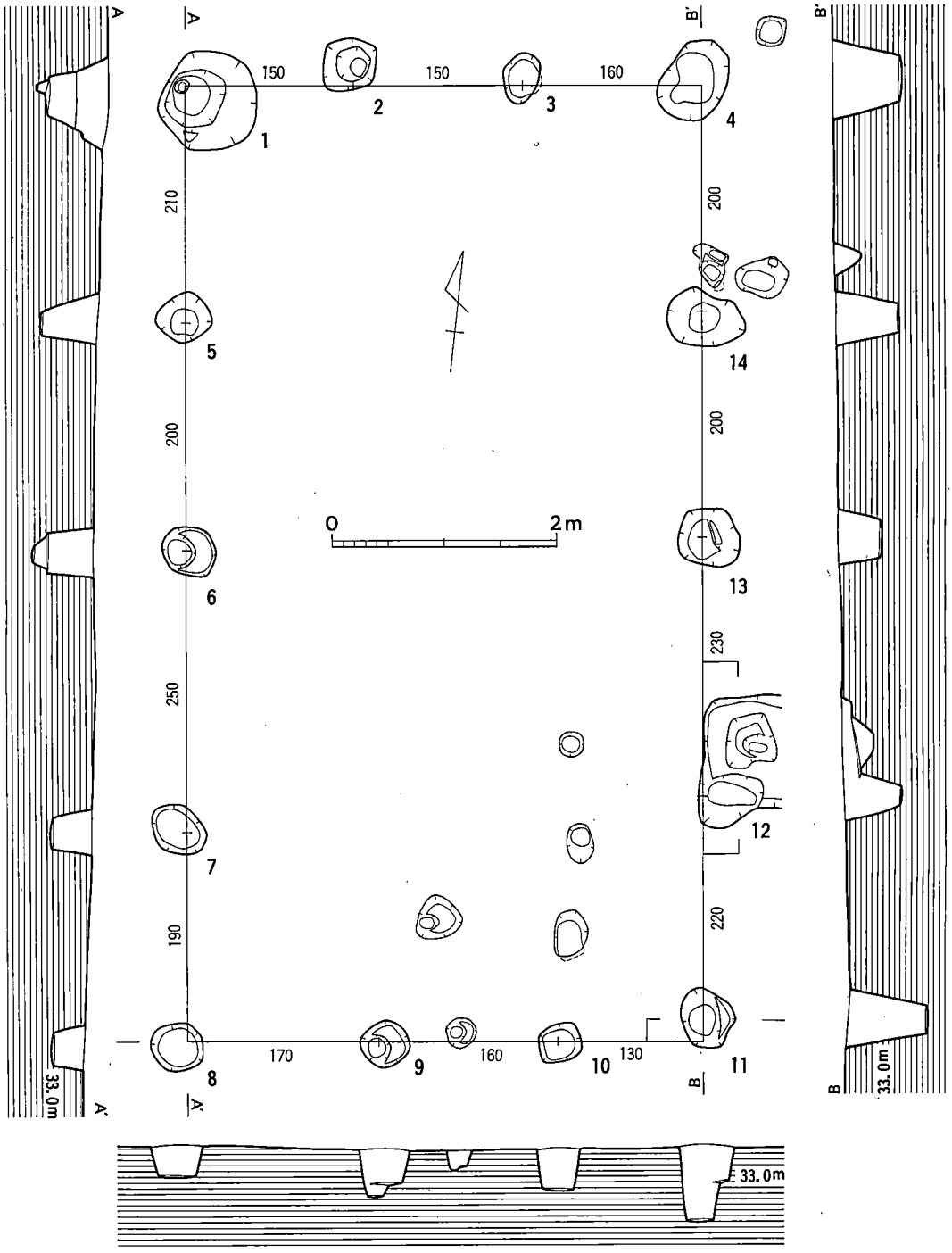
土師器（26）　甕の口縁部片で、褐色を呈し胎土に砂粒を若干含む。外体部は粗い刷毛目、内部はナデ調整である。Ｐ11から出土。

122号掘立柱建物跡［ＳＢ122］（図版90、第212図）

発掘調査区東端域に検出した。規模は東西３間×南北２間の東西棟である。柱間寸法は梁行は共に1.5ｍ、1.6ｍであり、上部構造の柱合わせでは柱間５尺となろう。桁行は北列･南列とも



第210図　中道111～114・118・119・121号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）

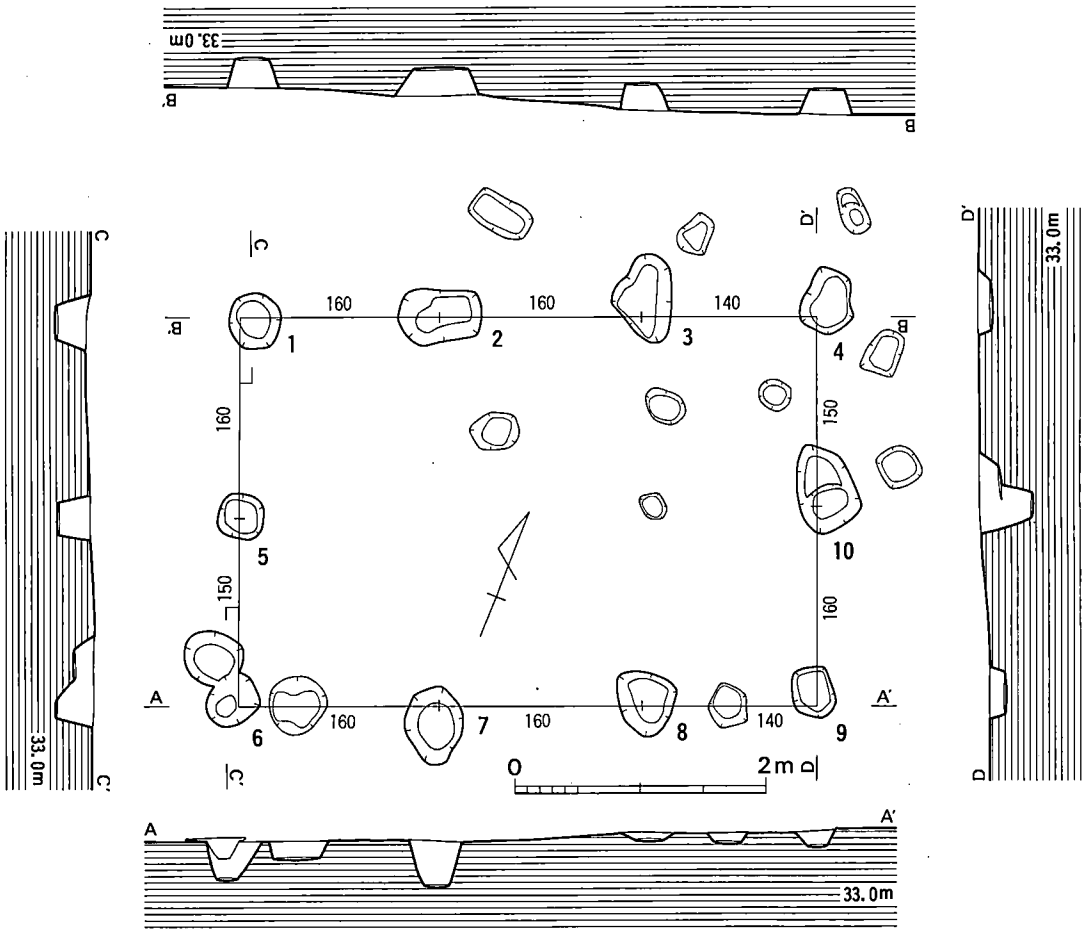


第211図　中道121号掘立柱建物跡実測図（1/60）

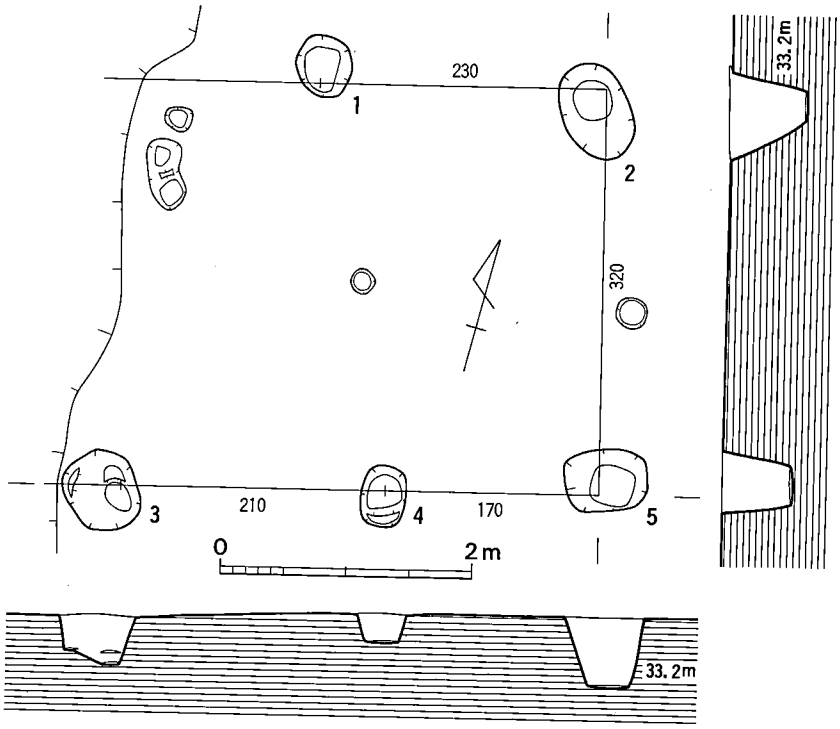
にＰ３～Ｐ４、Ｐ８～Ｐ９間が1.4ｍと狭い他は1.6ｍ等間である。掘り形は不整円形で径20～60㎝、深さは15～50㎝を測る。ただし、東梁行の中央柱は棟持柱の関係か、他の掘り形より深い。方位はN-69°-E。

123号掘立柱建物跡［ＳＢ123］（図版80、第213図）

調査区東端域に検出した。建物の西半分は削平されて定かでない。規模は東西２間以上×南北１間の東西棟である。梁行柱間は3.2ｍを測る。桁行Ｐ１－Ｐ２は2.3ｍ、Ｐ３－Ｐ４間2.1ｍ、Ｐ４－Ｐ５間が1.7ｍとそれぞれに区々である。掘り形は不整円形で径40～60㎝、深さは20～50㎝を測る。やはり隅柱は他の掘り形より深い。方位はN-76°-E。



第212図　中道122号掘立柱建物跡実測図（1/60）



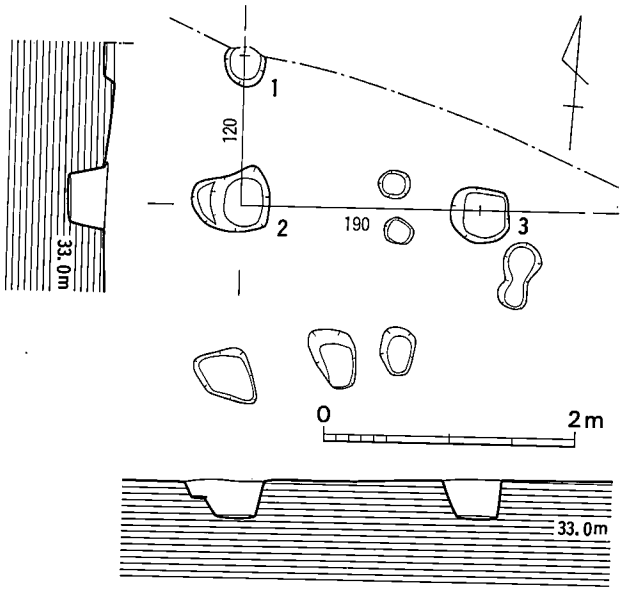
第213図　中道123号掘立柱建物跡実測図（1/60）

124号掘立柱建物跡

［ＳＢ124］

（図版80、第214図）

調査区東端隅に検出した。そのほとんどが調査区域外にあり、検出した柱穴は３個で、建物が東西･南北棟であるか否かは定かでない。柱間寸法はＰ１－Ｐ２は1.2ｍ、Ｐ２－Ｐ３間1.9ｍを計測する。掘り形は略円形で径30～50㎝、深さは10～40㎝である。



第214図　中道124号掘立柱建物跡実測図（1/60）

3．土坑

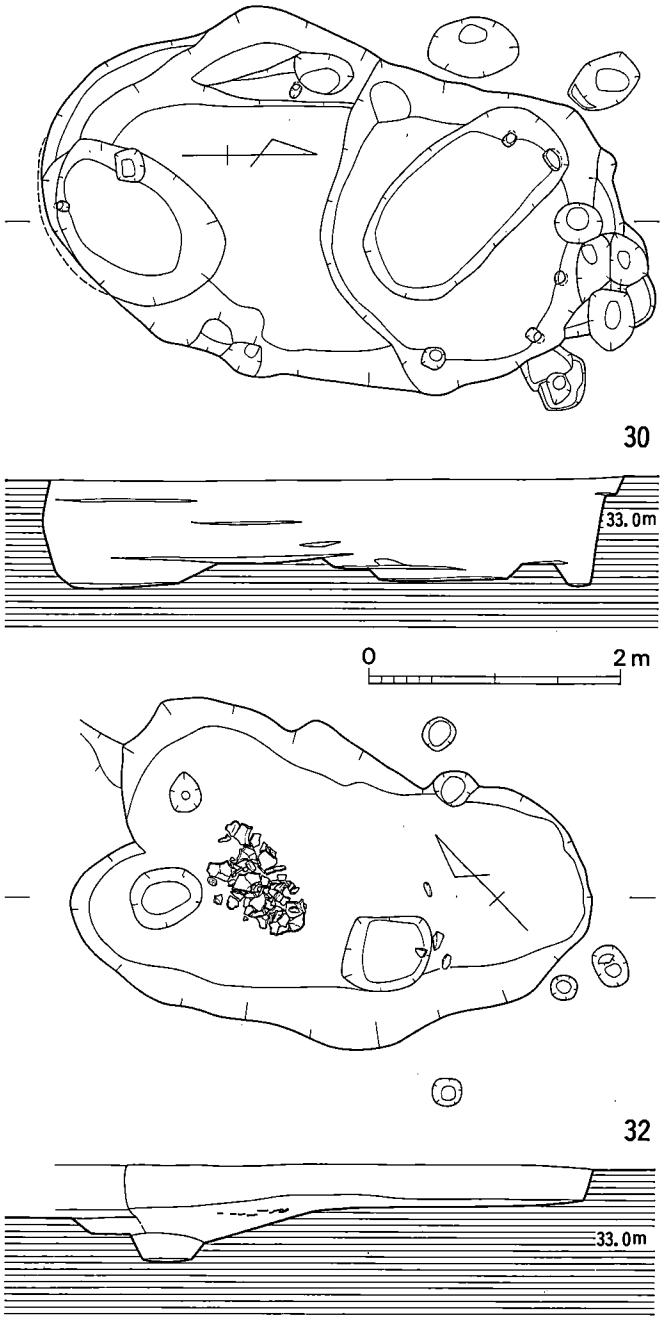
調査区の全域にわたって検出した。調査過程の中では弥生時代、奈良時代の土坑を通しで番号を付した。整理段階になり時代別に新番号を付して分類すべきであったが、ラベル及び遺物が混乱する恐れがあるため、調査過程の番号をそのまま掲載することとした。したがって奈良時代と考えられる土坑は30・32・35・43・44・49～52・58・59・70・71・75・76・77号の16基である。

奈良時代の土坑は竪穴住居群の西側域を中心に検出し、特に30・32・51・52・75号は他の土坑と異なり、規模が大きく出土遺物も比較的多かった。土坑寸法はなるべく中央部で測ることとし、方位は長軸を基準に計測した。

30号土坑（図版91、第215図）

調査区の中央部に検出した。規模は長径4.9m×短径2.6mで南北に長い楕円形を呈する。土坑は数回にわたって掘られており、少なくとも4回の掘削が判る。大きく掘られた土坑の中に径2.0m、1.5m等の穴が掘られている。埋土の大半は黒色土で充填されており、最も深いところで86cmを測る。床面は平坦であるが、最も大きく掘られた床面が、中央部で他より約20cm高い床となっている。方位はN-12°-Eとしてよいだろう。出土遺物は須恵器・土師器が多く、上層には焼塩土器片、鉄滓5個のほか弥生土器もあった。

Photo. 13　30号土坑周辺



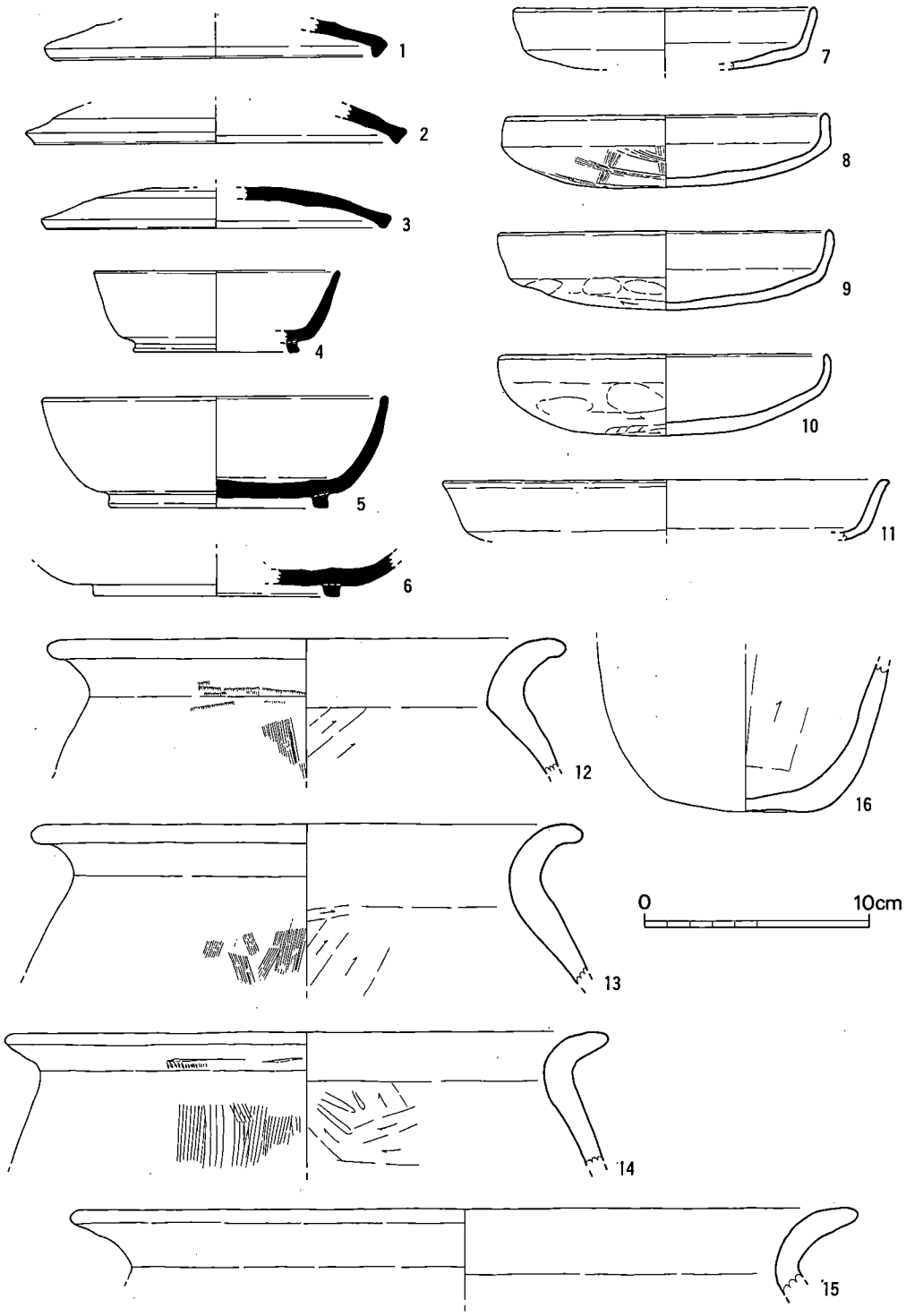
第215図　中道30・32号土坑実測図（1/60）

出土遺物

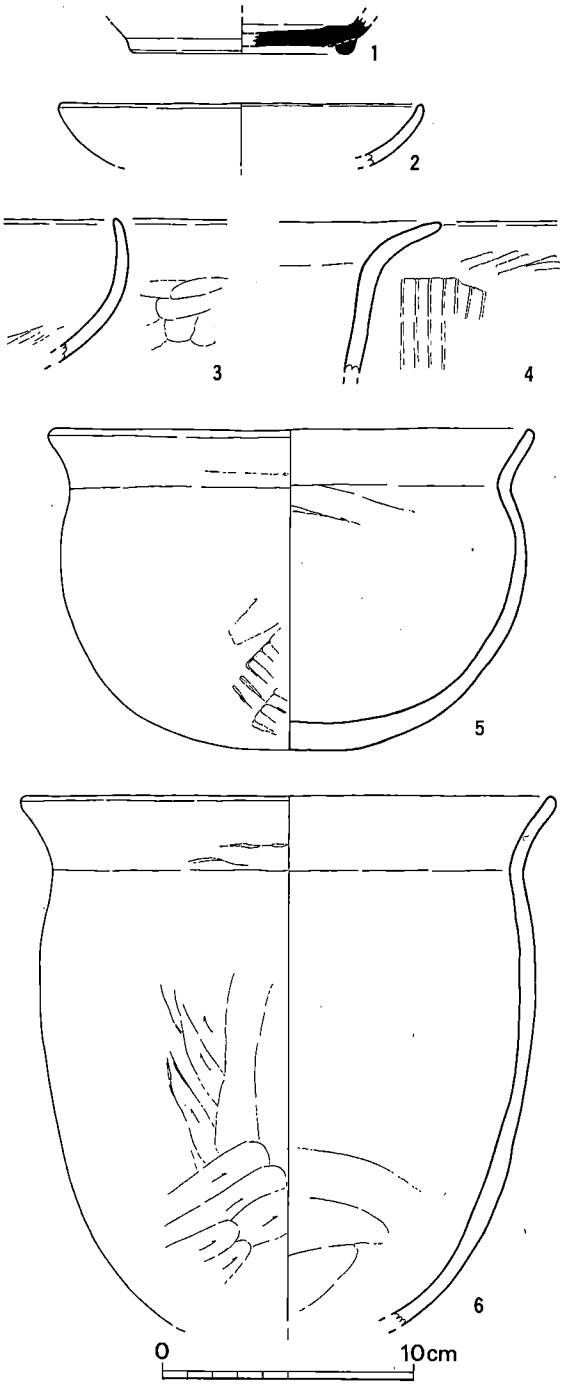
（図版97・100、第216・237図）

須恵器（1～6）1～3は蓋の破片で、順に口径17cm、15.3cm、15.6cmを測る。共に胎土は精製され灰色で、天井部はケズリ及びナデ調整、内面はナデである。2は端部が断面三角形をなす。4～6は高台付の坏身で、4は口径11.0cm、器高3.6cmで胎土は精良。5は復原口径15.5cmで、胎土中に砂粒を多く含む。6は大きな底径から見て椀になる可能性がある。胎土は精良。

土師器（7～16）7～10は坏身片で、その特徴は体部中位を屈曲し底部を丸底に作る。底部はケズリ、内面はナデ調整で、器肉は薄く胎土は精良である。8～10の底部に刷毛状工具によるナデが観察できる。口径は13.6～15.0cm、器高3.2～3.5cmを測る。11は復原口径20cmの皿で、胎土は砂粒が少なく精良である。12～16は甕の口縁部片及び底部である。共通する特徴は口縁部の器肉が厚く、強く外反し、外体部は刷毛目、内体部の頸部下位は粗いケズリ調整



第216図　中道30号土坑出土土器実測図（1/3）



第217図　中道32号土坑出土土器実測図１（1/3）

である。胎土中に砂粒が多い。口径は23.2～35.2cmを測る。16は小型甕の底部で二次火熱を受けている。外体部は黒茶色で、底部が擦り減っていることから支脚に転用されたのかもしれない。

32号土坑（図版91、第215図）

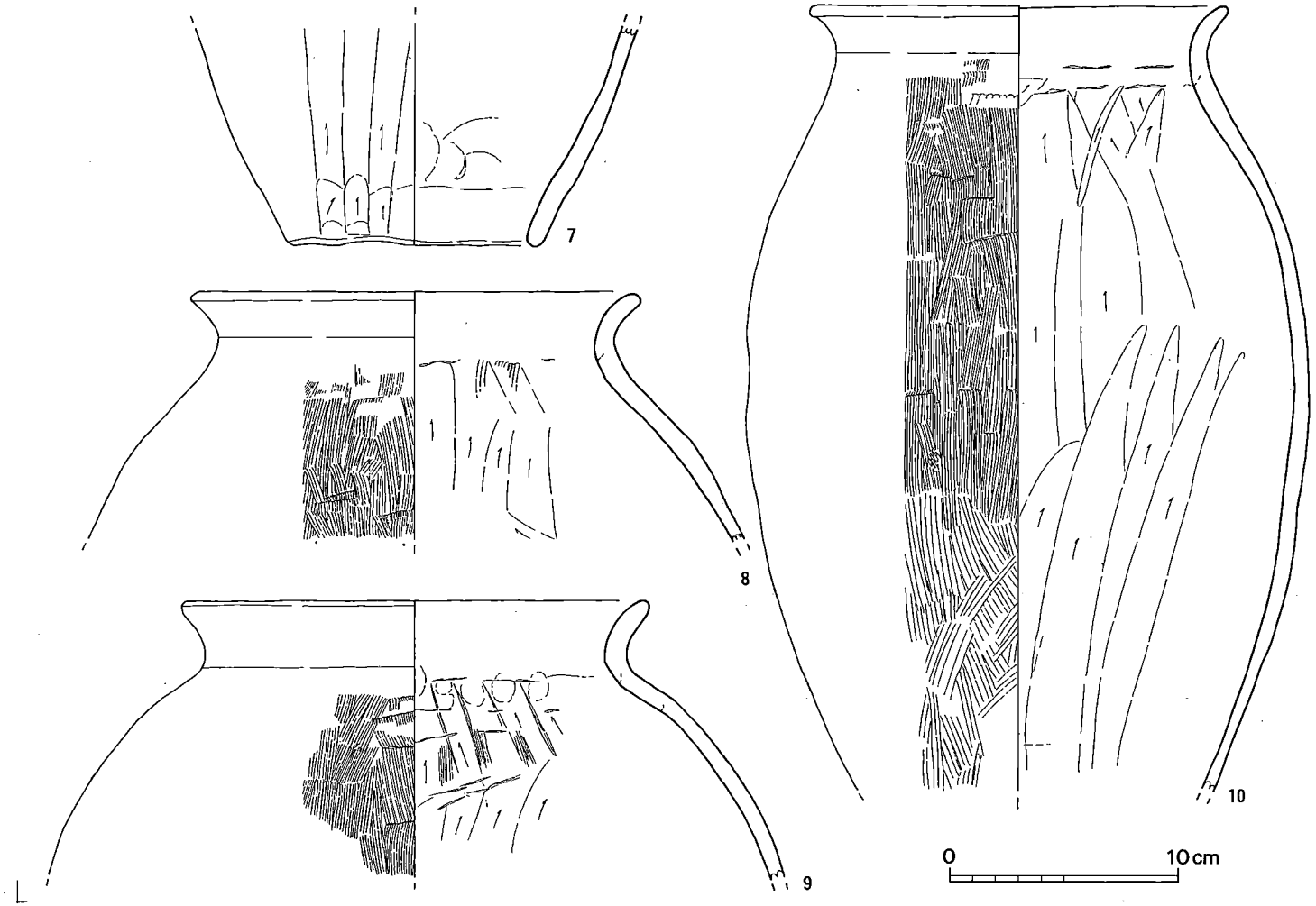
調査区の中央部にあり、30号土坑の北側に位置する。規模は長径4.1ｍ×短径2.5ｍで、略楕円形をしており、長軸はやや西に偏している。北側は後世の溝状により撹乱されている。埋土の大半は黒色土で充填されており、深さ36.0cm、最深部で80cmを測る。床面は平坦であるが、北西側にかけて緩やかに深くなる。床面に小穴３個を検出し、深くなる所で多くの土師器が出土した。方位はおよそN-46°-W。砥石、台石も出土している。

出土遺物

（図版98・102、第217・218・234図）

須恵器（1）坏身の高台片である。底径8.8cmで胎土は精良。

土師器（6～10）2は坏身片で、復原口径14.6cmを測り淡橙色を呈する。全体に磨滅が著しい。3は椀片で口縁部が歪んでいる。器肉は薄く胎土は精良である。外体部はケズリ、内面は丁寧にナデ調整である。5は鉢で口径19.4cm、器高12.8cmである。口縁部を外方に開



第218図　中道32号土坑出土土器実測図２（1/3）

き底部は丸く作っている。全体に淡橙色で磨滅しており、外体部は二次火熱を受けている。底部に工具痕が残る。7は甑の底部片である。底径11.4cmを測り、外体部は縦方向のケズリ、内面はナデ調整である。淡橙色で二次火熱を受けている。4·6·8～10は甕である。4は口縁を大きく外反するもので外体部は粗い刷毛目である。胎土中に細砂·雲母を含み茶白色を呈する。6は口径21.4cmに復原、胎土調整は10に類似。8·9は大甕で胴体部が大きく張り出し、外体部は刷毛目、内面は底部から頸部までケズリカキ上げ調整である。内面頸部に指頭痕が見られる。焼成は良好。8から復原口径20.0cm、20.7cmを測る。10は底部を欠く。残存高34.9cm、口径18.4cmを測り、体部上位は細かい刷毛目、下位は粗い刷毛目調整である。内面は底部から頸部にかけてケズリカキ上げで、大粒の砂粒が含まれている。淡橙色を呈し焼成は硬質である。

石製品（第234図-9）　凝灰岩製の仕上げ砥石である。使用面は上面と側面で滑らかに砥面され、上面には鋭い溝が11本刻まれており、鋭い刃物を磨いたのであろう。残存長7.97cm、幅4.47cm、厚さ2.2cmを測る。

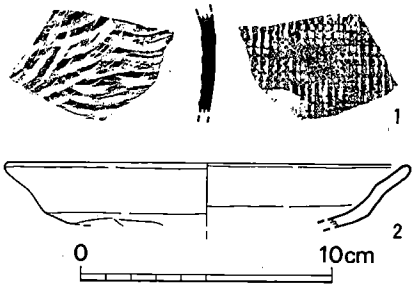
35号土坑（図版91、第197図）

調査区の中央部に検出した。107号掘立柱建物と切り合い関係にあり、建物を切っている。規模は長径1.64m×短径0.74mを測り、二段に掘られている。この二段の下段は掘立柱建物柱穴P（9）の痕跡と考えられるが、土坑の土層観察ではP（9）の掘り形を見ることができなかったため土坑が新しいと判断した。上段の深さ42cm、下段は70cmを測る。垂直に掘られ、床面は平坦である。遺物の出土は少ない。

出土遺物（第219図）

須恵器（1）　甕の破片で、胎土は精良である。暗灰色を呈する。

土師器（2）　坏身片で、復原口径16.3cmを測り橙褐色を呈する。胎土に砂粒を含み全体に磨滅が著しい。



第219図
中道35号土坑出土土器実測図（1/3）

43号土坑（図版92、第221図）

調査区中央部南寄りに検出した。44号土坑と並列して検出されたが、土層断面観察から44号土坑を43号が切っていることが判った。規模は長径1.7m×短径1.4mでほぼ方形のプランを呈する。北壁に小穴2個、床面に径30cm、深さ25cmの穴を1個検出した。床面は平坦で、深さ43cmを測る。遺物は少量があるが図示できない。押型文土器片もある。

44号土坑（図版92、第221図）

43号土坑に切られている。土坑は二段に掘り込まれており、規模は長径約1.4m×短径1.3mで略楕円形のプランを呈する。床面は平坦で径20cmと50cmの小穴２個が検出された。上段の掘込みは東側と西側は浅いものである。壁は垂直に掘削され、深さ70cmを測る。遺物は少量があるが図示できない。押型文土器片もある。

出土遺物（図版102、第234図）

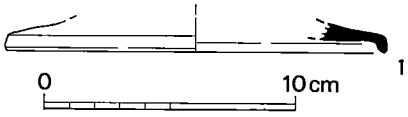
石製品（15･16）　15は絹雲母片岩の扁平な石である。黄灰色を呈し、体部等の調整は見られない。ただ片面に径0.8cm程の抉りが認められる。残存長5.98cm、幅3.64cm、厚さ0.4cmを測る。16は片岩で、側面のみ使用され擦り減っている。残存長6.5cm、幅4.0cm、厚さ1.2cmを測る。

49号土坑（図版93、第221図）

調査区の中央南端に検出し、50号土坑と接して検出した。掘り形は円形を呈し、径約1.4m、深さ70cmを測る。掘り形は垂直で、床面は平坦である。床面東隅に径30cmの小穴を検出した。出土遺物は須恵器の蓋１点である。埋土は黒色土が充填していた。方位は50号土坑の方を軸としてN-26°-E°。押型文土器片も出土している。

出土遺物（第220図）

須恵器（1）　蓋の破片で、復原口径15.0cmを測り、胎土は精良である。暗灰色を呈する。



第220図　中道49号土坑出土土器実測図（1/3）

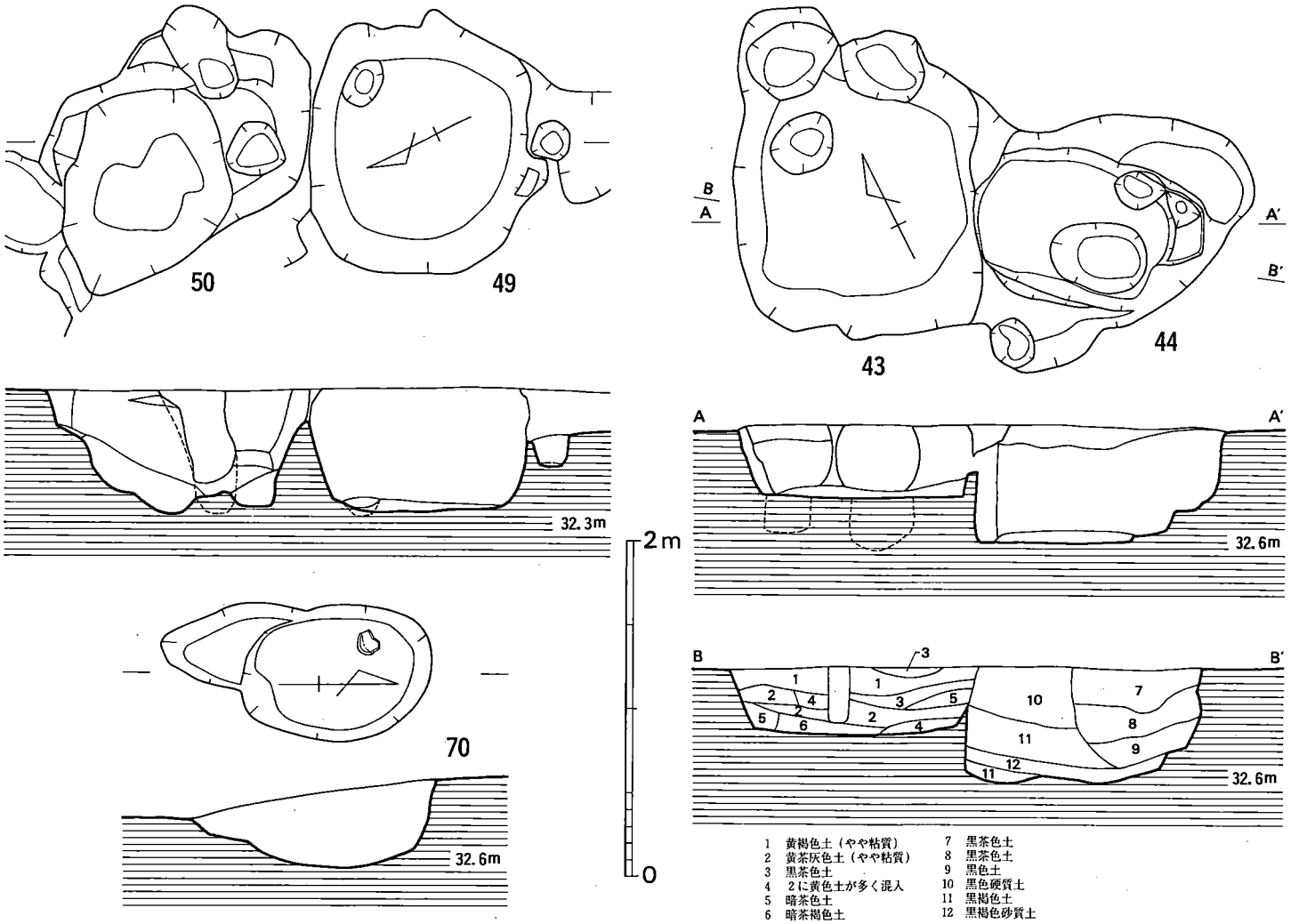
50号土坑（図版93、第221図）

調査区の中央南端に検出し、49号土坑と接しているが切り合い関係はない。掘り形は不整形を呈しており、全体的には楕円形に近似する。規模は長径約1.8m×短径1.1m、深さ72cmを測る。掘り形は土坑中心部に向かって掘られ、南傾斜部に径20cm～30cmの小穴２個が検出された。埋土は黒色土が充填していた。出土遺物は須恵器、土師器1点ずつがあるが図示しえない。

51号土坑（図版93、第222図）

調査区の中央部に検出した。土坑の内容からは30号、52号土坑と類似する。掘り形は不整な楕円形を呈しており、規模は長径約4.04m×短径2.6m、深さ82cmを測る。今回検出の土坑の中では大きい方であり、掘り形は傾斜が大きく、床面は舟底形を呈する。土坑上端周囲に径30cm～40cmの小穴（Ｐ1～Ｐ5）を検出した。この小穴間は1.2m～1.4mあり、この土坑を囲むかのように巡っているが、北･東側では検出されていない。

埋土は大きく６層に分かれ、上層は暗茶灰色土で、遺物が多く含まれ、下層になるにつれ黒



第221図　中道43・44・49・50・70号土坑実測図（1/40）

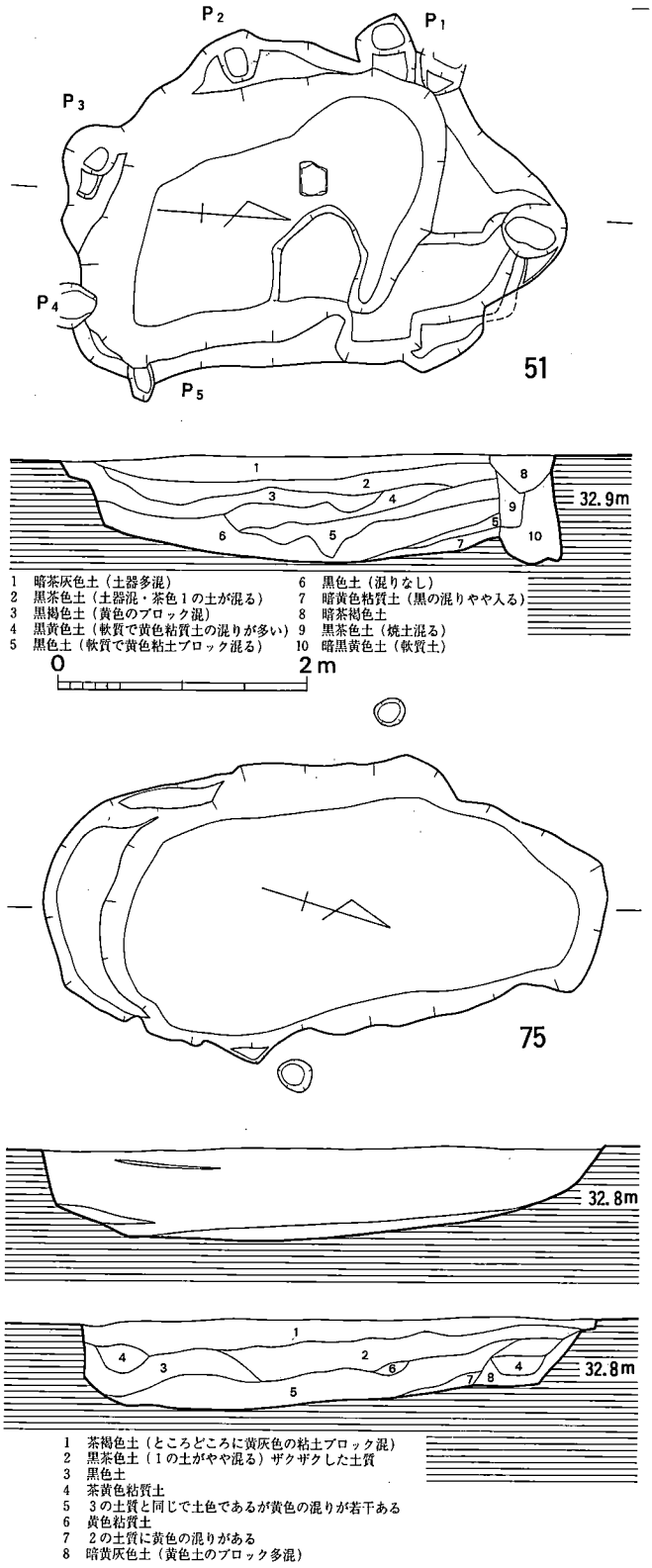
色土となる。焼土及び黄灰色粘質土等が混在していた。北壁寄りの小穴は新しい。遺物は暗茶灰色土、黒茶色土から出土した。方位はおよそN-5°-W。押型文土器片もあった。

出土遺物

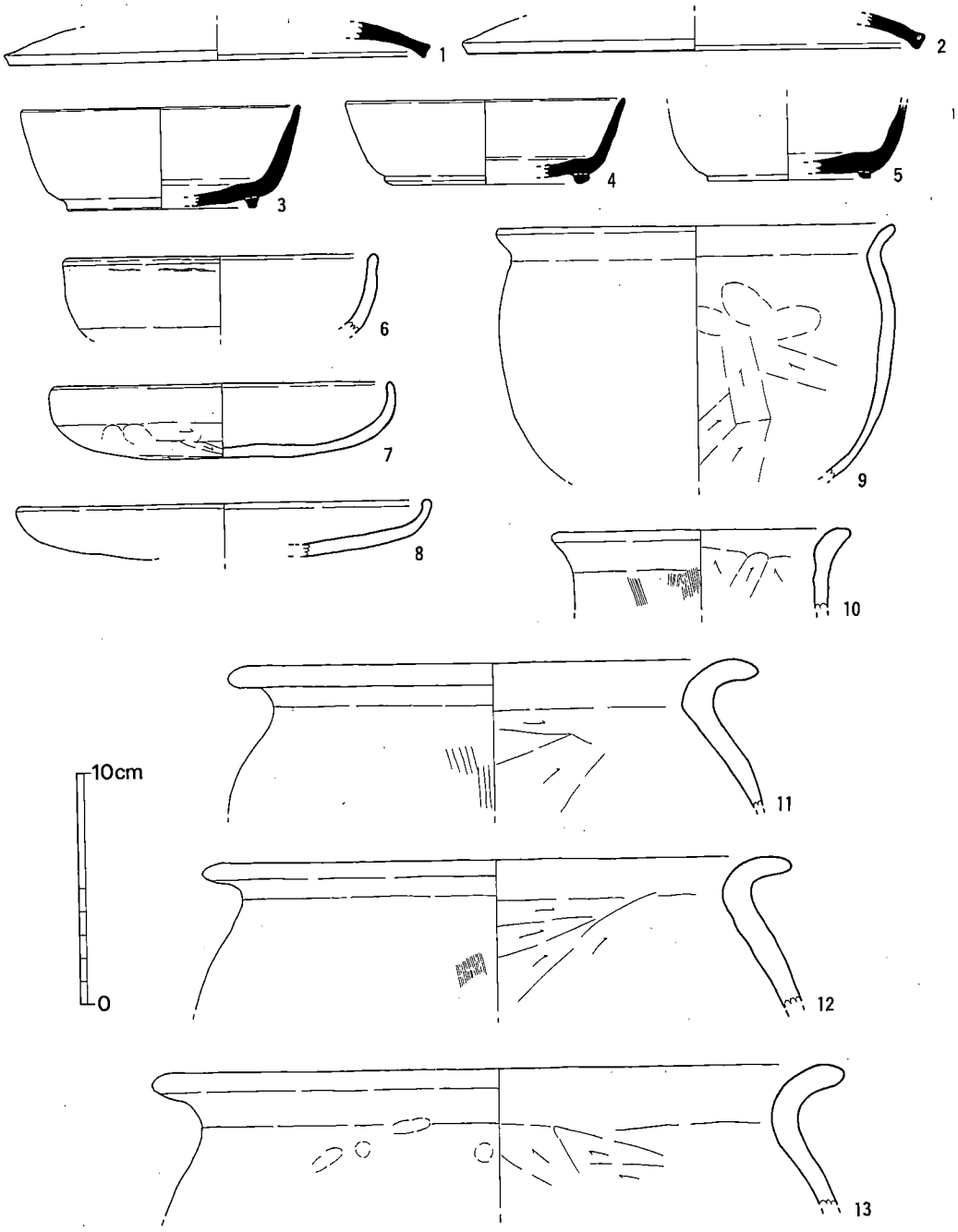
（図版98、第223図）

須恵器（1～5）1・2は蓋の破片で、復原口径を順に17.8cm、19.3cmを測り、胎土は砂粒を含み共に精良である。どちらも灰色を呈する。3～5は高台付坏身で、復原口径は3・4共に12.1cmを測る。5は欠損していて明らかでない。各特徴は砂粒を若干含み胎土は精良である。全体に灰色で高台は低い。

土師器（6～13）6・7は坏身で、6は口径13.5cmに復原され、胎土は精良である。7は皿に近い器形をなす。口径14.9cm、器高3.2cmである。胎土中に砂粒は少なく、橙褐色を呈し、外底部は丁寧なケズリ調整である。8は皿で復原口径18.0cmを測り、大粒の砂粒を含む。9～13は甕である。なかでも9は小型の甕で器肉が薄く



第222図　中道51・75号土坑実測図（1/60）



第223図　中道51号土坑出土土器実測図（1/3）

口縁はゆるく外反する。口径の広さに比べ器高が浅く、壺の器形に近い。胎土に砂粒は少なく全体に磨滅し、内面はケズリ調整である。復原口径17.0cmである。10は小型の甕で口径13.0cmを測り、二次火熱を受けている。11～13は通常の大甕破片である。口径は22.8～30cmあり、橙褐色を呈し胎土は精良である。12は二次火熱を受けている。

52号土坑（図版93、第204図）

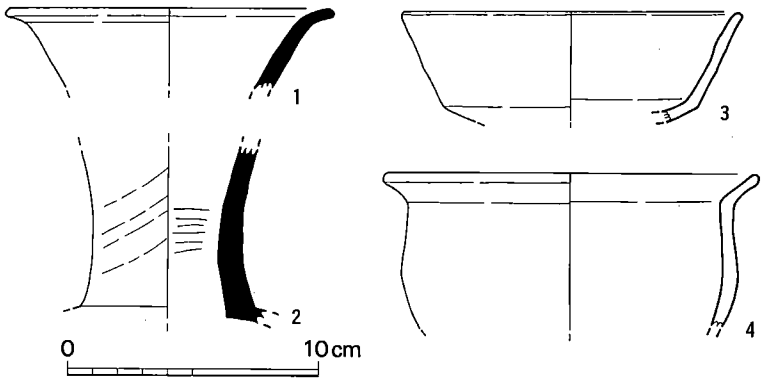
調査区の中央にあって、51号土坑の東側に検出した。規模は長径3.1m×短径2.24m、深さ86cmを測り、平面は楕円形を呈する。掘り形は傾斜が大きく3段に掘られ、それが北壁に良く現れている。床面はやや船底形を呈している。埋土は大きく4層に分かれ、上層から黒茶色土、黒褐色土、黒色土、暗黄褐色粘質土であり、最下層に厚い粘質土が認められた。出土土器は少ない。このほか土坑上端壁周に沿って、径30cm前後の小穴P1～P4を検出した。土坑を囲む何等かの施設の穴として考えた時、各小穴の寸法は約1.8mを計測する。方位はおよそN-5°-W。鉄器と鉄滓も出土している。

出土遺物（図版102、第224図）

須恵器（1･2）1･2は長頸壺の破片であろう。1は口径13.1cmで、口縁部を大きく外反する。胎土は精良で、外体部に灰被りが観察される。2も1と同様の胎土で暗灰色を呈する。接続は不可能である。

土師器（3･4）3は高坏の坏身であろうか。口径13.7cmに復原され、体部下位で屈曲し口縁は大きく開く。胎土に砂粒が少なく橙褐色を呈し焼成は良い。4は小型の鉢で、口縁部を強く外反する。胎土中に砂粒を含み橙褐色を呈する。口径15.0cmに復原できる。

鉄器（第236図8･10･11） 8は小片であり定かでないが、鉄鏃の茎か。残存長1.4cm。10は残存長4.9cmで、断面から刀子の茎と考えられる。11は10と同じく刀子の茎部と考えられる。鉄銹が多く、残存長9.2cmである。



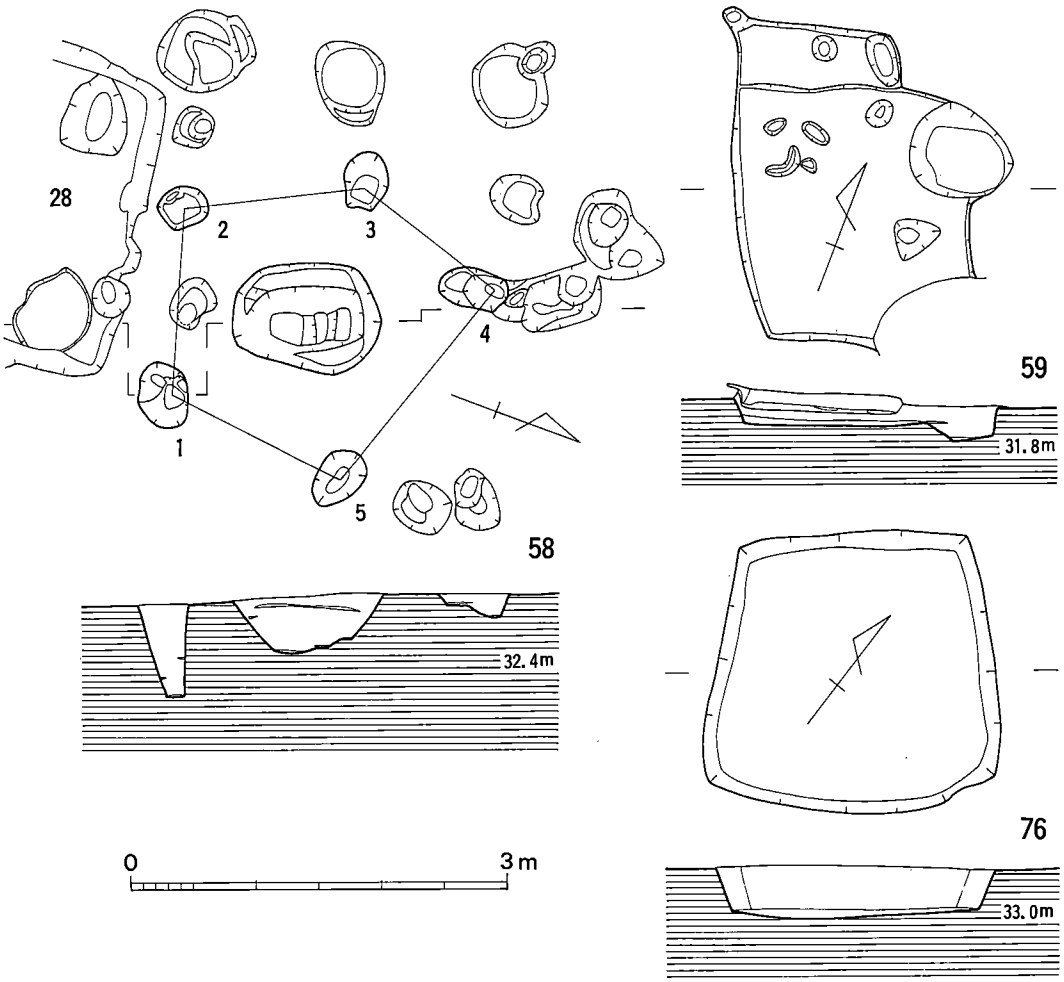
第224図 中道52号土坑出土土器実測図（1/3）

58号土坑（図版93、第225図）

調査区の中央にあって、111号掘立柱建物跡の東側に検出した。規模は長径1.2m×短径0.9m、深さ44cmを測り、平面は略楕円形を呈する。掘り形は傾斜が緩く3段に掘られ、それが北側斜面及び床面に良く現れている。埋土は細かい黄色土が混在する黒色土がほとんどで、出土遺物はない。土坑を取り囲むようにP1～P5を検出した。これらの小穴は土坑から約70cm離れて検出され、各柱間寸法は平均1.5mを測る。小穴の掘り形は径30～40cmで深さは区々で20～70cmを測る。方位はN-20°-Wとしてよい。鉄器と押型文土器片も出土している。

出土遺物（図版102、第236図）

鉄器（17）　鉄鉗である。把手部はやや曲がっており、右把手を欠損する。鉄銹が多く、挟む端部は右と左ではやや異なり、交差する箇所は鋲止めしている。残存長20.04cmである。



第225図　中道58・59・76号土坑実測図（1/60）

59号土坑（図版86、第225図）

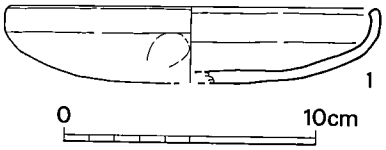
調査区中央の113号掘立柱建物跡の東南隅にあって、建物の南辺の柱跡に切られている。また東南隅で62号土坑を切っている。床面で南北190cm、東西175cmの長方形プランをなし、北側には幅120cm、奥行き45cmの張り出し部がある。黒色土を埋土としていた。北西部で若干の焼土を確認した。出土遺物はない。

70号土坑（図版85、第221図）

調査区の中央にあって、107号掘立柱建物跡の西側に検出した。規模は長径1.6m×短径0.8m、深さ45cmを測る。土坑南側が緩く傾斜しており、平面では二段に掘られているように見える。床面は船底形で、土師器が出土した。方位はおおよそN-8°-E。

出土遺物（第226図）

土師器（1）　復原口径14.4cm、器高3.0cmの坏身である。胎土は精良で砂粒が少なく、外底部はナデている。一部指圧痕が残る。



第226図　中道70号土坑出土土器実測図（1/3）

71号土坑（図版94、第70図）

調査区の中央部に検出し、弥生時代の21号住居跡の南壁を切っている。規模は長径1.6m×短径0.78m、深さ28cmで、長方形の土坑である。土坑の壁は直に掘り込まれ、床面は平坦で堅く、土師器坏身片、土製品、弥生の甕片等が検出した。実測不可能である。

出土遺物（図版101、第234図）

土製品（5）　黒褐色の棒状の土製品で、胎土は精良である。残存長2.5cm、径1.7～2cmを測る。

75号土坑（図版94、第222図）

調査区の東区域にあり、118号掘立柱建物の南側に検出した。51号、52号と同様大きな土坑で規模は長径4.5m×短径2.1m、深さ75cmを測る。土坑の壁は緩やかで、特に南側は二段に掘られている。床面はなだらかな舟底形を呈し、土坑東･西側に径20cmの小穴を検出した。土坑埋土は3層に分かれ、上層から茶褐色土、黒茶色土（黒色土も同じ層にある）、黒色土（黄色土混）等が観察された。遺物は特に上層の茶褐色土から出土した。方位はおよそN-17°-W。製塩土器と思われる破片のほか、鉄器、台石、軽石などが出土している。

出土遺物（図版98・99・102、第227・228・235・237図）

須恵器（1～10）　1～3は蓋である。1は復原口径12.2cmで、淡緑灰色を呈し胎土に細砂を含む。2は平坦な蓋で端部が断面三角形をなす。砂粒を含み暗灰色である。3は復原不可能で器肉が薄く、暗灰色を呈する。4～8は高台付坏身である。4･5は小片にて体部下位を欠くが、共に淡灰色

を呈し胎土は精良である。6は口縁がやや歪み、口径12.1cm、器高4.8cmで胎土に白砂粒を含む。7は復原口径12.8cm、器高5.1cmで、高台が底に付く。胎土に白砂粒を含み淡緑灰色を呈する。8は口径10.0cm、器高4.9cmに復原され、高台は低く直立する。器肉が薄く胎土に砂粒が多い。9は長頸壺の口縁部片である。口縁は大きく開き胎土に砂粒を含み淡緑灰色を呈する。外体部は回転ナデである。復原口径11.8cm。10は口縁部を欠く小壺で胎土に石英等を含み、暗灰色を呈す。体部下位はヘラケズリ、他は回転ナデである。

土師器（11～21）　11～16は坏身である。なかでも11～13は器高が低く口縁が直立するもので、体部下位はケズリ調整である。共に胎土は精良で、口径11.8～12.7cm、器高2.2～2.6cmの法量である。14は丸底で復原口径13.0cm。胎土は精良であるが磨滅が著しい。15は口径を13.8cmに復原する。胎土に砂粒が少なく、焼成は軟質である。16も15と同様に胎土が脆く、調整は見分けにくい。復原口径15.2cmで胎土に白色粒を含む。17は小壺で、復原口径10.8cm、残存高7.85cmを測る。口縁は直立し体部は丸く大きく張り出す。外体部はナデ、内体部は横ナデである。胎土に赤褐色粒を含み淡橙色を呈す。18～21は小甕と大甕である。18は口縁部を強く屈曲し、外体部は粗い刷毛目で内面はケズリ調整である。口縁内部は刷毛目調整で14.6cmを復原し、暗褐色を呈する。19は口縁が肥厚し口径15.4cm、器高13.1cmを測る。外体部は刷毛目、内体部は強いケズリ調整である。胎土に大粒の砂粒を含み二次火熱を受けており、支脚に使用されたものか。20は底部を一部欠損する。口径24.5cm、器高31.6cm、体部最大径28.5cmを測る。外体部は強い刷毛目、内体部はケズリカキ上げである。胎土中に石英･砂粒を含み、焼成は硬質で暗褐色を呈する。21も20と同様の甕底部片である。

石製品（第235図18･22）　18は茶褐色土の埋土中から出土し、自然石を利用した玄武岩質の擦り石で、かなり磨滅している。円形で径7.9cm、厚さ4.1cmを測る。22も同じ出土で、自然石を利用した台石である。通常の礫岩質で、上面はかなり擦られ、金属質の擦痕が認められる。長径16.6cm×短径14.0cm、厚さ9.8cmを測る。

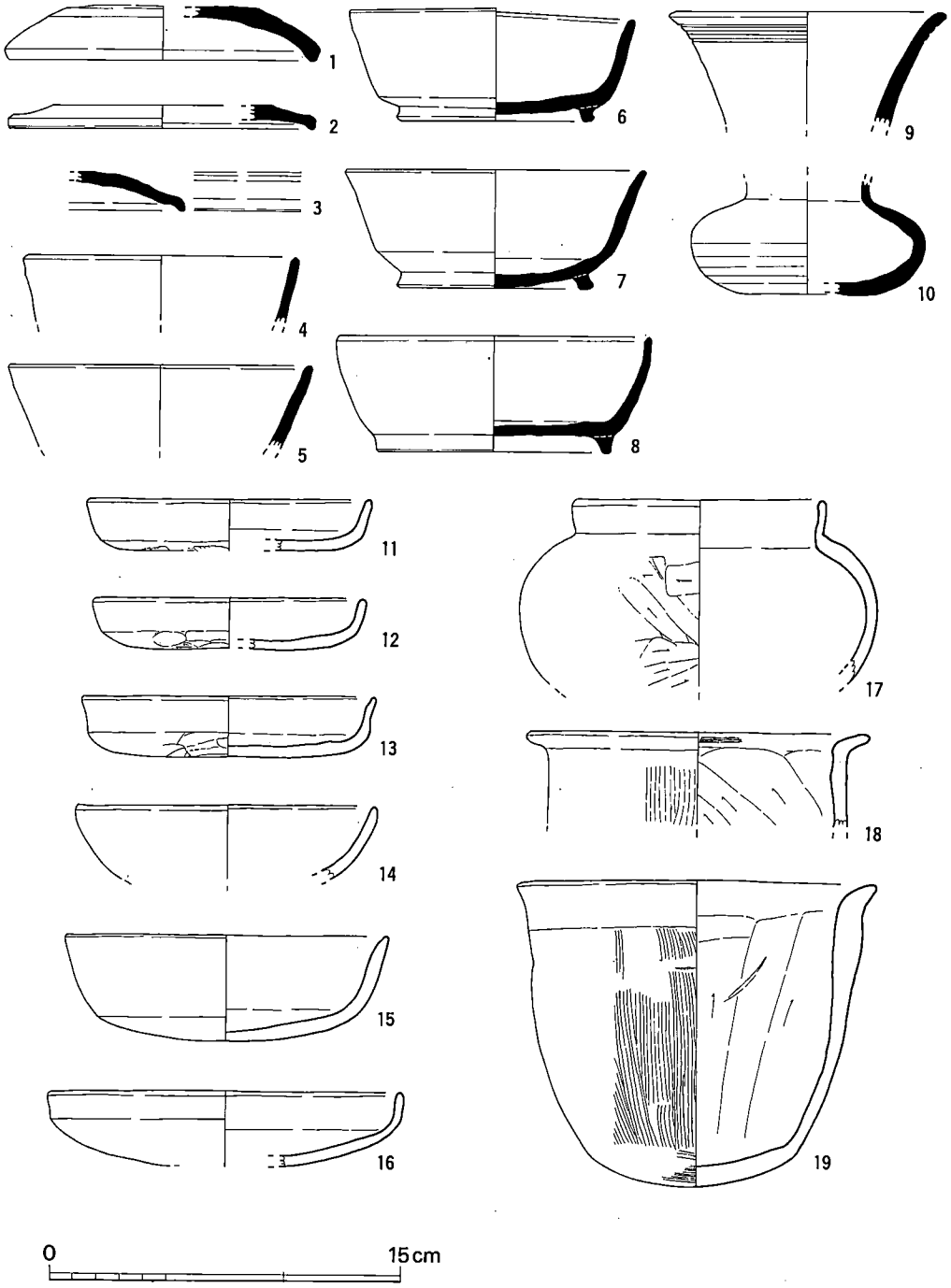
鉄器（第236図9･13）　9はかなり使用した刀子で、全長7.6cmで、茎部長3.6cm、刃幅1.0cmを測る。鉄銹が多い。13は鍬先の破片か。端部は二重になっており、鋭く尖っている。残存長3.2cmである。

76号土坑（図版80、第225図）

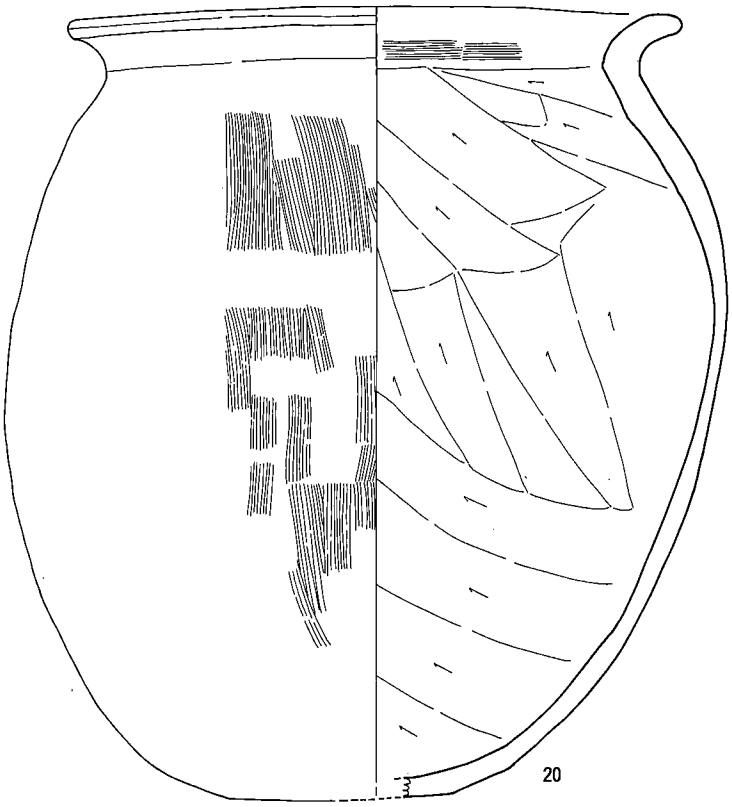
調査区の東端にあり、132号竪穴住居跡の北側に検出した。規模は一辺2.15mの略方形を呈し、深さ40cmを測る。壁は直に掘り込まれ、床面は平坦で堅い。出土遺物はない。

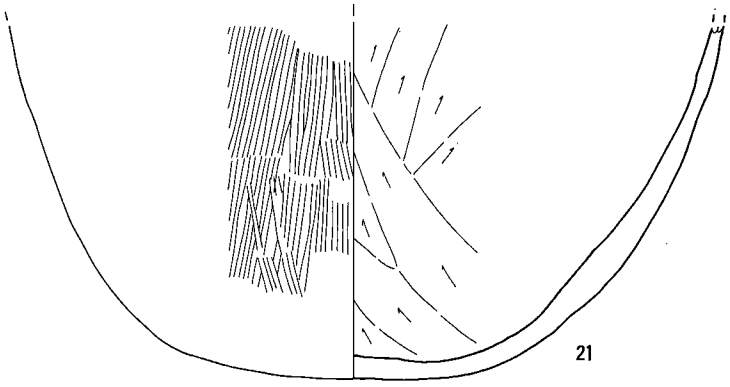
77号土坑（第85図）

調査区西端の北端部、101号住居跡の南にある。上面で165cm四方の方形プランをなし、床面



第227図　中道75号土坑出土土器実測図１（1/3）





0　　15cm

第228図　中道75号土坑出土土器実測図２（1/3）

は110×130cmほどの長方形プランとなる。深さは60cm。各コーナーの壁面にはテラスがあり、また2カ所にピットが掘り込まれている。出土遺物はない。この土坑は当初は弥生時代のものと考えていたが、その占地からして古墳時代以降の所産の可能性が高いと判断した。

4．溝

調査区の西半分に検出した溝である。溝は2条あって、1号・2号共に平行に走っている。1号溝は調査区内いっぱいに検出したが、2号溝は1号の約1／2の検出である。出土遺物は少なく、中世の土器等が目立つ。

1号溝（図版1～3、第229図、付図）

調査区の西半分に検出した東西溝である。平面図は溝がとても長いため遺構配置図により、溝断面図のみを掲載した。これと切りあっている遺構は弥生時代の4号住居跡である。また溝中央部で、県道金川田主丸線に切られている。各寸法は検出長123.0m、幅は上端で約1.8m、下端で0.6～1.0m、深さ60cmから深い所で84cmを測り、溝壁は斜めに掘られ底部は平坦である。またこれは東側から49.7mで南側に幅60cm、深さ約45cmの副溝を伴っている。

溝の断面を観察すると、各箇所によって異なるが大きく3層に分かれる。それを上層・中層・下層とすると、上層では黒褐色土で下端に黄褐色砂質土が認められ、中層との間に黄色粘質土を咬んでいる。中層の埋土は上層と類似し、それに黄色土の斑点混じりの土が混在する。この層も一部で黄茶褐色砂質土が認められた。下層は溝壁寄りに黄褐色土（粘質土の所もある）が確認され、それと同時に底部に砂質土が確認された。これらのことから各層の底部には砂質土が確認され、各層において水が湛えられていたことが判る。

副溝は1号溝の南側に接してあり、検出長49.7mを測る。掘り形は主溝に類似し上端幅0.6m、下端幅0.25m、深さ42cmを測る。埋土は黒色土が主であるが、下層に砂質土が認められる。須恵器等が出土した。

出土遺物（図版99・102、第230図）

須恵器（1・2）1は口径13.4cm、器高4.35cmの坏身である。濁灰色を呈し焼成は軟質で、赤褐色粒を含む。調整は磨滅していて明らかでない。2は長頸壺の頸部である。復原口径13.3cmを測り、淡灰色を呈し焼成は堅緻である。

土師器（3～5）3は坏身で、復原口径14.0cm、器高3.5cmを測る。胎土は精良で砂粒を含み外体部下位はケズリ調整である。4・5は甕である。4は復原口径21.6cmで、外体部はナデ、内体部は強いケズリ調整である。二次火熱を受けている。5は底部を欠損し外体部は粗い刷毛目、内体部はケズリカキ上げである。復原口径23.6cmを測る。

瓦器（6·7）共に完形に近いもので、6は口径16.1cm、底径5.45cm、器高6.4cmを測る。胎土に砂粒を含み暗灰色を呈し、焼成は堅緻。底部は断面三角形をなす。内·外体部はケズリの後工具によるミガキである。一部に煤付着。7は口径17.2cm、底径5.5cm、器高7.1cmを測る。胎土及び調整は6に類似する。共に溝上層出土。

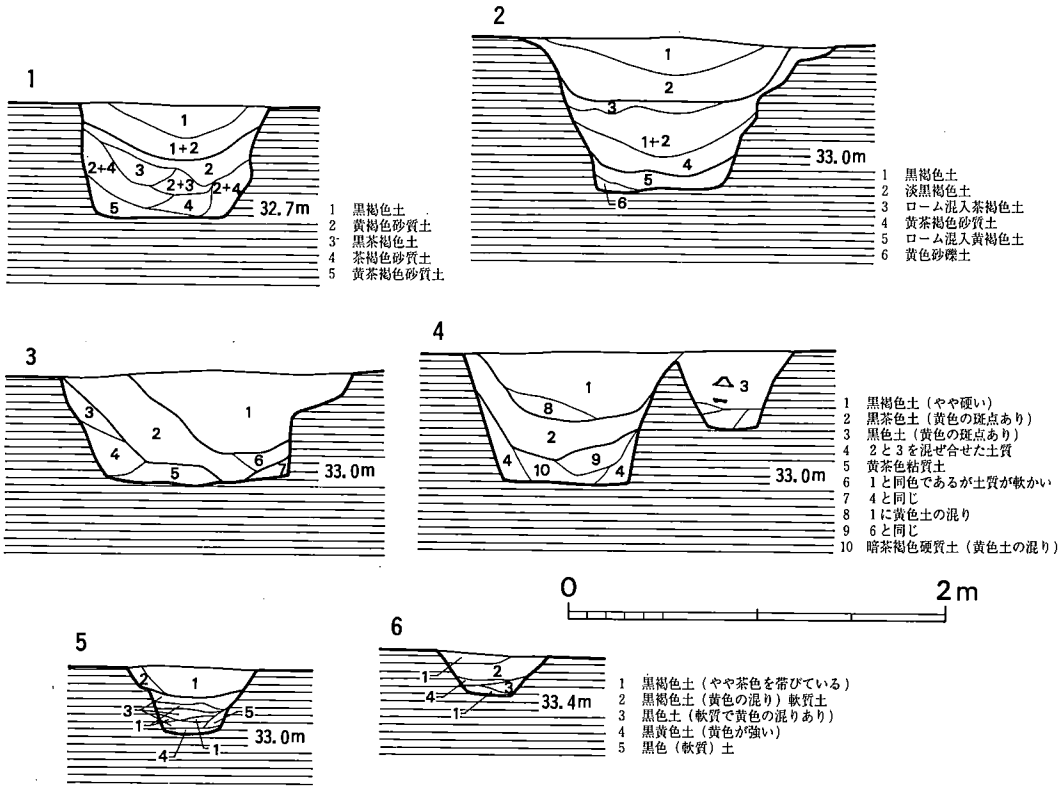
磁器（8）龍泉窯系の青磁である。口径15.8cmで胎土は濁緑黄色を呈し、露胎は濁灰色を呈する。

古銭（第236図 1·2） 共にまとまって溝上層から出土した。5枚が錆ついて重なっており、剝がすことは不可能である。従って古銭の価値は判らないが、宋銭の可能性は高い。

鉄器（第236図3·5·16）3は広根斧箭式の鉄鏃で、残存長5.7cmを測る。茎部方に鉄銹が多くなる。5は鉄鏃の茎部で鉄銹が多く、残存長約4.7cmを測る。16は残存長5.8cmで、断面四角の石突であろうか。

2号溝（図版 1～3、第229図、付図）

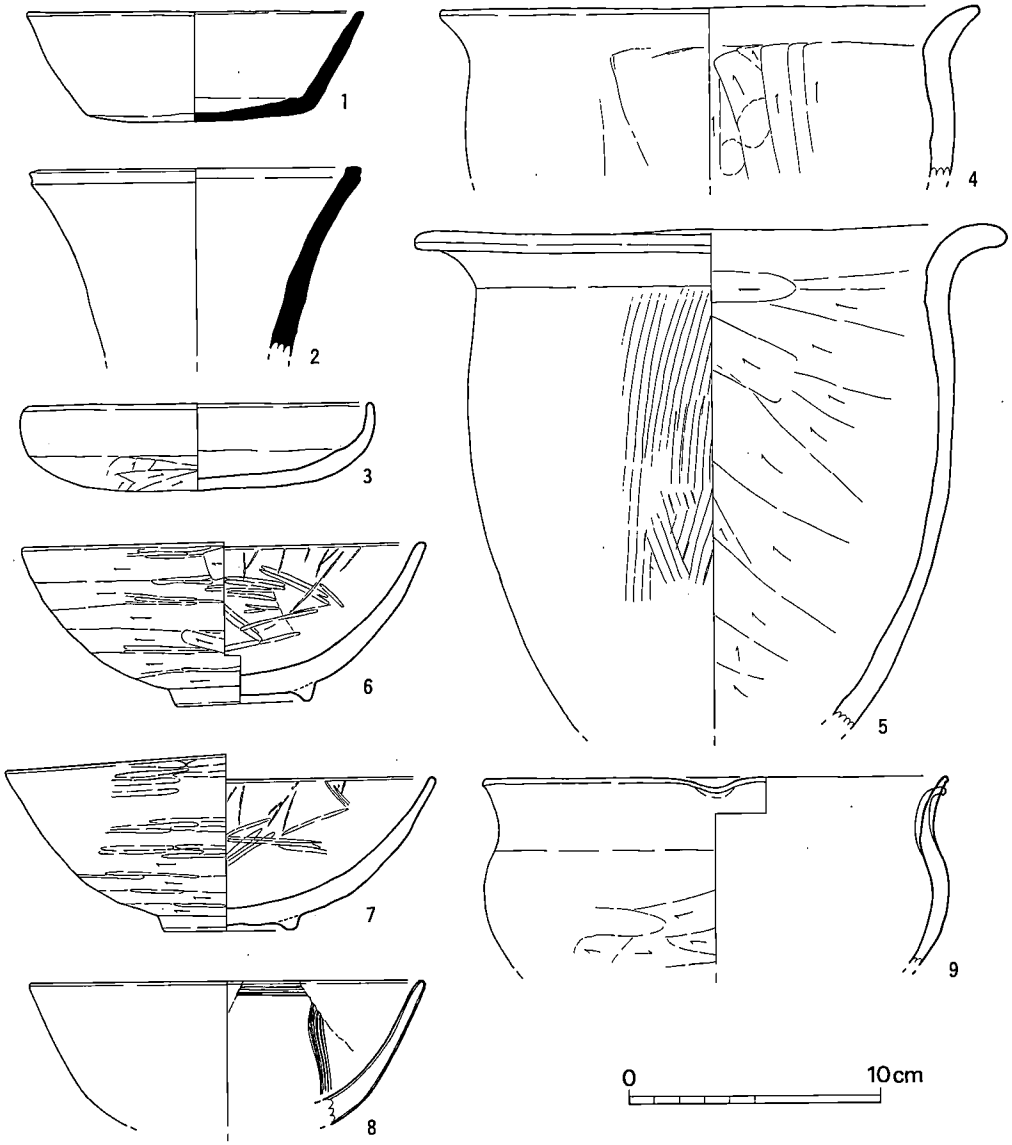
1号溝の南側に幅6.5～7mを隔てて検出した東西溝である。2号溝と切りあっている遺構は



第229図　中道1・2号溝土層実測図（1/40）

9・16号土坑、ＳＷ２である。各寸法は検出長60.5ｍ、幅は上端で約0.68ｍ、下端で0.25ｍ、深さ20cmから深い所で35cmを測り、溝壁は斜めに掘られ底部は平坦である。また、この溝は西側に延長すると、現道を隔てた西側に長さ5.75ｍ検出した。

溝の断面を観察すると、各箇所によって異なるが大きく２層に分かれる。上層では黒褐色土で１号溝と類似する。下層は黒褐色土･黒色土（黄褐色粘質土混）が主体であるが、下層に黒黄色土（やや砂質土）の堆積が認められる。



第230図　中道遺跡1・2号溝出土土器等実測図（1/3）

出土遺物（図版99・101、第230図）

土師器（9）復原口径18.6cmで、片口の鉢で体部は丸く底部は欠損する。胎土は精良で砂粒が少なく、淡灰茶色を呈する。外体部はケズリ調整である。

土錘（第234図３）残存長5.1cm、最大径1.9cm、口径0.49cmを測る。胎土には砂粒を若干含み精良で、茶橙色を呈し焼成は良い。重さ17.0gを測る。

５．その他の出土遺物

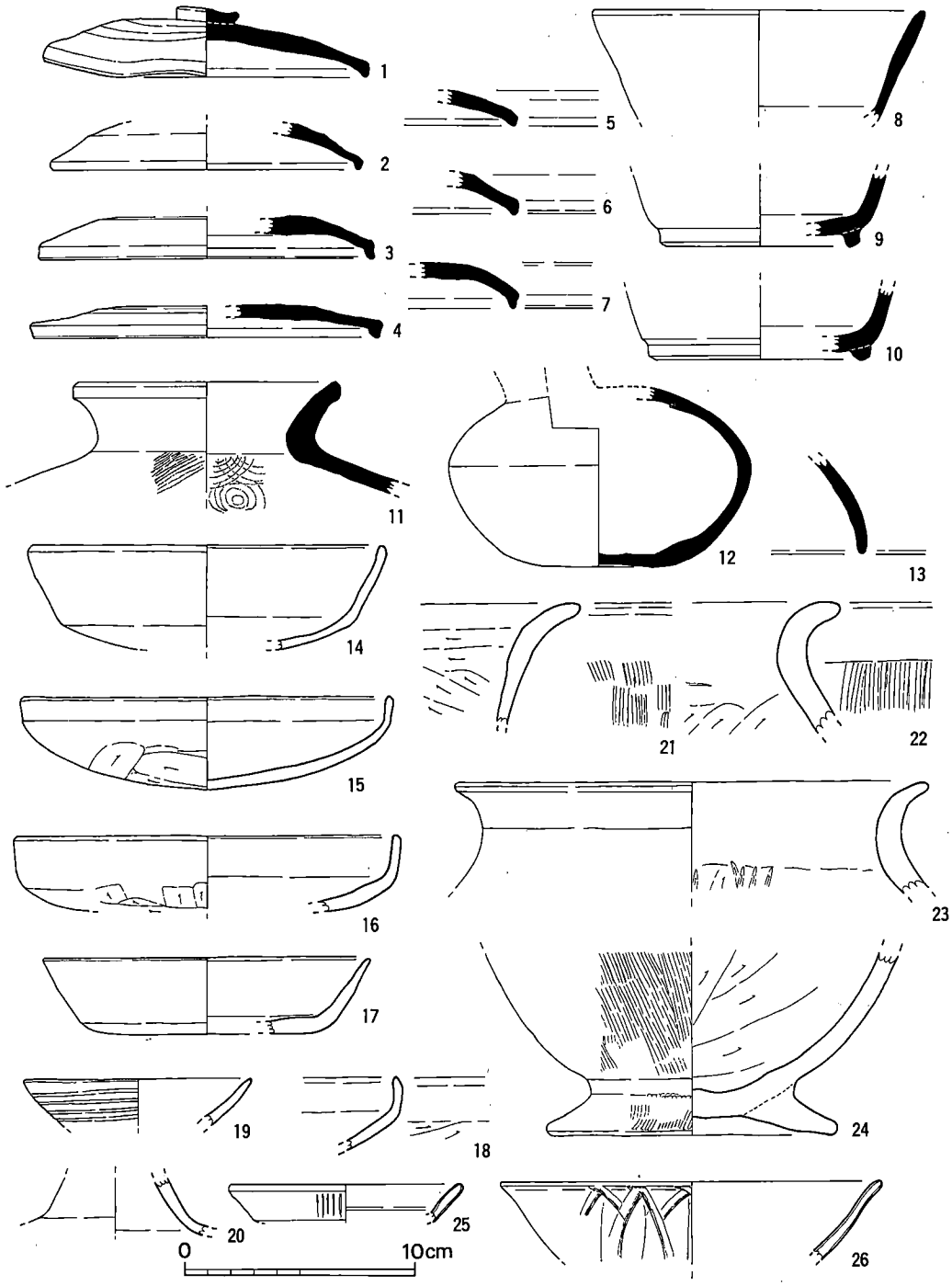
ａ．ピット出土遺物（図版100・101・102、第231図）

ピットからの出土土器は量的にはそれほど多くはない。ここに掲載したものは復原可能のものを主体とした。ピット番号については最後にまとめる。

須恵器（1～13）　1～7は蓋で、5～6は復原不可能である。器形的には変化が見られなく一般的な蓋で、復原口径13.4～15.1cmを測る。胎土には石英･砂粒を含み暗灰色及び灰色を呈する。1は天井部に平坦な撮みを有する。8～10は坏身で、8は口径14.4cm、9･10の底径は順に7.9cm、9.7cmを測る。胎土及び調整は蓋と類似しており、色調は暗灰褐色を呈している。なかでも8は赤褐色である。11は甕の口縁部で、頸部を強く外反する。外体部は平行の叩き、内体部は同心円文の叩き調整である。口縁部に灰被りが認められる。12は横瓶片である。器肉は薄く外体部は回転ナデで、一部に灰被りが認められる。胎土に石英･砂粒を含み黒灰色を呈し堅緻である。13は器形的に明らかでなく、椀の可能性もある。

土師器（14～24）14～19は坏身である。器形的にはそれぞれ異なっているが、胎土調整はそれぞれ類似している。外底部はケズリ、内体部はほとんどナデ調整を施し、口縁から外体部は横ナデ調整である。特に14は器高が高く、体部下位から屈曲し器肉は薄い。17は前者の坏身に比較して口径が小さく底部が平坦で、ナデ調整である。復原口径14.3cm、器高3.4cmを復原する。共に胎土には石英･雲母･赤褐色粒を含み精良である。19は酒坏を思わせる小型の坏口縁部で、体部を大きく開く。外体部は横方向のヘラミガキ、内体部はヨコナデ調整である。復原口径9.8cmを測る。20は高坏の脚部片で、底部及び脚部上位を欠損する。胎土に白色粒を含み淡褐色を呈する。甕は21～24である。21～23は甕の口縁部片で、21･22は復原不可能である。通常の甕で外体部は刷毛目、内体部はケズリ調整で、共に胎土には石英･砂粒を含み淡橙色を呈している。23は復原口径20.6cmを測る。24は高台付甕の底部で、高台は「八」の字状に大きく広がり、高さは低い。外体部の調整は刷毛目で高台まで及んでいる。甕内体部及び高台底面はケズリ調整･ナデ調整である。全体に二次火熱を受け、胎土に石英･雲母片を含む。

磁器（25･26）25は同安窯系青磁皿である。復原口径10.2cmで、外体部にケズリの痕が見られる。黄緑色釉が施されている。26は復原口径16.6cmを測り、外体部に鎬連弁を有する龍泉窯系青磁



第231図　中道遺跡ピット出土奈良時代その他土器等実測図（1/3）

椀である。緑灰色釉を施している。

以上の遺物の出土ピットは次の括弧に示すとおりである。1（589）、2（585）、3（473）、4（230）、5（345）、6（603）、7（744）、8（17）、9（中41）、10（16）、11（315）、12（327）、13（564）、14（564）、15（不明）、16（156）、17（17）、18（403）、19（中17）、20（585）、21（750）、22（824）、23（373）、24（378）、25（撹乱）、26（不明）。

石製品（第234図11・17、第235図19）　11は頁岩の中砥石である。大部分が欠損しており、残りのうち二面が使用されている。現存長3.85cm、幅3.43cm、厚さ1.2cmを測る。Ｐ－846出土。17は偏平な片岩で、周縁を細かく打ち欠いており、用途は不明。残存長6.04cm、幅5.54cm、厚さ0.79cm、重さ34.6gを測る。Ｐ－760出土。19は玄武岩質の叩石である。上面は平担でネズミの歯形様のカキ目がある。また端部には敲打痕が認められる。長さ12.5cm、幅5.5cm、厚さ5.2cmを測る。

鉄器（第236図 4・6・7・14・15）　4・6・7は鉄鏃である。4は先端部を欠き、全長7.7cm、茎部長5.0cmである。6は２個体であるが接続するものであろう。7は残存長5.4cmで鉄銹が多く茎部の部分は定かでない。14は大きな釣針であろう。端部を鋭く曲げている。残存長4.0cmである。15は残存長3.5cmであるが製品としては定かでない。14に類似するところもある。4・6・15はＰ210出土。7はＰ742出土。14はＰ815出土である。

また12は撹乱土から出土した。残存長6.1cmの釘であろうか。

ｂ．その他出土の奈良時代土器（第232図）

３軒の弥生竪穴住居から奈良時代の須恵器・土師器が出土したため、混入土器として掲載する。

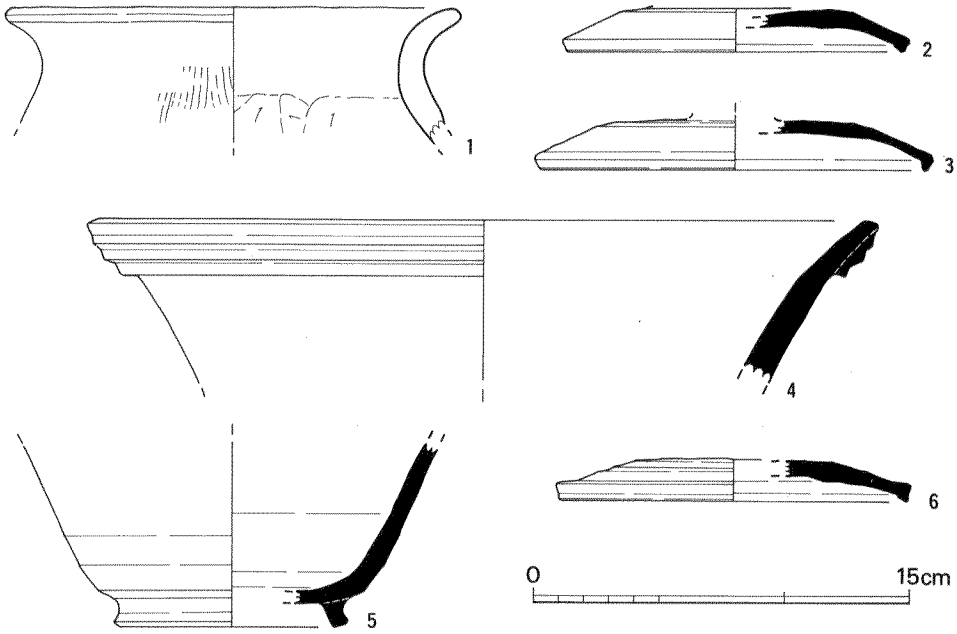
土師器（1）甕の口縁部で、復原口径18.2cmを測る。外体部は刷毛目、内体部はケズリ調整である。胎土に石英・砂粒を含み全体に褐色を呈する。10号住居出土。

須恵器（2～6）2～4は16号住居、5は19号住居、6は23号住居から出土した。2・3・6は蓋で口径は順に13.6cm、15.6cm、14.0cmを測る。一般的な蓋で器高が低くなり、3は端部に断面三角形の返りを持つ。共に胎土に石英・砂粒を含み、灰色及び灰茶色を呈する。4は復原口径31.6cmの大甕の口縁部である。調整はナデで、胎土中に白色粒を含み暗緑灰色を呈する。焼成は硬質。5は約1cmの高台を有し、体部が大きく開く器形をなすもので、器形としては長頸壺であろうか。高台径9.4cmを測り、胎土に石英・砂粒を含み淡青灰色を呈する。焼成は良好。

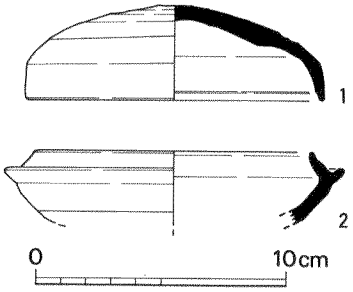
ｃ．表採土器（第233図）

調査区の東端は台上になっており、121号掘立柱建物の南側に位置し、近世の墓地が存在していた。採集した土器はこの墓地からで、須恵器の蓋及び坏身片の２点である。

須恵器（1・2）1は口径11.9cm、器高3.8cmで胎土に石英・砂粒を含み灰色を呈する。天井部はヘラケズリ、内部はナデ調整である。端部内面に僅かな身受けがある。2は復原口径11.2cm、受け部径13.6cmで、底部を欠損する。胎土は1と類似し、灰色で堅緻である。

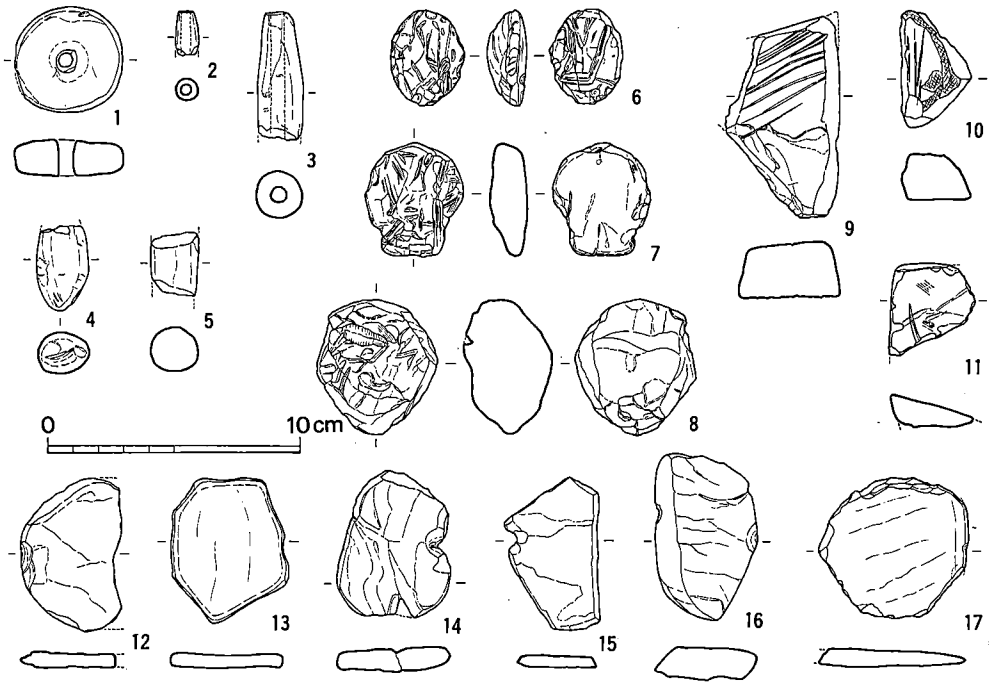


第232図　中道遺跡出土奈良時代土器実測図（1/3）

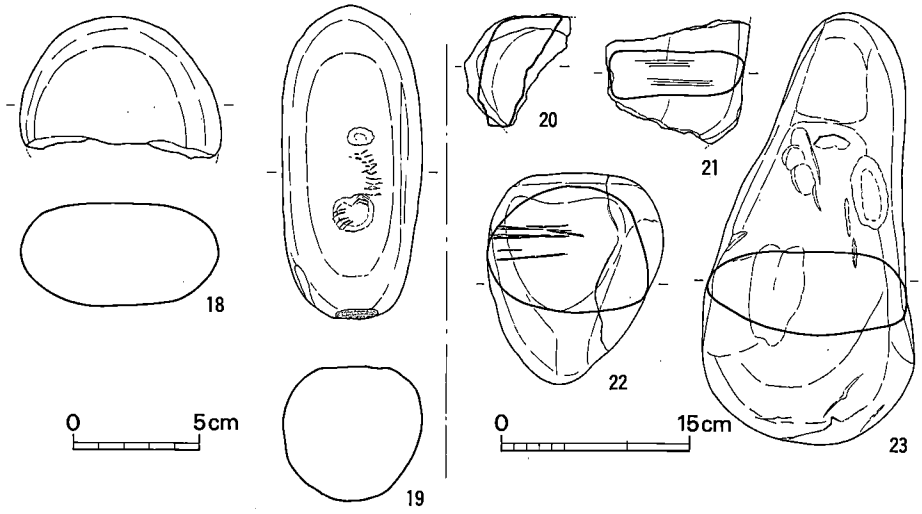


第233図　中道遺跡採集土器実測図（1/3）

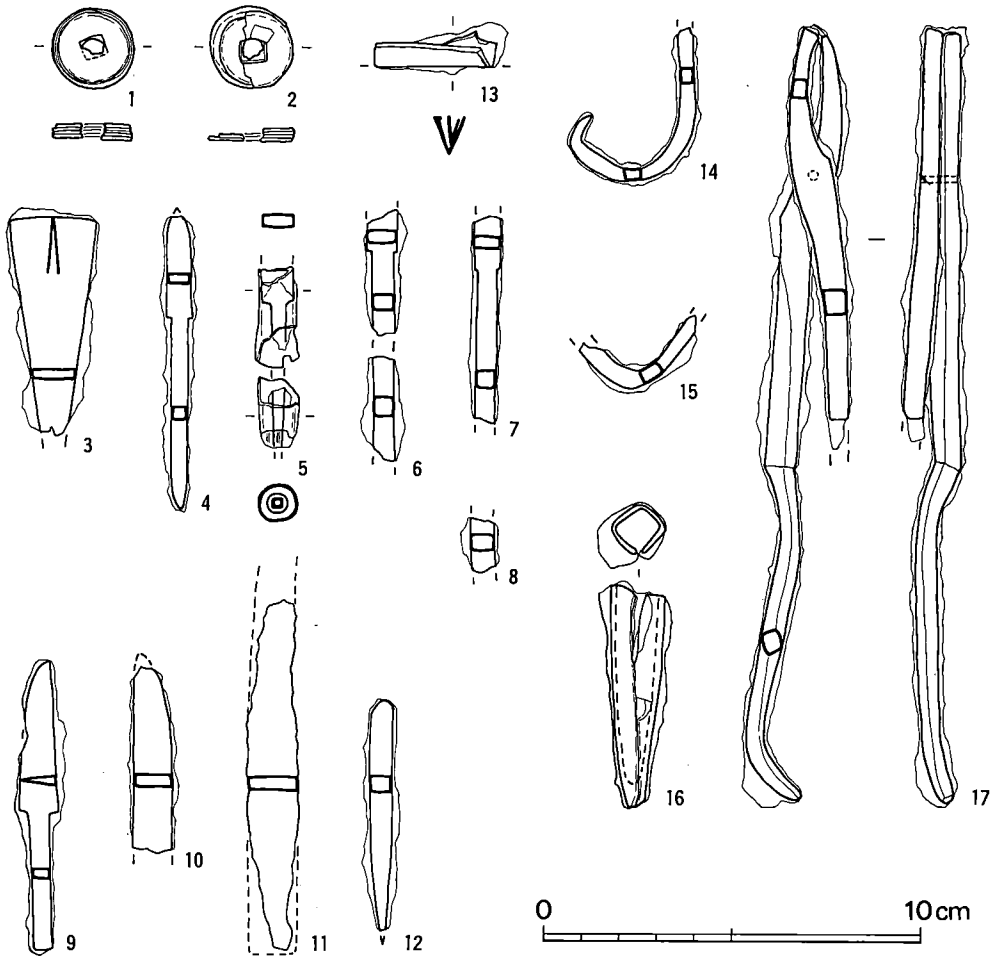
Photo. 14　寸暇を惜しんで…



第234図　中道遺跡出土奈良時代土製品・石製品実測図（1/3）



第235図　中道遺跡出土奈良時代石製品実測図（1/3・1/6）

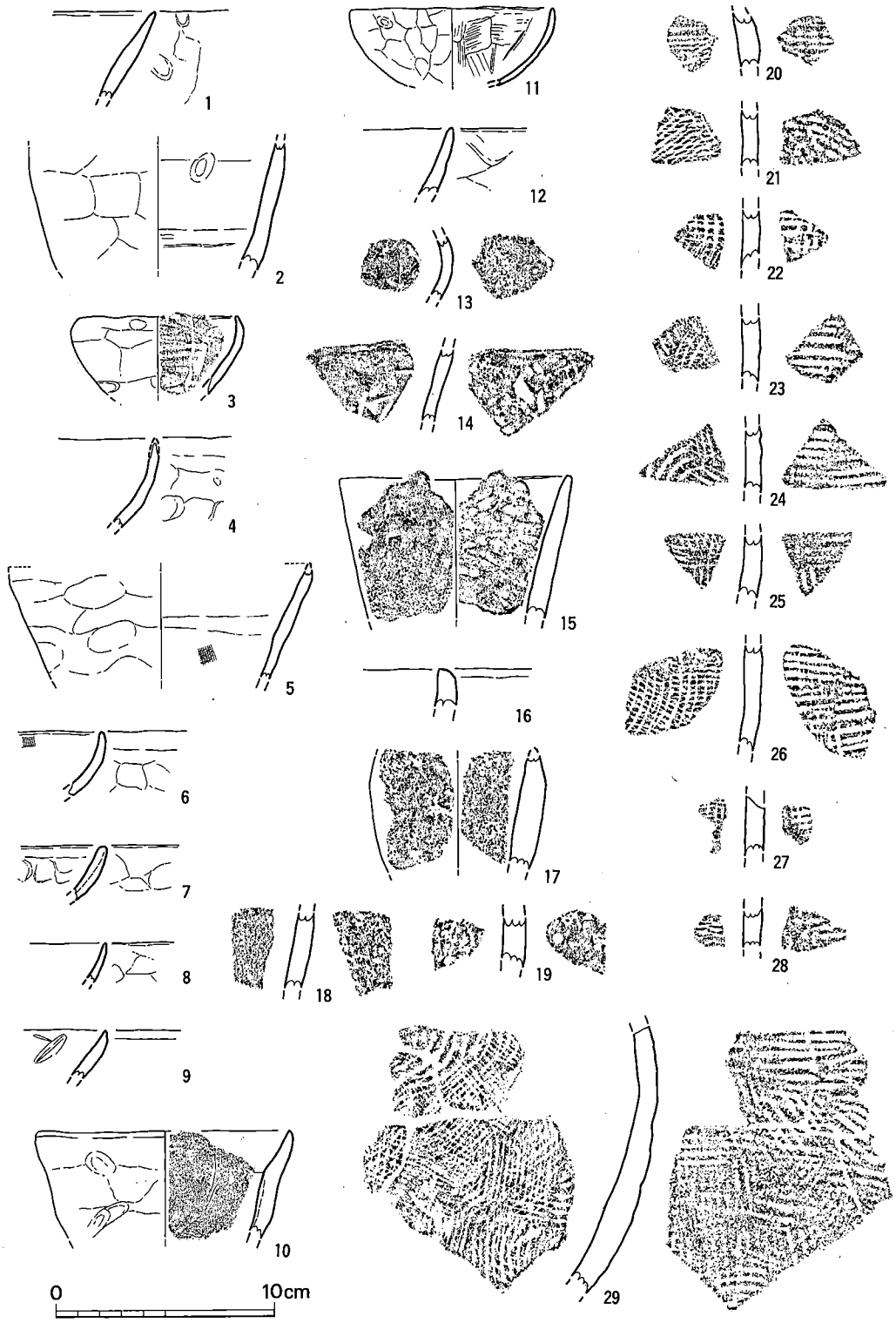


第236図　中道遺跡出土古銭・鉄器実測図（1/2）

d．製塩土器（図版100・101、第237・238図）

いわゆる焼塩用の鉢形・円筒形のもの、玄界灘式といわれる煎熬用の甕形のものとがある。ただ後者については玄界灘式でないものも含まれている可能性があることを断っておきたい。ピット出土としたものはどの柱穴であったか所属不明のものである。

下記以外に図示しえない破片として、115号住居跡、51号土坑の出土品があり、ピットにも別にあと9点ほどがあった。総数としては焼塩土器22点、玄界灘式と思われるもの約20点である。



第237図　中道遺跡出土製塩土器実測図１（1/3）

107号住居跡（1・2）ともに焼塩用の鉢形をなすもので、二次熱を受けている。1の内面は擦過風のナデである。カマド内出土。2は赤橙色に変色している。床面出土。

108号住居跡（4・5）これもともに焼塩用の鉢形をなすもので、二次熱を受けている。埋土中出土。4は椀形に近い形状となる。5の内面にはわずかながら布目痕が見える。口径13.5cmほどであろう。

112号住居跡（6）鉢というより椀にちかい。二次熱を受けている。埋土中出土。

119号住居跡（7）内外ともナデである。二次熱は受けていない。下層の出土。

121号住居跡（3・20） 3は鉢形で口縁は内傾する。内面の条痕は貝殻ではなく木の小口によるものらしい。二次熱を受けている。復原口径7.2cm。20は肩部付近の破片で外面が平行タタキ、内面は平行の当具痕である。ともに埋土中出土。

134号住居跡（8）鉢形で口縁は内傾する。二次熱を受けている。埋土中出土。

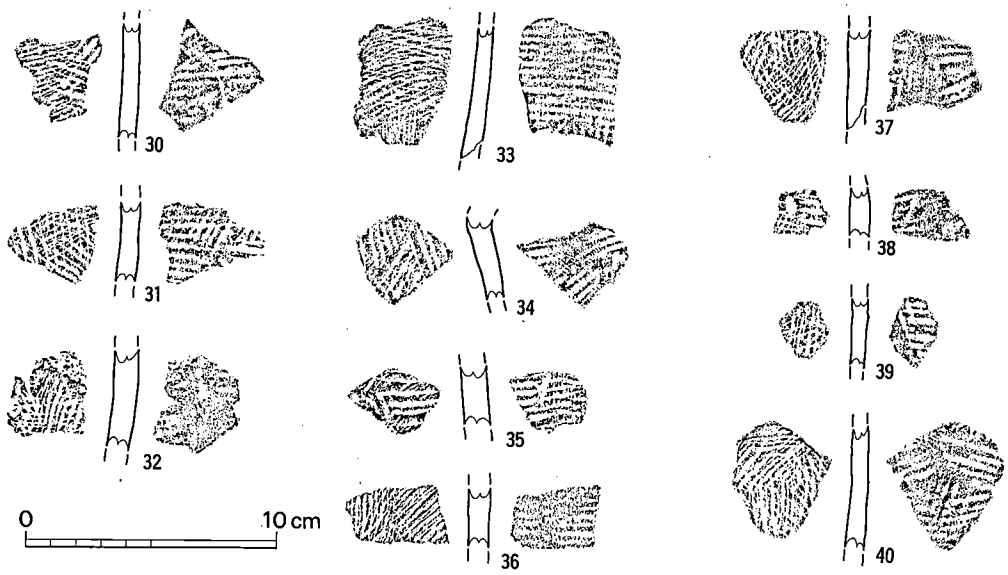
116～122号住居跡上面（21・22） 玄界灘式の胴部片で22の内面は同心円当具痕も見られる。

30号土坑（9・10）9は鉢形の口縁部片で、内面は擦過とナデ。10も内面に擦過痕がある。粘土貼り合わせ成形らしい。復原口径11.5cm。ともに二次熱を受けている。上層出土。

75号土坑（23～29）全て外面は平行タタキで一部はその上をナデ、内面は同心円と平行の当具痕で一部その上をナデる。29は底部に近い部分にあたり器肉の厚い所がある。

P 29（17） 残存部では円筒状の器形かと思われる。二次熱を受けている。

P 230（33）これは単なる土師器の可能性もある。外面はタタキのちナデ。



第238図 中道遺跡出土製塩土器実測図２（1/3）

P 241（16・19）16は円筒状の器形になろう。19の内面は布痕のようにも見えるがやや粗すぎる感がある。二次熱を受けている。
P 245（30～32）ともに外面は平行タタキ、内面は平行当具痕。
P 531（18）円筒形の器形か。外面はナデ、内面には布痕がある。二次熱を受けている。
P 534（14）外面はナデ、内面はナデと工具による擦過である。二次熱を受けている。
P 605（15）内外ともナデであるが、内面は指ナデの痕跡が明瞭である。
P 621（12）外面は押さえつけたナデである。二次熱を受けている。
P 829（11）器壁の薄い椀形をなす。一部に須恵質に近い色調のところがある。復原口径9.2cm。
ピット（13・34～40）13は丸いカーブをもっており、椀形になろうか。二次熱を受けている。34～40は外面平行タタキ、内面は平行の当具痕である。

E．自然科学的分析

中道遺跡の1・4・5号住居跡、11号土坑の炭化材を、社団法人日本アイソトープ協会に委託してC 14年代測定を行った（昭和63（1988）年3月に資料送付）。約1年を経て結果報告書が送付されてきた（平成1（1989）年3月7日付け）が、そこから必要な部分を抜粋する。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代		
・N-5365	KOF 2-1 NO.2	2210±75yB.P.	（2150±75yB.P.）	〔1号住居〕
・N-5366	KOF 2-2 NO.3	2020±75yB.P.	（1960±75yB.P.）	〔4号住居〕
・N-5367	KOF 2-3 NO.4	2230±75yB.P.	（2170±75yB.P.）	〔5号住居〕
・N-5368	KOF 2-4 NO.5	1810±75yB.P.	（1760±75yB.P.）	〔11号土坑〕

年代は14Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yeays B.P.）として示されています。（後略）

……

この結果では、最も古くて紀元前190年、最も新しくて紀元220年を前後する頃の年代が得られていることになる。資料とした炭化材が出土した1・4・5号住居跡、11号土坑はともに考古学的には弥生時代中期末頃であり、年代的にはおおよそ同じ頃と捉えているものである。結果報告書が示すような最大400年も幅のあるような資料ではありえない。中期末頃は実年代としては紀元0年を若干過ぎた頃に比定されるであろうから、N-5366の分析結果がわれわれが考える年代に最も近いということになろう。

F．小結

1．弥生時代の中道集落

a．竪穴住居

中道遺跡における弥生時代の竪穴住居は25軒を報告したが、14号は建直しがなされていて2軒の重複としてよいから、都合26軒分を調査したことになる。そのうち1・6・15・19・22・24号の6軒は調査区境にあったり、他から削平されたりして全貌不明のものであった。中でも22号についてはほとんど内容がわからない。残る20軒を通して、以下に住居の構造、出土遺物等に関して若干のまとめを行いたい。なお、7・38号土坑は特に小型の住居と捉えられないこともないが、この報告では住居に含めていない。必要に応じてとりあげることとする。

1） 住居の構造

規模（第239図）

規模を伺い知るのには面積が必要である。「タマヤエリアラインメータPLANIX5000」を用いて、竪穴部周壁下の床面積を計測した結果は本文中に示した。なお、この面積には柱穴・中央土坑・屋内土坑など全てを含めているから、厳密な意味では生活時の有効床面積とは一致しない。面積としては、小は23号住居の4.33㎡から大は16号住居の32.31㎡までがあった。38号土坑をもし住居とすればその2.75㎡が最も小さい。それらについてこの遺跡の中ではおよそ10・18・26㎡を境に4段階の大きさに区分しうる。推定復元値を含めて次のようになる。

・1類（10㎡以下）……2・7・8・9・23・25・（D7）・（D38）

・2類（10～18㎡）……5・11・12・18・20・21

・3類（18～26㎡）……10・13・14B・17・（19）

・4類（26㎡以上）……（1）・3・4・（6）・14A・（15）・16・（24）

1・2類を小型、3類を中型、4類を大型としてもよいが、あくまでも相対的な区分にすぎない。だが、これらの区分は、以下に触れる構造とある程度の相関関係がある。

なお、1類については起居する住まいとしての住居でなく、物置小屋的な性格のものであった可能性もある。

平面プランと主軸（第239図）

長方形が基本であるが、方形としてよいものに2・12・23・（24）号住居がある。これらは24号を除いて1・2類の住居である。また平行四辺形に近いプランとして1・17・21号住居がある。この形態は規模とは関係ないように見える。

主柱穴を結ぶ主軸方位は東西方向を指すものが多い。

主柱穴

主柱は基本的に２本であり、南北両辺間を二等分した距離の床面に長軸方向に配されるのが一般的である。しかし１類とした23・25号住居では床面に主柱穴が見あたらない。また、１類の全てと２類の一部の住居では、主柱穴が壁面に接するか、壁面から僅かの距離をもって配置されている。それは住居の規模は小さくとも主柱間距離はわりと長いという結果になる。

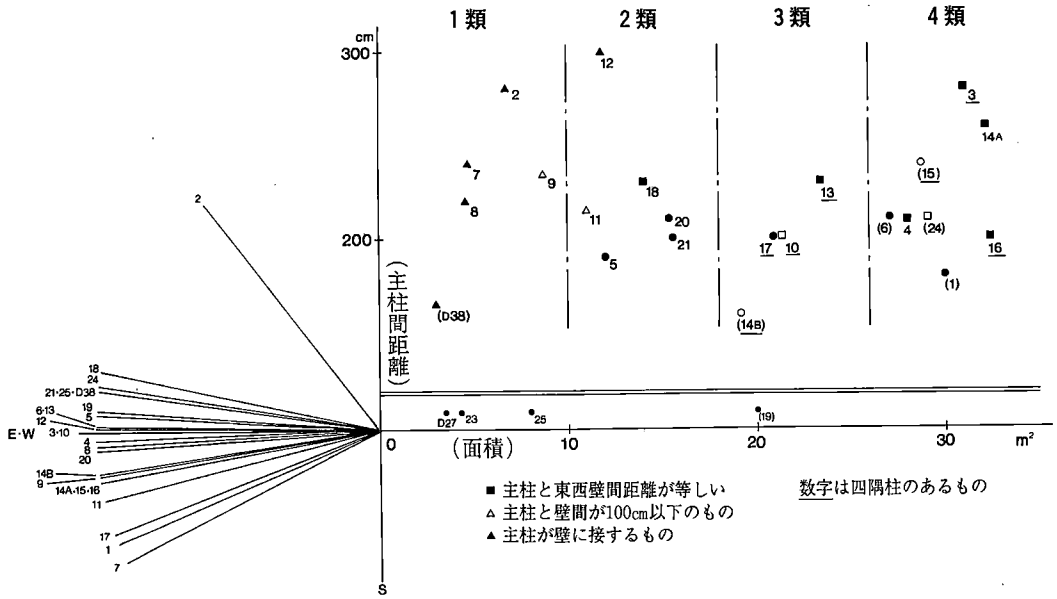
２主柱穴の距離は1.6～3m間に納まるが、2m前後が最も多い。短辺である東西両壁と２主柱穴間の距離が相等しいものは3・4・13・14A・16・18・24号住居の7軒があり、18号住居を除いて３・４類に属する。13号住居に至っては主軸長を三等分した所に主柱穴が配されていた。

また、３・４類の3・10・13・14B・15・16・17号住居には、四隅の全部ではないが、補助柱穴らしきものを見る。結果的に床面下層から検出されたものが多いので、あるいは除湿等に関与するものとも考えうるが、床面の段階での柱痕の見落としもないとはいえない。今後の類例に期待し、建築学的検討を望みたい。

中央土坑

１類を除いた住居には、主柱穴に挟まれて、その中心よりやや偏した所、中道遺跡の場合はほとんどが南寄り、に中央土坑とした浅い掘り込みがある。通常は炉跡とされるが、ここではその表現を用いなかった。3・4・5・10・20・21号住居ではここから若干の焼土と炭化物が検出されてはいるものの壁面は焼けていない。1・11号住居では作業台に用いたと思われる石が入っていた。炉ではない、とは言わないが、いま少し検討の余地があるように思える。

屋内土坑



第239図　中道遺跡弥生時代竪穴住居の面積・主軸方位

中央土坑に近い長辺、中道遺跡の場合はほとんどが南辺、の中央壁下に方形・円形・楕円形等のプランをなす土坑がある。これを屋内土坑としたが、これも１類には見られない。壁面下端に接続するものと、やや距離をおくものとがある。14A・19号住居のこの土坑の上端周辺は少し高くなって硬化していた。14A号住居では２個の作業台石が入っている。20号住居のこの土坑南壁面の抉られたピット内からは器台が出土した。

この類の土坑はこれまで屋内貯蔵穴あるいは何らかの作業用の土坑とする見方が多かったように思うが、今回の調査においてもそれへの明確な回答は得られていない。

壁小溝

周壁直下に細い溝を巡らせる例があるが、全周するものはない。壁体化粧の板壁の痕跡と考える。

ベッド状遺構

3・6・13号住居には床面より一段高くベッド状の遺構が設けられていた。3号は長辺から短辺にかけてＬ字形に、6号は短辺に平行に削り出しで造られているが、13号はコーナー部に貼り付けで設置されている。３者３様である。単純に寝所とするには無理があるように思える。

2） 住居の分布

調査区全体から見れば住居群はその西半部に多く分布している。5・18号住居を北端とし、それより南方に占地しており、集落としてはまだ南側へ展開するものと思われる。

9・10号と14号のA・B、15・16号住居が重複している以外は単独で存する。

3） 焼失住居

1・3・4・5・9・10・11・17・18・21号住居は屋根材が焼け落ちて炭化材として検出された。多くは主柱が支えていたであろう棟の方に向かっており、屋根を葺いていたはずの萱か藁も炭化して検出されている。ほかに8・15・23・24・25号住居でも一部に炭化材または焼土が見られ、これも焼失住居とするなら、実に25軒中の15軒が火災に遭っていることになる。これらは互いに近接して位置するものもあるが、全く離れて存するものもあり、一時の火災での類焼の結果としてのみ捉えることはできない。原因はともかく放火が考えられるところである。また、土坑にも5・6・11・12・13・19・20・25・28・38・47号から炭化材や焼土が検出されている。

なお、11・15・20号住居はその埋土の様相から自然に堆積したものでなく、埋め戻したものと捉えられた。15号住居については16号に切られていることより、一部を埋め戻して建て替えたとすれば理解できるが、11・20号はいかなる理由によって埋め戻したのか、その背景が気になるところである。

b．掘立柱建物

3棟が住居群の北半部に検出された。その規模からみて住まいとした建物ではないだろう。倉庫か小屋の如きものであったかもしれないし、また1・2号は丹塗り土器等の出土した土坑群の

近くにあることから、マツリにかかわるような特殊な性格を帯びた建物であった可能性もある。

c．土坑

39基を弥生時代とした。平面プランは長方形・円形・楕円形・不整形などさまざまであり、深さは総体にあまり深くはない。分布は住居群の間に点在する格好となるが、3・17・23号土坑は弥生住居と重複している。壁がオーバーハングする断面袋状をなすものに4・5号があった。

丹塗りを含む土器の出土量が多かった11・12・13・16号土坑は1・2号掘立柱建物の周辺にあって、その西側に弥生時代の遺構が見られないことは、この空間に意味するところがあるように思われる。

14・29号土坑がそれぞれ2・3号掘立柱建物の柱穴と重複しないで内部に位置するのは、先後関係でなく双方が一体の遺構であったと見るべきかもしれない。例えば便所であるとか‥‥

d．甕棺墓

小児棺3基が見られたが、一般的な甕棺墓地と違って群集せず、単独で別々に占地している。その理由としては、時期的には住居群と同じであるから、集落成員の一人が、生前かわいがっていた子どもが亡くなって後、やや離れた所にある墓地群に葬ることをためらい、わざと住居の近くに埋葬した、といったことが考えられよう。ただ、1号甕棺墓は丹塗り土器の多く出土した土坑群の近くにあることから、あるいは別の理由による死者であったのかも知れない。

なお、この中道遺跡の住人たちの墓地群はここから西南方にある石成遺跡であろう。

e．周溝遺構

1基のみの検出であったが、弥生集落の北端部に位置していることからも、非日常的な行為に関連した遺構とみるべきだろう。その場所で何が行われていたか、その実態はまだ解明されていない。

f．出土遺物

土器

住居跡・土坑とした遺構からの出土遺物としては当然のことながら土器が多い。器種は蓋形土器（以下、形土器は省略）、壺、鉢、高坏、甕、器台、支脚と全てが揃っているが、量としては圧倒的に甕が多い。器台・支脚の量もわりと目立っている。

壺には無頸・長頸・袋状口縁・広口・瓢形等のヴァリエーションがあるが、甕の量に比すれば断然少ない。甕は口縁部の形状に「L字形」と「くの字形」があり、またいずれとも区分しがたい中間形態もある。遠賀川以東系のいわゆる跳上げ口縁をなす例も多い。胴部径が口径を上回らないものがほとんどである。器台・支脚を除いた器種には丹塗りを施したものがあり、

壺・高坏はほとんどが丹塗磨研である。明確に筒形器台としうるものは見あたらなかった。1・3・10・11・12・13・14・20号住居と7・11・12・13・16号土坑は土器量が多かった。

甕の底部や器台にジャポニカ種の籾痕・藁様の圧痕を見るものがいくつかあった。土器造りを行っていた場の周辺に籾があったことはもちろんであるが、支脚の胎土にも籾が入り込んでいるのを見ると、成形時の混和剤というのみでなく、そこに豊穣を願っての所作を伺うのは穿ちすぎであろうか。

竪穴住居25軒と土坑39基のうち、丹塗土器が出土したものは前者が20、後者が24を数え、総数64の実に70％近くに及んでいる。集落内における丹塗り土器の多さは異常と言っていいほどであるが、最も祭祀的な土器といえる筒形器台はすでにその姿を消している。

出土土器のなかで、10号住居と13号住居の大型の甕が接合し（13-60）、それと12号住居の甕（12-4）も同一個体と思われる。それらの破片は12号は埋土中から、10号は床面からやや浮いて、13号はほぼ床面から出土している。その出土部位からしてもこの３軒の住居の廃絶に時間差があるのは間違いないが、時期差にまでは及ばないものだろう。

一部に前期と後期中頃の土器が混入しているが、住居跡・土坑ともに土器の示す時期は中期末頃である。時間的制約もあって十分な検討ができないが、田崎博之氏(註1)の須玖Ⅱ式新段階、井上裕弘氏(註2)のいう中期末に位置づけてよかろう。これらを後期初頭に位置づける編年観もあるが、現時点では、袋状口縁壺が口縁外側に明確な稜を持たないことを基準(註3)として中期段階に置いておきたい。

土製品

最も目立ったのは投弾形土製品で、14A号住居の一隅に36個がまとまって出土したのをはじめ、14号住居のみで44個、その他4・5・10・17号住居、13・17・37号土坑、3号掘立柱建物等から出土しており、合計59個を数えた。

紡錘形をした投弾形土製品が集積したような状況でまとまって出土した例は行橋市竹並遺跡ＡＷ地区6号住居跡（32個）(註4)、筑紫野市天神遺跡3号住居跡（9個）(註6)、小郡市津古中ノ台遺跡住居跡（55～60個）(註5)、朝倉町上の原遺跡57号住居跡（34個）(註7)、吉井町鷹取五反田遺跡92・93号住居跡(註8)などで見られ、特に鷹取五反田遺跡での出土量は目を見はるものがある。また福岡市博多区那珂遺跡第20次調査ＳＤ01(註9)では投棄されて37個が出土している。近年の出土遺跡を集成してはいないが、福岡県内では10年前の44箇所(註10)からおそらく倍増しているものと思われ、特に筑後川流域での発見例も目立っている。その出自を絡めて注意されるところであろう。

他の土製品としては1・25号住居の土玉としたものがあるが、これは孔がないから垂飾としてのそれではない。かつて田中幸夫氏が報告された(註11)宗像市東郷の宗像高等女学校校庭遺跡の仮称「球形投弾」はこれとほぼ同形同大ではあるが、中道遺跡例は重さが7gほどしかなく軽い。

投弾とするにはいま少し検討を要する。また1号住居のイネ科植物の圧痕の付いた板状品がある。これは祭祀的な意味あいが感じられるが用途はわからない。

石製品

石包丁・片刃石斧・紡錘車・砥石・台石などがある。

石包丁は小破片を含めて10点の出土があった。1号住居と2号溝周辺採集の2点を除いて輝緑凝灰岩といわれる小豆色をした石材を原材とする。飯塚市立岩産であろう。研ぎ減りが著しいが、16号住居例のように穿孔がなされていないのがあるということは、研磨・穿孔は各集落内で行っていたことの証左であろうか。

砥石は1・16号住居に小さな仕上砥があり、これは鉄器用の携帯砥石であろう。また片岩の粗砥をみても鉄器を研いだとしか考えられないものがある。

作業台石としたものも多くの住居に見られたが、1・13・14・16・19・20号住居では5個以上も出土している。「作業」の具体的内容は明らかにできないが、農民たちの屋内での仕事は多岐にわたるものがあったろう。

鉄製品

鉄器は13・16号住居に僅か3点がみられたにすぎないが、上述のように明らかに鉄器を研いだと思われる砥石が存し、かつ工具としての石器が16号住居の片刃石斧のみであることを思えば、とくに工具たる鉄器の普及はかなり進んでいたと考える。

g．中道遺跡の特徴

弥生時代の中道集落は、26軒のうち10軒または15軒の住居が焼失住居であった。この火災がたんなる失火ではなく、放火によるものがあろうことは前述のとおりである。その放火が何に由来するものであるか。これについては朝倉郡夜須町金山遺跡での同様の焼失住居をもとに、抗争時の焼き討ち、疫病の発生、といった原因が想定され、特に祭祀用の丹塗り土器の存在を加味して後者の可能性が指摘されている。(註12)

この中道遺跡は金山遺跡と時期的にもほとんど同じであり、焼失住居、丹塗り土器といったキーワードも同じである。中道集落でも疫病が発生したのだろうか。

だが、中道遺跡では焼失住居のあとにもまた住居が営まれている。10号住居がそうであるし、15号住居は焼失住居であると断定はできなかったものの、これを埋め戻してのちに16号住居が造られていることは、集落の廃絶が火災の発生に起因しないことを示している。実際には同時併存の住居を抽出してのちに検討されねばならない問題ではあるが、この遺跡の火災はむしろ戦乱に関係するのではないか、という気がするのである。『魏志倭人伝』にいう「今使訳所通三十国」が「旧百余国」からのクニの統合の結果としてであるならば、その過程で必然的に戦乱は頻繁に起きていたのではないか。この中道遺跡には環濠は巡らされておらず、出土遺物の中

にも戦乱を証拠だてるようなものは見られなかった。ただ投弾が武器ともなるのであればそれがあることになるが、もとより殺傷力などありえない。

しかしながらこの時期、奴国が後漢に朝貢して金印をもらった頃にも、さらなる統合に向けて各地で争いが多発していたのではないか。屋上に屋を架す推論であるが、中道集落の火災の原因をそうした状況の時代性に求めておきたい。

註

1　田崎博之 1985「須玖式土器の再検討」 史淵 122
2　井上裕弘 1981「中期末～後期の土器群について」 1981 夜須町教育委員会『金山遺跡』 夜須町文化財調査報告書 第4集
3　竹末純一 1987「須玖式土器」 『弥生文化の研究』 4
4　竹並遺跡調査会 1979『竹並遺跡』
5　福岡県教育委員会 1984『国道200号バイパス関係埋蔵文化財調査概報』
6　江上幹幸 1971「弥生時代の投弾」 考古学ジャーナル54
　藤井功・酒井仁夫 1982「北部九州の土弾」 八幡一郎編『弾談義』 六興出版
7　福岡県教育委員会 1993『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－27－』
8　福岡県教育委員会が浮羽バイパスの関係で1990年に発掘調査を行った。木下修氏御教示。
9　福岡市教育委員会 1993『那珂遺跡８』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第324集
10　吉岡幹幸 1985「投弾」 『弥生文化の研究』 5
11　田中幸夫 1936「投弾形土製品について」 考古学7-10
12　井上裕弘 1981「中期末の集落について」 註2 所収

２．奈良時代の中道集落

ａ．竪穴住居（第240図）

検出した竪穴住居跡は古墳時代６軒、奈良時代28軒である。古墳時代の住居については検出数も少ないことからまとめるに満たないが、103号の他はカマドを北壁に付設し、方位を略24度西に偏している。またカマドは101号のみ突出型で、他は造り付けのものであった。

奈良時代は調査区の中央部で12軒が重複して検出され、その東端には小型の住居跡５軒が切り合って検出された。住居から出土した遺物はおおよそ奈良時代を示しており、掘立柱建物との関連性及び各遺構の方向性から興味が持たれる。

1）面積等について

検出した住居の平面形は略正方形であるが、131号、133号等はやや歪んだ形をなす。奈良時代の住居を大別すると、規模的に見て住居の一辺を示す長さから三つに分けられる。

①３ｍ～４ｍ：107,108,124～134号。
②５ｍ前後：109～112,115,117,120,122号。
③６ｍ前後：113,114,116,118,119,121,123号。

面積的には127号が最も小規模で6.8㎡を測り、114号は大規模の住居で39.1㎡とかなりの差を見る。この差は分布状態にも明らかで、②·③の住居の一群と①の一群（この一群はさらに三分される）に分けられる。後述するようにこれらの規模は住居の変遷にも大きくかかわってくる。

貼り床は大部分の住居で確認された。特に単独で検出した住居では、主柱穴四本に囲まれた中央部は堅緻に踏み固められており、生活空間の中心部であったことが想定される。貼り床の深さは約10㎝～15㎝あり、住居の周壁沿いが部分的に深く掘り窪められ、床を貼っていたことが目立った。110号住居はその典型であり、貼り床も深くカマド前面には二本の小穴が確認された。さらに補足すれば住居の四隅と四主柱を結ぶ線上に若干の出入りはあるが支柱穴が検出された。①の一群住居は貼り床はもちろん確認されたが、107·108·124·132·133·134号以外は主柱穴は検出されなかった。特に①群の東端部に検出した一群は、その周辺を精査したが住居に伴う柱穴は検出されなかった。このことをどのように考えていくかが今後の課題であろう。②·③の住居一群の主柱穴は107号で６本、110号で８本以外は②·③の住居でほとんど四本柱が検出されている。111号～122号は切り合いが著しいため明らかにし得ない点が多々ある。

2) 構成

先ず切り合い関係について見てみよう。住居跡の切り合い関係を古い順に列記すると下記のようになる。111号～115号、116号～122号、128号～132号の関係である。

・111号～115号：111－112－113－114－115号。

・116号～122号：116－117－118－11－120－121－122号。

・128号～132号：128－129－130－131－132号。

111号は114号の住居の中にすっぽりと入ってしまい、112号から切られていることにより最も古いものである。カマドを西壁に付設していることから114号住居と何か関係があるのかもしれない。112号と113号はカマドの位置が明らかでないため114号·115号との関係は明らかでない。また115号住居は111号～114号住居を全て切っている。116号～122号は116号が最も古く考えられる。ただし120～122号住居は118号住居を共に切っており、それからの相互の関係を判断するのは難しい。出土遺物からはほとんど同時期と思われる。また前記の112号と119号の切り合いは119号が古い。次に128号～132号の関係は上記に示した通りであるが、130号と132号の関係については定かでない。カマド形態及びその付設状況からは132号の方が古いように思われる。

これらの切り合い住居は、同時併存はもちろんあると考えられ、さらに同じ箇所に建て替えした可能性が強いと考えられる。つまり、方向性から見れば同じ箇所で若干位置をずらした所に住居を作っている。例えば117号と120号はその方向性を等しくし、規模的にもそれほど変化はなく東側壁筋を合わせている。カマドの形態や出土土器の若干の差異から見れば北側にあった117号を南側に方向を同じくして120号を作り替えた可能性が強い。このことは119号と122号、118号と121号にも同じことが言えるのではなかろうか。

b．掘立柱建物

中道遺跡発掘調査で検出した掘立柱建物跡は、古墳時代３棟、奈良時代21棟である。

古墳時代から奈良時代における掘立柱建物跡については、知られている割には解明されない点が多くある。例えば官衙等で検出されている掘立柱建物跡の規模･柱掘り形の形状は柱間寸法がほぼ一定の基準をなし、掘り形も隅丸方形を呈したもので、整然とした柱筋を通しており、いわゆる官衙的･オフィス的性格をなすものである。それに比較するとローカル色が強く、官衙以外の竪穴住居跡と同一集落形態をなす一般集落の遺跡で検出する掘立柱建物は、２間×３間、３間×４間、３間×５間等の高床式の建物と、それに伴う総柱建物が通常と考えられている。これらの建物の性格はあまりはっきりせず、総柱建物については一般的に「倉庫」等として考えられているが、それ以外の建物についての位置付けはいまだに明らかにされていないのが現状である。

掘立柱建物を考える場合①規模と形状、②方向性、③掘り形の相違、④出土遺物（通常極めて出土遺物が少ないため建物の時期を考えるに苦慮する）等を考慮して研究されている。仮に四面廂の建物が検出されれば、格式の高い建物とされ、集落の中心建造物として性格付けをされている。しかしそのような建物であっても構造･性格的にはなかなかに解決されていない。一般的な建物についてはなおのことである。

1） 規模と形状

今回検出した建物の規模についてまとめてみると、古墳時代では調査区の西半域に分布しており、検出建物が少なかったこともあり、言及するには一抹の不安があるが、それでも総柱建物１棟、３間×３間以上、３間×４間の建物を検出した。奈良時代の建物に比較すると柱掘り形が一回り小さく、柱間間隔の縮小が目立つ。

奈良時代の建物跡は下記にまとめた。

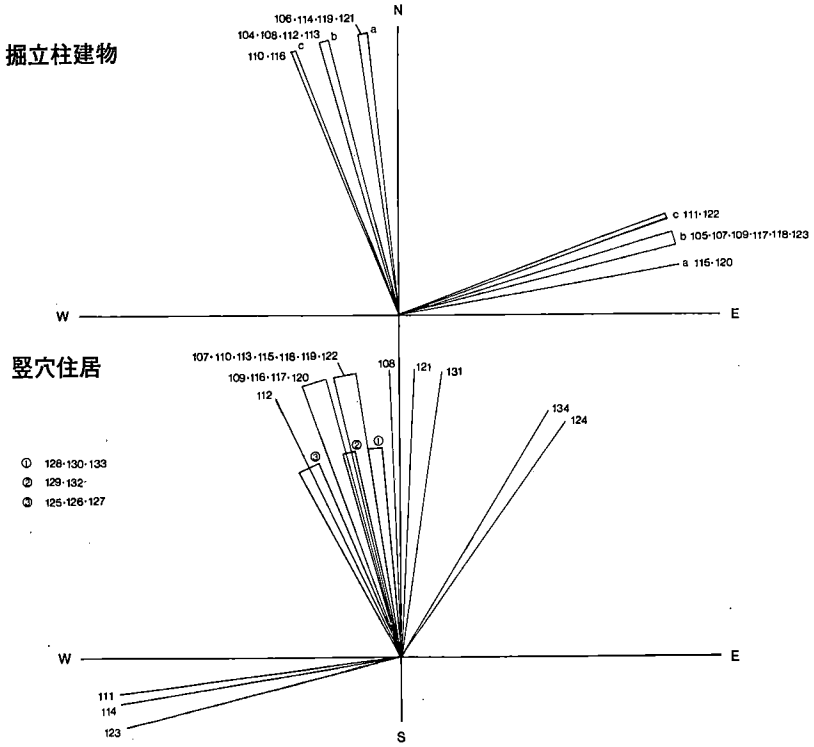
形態＼規模	３間×３間	２間×３間	３間×４間	２間×１間
東西棟（10）	109，111，115 118，119，120	107，117，122	105	
東北棟（8）	108，110，113 114	112，116	121	106
〃総柱（1）		104		

＊123･124号については規模が明らかでないため含めていない。

今回検出で多い建物は上記表で明らかなように３間×３間及び２間×３間の東西･南北の両棟に集中している。２間×１間棟の小規模な建物については106号のみで、３間×４間は２棟の東

西・南北両棟である。これら全ての建物が高床式建物とは考えにくく、土間の建物も多いと思われるが、今回検出した集落の構成上、竪穴住居をとりまく建物群の性格を明瞭にできない、はがゆさがある。建物の外にはいわゆる屋外焼土坑と言われている煮沸遺構が存しない点から、建物の性格を「住居」とするには推察の域をでる。

検出建物の平面形は長方形を呈しており、掘り形は円形のものが大部分であった。中でも104号の総柱建物の掘り形は他の建物に比較して大きく、深いものであった。いわゆる穀物等を収納する「倉庫」と考えるに十分条件の掘り形といえよう。特筆すべき点は四隅柱で、梁間・桁間の中柱等とは異なり若干大きく、深く掘られている。掘り形径50～60cm、深さ40～70cmで、素掘りと二段、三段に掘られているのが普遍的であった。これまでの一連関連事業調査で見つかっている建物でも、四隅柱が大きいのは、例えば立野遺跡(註1)、宮原遺跡(註2)、上の原遺跡(註3)、塔ノ上遺跡(註4)等で検出し確認できる。建築技法上において四隅柱を大きく、深くすることにより梁・桁柱及び棟木等の重荷を支えるものと思うが、屋根は瓦葺きでなく草葺きもしくは板葺きと考えられ、風雨等に耐えられる構造を最近では棟・天井等に「土」をのせる(註5)ことが明らかになってきている。特に意識的に四隅柱が大きかった建物は118、121、116号等がある。106号の2間×1間については本文中で記したとおり、梁間中央柱掘り形が大きく、大棟木柱を支えていたのであろう。



第240図　中道遺跡奈良時代竪穴住居・掘立柱建物主軸方位

2) 方向性（第240図）

奈良時代の建物群は、竪穴住居をとりまく様に略同一方位をとっている。その方向性を５度の差異で合わせてみると第240図のようになり、東西･南北両棟で３グループに分けることができ、柱筋の通った建物配置を見ることができる。

A（N-6°-W）・（N-80°-E）: 106, 114, 121, 119･115, 120号

B（N-14°～16°-W)･（N-73°～76°-E）: 104, 108, 112, 113･105, 107, 109, 117, 118, 123号

C（N-22°-W)･（N-69°～70°-E）: 110, 116･111, 122号

Aグループは真北に近い建物配置をとる南北棟とそれに直行する東西棟であり、B･Cグループは Aより10度ずつ偏した方向をとっている。官衙等に発見される建物群の方向性は、長軸を南北にとる建物が一般的であり、そのことを考慮すると、Aグループ等はそれに近い方向性の建物であり、飛鳥･奈良時代等に見られる一つの特徴を示していると言えよう。

3) 柱間寸法について

柱掘り形に柱痕跡が確認される場合は別として、おおかた掘り形の間隔による柱間寸法は正確さに欠けるため、柱間（間尺）はある一定の方向を見るにとどまる。その寸法でも梁･桁行きの対面する柱間との調整から、等しい柱間寸法を測定することが可能である。

今回検出した18棟の柱間寸法は古墳時代で0.9m～1.4m内外、奈良時代で1.1m～3.0mと前者に比較してやや柱間が広い。この柱間寸法を各建物ごとに見るとA～Eに分かれ、梁行･桁行の一間が「幅広」か「幅狭」である結果を見た。

A（桁行中央間が広い建物210～280cm）：106, 111, 113, 114, 115, 116, 118, 121号

B（桁行辺１間が広い建物180cm）　　：108, 119号

C（桁行辺１間が狭い建物120～140cm）：107, 110, 112, 117, 120, 122号

D（梁行の１間が広い建物170～220cm）：105, 109, 118, 120号

E（梁行の１間が狭い建物120～140cm）：108, 114号

この柱間間隔はどのような構造で、性格は何かである。この場合A･Dは何れも柱間間隔が広いもので、各平均値を順に245cm･195cmとなり、これをさらに1/2した場合それぞれ122.5cm、97.5cmとなって、柱間が狭いC･Eの寸法の数値に近くなる。構造上この柱間間隔は対面しているため問題はないとすると、なぜこの間のみを幅広くとるものとそうでないものがあるのかである。例えば119号の場合梁･桁ともに160cm等間でありながら、P1～P2、P7～P8のみが180cmと幅が20cmも広くなる。また115号･116号の場合も同じことが言える。しかも116号は桁行中央間両側に目隠塀的な溝状遺構が検出され、明らかに中央間を意識していることが判る。

これらのことから、この柱間間を出入り口等の施設として考えた場合、そこに「扉」等が配された可能性が強いのである。仮に片面扉を１m前後と計算した場合、先に記したA･Dの122.5cm、97.5cmは若干の出入りがあることを踏まえて両面扉の可能性があり、それと反対にC･

Eは片面扉とするにふさわしい。建築法の立場から見て、高床式あるいは土間の建物等であるかの根拠もないが、柱間寸法から見た出入り口「扉」として問題提起としておく。

c．集落の時期と変遷、意義

検出した竪穴住居の切り合い関係は先に記した通りであるが、111号～115号は5回、116号～122号は7回切り合っていた。しかし住居の存続年数は一定期間ではなく、そこには自然災害や新居の建て替え等を考慮すると、切り合い関係では大きく4時期に分けることができる。このことを念頭に入れて掘立柱建物との関係、東辺部に検出した小型住居等からその変遷を細分すると6期に分けられるがここでは出土土器等から4時期にとらえることとし、下記の通りになる。先にも記したように調査区の西半域に検出した古墳時代（6世紀末～7世紀後半）の住居等は、地形の関係及び住居の方位等から東西両方向に延びるものと思われる。

時期＼遺構	竪穴住居跡	堀立柱建物跡	土坑
6c末～7c後半	101，102，103 104，105，106	101，102，103	
8c前半～中頃	112，113 116，117，119	114，118，120，121	52
8c中頃～後半	107，110，111，109 114，115，122，123 120，121	104，105，107，109 111，112，113，117 118，123 106，108，110，116	30，51，70 75
8c後半頃	108，125，126，127 128，129，130，131 132，133，134	122，124	32，35

前記表にまとめた奈良時代の各遺構を総括すると、出土土器・竪穴住居跡・建物跡の方位及び切り合い関係から判断して、8世紀前半から後半期まで認められ、時期的にはごく短い期間に数回建て替えが行われたものと推察される。つまり111～122号竪穴住居がそれで、8世紀前半期から後半期にかけて煙道の長い突出型のカマドを付設した住居から、方位を同じくしながら南側に若干ずれて建て替えしていることが判る。このことは竪穴住居の項で述べた通りである。また128～132号は切り合い関係から3時期ほどに分けられ、8世紀後半頃の住居として捉えた。全体の集落構成は、8世紀前半から中頃にかけて建物の主軸を北寄りにした大型掘立柱建物を配し、住居が3軒から4軒で構成している。最も住居数が増加するのは8世紀中頃から後半にかけてで、竪穴住居と掘立柱建物が同一方向性を持ち、バランスのとれた配列をしていることが判り、住居数は4軒から5軒ほどである。このことは各時期の世帯数がそれほど増加しなか

ったことを示唆しており、ここ単独の集落を形成していたことが想定される。因みに集落は奈良時代を通して営まれ、8世紀後半頃には小型住居が見られる集落集団を見ることとなる。

他に、出土遺物で特筆すべきは墨書土器と製塩土器である。最近の発掘調査から若干の製塩土器を伴った竪穴住居が多く発見されている。従来製塩土器は官道沿いの遺跡で主体的に発見されており、ローカル的集落での発見は見られなかったが(註6)、ここ九州横断自動車道関係の遺跡でも塔ノ上遺跡・上の原遺跡・高原遺跡等の奈良時代遺跡を中心に出土している。こうした現象を余剰生産物との物々交換によるものとの考えがある(註7)。確かに山村部における集落は直接的には入手できなかったものであろうが、当時の社会情勢（律令国家）を考慮すると「国郡里」が制定され、そこには地域を管掌する官衙の建設及び支配・指導が及んだことは言を俟たないであろう。つまりそれらの指導によって「市場」等が開かれ、塩・製塩土器を入手したのではないだろうか。また製塩土器については器形から在地産の可能性もあるとの考えもある(註8)。今後の課題は多い。

墨書土器については今回1点出土した。墨書名は「渚」とあり、甘木・朝倉地方においてはその語源は見つからず、人名もしくは海を偲んでの文字か明らかではないが、ここ「中道集落」にも識字者的存在を確認できた。このことについては先の律令制下において租庸調の納税は付き物であり、里長的存在者あるいはそれに並ぶ者が識字に精通していたと思われる。いかに字を習得したかであり、官衙（郡衙）等における識字はごく一部の者達であったろう。ここで一郡一寺的考えを採れば(註9)、「寺」の存在が強く関与していたのではないかと思うのである。つまり7世紀の後半、天武紀5年(676)11月に諸法令を整備することにより官寺の地方への普及(註10)を図っており、強い官寺的役割と庶民に対する仏教の教え等々を教義したのではなかろうか。このことも今後の課題となろう。

今回検出の「中道集落」は、地形的に南側は浅い谷状になり、逆に北側には集落が延びていない。このことから、竪穴住居と掘立柱建物の方向性を一つにした「ムラ」的要素の濃い集落であり、塔ノ上遺跡、上の原遺跡等と並んだ規模の集落と見た。

註

1 福岡県教育委員会 1986『立野遺跡（3）』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－8－
2 〃 1990『宮原遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－17－
3 〃 1995『上の原遺跡Ⅲ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－33－
4 〃 1987『塔ノ上遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－9－
5 古代を考える会 1990『難波宮遺跡群・倉庫跡の検討』古代を考える52
6 森田勉 1983「焼塩壷考」『大宰府古文化論叢』吉川弘文館
7 註3の小田和利「上の原遺跡の集落変遷について」による
8 註4の伊崎俊秋「焼塩土器に関して」による
9 小田富士雄「初期寺院跡研究の成果」古代寺院の研究
10「続日本紀」天武5年11月条

表 2　中道遺跡遺構番号新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
住 1	SI 13	住101	SI 15	住126	SI 8	SB112	建11
2	SI 12	102	SI 16	127	SI 9	SB113	建12
3	SI 14	103	9	128	SI 7	SB114	建16
4	6	104	8	129	SI 5	SB115	建13
5	7	105	10	130	SI 6	SB116	建14
6	2	106	15	131	SI 3	SB117	建15
7	1	107	18	132	SI 4	SB118	SB4
8	3	108	24	133	SI 2	SB119	SB5
9	4	109	25	134	SI 1	SB120	SB3
10	5	110	23			SB121	SB2
11	11	111	34	SB1	建 1	SB122	SB1
12	12	112	33	SB2	建 2	SB123	—
13	13	113	32	SB3	建 3	SB124	—
14	14	114	31				
15	17	115	29	SB101	SB6	土75	SK1
16	16	116	41	SB102	SB7	土76	SK2
17	19	117	40	SB103	SB8	土77	SK3
18	22	118	39	SB104	建 4		
19	21	119	38	SB105	建 5		
20	20	120	37	SB106	—		
21	26	121	36	SB107	建 7		
22	27	122	35	SB108	建 6		
23	28	123	30	SB109	建 8		
24	42	124	43	SB110	建 9		
25	SI 11	125	SI 10	SB111	建10		

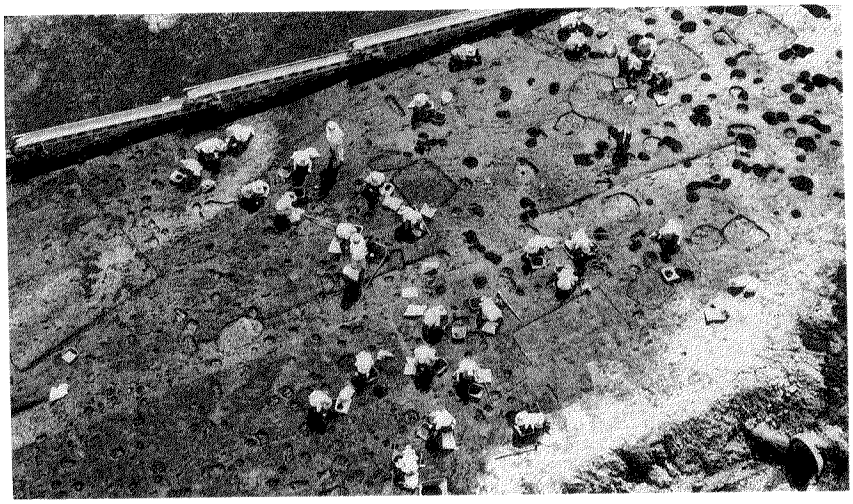


Photo. 15　発掘中俯瞰

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H7	登録番号 6

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告ー39ー

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7

印刷 隆文堂印刷株式会社
〒801 北九州市門司区畑田町1-1

付図1　中道遺跡全体図(1/400)